KAIZO

改造

三月號

1928

二月特輯

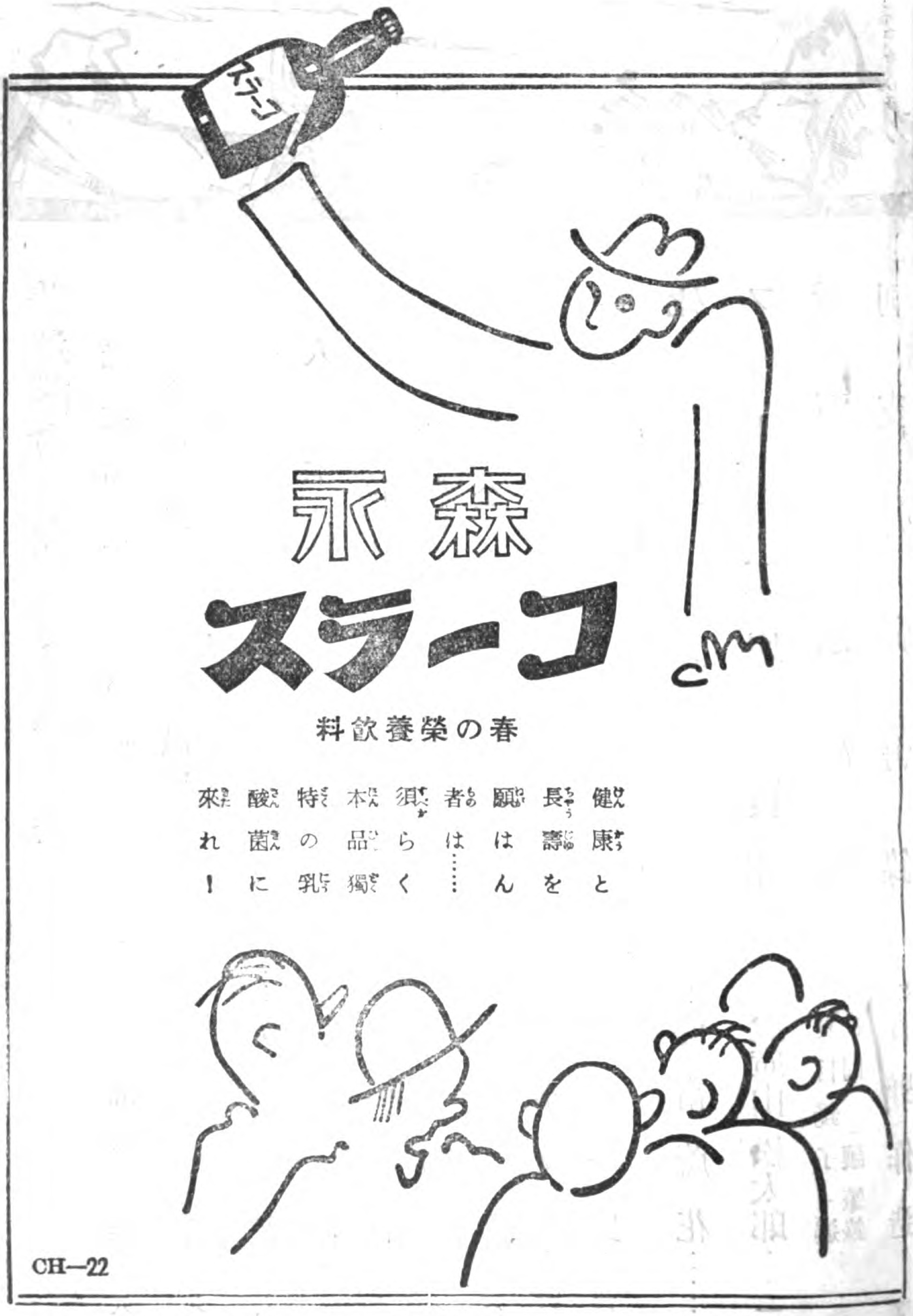
社會科學

日本社會主義運動史

價　貳圓五拾錢
送料　十二錢

東京市芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番

改造社


森永
コーラス
春の榮養飲料
健康と長壽を願はん者は……須らく本品獨特の乳酸菌に來れ！
CH—22

無産各派の聯盟

劃期的の普選はとにかく結了した。明るい氣持で新興氣分の潑溂たるところが見られるのを豫期したが、手をかへ、品をかへての彈壓のために陰暗此上ない場面が現出せられ、もの言へば直ぐに選擧違犯を想像するの窮屈を感ぜしめたのは、普選法の缺陷そのものより來るのは勿論だが、選擧に先だち地方長官の大更迭と招集、警察部長會議さては檢事の大擧出動てふものものしさが人心を萎縮せしめたによる。多年苦闘の結果獲得された一千萬の有權者が、その選擧權を愉快に行使することができず、まるで罪人が監視の中にあるの思ひであつたことは全國大衆と共に我々の限りなく遺憾とするところであつた。そして無産候補が幾多の壓迫のために政見、主義を滿足に陳べることの出來なかつたのも殘念であつた。そして我々があれほど口を酸くして叫んだ無産戰線の協定ができなかつたことは作戰を有利に展開せしめ得なかつた最大の因だ。眞に無産者の自由獲得の爲に戰ひ、そして無産者の生活利益に即するの念が強かつたならああした不利の戰を戰はなくてもよかつたのだ。我々は將來に於て無産政黨の發展は一にその陣營の統整と戰線の協調が既成政黨より、よりよく行はれるの一事にあると思ふ。あれほど大衆の熱烈な支持を有しながら戰略らしき戰略なく、戰術また既成政黨より拙かつたことも否み得ない。だが今後に於て若しかくの如き狀態が繰返さるるとしたら無産大衆はどういふ地位に陷さるるであらうか。我々は無産議員がどこ迄も無産者の味方である爲めに囚學、小我、小兒病より解放されることを望む。議會の内部でも、外部でも今までのやうな小感情が漲つてゐては幾年經つてもその期待は酬いられないであらうことを苦言して無産各派の聯盟乃至は合同を再言するものである。

經濟時評二則

（其一）日銀の動脈硬化に關する山本・井上兩氏の論戰

福田德三

（一）

去一月二十五日東京銀行集會所に於ける一會合に於て、山本達雄、井上準之助兩氏の間に、注目すべき一論戰が行はれたことは、翌二十六日の都下の諸新聞紙の傳ふるところである。私は、親しく其論戰を拜聽したものでないから、新聞紙の記事が、眞を傳へて誤ないものであるか否かを知らぬが、假りに、其れを誤ないものとして（外に致方がないから）考へて見ると、其内容は甚だ重要なものであると思ふ。何となれば、其は、やがて、朝野兩大黨の財界の現狀に關する其れ〳〵の見解を披攊したものと云はねばならぬから。山本男は、民政黨最高の財政通であり、井上氏は、現內閣の任命した日銀總裁であつて、兩者の意見は、或る度までは、朝野兩黨の意見なり、政策なりを代表してゐるものと見ても大過ないであらう。

此度の總選擧に際しては、政友會に、地租委讓、民政黨は、義務教育教員俸給國庫支辨を、其れ〴〵にスローガンとしたものと見るべきであらう。六千七百萬圓の地租を市町村に委讓するは、明かに、地方分權の財政々策であり、これに對向して、一億七八千萬圓にも上るべき教員俸給費を、國庫に於いて引受けるは、中央集權主義の財政々策である。此意味に於いて、此度の總選擧は、代議政治の展開に於いて、たしかに、一歩を進めたものと云ひ得る。從來の總選擧は、單に漠然たるスローガンの下に於いて行はれた。殊に、前回の護憲運動と云ふが如きは、俗耳には入り易かつたに相違ないが、憲法政治下に於ける總選擧の題目としては、餘りに空論的であつた。此度は然らず、朝野兩黨とも、端的にして具體的な題目を標榜して、相對立したのであつた、我々は、普選第一回の總選擧としては、これを、歡迎せざるを得なかつたのである。

乍去、此う云ふに、實は、机の上の話で、實際のプラットフォームは、必ずしも、此の理屈通りではなかつた。選擧者の過半は、地方分權主義の地租委讓と、中央集權主義の俸給國庫支辨との眞相を理解して、投票したものとは、到底言ひ得られぬ。況んや、地方分權主義と云つても、政友會が果して、其主義を終始一貫するものであらうか否か、未だ斷言し得られない。否、地租委讓の實施には、幾多の難關が横つてゐる。三土藏相が貴族院昭和クラブに於いて爲した説明によると、地租に代るべき新税を起さないといふ。其れは、誠に結構なことである。然らば、地租委讓から生ずる歳入の缺陷は如何して、これを補ふか、右説明中には、一向言明されてゐない。傳ふるところにては、其補塡は、關税收入の增加、並に公債によつて、これを爲すと云ふ。其れは、大問題であるが、其事については、責任ある言明を與へられてない。然れば、國民が、地租委讓に贊成すべきや否や、遽かにこれを決することは不可能である。其れと同樣に、野黨の俸給支辨は其財源を、何れに求むるか、一向明確に示されてない。言はゞ、狸の皮算用に均しい。而して、其の中央集權的財政々策は、何の點まで一貫して支持せられるのであらうか。其れは、我々には、寸毫も諒解の材料を與へてないことに屬する。

從つて、折角好個のスローガンを與へられながら、我々は、眞面目に考へて、朝野兩黨の何れに與みすべきかを判斷することが出來ないのである。從つて、總選擧の結果朝野兩黨、其の何れの勝利に歸するとも、其れは、地租委讓對國庫支辨主義の何れかゞ勝つたものだとは、言ひ得ない。

將來の事については、右の通り。卽ち、此度の選擧は、將來の財政政策については、未だ現實に卽した理解と判斷との上に行はれたものと云ふことは出來ないのである。これに反し、當面の問題については判斷を下し得る。朝野兩黨其何れか、國民の利益により多く合致する財政々策を、當面の問題について取つたものであるかの判斷これである。

此の判斷を下すについて、右山本・井上兩氏の論戰は、我々に、甚だ重要な資料を供給するものと云はねばならぬ。

（二）

山本・井上兩氏論戰の要旨は、都下諸新聞紙中、最も詳細に報道して現れた東京日々の記事によると、左の通りであつたといふ。

救濟のみに餘りに急な日銀

之こそ財界當面の大問題

山本達雄男

昨年の財界動亂は來るべきものが來たのである。大正九年の恐慌の打擊癒えざる上に加へ震災の打擊を受け爾來經濟界は殆んど何等の整理を見ず政府その他の施設はただ腫物に觸るやうな不安を感ずるの餘り彌縫を事としてゐた。三年以前吾人の唱へたる金解禁も實行されずかくてその動亂を見、理窟を抜きにして日銀に二億、内地銀行に五億合計七億といふ尨大なる國民の負擔に歸する大問題の卽決となつた、然るに政府はその上になほ十七億七千萬圓といふ昭和三年度の豫算を樹てた、幸にして議會は解散され傳へらるゝところでは實行豫算は歲出十五億數千萬圓、歲入十七億圓であるといふことで二億數千萬圓の國帑が節約されることになつた。

中央銀行の問題につき一言せんに今日の日本銀行は財界の現狀を救濟するに急にして貸出は激增し通貨も膨脹した、これはやむを得ないことであらうが日銀は財界の心臟で常に淸新なる血液を送り出さねばならぬ、然るに兌換券がかく膨脹し增加した貸出も固定するやうでは中央銀行として兌換の基礎の鞏固を保つ重大職責を如何にするかといふ大問題に當面して來る。それにつけても吾人は金解禁の實行を一日も速かにすべきことを思ふものでかくて始めて通貨の伸縮が經濟界の大道によつて行はれ產業界活動の根底が固めらるゝものである、われわれは經濟界今日の混亂が他日立派な花を咲かすやうに銀行家諸君の奮闘を祈る。

遺憾ながら止むなき事情

井上日銀總裁

實業を保護せざる政治はまことに悲むべきである。しかして吾人は過去における腐敗に懲り今後において國民の希望に副ふやうな内閣が果して何の日に出現するかを疑ふ。今日は財政上眞に節約を必要とする。然るに歴代内閣いづれか眞に財政の緊縮を實行したるものありや。豫算は年々膨脹し公債は同樣增加するしかして忠實なる國民はこれを平然としてこれを呑み乾してゐる。なほ日本銀行の今日の地位につき一言する。日本銀行の今日の地位は平常の場合とやゝ異るものである。卽ち去る臨時議會において七億の補償令を決定されて以來日銀の職責は通貨の統制問題を措いて財界の急を救ふ職責を帶ぶるに至つたのである。

しかして今日の膨脹したる通貨及び貸出しの回收について金利政策はその效果が薄弱となつた。これを兌換の基礎を維持す　職能の見地よりすればまことに大問題である財界の急を救ふため遺憾ながらこの事態に立ち至つた、しかしてわれ〳〵は今日の禍を轉じて福となすため金融業者が極めて愼重なる態度を持しかりそめにも緩慢的金融緩慢から延いて陷り易い弊害に淡むことなくこれを戒め健忘症に陷らざらんことを望むものである。

今兩氏の論旨を要約して見ると、左の通りになる。

過去について

山本氏

昨年の財界動亂は來るべきものが來たのである。大正九年の恐慌の打擊癒へざるに加へ、震炎の慘禍を蒙り、爾來經濟界は殆んど何等の整理を見ず、政府其他の施設はただ腫物に觸るやうな不安を感じるの餘り彌縫を事としてゐた。（中略）臺灣に二億、内地銀行に五億合計七億と云ふ尨大なる國民の負擔に歸する大問題の卽決となつた。

井上氏

過去に於ける腐敗に懲り、今後に於いて、國民の希望に副ふやうな内閣が果して何れの日に出現するかを疑ふ。今日は財政上、眞に節約を必要とする。然るに、歴代内閣何れか眞に財產の緊縮を實行したものなりや。豫算は年々膨脹し、公債は同樣增加する。而して忠實なる國民は、これを平然として呑み乾してゐる。

兩氏の言、趣きを異にしてはゐるが、何れも過去の政府を責むることは、同一轍である。これは、私共の耳には、甚だ異樣に響く。何となれば、山本男は、嘗つては、日銀總裁たり、又た大藏大臣たり、現に民政黨第一の財政權威として重きを爲す人であり、井上氏も亦た嘗て、短日間ではあつたが、大藏大臣たり、殊に日銀總裁としては、長

き經歷を有し、今現に再び其任に在る人である。過去の政府、政治家が責めらるべきものでありとするならば、兩氏共に、其責を分たねばならぬことは、言ふまでもないところである。然るに二氏共に、これを他人事として取扱つて居られる。殊に、東京朝日の記事によれば、井上氏は、昂奮的態度を以つて、政治家の健忘を非難せられたといふことである。山本男に對する答辯としては、私共は、井上氏に一理あることを認める。山本氏が、過去の財政不始末を餘所事の如く難詰せられるのは、たしかに、健忘の誹を免れぬ。而も、此く他を責める井上氏も、亦た健忘を以て責めらるべきではなからうか。しかし、私は、今其一事を追窮せんと欲するものではない。兎に角、今日までの政府其何れもが、今日の財界の難局を將來した責を免れ得ないことについては、山本、井上兩氏とも、全く同説である。而して、無論、其れは正しい。誰人が見ても此以外のことは言ひ能はぬのである。

（三）

問題の中核は、右點には存しない。昨年の休銀騷ぎの始末に關する措置、殊に、日銀の其れに關する。

山本氏	井上氏
今日の日銀は、財界の現狀を救濟するに急にして、貸出しは激增し、通貨も膨脹した。これは、已むを得ないことであらうが、日銀は、財界の心臟で、常に、清新なる血液を送り出さねばならぬ。然るに、兌換券がかく膨脹し、增加した貸出しも固定するやうでは、中央銀行として兌換の基礎の鞏固を保つ重大職責を如何にするかといふ大問題に當面して來る。	日銀の今日の地位は、非常の場合とやゝ異る。七億の補償金を決定されて以來、日銀の職責は、通貨の統制問題を措いて、財界の急を救ふ職責を帶ぶることとなつた。而して、今日膨脹したる通貨及び貸出しの回收について、金利政策は、其の効果が薄弱となつた。これを、兌換の基礎維持の職能の見地よりすれば、誠に大問題である。財界の急を救ふため遺憾乍らこの事態に立ち至つた。

即ち兩氏とも、事實の認定の上に於いては、全く一致してゐる。其の事實とは（一）通貨の膨脹（二）日銀貸出しの固定化（三）其結果として、日銀の通貨統制機關としての動脈硬化。これである。

今一二の數字をあげて、兩氏の一樣に認容する事實の規模を窺つて見よう。其爲めには、休銀騷ぎの起つた直前の昨年三月十二日と、右討論の行はれた直前の土曜日たる本年一月廿一日とに於ける、日銀週報

中の數字を比較して見る。

（單位百萬圓）

	昭和二年三月十二日	昭和三年一月廿一日	差引増(+)減(−)
兌換券發行高	一〇九〇・三	一三九一・二	+三〇〇・九
貸出高	二七八・九	七七九・七	+五〇〇・八
所有公債高	二八八・七	二〇五・四	−八四・三
預金 政府	六四七・五	六一二・四	−三五・一
預金 民間	七九・八	二五五・七	+一七五・八

兌換發行高の增加額は、三億圓で、これが兩氏の云ふ通貨の膨脹である。（本文起草の際得られた最近の數字即ち二月六日の其れでは、兌換券發行高は、十二億九千七百圓で、昨年三月十二日に比べて、其增加は、二億圓と云ふ數字に降つて居る）。

此の三億圓は、休銀救濟の爲め、全部惹き起された增加であるか否かは、分明に斷言し難いけれども其大々部分の然ることは疑を容れないところである。日本銀行は、補償令の命ずるところによつて、休銀を救濟した。其金は、無論、兌換券の增發によつて支辨したに相違ないであらう。

然れば、右の三億圓又は其れに近い高が、日銀が補償令によつて、銀行救濟の爲めに貸出した高の全部であるかといふと、事實は、左樣でないらしい。日銀が、補償令によつて貸出した高の詳細は其の週報には内譯して示してない。乍去、我々は、昨年三月と本年一月とを比較して、略ぼ、其高を知り得る。即ち、日銀貸出し高の增加これである。休銀騷ぎの起る直前、日銀の貸出總額は、二億七千九百萬圓弱であつた。然るに本年一月廿一日に於ては、其總額は、實に七億八千萬圓弱に上つてゐる。即ち、貸出高の增加は、五億以上に上つてゐるのである。此增加の全部が、補償令の作用によるものであるか否かは、分明でないが、假りに、然るものとすると、日銀は、銀行救濟の爲めに、五億圓餘の貸出を爲した。ところが、兌換券發行高の增加は、五億圓に上らず、一月二十一日に於ては、三億圓餘、二月六日に於ては二億圓に止つてゐるのである。これは、何故であらうか。

其說明は、直ぐにつく。其れは、右の二つの增加と並んで、日銀に於ける預金が增加してゐることを見れば足りる。昨年三月十二日の日銀預金總額は、七億二千七百萬圓、本年一月廿一日には、八億六千八百萬圓、即ち一億四千萬圓餘の增加を示してゐる。更らに、民間預金丈けについて見ると、昨年は八千萬圓足らず、本年は、二億五千六百萬圓近くの數字を示してゐる。即ち、民間預金丈けについて見ると

一億七千六百萬圓弱の増加となる。此高を、兌換劵増加高の三億圓に加算すると、貸出し増加の五億圓に粗ぼ近い數字が出て來るのである。

此の預金は、財界の狀況次第、何時でも引出され得るものである。其引出し要求に對しては、日銀は、兌換劵を增發してこれに應ずるであらう。卽ち此の預金高は、或る意味に於いては、潜勢狀態にある通貨膨脹高とも云ひ得るものである。

我々は、これによつて、次の事を知り得る。銀行救濟の爲めに、日銀から貸出された金高は、其全部が現實の通貨として流通してゐるものではない。貸出された高は、一旦は各銀行の債權者や預金者の手に入つたが、彼等は、其金を死藏せず、これを、色々な形ちに於いて銀行其他へ預け入れた。其れが、流れ流れて、再び日銀の手に歸した。而し日銀に於ける民間預金を膨脹せしむることとなつたのである。

ソコデ、日銀の銀行救濟は、二つの大きな作用を齎らしたことが分る。（一）は、日銀が、五億か又は其れに近い額丈け、從來各銀行が持て餘して居た惡質の貸付金を、各銀行と肩代りして引受けたことこれである。（二）は、其れがために、日銀は、通貨統制の機能を失ひ、私が名けて、動脈硬化と云ふ狀態に陷つたこと、これである。

日銀は、兌換劵增加高の三億と、其預つて居る民間預金の増加の一億七千五百萬圓と合計四億七千五百萬圓又は其れに近い金高に當る丈け、性質の極めて惡い貸出しを爲した。其れは、日銀としては、休銀騷ぎの爲めに、背負はされた一種の腫物――山本氏の言を借りて――であるけれども、日本の經濟生活の全體から云へば、休銀騷ぎの爲めに、始めて發生した腫物ではなかつたのである。山本氏の云ふ樣に、大正九年以來段々に增進し來つた腫物なのである。休銀騷ぎの爲めに起つたことは、其の狹くに存してゐた腫物が、多數の民間の手から、日銀に讓られたと云ふことのみであるのである。

これは、日銀としては、決して好んで爲したことではないのは、言ふまでもないところである。御免願れば、無論眞先に御免を蒙つたに相違ない。從つて、井上氏が、其れは、補償令の爲めに課せられた一の迷惑であるが如くに言つてゐるのは、當然の事なのである。

日銀が、此惡性の貸金を引受けたことを、日銀貸出の固定化と山本氏は名けてゐる。誠に、其言の通りである。補償令の定めた期限內に、徐々に回收せられるではあらうが、其回收は、實に困難であり。

急に回收しようとすれば、更らに、財界の惡化を惹き起さぬとも限らぬ厄介千萬な貸出しである。從つて、其大々部分は、固定するものと見なければならぬ。而して、此く固定した貸付け金を有つと云ふことは、中央銀行としての日銀の元より爲すべからざるところである。何となれば、其れが爲めに、日銀は、中央銀行としての職責、通貨統制者としての機能を失ふことになるから。

日銀の貸出しは、絶へず金融市場の動靜を反映するものでなければならぬのである。金融市場が、資金を要することを多くなれば、日銀に對する貸出し要求は增す。日銀は、今日の制度では、保證準備以外にも、制限外發行を爲す權能を與へられて居る。此らの權能によつて、日銀は、貸出しの要求に應じて、其の兌換券發行を增加して貸出す。反對に、金融市場が資金を要さなくなれば、これを預金として各銀行を通じて、日銀に返濟する。日銀の兌換券發行高は、卽ち收縮する。かくて、日銀の兌換券高は、金融市場の要求の增減を、端的に反映することを得るのである。然るに五億に近い貸出高が固定して、其れは、金融市場の繁榮とは、全く沒交涉のものである。其れ丈けは、現實的又は潛勢的兌換券增發として、永く殘存する。其の爲めに、中央銀行たる日銀の兌換券發行高は、金融市場の情勢とは、全く緣のないものとなつて仕舞ふ。これが、私の名けて、日銀の動脈硬化と云ふところの有樣なのであつて、今、日銀は、實に、此狀態に陷つてゐることは、山本氏の指摘し、而して、井上氏の躊躇なく認める通りなのである。

これを要するに、山本・井上兩氏の指摘した三つの事實は、誰人も疑を狹むことの出來ない端的の事實である。而して其内通貨の膨脹は、現實の數字（三億圓）の示す以上に、潛勢力數字のあることを知らねばならぬのであつた。

（四）

ソコデ、責任問題が起る。

山本氏

今日の日本銀行は財界の現狀を救濟するに急にして云々

井上氏

去る臨時議會に於いて七億の補償令を決定されて以來日銀の職責は通貨の統制問題を措いて財界の急を救ふ職責を帶ぶるに至つた

（中略）

財界の急を救ふ爲め遺憾乍らこの事態に立到つた

山本氏は、以上の變態を釀出した責任を、第一に日銀當局者に、而して、言外に、現政府當局者に、歸すべきものとしてゐる。これに對して、井上氏は、其は、議會が、補償金を決定した爲めで、日銀としては甚だ遺憾乍ら、已むを得ず甘受したにすぎないと答へて居る。

これは、甚だ重要な論斷である。我々は、言葉の上に現はれたところ丈けについては、兩氏とも、決して間違つたことを言つてゐるものでないと斷ずる。しかし、其れは、言葉の上丈けの話である。事實の上の話ではない。

山本氏が、日銀當局と現政府とに、其責ありと云ふは、言葉の上では正しい。何となれば、兩者は、事態此くの如くなるべきを、十分豫知してゐたものに相違ないから。しかし、事實は、如何であつたか。山本氏にして、眞に國を憂ふるものであつたなら、其の指導する民政黨をして、政府と日銀當局とが、此くの如き結果を釀出すべき補償金を議會に提出したとき、極力これを防止むしむべきであつた。然るに當時の民政黨は、果して何事を爲したか。井上氏が、政治家の健忘を痛言したのに、たしかに、山本氏に對する最有力の答辯であつたに相違ない、

其反對に、井上氏が、一切の責任を、補償金の成立に嫁するは、言葉の上では其通りであらうが、事實としては、甚だ失當である。補償金の立案には、井上氏もまた參加したに相違ない。日銀當局たる井上氏にして其の成立を不可と確信してゐたなら、職を賭して、これと爭ひ、容れられずんば、即ち骸骨を乞ふべかりしのみではないか。又は、これに代るべき他の方法を工夫案出して、政府に獻策するならば、政府必ずしも、無下にはこれを斥けなかつたらう。其容れられざるとき、即ち同じく其職を去るべきであつたではないか。井上氏は、不本意ではあつたらうが、兎に角、日銀當局として、政府の此立案に贊同したに相違ない。然れば少くとも、責を現政府當局と相分つべきものと云はねばならぬ。

此點に於いて、健忘の評は、山本氏よりも、更らにより多く井上氏に加へられねばならぬ。況んや、補償金成立前の休銀整理始末については、井上氏は、殆んど其全部の責任を負ふべきものであり、山本氏は殆んど負ふべき責任を有つてゐないのである。

私は今休銀整理始末に就て評論せんと欲するものではない。が、其の始末は、全く愚劣不當なも[illegible]あつたの[illegible]については、昨年末の

ジアパンタイムスに掲げた拙文を見られたい)。私は休銀整理の始末は其出立點に於いて誤つてゐたものなるを斷言する。殊に(一)固定貸の肩代りの爲めに、小銀行は彌が上にも壓迫されたこと。(二)昭和銀行の設立は、全く財閥擁護の用しか成さず休銀の救濟には、殆んど無用であつたこと。(三)預金の切捨てを出立點としたことの根本的に誤れること。(四)日銀から獨立しての整理の可能(信託制度又は國家管理)の可能について少しも考慮せざりしこと等の數點をあげて置かねばならぬ。しかし、最大の缺點は、折角の補償金は、今日までの休銀整理のやり方では、殆んど、財閥擁護の用を爲したのみで、休銀其ものゝ救濟としても、債權者、預金者の擁護としても、殆んど其用を爲さず、徒らに、國民の負擔を増したに止ることを指摘せねばならぬ。

(五)

而して、其代價は、實に、日銀の動脈硬化であるのである。

終りに、此の變態からの脱出の問題が殘る。

山本氏

吾人は金解禁の實行を一日も速かにすべきことを思ふ。かくて始めて通貨の伸縮が經濟界の大道によつて行はれ産業界活動の根底が固めらるゝのである。

井上氏

我々は今日の禍を轉じて福となすたる金融業者が極めて愼重なる態度を持しかりそめにも變態的金融緩慢から延いて陷り易き弊害に染むことなりこれを戒め健忘症に陷らざらんことを望む。

井上氏は、此變態からの脱出について、唯だ道徳的説法を爲すに止る。金融業者が如何に愼重なる態度を持したとて、健忘症を根治したとて、現在の日銀動脈硬化は、寸毫も醫され得るものではない。言葉を換へて言へば、井上氏は、何等の救治法を示して居らず、唯他を責めるのみなのである。心細いこと、此上なし。

山本氏は、これに對して、具體的な方策を、いとも、明瞭に示してゐる。曰く、金輸解禁。

私は、昔しからの金輸解禁論者である。而して、今我邦の物價の低落してゐる現狀に鑑みて、其解禁は、即時にこれを斷行すべしと主張するものである。若し時日を經過するときは、兌換券の增發(其れは極めては起り易い狀態にあること、前述の如し)起り、物價昂騰することあれば解禁は、また〳〵實行難に陷るであらうと信ずる。

此點に於いては、私は、山本男と(而して民政黨と)全く其見ると

ころを一にする。

乍併、日銀動脈硬化、其れより起る日銀統制力の喪失を救ふ爲めには、金輸解禁は、當面的には、何等の作用をも有たぬことを指摘せねばならぬ。何となれば、金輸解禁により、日銀の兌換券發行高が我邦の貿易の實狀と合致するやうになり、餘分の金貨は持出されて、兌換券高を國民救濟の實情に照應せしめるやうになるとても、右の固定貸の囘收せられざる限り、何億圓かは、全く其作用以外に擱かれ、而して、然る限り、日銀の通貨統制は、硬化狀態に止ることを免れ得ないから。山本男の救治法は、此の當面の動脈硬化症に對しては、一階から目藥ほどの用をも爲さぬと云はねばならぬのである。

從って、山本氏も井上氏同樣、日銀動脈硬化の問題については、我々國民をして安心せしむべき何等の方策をも示してゐないと云はねばならぬ。

かくて、民政黨も、現政府（少くとも、井上氏によって代辯せられた）も、此の重要な問題については、何等具體的政策を持たず、若くは、持ってゐても、これを、國民の前に示さずして、此度の總選擧に向ったものなるを確め得たことになる。

私は、此點を提げて、既成政黨の全部に對向する無産黨應援のプラットフオームに立った。茲には、唯要領をのみ記すに止めた。

（其二）東京市佛貨債事件の敗訴

（一）

二月九日夕刊の各新聞は、東京市が佛貨債事件で、終いに敗訴したとの記事をのせてゐる。今國民紙の記事を、左に轉載する。

【パリ八日發聯合】一九一二年度發行五分利付東京市債を所有する佛國人側より東京市を相手どって提起した、右市債の利子をフラン相場でなく金フランで支拂ふべしとの訴訟は、去る二月一日の裁判に於ては被告東京市に有利な解釋が與へられ、裁判所は一時判決の言渡しを延期し

たが、俄然形勢逆轉し、佛國裁判所は本日の公判に於て東京市は有利子を金フランで支拂ふべきものとすとの判決を言ひ渡した。

右について、東京市には未だ公式の入電はないが、目下係爭となつてゐる市債は五千萬フラン（元金償却金）で、これを舊フランで支拂へば五千萬圓、新フランで支拂へば一千萬圓で濟み、こゝに四千萬圓の差額を生じ、今後の外債問題に影響する所が少くないので、市電氣局では取敢ず九日午前十時から關係當局者會合對策につき協議を重ねてゐる。

この問題に對して直接交渉の衝に當つてゐる市電氣局北林庶務課長は曰く

第一回の訴訟は大正十五年三月三十一日フルビオ博士が原告で提起されたが、東京市は當時帝大教授杉山直次郎氏がフランスへ行く機會があつたのを幸ひ、博士を囑託として權利確認の反訴を起して爭つた結果、フルビオ博士は間もなく訴訟を取下げて解決したが、續いて同年十二月ジヤン・アカール氏、此マイテール・ウワール夫人、ペイ・スイフ未亡人の三人が原告となつて第二回目の訴訟を起したが、その後原告側に和解の模樣が見え、東京市に有利な情勢が見えて來たので、市は敢へて反訴を起さずそのまゝにした、然るに最近に至つて第三回の訴訟が提起されたので市から口頭辯論に當時電氣局の瀨川主計課長外一名を出張させたが、昨年暮まで一回の辯論もなかつたので、瀨川君は一切を大使館とフランス辯護士會有數の專門家に依賴して歸朝したのです、昨日外務省の入電には市側に有利な情勢にあるとのことでしたが、若し敗訴になつたとすれば市は今後何年を繼續しても反訴を起して飽くまで爭ふ決心でゐます。

私は、此問題については、すでに、一昨年十月、即ち東京市が、抑も應訴したとき、東京市は必ず敗訴するであらうことを、市から派遣されて行かんとしつゝあつた某氏に語りて、其の反省を促し、更らに筆を取つて一文を草して言つた。「我等は、豫感的に云ひたい、今回の訴訟に於ける東京市の勝味は、先づ十中の二三分しか無い、其二三分も餘程努力するものとしての二三分であつて、今日までに現はれた緩慢さでは、二三分は愚か、一分一厘の勝味も無いものと案ぜられる」と。（『國際信義の立場より見たる東京市佛貨債問題』第四頁）

其後、東京市から、杉山教授の鑑定書（勝訴すべしとの意見）を示されたけれども、私は、一向、それに贊成することが出來なかつた。東京市は、此の訴訟の爲めに、わざ〳〵高價な旅費を給して、吏員を派遣したり、杉山教授に囑託したり、多額の費用を使つたやうだが、終に、敗訴したものと見へる。彼の當時、少しは、私の言にも、耳を藉してゐたらば、こんな無駄費ひを免れ得たらうに。甚だ馬鹿々々しい次第であるが、更らに反訴を起して飽まで爭ふなどとは、無鐵砲に

も程がある。

私は、問題の所在を東京市民諸君が、知り置かれんことを望み、市當局に對しては、更らに反訴を起して飽迄爭ふことの擧を演ぜられざらんことを切望するものであるから、一度公表した右論文の要點を左に摘記して、評論に代へて置く。

（二）

東京市の佛貨公債を所有する一佛蘭西人が、同國の或裁判所に東京市を相手取つて最近期限の利息の支拂に就て一つの訴訟を起したことは、本邦の新聞紙上に於て散見する所である。我輩は其訴訟の內容を確かに知らないから、如何なる要求をしたか分らないが、新聞紙の記事を誤りなきものとすれば、原告は百二十五法の利息を磅若くは其爲替相場を以て支拂ふ可しとする判決を要求するに在つた樣である。百二十五法と云ふのは、日佛兩貨幣の平價で云へば四十六圓二十五錢ばかりに當るのであるが、今日現在（九月二十一日）の日佛爲替の相場（銀行一覽拂十七法四十五參）から云へば七圓二十二錢五厘にしか當らないのである。從つて若原告の訴訟が勝ちを得れば、東京市は原告に對して四十六圓二十五錢を支拂はなければならないし、是れと反對に右原告の敗訴に歸して、恐らく東京市の希望するであらう通りに現在の日佛爲替の相場で支拂ふとすれば、總額僅かに七圓二十二錢五厘丈けで濟む譯である。而して是れは今回の利拂にのみ止まらず、向後の利拂にも適用せられ、延いては元金總額の償還にも適用せられることになるであらう。元金は約九千萬法殘つて居ると云ふ話であるからして、之を平價で支拂へば約三千三百三十萬圓を償還しなければならないが、現在の爲替相場で支拂ふことになると約五百二十萬圓で事足りる譯であつて、元利を通計すれば兩者の懸隔は甚だ大なるものとなる。從つて東京市としては此訴訟の勝敗に重大なる關係を持つて居る。然し佛蘭西に於ける東京市債券の所有者としては恐らくヨリ以上の重大なる關係を持つて居る譯である。

經濟上の立場を考へるに就ても亦若干項目に分けて見よう。

A　先づ第一に著しく目立つ事實は、何故佛蘭西に於て佛貨公債として募集する債務面に外貨の磅を掲出したかと云ふことである。極く皮相的に云へば、元來英貨債として磅で募入して貰ひたいものを、當時金融界の事情を考慮して佛蘭西に於て募集したのに違ひないから、其募集たる東京市は磅の手取を希望したものであること言ふ迄もなく從つて右の Frs.... Equivalent to £ .... と云ふ文句を態々入れたものと云へるかも知れない。其れは要するに便利上の問題であつて一に當事

論議の問題ではなからう。然し當時では便利であつたものが今は反つて紛議の禍根となつて居るのである。一體、我國の官民ともに歐羅巴と云へば唯だ英國あるを知つて大陸あることを知らない。世界に對して英國本位の考へ方をして、恰かも日本は英國の屬國たる如き態度を標榜して恬として顧みない。故に、當時に於て便利と云ふのは英國本位の見方で便利であると云ふたに過ぎないので、其外には大した理由を發見するに苦しむのである。大袈裟な云ひ方であるが、固陋なる英國本位觀が今回の紛議の種を蒔いたものと云ひ得られるであらう。佛貨債に Equivalent to £ 4,000,000 として外國貨を掲げると云ふことは、假令狹隘なる概念法學の立場に立つても充分問題を惹き起すのである即ち Equivalent to £ 4,000,000 とした事は單純なる貨幣名目解釋を直ちに許さないことになる。Equivalent to £ 4,000,000 と云ふ文句は法（フラン）の實質を考慮すると云ふことを明かにしたのである。而して前述の條例には其事實を具體的に「英貨一磅ニ對シ佛貨二十五法二十二參」と書いてある。然し實質を考慮に入れると云ふことは、經濟上今日までの通説たる所謂金屬主義（Metallism）の採る所である。例へば、我貨幣法第二條に「純金ノ量目二分ヲ價格ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ス」としてある。此條文を嚴格に解すれば、純金の量目二分に當る圓でなければ圓ではない譯である。然し斯かる議論は實際には唱へられない。二分の何割にしか當らぬ圓を圓として授受して怪しまない、假りに我輩が俸給を貰ふ時に、月給何圓と云ふ辭令を受けたから金二分の何倍かを戴かねばならぬと云つて訴訟を起したならば、我國の裁判所は何んと裁くであらうか。恐らく我輩の訴訟は成立しないであらう。少くとも斯の如き訴訟を起せば好奇の業として世人の嘲笑を招くに止まるであらう、こゝが貨幣名目主義（Nominalism）の強い論據とする所である。然し今我輩は經濟理論を論述する場合ではないから、此點は論じまい。現在の場合の東京市債に就て云へば右の場合とは著しく違つて居つて、Equivalent to £ 4,000,000 と云ふことは積極的に實質を考慮したものと解釋せられる餘地は充分に在るのである。況んや東京市債條例に前掲のやうな明文あるに於てをや。

之を分り易く云へば、東京市は四百萬磅の債務を負ふことを覺悟して立ち、而も之を天下に公示したのである。信義誠實の問題から云へば無論の事、金錢貸借の通理から云つても、法理論は別として經濟上から見ると、東京市が負擔した債務は四百萬磅であつて壹億八拾八萬法ではない、東京市條例に「英貨壹磅ニ對シ佛貨二十五法二十二參」と書いたのは、當時に於ては東京市自らを保護したのである、當時急激なる事件が起つて、右の換算率が變つた場合に損失を被ることを防ぐべく明記したものと見られ得る、幸ひ當時は其事がなかつたから問

題が起らなかつたに過ぎない。然し今日では其問題が起つた、而して其れは東京市に取つては不利に、佛蘭西の債權者に取つては有利に使用せられ得る文言とならぬことを保し得られないのである。各利札毎に一々磅額を示してあることは、單に一片の形式と見ることは出來ない。東京市から云へば自己擁護の爲めに一々明言したものと見られ得よう。

B 次に各利札毎にアンヴエルス、ブルユクセルに於て支拂はれた場合は、時の爲替相場によると云ふ文句が掲げられてある。或人は此文句こそ東京市に取つて有利に解せらる可き有力なる武器と云はれたが、我輩は其人に對して次の如く答へた。此一言は諸刄の劍である。毒にもなれば藥にもなり、何れの場合でも有力である。然し之を毒とするか藥とするかは巨匠を俟つて始めて決せられる問題である。舊式の概念法學の天地に蹐踏して居る人々には毒にも出來ず藥にも出來ないであらう。今回の訴訟に於て東京市が勝つとすれば此文句で勝つであらうし、反對に負けるとすれば、此文句で主なる敗因が形造られるであらう。**此點を法理論を離れて經濟上から論じて見よう。**成程、表面から云へば、アンヴエルス、ブルユクセルで利息を支拂ふ時に、其時の爲替相場によつて換算し、白耳義法で十三法を支拂はねばならぬこともあらうし又反對に十一法にて足りることもあらうと解釋される。其れ丈けの事を考へて此一言があるので勝つと云ふのは極めて皮相の見解ではあるまいか。何故ならば、右の一言は今日の場合に於て單に當面の解釋に委す可きものではなく、原則的の重要を持つ可きものである。其原則的の重要と云ふのは、少くとも利息の支拂に當つて、債務者が現實的なる其時々の爲替相場と云ふものを採用することを公認したものである。從つて佛蘭西の法が今日現實の場合とは正反對に騰貴して居たものとすれば、如何なるかを考へて見なければならぬ。若しCurrent rate of exchange の文句がなくて、單に十二法五十參を支拂ふとしてあれば、少くとも當面の問題は起るまいが、此文句ある以上は、例へば極端なる場合を想像して、佛蘭西の百法に對し白耳義法二百法なる相場が建つて居つたとしたら如何なるであらうか、此場合には十二法五十參の利息を支拂ふ爲めに二十五法の白耳義法を支拂はなければならぬ。其時に東京市は卽時に二十五法を支拂ふであらうか、如何であらうか。此場合は二つに分けて考へられる。

甲、百法對二百法の相場なるものが白耳義法の下落に因つて成立した相場である場合

乙、反對に右の相場が佛蘭西法の非常なる騰貴に因つて成立した場合

甲の場合に於ては假令請求通りに支拂つても何等の差かない、東京

市の負擔は其れが爲めに增大することは斷じてない、唯白耳義法が獨り下つたので、名目は二十五法を支拂ふと云つても磅又は圓に換算した額には變りはない。其反對に乙の場合に於ては事態が全く違ふ。東京市の支拂ふべき金額は著しく增大するのである。何となれば、之を圓又は磅に換算した額が倍若くは其れに近くなるであらうから、此場合に於ては東京市は果して直ちに債券所有者の要求に應ずるか否か、十の八九應じないものと考へられない。然せざれば東京市の當局者は背任の譏を受くることを覺悟しなければならぬ。而して此場合に訴訟が起されたとすれば、東京市の主張は如何であらうか、恐らく前掲の Current rate of exchange の文句を武器として擔ぎ出すであらう。曰く「東京市の負擔したものは白耳義法でもなければ佛蘭西法でもない磅である、即ち二十五法二十二參即ち一磅の法である、十何法即ち一磅の其法ではない」と、併し乍ら自己の不利なる場合に於ける主張は他人の爲めに有利なる論據でなければならぬ、少くとも經濟上は然うである。之を極端に詰めて考へて見れば、東京市が負擔した四百萬磅は即ち二志〇片有餘の圓額である。何んとなれば、其れが東京市の實收額であるのであるから、其額が倍にもなつた場合に何等抗爭することなくして東京市は之を支拂ふものと考へられない。否佛蘭西法が暴騰する場合ありとすれば、縱令右の白耳義法に換算の文句なくとも Equivalent to £. 4,000,000 の文句丈けでも爭ふであらう。曰く「Equivalent to £ 4,000,000 と云ふことを換算率を示したものではない、と佛蘭西人側では主張するかも知れない。其れは一片の形式論である Frc. 100,880,000 = £ 4,000,000と書いてあれば、其公式の中に換算率は含まれて居る、即ち壹磅は二十五法二十二參であるに相違ない、唯だ印刷した債券面に其率が數字となつて現はれて居らないと云ふ丈けで、其率がなければ右の等價式は成り立たないのである」と。恐らく然う云ふであらうと思はれる。而して其れは人をして首肯せしむるに足る一つの論據たるは言ふ迄もないと思ふ、然し是れは佛蘭西側の云ひさうな事であつて、東京市が云ひさうな見解でないことは勿論である。何となれば、東京市に取つては右の文句が毒となる解釋しか生み出さないからである。唯だ藥となる解釋は東京市又は東京市の助言者の採つて居る所であるが、其れは如何であるかは知らない。我輩の斷案の趣意は此問題を輕視してはならぬと云ふことを警告するのみで、藥となるべき解釋を玆に述べる必要を見ない、又我輩は今施捨施藥をしようと云ふ心持を少しも持つて居る者ではない。

〇　以上我々經濟生活の研究者から云へば、要するに下らぬ三百代言の理窟に過ぎない、どちらに轉んでも敢て意とするに足らない。我輩はもつと高所に登つて觀察せんことを欲するのである。岩田教授の

語を籍りて云へば、時代の要求はよく、、、、、、、、、、造るか是か爭ふが非かは時代の要求以外の標準から判斷せられねばならぬ。問題は單に何十萬何百萬圓の得喪の問題ではない、世界の表に於ける日本の信義の問題である。此の高き立場から云へば、我輩は東京市が原告の要求に對して直ちに應訴した事その事が大きい誤りであると思ふ。法律上から云へば管轄違ひであるかないかと云ふやうた問題も起るであらうが、そんな事もどちらでも宜しい。東京市、否、日本は佛蘭西に於ける東京市債券の所有者に對して、更に擴めて云へば外國一般に對して、此問題に就て如何なる債務を負ふて居るかを考へて見なければならぬ。日本は東京市と云ふものに依つて當時の手取金額圓價で約四千萬圓丈けの債務を負ふたのであつて是れに對して約束通り元利を支拂ふのは固より當然である。法律の缺陷は兎も角、佛蘭西の國民的災禍とも謂ふべき法貨の大暴落を好機會として、現に負ふて居る債務を其五分の一にも六分の一にも減じて仕舞ふなどゝは、高き信義の立場に立つ者に取つては到底考へ得られない事である。其れと同時に日本の圓も下落して居る、尤も今日は著しく圓の價値も昂まつたけれど、平價に尙ほ若干の開きがある。從つて、當時の實收四百萬磅を償還しようとするには、當時の手取よりは餘計に支拂はなくてはならない。是れは佛蘭西の債權者も熟知の事實であつて彼苦しめば我も亦苦

しむ場合には互に同情し合ふ可きである。更に附け加へて云へば、日本殊に東京市が大正十二年の大震災に因つて莫大なる損害を被つて居る事も世界周知の事實である。元來が土地狹く人多き國であるのに、近年は又引續き財界不況の影響も受け、隣邦支那に於ける絕えざる戰亂の爲めにも少からぬ打擊を蒙つて、國内の不景氣が彌々深刻となつて苦しみ悶えて居ることも亦誰人も認むる事實である。昔は武士は相見互ひと云つたが、今日は國と國と、國民と國民とが相見互ひでなければならぬ。從つて我輩は此問題は單に裁判所のみで決定しようとすることは重大なる錯誤であり、又日本全體の立場として極めて不利なる解決であると確信する。(以下畧す)

(三・二・九)



普選議會に何を求めるか？

山川均

（一）

わが國の政治史の上に初めて現はれた、普選議會に、吾々は何を望むであらうか？　また何を望み得るであらうか？　この問に對する答は、わが國を政治的に支配してゐる舊勢力は、この新議會に何を期待し何を望んでゐるかを明らかにすることによつて、反面から、しかも一そう明確にすることができる。

明治維新は、主として、武士の下層によつて行はれた。そしてこの革命の結果として、直接に政權を握つたものは、主としてこの運動を指導した分子であつた。それにもかゝはらず、明治維新は、封建的・專制主義的舊社會の埒內において、たゞ單に武士階級の上層から武士階級の下層にまで、政權が移動したにすぎないものではなかつた。明治維新は、下層武士の不平よりも、もつと大きな力によつて推進され、下層武士の理想よりも、もつと大きな力によつて導かれてをつた。これは維新の革命が、彼らの意識とはまるきり違がつた方向に發展し、まるきり異つた實を結んだことによつても、知ることができる。明治維新によつて、專制主義の極度の束縛干渉の下に生長した商業資本と商品經濟とは、新たな發展段階への進出を妨げてゐた障害物を一掃した。土地の私有權が確立され、土地そのものが自由な賣買の目的物となり、從つて農產物が自由な商品となり、資本主義的商品經濟の基礎

の上に、都市と農村との交換關係が樹立せられることゝなつた。かようにその運動が何者によつて指導せられたにもせよ、明治維新は、自分自身の道を歩んでゐたのである。

明治維新における眞實の推進力、封建的・專制主義に對する眞實の勝利者は、舊社會において既にその機能を失つてゐた階級ではなくて、新興のブルジョアジーであつた。けれどもブルジョアジーは、經濟的にもなほ幼弱であつたばかりでなく、政治的には、もとより成熟してゐなかつた。從つて明治維新によつて、政權の舞臺に登つたものはブルジョアジーではなくて、もはや何ら階級としての武士を代表してはゐなくなつたところの、下層武士の一少部分であつた。であるから明治の新政權は、もはや舊軍隊をその支柱としないで、却つて武士階級の武裝を解除し、國民皆兵主義による新軍隊を編制することをもつて根本的に重要な政策の一つとした。また不平士族の反抗を打破することによつて、新政府は、初めてその基礎を鞏固にした。これは明治の政變が、決して武士階級の内部における政權の移動にすぎないものではなかつたこと、この政治的變革に、ブルジョアジーが何ら活動的な要素として現はれなかつたにもかゝはらず、明治維新がどの方向に向つて政權の推移する始まりであつたかを物語つてゐる。

封建的・專制政府のもとに現はれた明治の新政府は、かようにブルジョアジーの政府でなかつたことは勿論であつて、いづれの國においても、ブルジョア革命によつて、一擧にブルジョアジーの直接の支配が確立され、完成せられたことはないが、わが國の明治維新においては特にそうだつた。けれどもそれと同時に、明治の新政權は、もはや封建的・專制主義の政府を、そのまゝに復生したものでもあり得なかつた。いづれの階級も決定的に優越した力を持たなかつた形勢の下において、明治の新政權が、專制的な寡頭政治の形を取つたことは怪しむに足りないことであつた。けれどもそれと同時に、明治政府は、少なくとも新政治の原則としては、『廣く會議を興し萬機公論に決す』ことを宣言しなければならなかつたばかりでなく、『博く衆議を諮詢』するための會議所の制度を採用した。

明治維新から最近にいたる五十年間は、この革命によつて舊制度の外殼から解放せられた社會勢力が、さらに生長成熟し、この生長と成熟とに應じて、その力を政治上に反譯し、その政權を確立し、自分自身の支配形態を發展し完成するにいたつた過程であつた。この過程のうちに、維新の革命運動に活動的な役割をした舊武士階級下層は、社會的活動のあらゆる領域において、新興階級によつて押し除けられ、全體としての士族もまた、もはや階級としての存在を失ひ、資本主義社會に固有な階級と社會層とに變化し、またはそのうちに同化されは

解された。

(二)

ブルジョアジーが政治的に生長し成熟した過程は、すべての國々の場合のように、わが國においても、政權を壟斷し、もしくは政權の壟斷者と結合してゐる上層ブルジョアに對して、より低い、從つてまたより廣大なブルジョア層が民主主義を要求し、その政權の分配に與づかる過程となつて現はれてゐる。維新後の二十年間は、變革によつて直接に政權を握つた指導分子の官僚化した一團による、一種の寡頭政治——いはゆる『有司專制』によつて支配せられたが、この間、民選議院の要求はたへず繰り返へされ、明治七年には、國會の開設を要求する有力な運動が起こり、二十三年にいたつて初めて國會が開かれた。

明治二十三年の最初の國會召集以來、大正十五年、第五十議會が普通選擧法を通過するにいたるまで、選擧權の擴張は、絶へず繰り返へされた要求であつた。即ち第十八回議會には、納税資格を全廢し、年齢を二十歳以上とする普選案が早くも提出され、第二十三議會には、納税資格を三圓に引下げる改正案が提出され、第二十四議會から第二十七議會にいたる四議會には、納税資格撤廢、年齢二十五歳の普選案が連續的に提出され、第二十七議會では、普選案は衆議院を通過したが、貴族院によつて否決された。第四十議會第四十一議會には、納税資格を二圓ないし五圓に引下げる數種の改正案が提出されたが、納税資格を三圓とする政府案が兩院を通過した。第一回の總選擧では四十五萬人であつた有權者は、同じ選擧法の下に、この時は百四十萬人に増加してゐたが、納税資格十圓から三圓への引下げによつて、有權者は三百萬人となつた。

さらに第四十二議會には、二種の普選案が提出せられたが、その討論中に議會は解散された。その結果は、普選を要求する輿論の勃興となり、加藤、山本、清浦の三内閣は、いづれも何らかの形における普選案を議會に提出することが、もはや避け得られぬことを知り、その準備を進めてゐたが、三内閣ともに、これを實行せぬ前に倒壞した。かくて普通選擧法制定の事業は、清浦内閣の倒壞によつて現はれた謂ゆる『護憲内閣』の手に殘された。護憲運動は、衆議院における多數派政黨に基礎をおかない謂ゆる超然内閣、官僚内閣——しかも貴族院の勢力を背景とするところの——の最後のものとしての清浦内閣の倒壞を目的とした運動であつて、謂ゆる護憲内閣は、この運動の勝利によつて生まれた内閣であつた。官僚内閣は、明治維新後の寡頭政治ないしは『有司專制』の政府から、ブルジョアの政權が確立せられるまでの過渡的な政府形態として存してゐたが、ブルジョアジーが政治的

に成熟し、その力を自覺し、自ら支配する自信を得てこれを決意した當年においては、もはや時代錯誤の存在物と見做された。そしてこの戸惑ひのお化を退治することにおいては、ブルジョア二大對立政黨の利害は一致した。そこで政友會、憲政會、革新倶樂部によつて謂ゆる『護憲運動』が起こされ、ブルジョア政黨は『特權打破』『普選斷行』のスローガンによつて、ブルジョア政權の前に立ち塞がらうとする、この舊時代の『殘存物と殘存勢力』とに對して、民衆を動員したのである。かうして、第四十一議會以來、特に普選問題によつて鬪つてゐた二大ブルジョア政黨の協力によつて、普通選擧が遂に實施せられたことは、すこぶる興味がある。

明治初年の參政權運動は、政權から振り落された、、の指導分子の下に、主として、維新の變革によつて舊時代の特權を失つたにすぎない士族と、明治政府の政策にあきたらない地主階級とによつて行はれた。最初の國會には、地主階級が壓倒的に優勢であつた。當時は、商工資本の階級に對して、地主階級の相對的の勢力は、なほ遥るかに大きかつたからである。しかるに後年には、選擧權の擴張を要求する運動の重心は、政治上の特權から除外せられてゐる一般ブルジョア下層中間的な社會層に屬する智識分子などに移つてきた。これはこの運動が、主として都市の運動に變じたことによつても知ることができる。さらに後年になつては、普通選擧は、小ブルジョアと智識分子の要求にとゞまらないで、無產階級の要求をも代表するものとなつた。

(三)

いづれの國においても　たゞ一回の謂ゆるブルジョア革命によつて、全ブルジョアジーの支配が現實せられたことはない。舊專制主義からブルジョアジーの政權の完全な確立を見るまでには、政權は多かれ少なかれ、ブルジョア内部の特權とした、まづその上層部分によつて握られるのが常であつて、ブルジョアジーの生長と成熟とに從つて、この政治上の特權は打破せられ、遂に成熟した全ブルジョアジーの支配が實現せられるものである。『ルイ・フィリップのブルジョア君主制のあとには、たゞブルジョア共和制が現はれるのほかなかつた。即ち、ブルジョアの限られた一部分が、王の名によつて支配してゐたものが、今や全ブルジョアジーが、民衆の名によつて支配しなければならなかつた』(マルクス)。そしてこの『二月革命は、もと〳〵選擧法を改革して、有產階級中の、政治的特權を有するもの、範圍を擴げようとしたものであつたが、しかし金融貴族の排他的な支配は倒さねばならないものだつた』(マルクス)。かようにブルジョアジーの政權の確立せられる段階にあつては、選擧權の擴張は、ブルジョアジーの階級としての生

長と成熟とに伴ふて、その政權の基礎が、より廣大なブルジョア層の上に擴大され、ブルジョアの一少部分による支配から、全ブルジョアジーの支配が確立され完成せられる過程にほかならぬ。わが國の場合もその通りであつて、第二回の選擧法改正によつて、ブルジョア政黨の基礎は、二倍に擴大した。そしてこの時期が、政黨內閣制がほとんど確立せられんとする時期に一致してゐることは、決して偶然でない。しかるに普通選擧の實施によつて、初めて全ブルジョアジーは、民衆の名によつて支配することができる。

　普通選擧の採用は、ブルジョア政黨間の抗爭によつて促進された。ブルジョア政黨は、謂ゆる選擧地盤となつて固定化した勢力の均衡を打破して『局面を展開』し、反對黨を敗つて政權を獲得するためには、いよ〱ます〱廣大な社會層に訴へ、その政爭に、新しい要素を引き込むことが必要であつた。たとへば第四十二議會は、在野黨の提出した普選案の討論中に、普選案を民意に問ふといふ明白な理由をもつて解散された。これがために普選要求の輿論は勃興したにもかゝはらず、總選擧の結果は、却つて政府黨の勝利であつた。そこで在野黨にとつては、現狀を打破するためには、普選を單なるスローガンとするばかりでなく、新しい要素を現實に政爭に引き込むためには、普選を實行することさへも必要であつた。それと同時に、貴族院や樞密院などに殘つてゐる官僚寡頭政治の餘勢に對抗して、ブルジョアジーの政黨政治を確立するためにも、普選の標語によつて、民衆を動員することが必要であつた。

　しかしながら支配階級とその政黨をして、普選採用の決意をなさしめたものは、一方においては、自己の支配的實力の自覺と、政權確立の自信であつたと同時に、他方においては、急激に增大した階級對立の威嚇であつた。戰爭中に、飛躍的な發達をしたわが國の資本主義は必然に、階級的利害の對立を激成した。そしてこれは戰後における、勞働運動と農民運動との勃興となつて現はれ、謂ゆる社會思想の勃興となつて現はれ、小ブルジョア層をも含む廣汎にして深刻な社會的不安と動搖となつて現はれた。勞働者と農民の運動は、主として經濟上の階級的利害と階級的意識の範圍內にあるものであつて、當時はなほ政治上の對立にまで發展してはゐなかつた。現に參政權の要求すらも勞働者と農民との、獨立した階級的な運動の形で起こつてはゐなかつた。けれどもこの經濟上の對立と鬪爭とは、當然に、かつ急速に、政治上の對立と鬪爭とに發展するものであつた。

　この威嚇は、ブルジョアジーをして、一方においては、その政治勢力の基礎を擴大する必要を感ぜしめた。他方においては、ブルジョアジーは、新興階級の鬪爭を、合法的な議會主義に導びくことが、最も

安全な水路に導びくものだと考へた。のみならず、普通選擧の採用が、近い將來において、とうてい避くべからざるものだとしたならば、その採用を早やめることは、支配階級にとつて何らの損失をも意味しない。無産大衆の政治意識がなほ幼稚であり、何らの政治上の階級的組織を持たないうちに普選を實施することは、その政治勢力の基礎を全ブルジョア層の上に擴大するばかりでなく、小ブルジョアと無産大衆の最大部分をも、その影響の下に確保し得るからであつた。

ブルジョアジーの支配がその基礎を擴大し、これによつてより強大な政治勢力を結成することは、更らに重要な他の理由によつても、必要缺くべからざることであつた。わが國の資本主義は、歐洲戰爭中に急速な發達をしたばかりでなく、戰時及び戰後の時期を通じて、特に金融資本の勢力に著るしい發達を見た。企業の集中は、今なほ急速に進行してゐるが、少數の中心に集中せられた企業は、いよ〱ますます金融資本の支配に歸し、こゝに謂ゆる金融資本主義の時代を現出した。金融資本主義の對外政策は帝國主義であつて、その對内政策は、必然に、被搾取階級に對する極度の反動政治である。わが國の資本主義がなほ上向線上にあることは、今日は何人にも異論のないところであるが、この上向線は、今後における帝國主義的政策の成功の程度によつて、嚴密に制限せられてゐる。かように帝國主義的進出は、戰後におけるわが國資本主義にとつての致命的な必要であつて、かような本主義的發展とその必要とに照應した政治上の作用は、金融資本の露頭支配の下に、強大な、反動的帝國主義的ブルジョアジーの政治勢力が結成せられることである。これは一方には、舊勢力とブルジョア政黨の陣容の整理、貴族院、樞密院の完全なブルジョア政黨化などに現はれ、他方には、選擧權の擴大によつて、さらに廣大な基礎を獲得しようと試みてゐる。

かようにブルジョアジーの利害と、その政治勢力の發展といふ見地から見れば、普通選擧の實施は、ブルジョアジーがその政治的指導を擴大し、その政治勢力の基礎を擴大し、一方においては、より廣汎な社會層を支柱としてその上に立ち、他方には、×××な勞働者と農民との勢力を限定し、離隔し、包圍し、孤立せしめることによつて、より安定した、より鞏固な政治勢力の均衡狀態を樹立することを意味してゐる。

支配階級とブルジョア政黨とは、普選による總選擧に對して、まさにかくの如き結果を期待しつゝある。彼らは、三百萬の有權者によつて選出せられたブルジョア議會が、小ブルジョアと無産大衆とを含む一千三百萬の有權者によつて選出せられたブルジョア議會となることによつて、ブルジョアジーの政治勢力は一そう廣大な基礎をもち、一

そう强固となり、一そう安定的なものとなることを期待する。それ故に、彼らは、普選の實施とその直接の結果とを指して『昭和維新』と呼び、大衆をして、普選によつて選ばれた新ブルジョア議會を『劃期的』な事實として受け容れしめ、これを民衆の勝利の全收穫物であるかの如く信ぜしめようとするのである。

（四）

けれども普選の意義は、たゞそれだけかと云へば、決してそうでない。普選の實施が、ブルジョアジーにとつて何を意味してをり、どのように利用せられようとも、無産階級にとつては、別個の階級的意義をもつてゐる。わが國の政治史の全頁を通じて、勞働者と農民とすべての被搾取者大衆は、普選による最初の總選擧において、初めて公然の政治勢力として、正式に政治の舞臺に現はれた。わが國の勞働者と農民は、無産政黨の形成によつて、初めて獨立した階級的な政治勢力として結合する一歩を踏み出した。そして普選による最初の總選擧はもはやブルジョア政黨の對立のみによつてゞはなくて、初めて資本主義社會における、二つの主要な階級的勢力の對立によつて行はれた。これはたしかに、劃期的な意義がある。しかしながら、この劃期的な意義は、普選によつて成立する新しい議會に實現され、具體化されるわけではない。それはいま開始せられた政治上の鬪爭の發展と展開とのうちにのみ、實現せられるものである。

普選を成立せしめたものは、ブルジョア政黨自身であつた。大衆の要求と大衆の力とは、その背後に働らいてゐた。ブルジョア政黨が、普選の標語を、大衆動員の手段に利用し得たことが、廣汎な社會層が、普選を要求してゐたことを物語つてゐる。しかしながらこの要求は、主としてブルジョア政黨によつて代辯せられてゐた。普選要求の運動は、勞働者と農民と小ブルジョア層との獨立の運動として、ブルジョア政黨に對して組織せられたのではなくて、却つてブルジョア政黨の指導の下に、ブルジョア政黨によつて組織せられた運動であつた。これは爭ふことのできない事實であつて、この事實は、普選の獲得にいたるまでは、そして普選の獲得といふ一點においては、大衆はブルジョア政黨と共に進み得たこと、大衆の政治的要求が、ブルジョア政黨によつても代辯せられ得たことを意味してゐる。そしてこれはまた、政治的發展のこの段階までは、無産大衆の政治的利害とブルジョア政黨の政治的利害とが、充分に分化し盡し、充分に分離し盡してゐなかつたことを意味してゐる。

普選の成立は、この階級的政治的曖昧の終焉であつて、普選による最初の總選擧は、明確な階級的政治的對立にもとづく新たな出發點で

あつた。ブルジョア政黨は、普選獲得の標語によつて、無産大衆を動員することができた。こゝまでは、無産大衆は、ブルジョア政黨の道づれとなることができた。しかしこの不似合ひな道づれは、普選の成立によつて、決定的に終りを告げた。普選の成立によつて、こゝに一千萬人の新たな有權者ができた。この一千萬人によつて表はされてゐる政治勢力の新領域に對しては、ブルジョアジーの政治勢力と無産階級の獨立した政治勢力との間には、たゞ爭奪の戰ひがあるのみである。普選による最初の總選擧は、この戰ひの公然の布告であり、この戰ひの發端であつた。こゝに總選擧の『劃期的』な意義がある。

これに反してブルジョアジーとその政黨とにとつては、この總選擧によつて成立した新議會――ブルジョアジーの擴大せられた政治勢力と、より安定的な政治上の均衡狀態――そのものが劃期的な事實であり、『昭和維新』の體現なのである。ブルジョアジーは大衆をして、かくの如く信ぜしめようとする。そして大衆をして、この劃期的な事實に滿足してこれを擁護せしめようとするのである。

（五）

しかしながら無産階級にとつては、普選と總選擧との劃期的な意義は、決して最初の普選議會にそのまゝ具體化されるものではない。普選による最初の總選擧が、新議會における政黨の勢力分野の上に著るしい變化をもたらすものと假定してみても、この變化は、畢竟ブルジョア議會がブルジョア議會たる性質の範圍内において變化するものであつて、この『昭和維新』の成果、『劃期的な事實』が、依然としてブルジョア議會の再現であることは、一點の疑ひがない。

しかるに實際においては、ブルジョア政黨の相對的勢力の上にさへも、果して著しい變化があるかは、すこぶる疑問である。大小四つのブルジョア政黨は、何づれもおの〳〵自黨の勝利を主張し、より大きくなつて新議會に現はれることを主張してゐるやうである。そこでもし、ブルジョア四政黨の期待がいづれも實現せられたなら、日本の下院は定員五百何十名かになるが、ブルジョア政黨の勢力分野には著るしい變化がなく、舊議會をそのまゝ、ただ粗末な擴大鏡で見たのと同じものとなる。

もちろん議員の『顏觸れ』には、相當の變化が豫想せられてゐる。新有權者に訴へる必要は、ブルジョア政黨が候補者を選定する標準の上にも、多少の變化をよぎなくする。かりに普選議會には、これらの『新顏』議員が著るしい多數を占める それはもちろん考へ得られぬが）と假定してみても、この新議員によつて、新しい議會が、果してどれだけ新しい性質を帶び來るであらうか。これは甚だ疑はしい。いな反

對に、その影響は極めて微弱であり、或は皆無に近いと見なければならぬ。政黨が、一定の階級的利害を精密に代表するものにまで發達すればするほど、人物本位の色彩を失つて政策本位の團體となり、その統制は鞏固となり、僅かな個人的な差異は、重要を失つてくる。新選出の議員によつて、政友會、民政黨の性質が、著るしい影響を蒙るものとは、もとより考へることはできぬ。現にこれまで、比較的に進歩的な意見を有すると認められた若干の個人が、これらの政黨に加入した結果は、完全にその統制に服從し、その反動主義に同化せられることにほかならぬ。

普選議會に期待することのできる唯一の新しいものは、無産政黨の議員である。從つて、普選議會に何事かを求めるとしたならば、それはたゞ、勞働者と農民によつて選出せられるこれらの議員に對する期待にほかならぬ。

けれども無産政黨が、果して何人の當選者を出し得るかは疑問であつて、無産政黨の現狀と、現行の選擧法とその運用との下においては當選者は勢ひ少數交渉團體の定數に達することさへも、もとより過大な期待とされてゐる。

ブルジョア政黨の獨占する議會に、僅かに十名の無産政黨議員を送ることが出來たにしても、これは大なる成功であり、少なくとも大なる成功への大なる第一步であつて、その意義は、決して十名といふ數字によつて代表することはできぬ。けれどもそれと同時に、この少數の勞農議員の議會内における行動に、過大な當面の効果を期待することは過つてゐる。なぜならば、議院において發言の機會を得ることさへも至難であつて、少數の勞農議員にとつては、たゞこの一事でさへも極めて重大な負擔だからである。もし最初の普選議會において、これらの勞農議員が發言の機會をとらへ、そして勞働者と農民と被抑壓大衆の要求――徹底した參政權とこれを行使する完全な自由の要求と、これに對する鬪爭の決意の宣言とは、その主もなるものゝ一つである――率直明白な言葉で言ひ表はすことができたなら、勞農議員はその任務を充分に完うしたものとして、吾々はその大なるその努力に感謝すべきである。

（六）

しかしながら議院内における、外觀においては小いさなこの事實は次の如き意味において、極めて重要な意義をもつてゐる。卽ち、議院内におけるこの小さな事實は、議院外における大なる事實と繫がつてゐるといふことである。それは議院内において起こつた、孤立した一事實ではなくて、議院外において、全社會の根柢において、進行し

つゝある大なる作用の一端が議院内に現はれたものであり、ブルジョアジーの議院——政治的支配の装置——内に、その尖端の一つが喰ひ込んだものであるからこそ、極めて重要な意義があり、眞實に「劃期的」な意義がある。

それ故に、議院外における勞農議員の行動は、議員外に於ける政治鬪爭と緊密に結合され、その有機的な一部分をなす時にのみ、初めて重要な意義を備へてくる。言葉をかへて言へば、議院外における大規模な、活潑有力な大衆的な政治鬪爭の展開によつてのみ、議院内に於ける小なる事實は、初めて大なる意義を持つのである。

この大衆的な政治鬪爭の重要な目標の一つは、徹底した普通選擧の獲得でなければならぬ。この要求は、今日すでに、無産諸政黨の鬪爭目標の一つとなつてはゐるが、この運動は、ブルジョア政黨の與へた普選による最初の總選擧と、最初の普選議會の出現とによつて、さらに新たな出發をしなければならぬ。總選擧の最も重大な意義の一つは謂ゆる普通選擧權の眞性質を、大衆の前に、實物によつて明らかにすることである。それはブルジョアジーとその政黨とが讓歩した政治上の權利と、勞働者と農民と被抑壓大衆の要求する政治上の權利とが、いかに異なるものであるかを、大衆の前に實證する。この活々とした證據は、直ちに發剌たる出發點となるべきものである。選擧權は、眞實に選擧權を獲得する大衆的な運動に展開しなければならぬ。

大衆の要求する參政權は、第一に、年齢の低下を要求する。第二には、婦人の政治的權利を剝奪することを許るさない。即ち、婦人の結社の自由と共に、男子と平等な選擧權を要求する。第三には、投票日を、國定の休日とすることを要求する。第四には、供托金の廢止と、無産階級の選擧運動と選擧權の行使とを制限する一切の拘束の撤廢を要求する。第五には、選擧費用を國家が負擔することを要求する。

それと同時に、かような參政權の完全な行使は、たゞに選擧法の改正のみによつて保證せられるものではない。それは言論、出版、集會の自由が保證され、無産者運動を抑壓する一切の法律の撤廢と相俟つて、初めて實現することができる。

かような意味における『徹底普選』獲得の運動によつて、參政權要求の運動は、わが國において、初めて純然たる、勞働者と農民と被抑壓大衆との獨立の運動——ブルジョアジーに對する階級的な運動として現はれる。過去における普選運動は、多かれ少なかれ、ブルジョア政黨によつて組織され指導せられた運動であつた。ブルジョア政黨は普選の標語によつて、無産大衆の利害と要求の一致を示し、その協力の可能を示し、その代辯者たり權利の擁護者たることを示し、これによつて大衆を、自己の利益のために動員すると同時に、普選をもつ

て階級協力の手段にしようとした。無産大衆の普選に對する要求が、かようにブルジョア政黨によつて代辯され、または利用し得られた限りにおいては、大衆は普選獲得のためには、ブルジョア政黨と協力したといふことができる。

しかるに普選の成立は、この協力と、協力の可能との終焉であつて總選擧は、參政權に對する新たな鬪爭への出發點であり、それはもはや、ブルジョアジーの一部分によつて獨占せられた政治上の特權が、全ブルジョア層に向つて開放され、ブルジョアジーの一部分による支配が、民衆の名をもつてする全ブルジョアジーの支配に發展し、ブルジョアジーの政治勢力の基礎を擴大し、さらに安定的な基礎の上にこれを置き替へる作用としての參政權の擴張ではなくて、民衆の名による反動的帝國主義ブルジョアジーの支配に對して、無産大衆が政治上の權利を要求する鬪爭である。それはもはや、ブルジョアジーの政權の確立と政治的發展の過程のうちに含まれた作用ではなくて、積極的にこれを掘り崩づす作用の發端なのである。

新刊紹介

◆**日本童話集**（童話作家協會編・當代童話界の諸大家が純眞なる兒童に呼びかける生新なる童話集、裝幀華麗・定價三圓七十五錢・東京市日本橋區通三丁目・丸善）

◆**古代女性史論**（井上芳郎著・定價二圓・東京市麴町區上六番町五・岡書院）

◆**婦人に與ふ**（レーニン・ツエトキン著・水野正次譯　定價六拾錢・東京市芝區南佐久間町二ノ一八・共生閣）

◆**婦人の解放と政治**（ドイツ共産黨編・水野正次譯・定價二拾五錢・東京市芝區南佐久間町二ノ一八・共生閣）

◆**獨逸文藝生活**（秦豐吉著・定價一圓五十錢・東京市牛込區横寺町四三・聚英閣）

學生と選擧運動

新明正道

制限議會は解散によつてその最後の幕を閉ぢ、我等は今や目捷の間に我國最初の普選を迎へやうとしてゐる。一般民衆、殊に今回新たに有權者と成つた一千萬の民衆は、普選に對面して如何なる役割を演ずるものであるか。その態度如何によつて普選の實績が決定されることを考へると、彼等の行動には極めて重大な意義が與へられるのである。かくの如き使命を有する新有權者のなかには、學生も亦た含まれてゐる。從來の規定では官公私立學校の學生や生徒は選擧權を與へられてゐなかつたのであるが、新選擧法では、兵籍に編入せられたものと考へられる特殊な陸海軍直轄の學校、及び高師專門學校の生徒を除くの他、他の條件の具はつてゐる限り、凡ての學生生徒は堂々たる有權者の資格を得るやうに成つたのである。

しかし、學生としての有權者は、選擧法に依つて正當なる公民權を獲得したにも拘らず、その生活の特殊的な狀態に基づいて極めて不利な地位に立たざるを得ない。彼等は、學窓にあつて研究中であるとの理由から、他の一般有權者とは別の取扱ひを受けやうとしてゐる。元來學生の有權者の數は公私立の諸學校を通じて約六千であつて、その數からいへば全有權者に對して格別の意義を有たないものゝやうであるが、彼等の社會群としての有能な働きや更に將來有權者の年齡制限が低められた場合において彼等の獲得すべき勢力を考へて見ると、現在の普選の下における彼等の政治的地位を正當に判定することは頗る重要であり、此れは究極において普選の原理の問題にも接觸するものであると謂はなければならぬ。我等は現在學生の政治的地位について提起せられた諸條件を檢覈して、その正當なる理解を要求する必要が存する。

我等は先づ、學生が單なる有權者として選擧權を行使しやうとする際、既に不利な條件に對面することを指摘せざるを得ないのである。今回の如く投票日が日曜でない場合には、學生がその權利を行使せんがためには學校を缺席せざるを得ない破目に陷いることもあるのである。之に對して、最初、當局は學校を休むことを唯だ正當の理由のある缺席とは認めるが、公休とは認めない態度を採るものゝ如くに傳へられた。しかし、其後の文部省の通牒によると、當局は學生の選擧權行使には努めて便宜を與へる態度を採り、選擧當日投票を妨げるやう

な學校の行事を中止し、試驗日が投票日とかち合ふ場合には一日繰上げるかまたは繰下げることを勸めてゐる。そして投票日（日曜日）は休校となすか、又は有權學生のみに對し投票のため缺席してもそれを出席と見なすか、或ひはその缺席を正當の理由ある缺席と認めるかの取扱ひに關し、文部省では凡て學校當局者に一任することに成つてゐる。缺席の問題は官公立大學においては出缺簿の制度が存在してゐないため、特に考慮すべき餘地は、ないのであるが、高等專門學校程度の學生は、此の條件によつて比較的投票の自由を享有出來ることに成つた。本來投票日は日曜を以て宛てるか、又は當日を休日とすべきであるが、姑息的な今日の如き場合においては、右の如き方針は當然であると謂はなければならぬ。

しかし、此の方針も實際においては約八千の學生有權者に對して十分その權利の行使を保證するものではないのである。我等は茲に學生の住居に關する內務省の解釋を指摘しなければならぬ。二月二日の東京日日新聞に依ると、當局は學生の住居に關して、二つの場合を認めてゐる。一はそれが鄕里に在ると認められる場合であり、一はそれが勉學地に在ると認められる場合である。當局の解釋に依ると、學資の全部又はその半ばを鄕里から受けて休暇に鄕里へ歸省するものは鄕里において投票しなければならない。勉學地において投票なし得る學生は學資の全部を自己の勞働によつて求め休暇には歸省せざるもの、又は學資を鄕里から受けながら妻子と共に同棲するものだけに限られてゐる。しかも、學生が學資を鄕里から受け休暇には歸省するのを常態としてゐる以上、彼等の大多數の住居は鄕里に在るとせられ、勉學地において投票權を行使出來なくなると謂はなければならぬ。勿論、强ひて公民權行使に忠實ならんとせば、勉學地から遙々鄕里へ歸省して投票することは可能である。しかし、これは當局の奬勵しないところである。當局は『歸鄕の上數日間學校を休んで投票する學生に對しては學業に影響せぬやう成るべく見合はしむべく注意する方針である』（一月二十五日、讀賣新聞）と傳へられてゐる。しかし、假令當局が投票のための歸省に對して寛大な態度を採るとしても、結局學生として投票のために態々鄕里へ歸省することは彼等の生活條件から考へて不可能のことに屬する。之に由つて見ると、普選に依つて學生も亦た公民權を獲得したとはいふもの丶、その住居に對して下された解釋は終ひに全く此の權利の實際的な行使を無にして了ふものである。內務省の解釋を以てすると『住居とは從來の選擧資格の條件をなした住所とは異なり居住に必要な設備、卽ちすまゐの場所を持つと解すべきである。學生が大體において父兄の送金によつて生活に必要な設備をなし得てゐるものと認められる場合は原籍地を以てその住居とみなすべきである。』（二月二日、東京日日新聞）住居を以て非現實的なる生活の本據としての住所と區別するのは當然である。現實的な生活の本據、卽ちすまゐの場所は所謂居所である場合が反つて多い。住居とは住所と居所とを一括して出來得る限り國民の公民權享有の可能性を大なら

めんがために用ひられた言葉であると解釋すべきである。內務省の住居の解釋は之に一致するものの如くであるが、すまゐの場所としての住居の解釋から進んで、學生の住居はそのすまゐに必要な設備が父兄の資源に基づくものであるとして、之を原籍地に移し去らうとするのは、妥當であると謂へやうか。貧困に因らずして公私の救助又は扶助を受ける者には、學生の他『親戚故舊より體面維持の爲め補助を受くるもの』及び『父兄より扶養を受くる子弟、或は子弟より扶養を受くる父兄其他民法上の家族たると否とを問はず同一世帶內に在る者より扶助を受くる者』等が考へられるのであるが、此等の有權者に就いてその生活の資源を一々究明することは困難であるのみでなく、普選そのもの丶精神において財産の有無が最早何等意義なきものとして排除せられた以上、財産的關係の資格を持ち出すことによつて、有權者の住居を決定せんとするのは矛盾であると謂はなければならぬ。學生の住居は須くその申告に依つて決定すべきものである。彼等が不在投票權を有せざる限り、右の如き措置が最も能くその選擧權を活用せしむる所以であることは明らかである。

學生は既に單なる選擧權者としてかくの如き不利なる地位に置かれてゐるが、その選擧運動に對する關係においては更に甚しい障害を與へられてゐる。新聞紙上に散見する意向を綜合すると、當局では投票に條並するが、選擧運動には寧ろ禁壓する方針であるやうである。學生の選擧運動は普選實施に依つて頓に熾烈に成るべきことは疑のないことであつて、之に對して當局が禁壓的方針を採らうとするのは、一つは學生が選擧に狂奔するの餘り學業を放擲するにいたるのではないかといふ、一つは左傾候補者の爲めに熱狂的に運動するものが簇出しはしないかといふ憂慮に基づくものであると見てい丶であらう。此等は當局として當然想到すべき事柄ではある。しかし、一般的に選擧法に依つて學生が公然と選被兩權を有する權利者と成つた以上、單に學生なるが故に、その選擧運動を阻止すべきものであらうか。有權者のなかで特殊的な生活條件を有してゐるものは學生のみには限られない。しかも、學生のみにおいて特にその特殊な生活條件を問題とするのは不當である。

學生が、自ら選擧事務長、選擧委員又は選擧事務員と成る場合は勿論、單に第三者として演說又は推薦狀に依る運動をなす場合においても、彼等が運動のために學業の專修をある程度まで放擲するにいたるのは避け難いことである。玆に、學業に從事する學生として、その本務を忘れる者であるといふ非難が投ぜられる。しかし、選擧權を有する國民の大部分が何等かの主要なる本務を有するものであることは當然であつて、彼等が政治的權利を行使する場合に之を閑却せざるを得ないとしても、この故に彼等を咎めることは苛酷である。本務を忘れて政治に奔走するものは全く學生のみではないのである。選擧法に依れば、官吏及び吏員と雖も選被兩權を有してゐる。彼等が其の關係區域外において立候補した場合を考へよ。彼等に二の事務官である時に

に當選後辭職しなければならないが、選擧運動には現職のまゝ關係出來るのであつて、當局も亦た之を容認してゐることは、今回の選擧における知事立候補の例に依つて明白である。しかも、此等の官吏及び吏員は國民としては最も重要な本務を有するもの、その彼等が任地を離れ事務を放擲しても差支ないと考へられるならば、學生の如きものに對してのみ特別の拘束を加へるのは偏頗に失するものである。學生の選擧運動が學事を閑却するものとなすのは、從來の選擧法における精神であつて、此の故に『官立公立私立學校の學生生徒』には選被兩權を與へなかつたものである。しかも、現行の規定において此の制限の撤廢されたのは、畢竟學生の選擧運動を一般的に許容したものであるとしか考へられぬ。今日なほ學生の本務と政治との扞格を强調するのは、舊規定の精神を以て新規定のそれを推すことに歸着せざるを得ないものである。更に學生一般の思想を以て矯激であるとしてその選擧運動を抑制しやうとするが如きも、亦た、究極においては、新選擧法の改革的な特長を全く無視するものと謂ふべきではないか。我等は學生の運動が現實において悉く左傾的に流れてゐるといふ事實の認識は別とするも、既に合法的な運動として政治結社が認められ、それが選擧法の規定に準據して運動を成してゐる以上、之に對する取締は既に一般的に確定してゐる筈である。此の取締は既成政黨たると新興政黨たるとを問はず、同等に適用さるべきものであつて、その間に何等の區別を設定すべきものでない。一般有權者はその意志によつて自己の欲するところに從ひ、選擧運動に關係するを得べく、學生、[illegible]の例外たるべきものではない。取締の如きも、學生としてではなく、一般公民としてのみ受くべきものであるとすると、徒らに學生の志向を云々するのは、結局前の場合におけると同様に、普選の意義を偏見的に解釋する結果に陷いらざるを得ないものであらう。

殊に、我等はかくの如き學生の選擧運動に對する公けの見解が行はれてゐる反面において、實際には學生が盛に、直接運動に關係してゐる事實を目擊する。新選擧法に依つて從來の運動法の隨一であつた戶別訪問が禁止され、唯だ第三者の演說又は推薦狀に依る運動のみが許可せられることになつた爲めに、各政黨は勢ひ應援辯士を揃へることに銳意努力せざるを得なくなつた。一月二十五日の東京朝日新聞によると、政友會では、昨年春から本部と支部が協力して各地に辯士養成の講習會を開いて速成辯士千五百名を各支部に專屬させた。それに本部特派員として約三百名あるが、それでもなほ不足である。結局政友會專屬の辯士は約七千名も必要である。又た民政黨は常備軍として約二百五十名、講習會による速成辯士千七百名を有してゐるが、之を以てしては到底需要に應じ難く、困却してゐるとのことである。かくの如き辯士團の大半が學生から募集されることは謂ふまでもない。早稻田大學學生のみでも三百名、日本大學、明治大學の雄辯會も既に解散の翌日に申込を受けたといふ有樣である。

此等の學生は恐らく大方選擧權を有つてゐない二十五歲以下の者であると見て大過はない。政治的權利を享有するには餘りに思想の定ま

らない輕擧妄動し易い者とされてゐる二十五歳以下の學生が、選擧の應援演說者として引張り凧であるといふのも奇妙な現象である。候補者が二十五歳以上の年齢制限を必要として肯定しながら、同年齢以下の學生の應援に對して何とも思つてゐないとしたら、滑稽である。しかし、私は今玆で年齢制限の問題に觸れるのが本旨ではない。私は一般に學生の選擧運動に對して取締の意向が當局に存在してゐるにも拘らず、此等の應援辯士の大量的需要の現象が實際において何等禁壓されてゐないのを不思議と考へるものである。此等の學生が選擧運動に關係するのは毫も政治的な見識や要求に基づいたものではない。某學生は、『旅費とも約十圓から十五圓位で、當選でもすれば祝として百圓から二百圓位くれますが、落選したとなつたらみじめなものです。汽車賃もろく〱くれないで追拂はれるのですから、政治家つて勝手なものですよ。』と謂つてゐる。此れをその僞らざる告白としてみると、此等の臨時雇ひの學生辯士の運動は、結局生活の必要のための一手段としか考へられぬ。勝手な政治家とは思ひながら、敢へて應援せざるを得ないところに、彼等の悲哀がある。しかし、政治運動の本道から見ると、凡そかくの如き愚劣な、自己の意志と何等の關係のない運動ほど排斥さるべきものはないのである。機械的に口舌を切賣するところに何等政治に對する學生の眞摯な認識も要求も認められないではないか。しかも、かくの如き學生群が今回の選擧においても盛に機械的な活動をし續けてゐるのである。我等はかくの如き盲目的な運動ほど政治に惡影響を及ぼし、又た公權者――彼等が然りとせば――としての學生の本分に背反するものはないと思ふ。彼等は純然たる第三者であるが、その候補者若しくは選擧運動員に對する關係は實際において最も明白に所謂從屬關係に立つてゐるものである。今回の內務省の解釋した演說の取締から見ると、先づ第一に問題と成るのは彼等ではないか。我等は所謂從屬關係に基づく解釋を以て頗る曖昧なる意義を有つものと考へるが、苟くもこの解釋を採らうとしたならば、先づ問題とすべきは此等の學生運動員ではないか。しかも、此等の裏面的に活躍する不純なる學生選擧運動者が問題とされてゐないで、正當な政治的要求と認識に基づいて選擧運動に參加せんとする學生に對して獨り取締が問題とされてゐるのでは、論理的な立場が一貫してゐないと見ざるを得ない。演說請負業的學生の販路が主として既成政黨にある事實を見ると、此の現象が、學生と選擧運動との關係においても、既成政黨のみを特別扱ひする偏見を公示するものであるとみられても仕方がないのである。

要するに、現在の學生と選擧運動との關係についての公的見解には從來の選擧法の根柢をなしてゐた舊解釋がなほ保存されてゐるものである。しかし、此の解釋は根本的に現在の選擧法の眞の意義を滅却するものではないか。既に骰子は投げられてゐる。新選擧法が如何なる要求と主張によつて生れ出たかを考へるならば、之を裝ふに舊い解釋を以てしやうとするのは、政治の進化に對する無理解を表はすものであると謂はなければならぬ。學生は修學中の者であるとはいへ、その政治的知識と能力とは決して一般人に劣るものでない。彼等の純眞な行動によつて政治は向上せしめられても、墮落せしめられることはないのである。將來更に選擧權の擴張せらるべき場合を豫想するにつけても、新しく有權者と成つた八千の學生に對して、十分その可能な權利の行使を保證し、又た促進することが必要である。我等は學生の選擧運動に對しては、更に好意的な寛大なる解釋を要求せざるを得ないものである。

無產階級と國際戰線

淡　德　三　郎

一、國際問題と無產階級の見地

國際問題に關する無產階級の見地は、インタナショナリズムといふ一語を以て要約される。然らばインタナショナリズムとは何を意味し、又それは理論的に如何なる根據の上に立つのであるか？

無產階級が依つて以て立つ所のインタナショナリズムは、美しき空想ではなくて、現實の社會關係の科學的分析の上に基く。マルクスは全國際的關係の上より、資本主義的生產關係の發展の傾向を論じて次の如く述べてゐる。

『資本家階級は、あらゆる生產用具（生產手段）の急激なる改良により、限りなく容易にせられた交通により、凡ての國民を、最野蠻の國民を迄、文明の中に引入れてしまふ。

資本家階級の商品の低廉なる價格は、以つて、凡ての『萬里の長城』を粉碎し、以つて、野蠻人の、頑强なる異人嫌惡を征服する所の重砲である。

資本家階級は、凡ての國民をして、彼等が若し滅亡せざらんと欲せば、彼等も亦有產者團の生產樣式を採るべく餘儀なくする。

資本家階級は、凡ての國民をして、所謂文明を輸入し卽ち自ら資本家となるべく餘儀なくする。一言を以つてせば、資本家階級は、彼自身の形象にかたどつて一の世界を創出する。』

『資本家階級は、世界市場を開拓することによつて、あらゆる國々の生產並に消費をコスモポリタン的に形成してしまつた。』

『諸國民の國民的離隔と對立とは漸次既に、資本家階級の發達と共に、商業自由（自由貿易）、世界市場、大工業的生產の——並にこれに對應する生活關係の——同一性と共に、消滅する。』（Das Kommunistische Manifest）

然し乍らそれにも不拘、實際には、國民的離隔は尙依然として存在を續け、否益々その離隔を鞏固ならしめるかの如くにさへ見える。此の矛盾は何から起り、又如何にして克服され得るか？　此の矛盾は、國民的離隔の物質的根據を消滅せしめつゝあるその同じ資本主義的生產關係の發展に基く。蓋しその發展は必然に獨占の傾向を生み、而して一國に於て支配的地位を占めた資本家階級は、自國の周圍に防壁を

めぐらす事によつて、他國の資本に對してより一層有利に國內無產階級より利潤を搾取する事を得、又その國家權力の背景により後進國に對する誅求を保證されるからである。發展せる資本主義的世界に於ては、自由貿易コスモポリタニズムはもはや諸國の資本家階級の存在と一致し得なくなる。さればこそマルクスは言ふ。

『無產者階級の支配は之れら（國民的離隔と對立と）を、なほ一層消滅させるであらう。少くとも文化諸國の協同行動、之れが、無產者階級の解放の第一條件の一である。

一個人の、他個人による掠奪が揚棄せらるゝと同じ程度に、一國民の他國民による掠奪も揚棄せられる。

國民內部に於ける階級對立の沒落と共に、諸國民相互の敵對的地位は沒落する。』（同）

かくて『萬國の勞働者團結せよ！』といふ語を以て表現される無產階級のインタナショナリズムとは、蓋し、資本主義關係それ自身によつてその客觀的基礎を形成せられたる諸國民の融和協力を、現實に齎す所の使命をいふのであり、而してそれは唯無產階級のみが遂行し得べき任務である。何故ならば彼等のみが、その地位の必然により、資本主義社會の胎內に成熟せる新社會の客觀的基礎を、それ自身として發展せしむべき歷史的任務を課せられてゐるからである。而して無產階級に、夫々の國に於て、、、、、、、、、、、による事[illegible]を遂行する事が出來るのである。

たゞ他力に於て、若し無產階級が、國際外交を遂行してゐる支配階級をして、國民的偏見を利用せしめ、一國の勞働者を他國の勞働者に對立せしめて、人民の血を流し、富を破壞せしめる所の行爲を恣にさせるならば、無產階級はその夫々の國に於ける此の歷史的な、、、を果す事は絕對になしえない事となるであらう。

勞働者達は國際的政治のあらゆる秘密を知悉しなければならぬ。彼等は國內政治の狹隘なる範圍に留るべきではない。その政府の外交的行爲を監視しなければならぬ。彼等は必要な場合にはその有するあらゆる力を以て抵抗しなければならぬ。個人の犯した犯罪は處罰するが、國際關係に於ける竊盜、强盜、詐欺は許すといふ樣な狀態は終焉せしめねばならない。かくして無產階級の國內的任務と國際的任務とは密接なる聯關をもつ。國際的任務を無視して國內的任務は果し得ないし、又國內的任務より抽象された單なる國際的協力は遂にキリスト教の人類愛又は人道主義に終らざるを得ない。

インタナショナリズムと國內に於ける、、、、、、とは不可分離の觀念である。（註）

（註）社會民衆黨の吉川末次郎氏の『日本無產階級の外交政策の基調』（中央公論昭和二年六月）は此の原理を否定する事にその『基調』をおいてゐられる。氏は言はれる。

『彼は言はん、社會主義社會に於ては賃銀制度は無くなり、貨幣制度は亡滅するであらう……と。併し乍ら貨幣が現に[illegible]資的優越を

我等に對して有するに至る、その國民的經濟資源獨占量の大なる事は依然として打ち續くであらう。』

こゝに於て『國內に於て貧者が富者に反感を抱き、之を倒壞して、富の分配の衡平化されたる社會制度を實現せんとする要求とその行爲化との正當なる事が承認されてあらねばならぬ樣に、その富める國家或は富める共產共同體の經濟的獨占に對する、貧乏國家或は共產共同體の要求とその行爲化、時としては、之を武力鬪爭的形態にもち來す事も、・・・又等しく正當なる事として承認されてあらねばならぬであらう。』(傍點引用者)

以上の引用によつて明かなるが如く、氏は『彼等』『我等』觀念、換言すれば國民的乃至人種的意識の永久性の理論より出發し、結局に於て、萬國の無產階級の國際的連結を拋棄し、人種的インタナショナリズム(?)に到達されるのである、(曰く『日本の無產政黨は、有力なる世界的大民族、而してそれは日本との合同によつて、世界の何物をも敵となし得るに足る支那國民、並びにその他の全有色人種、全被壓迫民族を糾合して、こゝに眞の國際平和を齎すべき別個の第五インタナショナル組織へ、その陣營を進出せしめなければならないであらう。』)かくて氏に於ては、、、帝國主義に、、する事が問題ではなくて、白色人種を膺懲する事が直接の任務となる。否、その爲には、、帝國主義と協力する事さへ惜しまれない。(この事は氏が問題を取扱ふのに、『、、、』といふが如き階級性を抹殺した言葉を使用されるのでも明かだ。)──これは氏の出發點からの必然の進行きではある。だがその出發點(人種的意識永久性の理論)は果して正しかつたか?

否。成程人種的意識が資本家階級に作り出されたものでない事は事實だ。だがそれは資本家階級の成立によつてのみ、『國民的經濟的資本獨占』の基礎とされるに至つたのである事を忘れてはならない。かくて資本家的生產關係の消滅は、同時に又人種的意識が『國民的經濟資源獨占』の基礎たる事を停止する條件を形成せざるを得ない。而して無產階級こそはかゝる任務の現實の遂行者である。あらゆる方法手段によつて、國民的人種的意識が支配階級によつて民衆の頭腦に培養されつゝある現實に於て、此の任務は異常な困難を伴ふ。この困難を克服せんとはせずして、此の困難の前に屈服し、否進んでかゝる偏見を擁護せんとする事──そこにこそ吉川氏等のファシズムへの轉向がある。(第四章第三節註一參照)

二、インタナショナリズムの發展

インタナショナリズムの原則的立場は右によつて明かにされたと思ふが、マルクス主義者は一切の國際問題を右の見地から解剖し、之に理論的實踐的解決を與へる。然し乍らそれは決して原則の機械的適用であつてはならない。マルクス主義者は何よりも現實の具體的分析を重んじる。

さればインタナショナリズムの根本見地は常に同一であるとして

も、その適用は時代と共に異り、又發展せざるを得なかつた。

（一）

先づ此の原則を最初に確立したマルクスの時代に於ては、それは如何様に無産階級の指導原理となつたか？

當時社會主義革命といふ事は未だ現實の問題となつてゐなかつた。西歐社會に於ける當時の中心問題は、封建的遺制の撤去、ブルジョア的國民國家の建設であつた。一八四七――八年全歐洲を席捲した革命の波は實にかゝる目標の下に行はれ、又その後の幾多の戰爭も多くは、被壓迫國民の國民的統一の熱望に起因したのであつた。

偖てインタナショナリズムの見地は、之に如何なる態度をとる事を命じたであらうか？これらの革命の徹底的なる支持、被壓迫國民の國民統一運動（波蘭獨立運動、ガルバルジの伊太利獨立運動等）の積極的なる援助こそが、當時のインタナショナリストの、從つて又各國の無産階級の當面の任務とされたのである。國民的障壁を否定する國際主義者が、國民獨立運動を支持するといふのは矛盾ではなからうか？否。蓋し完全なるブルジョア的民主的共和國の中に於てこそ、資本家階級と無産階級との階級鬪爭は最も赤裸々に發現し得るのであり、此の意味に於て民主的共和國は無産階級が、、、、、を獲得する爲の、不可避の過渡段階であるからである。（註一）

マルクス主義者は運動の現實を忘れないと共に、しかもその全將來の見透しの上から、その[illegible]。マルクスに一八四八年[illegible]の

如く述べてゐる、

『××××者は勞働者階級の直接の目的の達成の爲に、當面の利益の擁取の爲に鬪ふ、然しながら彼等は、現在の運動に於て又此の運動の將來を代表し、之を考慮に入れる。』

『彼等は如何なる瞬間に於ても、勞働者階級の中に、資本家階級と無産者階級との間の敵對的對立の、出來るだけの明確なる認識を注入する事を斷じて中止しない、かくする事によつてドイツの勞働者をして、他の多くの手段と並んで、資本家階級が優越的地位を占めると共に必然的に導入せざるを得ない社會的政治的條件を、資本家階級に向つて逆用せしめ得んが爲であり、又獨逸に於ける反動的諸階級の凋落と共に、資本家階級それ自身に對する鬪爭の開始を可能にせんが爲である。』（des Manifest）

當時マルクスは、萬國の勞働者の團結、協力的活動に、右の如き具體的方向目標を指示した。否、彼はかゝる進歩的意義を有する戰爭をも否定する抽象的な人道主義を强く排斥したのである。かくて一八六五年に成立した第一インタナショナル（國際勞働者協會）の歷史的任務は、第一に、これに加入せる雜多なる革命的分子（無政府主義的小ブルジョア）と共に、當面の革命的任務の爲の國際的協力の紐帶を形成する事にあつたのであり、かゝる鬪爭の過程を通じてマルクスは、これら雜多なる分子に對立して、『勞働者階級の直接の目的の達成の爲』の現在の運動[illegible]

對する明確なる見透しを樹立しようとしたのである。(註二)

かくて鬪爭の展開と共にマルクスとプルードン、マルクスとバクーエン、マルクスとラッサルレとの間になされた激烈なる理論鬪爭によつて、無產階級の眞實の變革的理論が次第に明確に樹立されて來た。

(註一)『資本家社會そのものから生ずる鬪爭は、、、、、はれねばならぬ。かゝる、、は說得して片づけられるべきものではない。最善の國家形態とは、社會的矛盾が××によつてのみ解決せられ得る、從つて換言すれば、唯人工的な尤もらしい手段によつて片附けられない形態である。最善の國家形態とは、矛盾が公然たる鬪爭に於て衝突し、かくして解決に到達する所の形態である。』(マルクス、新ライン新聞一八四八年六月二十八日)

(註二)しかし資本主義の勃興期に於ては絕對に正しかつたかゝる戰術を、今日の段階——社會主義的、、、、——に適用せんとするならば、それは絕對に誤りである。所謂折衷主義者の大衆獲得論はかゝる誤謬に立脚するものと思はれる。

(二)

第一インタナショナルの活動は一八七一年のパリコンミューンに於て最高潮に達した。就中記憶すべきは、その數ケ月前普佛戰爭の勃發するや(一八七〇年七月十九日)その王朝的性質の故に、(卽ちそれはボナパルト家とホーヘンツオルレン家との王朝的野心の衝突であり、何等國民的性質を有してゐない、といふ理由を以て)、各國の戰鬪的勞働者が一層に之に反對した事である。殊にマルクスを動かしたのは、戰爭の勃發に際して、フランスの勞働者とドイツの勞働者が公然と握手した事であつた。彼はいふ、

『公的フランスと公的ドイツとが兄弟殺しの爭鬪に入つた正しくその時に當つて、フランスの勞働者とドイツの勞働者とが平和と友愛のメツセージを交換したといふ事實、過去の歷史に於て比類なき此の偉大なる事實こそは、よき將來の展望を開くものである。』(第一インタナショナルの宣言——一八七〇年七月二十三日)

だが此の紛亂の中から一八七一年三月パリーに打ち立てられた最初の勞働者國家が、客觀的には經濟的條件が充分に成熟してゐなかつた爲と、主觀的にはその原動力たりし勞働階級の間に、、、、、が充分に浸透、確立されてゐなかつた爲に(實際そこにはプルードン主義者ブランキスト等が大なる勢力を占めてゐた)、僅に三ケ月にして瓦解するや、次いで到來したものは暗黑の反動時代であつた。かくて公然たる存在としての第一インタナショナルはその後數年にして消滅し、フランスに於ても、ドイツに於ても、勞働者階級の××的勢力は全く窒息せしめられ、××の波は再び引き退いてしまつた。

それは實際資本主義の『安定』せる時代であつた。此の安定を通じて西歐の資本主義は隆々たる發展を遂げていつたのである。だが資本主義的『安定』の進行は同時にその內在的矛盾の發展を意味する。此の內在的矛盾はやがて公然たる矛盾に迄發展せずには居られない。

矛盾は最初勞働組合の急速なる成長となつて發現した。遂に機は成熟し、一八八九年七月十九日バスチーユ占領の百年祭を期して、各國のマルクス主義者の大會がパリーで開かれ、十九ヶ國の代表者三百九十九名が出席した。これが卽ち第二インタナシヨナルの誕生となつたのである。

だが我々がこゝで注意しなければならないのは、第一インタナシヨナルの使命が、成熟せる資本主義が舊政治關係を、、して自らの支配を確立せんとする動亂期に際して、その革命的事業の、、と同時に、眞實の無産階級的任務を確立宣傳する事にあつたとすれば、第二インタナシヨナルは資本主義の繁榮期に生れたといふ事である。從つてもはやこゝでは諸國の國民的統一運動を促進することはその直接の一般的任務たり得ず、今や社會主義を弘布し、現實に社會主義の勢力を扶殖するといふ事が直接の問題となるに至つた。而して第二インタナシヨナルは、無政府主義者と完全に分離する事によつて、此の極めて重要且つ有用な仕事を或る程度に於て成就したのである。

だが同時に、それが資本主義の繁榮期に生れたといふ特徴は、これに一つの危險なる道を準備した。それは勞働貴族、勞働官僚の發生であり、之と平和主義的な小ブルジヨア的知識階級との結合である。こゝに日和見主義の發生の根據がある。かくて第二インタナシヨナルの第二の任務は、此の日和見主義に對する果敢なる鬪爭、眞實のマルクス主義を[illegible]にはならなかつた。而して第二インタナシヨナルはあらゆる機會を通じて此の任務をも或る程度に於て成し遂げて來たのである。

然し乍ら注意しなければならぬのは、當時これらの活動が、西歐の多くの國に於て、專ら合法的に公然となし得られたといふ事實である。これはこれらの西歐のブルジヨア民主的國家に於て資本主義は未だその危機に當面せず、從つて階級對立は尖銳化せず、從つてブルジヨアデモクラシーによるブルジヨア獨裁が、未だ今日の如く露骨に發現する必要がなかつたといふ事を意味する。此の事は一方に於て、マルクス主義者の活動に對して最も有利なる事情を形成すると共に、他方に於て彼等の間に合法性に對するフエテイシズムの思想を培養し、やがて必然に來るべき危機、鬪爭の尖銳化、ブルジヨア獨裁の具體的發現、合法性の剝奪の時代に處すべき準備を缺かしめるといふ危險を意味してゐた。第二インタナシヨナルの中に孕まれてゐた此の危險なる方向が、遂に一九一四年の世界戰爭の勃發と共に、現實となつたのである。

彼等は一八八九年以來一九一二年のバーゼル會議に至る迄約十回に亘る各大會に於て、繰返し〳〵無産階級の正しき國際的任務を決議したにも不拘、一度宣戰が布告され、軍事檢閲制度が敷かれ、無産階級の國際的任務に關する從來の一切の決議の非合法性が宣告さるゝや、日和見主義分子は直ちに公然と排外主義に發展し、合法性に對する事[illegible]

せず、空虚なる國際主義の假面の下に、ひたすらに排外主義との妥協を策し、遂にバーゼル大會で宣言せられた正しき國際的任務を裏切り、軍事檢閲に屈服してしまつた。かゝる軍事檢閲こそは、デモクラシーの蔭にかくれたブルジョア獨裁の最も露骨なる表現であるものを。

第二インタナショナルはか樣にして崩壞した。

（三）

第二インタナショナルの崩壞と共に、理論的にも實踐的にもバーゼル大會の決議を遂行しようとした眞實の左翼は、チンメルワルドに會合し（一九一五年）、次いでキーンタルに會合し（一九一六年）、第二インタナショナルより斷乎として分離し、新インタナショナルを樹立すべきことが決議された。

かくして第二インタナショナルが資本主義の平和的發展期に成長したのに對し、第三インタナショナルは、資本主義の沒落期に面して生れ、こゝにそれは、第一のでもなく、第二のでもない特殊なる具體的任務をもつ。而してそれは一九一九年モスコーに創立された第三インタナショナル第一回大會に於て次の如く規定された。

『新國際勞働者協會（インタナショナル）は、資本主義の××、プロレタリアートの××及び國際サヴエート共和國の建設、階級の完全なる××、社會主義の實現といふ、單純な目的の達成に向つて努力する諸國の勞働者の間の、、、、を組織せんが爲に樹立されたものである。』

會て——第二インタナショナルの時代に於て——、資本主義の××といふ事が、それのみが眞實に一切の階級を解放すべき目標としてひろく大衆の間に宣傳弘布せられた。然しそれは未だ現實の問題とはなり得なかつた。然るに今や第三インタナショナルにとつては、これが現實の『行動』の指針となるに至つたのである。

而して資本主義の沒落期に於ける國際的無產階級のかゝる任務の遂行は、唯鐵の意志と訓練とを有する、その目的の爲にすべてを犧牲にし、而して排外主義日和見主義に對して斷乎として鬪爭しうる人々の强固なる組織的結成によつてのみ可能とされるであらう。こゝではもはや共同的鬪爭を通じて段々と白鳥の本體を現してゆくといふ戰術は問題たり得ない。否、論理的には却つてその逆の道行きをさへとらねばならないのである。さればこそレーニンは言ふ、

『インタナショナルは、今日の困難なる時期に於て、、、、によつてその社會主義的國際主義（インタナショナリズム）の、、、、、、の出來る人々、即ちその、、、、して自國の政府及び支配階級に向つて「第二番目に」（ブルジョアジーの挑戰に應じて、といふ意味）××する事の出來る人々の接近——始めは單に精神的の、次いで組織的の接近に至る——に於て成立する。これは樂な仕事ではない。それには充分なる準備と多くの犧牲が必要であり、又屢々失敗をも伴ふ。然し正しくそれが樂な仕事でなければこそ、我々は、なさんと欲する人々のみと之をなすべきであり、社會排外主義者並びにその支持者との完全なる分離に對して躊躇すべき

ではない。』(レーニン『死せる排外主義と生ける社會主義』(一九一四)

(四)

共產黨宣言に於てマルクスが萬國の勞働者に向つて宣言して以來、インタナショナリズムの根本精神は一貫して變らない。然し乍らその具體的任務はその後八十年の間に右の如く變化した。そしてマルクスによつて理論的に見透しとして確立されたものが、今や現實の問題になり來つたのである。

我々は今そういふ時代に當面してゐる。

三、日本無產階級に於ける國際意識の成長

以上に於て私は、無產階級の國際主義(インタナショナリズム)とは何であるか、又それはその國內的任務と如何なる連關をもつものであるかを、並びに特にそれが現在の狀勢の下に於て如何なる具體的形態をとるかを、一般的に略述した。然し乍ら、それが各國の無產階級を把握し、その鬪爭を現實に指導しうる爲には、種々なる內部的、並びに外部的條件を必要とするであらう。

私は次に日本無產階級の國際意識發展の過程を少しく辿つて見たい。

(一)

日本が島國である事、先進資本主義國の虎視眈々たる中に近代的中央集權的資本主義國として成立したといふ事實、國家に關する種々なる、、、、、、、、、、、、、に迄採用されてゐるといふ事——それらの事情が相まつて、日本人の民族意識を特に強度化してゐるといふ事實は、我々が常に忘れてはならない事柄である。此の強固なる民族意識の前に雄々しくも國際的精神の最初の鐘を打ち鳴らしたのは、文獻によれば明治三十四年となつてゐる。卽ち同年五月二十日片山、幸德、木下、河上、西川、安部等によつて創立され、直ちに禁止された社會民主黨の創立宣言の冒頭には、『人種差別の異同に不拘人類は皆同胞なり』といふ主張が揭げられてある。次いで日露の風雲漸く急となるや、內村、幸德、堺、黑岩等相協力して、萬朝報紙上に各々非戰論を唱へて、當時の民衆を啓蒙した。やがて萬朝報の變節するに及び、堺及び幸德は平民社を設立し、平民新聞を發刊し、こゝに非戰論の陣をしく事となつた。

その宣言の一節に曰く、

一、自由、平等、博愛は人生世に在る所以の三大要義なり、

一、吾人は人類をして博愛の道を盡さしめんが爲に平和主義を唱導す。故に人種の區別、政體の異同を問はず、世界を擧げて軍備を撤去し、戰爭を禁絕せん事を期す。

かくて打ちつゞく禁止、暴壓の間を屈する事なく勇敢なる啓蒙運動を續けたが、中にも遠く西亞の社會民主黨との間にメッセージが交換された事、アムステルダムに開かれた第二インタナショナルの第六回大會席上に於てプレハノフと片山潛とが感激の握手を交した事は永久に

忘れる事の出來ぬ事實であらう。

平民新聞より社會民主黨に發せられたメッセージは次の如く述べてゐる。

『(前略)社會主義者の眼中には人種の別なく、地域の別なく、國籍の別なし。諸君と我等とは同志也、兄弟也、姉妹也。斷じて鬪ふべきの理あるなし。諸君の敵は、、、、に非ず。實に今の所謂、、主義也、、、主義也。我等の敵は、、、、に非ず、而して又實に今の所謂、、主義也、、、主義也。然り、、主義と、、主義とは、諸君と我等と共通の敵也。云々』

同紙は約一ヶ年奮鬪を續けた後、遂に發行を停止された。

だが右に述べた所によつて明かに察知される如く、當時の國際主義は寧ろ平和主義に近く、勞働者階級の歷史的使命の立場が沒却されてをり、從つてその花々しき國際的運動は、國內的任務と有機的な結合をなしてをらない。然し乍らそれは、當時國內に於ては政府の妨害と相まつて勞働者階級の組織が少しも發展して居らず、他方に於てマルクス主義の理論的把握がなほ極めて幼稚であつた狀勢に於てやむを得なかつた事といはねばならない。それにも不拘、その啓蒙的意義は永久に忘れ難きものであらう。

(二)

次いで幸德事件以來長い反動の時代が到來し、一切の自由なる言論は封鎖された、だが歐洲戰爭以後の駸々たる日本資本主義の發展に伴うて急激に增大した勞働階級は、先進勞働者の思想的影響と、物價騰貴による生活困難の影響の下に、自然發生的に結合し始め、こゝに新しい運動の展開の客觀的基礎が作られていつたのである。

此の間大正四年、五年の兩年に渡り、友愛會の鈴木文治氏二回渡米し、米國の勞働組合の大會に出席し、日本勞働者を代表して挨拶を述べたが、此の事は、反米熱の高かつた當時に於て、日本の勞働者階級を鼓舞し、その國際意識を喚起するに對して、少なからず貢獻する所があつた。それは第一回の渡米後友愛會の會員が、六千五百名より一萬百名に增加し、第二回渡米後更に二萬に增加したのによつても察知せられる。(數字は赤松克麿氏『日本勞働運動發達史』による。)

だが當時の國際意識は、大正三年の世界大戰爭に對しても、大正四年の對支二十一ヶ條要求事件についても、更に大正七年のシベリア出兵に際しても、勞働者階級の立場よりする何ら强力なる運動を起し得なかつた程に低いものであつた。蓋し、未だ客觀的乃至主體的條件が殆ど成熟してゐなかつたのだ。

(三)

日本に於て勞働者階級の間に國際意識を强烈に浸透せしめるに與つて力のあつた最初の重大なる事件は、蓋し大正九年五月二日より始めてメーデー示威運動が行はれる事となつた事であらう。此の日上野公園に參加せる者十五組合五千人、これより以後全國各地に於て、年に增す盛大さを以てメーデーは祝はれ、それは勞働者階級の頭に、國際

的連帶の意識を深く植ゑつける事となつた。

（四）

次いで記憶すべきは、大正十一年のメーデーに於て始めて『勞農ロシア承認』のスローガンが採用せられた事であらう。これより各組合の大會に於て――官業勞働組合に於てすら――、これが議題となるに至つた。又此の頃『前衛社』の發起によつて、『ロシア飢饉救濟』の運動が起され、社會主義諸團體、勞働團體及びブルジョア急進分子の全國的共同戰線によつて非常な成功を收め、更に七月よりは長春に於ける日露交涉を前にして『對露非干涉同盟會』の成立を見た。

十一月にはロシア革命第五週年の記念會が全國各地に催され、雜誌『前衛』『無産階級』及び『勞働新聞』は當日號外を發行した。

これらの事件は相まつて、勞働者の意識に單なる國際的連帶の意識から進んで、國際的解放の任務の自覺を深めるに與つて力があつたと思はれる。

尙啓蒙的文獻としては當時雜誌『前衛』又その後身たる『赤旗』にインタナショナル欄の設けられた事も、注目すべきであらう。

（五）

かく勞働者階級の意識が高まり、殊にロシア革命の成功に刺戟を受けて、未だ當局的ではあるとはいへ、眞實の意味のインターナショナリズムの目覺ましく浸透されゆくのを見て畏怖した政府に、大正十二年過激法案を提出したのを始め、同年六月所謂共産黨事件を[illegible]いて七月『名古屋共産勞働黨』、十月『群馬青年共産黨』、翌年三月『野共産黨L・Y・L團』等の檢擧、震災當時に於×××人並びに社會主義者×××、反動の魔手は至る所に荒れ狂つたのである。

政府のかゝる狂暴は、意志弱き指導者の一部の意氣を著しく阻喪せしめ、急速にその改良主義的轉向を促進し、又他の一部をして此の極右的傾向との妥協に奔走せしめるに至つた。彼等は先づ妥協して、漸次マルクス主義の『白鳥』の卵を孵化してゆかうといふのであつた。

『、、によつて、その社會主義的國際主義の、、、、の出來る人々、即ちその、、、、して自國の政府及び支配階級に向つて「第三番目に」××する事の出來る人々の精神的、次いでは組織的接近』（レーニン）といふ事は彼等の問題となり得なかつた。世界歷史の新しい時代が決定する此の困難なる（それは日本資本主義の抱合せる封建的政治形態により二重に困難とされてゐる）國際的任務は、彼等日本の『戰鬪的』マルクス主義者によつて遂に忘れられてしまつた。

我々はレーニンの言葉をも一度思ひ出さう、

『正しくそれは樂な仕事ではない。それには充分なる準備と多くの犧牲が必要であり、又屢ゝ失敗をも作ふ。然し正しくそれが樂な仕事でなければこそ、我々はなさんと欲する人々のみと之をなすべきである……』

而して大正十三年末頃より果敢に展開された所謂理論的鬪爭こそは、此の困難なる任務に對する不可避的の準備の過程である。それは

同じく日本の歷史の必然により強要された協同戰線黨の成立を前にして、又それと同時に行はれねばならなかつたが故に、運動上幾多の混亂を呈したにも不拘、しかも此の準備的事業は着々として成功し、次第にマルクス主義的要素の昂揚展開を見るに至つた。續いて第二回大會以後に於ける勞働農民黨の活動、金融恐慌以來の工代運動、從業員大會、五法案獲得運動を通じて展開されたるマルクス主義的要素の目覺ましき鬪爭は、今や彼等の、單なる精神的接近より進んで組織的接近をも可能とされ得るに到つたのである。

主體的條件のかゝる成熟こそは、今や日本の無產階級が、正しき國際的自覺の上に、『國內政治の狹隘なる範圍にとゞまる事なく、』進んで國際的任務に就き得るに到つた事、單なるインタナショナリズムの啓蒙より、進んでその現實的、、の段階に到り得た事を意味する。

然らば日本の無產階級は、直接に如何なる國際的任務を負擔する事を餘儀なくされてゐるか？

之を論ずる前に私は簡單に、大正十三年以來の此のあわたゞしき方向轉換の過程に、展開された日本無產階級の國際的活動の跡を瞥見しておきたいと思ふ。蓋しすべての運動は過去との連絡なくしてはなし得られないからである。

（六）

大正十三年度に於ては、さして注目すべき事件はなかつた。大正十四年に至つて、支那に於ける勞働者の運動が急速に進展し、遂に上海に於ける南京路事件を契機として、一大民族的反帝國主義運動を勃發せしめるに至つた事は、日本の無產階級に非常な衝擊を與へた。既にロシアに於て碎けた帝國主義の鎖が今や支那に於て第二の破碎を見るのではあるまいかといふ豫感が本能的に感じられた。

さればこそ當時六月十日東大學生有志の主催になる上海事件批判演說會は警視廳の手で禁止され、更に東大法學部三十番教室に於て支那罷業批判演說會として開かれることゝなつたが、これが『、、、、が不穩だ』といふので中止を命ぜられるに至つたが、これは如何に政府が支那勞働者の反抗の國際的意義を、、、、ゐたかを示すものであらう。

なほ同年五月二十四、五の兩日にわたつて神戶に開かれた評議會創立大會に於て『國際勞働組合提携を提唱するの件』の可決された事も注目に値するであらう。

九月中旬、勞農ロシアの勞働組合代表レプセ氏一行が日本を訪れたが、一行は日本の戰鬪的勞働者階級の熱烈なる歡迎を受け、主要驛々には、官憲の暴壓をおかして、勞働者が雲集し、日露勞働者のかたい握手が交された。就中二十七日一行西下の途次、京大社會科學研究會の會員十數名が代表を驛に迎へ、メッセージを手交せんとして、檢束された事、又同じく研究會員鈴木安藏氏が代表の列車にとび入り、大阪迄同行し、京都の勞働者の鬪爭的意志を傳へた事は、未だ世間の記憶に新なる所であらう。

なほ本年朝鮮の水害並びに飢饉救濟の一大運動が起された、(尤もこれは單なる同情運動以上に出で得なかつたが)。

續いて日本無産階級運動發展史上の一大記念標たるべき『無産者新聞』が同年九月十五日に發刊されて以來、每號國際問題に關する啓蒙的記事が掲載されるに至つた事は、無産階級の國際的運動の發展を見る者の忘るべからざる所である。

然しその多くの記事は主として報導的に取扱はれ、日本無産階級運動との具體的聯關は未だ問題となり得なかつたが、就中朝鮮の問題が殆ど取扱はれてゐない事は當時の國際意識がなほ極めて貧弱的たりし事を示すものであらう。

大正十五年五月英國に於ける空前の總同盟罷業の勃發は、前年の支那の大罷業と共に、日本の無産階級に再び大なる刺戟を與へ、激勵電報の發送、基金運動などが計畫されたが、當時左右兩翼對立抗爭が激烈を極め、運動方針、運動の分野等安定せず、爲に充分なる運動の展開を見る事が出來なかつた。

(七)

然るに大正十五年末所謂マルクス主義的要素の全線的展開と相まつて、日本無産階級の國際意識も亦目覺ましき進展を遂げるに至つた。

それは直接には、支那國民革命の急速なる進展によつて條件づけられたものである。當時無産者新聞は每號執拗に支那革命の進展を報導し、その意義を啓蒙し、日本無産階級の任務を明かにした。昭和二年一月より創刊された雜誌『政治批判』第一號には、『支那に注目せよ』(吉川春雄氏)なる論文が掲載され、同誌第二號には『支那國民革命と日本プロレタリアートの戰略』(三田薫氏)なる論文が發表され、更に雜誌マルクス主義四月號には『支那國民革命と我が無産階級の任務』(阿部俊吉氏)が卷頭を飾つた。又同じく昭和二年二月より雜誌『インタナショナル』が創刊された事は國際意識の發展上極めて重大なる意義をもつてゐる。同誌は殆ど每號支那革命に關する各種の理論的分析を提供し、以て日本無産階級の意識を深めた。

なほ本年支那に於て第二回の會合を開かれる事となつた太平洋勞働會議に對して、日本の勞働組合より代表の派遣されるに至つた事は日本無産階級の最初の具體的な國際過程への進出を意味する。

か樣にして漸く強烈なる國際主義(インタナショナリズム)の意識が勞働者階級の間に喚起された狀勢の下に於て、支那革命鎭壓の爲、諸帝國主義列強の軍艦が上海に派遣されたのである。こゝに『支那より手を引け』『對支非干涉』の聲が、勞働大衆それ自身の聲として各地に湧き起つて來た。勞働農民黨と日本勞農黨とは共同して五月六日神田青年會館に對支出兵反對演說會を開き、更にその運動は、中途日勞黨の脫退にも不拘、對支非干涉全國同盟の成立に迄發展した、(五月二十四日)。

(八)

(イ)全國同盟の成立と前後して、田中大將による日本の山東出兵が行はれ、更に六月末より東方會議が開催された。[illegible]

行はれた。此の間對支非干涉同盟は殆ど寧日なく活動し、數十萬のリーフレツト、ニユース、ビラ、ポスターが勞働者農民の間に配布され『日支勞農大衆團結せよ』といふ中心スローガンは工場に農村に、、政府に向つて奮起しつゝあつた勞農大衆の腦裏に强く印刻されるに至つた。以上が對支非干涉同盟の運動の發展の第一段階である。

(ロ)三ケ月間の强烈なる宣傳運動の結果は、遂に七月二十六日支那視察團派遣運動の提唱となつて結實した。その檄の一節に曰く、

『我々民衆は我々自身の眼と耳で支那の眞相を知らねばならぬと同時に、支那出兵こそは我が國一部支配階級の利益擁護の爲に行はれた全民衆の意志を蹂躙せる行爲なる事を支那民衆に傳へねばならぬ。』

强烈なる宣傳運動の後遂に八月十六日代表選出全國協議會が牛込矢來クラブに開催され、日支勞農大衆の提携を誓つて、勞働者、靑年、朝鮮、水平社、俸給生活者、婦人、市民、學生各層より夫々一二名宛の代表者が決定され、これによつて勞働者の國際的關心は異常に喚起されたのであつた。就中注意すべきは次いで八月二十六日の出發を前にして、『支那勞農大衆に訴ふ』『、、、、、、』等のメツセージが諸處の團體に於て作成され、これが代表に託された事である。前者は主として『對支出兵は日本、、、、の意志ではない』といふ事を强調したものであり、後者は、派遣軍兵士が酷署と風土の關係から猛烈なる傳染病に苦しめられてゐる事に同情し、、、、、、、、かを反問したものである。出發當日若しくは前日より代表の悉くが檢束、拘留若しくは禁足されたので、渡支の目的は果さなかつたが、その宣傳的意義は永久に沒却されるべきではない。

以上が對支非干涉同盟の運動の發展の第二段階とも稱し得られるであらう。

(ハ)次いで九月二十五日、、侵略反對デーが實行された。十數萬のビラ、ポスターが主要工場に配布されたが、既に滿洲の排日運動が鎭壓されてしまつてゐた爲か、視察團の際程の反響をよび起さなかつた。

此の頃より朝鮮京城に所謂朝鮮共產黨事件公判が開始され(九月十三日)、全市の警官一千名動員され、法院構內、、、、、、、、、、らさると報ぜられ、九月十五日の第二回公判以後は傍聽さへも禁止された。此の事件は全朝鮮の民衆の注意の的となつてゐたが、當局の此の態度は强く朝鮮民衆を刺戟し、日本に於ては關東在住有志の朝鮮人の手で九月十七日『朝鮮總督、、政治反對關東地方同盟』が組織され、以來解散檢束、拘留に關する事なく、ビラ、演說會等の運動が續けられてゐる。對支非干涉同盟は直ちに之と共同委員會を形成し、暗黑公判公開を叫び、大阪では前記二團體の外、勞農黨、評議會、婦人、靑年外數團體の共同委員會が形成され、これを機として從來殆ど看却されてゐた朝鮮問題に關する注意が猛然と喚起された。

九月二十五日には右關東地方同盟主催、勞農黨後援の下に、演說會が開かれ此の時には解散と共に大示威運動が行はれ、續いて、、、、事件が曝露されるに及び、朝鮮の問題は愈現實の問題として、日本

の勞働者の間に問題とされるに至つた。

最近の日本無產階級の國際意識が、支那の問題より發展して、朝鮮の問題をも問題として具體的にとり上げ得る迄に至つた事は、それが抽象的な當爲主義より、數步前進せる事を意味するものである。

(二)日本無產階級の國際意識は、對支非干涉同盟の不撓不屈の努力により、遂にさるロシア革命十週年記念の運動を機として更に一大飛躍をなしたといふ事が出來る。運動の詳細なる記述は餘り最近の事であるからこゝには省く。詳しくは無產者新聞十月五日より、十一月十五日に至る各號を研究されたい。

此の運動のスローガンは次の如きものであつた。『勞働者と農民の國ロシアを守れ、』『支那の民族解放運動を支持せよ』『植民地の、、政治を廢止せよ、』『帝國主義戰爭の危機と鬪へ』

此の運動は、支那より朝鮮にと、今や、漸く具體化し來りつゝある日本無產階級の國際的運動に、その世界的任務の明確なる意識を浸透せしめたる點に於て重大なる意義をもつものである。

以上の如き日本無產階級の國際的運動の發展は、マルクス主義的要素の昂揚展開の主體的條件の成熟と相まつて、今や、彼等が、眞實のインタナショナリズムの見地より、その國際的任務を、單なる啓蒙的運動としてゞはなく、一の大衆的運動として、現實に遂行しうるに至つた事を意味するものである。

四、日本無產階級の國際的任務

然らば日本無產階級の國際的任務は何か?

それは既に一般的には、第一章に於て述べた資本主義の現段階に於て國際無產階級に共通に課せられた任務によつて規定されてゐる。然し此の一般的任務それ自身も亦、その根本的立脚地は同じであるとしても、特殊なる世界形勢に面して、特殊なる規定を受けねばならぬ。

世界無產階級の當面の任務は何か?

(一) 當面の國際的情勢

今日の國際情勢の主たる特徵は、一方に於ては帝國主義諸列強とサヴエート聯盟との關係が、他方に於ては支那に對する帝國主義の軍事的干涉が、極度に緊張してゐる事にある。

帝國主義とサヴエート聯盟との關係の緊張は何に基くか?それは一方に於て、最近、合衆國、日本に於てのみならず、戰爭によつて弱められた歐羅巴に於ても、資本主義が經濟的にも政治的にも强大になつて來たにも不拘、他方に於ては、サヴエート聯盟に於ける社會主義的建設が益々大なる成功を收め、支那國民革命が益々發展し、植民地民族の反抗が益々激成され、且つ歐羅巴のプロレタリア大衆が著しく左傾化しつゝあるといふ事實に基く。

各國の資本主義の經濟的政治的安定の、並びにサヴエート聯盟の强大化の具體的事實については、本誌に於て他の諸家が詳しい記述をさ

れるといふ事であるから、こゝには說かぬ。兎もあれ、帝國主義國にとつて、サヴエート聯盟といふ忌はしき存在が消え失せてしまふ迄は、その安定は決して確固たりといふ事は出來ない。しかもサヴエート聯盟は隆々として成長し、諸國の解放運動に對して强力なる××的影響を及ぼしつゝあるではないか――こゝに最近の對立の特相がある。

又此の點に十月革命後に於ける帝國主義國とサヴエートロシアとの對立の尖銳化と、今日のそれとの間の本質的相違がある。蓋し當時にあつては、世界戰爭並びにそれに續く諸國の革命の勃發によつて弱められ、荒廢した資本主義が、新たに生れた、同じく、弱々しい、未だ强國となつてゐないプロレタリア國家に對して打擊を與へる事が問題であつたのであり、又その後に於ける對立は主として經濟的競爭の形態をとつてゐたのであつた。

全く性質を異にした、此の二個の安定せる力――その對立は今或る程度に於て均衡關係を示してゐる。

帝國主義的戰線の側に於てロカルノ以來種々なる安全保障條約によつて、特には英國のサヴエート包圍政策によつて、帝國主義諸國間に、ルーズではあるが、一種の對露的聯盟が形成され、サヴエート聯盟に對する共通の利害により、相互の間の政治的對立が緩和されてゐるにも不拘、此の安定は何に基くのであるか？それは第一には、各國の勞働者階級の勞農ロシアに對する信賴が益々强まつてゐる事、第二は、各國の並びに植民地國の勤勞大衆の勞農ロシアに對する同情と支持の念が愈々高まりつゝある事、而して第三には、特に西歐の小市民の間に於て、未だ遠からざる世界大戰の苦惱の記憶生々しく、非戰的氣分が濃厚な事、――に基く。

だが此の均衡を破らんとする力は、今日二つの方向に於て働いてゐる。

第一は、沒落の過程にある英帝國の狂氣じみたサヴエート聯盟に對する挑戰である。北京大使館搜索、アルコス・ハウス事件、英露斷交、ポーランド公使暗殺事件、等々に現れた英帝國のあせり氣味を見よ。だが均衡を破らんとする此の努力は、サヴエート聯盟の一貫した平和政策により、見事に失敗してしまつた。しかしそれが完全に失敗してしまつたといふ保證は與へられてゐない。更に英國は數倍の努力を以て此の平和を攪亂せんとする挑戰的活動を開始せんが爲、國內的、國際的準備を進めてゐる。最近に於ける保守黨の全政策の基調はこゝにおかれてゐる。

此の國際政局の均衡關係を破壞すべき第二の力は、支那革命の進展である。支那革命の完全なる成功は、帝國主義諸國の利潤の源泉を奪ひ、更に又その影響を廣汎なる他の被壓迫民族に及ぼす事により、今日の帝國主義的支配の體系を破壞する事によつて、當面の均衡關係をサヴエート聯盟に有利に展開する力である。さればこそこゝに列國の狂暴なる對支軍事干涉、反革命軍閥の買收、露支連絡の遮斷が、露骨

に開始されてゐるのだ。だがそれにも不拘、支那革命は内部的に着々と勞働者並びに貧農大衆の間に確固たる根を張り、やがてそれは公然たる爆發に迄突進せずにはおかないであらう。

以上が今日の國際的情勢の基本的樣相である。（詳しくは、『インタナショナル』十一月號並びに十二月中旬發行される豫定になつてゐる同誌十二月號を參照されたし。）

（二）　世界無產階級の國際的任務

かゝる情勢に面して、サヴエート聯盟擁護の爲に闘ふ事は國際勞働者階級の絕對的義務である。而してかゝる任務の遂行は、勞働者階級の國內的闘爭の遂行と密接不可離の關係に立つ。

スターリンは言ふ、

『世界の資本家がサヴエート聯盟を粉碎してしまつたらどうなるか？

『暗黑の反動が全資本家國並びに植民地國を襲ふであらう。勞働者階級と植民地民族は粉碎されるであらう。國際マルクス主義の地位はぶち破られるであらう。

『世界のプロレタリアートのサヴエート聯盟に對する支持と同情とが增加し、成長するならば何が起るか？これはサヴエート聯盟に於ける社會主義建設を容易ならしめるであらう。

『サヴエート聯盟に於ける社會主義建設が成就されてゆくならば何が起るか？

『それは各國に於て資本主義と闘爭してゐるプロレタリアートに對する國際資本進展せしめるであらう、それはプロレタリアートの國際的勝利の機會を最高度に增す主義の地位を脅し……我々の國際的勝利の機會を最高度に增すであらう。』（一九二六年、十二月、E・C・C・Iに於ける演說）

右の如き萬國の無產階級の根本的任務は、直ちにその具體的任務を規定する。即ち均衡破壞の第一の因素である、英帝國を盟主とするサヴエート聯盟に對する挑戰に向つて斷乎として闘爭する事、これ第一の任務である。

均衡破壞の第二の因素である支那革命運動を擁護し、之を妨害するあらゆる試みに對して抵抗する事、これ第二の任務である。

此の二つの任務は、平和といふ點だけから見れば、一見矛盾してゐる樣に見える。だが眞實のインタナショナリズムが何であるかを知る者は、それが從つて無產階級が當面する根本的任務が何であるかを知る者は、それが決して矛盾ではなく、國際勞働者階級の歷史的使命の下に統一されてゐる事を知るであらう。

だが均衡關係は何れかの方向に於て、否、恐らくは、先に分析された二つの因素の相互に錯雜せる作用に於て、やがて必然に爆發せずにはおかないであらう――戰爭！帝國主義者のあらゆる欺瞞と虛構にも不拘、それは不可避的な將來である。我々は此の必然性に眼を背けてはならぬ。來るべき戰爭を豫知し、之に對する意識的、組織的準備をなす事――これ國際勞働者階級に課せられた當面せる任務である。

（註）

（註）切迫せる戰爭の危機及び、戰爭に對する準備の具體的な戰術については、左の論文を參照されたい。

『當面の國際情勢』インタナショナル十一月號所載。

『世界戰爭の危機』インタナショナル八月號所載。なほこれは「レーニン主義と戰爭問題」なる單行本の中にも收められてゐる。（共生閣發行）。

『戰爭論』マルクス主義講座第二卷所載（上野書店刊）

（三）日本無產階級の國際的地位並びにその任務

日本無產階級の國際的任務は第一章に於て述べたインタナショナリズムの根本精神に於て、又右に述べた國際無產階級に課せられた當面の任務によつて規定されるのであるが、更にそれが如何なる形態で遂行され得るかは、彼等が占める直接の國際的地位によつて定められねばならぬ。而して後者は又日本帝國主義が全國際的體系に於て占める地位によつて規定せられる。

然らば日本帝國主義の國際的地位は如何？

之を理解する爲に我々は、日本帝國主義の內部的性質そのものについての考察から出發しなければならぬ。之に關して一部の人々によつて日本資本主義の安定が頻りに強調されてゐる。然り、日本の資本主義が經濟的には安定を示し、政治的には封建的遺制と巧妙に結びつく事により、無產階級に對して壓倒的な優勢を示してゐる事は嚴然たる事實である。然し乍ら問題は此の安定が如何なる性質をもつた安定であるかにある。勿論論者も資本主義的安定がもつ不可避的な內在的矛盾については一應語る事は忘れない。だが彼等にとつては『そんな事はわかり切つた事』なのである。かくて此の『不可避的な』矛盾が特に日本の資本主義に於て如何なる性質をもつてゐるか、我々は此の矛盾を如何にして公然たる矛盾に迄發展せしめ得るか、は遂に彼等の問題となり得ない。

日本資本主義の安定に孕まれた矛盾の特殊性を規定する事實は、安定そのものが據つて立つ日本資本主義の基礎が極めて薄弱な事にある。日本の資本主義の根本的弱點をなすものはそれが近代工業たる重工業及び機械工業の基礎を缺いてゐる事にある。ヴアルガはかゝる日本資本主義の特質を規定していふ、

『それは、人工的にこれ迄作りあげて來た所の、そして極めて低廉な勞働力と植民地、、、、、、、の上に立つてゐる所の、著しく投機的性質を帶びてゐる資本主義である。そしてこれこそ戰後の日本の資本主義が恐慌に次ぐ恐慌に遭遇する所以である。』と。（ヴアルガ一九二七年第二半期に於ける經濟及び經濟政策）

かくて日本資本主義の安定の據て以て立つ所の基礎は第一に、國內勞働者の勞働力の低廉なる事であり、第二に、植民地、、、、、、、、、、、、であり、第三に、植民地並びに支那滿蒙の資源及び市場支配である。

かくの如き分析は日本資本主義の所謂安定が如何に不安定な基礎の上にあるものであるかを示すものであり、又それが外部的事情によつて如何に、、し易き地位にあるかを示すものである。

こゝに日本帝國主義の外交政策の根本的立脚地は次の如く規定せられる。

第一、隆々たる社會主義的建設の進行によつて日本の無産階級の成長に異常なる刺戟を與へてゐるサヴエート・ロシアの克服。

第二、既有植民地並びに勢力範圍——滿洲——の無條件的防衞。

第三、支那革命の窒息。

かゝる外交方針の基調は、だが他の帝國主義列强と日本帝國主義との對立を決して妨げるものではない。何故ならば諸帝國主義諸國は反サヴエート政策並びに支那革命の窒息といふ點に於ては共通の利害を有するが、支那の分割といふ點に於ては利害は全く相對立するからである。かくして支那革命窒息政策の成功しえられる限りに於て、又その成功の程度に於て、特に日英米の對立が尖鋭化してくる。こゝに

第四、他の帝國主義的競爭國、特に英國に對抗して、支那の同情をかちえんが爲に、それがブルジョア的範圍に止まる限りに於て、支那國民革命運動を支持するといふ巧妙なる政策が生まれる。、、、、、、、、との緊密なる結合は、かゝる外交方針の具體的なる表現である。

第五に、同時に日本に、英米に對して强力なる軍備を準備し、又此の見地に於て國際外交を日本の有利に展開しなければならぬ。

これに對應すべき日本無産階級の國際的任務は次の如くであらう。

第一、日本無産階級は、特に東方に於ける反サヴエート政策反民族運動の支柱たるべき日本政府の對露外交並びに對支外交に嚴重なる監視を行はねばならぬ。

第二、日本無産階級は、、、、、、、、、、、、の勞農大衆と緊密なる結合を結ばねばならぬ。

以上は日本政府の外交方針の第一、第二、第三及び第四、に應ずるものである。（これらの任務について、これ以上の具體的な規定に立ち入り得ざる事を遺憾とする。）

第三、日本無産階級は勿論萬國の無産階級と結合しなければならないが、就中米國の戰鬪的無産階級との堅き結合は、今や意識的にその具體的な實現の爲に努力しなければならない所である。（註）

これは日本政府の外交方針の第五に應ずるものである。

か様な任務が正しきインタナショナリズムの精神に於て遂行せられる時、日本無産階級は、一方に於て、反サヴエート戰爭並びに帝國主義戰爭の危機と戰ひ得ると共に、戰爭勃發の場合に、之を無産階級の有利に轉化し得るであらうし、他方に於て日本資本主義の安定それ自身の據つて以て立つ基礎を××××××事になるであらう。

（註）日本無産階級とアメリカの無産階級との具體的な結合については從來餘り注意せられなかつたが日本の[illegible]要求として實現し

てゐる事は事實である。かの排日問題の如き、兩者の基本的對立の一個の現象形態であらうと思はれる。支配階級は戰爭の本質を蔽ひ、金融資本の掠奪戰に全民衆を動員せんが爲に、屢ゝ民衆の偏見を利用し得る樣な問題をとらへる。日本の帝國主義者が國民性に關する日本民衆の、、、迷信を利用すると同じく、アメリカの帝國主義者は人種的偏見を利用する。かゝる偏見、かゝる、、は、資本主義組織の續く限り支配階級によつて意識的に存續を强ひられるであらう。無產者階級が支配的地位に上り、資本主義的關係を揚棄する事によつてのみ、かゝる偏見、迷信も亦揚棄されるであらう。（第一章註參照）日本無產階級はアメリカの無產階級と協力して、排日問題によつて民衆の好戰熱をそゝり、民衆の生活破綻の責任を逃れ、或は戰爭の侵略的性質を隱さんとする政府の、、に向つて戰はねばならぬ。

排日問題、移民問題の具體的な分析については、筆者は更に別の機會に詳しく試みたいと思つてゐる。

附記　紙數の制限上、すべての問題が極めて概括的にしか取扱はれ得なかつた事を遺憾とする。なほ、日本に於ける種々なる外交理論の批判、國內に於ける大衆的な國際運動の戰術、（特に無產階級の國際的任務遂行に當りての農民その他の諸層との關係）等は、殘されたる重要な問題である。

追記——本稿は約一ヶ月前に書かれたものであり、その後廣東に於けるサヴェート政權の樹立、露支斷交等の新なる國際的事件の進展があつたが、然しそれらの事件はこゝに展開されたる國際狀勢の一般的方向を益ゝ確證こそすれ、何らそれを修正すべきものではないと思ふから、暫くそのまゝに發表する事とする。

なほ上に日本資本主義の安定を論ずるに當り、筆者は主として國際的觀點より之を見たので、日本の人口の甚大なる部分を形成してゐる農民大衆が今日なほ封建的土地關係の下に縛られてゐるといふ重要なる事實を書きぬかしてしまつたが、これは右の國際的事情と相まつて日本資本主義の基礎を二重に薄弱ならしめるものである。誤解なからしめんが爲に附加へておく。

（一九二七、一二、三〇校正に際して）

アリストテレースの『流通の正義』＝マルクスの其解釋に關する疑（其二）

附　河上博士等譯資本論中或重要なる不正確又は誤謬について

福田徳三

在否諸論の根據となすところである。即ち、氏は、問題の一句を釋いていふ。『これら並にこれにつゞく言葉は、正義には、他に猶ほ一つの種類、即ち、『匡正の正義』があるのみであること、而して、それは、不任意の諸行爲（これを先づ論ずる）に適用せられるのみでなく、同時にまた、任意の諸行爲（諸取引）（これについては、一一三一頁b三十行以下を見よ）にも適用することを、意味してゐる。以下、私の註釋は、如何に、私が、第三の『エイドス』（交換的又は流通的正義）なるものを、認むるを避くるかを、示めすであらう』と。アリストテレース倫理學註解倫敦一九〇〇年刊第二一三頁。匿名者に出づ

さて、右ツェラー、ヒルデンブラント・グラント共にバーネツト四

（十三）

ツェラー及びヒルデンブラントの舉げた兩個の論據の第一は、主として文義解釋に屬するものであるが、其の第二は、單なる文義解釋に屬せず、直ちに、アリストテレース研究の本體に進入するものである。從て、其第一については、極めて、簡單に、而して、其第二については、やゝ立入つて、吟味しなくてはならぬのである。

第一の論據は、グラント氏と相並んで、アリストテレース倫理學註解家として、權威と認められてゐるバーネツトも、其の第二の正義別

學者の文義釋解に對向する反對論は、前掲ノイマン氏の論あるに先つてすでに若干の有名なる學者が唱道してゐるところであつて、私は、ノイマン氏の引用を辿つて、其一々について、新たに商量して見た。其先づ第一に來るものは、中世の有力なる法學者、法理哲學者サムエル・プフエンドルフ1)である。プフエンドルフの説を承繼し、更らに自説を樹たものは、自然法學者、哲學史家たるトレンデレンブルヒ2)である。降つては、フェヒナー氏あり、(書名前出) またプラントル氏(書名前出)がある。

私は、今此等先覺學者の所論を一々玆に引用する必要を認めぬ。唯だ、其等を一括したノイマン教授の言を、其儘引くを以て足ると信ずる。教授曰く『此の第一の論據に對しては次の如く答ふるを以て足れりとする。(此一句のみに就て見れば、論者の解の通りであるに相違ないけれども)直ちに其れにつゞく句に於いて、アリストテレースは、これと全く意味を異にすることを、明かに言明して居る。而して、(これは、ア氏の書に於いては決して稀ならざるところであつて)殊に彼は、其の所論の取扱材料の分類、配合に於いては、議論の進行に從ひ甚だ屢々訂正や修正を試むるものであることを鑑みるときは、(此の文義解釋論は)敢へて重きを置くに足らぬものである』と。(前掲論文五三四頁)

1) Samuelis Pufendorfii, De Jure Naturae et Gentium. Libri octo cum annotatis Jonnis Nicolas Hertii. Editio nova. Francfurti 1706 p. 120 et seq. Lib. I. Cap. VII. § 12 et seq.

2) A. Trendelenburg,,
a) Naturrecht auf dem Grunde der Ethik. 2. Ausgeführte Aufl. Leipzig 1868. § 51.—
b) Historische Beiträge zur Philosophie. Bd. III. 1867. p. 408 ff. Die aristotelische Begriffsbestimmung und Eintheilung der Gerechtigkeit.

因に云ふ、前者は商大書館本(II—2—630)があるが、これは故左右田博士が、其最後の大手術を、受けらるゝに際し、此度は必生を期し難ければ、入院記念にもと、他の數十種の愛藏書と共に、商大へ寄附せられたものにかゝると聞く。

2の一本も、私はこれを、また、博士退院後彼地より到着し、未だ解包に及ばなかつた書中に、これを見出した。

私は、兩書とも、別にこれを見るを得たものではあるが、故博士の遺書中に、博士近時の研究に直接には緣遠しと思はるゝ此等兩書とも、これを見出して、博士研鑽の如何に廣汎なものであつたかを

追想して、感慨實に禁ずべからざるを覺ゆるものである。

第二の論據は、右樣に簡單に取扱ふことを許さない。問題は、實に、アリストテレースの狹義の正義論の全體に亘つてゐるのである。從つて、先づ、狹義の正義論の大要を知つての後でなければ、此の論據の支持すべきであるか無いかの吟味を下すことが出來ない。タトへ、假りに、それを試みるとしても、讀者は、容易に、それを受入れることは出來ないであらう。高橋教授の論文の、到底常人の理解し得ざる底のものである所以は、狹義の正義論其ものゝ解說の支離滅裂より來るものなるを鑑みなければならぬ。否、氏は、ア氏の正義論其ものを、果して、理解して居らるゝものなりや、否や甚だ疑しいのである。

ソコデ、私は、第二の論據の吟味を、姑く後段に讓ることとして、茲に、極めて、簡單に、アリストテレースの狹義の正議論の大要を紹介しようと思ふのである。

（十四）

其れを爲すに先つて、ア氏の正義論殊に其の狹義の正義論は、如何に有力に、中世より近世に至る歐羅巴の法理哲學、並に其れに立脚する經濟學說殊に經濟價値・價格論に重要なる影響を及ぼしたものであるかを一言して置かねばならぬ、マルクスは決して、前人を蔑視して、アリストテレースを發見したものではない。否、彼は、此

世の先覺諸學者の示唆を得たればこそ、其の發見に到達することを得たものと云はねばならぬ。此は決して、彼の學績を小ならしめる所以ではない。却つて、反對に、彼の尋討の範圍の如何に廣汎であつたかを窺知せしめるに足ることなのである。前段本誌一月號一一八七頁に、私が、河上博士譯本並に高畠氏譯本から、其全文を引いて置いたマルクスのアリストテレース評論には、此等諸先覺學者の名を擧げず、直ちに、アリストテレースの說のみをあげてあるからとて、マルクスは、單にアリストテレースのみに就いて商量したものなりと速斷するは、謬れるの甚しいものである。高橋氏は、私が、マルクスから此の長い引用を爲したのを、同氏に對する駁論の爲めと速斷して居られるようである。高橋氏の誤謬を示めす爲めには、其樣な勞を執る必要は、毫もない。右引用は私の此の小さかな論文の中心問題とする箇所なるが故にこそ。私は、長き引用を敢てしたのである。高橋氏の自尊心の過大なる、私の論文の組み立てかたをさへ諒解せらるゝことを妨げたものと見へる。

（十五）

アリストテレースを、最も深く究めた中世の學者は、中世最大の哲學者であり、中世のアリストテレースの稱を、最も適切に値するト
ソ・ダクヰノ私は、從來此名を、トマス・ダキノと訓じ來つたが、一昨年の夏親しくアクヰノ村を訪れて、土地の人々が、一樣にアクヰノと發音することを知つたが故に、今原發音に從つて、本文の如く改めた。であることは、言ふまでもな

いところである。トマソの師アルベルトスは、其出藍の弟子によつて、全く掩はれて仕舞つたと云つても大過はない。（高橋氏は、此關係箇所に於いて（同氏論文三一頁以下）アルベルトスをあげて、トマソには、一言も及んで居らぬ、而も、其アルベルトス說としてあげて居らるゝ一節は、アルベルトス說でも何でもない。其れは、全然ヘリオドロスのパラフラシスを、其儘にアルベルトスが紹介したに過ぎないのである。遼東の豕とは、まさに、此くの如きことを言ふのではあるまいか。）

トマソ・ダクヰノが、アリストテレースの正義論を取扱つたものに、二大雄篇がある、其一は、ア氏のニコマホース倫理學の註釋書であり、其二は、トマソの最大著作たる『神學綜覽』第二部第二篇中に於ける正義論である。

右二書の原名は、左の通りである。

1) In X Libros Ethicorum ad Nicomachum Commentarium. Liber Quintus. De Justitia et Injustitia, de Jure et Injuria, ac ipsarum speciebus, de Aequitate, et Aequo. (Doctoris Angelici divi Thomae Aquinatis Opera Omnia. Studio ac Labore Stanislai Eduardi Fretté. Vol. XXV. In Aristotelis Stagiritae Libros Nonnulos Commentaria IV. Parisiis 1875. pp. 430 et seq.)

此書は一二六六年頃の起草にかゝるものであつて、單行本としての刊本は、不幸にして私は見ることが出來ないけれども、トマソの全集版本には何れも收錄されてある。即ちローマ版（法王ピウス第五世刊と稱する一五七〇―七一年刊行のもの）の第五卷。パルマ版（一八五二―七二年刊）の第二十一卷第一頁以下。ヴイヴェス版（フレッテー編纂一八七一―一八八〇年刊第一版、一八八九―九〇年刊第二版、共に巴里刊行）の第二十五卷第二三二頁以下に收めてある。トマソ全集の最新にして最完全と認められる法王レオネ版（これを羅馬第二回版と通稱す。一八八二に刊行を始め爾來年を閲する四十五年餘の今日に至るも未だ刊了となつてないのである。）には、未だ收錄の運びとなつてゐない、私が插架のものは、此文起草中入手し得た巴里刊ヴイヱス第一版である。仍て其版によつて頁を揭出する。

2) Sancti Thomae Aquinatis Opera Omnia iussu impensaque Leonis XIII P. M. edita Tomus Nonus. Secunda Secundae Summae Theologiae a Quaestione LVII ad Quaestionem CXXII ad Codices Manuscriptos Vaticanos exacta cum Commentariis Thomae de Vio Caietani cura et Studio Fratrum eiusdem ordinis. Romae 1897. pp. 9 et seq.

トマソ一生の最大著述たる此の『神學綜覽』は一二六七年から一二七三年に亘つて起稿せられたもので、此書は諸全集版は勿論、單行本としても、實に無數の刊本が現存通行してゐる。私が插架のもの丈けでも、恐らく十種以上に及んでゐるであらう。而して、佛語譯は、私の

知るところ丈けでも四種あり、今現に續刊中の新譯本もある。英譯はツヒ近年全部刊了し、續いて訂正再版が刊行せられつゝある。ドイツ譯はシュナイダー氏の舊譯本が一種あるのみで、其本は、今日の進歩した學問の要求には應じ難く思はれる。

私は、英譯が未だ全然顯はれなかつた（而して佛譯の一本も見るを得なかつた）今から二十餘年前に、ドイツ舊譯本とアシュレー氏の英國經濟史中の叙述と各種の部分的紹介とを頼りとして、此書中の『ユストム・プレチウム』並に『ウズラ』に關する部分について、若干考證して『トマス・ダキノの經濟學說』なる一篇を公けにしたことがあるが、今『經濟學全集』に收む　當時は、原文を讀みこなす力もなく、見ることを得た關係文獻も、極めて貧弱なものであつて、今日の進歩したトマソ研究の立場から回顧するときは、實に隔世の感を禁じ得ないのである。其後高橋誠一郎教授門下の某氏が、主として、トマソの利子論を研究せられた基督教徴利論考とか題する有益の研究が公刊せられたそうであるが、私は不幸にして、其書を見ることを得ない。高橋教授も亦一二の論文を、此問題について公表して居られるようであるが全く未見に屬する。

私が右に掲げたのは、前掲の最新のトマソ全集たる羅馬第二回版（レオネ版）の書名と其頁數とである。

茲に問題となる『神學綜覽』の第二部第二篇は、一二七一年から一二七二年に亘つて起草せられたもので、其れは、右レオネ版以外の全集では、羅馬第一回版の第十一卷、パルマ版の第三卷第一頁、以下、ヴイヴェス版の第三卷第七一頁以下に收められてある。

今巴里ルチエリュー版『神學綜覽』一覽表 Synopsis Sumptibus P. Lethielleux Parisiis 1924 によつて、關係部分の要目をあぐれば左の如くである。

神學綜覽　第二部第二篇

人間行爲各論

一、信仰について（自一問至十六問）
二、希望について（自十七問至二十二問）
三、慈愛について（自二十三問至四十六問）
四、節制について（自四十七問至五十六問）
五、正義について（自五十七問至百二十二問）

（下　略）

而して、五の正義については、左の如く分たれてゐる。

（第一）正義其ものについて（自五十七問至六十問）
（第二）正義の部分について（自六十一問至百二十問）
（第三）敬神の賜について（百二十一問）
（第四）正義の教訓について（百二十二問）

而して、第一は更らに左の通りに分れる。

（其一）權利について、（第五十七問）
（第二）一般の正義について、特殊の正義について、（第五十八問）
（其三）不正義について、（第五十九問）
（其四）裁判について、（第六十問）
更らに第二は左の如く分れる。
（其一）正義の種類、即ち、『配分の正義』と『流通の正義』とについて（自六十一問至七十八問）
（其二）正義の準全的部分について（七十九問）
（其三）正義の活動部分、即ち附屬的諸德について（自八十問至百二十問）
私の問題とするところに、最も關係の深いのは、右の中其一である。
これは次の如くに分たれてある。
（一）正義の主觀的部分について。此れについて考ふ可き點二あり。
（A）正義の部分其もの。（六十一 六十二問）
（B）正義の反對の諸惡。（六十三至七十八問）
（A）は、左の如く分つ。
甲　流通の正義と、配分の正義との區別について。（第六十一問）
乙　流通の正義の行爲として見たるレスチュチオーネ（補償）について。（第六十二問）
（B）は左の如く分つ。
（甲）配分の正義の反對たる諸惡。即ち人格の揀擇について。（第六十三問）
（乙）流通の正義の反對たる諸惡。之れを不任意的・任意的の二に分つ。
（イ）不任意的。
（天）行爲による。（六十四問至六十六問）
（地）言語による。（六十七問至七十六問）
（ロ）任意的。
（天）賣買に於ける諸々の非行（詐欺）（七十七問）
（地）貸借に於ける　ウズラ（不法利得）。（七十八問）

トマソの『神學綜覽』に於ける正義論は、其のア氏倫理學註釋と密接に關聯するものである。後者は一二六六年起草、前者は、其第二部第二篇は、一二七一年から翌七二年にかけて起稿せられたものであつて、云はゞ後者は前者の爲めの準備研究であつたのである。從て、我々は、前者を見て、トマソ其人の正義論を知り得るのみならず、これによりて、アリストテレース解釋に、著しい援助を與へられるものである。トマソの此書を顧みることなくして、アリストテレースを究め

んとするは、抑も徒勞である。

トマソ以後四百年の間は、別に見るべきものは顯はれなかつたが、十七世紀に至つて、少くとも、五人の大學者が、何れも、或は詳に、或は略に、アリストテレースの正義論に立脚して、自家の正義論を披瀝して居る。其五人とは、（一）フランシス・ベーコン（二）ウゴーグロチウス（三）トマス・ホッブス（四）サムエル・ブフエンドルフ（五）ゴットフリード・ヴヰルヘルム・ライブニッこれである。其正義論をのせた書の原名は、左の通りである。出來る丈け、私の挿架のものについて、當該箇所の頁數を示して置く。

(1) Francisci Baronis de Verulamio, De Dignitate et Augmentis Scientiarum. 1623. Liber Octavus: Exemplum Tractatus de Justitia Universali, sive de Fontibus Juris in uno titulo, per Aphorismos.
(The Works of Francis Bacon collected and edited by J. Spedding & D. D. Heath. Vol. I. p. 803 et seq. London 1857.)

(2) Hugonis Grotii, De Jure belli et pacis. Libri tres. 1625. Accompanied by an abridged translation by W. Whewell with the notes of the Author, Barbeyrac, and others. Cambridge Vol. I. p. 6 et seq.

(3) Thomas Hobbes, Leviathan or the matter, forme, & power of a Common-Wealth ecclesiastical & Civill. London. 1651. Chap. 15. p. 75 et seq.

(4) Samuelis Pufendorfii, De Jure naturae et gentium. p. 120. Lib. I. Cap. VII. §12 et seq. (前掲)

(5) G. W. Leibniz, Codex juris gentium diplomaticus 1693. (Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz herausg. v. C. I. Gerhardt. 7 Bde. Berlin 1875. Bd. III. p. 386 et seq.)

（十六）

以下、私は、右等諸學者の所論を吟味し、更らに、アリストテレースに溯つて商量したところに基いて、出來るだけ、分り易く、アリストテレースの正義論、殊に、其の狹義の正義論の大要を、紹介して見る。讀者は、此部分を、高橋氏論文の（九）（十）（十一）の三節（三十一頁央から四十三頁央まで）と對照せられんことを希つて置く。

——以下、頁は、ベッカーに據り、章別は、ツエルに據つてあげる。——

今、私が問題とするところに關するアリストテレースの論にペフォ

ー頁では、一一二九a第一行から、一一三四頁a第十六行までにのせてある。而して今日通行の章別であるツエルの分ち方に從へば、其全體は、五章に分たれてゐる。(ベッカーに從へば、九章と三行に分たれてゐる。)其章の要旨を、題目に略して示めすと、左の如くである。

第五篇

第一章　緒論。正義の德を考察する方法論。正義と不正義との別。(自一一二九a至一一三〇a第十四行)

第二章　狹義の正義の本體とその諸性質。(自一一三〇a第十四行 至一一三一a第九行)

第三章　分配の正義　(自一一三一a第十行 至一一三二a第二十四行)

第四章　匡正の正義　(自一一三二a第二十四行 至一一三三a第二十行)

第五章　流通の正義　(自一一三三b第二十一行 至一一三四b第十六行)

第一章　緒論。

正義とは、諸藝術、諸科學または諸技能のやうに、二つの相對立した行爲を兼備するものではない。藝術や技能に於ては、相對立した二つの行爲が兼ね含まれてゐる。例へば、醫師には善き醫師(名醫)あり惡しき醫師(庸醫)あり、樂師には善き樂師(名手)あり、惡しき樂師(凡手)がある。しかし、其孰れも、均しく醫師であり、樂師であることに於いて異るところなしと認められるのである。正義に於ては然らず、善き正義、惡き正義の兩者の併存することは許されない。總としての正義は、常に必ず統一した諸の行爲でなければならぬので、其反對を併せ容るゝ餘地はないのである。從つて、正義の反對から、正義其ものを見極め、一の對抗の諸々の種類によつて、他の對抗の諸々の種類を論究することが出來るのである。此の研究方法によつて、我々は、正義の諸特徴を限定し、從つて正義の概念は、これを、鮮明に捕捉することが出來る。

ソコデ、アリストテレースは、正義の反對極として、通俗に認められてゐる「不正義」を取り來り、其れを吟味することによつて、正義其ものゝ概念を明かにする出立點を得可しとする。

通俗の世に於いては、同一の語を以つて、種々異なつたものを、兼ね言顯はすことが屢々ある。例へば κλεῖς(クレース)と云ふ語は、『頸骨』の意にも、又た『鍵』の意にも用られてゐる。其と同樣に、『不正義』と云ふ語も、色々異つたことを、併せ稱するに用られてゐる。其中に、二つの大別を下すことが出來る。即ち一は、παράνομος(パラノモス)(法律を踰越する者、違背する者)で、他は、πλεονέκτης(プレオネクテ)(横領する者、不法利得を占むる者)これである。從つて其不正義の反對たる正義とは(一)法律を遵奉する者(二)ἴσος(イソス)(均等、即ち過多にも過少にも、受授せざる者)。

此の『イッス』と云ふ語は、後に、マルクスのアリストテレース解釋を吟味するに方つて重要の關係を有つ語であることを、豫め斷つて置く。而して、河上博士等譯本中の或重要なる不正確の二つを、倂せ含む。又は誤謬は、此語にも、また、關聯を有つ。

乍去、速斷してはならぬ、『プレオネクテス』とはすべての不均等を指して云ふのであつて、單に、より多く取り、並に、より多く與ふることのみを意味するのではない。何となれば、他人に與ふるよりもより少く、自己に損を與ふる者は、それによつて、其のより少く損した諸財丈けは、利益を享けたと同樣であるから、其れは、やはり不均等 ἄνισος（アニッス）を敢てしたものに外ならないから。（此點トレデレンブルヒ及びフェヒナーの訓讀に從ふ。）

（十七）

従つて、プレオネクテス（橫領）とアニソス（不均等）とは、全く同一事に歸着するのである。今アリストテレースの意を汲んで、これを分り易く、表示すれば、左の通りとなる。（自一一二九b第六行至同第十一行）

不正義
- 一、パラノモス（法律蹂越）παράνομος
- 二、プレオネクテス（橫領）πλεονέκτης 即ち アニソス（不均等）ἄνισος
  - 一、プレオン。アガソン πλέον ἀγαθῶν（過多の利を占む）
  - 二、メイオン。カコン、μεῖον κακῶν（過少の損にて濟す）

（第十一行の『兩者に共通である περιέχει καὶ κοινόν（ペリエケイ カイ コイノン）の附き方、バーネット（二〇七頁）及フェヒナー（二八頁）に從ふ。但し、此點學者間に異論がある）

ソコデ、グラント氏は直ちに、分類を、次ぎの如くに下してゐる。（前揭書一〇〇頁）

正義
- 一、法律遵奉＝廣義の正義
- 二、イソス（均等）＝狹義の正義

不正義
- 一、法律蹂越＝廣義の不正義
- 二、不均等＝狹義の不正義

而して、氏は不正義を分つて、（一）法律蹂越（二）多くを貪る（三）不均等（過少の損）の三となすのは、ア氏の意を正しく解するものでなく、而して其れは、正義を（一）法律遵奉（二）均等の二となすに照應してゐないから、許さるべきでないと主張してゐる。

流通の正義を、第三の正義と認むべきか否かの見解の相違は、抑も、此の劈頭の一條に對する解釋の一定してゐないことに存すると、私は思ふ。而して、私は、前揭の表を次ぎの如く、集約することによつて、アリストテレースの考へ方に、最も正しく言ひ表はされるのではあ

るまいかと考へつゝある

正義 δίκαιον
- 一、法律尊奉＝廣義の正義 νόμιμον（ノミモン）
- 二、均等＝狹義の正義 ἴσον（イソン）
  - 一、過多の利を占めず
  - 二、過少の損にて濟まさず

不正義 ἄδικον
- 一、法律踰越＝廣義の不正義 παράνομον（パラノモン）
- 二、橫領即不均等 ἄνισον（アニソン）
  - 一、過多の利を占む
  - 二、過少の損にて濟ます

（ツェラー希臘人の哲學第二の二・第六四一頁註二・同所の引用諸書參照）

ソコデ、廣義の正義を問題外に置き、狹義の正義のみについて云ふときは、ツェラーの示した通り。

δίκαιον（ディカイオン） ＝ ἴσον（イソン）

ἀδίκαιον（アディカイオン） ＝ ἄνισον（アニソン）

正　義 ＝ 均等

不正義 ＝ 不均等

と云ふことに歸着する。而してアリストテレースの正義論の要點は、實に茲に存すると思ふ。

彼はいふ。『法律を踰越するものは、不正を行ふものであり、法律を尊奉する者は正義を行ふ者であるから、すべての法律尊守行爲は、或る意味に於ては、正義の行爲である。何となれば、立法によつて規定せられた諸々の行爲は、法律尊守の行爲であつて、其一つ一つは正義の行爲であると云ひ得るから。』

彼は續けていふ。

『法律の規定は、其すべてに於いて、凡そ權力を有つもの、またはこれと同種のもの丶一切又は其内の最善なるもの丶、共同の利益を以つて目的とする。從つて、或意味に於ては、我々は、『ポリテイア』（國家、政治團體）の爲めに、幸福と其構成分とを產み出し並びにこれを維持すべき諸行爲を、正義の行爲と呼ぶのである。』（中略）

『此の形ちに於ける正義は、渾一なる德である。しかし、其れは、絕對的ではなく、吾人の隣人との相對關係に於いて、渾一なる德であるのである。從つて正義は、屢々、諸德中其の最大なるものと考へられる。（中略）然り、其れは、其の最も十分なる意味に於いて、渾一なる德であるのである。何となれば、其れは、渾一なる德の現實の執行であるから。其れは、渾一である。何となれば、此れを有つ人は其の德を彼れ自らに於いて行ひ得るのみでなく、（πρὸς αὐτόν プロス アウトン）其の隣人に

對しても、また、行ひ得るから（πρὸς ἕτερον）。多くの人は、自分の事柄に於いて德を行ひ得るも、隣人との關係に於いて、これを行ひ得ない。此の故に、『統治は人の本體を現はす』てふビアスの言は眞なりと考へられる。何となれば、統治者は、必然的に他人と關涉せざるを得ず、また一、社會の成員たらざるを得ないから。同じ道理によつて、諸々の德の內、正義のみ獨り、『他人の善』ἀλλότριον ἀγαθὸν なりと考へられる。何となれば、其は、我が隣人に關涉するもので、一の統治者なり、又は一の仲間たる他人に取つて利あることを爲すものであるから。ソコデ、最惡の人とは其の惡行を、已れ自らに對しても、また他人に對しても、行ふ人の謂であるが、最善の人とは、其の德行を已れに對して爲す人の謂でなく、これを、他人に對して爲す人の謂である。何となれば、其れは、六ヶ敷ことであるから。

されば、此意味に於いての正義は、德の一部分ではなく、其の全體である。其反對に、不正義は、惡の一部分ではなく、惡其もの丶全體である。此意味に於ける德と正義との間に於ける區別如何は以上言つたことで、明瞭である。兩者は同じものであるが。其の本體 εἶναι は同じものではない。隣人との關係として見るとき、正義であるものは、限定なき狀態の或る種類としては、ヘグラント氏解。單に心の一狀態として見るときは）德であるのである。

以上、一一二九bより一一三〇a央までを全譯す。譯文は、ロッス氏の英譯を頼りとして、ア氏の原文について、之れを作つた。

（十八）

ブラウン氏は、此最後の一節を解釋して、次の意であると云ふ。『德と廣義の正義とは、實質的には、同じものであるが、其の存在の體容に於いては異るものである。言葉を換へて云へば、同一の慣行は、これを絕對的に考察するときは、德と名けられ、相對的の一義務として考察するときは、廣義の正義と名けられるのである』と。前田書一二〇頁註

グラント氏の解釋に曰く、『玆に用られた論理的形式は、再び、第六篇第八章一節に於いて用られてゐる。卽ち、智慧と政治とは、同一の心の狀態であるが、其の本質は異なつたものと概念せられてゐる。（中略）此の二つの場合に於いて、『兩者は同じものである、唯だ其の『エイナイ』（本質）は異る』と云ふのは、其の結果は同じであるが、其の本體的性質、其の原因、ドイツ語で云へば、グルンド・ベグリッフ（根本概念）は異ると云ふ意味と解せねばならぬ。卽ち、廣義に於ける正義についての第一の觀念は、之れが、一の關係であると云ふことこれである。德についての第一の觀念は、心の習慣といふことである。（中略）

プラトーンは、正義を論ずるに方つて、先づ、ソフキスト的概念を一掃し、而して正義は、人間的制度のみによるものでなく、其れよりも遙かに多く、人間精神の本質によるものなるを證明した。かくて、彼は、正義を以て、心其ものに於ける、正しい均衡なりとの定義を以て、其論を結んだ。アリストテレースの出立點は其れとは異り、高橋氏論文三一―二頁にいふ。『即ち彼(ア氏)は這般の概念をプラトーンより受けて、之れを完成せるなり(cf. Legg. VI 757)』と。私は、氏の無造作にして、餘りに素朴的なるに驚く。恐らく何人かの『獨斷安價』なる一句を氏は『周到ならざる注意』を以て、其儘に轉寫せられたのではあるまいか? 正義とは、政治的動物としての人間の本質の發展から生じ來るものなりと前提してゐる。また、政治的諸制度には、絶對的であつて假設的でない或るものありと前提してゐる。(第五篇第七章自一至五節)かくて、殘る唯一の問題は、正義其ものの正確な限界は、何であるか、これである。これに對する答は、次ぎの如くである。我々は、正義を最も廣義に解して、他人との關渉に於ける正しき行爲の一切を含むものとすることも出來るし、又は狹義に解して、すべての種類の財産及び利益に關係しての正しい行爲なりとすることも出來る』と。前川書一〇四頁

しかるに、茲に、バーネット氏は、廣義の正義、狹義の正義の別を認むべきでないと主張する。曰く、『正義は、善の一切であり、全一なる善であるが故に、渾一なのである。其れは、獨り善の所有のみでなく、其の使用であるから、渾一なのである。其れは、プロス・エテロン(他人の爲めにする)であるから、渾一なのである』二〇八頁 而して、氏は、他の所に於いて、次ぎの如く斷じてゐる。『我々は、アリストテレースの體系の一部として『廣義及狹義の正義』の區別を設けてはならぬ。アリトテレースは、唯だ、例によつて、言葉の適用を狹めるによつて、論題を鮮明ならしめたにすぎない』と。二〇六頁

私は、多數の學者の通説に反して、バーネット氏が、廣狹兩義正義區別論を斥けて、ア氏は、單に、其の推論の範圍を、漸次に狹めて論點を中心の問題に集中したものにすぎないと主張することの、むしろア氏の眞を得るに近いものではないかと考へざるを得ないものである。何となれば、ア氏は、其の正義論に於いては德の一切と全く一致するてふ意に於ける廣義の正義に關する一切の論究を、問題外に置くことを明言し、所謂狹義の正義のみに就いて論ずることが、主要の考究であると、明瞭に斷言してゐるから。若しも、廣義、狹義の區別が、ア氏の正義論の體系に於いて、本格的のものであるならば、單に、問題外に置くなどとせず、其れについて、立入つて論究すべき筈と思ふ。

然るに、全く其事のないのは、唯だ論題を漸次中心の問題に集中したが爲めと見る方が、無理の少い解釋であらうと思はれる。

乍去、パーネット氏の見解は、多數の學者の執らざるところである。ツエラー（前掲書六四〇頁以下。殊に六四一頁註二）ノイマン（前掲書五三二頁）ブラウン（前掲書一一九頁以下）グラント（前掲書一〇四頁）フエヒナー（前掲書二九頁以下）等（英譯者ロッス氏もまた其内に算入すべきであらう）何れも廣狹兩義の別を認めてゐる。唯其の内フエヒナーは、ニコマホース倫理學の此廣義の正義の概念は、『大倫理學』（一の三三、一一九三ｂ第十二行 ベッカー頁）に於ける其れとは、著しく異ることを指摘して、綿密に考證してゐる。（前掲書二九頁以下）其大意は、ニコマホース倫理の廣義の正義は、『他人の爲めに』（プロス・エテロン）を本質とするに反し、『大倫理學』に於いては、却て『已れに從つて』（カ・サウトン καθ' αὑτόν）を以て本質としてゐて、兩者全く相容れずと云ふにある。從つて、フエヒナーは、ニコマホース倫理と大倫理とは、決して同一人の筆になるものでない一の有力の證據玆に在りと主張してゐるのである（三〇頁）。

（十九）

私は、心窃かに、パーネットの明快な此の斷案に同感を禁じ得ないこと右述ぶるが如くではあるが、殊に難解な此一條（第五篇の全體古來難解を以つて知られてゐるが、就中此の第一章の末項については、學者間に、異說が甚だ多いのである）について、多數說を捨てゝ、パーネット氏に與する資格も勇氣も有たぬものである。故に、後日はイザ知らず今日に於いては、多數說に從つて、ア氏に廣狹兩義の別あるものとして、吟味を進める外はない。但し、私の當面の問題とするところについては、其孰れの見解に從ふも、何等の差違は起らないことを斷つて置かねばならぬ。

即ち、孰れの說に從ふとするも、ア氏正義論の中心問題は、より狹く限定せられた正義であつて、渾一なる德としてのより廣い意義に於ける正義ではないのである。

ソコデ、問題は、著しく單純化せられる。即ち、私の當面の問題に關する限りに於いては、ア氏の正義とは、前出の表を左の如く、單純化したものを指して云ふのである。

正義（ヂカイオン δίκαιον）	＝	均等（イソン ἴσον）
不正義（アヂカイオン ἄδικον）	＝	不均等（アニソン ἄνισον）

即ち、フエラーの左の言の通りである。

『倫理と政治とは、密接な結合を有つものであるから、政治的團體の維持が直接に其上に立脚する德のことは、特に考察せねばならぬ。乍去、アリストテレースは、(玆では)正義の概念を、廣義に解して、人間共同生活に關する德の全體を指すものとせず 一一二九a第十七行、第二十五行。一一三〇a第八行、同り第十八行 これを、狹義に解して、諸財の分配に關する德、即ち利益と損失との配分に於ける正しき中庸又は正しき比率を守ることとなしてゐるのである』前掲書六四〇頁

ツエラーは、更らに、其脚註 六四一頁 に於いていふ、『(此意味に於て)正義は、諸財の所有に於いて過多・過少といふことの起り得るもの丶間にのみ存することである。卽ち人間に於けるは、其れである、(其反對に)諸財の所有について何等の制限を被らざるものたち、例へば、神々の間に於いて、又は、諸財を所有する力なきものたち、例へば、濟すべからざる惡人たち、等の如きについては、正義なるものは、存し得ないのである』一一三七a第二十六行

かくて、ア氏の第五篇第一章は、考察の方法を確定し、正義と不正義とを辨別するによつて、正義の本質を究明し、終りに、問題の中心に考察を集中すべく、一切渾一の德としての正義の考察を簡單に試みたる後、人間共同生活に關する德の全體でなく、其一部分たる利益と損失との配分に於ける中庸、卽ち正しき比率の遵守としての正義を以て論題とすることを明かにしてゐるのである。

高橋氏論文(三二頁)には、此一條を極めて無造作に次ぎの如く書き下してある。『普遍的正義は善人の念とするすべてのものに關するものにして、特殊的正義は名譽、貨幣、安全等すべて「得より生ずる快樂を動機とするものに關するものなり』と。問題の眞相は其れでは少しも分らぬ。

(二十)

第二章 狹義の正義の本體とその諸性質

グラント氏は。此章を三つに分つて見る可しと云つてゐる。前掲書一〇四頁 卽ち、(一)狹義の不正義の存在を證明し、其れは主として財貨(財産又は金錢)に關するものであることを說き、更らに、これから推論し(其反對なる狹義の正義の存在を明かにす(ツエルの分類の第一節至第六節。一一三〇a第十四行至同b第五行)(二)廣義の正義は、本論に於いて問題とせざることを明かにす(同上第七節至第十一節。一一三〇b第七行至一一三〇b第二十九行)(三)狹義の正義を分つて配分の正義と匡正の正義の二とす。同上、第十二節至第十三節一一三〇b第三十行至一一三一a第九行)これである。

今、グラント氏の分け方に從つて、順次に吟味して見よう。

先づ、ア氏の原文を、出來るだけ、忠實に、左に譯出する。

『然し、兎に角、我々が考察せんとするところは、德の一部分たる正義である。我々は、此くの如き種類の正義の存することを主張する。我々は、また、同時に、同じ樣に狹められた意味に於ける不正義をも考察せんとする。

此くの如きもの〻存することは、次ぎの事實によつて示される。樣樣な惡事を行ふ者でも、必ずしも、貪慾の非行を犯すものでないものがある。例へば、怯惰の爲めに、武器を捨て〻逃去るもの、惡癖の爲めに惡口雜言を吐くもの、吝なる爲め友人を助く可く金錢を與へざるものなどの如きこれである。反對に、また、貪慾な行爲を犯す者にして、此等の非行の何れをも冐さないものもある。(中略)されば、廣く解した不正義の一部分にしか該當せぬ不正義の一種があるわけであつて、從つて、法律違反てふ廣い意味に解した不正の一部にしか該當せぬ意味で、不正なる語が用られることがあるのである。

更らに、同じく姦通の罪を犯すものでも、其或ものは、利益の爲めに、これを犯し、それによつて、金錢を得、他の或ものに、淫慾に驅られて、これを犯し其爲めに、却つて金錢を失ひ、または、刑罰に處せられるとせよ。後者は、貪慾者と云ふよりも、むしろ、不節制者と考へられるであらうが、前者は不正者であるが、不節制者とは見られないであらう。從つて、前者は、其の淫行によつて、金錢上の利益を得た故を以て、不正者たることは明かである。

更らにまた、すべての他の不正行爲は、例外なく、夫れ〲或る特殊の罪惡に歸せられる。例へば、姦通は、不節制の罪惡に、戰爭に於いて、僚友を捨て〻逃去する者は、卑怯の罪惡に、暴力は憤怒の罪惡に、歸せられるが如き、これである。然るに、金錢上の利益を得るものは、其行爲は、或る特定の罪惡に歸せられず、直ちに不正義其ものに歸せられる。

從つて、廣く解した不正義と區別せらるべき、狹義特定の不正義なるものがあることは明かである。而して、其れは、廣く解した不正義と其名稱並びに性質を同くする。何となれば、其の定義は、同一の種類に屬するから。此の二つとも、其の意義は、自己の隣人に對する關係に於いて存するものである。しかし、一は、名譽、又は、貨幣、又は安全――若くは、此れらすべてを含むところのもの(若しこれに對し單一の名稱があれば、其れ)――に關するものであつて、

而して、其の動機は、利益から生じ來るところの快樂にある、他は、其反對に害き人に、關係あるすべての對象に關するものである。』自一一三〇a第十四行至一一三〇b第五行

ソコデ、ア氏は次ぎの如く問題を限定してゐる『されば、また、正義にも一種類以上あり、而して、渾一の德と區別せらるべき一種の正義あることは、明かである。我々は、其の一般相と特殊相とを捉らへねばならぬ』と。かくて、論は、狹義の正義に集中せられることとなる。

(二十一)

グラント氏は、以上の節を說明して云ふ。前揭書一〇四頁以下『玆にア氏が、狹義の不正義の存在を立證すべく用ゐた論辯は、畢竟するに、單に用語の疏明に歸着する。(一)我々は卑怯者をも ἀδικεῖν(アヂケーン)(惡を爲す者)といふ。其れと同時に我々は、また、已れの正さに受く可き分以上を取る者をも惡を爲す者といふ。此二つの場合に於ける用語は決して同一義を有つものではない。(二)利益を占むるが爲めに犯す罪は、此くの如き動機なくして犯す罪とは、區別された意味で惡と言はれる(三)他のすべての惡(ἀδικήματα アヂケマタ)は、夫れ〳〵何か或る惡しき原則(例へば、卑怯、不節制、など)に歸せられるが、不正利得を獲得する行爲は『不正義』其もの以外、何等特殊の原則に歸せられない。從つて、これは、特別の意味を有つものであり、而して、心に於ける一の特殊の罪惡を指すものであると』。

バーネット氏は、また此節を釋いていふ。前揭書二一〇頁『此節の論旨は次ぎの如くである。狹義の罪惡の場合に於いて、我々は、或人が已れの爲めに、何等の不正なる利益を獲得しないときにも、其人を ἀδικεῖ(アヂケイ) 惡行者といふ。此の意味に於いては、ἀδικία = ἡ κακία πρὸς ἕτερον(アヂキア オレー・カキア・プロス・エテロン) 惡行=他人に對する渾一の惡である。しかるに、他方に於いては、不正なる利得を占むるの故を以て、或人を ἀδικεῖ(アヂケイ) といふことがある。此場合には、其の『アヂキア』は、或る特殊の罪惡と同一でもなく、また渾一の惡(オレ・カキア)とも同一ではない。しかし、其れは、カキア(惡)である(何となれば、我々は、之れを非難するから)而して、それは、『アヂキア』(不正義)である(何となれば、或る意味に於いては、ἄδικος = πλεονέκτης(アヂコス プレオネクテース) 不正義=橫領、不當利得、であるから)』と。

此一段は、ア氏の推理に多少の無理がある。或は脫文がある爲めかも知れないが、グラント氏の云ふように、單なる文義解釋に傾きすぎてゐる。而して、此論法を以て推して行くときは、グラント氏が、說

く指摘したように、他の何れの罪惡でも、不當利得行爲と同様に、一種別格のものとせられ得る。例へば、不當利得の代りに、怠惰の惡行を以てして見る。然るときは、次ぎの如くに云ひ得るであらう。玆に一人の惰け者がある。彼は、他に何の罪を犯さない。しかし、我々は彼を惡行者と呼び、彼を非難する。しかれば、我等は、此の惡行を以て、廣義の不正義と區別せらるべき一の狹義の不正義であると云ひ得るであらう。グラント前掲書一〇五頁

然し、此くの如く解するは、決して、アリストテレースの眞意、を得た所以ではあるまいと思はれる。ア氏の説明の餘りに簡單なる爲め、其意を十分に盡くして居らぬので、彼は、不當利得、横領即ち財貨(金錢、財産)に關する不均等のみを以て、特に、狹義の不正義なりとするもので、同一の論法を以て、他のすべての、若くは、何れかの惡行を、同じく狹義の不正義と爲すことは、決して、これを許さないものであらうと思はれる。即ち、他のすべての非行とは、鮮かに、而して格段に區別せらるべき一特性が、財貨の配分に關する不均等(横領、不當利得)に具つてゐるものと認めるものなることは疑を容るゝ餘地なきように思はれる。唯だ何故に然るかの論據をアリストテレースが明示して呉れてないことは、我々經濟學研究者に取りては、甚だ遺憾なことである。此の論據が明示されてゐたならば、アリストテレースの經濟學說の後世に及ぼした影響は、更らに、更らに、著しく大なるものであつたらうと思はれる。否、後世への影響はさて置き、希臘の經濟思想其ものゝ深刻さは、爲めに、更らに一層を加へたであらうと考へられる。返へすがへすも殘念なことである。然るに、多くのアリストテレース經濟學說評論家中、──私の淺學寡聞の屆く限り──今日まで、一人も、此點を指摘した人のないことは、不思議でもあり、また惜むべきことであると思ふ。高橋氏は、此問題の存在について、暗示をさへもして居らぬ。

唯だ、トマソ・ダキノは、ア氏とは、順序を逆にして、諸々の不正義を考察した後『正義の準全的部分について』(二ノ二の七十九問)と題して、此問題を詳しく論じてゐる。但し、其論、經濟的考察には、進入してゐない。而して其文に題して『アリストテレース經濟學』と云ふ、大膽むしろ、驚く可きことである

其二。

此部分は、廣義の正義を問題外に置くことを疏明したもので私の當面の問題に、殆んど、何等直接の關係を有たず、而して、錯簡、脱漏、殊に重複の甚だ多く見出さるゝ部分に屬するから、全く、これを、紹介せずに置く。原文を一讀せられたい方は、ベッカー頁の一一三〇頁ａ第十七行から、一一三一頁ａ第二十九行、ウエルの分け方では第七

節から第十一節まで、また獨譯によらんとする方は、ロッス氏の英譯の當該頁 此本は、ベッカー頁を其儘其本の頁としてゐるから、甚だ便利であり、且つ獨譯は、現存諸國語譯本中の第一位を占むるものである。を見られたい。

(二十二)

其三。狹義の正義を分つて、配分の正義と匡正の正義の二とす。

此一節は、後段の吟味に取つて、重要な關係をもつものであるから原文と逐字譯とを、併せ掲げて置く。

12 τῆς δὲ κατὰ μέρος δικαιοσύνης καὶ τοῦ κατ' αὐτὴν δικαίου 1130 β 30
ἓν μέν ἐστιν εἶδος τὸ ἐν ταῖς διανομαῖς τιμῆς ἢ χρημάτων
ἢ τῶν ἄλλων ὅσα μεριστὰ τοῖς κοινωνοῦσι τῆς πολιτείας (ἐν
τούτοις γάρ ἐστι καὶ ἄνισον ἔχειν καὶ ἴσον ἕτερον), ἓν
13 δὲ τὸ ἐν τοῖς συναλλάγμασι διορθωτικόν. τούτου δὲ μέρη 1131 a 1
δύο. τῶν γὰρ συναλλαγμάτων τὰ μὲν ἑκούσιά ἐστι τὰ δ'
ἀκούσια, ἑκούσια μὲν τὰ τοιάδε οἷον πρᾶσις ὠνὴ δανεισμὸς
ἐγγύη χρῆσις παρακαταθήκη μίσθωσις (ἑκούσια δὲ λέγεται,
ὅτι ἡ ἀρχὴ τῶν συναλλαγμάτων τούτων ἑκούσιος), τῶν δ'
ἀκουσίων τὰ μὲν λαθραῖα, οἷον κλοπὴ μοιχεία φαρμα-
κεία προαγωγεία δουλαπατία δολοφονία ψευδομαρτυρία,
τὰ δὲ βίαια, οἷον αἰκία δεσμὸς θάνατος ἁρπαγὴ πήρωσις
κακηγορία προπηλακισμός.

右譯文

『狹く解した意味の正義、並に、其れに照應する正しきことについては、(二つの種類がある)。第一はポリテイアの成員たる人々の間に配分せらるる名譽、金錢、または、其他のもの〻配分に於いて現はるゝもの。(福田註。即ち配分の正義) 第二は、人と人との間に於ける諸々の取引に於いて、匡正的役割を演ずるもの。(福田註。即ち匡正の正義) これである。

此の第二については、更らに、二つの區分がある。即ち、(人と人との間の)諸々の取引(スナラグマシ・ヂオルソチコン)には、(一)或種のものは、任意的(エクーシア)であり。(二)或種のものは、不任意的(アクーシア)である。

任意的取引には、(a)賣買(πρᾶσις ὠνή 拉丁譯文では emtio venditio) (b) 消費貸借 (δανεισμος 丁拉譯文では mutuum) 質入(ἐγγύη 拉丁譯文では pignus) 使用貸借 (χρῆσις 拉丁譯文では commodatum) 預入(παρακαταθήκη)拉丁譯文では depositum) 雇備・請負・賃貸借(μίσθωσι 拉丁譯文では locatio conductio;)

operarum, operis, reó の三者を併せ含む)などがある。これらを、任意的取引といふのは、其發生原因が、任意的であるから。)

不任意的なものには(a)人の目を忍ぶものと、(b)公然暴力に訴へるものとがある。(a)には、窃盜、姦通、毒害、媒合、奴隷誘拐、暗殺、僞證などがあり (b)には、毆打、監禁、殺人、强盜、傷害、誹毀、侮辱などがある。

高橋氏論文(三二頁)には、『購入、賣却、貸與(!?)質入、借受(!?)寄託、賃貸借(!?)の如き任意的行爲』云々としてある。『消費貸借』を『貸與』、『使用貸借』を『借受』、(而も特に此語のみには、希原語を添へてある。何故?)とするなどとは、現代離れも亦た甚しいのみならず、希文を如何讀んだか、一向解し得られぬ。例の惡口雜言家を假ひ來るときは、恐らく、此れを評して、再た『珍妙』の『不可思議』のと言ふであらう。兎に角、此一事を以つても、高橋氏が、果してア氏の原文を解し得たりや否やを、私が疑ふ所以、讀者は、十二分に解しせられたことと思ふ。殊に單に『賃貸借』とあるは、拘き英譯諸書に、hiring 又は letting などしてあるを、其儘生呑活剝したもので、希語一年生でさへ知つてゐる『ミスソーシス』なる語を、テンデ知らぬ人の所爲としか考へ得られぬ。(賃金の意義のは、一も譯してあらず、却つて肝腎の經濟術語、法律行爲は支離滅裂)。然るにも拘らず高橋氏は、私を難じて、漫然氏の文を卒讀して、直ちに、不當の攻擊を敢てしたものと云はれてゐる。今茲に、兒童の描いた『ヘヘノノモヘジ』に落第點を附けた圖畫敎員を評して、其は、兒童に對して、不當なる攻擊を加へたものであると云ふ人ありとせよ。世人は、果して其評を是認するであらうか。否か。私は疑なきを得ぬ。

バーネット氏は、先づ『第一は、『ポリテリア』の成員たる人々の間に配分せられる名譽、金錢、又は、其他のもの〻配分』の句を釋いていふ。希臘に於ては、市民とは、第一次に、ポリテイア所有の諸財の分け前に預る權利を有つ者の謂であつて、(今日の國家に於けるが如く)國費の負擔に任ずる義務は、第二義的のものとせられてゐた。卽ち市民とは、國家の株主の謂であつて、(今日の國民の如く)納税者の謂ではなかつたのであると。(前揭書二一二頁。此點ノイマン氏の租稅的論爭に詳論あり。後に言及す)

氏は更らに、『スナラグマシ』及び『ヂオルツチコン』の二語を釋いていふ。『スナラグマシ』とは、一切の商的取引を含む意味の廣い語であつて、決して、單に『諾契約』[illegible]のみに限られてゐるのではない。而して、其中について、任意的なるものが契約に該當するので

不任意的なるものは（羅馬法の obligationes ex delicto（不法行爲より生ずる諸債務）に該當するのであると。（二一三頁）

『ヂオルソチコン』なる語についてはいふ。『此語を "corrective justice"『匡正的正義』とする通行の翻譯によつて、多くの混雜が醸されてゐる。此譯語よりも、スコラ哲學者の譯語 iustitia directiva（ユスチチア・ヂレクチーウア）の方が、眞により正確である。何となれば、『ヂオルソウン』διορθοῦν と云ふ語は、（此語と併せ用らるゝ）エパノルソウン ἐπανορθοῦν（福田註匡正。correction）といふ語よりも遙かに廣い意味を含むものであつて、取引の前たると、後たるとを問はず、『調節する』"to adjust" ことを意味する』（二一三頁）

『エークシア（任意的）について、ジアックソン氏は、これらに該當する正義の形態は、諸々の取引から起る非行の rectification（是正）のみであると主張してゐる。しかし、此解は當らぬ。何となれば、非行が一度生ずるときは、其取引（スナラグマ）は、直ちに、不任意的のものに變化するから。ア氏の與へた例を見ても、其れは、事前に、取引の諸條件を協定することに關してゐて、事後に、發生非行を是正（匡正）することには、關してゐないのであると』。（同上頁）

グラント氏の解說は、少しく趣を異にしてゐる。曰く、ア氏は、茲に至つて、狹義の正義を分つて、配分の正義と匡正の正義の二となす。（中略）彼は、任意的諸取引 τὰ ἑκούσια συναλλάγματα（タア・エクシーア・スナラグマタ）即ち、『賣買、消費貸借、質入、使用貸借、預入、雇傭・請負・賃貸借』は、匡正的正義 corrective justice の目に屬すること、不任意的諸取引と同じであると爲してゐる。彼が此く云ふ意は、此等の諸取引に際して行はれた諸々の不正義行爲の是正（匡正）は、匡正の正義によつて爲さるべきものなりとするにある。（後段）第五節に於いて、我々が見る通り、賣買は、幾何的比例の原則によつて支配されてあり、若しは、支配さるべきものである。從つて、其れは、配分の正義の場合に類してゐるのである。（だから）賣買（の行爲）が匡正の正義の下に持來されるのは、詐僞若くは錯誤が發生した場合にのみ限るのであると。（一〇八頁）

此一條は、私が當面の問題とする『流通の正義』が、ア氏によりて、第三の別在なる正義と認められてゐるか、否かを、決定するに、甚だ重要なる關係を有つところのものである。而して、幾多の先覺學者は、此一條に就いて、樣々に、商量推究してゐるのである。其れらは、流通の正義其ものを取扱ふ段に至つて、其一端を示めす方が、讀

者の會得をより容易からしめると思ふから、今は、唯だバーネット、グラント兩氏の對立說をあぐるに止めて置く。

以上を以て、ア氏正義論の第二章狹義の正義の本體とその諸性質の一題の紹介を終つた。それは、私の本題に、直接の關係を有たぬが如くに見へたかも知れない。乍去、ア氏說に對するマルクスの解釋の當否を吟味するについては、私は、出來る丈け、愼重に、而して、また出來る丈け、根本的に考慮すべき義務を有つと信ずる。何となれば、マルクスのア氏評論は、決して、尋常一樣の文獻的、訓詁的、閑葛藤を以て目すべきものではなく、深く、マルクスの學問の根柢を爲すものであると思ふから。此の意味に於いて、以上、ア氏第一・第二章についての吟味は、私が必ず爲さねばならぬ根本的仕事であつたと信ずる。

以下、私は、出來る丈け、簡單に、去乍、愼重に、ア氏の第三―五章の吟味に、進み入る。

（以下嗣出。本誌一月號（次號完結）とあるは誤）

附記。拙文の（其一）（其二）の或部分に對し、高橋誠一郞氏は、三田學會雜誌に一文を揭げて、本論文に全く無關係なる私の十數年前の舊文をまでも取り出して、猛く、私を非難して居られる。乍去、私の本論文を終末まで、氏に於いて、讀過せらるれば、氏の非難は、恐らく當然撤回せらるるものと確信するから、私は、別に答文を起草せぬ。唯だ、補足的に本論文中、間々挿註を書加へて、氏の論文の如何に、杜撰、孟浪、散漫にして、而も徒らに、ペダンチックなものであるかを明かにすることを敢てした。學問の前には、師もなく弟もなしとは、私の昔から、信じて渝へざるところ、氏が、私を舊師云々と呼びて、其故を以て特に、難ぜらるゝは、私の斷じて執らざるところである。因に云ふ、ノースについての氏の再三の指摘云々は、不幸にして、私の未だ一も見ざりしところである。乍去、恐らく、私の諸々の舊文には許し難い誤謬や杜撰は多々あるであらう。しかし、私の學問的興味は、今や全くノースなどを遠く遠く離れてゐる。若し、他日再び其れらについて商量することありとするならば、謹んで氏の再三の高敎等に對して、深き謝意を表する機會を見出すであらうと思ふ。

又記。一月廿七、廿八兩日付再度の手狀を以て、畏友細貝正邦氏は私がロシア語の斷片について認めたところは、恐らく誤謬であらうと、いとも、懇に敎示せられた。此事は、商大の上田辰之助敎授も、其前に、また、私に注意せられて、其れは、empirio-kritizism などの場合と同じと見るべきであらうことを示唆せられた。私は、某ロシア人に尋ねて、極めて覺束ないが、斷片云々に思付いたのであつて、其點について、何等の自信をも有つては居らぬ。十の八九、細貝氏高示の通り、右の考へ付きは、私の誤謬であらうと思ふ。謹んで玆に、訂正して置く。但し、私の論旨は、此訂正の爲めに、別に改める必要はない。

（三・二・一・五）

大衆講座

剩餘價値

靑野季吉

一

こゝに一人の資本家があるとする。そして彼が一萬圓の資本を持ち出して、一つの事業を營むとする。いつたい彼が、わざ〳〵その虎の子のやうな資本を持ち出し、工場を建てたり、機械を買込んだり、原料を仕入れたり、そんな面倒な手數をかけ、また一方には厄介千萬な勞働者を雇入れて、その事業を營まないではをれないのは、何のためであらうか？から訊ねたらどんな人でも、返答にまごつきはしまい。そして言下に『それあ儲けたいからさ。』と答へるに相違ない。全くそれに違ひないのである。資本家は何も伊達や慈善で、事業に着手するのではない。

ところでいまその資本家が、九千圓で工場を建てたり機械を買込んだり原料を仕入れたりし、殘りの千圓で勞働者を雇ひ入れて、見込をつけた事業を營むとする。この場合、その工場や機械や原料が、やはり元の九千圓しか資本家の手に返へさず、勞働者がやはり元の千圓しか資本家の手に返へさなかつたら、どうだらう。つまりその工場や機械や原料や勞働者を用ひて拵へ上げた商品が、元の一萬圓だけの價値のものであつたら、どうだらう。その資本家は、全く骨折り損の草臥れ儲けである。こんなことならどだいその資本家は、その事業を營む筈がない。やはり一萬圓の資本を投じたら、尠くとも一萬一千圓の價値のある商品を手にして、そこに一割だけの利潤を懷にしなければならない。

それなら、どんなからくりがそこにあつて、その一割だけの餘計な價値、卽ち剩餘價値が生れるのであるか？これが問題である。

資本家はそこへ口を出してから言ふかも知れない。それは自分がその商品を市場へ持ち出して、一萬一千圓に賣つたから、そこに千圓の利潤があつたのだと。事實、この資本家の主張を反映して、さう説いて澄してゐる經濟學もある。

だが、この主張の間違ひであることはすぐ分る。成る程一人の資本家と他の一人の資本家の場合なら、或は儲けたり損したりするかも知れない。しかし市場の交換は、詐僞や引つ掛け合ひではなく、同じ値のものを交換するのであるから、資本家階級全體として見れば、個々の損得は相殺されてしまふ。つまり一萬圓の價値のものを市場へ出せば、一萬圓の價値のものとしか交換されないのである。この範圍では資本家階級全體は、得もしなければ、損もしない。即ち資本家階級全體の占める剩餘價値は、どうしても商品の流通行程(市場)から出る筈はないのでなる。

そこで剩餘價値は、流通行程から出ないとすれば、曩に言つたやうに、工場や機械や原料や勞働力(勞働者の勞働能力)を使つて商品をこしらへた過程、即ち商品生産行程から生れて來なければならない。

二

それなら商品生産行程からどうして剩餘價値が生れるか?そこから有耶無耶に、神話の神様のやうに飛び出す譯はない。そこにはやはり剩餘價値を生む要素がなければならない。

そこでこの商品生産行程に投ぜられた資本が、どう言ふ部分に分けられるかを見ると、一方に工場や機械や原料や燃料やに投ぜられる資本部分があり、他方に勞働者の勞働力に投ぜられる資本部分がある。剩餘價値は、この二つの部分の双方からか、又は一方から生れて來なければならない。

ところで前者は、その持つてゐる價値を少しづつか乃至は一度に、新らしい商品に移轉させはするが、決して新らたな價値を造り出し得るものではない。例へば三千圓かゝつた機械が、三年でダメになるとすれば、一年に千圓、一ヶ月に八十三圓餘、一日に二圓七十錢餘づゝを商品へ移轉するに過ぎないし、千圓の原料は一度にそれだけの價値を商品に移轉するに過ぎない。言ひ換へるとこの資本部分は、商品生産行程において、少しもその價値の分量が變らない。だからマルクスはこの部分を、不變資本と名づけた。

ところが勞働者の勞働力に投ぜられた資本部分は、その價値を商品に移轉するばかりでなく、新らしい價値をつくる。こゝに問題の鑰鍵がある。

こゝで一寸立ちどまつて、商品の價値について考へておかう。商品生産社會では、あらゆる商品は、直接に人間の欲望を充す上の使用價値と、他の商品と交換される上の交換價値を持つてゐる。例へば一本の萬年筆は、萬年筆といふ具體物としては、使用價値であるが、同時に他の商品と交換される上の價値、即ち交換價値を持つてゐる。この價

値がなかつたならば、恐らく萬年筆製造業者は日に何千本かの萬年筆を造ることをしないであらう。と言ふのは自分で入用な萬年筆はせいぜい一本か二本に過ぎないから。それを日に何千本とつくるのは、萬年筆に使用價値の外に交換價値があつて、他の商品と交換されるからである。

それならば外の商品と交換される能力、即ち交換價値はどこから生ずるか？それは、交換される諸々の商品に共通したものから生れる。たとへば一本の萬年筆は、靴一足とも交換され、机一脚とも交換されるとすれば、この交換の基礎となるものは、一本の萬年筆、靴一足、机一脚に共通したものでなければならない。このすべてに共通したものと言へば、それが萬年筆であり、靴であり、机であると言ふ現物形態ではなくて、そのすべてが一樣に、人間勞働の所産だと言ふことである。即ちそのすべてが何れも、人間勞働の一定量を代表するからこそ、それにしたがつて交換されるのである。ここに交換價値が成り立つ。

それならば一本の萬年筆は、何故靴二足と交換されないで、靴一足と交換されるのであるか？詰り或る商品の交換價値は、何によつて測定されるのであるか？といふ問題が生れる。

この問題にたいしてマルクスは、前人未到の明答を與へた。曰く、それは、その商品を生産するに當つて、社會的に必要な勞働時間によつてであると。いまの例で言へば、一本の萬年筆を生産する上に、社會的に必要な勞働時間と、一足の靴を生産する上に、社會的に必要な勞働時間とが同じであるから、即ちその兩者の交換價値が同じであるから、そこに交換が行はれるのである。

したがつて靴の製造技術が從前通りであるのに、萬年筆の生産技術が特に進んで、いままで一本をつくるに四時間を要したものが、二時間で出來るやうになつたとすれば、その生産上に社會的に必要な勞働時間が二分の一となつたわけであり、したがつてその交換價値が二分の一となり、最早この萬年筆二本を持つて行かなければ、靴一足とは交換されなくなつたのである。

三

こゝで前へ歸る。

資本家は市場で勞働力といふ商品を買ひ取るのに、やはり他の商品を買ひ取るのと、同じ法則によつて買取る。即ちその價値だけに買ふ。すべての商品の交換價値は、たつたいま說明したやうに、それの生産上に社會的に必要な勞働時間によつて決定される。勞働力といふ商品でも、やはり同じことである。

ところで勞働力と言ふからには、そこに生きた勞働者が前提されてゐる。それが生きた勞働者である以上は、一定量の生活資料が要るわけで、勞働力の生産に社會的に必要な勞働時間とは、實際には、その一定量の生活資料の生産に社會的に必要な勞働時間と言ふことになる。

いまその勞働時間が、六時間であるとする。資本家は六時間分の賃

銀を拂つて、勞働力を購入する。勞働力を購入するとは言ふが、實は勞働力は生きた勞働者の現身を離れて存在するものでないから、生きた勞働者の勞働を購入するのである。

若しこの勞働者が、その勞働力の價値だけを商品に移轉して、つまり六時間だけ働いて、サッサと家へ歸つて行つたとしたら、資本家はやはり骨折損である。前にも言つた通りに工場や機械などの不變資本からは、剩餘價値は生れて來ず、こゝにまた勞働力からも剩餘價値が生れて來ないことになり、結局商品生産行程のどこからも剩餘價値が生れて來ないからである。

ところが勞働力に投ぜられた資本は、商品生産行程中で、その價値が變化する。卽ち剩餘價値を造り出す。そこでマルクスはこの部分を可變資本と名づけた。

それはどうしてであるか？資本家は六時間の賃銀を拂つて、勞働力を購入したのであるが、一旦それを購入した以上、その勞働力を具へた勞働者を十一時間勞働させることも、十二時間勞働させることも出來る。恰かも一旦買ひ取つた布地を、一度洋服に仕立てて着古して後に、何に拵へ直して、何度使用しやうと所有者の勝手であるのと同じである。たゞ布地の場合はどんなに使用しても形が變るばかりで、價値を造り出しはしないが、勞働力は一分間でも餘計に之を使用すれば、それだけの價値を造り出すだけの違ひである。

資本家は勞働者に六時間の賃銀を拂つて、十二時間働かせるとする。その場合後の六時間は、不拂勞働であつて、その勞働が生み出す價値は、資本家にとつて明らかに剩餘價値である。

資本家は、この剩餘價値が欲しくて、面倒な手數をかけたり、厄介千萬な勞働者を雇入れたりするのである。

四

いま或る資本家が、三百人の勞働者を雇ふとする。そしてその勞働者一人の一日の勞働力の價値が三圓で、その勞働者が一日の勞働によつて造り出す價値が六圓だとする。その場合、その三百人の勞働者の使用する不變資本が二千圓であらうが、四千圓であらうが、それはこゝでは少しも問題ではない。事實、生産技術が進歩しない時には、不變資本は割合に少いが、立派な機械などが發明されて生産技術が大いに進歩すると、不變資本はいくらでも大きくなる。しかしそれがどれだけ大きくなつたとしても、その三百人の勞働者が一日の中に産出する生産物の價値は、一千八百圓であつて、その中九百圓が可變資本の價値、殘りの九百圓が剩餘價値である。

そこで、この可變資本と剩餘價値との比率を見ると、900：900卽ち十割となる。是がマルクスの名づけて、剩餘價値率と言つたものである。

この剩餘價値率は、一見して明白なやうに、資本か前拂した資本の價値にたいする、その資本家のタダで手にした價値の比率であるから、『資本に依る勞働力搾取の程度、換言すれば、資本家に依る勞働者

搾取の程度を、正確に言ひ現した（資本論）のである。卽ちこの場合では資本家は十割だけ勞働力を搾取してゐることになる。

この剩餘價値率をよく資本家側では、利潤率と混同する。そして搾取の事實を小さく見せようとする。剩餘價値率は、可變資本にたいする剩餘價値の比率、卽ちいまの例で言へば 900（可）：900（剩）であるが、利潤率は、資本家の前拂資本の全部にたいする剩餘價値の比率、卽ち（不變資本を四千百圓とすれば）、4100（不）＋900（可）：900（剩）である。この場合剩餘價値率は、十割であるが、利潤率は一割八分である。資本家は實際において、十割の勞働力を搾取してゐながら、その五分の一にも足らぬ一割八分しか搾取してゐないやうな態を裝ふのである。

こゝで言ひ添えておき度いのは、剩餘價値率は、勞働力の搾取程度を正確に言ひ表すとは言つても、搾取の絶對量を言ひ現すものではないこと、是である。前拂した勞働力の價値が六〇〇で剩餘價値が六〇〇でも十割の搾取率であり、前者が九〇〇で後者が九〇〇でも搾取率はやはり十割であるが、その絶對量から言へば、あとの場合の方が多く搾取されてゐるわけである。

いま私は、可變資本に等しい價値をつくり出す勞働時間を、假りに六時間とした。この六時間の勞働は、勞働者がその生活の維持のために、言ひ換へれば、その勞働力の生産上社會的に必要な勞働時間であつて、マルクスはこれを、必要勞働時間と名づけ、その時間內に支出される勞働量を、必要勞働と名づけた。これは言はゞ勞働者が、自己のために働くものであるが、この外に勞働者は、資本家のために剩餘價値をつくり出すために働く。私はそれを假りに六時間とした。マルクスはこの時間を剩餘勞働時間と名づけ、その時間內に支出される勞働量を、剩餘勞働と名づけた。

卽ち、剩餘勞働の必要勞働にたいする比率は、剩餘價値の可變資本にたいする比率に等しいわけになる。剩餘價値率＝$\frac{\text{剩餘價値}}{\text{可變資本}}$ 又は $\frac{\text{剩餘勞働}}{\text{必要勞働}}$ と言ふことになる。

五

それならばその剩餘價値は、どうして之を增大させるか？である。

初めにも言つた通り、資本家がいろ〳〵と手數をかけたり、厄介千萬な勞働者を雇ひ込んだりするのは、剩餘價値をせしめるためであるから、彼は可能限り、その剩餘價値を少しでも大きくしやうとするのは當然である。

その可能な方法が二つある。

第一は、直接に勞働時間を延長する方法である。必要勞働時間はそのまゝとして、剩餘勞働時間を出來る限り延長することである。尤もこれには一定の限度がある。それは人間の心身の勢力から來る限度である。この方法によつて搾取して來る剩餘價値を、マルクスは絶對的剩餘價値と名づけた。

この方法は、ヨーロッパでは資本主義の初期に多く見られた。この時代にはまだ生産技術の進歩が低くかつたので、不變資本が割合に少く、可變資本が比較的多かつた。そこで資本家は、勞働時間を延長することによつて、一層多くの剩餘價値をあげ得ることを發見したのである。實際この時代には、一日、十四時間、十六時間、十八時間などと言ふ致死的の勞働時間が行はれてゐた。勿論資本家のこの方法にたいしては、勞働階級から猛烈な反對が起つた。マルクスは『資本論』の中で、十四世紀から十八世紀にかけての勞働時間を中心としての、雇主と勞働者の鬪爭を詳細に摘き、十九世紀に入つての、それにたいする國家權力の干涉(工場法の制定)を細かく說述してゐる。

この方法は前にも言つたやうに、勞働者の心身の勢力によつて制限されるが、また勞働階級の反抗によつても制限されるのである。

第二は、必要勞働時間を短縮する方法である。即ち勞働者の生活維持のために必要な勞働を、出來るだけ短かい時間内にすませてしまつてヨリ多くの時間を剩餘勞働に割からする方法である。この方法によつて得らるゝ剩餘價値を、マルクスは相對的剩餘價値と名づけた。

いまこの二つの方法を圖解するとかうなる。

第一の方法は A |1 2 3 4 5 6 |(C) 7 8 9 10 11 12| B

A—Cは必要勞働時間(六時間)とする。これをA—Bまで延長することによつて、C—Bの剩餘勞働時間(六時間)を得る。これが絕對的剩餘價値を搾取する仕方である。そこでA—B(十二時間)が、延長し得る限界であるとする。即ち絕對的剩餘價値を搾取し得る限界だとする。こんどは次の方法による外はない。

第二の方法 A |1 2 3 4 |(C) 5 6 7 8 9 10 11 12| B

詰り必要勞働時間を二時間短縮して、四時間とし、それだけ剩餘勞働時間を延長して八時間とすることである。話は至極簡單明瞭である。

この相對的剩餘價値は、生産技術の進歩によつて、達成される。例へば機械の採用である。機械の採用は、勞働の生産力を法外に增大するもので、これまで六時間で出來た商品がそのお蔭で四時間で出來るやうになる。それだけ勞働者の生活維持のために必要な勞働時間が短縮され、剩餘時間が延長されるわけである。マルクスは『資本論』のなかで、相對的剩餘價値の生産を分析して、資本主義の勞働の生産力の向上における三つの歷史的段階を詳細に檢討してゐる。第一は、單純な協業であり、第二は、分業及び工場手工業であり、第三は、機械及び大工業である。これこそ三つの根本的な生産技術の革命であつて、その何れもが、相對的剩餘價値を目指したものに外ならぬのである。

マルクスは更に進んで、この剩餘價値の一部が、資本に轉化される行程、即ち資本の蓄積行程を解剖してゐる。これはマルクスにあつて極めて重要な、獨創的なものであるが、この講話ではそこまで說いておれない。それは『資本蓄積』の興味ある題目の下に取扱はれる時があるであらう。

野田爭議とその教訓

山川均

五ケ月間にわたる野田の大爭議は、組合側の要求撤回によつて、結末に近づいた。要求の撤回によつて、會社側が果して商議に應ずるか否かは、なほ明らかでない。けれども會社は完全な勝利者としてこの商議に臨み、降服的な媾和條件を命令することのでき得る程度に、すでに充分に罷業勞働者を打ち破つてゐる。會社がこれ以上に頑強な態度をつゞけることは、たゞにその必要がないばかりでなく、明らかに不利である。したがつて會社側は、恐らくこの提議に應ずるものと思はれる。

その結果は、或は急轉直下的な解決を見るだらう。この解決が、果して解決であるか、それとも征服であるか、それは解決を見ずして確言することはできぬ。たゞ會社側が、征服者としてこの商議に臨むことは疑ひがない。

○

野田爭議は、かの先年の濱松樂器爭議以來の大爭議であつた。ことにこの爭議は、會社側が組合を破壞しようとする、意識的な計畫と挑戰とによつて惹き起こされた爭議であつた。大正十二年の爭議に、組合側が勝利を得て以來、會社はその復讐を計畫してをつた。現に問題の第十七工場の如きは、會社側はその戰備の一つとして、從業員に對する株券の分配を行ひ、これを組合の勢力圏外においてゐたのである。

かように會社側の意圖は、組合の破壞であつた。しかもそれは數年に亘つて計畫され、準備せられた行動であつた。この事實のうちに、地方的にも極めて重大な影響のあるこの爭議が、五ケ月間にわたつて官憲によつて傍觀せられてゐた理由を見出だすことができる。地方的な一大勢力たる會社と、地方官憲との間に、完全な××と××との存したことは、この爭議においても、見逃がすことのできない顯著な事實であつた。

それにもかゝはらず、罷業團がよく四ケ月間の鬪爭を持續し得たことには、もとより色々の理由があつたらう。けれども有力な消費組合の存在したことは、重要な理由のうちの、少なくとも主要な一つであつたにちがひない。この事實は、わが國における罷業運動の歴史のうちに、消費組合が重要な役割をした新しい實例として、注意に値ひするものである。

○

しかしながら消費組合の資力には、もとより限りがある。資本家の斷乎たる決意と計畫との前には、罷業勞働者が消費組合に依賴し得る程度も、おのづから限られてゐる。それは有力な武器の一つではあるが、いかなる武器も、十全な武器ではない。

罷業は如何に指導せられたか。罷業の結果は、指導方法の如何によつては、とうてい避くべからざる結果であつたらうか。これは最も重要な問題であつて、ひとりこの罷業に關與した勞働者と組合指導者ばかりでなく、すべての勞働者と組合指導者とによつて、充分に批判され、組合運動はその教訓を、剩ますところなく攝取しなければならぬ慘敗に終つた過去の重大な爭議、たとへば先年の共同印刷爭議、濱松樂器爭議の如きも、當事者自らによつても、批判せられたが、なほかつ徹底的に研究され、批判され、その教訓が、剩ますところなく汲み盡されたとは云はれない。野田爭議は如何に組織され、如何に指導され、如何なる戰術を用ひたかといふことばかりでなく、この爭議によつて組合員は如何に教育され訓練されたかといふことも、充分に研究し批判されなければならぬ。この研究と批判によつてのみ、敗北の中から勝利を見出だすことができる。

○

野田爭議について、何人も見落すことのできない著るしい事實は、この長時日に亘る重大な爭議が、他の勞働團體からは、寧ろ冷淡に眺められてゐたことである。爭議の當事者たる組合側でも、他の組合の應援を欲しかつたとも傳へられてゐる。いづれにせよ、これはどの重大な爭議が、組合運動界に大なるセンセーションを惹き起こすことなしに進行したことは、一種の不思議といはなければならぬ。

しかしながらこの不思議は、組合運動の戰線における分裂と對立の關係が、いかに深刻なものであるかを考へたなら、必ずしも不思議でない。階級の一部に加へられてゐる暴虐な征服戰に對する無關心と冷淡とは、分裂主義の最惡の結果としてのみ、初めて不思議でないものとなる。

この爭議の後半期に至つては、組合運動界の注意は、野田爭議に注がれた。對立組合と對立政黨との間からも、野田應援の聲が擧げられた。組合運動の戰線の統一は、根本的な理論の一致によつてではなくて當面の鬪爭の必要と、當面の鬪爭目的の一致により、この共同の鬪爭における實際の協力によつてのみ實現することができる。

野田爭議における今一つの興味ある事實は、いはゆる反動團體の行動であつた。ことにこの行動が、これらの團體の眞性質を最もよく物語つてゐるところに、特別の興味がある。

野田爭議によつても、爭議調停法なるものが、如何なる意圖をもつて制定せられたかを立證するさらに新しい一例證が附け加へられたと云つてよい。資本家が溺れかゝつた時にのみ、彼らの助け船は漕ぎ出される。

○

野田爭議は、どのような結末を見るだらう？　この問ひは、會社側が命令する媾和條件が、たゞどの程度に征服的であるかといふこと以外のことを意味しない。組合運動は、新たに加へられたこの敗北のうちから、勝利を見出ださなければならぬ。

最近歐羅巴に於ける反帝國主義運動の進展

在伯林　與謝野讓

×

昨年（一九二七年）十二月九、十、十一日の前後三日間に亘つて、「反帝國主義民族獨立擁護聯盟」はその第二回世界大會をブリユッセルに於いて開催した。此の聯盟は最近、ヨーロッパでは相當に名も知られ、その運動もヨーロッパを中心として、全世界的な組織を持つたことによつて、各國の知識階級及び勤勞大衆の中に、根强い勢力を占めるに至つた。本聯盟の運動は、最近ヨーロッパに於ける反帝國主義運動の一環として注目に値ひするものがある。然るにこの重要な運動も、我が日本に於いては未だ充分知られて居ない憾みが尠くない。

本聯盟は昨年二月十日から十五日まで、やはりブリユッセルに於いてその創立大會を開き、その尨大な枝翼を全世界に張つて反帝國主義運動の奔流の中に泳ぎ出たものである。

此の大會に代表を參加せしめて、聯盟を構成せしめた國名を擧げれば、英、米、佛、獨伊、和、白、日、支、朝鮮、印度、ペルシヤ、インドネジア、比律賓、南アフリカ、メキシコ、西、葡等無慮三十數ヶ國並に地方の多きにのぼつた。名譽總裁にアンリ・バルビュス、アインスタイン教授、孫逸仙未亡人等をおき、幹行部にはジョージ・ランズベリー（英國）及びエド・フイメン（和蘭）を入れ、その下に執行委員會、總評議會を組織して各國代表を之れに加へてゐる。

如上の頭部を持ち、その地下莖を全世界の被壓迫人民層の中に浸透せしめた本聯盟は、創立大會以來、同大會に於いて決議された事項の實現に努力を捧げ、或は英國勞働黨幹部の墮落を糺弾し、或は支那國民革命運動に對して未曾有の虐殺を敢行した帝國主義的「白色恐怖」に抗議して全世界の反帝國主義運動の重要な一部門を把握するに至り、再びブリユッセルに第二回大會を開いて陣容の擴充を計るに至つたのである。

創立大會には日本代表としてはモスクワから片山潜氏が出席したのみ。而るに今回は勞働農民黨からは在伯林の杉山濟君、日本勞農黨からは小生が出席することになり、更に片山氏はモスクワから七十の老軀をひつさげて參加し日本代表も三名となつた。

以下、此の第二回大會を通じて、此の聯盟の底を貫流する潮流が如何なるものであるか又此の潮流の進展によつて、此の聯盟の有する意義並に使命が如何に重要性を帶びて居るかを見やう。

×

先づ大會第一日の幕を切つて、會場フレーミッシュ・ハウスの四壁にかゝげられた各國各地方の闘爭旗をふるはした司會者エド・フイメン氏（議長）の司會演説に聽かう。

氏は、今日帝國主義的搾取强壓が、帝國主義國は勿論、植民地半植民地の被壓迫人民層の骨髓にまで浸込んで居ること。之れに對して帝國主義國にあつては階級戰として、又植

民地國にあつては國民革命或は民族解放戰として、反抗運動が熾烈に燃上つてきたこと。及び、之等の各國各地方の運動が本聯盟の運動によつて統一的になり出したこと。更に第二インターナショナルの幹部達は本聯盟の伸長を恐れて、之れが妨害中傷に寧日なきこと。我々は如上の彈壓妨害を我等の全世界的統一戰線の力によつて壓返へして運動を進展せしめねばならぬ事を口を極めて强調した。

氏が述ぶるまでもなく、今日各國の資本主義がその最後の小康期を幾分でも長く生延ばさんがために、兇惡な帝國主義的政策を弄して、自國並に植民地半植民地國の勞働者、農民、小市民——所謂下層被搾取大衆を抑壓してゐることは火を見るよりも明かな世界的事實である。

之れは決してこの大會が觀念上認識した世界資本主義の現段階の事象では斷じてない。世界の隅々から西歐の小都會ブリユッセル市に參じた各國各地方の代表者が大會三日間を通じて、血涙と共に吐いた言々句々の結晶から示現された世界的事實なのである。

こゝにこの聯盟のもつ强みと重要な意義が存在する。

ペルシャ代表は壇上から何を獅子吼したか。インド代表は何を訴へたか。南亞聯邦代表は何を摘抉したか。彼等は、英國帝國主義の魔手のためにその國内に於ける、勞働條件が如何に傷けられてゐるか、國民の病死人が如何に多きか。又之れに對する反抗運動は如何に血を以つて彩られてゐるか——血が滲む言葉を各國代表の面前に投げつけたのであつた。

又支那代表は何を叫んだか。彼等は國民革命運動が常に英日米の帝國主義の爲めに、その進展を阻止せられ、且「白色恐怖」——大虐殺の下に如何に多くの同志が冷たく横つたか——舌端に火を吐いて帝國主義の罪過を曝露した。

たゞひとり、ペルシャ、印度、支那のみならず、參集した各地各國の代表は、生々しい事實を以つて現在帝國主義が如何なる迫害をそれぞれの地に强行してゐるかを說いた。更に各代表は、この死線に彷徨しながら各地の被壓迫民衆は如何に執ように、果敢に、此の帝國主義の强壓に抗爭してゐるか、その反抗運動は「反帝國主義」「民族獨立擁護」の名の下に或は階級戰として、或は國民革命運動として如何に苦難の路を辿り乍らも、目覺ましくほういと進出してゐるかを說いた。

即ち、帝國主義の害悪が全世界的に擴大されてゐると共に、これに對して「反帝國主義的」運動が之れ亦全世界的に波立つて來たことがこゝに於て明瞭な事實をもつて認られてゐる。

卽ち、我々はこの聯盟の運動の底に、如何に熱烈に反帝國主義の氣勢が渦卷いてゐるかを認め得やう。これこそこの聯盟のもつ根幹であり、基礎構造なのである。

×

更にこの聯盟の運動並に第二回大會を通じて、注目すべきものは、エド・フイメン氏並に各國代表が屢々論難した處の、第二インターナショナル及び各國の階級的裏切者社會民主黨幹部達の排擊である。

英國代表も云つた如く、英國勞働黨の代議士中僅かに十名が本聯盟を支持するのみで、他は全部この運動に對してサボタージユしてゐる。英國勞働黨幹部は如何に勞働者の組織運動を等閑にしてゐるか。のみならず、最近は失業と飢餓の十字路に徨へる英國數百萬の勞働大衆を外に見て、「勞資協調」の懷内に頭をつっこんでゐるのだ。又、支那代表は叫ぶ國民革命軍の進出の前途に裏切者蔣介石は如何なる手を擴げたか。又日本の、、、、、、、、、、、、、等は昨年五月上海に渡り軍閥

の手を通じて、如何に惡辣な裏切りを蔣介石の掌中に授けたかを痛烈に摘抉しつくした。

更に第二インターナショナルは、自己の勢力の浸蝕を恐れて、この聯盟を目して「モスクワの支部」等々の中傷を擅まにしてゐる。

各國帝國主義の兇暴性を各代表の口から、心に徹するまで聞かされた我々の耳は、更にその同じ口から、第二インターナショナルを始め、各國各地の社會民主々義者社會改良主義の階級的罪惡の數々を聞かねばならなかつた。

此の徒輩が現在の世界資本主義の段階に於いて演ずる役割は、戰線を分裂に導く資本主義の賣店、反動主義のくわいらい以外の何物でも有り得ないこと――之れ又この會期を通じて、各代表のもたらした事實によつて天日の下に曝らされねばならなかつた。

かゝる階級的裏切犯罪の前科者を、階級戰線、民族解放戰線に交ゆることは、盜賊に糧を與へるよりも危險多きことである。この敎訓を各國各地の運動は苦い事實から學びとつたのだ。從つてこの聯盟が、これ等階級的裏切者、戰線統一の妨害を徹底的に排撃することはあまりにも理の當然ではないか。これは又この聯盟の中に燃え上つてゐる一條の重要な火焰である。

×

以上大體この聯盟の底に醸された熾烈な二條の氣運が何物であるかを描いた。

然らばこの聯盟は如何なる組織を有つてゐるか。

大會第二から第三日にかけて、各代表によつて熱烈に討論され、その結果、極めて廣汎な組織範圍をとることに決せられた。

「組織に關する決議」中の「組織の基礎」とは、

「帝國主義的支配に反對し、凡ての民族自決のために、凡ての民衆の國民的自由のために、凡ての種族、階級及個人の平等なる權利のために戰ふ處の――凡ての政治結社政黨、勞働組合及個人は、本聯盟に加入し得。」

と云ふ程、廣汎たるものがある。

しかし、この聯盟は決して政黨でも、勞働組合でもない。一個の尨大な黨外大衆團體である。從つて、かゝる組織をとることによつて、より多くの團體及個人をこの聯盟に加入せしめることが出來るのである。

併し、この組織の基礎がかくも廣汎だからと云つて、それは階級的裏切者或はそうした團體までも含んで差支へないと云ふ様なノンセンスな廣汎性を示すものでは斷じて無いとは之等の一黨に對する排撃が如何に盛んであるかが最も明白に語つてゐる。否寧ろ、如上の指導精神を盛られたこの組織の廣汎性こそは、今日帝國主義の白牙を前にしてゾチアルデモクラットの小細工的裏切りによつて、分裂多岐を極めた全世界の階級戰線、民族解放戰線の中に强固な統一運動を押進めるべくこの聯盟が十字軍を起し得る可能性を十二分に示唆するものであることを確信せしめる。

玆に我々は、この聯盟のもつ意義と其の使命の重要性を明確に認識することが出來る。

全世界の被壓迫民衆層の强力な支持の上に反帝國主義、民族獨立擁護の双翼を擁いて、歐洲の一角に誕生した此の「聯盟」こそは、ひとり歐洲に於ける最近の反帝國主義運動の一環たるに止まらず更に全地球上に燃燒して行く反帝國主義運動の一大主流たるにまで擴大し、各國各地の解放運動に絶大な血と肉とを寄與し、進んで、分裂に陷つてゐる階級戰線の統一てふ重大なる歷史的使命を實現して行く原動にまで發展して行くであらう。

以上、本聯盟を通じて、最近歐洲に起つた反帝國主義運動を思ひついたまゝ記述したまで、論じて及ばざる點は深く讀者に謝する次第である。(一九二七年十二月十八日)

普選議會に向つて第一の要求

先づ團結權の獲得を

安部磯雄

議員の選擧に於ける無産政黨の慘敗は實に驚くべきものであつた。憶ふに今回の總選擧に於ても無産政黨は同一の結果を繰返すのではあるまいか。假りに無産階級が全部自己の代表者に投票する程の自覺を有して居るとするならば、一擧にして四百四十名の代議士を選出し得る譯である。然し今回選出される無産黨の代議士が最大限廿五名最小限十名位と豫想されて居るのは、如何に無産階級が無自覺なる烏合の集團であるかを語つて居る。

然し私は決して無産階級の無自覺を責むるものではない。何となれば彼等に團結によりて階級意識を得る程の教育を得て居ないからである。勞働組合や農民組合の傘下に集まつて居る者は兎に角意識的に團結した者であるから必ず無産階級の代表者に投票するけれども、組合外の者に對してはこれを望むことが出來ない。故に普選を無産階級のために最も有利ならしむるには無産階級の團結といふことが必要條件となつて來る。普選が過去數年間に於ける私共のスローガンであつた如く、總選擧直後に於ける私共の重要題目は團結權の獲得であらねばならぬ。

有産階級は凡ゆる手段を盡して普選案の通過を阻止した如く、今や勞働組合や農民組合の公認に關する法律案の通過に極力妨害を加へんとしてゐる。勞働組合法案が議會に提出されるまでには資本家側から種々なる修正案[illegible]

無産政黨が若干の代表者を議會に送つたならば先づ無産階級のために團結權確立を要求すべきである。普選の獲得は政治上から見て無産階級の一大勝利であつた。然し現在の如く團結權が曖昧に取扱はれて居る限り、無産階級は經濟上から見て決して解放されて居るとは言へない。如何に普選が行はれても無産階級が自由に團結することが出來なければ、彼等は單に烏合の徒たるに過ぎないのである。私共の見る所に據れば有産階級は僅に我國人口の五分を占め、無産階級は九割五分を占めて居るに拘はらず、昨年行はれた府縣會

たのである。團結權は明に憲法の認める所であるに拘はらず、有產階級の支持を受けて居る政黨は鐵面皮にも無產階級の團結權に妨害を加へんとして居る。殊に反動政策を生命として居る政黨は旣成の勞働組合さへ撲滅せんと企てて居るではないか。無產階級が有產階級に對抗し得る唯一の手段は團結である。然るに此團結權を無產階級から奪ひ取らんとするのは當に無產階級の生命を奪ふものと言ふて差支はない。普選を斷行したのは恰も無產階級に有產階級と同樣の武器を與へた樣なものであるけれども、團結權が公認されない限り、無產階級は其利器を有効に使用し得ないのである。刀は與へられたけれども其刀を拔くことが出來なければ何の役にも立たない。私は其處に有產階級の計略が潜んで居ることを確信する。故に普選實行の直後に於ける私共の運動はどうしても團結權の獲得を主なる目標としなければならぬ。

要するに經濟運動は本であつて政治運動は末である。農民組合や勞働組合や俸給生活者組合や官吏組合の下に無產階級が團結さへすれば、政治運動の如きは忽にして其効を奏することが出來る。政治運動は一見派手やかであるけれども、それは飽くまでも末であることを考へなければならぬ。政治運動が花であるならば經濟運動は根である。根を培養せずして花の美しきを求めんとするのは無理である。故に無產階級運動者は經濟運動に對して重大なる注意を拂はなければならぬ。從つて團結權の獲得に全力を注ぐ必要がある。

現在の經濟組織は雇傭關係を基礎として居るのであるが、其處に現社會の惱みが潜んで居ることを考へなければならぬ。私共は人類社會が雇傭關係を脫して更にコオペレテイーブ關係に進むことを理想として居るけれども、現在の組織が存在して居る限り、これに對して應急の手段を講ずることも亦必要であると信ずる。言ふまでもなく多數の勤勞者は雇傭關係の下に置かれて居るのだから、何人も一種の壓迫を感ぜざるを得ない。若し雇主が完全無缺の人ならば兎に角、然らざれば必ず依然として雇人を使用し搾取する。若し彼が個人事業の持主であるとすれば、彼は全く專制君主の如くに振舞ふのである。俸給の增減は彼の意のまゝであつて、時には事業の都合で解雇されることもある。昔の詩人は『人生苦樂依他人』と言ふたが、雇人の苦樂は雇主によつて定まるといふのが今日の實際ではないかと思ふ。而してこれは單に筋肉勤勞者のみではなく、精神勤勞者にも適用されることである。斯の如く雇主が專制權を有する場合に於て雇人の生活は極度の不安に陷らざるを得ない。これが多數の人々に與へられた運命だと考へたのは封建時代のことで、現在の勤勞階級は決して斯の如き運命論者ではないのである。

彼も人なり我も人なりといふ思想を有する勤勞階級は雇主に對抗する方法として團結權を要求して居る。我國に於ても一時は筋肉勞働者の團結を默認したため、勞働組合や農民組合が各所に起つて、今や大なる勢力となるに至つた。最初に組合の實力を輕視して居た

資本家階級も現在は多少の脅威を感ずるに至つたので、積極的に勞働組合法に妨害を加へるやうになつた。のみならず彼等が根本的に組合を破壞せんとの野心を藏し居ることは野田の爭議によりてこれを窺ひ知ることが出來る。今後勞働組合法案が幾度議會に提出されても有產階級を代表する政黨は種々の口實を構へてこれを否決するに相違ない。此時に當り無產政黨議員の採るべき態度は二大政黨の間に介在してキヤステイングボートを有效に利用することである。若し二大政黨の中何れかが無產階級に滿足を與へるが如き勞働組合法案に贊成するならば、無產黨議員は自黨の主義主張に反せざる範圍に於て其政黨を援助しなければならぬ。これが無產政黨の行くべき途である。

然し團結權を要求する者は單に筋肉勞働者のみではなくて、凡ゆる俸給者も痛切に其必要を感じて居る。何故に官吏は組合を造ることが出來ないのであるかと言はゞ何人も容易にこれに答へることは出來まい。勞働者や小作農が組合を造りて資本家や地主の橫暴に備へることが正當であるならば、會社員や官吏が組合を造るに何の不思議があらう。官吏や會社員は絕對服從を要求されて居るのであるが、これは全く封建時代の思想を其まゝ繼承して居るものではないかと思ふ。筋肉勞働者が組合を造りて生活の安定を得る必要があるならば、同一理由によりて官吏も會社員も勝手に組合を組織する自由を要求する權利がある。或意味に於て俸給生活者は筋肉勞働者以上に生活の不安を感じて居るのではないかと思ふ。筋肉勞働者は不完全ながらも組合を有して居るに反し俸給生活者はこれを利用する程の位地に達して居ない。今後に於ける俸給生活者は當然組合を組織して自己の利益を擁護すべきである。雇主は强者であり、雇人は弱者であるから、弱者は團結の力を以て强者に對抗しなければならぬ。

雇主と雇人の對抗は社會の秩序を破壞するものであるから甚だ面白くないと難ずる人があるけれども、これは單に權力者の勝手なる意見に過ぎない。若し現在の經濟組織がコオペレテイーヴであるならば、雇主と雇人の對抗は全然あるべき筈はないけれども、現に雇主と雇人の關係が存在して居る限り、雇人は當然何等かの方法によりて自己の立場を擁護しなければならぬことになる。若し雇主が悉く正義の精神によりて雇人に對するならば、雇主と雇人の對抗は有り得ないかも知れぬが、此の如きことを現在の雇主に注文することは全く不可能である。會社員も官吏も工場勞働者や小作人と同樣に生活の不安を感じて居るのであるから、團結の力によりて勤務時間、俸給、職業の保障、解雇手當といふが如き問題に對し自己の意見を貫徹するために努力しなければならぬ。

若し有產階級が飽くまでも無產階級の團結權を阻止することになれば、無產階級運動は遂に普選法通過以前の狀態を繰返すことになりはしないかを怖れる。多年普選を希望してこれを獲得することの出來なかつた無產階級は絕望の結果サンデイカリズムの思想を選ず

るに至つた。即ち、、、、、、、、、、、、といふ方針に向つて進んだのである。完全に團結權が認められるならば、普選は確に無産階級のため活路を開くものであるけれども、團結權の阻止は即ち無産階級のために進路を塞ぐことになる。此狀態が永く繼續することになれば、普選は何時までも有名無實の制度として無産階級に咀はれるかも知れぬ。斯の如く論じ來れば、普選と團結權とは不可分の關係に在ることが判る。完全なる團結權なくしては普選を徹底せしむることが出來ない。私が普選直後の議會に於て團結權の獲得が先づ無産政黨により叫ばるべき問題であると考へるのはこれがためである。數年前普選運動が國民全體の血を沸した如く、今後數年間に於ける重大問題は團結權の獲得といふことであらねばならぬ。

議會に先端を有する徹底普選の全國的大衆運動

麻生久

一

『當選したならば第一に何を要求し、何をなすか?』

私は今、宇都宮の選擧事務所で、本稿を草してゐるのであるが、鍋田博士始め多くの同志の應援によつて吾々の運動の氣勢は上つてゐるが、未だ當選の目安はつかない。なぜならば私の叩き落しをねらつてか、政友も民政も協定して、定員數しか立候補してゐないからである。

しかし乍ら、吾々が第一に要求し第一になすべきことは當選しても、しなくても、第一に要求し、またなすべきことである。否、それは吾々が既に日常不斷に闘ひ來つたことである。當選するならば、その戰線を議會にまで延長するに過ぎない。

私は選擧ポスターに次の如き五項目の中心スローガンをかゝげて、民衆に公約してゐる

二十歳以上の男女に選擧權を與よへ!

働く者に生活を保證せよ!

耕す者に土地を保證せよ!

税金は大金持からとれ!

既成政黨を打破せよ!

この中心スローガンは、吾黨大會の決定した三運動のスローガンであり、そして總選擧は、この三運動の波に乗つて組織し、選擧後に於いても、黨はこの三運動を黨の半恒久的な大衆的日常闘爭として行ふことによつてゐる、即ち當選者は、黨によつて組織された三運動のための全國的民衆運動の先端としての

役割を議會に於いて執行すべく、既に大會に於いて命ぜられてゐるのである。

二

謂ふ所の三運動とは何か？

三運動とは徹底普選獲得運動、生活權擁護運動、既成政黨打破(既成議會彈劾)運動――三つの運動を綜合した民衆運動である。これは昨年の九月より繼續的に全國支部を中心として、或は集會、演說會、示威運動、ポスター、ビラ戰、署名請願運動によつて行つて來たものであるが、最も成功的に行はれたものは、群馬に於ける諸車稅廢止の民衆運動、新潟に於ける產米檢査制度改正運動、東京、大阪に於ける借家權運動、婦人解放署名デー、五十四議會彈劾運動、兵庫に於ける諸車稅廢止運動等である。運動は未だ端初的であつて、民衆の基礎的要求なる經濟的要求を捉へて大衆を動員してゐるが、何處に於いても、既成政黨との對立戰となつて民衆を極度にアジチートしてゐる。黨が議會に少數でもその先端を有するやうになれば、三運動も急速に成熟し、今後に於いて恰も英國に於けるチアーチスト運動の如く、無產階級の最大中心運動を形成するやうになるであらう。

三

徹底普選運動とは何か？

本運動は普選法を改正して普選の趣旨を一層徹底せしめて、無產階級の政治的攻擊力を增大せんとする。民政黨は『普選の一票は普選の功勞者なる吾黨へ！』と云つてゐる。普選は一見、既成政黨が賜物として民衆に贈つたが如く見え、またしかく吹聽してゐるが、しかし『普選は無產階級成熟の尺度』(エンゲルス)であつて、無產階級の擡頭に壓倒されてしぶ〳〵出したものである。それ故に普選の本旨なる財產制限撤廢に矛盾するが如き、立候補の供託金制度がある。これは無產階級代表者の立候補を致命的に妨害するものである。また性別年齡及び住居の制限がある。これは有權者數を可及的に減少せしめんとする企圖である。產業線に沿ふて勞働力を動員されつゝある勞働者に於いて住居の制限は、殊に然りである。更らに大衆動員を禁止する小刀細工的禁止條項がある。これ凡ての運動に於いて、敵を唯一の力とする無產者への抵抗に外ならぬ。また既成政黨は普選を恐るる故に三黨首の妥協等の醜劇を演じてまで解放を今日まで引きのばしたのだ。

吾々は次の如き改正意見を持つ。

(イ)滿二十才以上の男女の選擧及び被選擧權。(ロ)言論、出版、集會、結社の自由。(ハ)言論及び文書による運動の自由、(ニ)制限及び干涉の排擊。(ホ)投票日の公休制と給料全額負擔。(ヘ)供託金制度の撤廢。(ト)居住制限の撤廢。(チ)缺格條項の撤廢。(リ)大選擧區比例代表制の採用。(ヌ)買收の嚴罰。(ル)不在投票。(オ)殖民地に於ける普選の卽時實施。民衆は普選を待ち望んだ。こん度の總選擧によつて、民衆の徹底普選の要求は更らにアジテートさるゝに異いない。吾々は有效にこの民衆の要求を組織し代表するであらう。

更らに投票日の公休制のためには、この選擧中の吾々の一つの鬪爭でもあつた。政府は二月十九日が第三日曜にも拘らず投票日を二月二十日にしたといふことは、如何に普選に對し、新有權者なる無産民衆に對し熱意なきかを物語るものである。彼等が府縣會選擧當時の大なる棄權率を見て、特別立法の必要を云々し、また棄權防止を宣傳するといふも、勞働力を唯一の生活手段とする民衆殊に生活難の中にある今日に、第三日曜の十九日をさけて二十日に決定したのは、如何に辯ずるも、全體としては棄權の奬勵であり、階級的には無産階級の代表者への妨害なりと斷ぜざるを得ない。吾黨は解散即日政府に向つて、投票日を十九日にすべしとの要求をなし、二十日に決定さるゝや、政府に對しては。(一)投票日の公休。(二)投票日に於ける一切の雇傭有權者の解放。(三)投票所の增設を要求し、同時に同樣の要求を勞働組合及び黨支部を通じて各工場、會社に要求した。後者は大體に於いて成功した。

『滿二十歳以上の男女に選擧權を與へよ!』のスローガンはこの徹底普選を示す。

四

生活權擁護運動とは何か!

この運動は社會に有用なる機能を營みつゝある全民衆に、その當然なるべき生存權を社會的に保證せんとするの運動である。社會を構成し、社會的機能を營みつゝあるにも拘らず、民衆は生存權を脅威され、剝奪されてゐる。これはかの金融恐慌以來、その甚だしきを加へて來た。金融恐慌によつて、全民衆は、、、、、、への奉仕のために九億七千萬圓の重税を課せられたばかりでなく、勞働者には産業の合理化の名の下に、工場閉鎖、時間延長、賃銀の引下、解雇——失業が、農民には立入禁止と立毛差押、小賣人には重税と破産、俸給生活者には事業縮少と馘首が襲つた。しかもそれに反抗せんとするものの上には、、、、、、、、、。今こそ民衆にとつて『稀有遭難』の秋である。

生活權擁護運動は、かゝる民衆の要求を代表し、殘されたる最後一線——生命の權利を防衞し、生存權と勞働權を獲得せんとするもので、最小限要求として、次の如き十法案を立法化されんとするものである。

(一)勞働組合法(團結權、罷工權、團體協約權)、(二)生活賃金法、失業保險法(勞働權)、(三)健康保險法改正、(四)休銀預金者救濟法、(五)家屋税、諸車税の廢止、(六)借地借家法の改正と全國的實施(借地借家權)(七)完全小作法(立入禁止、立毛差押反對——耕作權)、(八)貧窮者救濟法、(九)入營者家族扶助法、(十)小賣商人の免税法。

『働くものに生活を保證せよ!』『耕すものに土地を保證せよ!』は以上の十法案要求の具體的スローガンであつて、以上の十法によつて必要なる財源、或は代り財源は財産税——資本課税等。所得税、相續税の高度の累進賦課、庭園税、利權税——水利税等の新設或は增率である。これ税金は大金持より出させろである。

五

以上の凡ての要求のためには既成政黨と鬪爭することによつてのみなされる。『既成政黨打破』は吾等の直接的鬪爭であり、また綜合的鬪爭でもある。既成勢力——地主と資本家——の前衞なる既成政黨と鬪爭してのみ、民衆の意識は高められ、無產階級の政治勢力は擴大してゆくのである。

六

以上の三運動が吾黨が、從つて吾々黨員が協力して鬪爭し來たものであり、將來も鬪爭しゆくものである。吾々は當落を問はず、この運動のために渾身の勇を鼓さねばならぬ。若しも當選するならば、議會に於ける民衆の前驅として、この運動のために除名を賭して鬪ふのみである。

山岡警保局長は無產政黨候補に就いて、『田淵豐吉のやうな奴をもう二三人出してやつてもいいではないか』と言つたと傳へられてゐる。政府の役人や既成政黨の人々は、無產黨の議員を目して『氣まぐれ者』位に考へてゐるらしい。

しかし無產黨議員の背後には組織されたる大衆があり、それを核心とする民衆群がある。無產黨議員は單なる人氣の代表者でなく、直接のこの大衆の代表者であり、その先端であり、部分である。小數であらうにちがひない無產派議員は、その要求を、その小數者の院內の掛引きによつてのみ通さうとはしない。、、、、、、、、、によつてのみ通すのである。議會に先端を有する全國的大衆運動によつてのみ獲得するのである。議會と街頭を貫く既成政黨と無產黨の對立——地主及び資本階級と無產階級の對立との強烈なる對立鬪爭を通じてのみ吾々の陣營は擴大するであらう。

吾々は過去に於いて幾度か民衆運動を起した。例へば惡法反對運動、對露非干涉運動等。しかしその民衆運動は多くの場合、その先端を議會に有しなかつたために、單なる警官隊との小ぜり合に終り勝ちであつた。無產黨議員の當選は、かゝる大衆運動の戰線の議會內への延長に外ならぬ。

若しも私が當選するならば、黨の既定の方針に從つて、先づ第一に徹底普選運動のための大衆運動の先端として力鬪したいと考へる。

(三、二、三、宇都宮にて)

帝國主義戰爭防止のために

藤森成吉

私は先づ次の事を斷言したい。

私が『若し當選したら、』私は『國民』の爲に鬪爭しないであらう。否、私は國民の九割五分を占める勞働者農民無產市民大衆の爲だ

けに闘爭するであらう。何故ならばこれら無産民衆の利益と一握りの資本家及び地主の利益とは全く相對立してゐるからである。

此の對立を無視して『國利民福』を標榜するは、無智に非ずんば欺瞞である。

言葉に於て判斷せずして、、に於て判斷せよ。

國利民福論者政友會――その過去及び現在の全行動は、大資本家及び大地主の擁護であり、無産民衆の抑壓である。普選の通過を最後迄妨害したものは政友會であり、對支出兵を決行し、川崎造船所勞働者の解雇に、、、、、させたのは政友會である。

國利民福論者民政黨――歪み曲つた普選法の交換に、治安維持法を發布し、、、、、、、を制定し、三頭首妥協を行ひ、政友會の資本家救濟七億圓國庫負擔に全員一致を以て贊成したのは、實に此の政黨である。

國利民福論者實業同志會革新黨――これ亦豪銀救濟、日銀補償の問題に於て、完全に政友會、民政黨と行動を共にし、國利民福が如何に無力な、空虚なるものであるかをマザマザ證明した。

繰返していふ、私は議會に於て『國民』の爲に闘爭するに非ずして無産民衆の爲に闘爭するであらう。

所で無産民衆が、即ち勞働者が、農民が、及び小商工業者、俸給生活者、自由職業者等の大部分が、今日即時實現を求めてゐるものは餘りに多い。何故ならば彼等はすべてを與へ、而してすべてを奪はれてゐるのだから。勞働農民黨の諸政策と雖も恐らくその一部分に過ぎまい。勿論無産民衆諸君より派遣された私は、全身を犧牲にしてその貫徹の爲に戰はんとするものである。

然し乍ら勞働農民黨の諸政策の中に集中的に表現されてゐる民衆の要求や主張、八時間法にせよ、最低賃銀法にせよ、耕作權の確立にせよ――それらのものが、今數名の代表が無産民衆から議會に派遣されたからといつて、資本家地主の代表との『紳士的』協議によりて、即時實現出來るかの如き空想を、諸君にふり撒く事は、もとより私のせざる所である。之を貫徹せしめる者は實に私といふ個人ではなくて、又議會に於ける協議ではなくて、實に民衆の大衆的、、、、である。嘗て大正二年官僚的桂内閣を瓦解せしめた者は誰でもない議會外に於ける數萬の民衆の數回にわたる、、、、、であつた、既成政黨をしていや／＼ながら普選を施行せしめたのは、勞働組合、農民組合の急速なる勃興を通じて現れた民衆の擡頭であつた。

若し日本に於て十八歳以上の男女が、現役兵士たりと雖も悉く選擧權を所有し、住居制限供託金が撤廢され、八時間勞働制が確立され、働く農民に土地が保證せられるに至るならば、それは無産黨代議士の力ではなくして實に勞働組合農民組合、工場代表者會議、村民縣民乃至國民、、、、、、、による大衆的、、によるものであらう。

問題は如何にして大衆的、を強大にしてゆくかにある。問題は莫大なる金力によつてすべてを存在してゐる資本家地主と鐵鎖の外失

ふべき何をも有せざる被支配階級の、力と力との消長にある。

　さればこそ支配階級は、治安維持法、治安警察法、暴力行爲取締法、警察犯處罰令、出版法、新聞紙法等を武器として、民衆の言論出版集會結社の自由を徹底的に彈壓するのである。私は勞農黨の代議士として、議會外の、、、、、、、、へて、大衆諸君より發せられたる一肉彈として、諸君の要求を、諸君の主張を、議會内に於て、彼等の代表の面前に於て高らかに叫ぶであらう。彼等の秘密、彼等の欺瞞、彼等の壓迫を公衆の面前に於て殘りなく曝露するであらう。

　私はそれこそが無產黨代議士がなさねばならぬ最も重大な任務であると考へる。それこそは秘密と四疊半とを好む彼等を、、、せしめ、議會外の大衆團結、、、、、を愈々活潑ならしむべき道であらう。然して反對に後者は、議會内に派遣せられた肉彈をして愈々活潑に、愈々有力ならしめるであらう

要言すれば、政治的自由の獲得――大衆的行動、言論出版集會結社の完全なる自由、團結權罷業權の獲得、『若し私が當選したならば、』私は一身を賭してその爲に戰はんとするものである。

　第二に我が議會に於て、牢獄と、、、、の下にも、飽く迄戰はんと覺悟してゐる任務は、帝國主義戰爭に對する鬪爭である。民衆の生活が今日か程に迄破綻してゐる重大なる原因が、負ひ切れぬ重税にある事は誰でも知つてゐる。しかもその許れん誅求の重なる根據は、一方に於ては六十億圓に近い公債の償還、他方に於ては年々五億に近い軍事費にある。

　サヴエート聯邦を除き世界各國に於ける軍事費の異常なる膨脹、市場競爭の激烈化の現狀は、かの歐洲大戰直前よりも數倍も深刻となつてゐる。人は屢戰爭勃發の刹那迄戰爭の必然を信じない。だが危機は今や著しく切迫してゐるのだ。

　來年、さ來年と軍事費の負擔豫定は益々激増してゐる。憲政會内閣の今にきまつた六億七千萬圓の補助艦建造費だけでも、なほあと四億圓以上殘してゐる。更に一度び火ぶたの切られんか、民衆の財貨人命の損失は、測り知る事は出來ない。しかもこれらの犧牲はすべて、銀行家と重工業資本家の祭壇に捧げられるのである。

　『祖國擁護』の、、をあばき、民衆をその毒牙より解放する爲に、全努力を盡す事は、支配階級の利害を徹底的に對立する、無產民衆の代表者が當面議會に於て果さねばならぬ第二の根本的任務であらう。

　之を要するに、資本家及び地主の地位を維持し發展せしめる爲の一切の政策に反對し、彼等の犧牲に於て、全無產民衆の生活の向上の爲に鬪ふ事――こゝに私の全立脚地がある。

　そんな事をすれば社會が混亂しはしないかと危惧する者に對しては答へん、資本家や地主の助けを借りなくても、社會は充分に發展[illegible]

く事の出來るといふ事は、今日もはや世界的事實に於て證明濟みである、と。

すべての負擔は資本家と地主に！

人間本位の政治樹立

杉山元治郎

勞働者に仕事と食を與へよ！

働く農民に土地を與へよ！

すべての人民に自由を與へよ！

瓦木村の家を擧げて選擧事務所に參つて居るので御手紙を只今拜見致しました、政戰に忙しくゆつくりと意見を書いてお送りする時間はありませんが、簡單に御答へ致しましやう。

私の立候補した所以のものは、今までの既成政黨は一部有產階級のみの利益を計つて、多數の民衆を無視し犧牲に供してゐるから之を奪還し、立憲政治の本義に引戻しやうと云ふことです、言葉を代へて云へば金力本位の政治から人間本位の政治に立直さうと云ふことであります。

其で若し當選の榮を得るならば第一に議會に提出すべき問題は眞に働く農民階級を保護し、安心して仕事に從事することの出來る樣な耕作權を基調とした小作法であります、或は又生糸繭の問題にしても今の樣な單なる製絲業者の保護救濟を排して之を生產する農民自身を保護救濟する樣な案を提出したいと思ひます、其には現今の樣な農工兩省を通じて七千萬圓餘りの少額では駄目です、其で所謂產業振興費の增額をすることです、其がために陸海軍費の如き膨大なるものを削減するが良い、軍縮も良い、在營年限短縮も可なりであります、或は土地增加稅、相續稅の累進加率等によつても充分に補ひ得ると信じます。

働く者を保護奬勵するためには失業保險の制定も必要であります、健康保險の國庫負擔も大切であります、殊に兵役は我等多數無產階級の者の負擔されてゐる義務であります、活動の中心、生活の本體を失ふのみならず猶ほ多少の小使錢すらも仕送らねばならぬのであります、此のために如何に苦しんで居るでしやう、故に在營家族の補助金を給與することも是非議會に提出せねばならぬ問題である、例へ一人當り二十圓を給與するとしても現在の十七師團で七千萬圓餘に過ぎない、一部金融資本家を救濟するために七億の補償をなしたことを思はゞ約其の金利で出來るのであります、若し出來ないと云ふならば誠意がないのであつてなさないのであります。

私は斯る實際生活に觸れた、お互無產階級の緊急問題を捕へて提出し働いて見たいと思ふて居ります、色々申上げたいことは澤山ありますが演說會に行く時間が來ましたから之れで擱筆します、以上でも大體御察し頂くことが出來ると存じます。

生産者本位の小作法の制定のために

高橋龜吉

一

普選第一回の議會に於て無産政黨の主張すべき問題は幾つかある。否、實を云へば、從來の政治のすべてに對して、その根本的改革を要求せねばならないのである。だが、無産政黨の一員として、當面の議會に於て、此際私の主張を集中さして見たいと思ふ第一の焦點は生産者本位の小作法の制度についてゞある。併し、この問題に私がその主張の焦點を第一に集中さして見たいと云ふわけには、此の問題が、單にいま當面の大問題になつてゐると云ふことのみからでは決してなく、それ以上之を通して、有ゆる政策の決定につき、われ等はその善惡取捨の判斷を如何なる立場から定めるか、と云ふその思想的根據を社會の民衆に披瀝し、斯くすることに由つて、已成政黨の立場とわれ等の立場が如何に異るかを明かにし得ると考へるからである。

二

われ等は「公平なる小作法の制定」と云はずに、ワザと、「無産者本位の小作法の制定」と謂ふ。その譯は、公平なる小作法と云ふ場合には、小作人と地主とを對等に見てモノを考へてゐて、あく迄も、今日のまゝの地主が永續すべきことを含意してゐる。之れに對し生産者本位の小作法と云ふ場合には、農業そのもの丶進歩繁榮のために、若し地主の存在が邪魔をしてゐるとせば、その場合には農業發展のために必要な犧牲を地主に荷はすことは、社會の進歩發達のために却つて望ましきことであると考へてゐるからである。

一體、イツ、如何なる世の中に於ても、社會のため有用な働きをなしてゐる者の利益が優先せられ、さうでない者の利益がそれだけ犧牲にせられると云ふことは、これは、社會秩序の最も進歩した整理方法として、常に利用せられてゐることである。現に、資本家自身、その事業の衰微を挽回する必要に迫られた場合には、遠慮なく、その中の優秀なる社員を殘して、日常余り有用な働きをしない社員を馘首する。社會に於てもさうだ。いま、我國は、その農村の疲弊を救治するため、農村經濟に一大整理を必要としてゐる。而してその整理の方法は、云ふ迄もなく農村經濟の進歩發達を阻む「無用の長物」を先づ丶丶することであらねばならない。今日の我が「地主」は正に、その除去さねばならないもので

ある。

彼等はいま、農業經濟の上何等の働きをしてゐない。その證據には、いま我が地主が一朝にして假りに壞滅したとしても、我が農業はそのため露程の打擊は蒙らない事情にある。否、若し、「地主」が無くなれば、我が農業はそれだけ地代の負擔から免かれ、これ迄耕作しても(地代のため)引合はなかつた土地まで優に引合ふことになり、斯くて我が農業は益々繁榮するに至る筈である。

にも拘らず、斯様に何等世の中に働きのない「地主」が、依然農村經濟に君臨して、高い小作料を取立てる「力」を持つてゐるわけは何故か。要するに、我が法律が「地主」を不當に保護してゐるからである。われ等は斯様に、何等世の中に有用な働きをしてゐない「地主」なるものを、國家が法律を以て斯く保護すべき必要を認めない。宛かも明治維新當時の凡庸無用の家老の如く、之を社會から、、、とか、寧ろ、我が經濟今日の行詰を打開するために必要な、進歩的方法であると信ずる。之れ、われ等が地主と小作人とを對等視する小作法に反對して生産者本位の小作法の制定を極力主張する所以である。而して、此の生産者本位の小作法制定の主張の中に流れてゐる理論は又、他のあらゆる政策の方針を決定するわれ等の羅針盤である。

大衆的政治行動の尖端として

加藤勘十

一

今、選擧戰の其最中にあつて、『若し議會に出たら』と云ふことを前提として議論を進めることは、何んとなくオコガマシサを感じます。さりとて、吾々の議會政治に對する態度には自ら一貫したるものがあり、又、無産階級解放運動の一兵卒として議會に臨む場合には『何を爲すべきか』『何を爲さねばならぬか』と云ふことは、無産階級解放運動それ自身が必然的に決定してゐる處であります。其の決定された『何を爲すべきか』『何を爲さねばならぬか』を述べることは、選擧戰の最中と否とを問はず問はれる儘に何時でも答へ得られる處であるが故に、其の點を此處で述べることゝします。

我が日本勞農黨は一、徹底普選の獲得、二、生活權の擁護、三、既成政黨打破の三目標を當面の重要なる鬪爭目標として鬪爭を終始してゐます。この三目標を鬪ひ拔くことは日本勞農黨の使命であります。從つて、議會の內と外とを問はずこの鬪爭目標を忠實に勇敢に大膽に鬪ひ取ることこそ、吾等の全政治的態度であります。この故に、議會內に於ける一切の行動の準則は大衆の政治的行動の基礎の上に立つものであります。即ち日本勞農黨員

の議會内の行動は、大衆の政治的行動の尖端としての行動に制約されてゐます。これ日本勞農黨が單なる代議士の集團黨でなく、日常不斷に街頭に勇敢なる政治行動を行ふ大衆黨である所以であります。が、今玆での問題は『若し議會に出たら』に限局されてゐますから、そのつもりで述べることにします。

等しく徹底普選の獲得と云つても、又、生活權の擁護、既成政黨の打破と云つても、議會の内と外とでは自ら其の具體的方法が異らねばなりません。然らば、議會に於いて如何なる具體的戰術が用ゐ得られるであらうか、問題は正に其處にあります。

二

吾々は吾々の日常政治鬪爭の尖端としての現はれである議會に於ける仲間の行動を決定する前に、先づ今日の議會の機構を解剖することを忘れてはならない。私は此處で今の議會の機構を解剖してゐるだけの餘裕をもたないから、唯、それを念頭において叙述してゐるものであることを諒解して頂きたい。

『若し議會に出たら』……何事を爲し得るであらう。私はそれを三段に分けて見ることができます。一、何を爲さねばならぬか。二、何を爲すべきか。三、何を爲し得るかであります。

一の『何を爲さねばならぬか』は無產階級の歷史的使命を遂行する上に、必至的に爲さねばならぬ殆んど絕對的の事柄であります。若しこれのみが全部であると考へるならば、吾々は議會に對して殆んど何等の働きかけをせないと同樣の結果をしか期待することができないであらう。けれども、これは當然に二の『何を爲すべきか』に關連して考へ得られると思ふ。『何を爲すべきか』及び『何を爲し得るか』は共に戰術上の問題であります。『何を爲すべきか』とは、常に何事をか爲し得る機機を敏速に掴む必要があり、絕へず客觀的條件の微細なる變化に對しても最善の注意を怠ることなくして、『何を爲さねばならぬか』の無産[illegible]としての[illegible]行動を指します。三の『何を爲し得るか』は當然に二の『何を爲すべきか』に關連してゐるので、この言葉は『何をたすべきか』の常識的表現であると思ひます。從つて問題は唯『何を爲すべきか』の一點に集中されるのであります。しかしながら、斯の如き抽象論を進めることは意味をなしませんから、この脚地に立つての具體的條件を觀ることとします。

吾々の視野には第一に政友會、民政黨を中心勢力とせるブルジョア勢力の集團がは入つて來ます。政友會、民政黨其他の群小黨派のブルジョア勢力が、多年、議會に蟠居して限りなき專横を恣にして來た事實、國民の名を僭稱して民衆の自由を奪ひ民衆の利益を蹂躙して來た彼等の、、、これに對して吾々は抑へ難き憤懣を感じながらも、被壓迫階級としてより以外の何ものでもなく、彼等の犯せる儘に任すのみであつた。今、辛うじて窮屈なる選擧權を獲得したからとて、吾々の被壓迫階級としての立場が一寸でも解放されたので[illegible]

る民衆の自由の奪還のために徹底普選の獲得を叫び、蹂躪せられた民衆の利益の伸張のために生活權の擁護を叫び而して是等の、、を犯せる膺懲として既成政黨の打破を叫び闘ふ所以も茲にある譯であります。唯、從來は彼等が國民の名を僭稱して民衆の自由を奪ひ民衆の利益を、蹂躪して來たのに對し、吾々は僅かに外部から、これを論難し攻撃し得るに過ぎなかつたのでありますが、今度の選擧を轉期として、彼等の、、の內部に喰入つて內部から彼等の、、を指摘し、攻撃し、而して幾分でも彼等の、、を牽制し得る道が展けた譯であります。されば、吾々が強力なる攻撃力、強力なる牽制力を有ち、民衆の自由獲得のために、民衆の利益擁護のために闘はんとなれば、吾々は議會の內部に強力なる尖端を有たねばなりません。議會內部に於ける吾々の尖端力の強弱は必然に吾々の議會に於いての『何を爲すべきか』を決定するのであります。

三

今日の階級對立の尖銳化した生活態樣は、吾々をして議會に進出するの道、ブルジョア階級の政治的、、を牽制する道が開かれたからとて、それが吾々の生活態樣に何等の變化をも與へないことは云ふまでもないことであります。或は、今日より以上に大規模に深刻に彼等をして國民の名を僭稱せしめることになるであらうことは容易に豫測し得られることであります。彼等の階級的結果が、より深刻に、より擴大され、彼等の階級的支配力がより強大となることは、彼等の勝利の謂ひにあらずして、彼等の敗滅を約束する先行條件でありまして、歷史的必然の順路に過ぎないのであります。が、一時は僅かに鋭い力となつて支配慾を滿たさりとするに違ひありません。議會は、國民の名において、法律——強權——の名において、彼等の支配慾を滿たさせるに好箇の舞臺であります。

この舞臺こそ、支配階級と被支配階級、搾取階級と被搾取階級、自由を[illegible]自由を喝采せる者との闘爭の舞臺でなければなりません。其處に『議會で何を爲すべきか』の內容が決定せられる譯であります。

我が日本勞農黨は黨の綱領三の『吾等は無產階級の利害を代表し、特權階級の壟斷する議會の徹底的改造を期す』が示す如く議會を民衆の自由の府たらしめんとするものであります。而して三十有餘の具體的政策をA徹底普選の獲得。B生活權の擁護の二項に包括して全民衆に公約すると共に、絶へざる日常の闘爭を展開してゐます。議會に於いての行動も當然にこの闘爭の延長であります。

四

吾等をして全民衆と公約せる闘爭目標を高らかに揭げて勇敢に議會に闘爭せしめよ。私は議會に於いての行動を制約せる今度の選擧に臨むに當りまして、飽くまでもこの態度を持して居るものであります。只、私のくれ〴〵も遺憾を禁じ得なかつたことは、色々の

理屈もあるであらうが、結果において支配階級の分割支配に合流するが如き行動を某黨において取られたことであります。若し某君が階級的に見て是非とも立候補せられなければならない理由があつたならば、なぜ、選擧協定協議會の席上において述べられなかつたであらうか、私は其の理由を聽いて已み難きものあるならば、階級的立場から喜んで立候補を中止するものであつたのであります。然るに其の席上においては、某黨の代表者は理由として某會は此處(、、、、)以外には立候補する場所がないと述べられ、第二回の會合に於いては愼重に審議するため、自ら休憩を要求されて約一時間以上に亘る自黨内部の協議の結果、已に公表されてゐる如く立派に說明されながら後に至つて自ら其の聲明を破棄し、對立立候補されたのである。私は若し自分一箇の立場であつたならば潔く某君に讓つたであらう。けれども私の運動資金は多數の黨員、組合員諸君の膏汗の結晶から醵出されたものであつて、私自身でどうにもならない關係上已むなく對立候補として選擧に臨んだのでありますが、私の階級的良心は苦痛に惱んでゐます。この機會にこれだけつけ加へて一般世間の人々に對して諒解を求めておきます。

農村金融の合理化

澤田　謙

政戰の陣中に筆を執る。なにしろ、徒手空拳、既成政黨の金城鐵壁に肉迫しやうといふのだから、言論戰より他に途はない。一日六回七回の演說會といへばそれまでだが、殆んど身體の休まる時はない。殊に、何の緣故もない土地に飛びこんで、たゞ一意上州男兒の意氣に訴へ、既成政黨の打破、國民政治確立の烽火を擧げたもんだから、政友會は民政黨を罵るを忘れ、民政黨は政友會に對抗するの遑なく、悉くが小生　輸入候補・中立候補に對する包圍攻擊だが、その間において、私の感激に堪えないのに、青年諸君の[illegible]である。私はこの[illegible]政黨包圍攻擊のなかにあつて、勇躍して戰ひうるのは、同志諸君の熱烈なる活動と、この青年諸君の共鳴とである。それにつけても、普選初頭の議會に要求したいのは　普選年齡の低下　である。一たい普選年齡を二十五歳にしたことほど、不合理千萬なことはない。二十五歳といつても、九月十五日までに滿二十五歳だから、數へ年にすれば二十七八歳だ。兵役適齡を滿二十歳にして、選擧適齡を滿二十五歳にするなんぞ、人を馬鹿にしてゐる。政治だつてやはり國家の大事だ政治に參與することのできないほどの無能者なら、[illegible]國家の[illegible]を要

つて、滿二十五歳にした方がいゝ。私の實感にみても、年の若いものほど政治思想が發達してゐる。箸にも棒にもかゝらぬのは、頭の固りきつた御老人だ。滿二十歳以上にして、あまり有權者の數が多くなりすぎるといふのなら、御老體の方に御遠慮願ふ方が、よつぽど合理的だ。尤も、いまの既成政黨が、いまだに餘命を保つてゐるのは、この年齡制限のためである。だから普選制度の議會で、すぐにこの選擧年齡二十歳案が、可決されることは難かしいかも知れないが、それだとて放つておくわけにはゆかぬ。政治革新のため、まづ第一に私はこれを叫ぶ。次に、

勞働法と小作法 との至急制定を要求する。私は何も階級鬪爭理論の上から、これを唱へるのではない。階級鬪爭學說のなかには多くの無用な空論癖を認める。しかしながら資本家（雇傭者）と勞働者、地主と小作人との關係は、是非とも明瞭にしておかなければ無用な爭議のもととなる。殊に自作農創定を餌にして、小作法の制定を延ばすのは、まつたくいはれなき無法である。日本に一人の小作人も、急になくなるのなら別だが、いやしくも小作人が儼存するかぎり、小作法の必要はいふまでもない。田畑の小作權と、物品の賃貸借權とを一緒にして、いつまで平氣でゐる氣なのか。明治二十年時代と昭和時代とでは、社會は激變してゐる。法律があまりに社會と離れすぎては、天下不安の基である。勞働法と小作法、この點については、無産諸政黨の間に、或る程度の協同が成立しうれば、便宜であらうと思ふ。

農村金融と預金部 との關係は、言ふだけ野暮であらう。元來預金部十五億の金のうち半分は農村からでた郵便貯金である。農村の金融が逼迫して、つひに事茲に至れる今日、政府預金部の金を運用して、農村金融機關をつくるといふことほど、この世に合理的なことはないであらう。預金部資金運用委員會ができたつて、その委員を任命するのが大藏大臣であつてみれば、どれだけ信頼ができるか。一たい何故、預金部資金運用の狀況を、あのやうに秘密にしておくんだらう。まさか國民の前に公表できないやうな、後暗いことでもあるといふのか。いやしくも國民の金を何等の擔保なしに預つてゐる以上、その運用はあくまで公正、且つ公開的でなければならぬ筈である。秘密の影にはいつでも疑惑が伴ふ。

恩給法の改正 官吏軍人およびその遺族のために、いま一億二千の恩給扶助を費してゐる。われらの收める國稅の一割四分に當る。これだけ拂つて、果してかゝる國家に御奉公を終へた人々の老後や、その遺族の生活を保障するに足るだけの支給ができてるか。日露戰爭に勇名を天下に馳せた山岡參謀中佐の遺族が、僅か三十八圓の扶助料で糊口する有樣では、斷じて然らずといふ他あるまい。然るに一方、大邸宅を構へ自動車を備へ、大會社の重役をしてゐる人が、恩給を貰つてゐるやうな事實もある。一たい文官平均五十五歳、陸軍武官三十一歳で、もう恩給年齡に達するなどは、おかしな話だ。三十三や五は男の働き盛

り。ピン〳〵して働ける人に、何も恩給をやる必要はない。そんな金があるなら、それを夫々個々に恩給や扶助料で衣食せねばならぬ人に分けてやる、それを倍額にでもするのが當り前である。或は一般國民のためにも、一種の恩給保險制ができれば、更に結構であるが、これは長くなるから省く。(二月六日草)

勤勞無産者の生活安定を

鈴木文治

現今の政治が全く一部有産、特權階級によつて壟斷され、國民の大多數を占める勤勞無産階級の要望が殆んど悉く壓迫し去られてゐる結果、我々としては寧ろ來るべき新議會に要求すべきことのあまりに多いのを嘆じたい位である。これを一々擧げるならば恐らくは紙數幾百枚を費すも尙ほ足りないであらうと思ふ。しかく現今の政治は欠陷だらけである。

勿論、我々の究極目標は、この資本主義、官僚主義を基礎とする政治、經濟、社會を根本的に改造することに在るのだが、それの完成は今後幾星霜の耐忍を要する大事業であつて、到底早急に實現し得べきことではない。我々の爲し得べく、また爲すべきことは、この究極目標を根本の基調とした現存制度の漸次的改革以外にない。この意味からして殆んど理想的とも言ふべきわが社會民衆黨の政綱政策を、次の三綱目に大別して、私は連日の政見發表演說會其他に强調してゐる。

一、社會政策の實施

二、財政及び稅制の根本的改革

三、人權の伸張、自由の獲得並に生活の解放

これの詳細な項目については社會民衆黨の政綱政策に讓つておかう。

しからばこれらの漸次的改革の目標のうち、何が最も焦眉の急を要する問題であるかと云へば、恐らくは先づ第一に我々勤勞無産者の當面の生活を安定させることであらう。資本主義社會に特有な、大多數無産者を襲ふてゐるこの生活不安の暗雲こそ眞つ先に取り拂はなければならないものである。この生活安定の要求を我々は大體二つの方面より見ることが出來る。即ち、第一は、直接に勤勞無産階級の生活に覆ひかゝつてゐる過重な負擔を除去することであり、第二は、勤勞無産階級が生活解放の自衛手段として行ふところの合理的な社會運動を保障することである。兩々相俟つて初めて我々の生活に前途に光明を認めることが出來よう。この意味において我々は次の要求を[illegible]ことと[illegible]る。

一、普選の徹底

現在の選擧法は名は普選であるが、實に於て普選の名を恥しめる點が多い。年齢制限に於て、居住制限に於て、取締法規に於て甚だしく不當である。新議會に於ては何よりも先づこの普選法の改正を要求する必要があると思ふ。改正の要點は、年齢低下(二十歳)婦人參政權、居住制限撤廢、保證金制度撤廢、投票時間の公休、不在投票權確認等であらう。

二、勞働立法の完成

勞働組合運動は勞働者の生活解放の要求に基いてゐるのは無論だが、國家産業の將來にも重要な意義を持つてゐる。團結權、罷業權は勞働者が資本家に對抗する當然の自衞手段であり、しかも世界各國に於て既に認められてゐることであるから、これの確認を要求する勞働組合法の提出は言ふ迄もなからう。次に國際勞働條約の實施である。八時間勞働制、最低賃銀法、社會保險法の制定等のことは既に國際勞働會議に提出、若くは條約となつてゐるのであつて、これが實施は當然の義務でなければならない、その他健康保險法、工場法の改正等も逸すべからざるものである。

三、農民政策の徹底

我が國農村の疲弊は昨日や今日のことでない。眞の農村救濟こそ當面の急務と言はざるを得ない。既成政黨の地主擁護策に對抗すべく、小作、自作の生活權確立を高唱しなければならぬ。先づ農民の自主的運動たる農民組合を公認し、團結權、罷業權を確立することは言ふ迄もなく、完全なる小作法を制定して、耕作權の確立、耕地不當明渡しの禁止、立毛差押への禁止、最高小作料の設定等を要望する。農村金融の充實もまた缺くべからざることであつて、農業保險、肥料農具の國營は素より産業組合、農會、農業倉庫等を耕作者本位に改革することが必要である。

四、俸給生活者保護法の制定

下級官公吏、會社員は云ふ迄もなく、大商店の店員、小僧等の俸給生活者は、勞働者農民の如く集團的運動を許されないために、不當の取扱をうけて來たものであつて、その生活を安定せしむるために俸給生活者保護法を制定することはまた當面の急務である。八時間勤務制、不當解雇の禁止、退職手當の公定、公休制の確立等を要望する。

五、失業對策の徹底

失業の浪は資本主義の犧牲であり、資本主義社會が當然責任を負ふべき罪科である、また社會問題としてこれほど重大なものはない、我々は、失業保險法、失業救濟のための公營事業等を要求する。

以上の外、生活手段及び生活必需品に課せられてゐる税金の撤廢、居住權の確立、教育の機會均等など重要なことが多いが紙數が盡きたから省くこととする。最後は我が國帝國主義的外交に對する糾彈、民衆外交の確立もまた絶叫さるべき重大事であらう。

保護法、貧困兒童保護法、補習教育強制法（國庫負擔を多くして）二十五歲未滿者禁酒法の如き當然表はれ來るものと思ふ。

予は議會は、平和であり着實であり、雄大であり、少しの感情も情實も混せず、國民的に愉快な一家庭の樣にしたいと思ふ。（岩手縣二戶郡荒澤村新町佐藤方にて）

新議會へ

——普選議會に向つて第一の要求——

田子一民

新議會に對して予は何を最も緊急切實なものとして要求するか。風雲に戰つて論陣を張りつゝある予は、この問に對して何を答ふべきか。予の當落は有權者の掌中にあり。予の要求は予を除きたる他の議員にのみ望むことゝなるか、予も亦その議員の一員に加つて予の要求に對して、予もその責任の一端を分つべきか。運命は神のみ之を知る。予はたゞ、漠然たる地位に於て新議會に要求するものである。

第一、新議會の議員の言論と態度に對する要求は最も切實なものである。議會の言論はやゝもすれば個人的憎惡、政黨的反感がわだかまり、敵本主義に墮し勝ちである。言論を飽までも公明であり正大であり、些の個人的偏見[illegible]て演説者に對する議員の言動も國士らしく、紳士らしくありたい。此の要求は餘りに平凡な要求であるか、議會に於ける言論は一般風教は勿論、府縣、市、町村會その他の會議に影響すること甚大であるから先づ第一にこれが改善を要求する。議會否認の聲のある端をこゝにも發して居る。

第二、會議の形式について特に煩雜を極めて居る現狀を打破したい。議事のかけ引きの爲め、無用の發言を試み議事の進行を妨害し、徒らに議事の形式などを爭つて終に、重要事をよそにして騷擾するの風がある。實に議會の神聖を汚すものである。予は議長の統率の公正と議員の謹愼とを要求するものである。

第三、[illegible]

私の最も感銘した書物

ヘンリ・フォード

奥村伊之助

H商業學校のX號室では、今や百に近い目玉が、教壇に起つた總主任兼修身受持のY先生に集中してゐる「まつたくこの先生の口から『今日は教科書をよして話をしてやらう』と聞く事は意外な事でした。小說？詩？生徒の好奇心は、先生の言葉をまつばかりでした。

『この本を讀んだ人が有りますか？』先生の右手にあげた本の表紙には明かに「フォード」の黑い四字が浮いてゐます。

『序文には獨逸の一新聞紙上に「工業家、商人及び技師達の會話において、苟しくもヘンリ・フォードの本に言及し得ざる者は、以て經濟問題に發言するの權利なし」と書かれたとあります。私はアメリカ人を最もきらふ獨逸の新聞に、なほこの話の有るのを知つて、異常な感激をおぼえたのであります。私もかなり本を讀みましたが、この樣な本は、まつたく近頃の最も良い本として、皆さんに私がすゝめ得るのであります』

まづこれによつて私達の心は、先生の一言一句にと次第にひきつけられて行つたのであります。一時間余にわたつた先生の話は、すべて熱でありました。そしてこの熱は、私達の胸をば眞ッ赤にもえたゝせました。

『今まで私が話したのは、ほんのこの本の初めの方だけであります。だから私は、皆さんが一人でも余計にこの本を讀まれん事を希望するのであります。この本を讀んで、フォードに成れるか否かは保證できません。しかし、この偉大なるフォード主義は、いかなる小規模の商店といへども、實行する事が出來るのであります』と最後に先生は結ばれた。

『おい買つたぞ！讀んだら貸してやらう』

『僕も買つた』

翌日廊下でAとBとはかうといひました。Bの手には成程四六判のそれらしい本が抱かれてゐます。しかしこんな問答は、到る所で幾回も繰返へされたのであります。

「働いて取れ！」それは今更の樣に私達をかりたてました。扉の「不可能なる事なし、唯なさゞるのみ」のフォードの金言は、眞先に暗誦されました。これはは單なる資本家のバイブルでありませうか。我がY先生は進んでこれを學生達に紹介して下さいました。わづか一圓の本、しかし、これを求めて遂に得なかつた者の多數あつた事實は、いかにヘンリ・フォードが多方面にわたつて要求されてゐるかを證明してゐるのであります。私はY先生を心から信頼してゐます。と同樣に、「ヘンリ・フォード・人及び其の事業」が、昨年度出版圖書中の白眉である事をも確信してゐるのであります。

大は一國の政治から、小は商店の經營に至るまで、現代の經濟學上の諸主義に立脚して、これを行ひあるひはこれを行はんとしつゝある現象は、まつたく指を屈するに手の足らぬ程廣範にわたつて居ります。しかし、そのいづれもが主義なり理想なりと實際との間に、食ひ違ひを生じてゐることは同樣であります。即ち、最も顯著な例として、私達は彼のロシアをあげる事が出來ます。しかるにその中にあつてたゞ一つフォード王國は別としなければなりません。彼ヘンリ・フォードを、私達が尊敬する理由は、彼が資本の集中と、能率の增進と、浪費の節約とを主義として、それを着々彼の王國に實現しつゝある點、しかも大成功を收め得た事にあるのであります。

『先生ッ』

經濟の時間が始まるや否や、早速Oが叫びをあげて席を起ちました。級の視線はこの早々の質問に耳をかたむけて集りました。やがてOの口が開いたのであります。

『先生はヘンリー・フォオドを讀みましたか！フォードを！』

しかし、私達はこのOの叫びを學窓からもう一歩出て、廣い世間へ聞かす事の出來なかつたのを、殘念に思つたのであります。

最新刊

エリイザ・オルゼシュコ著
清見陸郎譯

寡婦マルタ

（四六判並製）

定價壹圓
送料十六錢

心正しく姿美しき寡婦マルタは、高き教養と豊なる趣味とにも拘らず、最愛の良人に先立たれて何故に一女工に身を落さゞるべからざりしか。さうして終に窃盗の罪を犯し、乘合馬車の轍の下に悲慘なる最後を遂げざるべからざりしか。現代社會組織の下に横はる病弊、ブルジョアジイの冷酷、男性の横暴、此一篇に描き盡されて餘蘊なし。原作者オルゼシュコ女史は、彼のシェンキェヰッテと聲望を爭ふポオランド文壇の巨匠。譯筆は流麗暢達、創作を讀むの思ひあり。敢て日本の若き女性、教育家、婦人問題研究者の熟讀を望む。

發兌　芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

アンリ・バルビュス著

武林無想庵譯

耶蘇

四六判上製

定價壹圓廿錢

送料拾八錢

最新刊

宗教は一種麻醉藥である。然り！經典的聖書と官立教育によつて適用された基督教的諸傳說は麻醉藥たるべく、幾多の誤謬、幾多の揑造を含んでゐる。併し、眞の耶蘇は『他の一切の人より以上に、人間を理解し、人間を位置づけ、さうして人間に方針を與へた、完全なる人間らしい人間』であつた。アンリ・バルビュスは嚴密なる歷史的考證と犀銳なる科學的批判によりて眞の耶蘇を見、其の靈筆に復活せしめた。一字一句苟くもせざる無想庵の譯筆又よく原著の趣を傳へてゐる。

〔內容〕事實は豐富だ――埋木の兩親――讀方の先生と文字――××――云ふに云はれぬ同胞――冠――世の中の入口――その日〳〵と仕事――わたしの父は死んだ――ブリスキラ。或は個と全――ニコデモ。或は、生と死――眞理と實相――步め！――人間と風――荊冠――きのふ、けふ、あした――マルタとマリヤ――力のやさしさ――人間の塔――山上の說教――惡と仁との結婚――わが正義の神――天國の門――共產――星は地に根を卸してゐる――わたしは知らなかつた――イスラエルだけ――まざりもの――未來の默示――神殿の說教――實行の責――この人だ――法官ども――十字架。

發兌　芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

拾年間に貳千五百圓の貯金通帳を煙にして仕舞ふも同然だと云ふ煙草を、何か簡易方法で禁煙出來ぬものでせうか？

其れにはこんな面白い事實もあります……實業之日本社代理部と榮川堂主

先年十月十三日煙草きらひ液と煙草代用品カロット味發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から右一組の御註文がありました。店員が此事を主人に報告しますと『明日私自身で代理部へ上つて右の煙草きらひ液とカロット味の效果を御說明申さう』と云つて翌十五日午前十時右の一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました。丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く私を迎へて吳れました。其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて右發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました。さうして先一社員の煙草好きな方に御試を願ひました。すると其社員の方は早速右の煙草きらひ液を取上てお試しになりました。暫くして其方は此の煙草きらひ液で口を御洗ひになつてから、今度は卷煙草をお吸ひになりましたが社員の方「やつ！之は驚いた。之は煙草が不味くて吸へない。煙草がいやになりました。到底煙草が吸へないですね！」驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ樣に全社員の方が總立になつて右の煙草きらひ液を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草が吸へませんね！」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讃下さいました。其處で更に店主は口を開いて弊堂の煙草きらひ液を御用ひになれば殆んど努力を要せずして煙草はまづくなつて知らず〳〵のうちに煙草きらひになると云ふ事と、幸ひに近來弊堂の「煙草きらひ液並にカロット味」が多くの人々に認められて來た事の本懷を述べて暇をして參りました。歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

禁煙有効

、ホントに貴下が煙草を御廢めになりたい御希望ならば、何うか弊堂發賣の左の兩品一組を御使用下さい。すると煙草がまづくなりますから短期中に煙草に對する嗜好心や愛着心が無くなります。

一組

一、煙草きらひ液、（一日に二三回此の液の小量で口を御洗ぎ下さい。すると煙草がまづくなりますから短期中に煙草に對する嗜好心や愛着心が無くなります。）

一、カロット味、（煙草が不味くなつて吸はれないと云ふ事だけでは何となく手持無沙汰のものですから、此のカロット味をパイプに詰めて煙草の代用品として御愛用下さい。カロット味は溫雅なる香氣と忘れ難い清涼なる甘快味を有して居りますから、之を口にする時は輕い刺戟と快感とを口中に殘しまして遂には煙草に對する永き嗜好も打忘られませう。殊に朝ねきの時又は每食後口中に「ねばり」を生ずる時等、又は散步等には無二の伴侶です。）

◎カロット味 煙草きらひ液 甲號 サック入象牙製パイプ付 金參圓五拾錢

◎カロット味 煙草きらひ液 乙號 ベークライト製パイプ付 金貳圓五拾錢

送料	內地十八錢　臺、朝、樺四十五錢
代金引換送料	內地三十錢　臺、朝、樺五十五錢

御注文は振替利用を便とすれども郵券台により御申越次第引換小包にて送品可仕候

◎代金引換は御便利の郵便局を御指定被下候ます。

發賣元　東京府大森不入斗八二八　振替東京五二九六番　榮川堂

代理店　東京市京橋區瀧山町十三　振替東京[illegible]番　天下堂

死生雜記（遺稿）

大正六年三月—仝七年十一月

徳富蘆花

大正六年

三月十八日

山路愛山が三月十五日午后十時。五十四で死んだ。疫痢の結果だ。二日寢たきりらしい。昨日の新聞で知つて一驚を喫した。

十六日が角田浩々歌客の一周忌だ。

逓りに死ぬる、民友社の縁邊か。

愛山は余にとり兄の一人と云ひ得可き男だ。彼は夙に余の文章を推稱した。

「グラッドストーン傳、吾れ間然する所なし……若し具はることを君子に求めしめば云々」と云ふたは彼だ。

「何邊も書き直したンだらう」とけちをつけた竹越三叉に對し、家庭雜誌初號の「ガリバルヂーの妻」をほめたも彼だ。

同じ家庭雜誌の「横井つせ子」を二度讀んで泣いたのも彼だ。

同時に「柳の家」の女主人を確有と斷じ、國民之友雜錄のハムフリー、ワアドを其著を讀まずして書いたと斷じたも、彼の眼だ。

文章に於ては早くから認む。人物については晩年漸く敬を見出した。

愛山曾て曰く、死を恐れざるは難からず、木の枝でもよし、よく／＼見つめて居れば、それで死を恐れず。

×

三月十九日

愛山の葬式日だ。春雨瀟々と降りくらす。俺はソファに寢て、Mの三味を聞きながらうとうとする。彼一時、此一時だ。夜與謝野晶子の智出修に關する夢を細君の讀むを聞く。鐵幹か「君か解剖の時……」と云ふ一語で夢がきれて居る。凄い。

聞き終へて奥のW・Cに往く。何だか氣味が悪い。W・Cの西の硝子障子がすつと開いて、あの大きな愛山の顔がぬうと出たら、など思ふ。俺は愛山に對し、敬愛あつて憎惡がないから、何も恐いことはない、と思ひ直す。

然し死は矢張恐い。

×

三月廿四日

愛山講演集の第二編を出して見る。歿後初七日である。「源氏物語を讀む」の條下に、

　世の諺にも「人生僅か五十年」と云ふ通り、限りの有るものである。歴史の材料は限りは無い。其限りの無い材料を短い僅か五十年の生涯で、どうして悉く消化することが出來ませう。………我々はどうしても、茲に於て或制限を自分の用ゐる材料に附けなければなりませぬ。

とあるが、惻々として人を動かす。愛山も日暮道遠の感があつたらう。彼は死を豫知して居たかも知れぬ。

彼の殘りの壽を余が貰ひ受けるのだ。

「死んたら[illegible]」と[illegible]胎兒の十ヶ月[illegible]

代、地上生活を半醒半睡時代、死後を全醒時代と分けて居る。Mの言ふ如く、西洋思想だ。こちとらは、死後は半醒半睡自在の時と觀じたい。

而して母胎の十ヶ月も面白いが、精虫が父の腰に居た時から溯つて考へると、其處にまだまだ面白いものが伏して居さうだ。

誕生は嬰兒にとりて一の死、死は成人にとりて第二の誕生、——それは異論なし。だから人の死せんとするや苦しみ、子供の生るゝやおぎやあと啼く、とＭ笑ふ。

×

三月廿六日

昨朝頭上を東京方面に飛んで行く飛行機の爆音が著しく耳に響いたが、今日の新聞で見ると、二臺の其一が歸途墜落して、乘手が死んだ。名は杉野中尉、眼が悪くて銀線眼鏡をかけて居たさうだ。

あの爆音は死の羽風だつた。

×

四月一日

大江保吉が話に、愛山は死ぬる前日までも、「世界の過去、現在、未來」の速記を訂正し、机の上に載せあり、電話で速記者の名を聞きつけ「大江にやる原稿は出來て居る」と云ふたさうだ。全くそれは悲壯だ。

これが[illegible]

叶婆婆はとても死なれぬ世なれとも
　生れぬ先きへ生れ行かなん

と辞世を書いた。

それから、男の子三人を二度も呼び、「おとうさんが死んだらエラクなるぞ」と云ふたさうだ。

基督教世界を見ると、青山が愛山の臨終に、「死ぬに邪魔だから君は彼方に往つてくれ」と云ふた、とある。愛山の死様は漱石の死と共に洗錬された江戸ッ子気象を発揮して居る、と夫婦して語り合ふ。「死の蔭に」の成本を愛山は見たかつた。然し広告は見たのだ。自慢をしてはならぬと前置きして、大江に大江が嘗て「生、死」の本を書いてくれ云々と云ふたことをリマインドする愛山は死に、余は生きて、二人の著書が同時同所に広告されて、大江書房の二本柱となるも面白い、と云ふ話を余は大江にした。

×

四月十二日

愛山は「死ぬに邪魔だから彼方へ往つてくれたまへ」と云ふて死んださうだ。、、青山、愛山の修養が其処に達してるとは知らなかつた、と今頃驚いて居る。、、けだ。、、だからさ。

俺なんか齧つ噛にしがみついても死なぬ。漱石程の仕事もして居ないし、愛山程の勉強もして居ないから、死なうたつて死なれぬ。

Mは、余は神の愛子だから、病気も死にもせぬ、安心して居れ、との暗示を得たと云ふ。

×

五月廿一日

伊香保仁泉亭から榛名上りをする。細君が絆創膏を容器ごと持参しやうとするので、不吉な感がして、少しばかり持つて往かせた。帰途、余等の其処を過ぐる少し前に、蕗薬館の番頭が猿澤橋の少し上で、近道を行り、滑つて脚の骨を砕いた、ことを聞き、異た感にうたれた。

×

五月二十四日

湯中子稲荷山墓地に須田おさきさんの墓参した。「あなたが居たいから淋しい」と細君が墓に云ふ。

×

五月二十六日

父の満三周忌。去年は「淇水老人三周忌」の茶の鑵に母の名で送つて來て侮辱に腸を煮やしたが、今年は伊香保山上に何事もなく過

ぎて淋しい。

×

五月二十九日

林お品叔母危篤の電報。面倒だから默過。

×

六月一日

昨夜お品叔母死去の電報。

昨夏伊香保に上るとて新宿停車場で別れたが會面の終りだ。伊香保に往くとて別れ、伊香保から歸るとすれば、最後の別れだ、細君曰く、叔母も伊香保に來たかつたのです、一昨年思ふた事を魂は果して、いよ〳〵今歸り去つたのです。

八月一日九十九里から歸つて、猫の「玉」の死體發見。

×

八月四日

此一日に九十九里から歸つた

今朝新聞を見ると、去二日の午後銚子の君が濱で、早稻田出の靑年詩人三富朽葉、今井白楊の二人が游泳中行衛不明となつた。土用波に浚はれたのである。

既に[illegible]

つた感がある。名代の死の感がある。

それにしても、朽葉、白楊——脆い死をさながら豫想して自ら命じた樣な雅號だ。

×

八月十日

不圖中央公論の廣告頁を見る。早稻田文學の八月號に三富朽葉の文がある。

八月號の早稻田文學はうつかり看過したのだ。急ぎ取つて見る。「微笑に就ての反省」メーテルリンク張りの述懷感想文だ。然し死に近い美しい魂の告別の辭だ。恐ろしい程彼は自ら知つて居る。

佛蘭西行はもつと遠い、より好き所に往つたのだ。體が銚子の海に行く前に、魂は其故鄕を望み、光明に希望に喜悦に滿されて居たのだ。三富朽葉瞑す可し。

×

八月十五日

倉本儉太郞が昨朝死んで、今日は葬式があつた。

十六の女と、七十一の父を殘して、彼は四十に近いた。雪江さんの

ぼく、偽りたいやうです、人さまに[illegible]と云ふて下さいま

……と。

ナマケて居る余の耳が少し痛かつた。

×

八月廿二日

水瓜あたりか、九十九里から歸つて後、腹工合が思はしくない。今日は下痢四回、少し悲觀する。Mも四回W・Cに通ふさうで、熊太郎叔夫婦の樣に夫婦で死んでしまつたらなど思ふ。余は熊太郎叔の再生と思ふことがある。それは小笠原善平が千代三の再生であつたやうに。熊太郎叔は松枝姉を遺して死んだ。余等は何も遺さない。奧田義人が昨夕五十八で死んだ、これも腸胃さうな。男爵になつてから十日もたゝぬ。

そんなこんなで大に氣がめいる。

然し興農園から種物が來たので、奮發して白菜二種を蒔く。而して弓を射て元氣になつた。余Mに曰く、外に出ると元氣が出る、自然の子なのだ、室內では滅入るが、出ると元氣になる、土を踏むと力が湧く、「ドウセ卿も俺と同化するのだが、そんなに急ぐことはない、ゆるゆるやつて來い」と土が曰ふ。

土は本當に「力」である、「慰藉」である「醫療」である。

三千坪の土を與へられたことをしみ〴〵感謝する。

×

十月五日

十月一日未明の暴風は東京附近に大分死人を作つた。

夫婦は死んで、子供だけ蒲生に抱かれて、助かつたのがある。三千七百圓の簞笥の傍を離れ得ずに死んだ女がある。砂出の穴守の寫眞屋は、海嘯で夫妻ののつた戶板が覆へり、夫は溺死し、妻は松の木に流れつき、二日夫の死骸が上つて、魔除に泥がついた短刀をのせてあつたら、妻が短刀をもつて月光の照る水に入つて了ふたと云ふ。最初の小海嘯で逃げて、もう大丈夫と歸つて來て二度目の大海嘯で死んだ者もある。一番好いのは、水難救濟會の月島見張所の看守岡本朝美と云ふ六十二の爺さん、日淸海戰に軍艦の司厨として勳八等をもつて居る人、其夜が當番で、夜の九時に「今夜は唯では濟みますまい」と云ふ最終の電話を會長吉井伯にかけたを最後のたよりとして、ポッケットには救濟合圖用の蠟燭を入れて溺死して居たと云ふのだ。

死は恐ろしいが、然しあるものには端的に寧ろ邪魔物の形を打破つてくれた嬉しい力だ。好いもの、生命あるもの、眞なる善なる美なるもの、死ぬ事の出來ぬものには、死は透明なミデアムで、恐怖でも何でもない。琥珀の如く一瞬間に美しいライフを其まゝに保存してくれる結晶作用だ。

ふるいふるい言が永久に新しい言だ――畢竟良く生きるが生だ、死は生命に存ずれる」のだ。

×

十月六日

人は自己の意志によつて生れない。だから自己の手で死んではならぬのだ。

×

十月十一日

八月十四日に死んだ倉本徳太郎のひとり娘が死んで、十三日が葬式と云ふことだ。櫻井を弔儀にやつたら九月廿九日にヂフテリヤで死んだのだつた。廿五日に天神祭に往つて、それから少し悪く、それでも寝たのは最後の一日位だつた。裁縫も綿入が縫へるまでにしたに、と爺さん婆さん大弱りださうだ。

彼女は十六、八月の父の葬式に白装束の姿がまだ眼に残つて居る。

×

十月十二日

咽喉が悪かつたり、直ぐ痒くなつたり、心臓の鼓動が烈しくなつたり、それから非常に気短になつたり、――其様な事から死の恐怖があると見え、[illegible]

矢張死の覚悟がつかぬと生活の腰が据わらぬ。俺はいつでも出来ると思ふて居たが、矢張り真面目でないのだ。真面目とは不快活でない本當の快活だ。

「まあ待て、まあ待つてくれ」で毎日延ばし延ばしして居ては駄目。

九十九里の粉砕者、二階堂とくよ、あんな若い連中でも決死の機会に遭ふて居る。

×

十月十三日

我等が死んだら此邸宅は如何ならう？と云ふ話を、朝飯の序でに夫婦する。

遺言状を正月元日毎に書く西洋人の習慣は好い。然し遺言状など書くのはいやだ、死にくさいから。

けれども此様な話をしたり、考へたりするを見れば、いやでも五十になつた證據たるは争はれぬ。

今の處では、我等の邸宅は此人に――と思ふ様な人はない。

倉本の孫女の葬式を避け、夫婦で多摩川畔の玉翠園に一日遊びくらした。淋しく悲壮な一日だつた。然し静かな、しんみりした一日でもあつた。

細君は「今、蛇匿の何邊に居る、とお思ひなさいますか?」と云ふ問を、多摩川を眺めつゝ發した。

俺は其樣な事を考へるのがいやだつた。

俺は「Many more days and nights を期待して居るから。

父は九十三まで生きた。

俺は百までは生きたい。

百まで生きるとすれば丁度半分だ。

──────

昨日は植木義圓が湯淺次郎と來て、門から追ひかへされた。

今日は留守に落實が來た。

蓋し母者人の日が追々迫るのだらう。

安全にして行け、──だ。

×

十月廿五日

中瀨古六郎の妻病死の報。

井上善吉の父堀水牛介翁の追悼文を書いて居たので、同志社關係のこゝにも偶然ならぬ綜合があるやうで面白い。

妻の死、恐い、恐い。

×

十一月十三日

はなれの物置を片づけ、櫻井に物置天井に上せたら、梭形卵を存んだ蛇の死骸が出て來た。五尺餘の青大將、可なり干からび、尻から二尺ばかりのところから梭形卵がはみ出て居る、吐くに吐かれず、下すに下りず、苦しみ死にに死んだのであらう。

猫の玉に、此青大將、今年は此はなれで二つの死が著しくわが眼を射た。

蛇でも死は哀しい、殊に苦しみ死にの死はいたましい。

×

十一月九日

今日は夏目漱石の一周忌だ。全集の卷は出はじめ、伊太利式とかの立派な墓が出來た。夏目はもう死んだ。

俺は生きて居る。長く永く現身に生きやうと思ふ。

「則天去私」とは夏目の標語。

俺はこれからます〳〵我を立つるのだ。私を張るのだ。尤も其私も追々大きく強く幾多の生命を織りまぜ綯りまぜたものであるべきは無論である。

日露戰の最初の明治天皇の裁決ではないが、

「戰ふ、俺は」

―（死　生　雜　記）―

×

十一月十二日

仇田喜三郎が約の如く三年後に而命を求めて来て……また三年延ばされたムシヤクシヤを昨日は手紙で云ふてよこした。其中に浩々嚇々の死後一年半ばかりの間に、先輩知人が九人まで死んで居る。一寸先は闇だ、たから期日に屹度上るとは申されぬ、とある。先生も死ぬかも知れぬ、と脅したのだ。或は呪咀でないとも云へぬ。

Many thanks! But I will di appoint you, my dear fellow, living many many years longer than you you.self.

×

十一月十三日

馬鹿喜三郎の呪咀のたゝり目に、風邪をひき込んで、鼻水が出る、咽喉が痛い、手足がだるい。大分悲觀する。大に奮起一番を要する。

×

十二月十三日

吉田綱藏が來て、「濁揚」のおひろ、實は百済落お春の死を告げる。四五ヶ月前とかで東京から[illegible]の實家に歸つて居り、昨日死んだので、今日[illegible]にするさうだ。五十四だつたさうだ。

すべてのものには終がある。聖者も死ぬれば、淫婦も死ぬる。然しすべてのものが、蘇を遂す。お爺が二十歳になつて、色男なんぞ揃ふて盛に活躍するさうだ。お春以て瞑す可し。

風邪で氣食がひどく惡い。苦しい。

これで萬一死んだら、風邪が肺炎になり、死ぬるのは一足飛びだ―

―など思ふ。

Mが「大丈夫ですよ、直りますよ」など云ふのは、あまり御出だ。片腹痛く、いつそ獻送の氣がしてならぬ。

獨逸の亡びぬ如く、俺も死なぬ。

余、細君に云ふ、我儕が生に對するひつかゝりはホンの少々の所だ。少し油斷すると、直ぐ切れて了ふ、面倒臭くなつて了ふ。ところで、今の處、自分の生を希ふ者は誰か。本屋位のもの、近くに出版の豫定をもつ顧永一朗位のものだ。……色々に生の興味を喚起させなければならぬ。世界の色々のものを見、色々のものを食ふ興味も其一つだ。

Mは諸國が面倒だ、と云ふ、然し少しづゝでも勉強しなければいかぬ、と余云ふた。

豪傑醫者の青山胤通が死にかゝつて、苺を欲しがり、東京中を探して大隈さんの温室から三粒獲て喜んで口にしたと云ふ話。俺はマアレイさんから花つき、小さな實つきの苺二十一株をもらふて一昨日フレーム内に植ゑた。生つたらやりもしたく思ふ位。

×

十二月十四日

此頃の霜枯の庭がひどく好い。好い屋敷になつた。それで門前の雜木林も此方のものになると、立派なものだ。余曰く誰に讓らうか。(心には鶴子にと謂ふ)M曰く、人に住まるゝのはいやです、墓を立てゝ、あとは荒れ放題に荒らして置きたい。

×

十二月十五日

墓地に午後往つて見る。靜かな師走の午後の日が落ちて居る。吉岡の墓地に新しい土饅頭は、あばずれお春の新墳だ。缺膳の碗の水には、木の葉が二つ漬つて居る。位牌には「新圓寂慈眼惠光信女」とある。皮肉のやうで、本當だ。慈眼から見れば可憐兒だ。惠光に浴すれば、彼女も漏れぬ。

姦夫の米は死んだ。

姦婦のお春も死んだ。

第何代目かの姦夫の吉左衞門も疾から死ぬるだらう。

肉よ死せよ。悪よ、亡びよ。慾よ、朽ちよ。而して唯光と愛のみ永久に生きよ。

×

十二月廿三日

トルストイの額に、半分朝日が射して、悟道の半面輝やき、生けるやうだ。余、妻を呼んで曰く、御覽、光が射して、トルストイが生きてるやうぢやないの。妻曰く、本當に、ね。Tolstoy's sayings を見たら、十二月廿三日の條に

"I have lately began to feel this——that when I die I shall not really die, but live in all the rest."

×

十二月廿四日

青山胤通さんが到頭昨日死んだ。「今日は十四日目だ」と傍人に聞いた日から約十日目だ。死ぬるにも中々容易でない。

×

十二月廿六日

牝鷄の一羽が死んだ。此二三日時々頓興な叫聲を出したりして居たのだ。糞づまりでないかとちらと思ひつゝ、其まゝにして置いた。主人

の愛不足の爲に死なして了ふた。御免よ。

×

十二月廿九日

庭の西隅を歩いて居ると大きな殿樣蟲が蹲つて居る。木の枝でつつ いて見る、動かぬ。よく見ると死んで居る。此頃の寒さで凍死したのだ。大きな蛙だけに、可愛想でならぬ。

×

十二月三十日

昨日縁側で蠢いて居た足ド蟲が今日は死んで居る。此も凍死なんめり。鋭いものも死ぬ。鈍なものも死ぬ。

×

大正七年正月十日

柳川春葉が昨日死んだ。好人物で、江戸ッ子で（東京生れを意味する、父は筑後の柳川者だ）淺い意味での成功者——ねばりが足らなかつた。然し氣の毒に思ふ。

俺も不如歸の脚本で、面識があるから殊に。中西忠吉の手紙によれば、九十九里の弓田久次郎は舊臘大晦日の聖路加病院で死んださうだ。斷然である。晩年の[illegible]か[illegible]よくトナデエのあの村にも[illegible]いてやつた[illegible]よく[illegible]にも[illegible]やつた。[illegible]に[illegible]來なかつた。そこに心がかりがある。彼も細君に負けた。俺はあの細君が嫌だつた。[illegible]滿ちて居たからだ。弓田も滿足して居なかつた。然し細君の腹には子が居るさうだ。弓田も子に生きて、妻と戰ふだらう。

ドウも江戸ッ兒はねばりがなくていけぬ。男でも女でも強くならねばならぬ。憎まれ子世にはびこるで、あまり好人物で、あまり持てたり、あまりやさしかつたりすると長つゞきがせぬ。俺なんかも、徳田秋江に呪はれたり嚇かされたりして、却て元氣を出すので好いのだ。

皆脆い。脆くてはいけぬ。釋迦も孔子も長生して居る。細君の曰く、當代で長生するには、足を地につけることが肝腎です、大隈さんでも植物のお蔭でドンナに長生するのかも知れませぬ。俺も千歳村のお蔭で持てるのだ。

乃木め、那須でなぜ死ぬまで百姓しなかつたか。

×

一月廿日

昨午後[illegible]が來た。[illegible]に[illegible]た[illegible]ださうだ。俺は[illegible]に、[illegible]、[illegible]と[illegible]一[illegible]た。[illegible]

丹澤はがき。「白」が十二月晦日から發病、去十四日の夜半に死んださうだ。享年滿十一歲。丹澤のになつてから九年と七ヶ月だ。山の家の裏、梅の下に埋めたさうだ。村人からクヤミを云はれ、四五才の子が線香をあげたさうだ。「白は人となれり」と丹澤は書いてよこした。村の者が「白」の人格を認めたことにもとれるし、「白」は死んでもお時の腹に生れた女兒に「白」が化つた、とも解される。鶴は千歲を去り、靜枝は死に、白は死に、色々の段落がつく。

能登の人笹川良一なる男が、三十で死んだ兄の遺文一章をよこした。死節が快活だつたさうで、其遺文も悟つて居る、然し哀しい。文に曰く、

「生れんと欲して生れしにあらず、生まんと欲して生み出さるべきものにもあらず。是れ皆大方廣の宇宙の主宰者のなせる業のみ。病死を厭はんと欲して厭ふに非ず、悲まんと欲して悲しむに非ず、之れ又宇宙の主宰者が宇宙の圓滿なる進步發展をはからんが爲めの御心と見るの外なし。半獸主義、神秘主義、自然主義・ローマン主義、何れか神の一面を語らざる。矛盾衝突は纔に激する怒濤の花よりも美し。

我三十、今病みて家族、家庭、社會を見る時、噫如何に悲慘なる努力の術よ。されど更に深く眼をそゝぐ時、戀にもだえて啼く鶯の音か、種族保存の爲め媚を競ふ百花か、華はしい戰場の友、生生たる哉、戰や、亂、病みて心地死ぬべく思ふ時、嗚呼々たる我の世界の一面を透して、人生は如何に美しきローマンスよ。食欲戀え、涅槃は將に來らんとす。可愛ゆい哉、我が敵よ。我と相容れざりし人の意見よ、長く我意見と相砥礪して世の進行に伴ひ世を倦れ。

一本の銹釘にこもる電子の力にも宇宙を動かす力ありとか、我一片の骨肉毛髮皆徒らに見るべきものならんや。

一粒の砂に宇宙を見し詩人を今漸く解したる科學者も又美しき努力を見せたるものなり。幾代の高僧が苗發したる涅槃を偉大なりと知らしめし力も亦美しからずや。

我身肉の血よ、燃えよ、凝れよ、刹那を永遠とせよ、永遠を刹那とせよ。我肉の中に巢くふバチルスよ、狂へよ、躍れよ、我と戰へよ。世の醫術をつくりたる汝こそ文明の一大貢獻者なれ。腐る皮膚は骨に皺ばみ、骨も髓も、すべて肉の貯蓄なければ踏臺として起つも眩暈を感じたり。借りたるものは大方返報したるなり。今骨と皮とを燒かば借金は悉くすなわけ。生れぬ先の世に歸るなり。其先の世と云ふも此世の事に相違なきも、變化好きなる人間は生よ死よと嘆く、又面白からずとせず。泣くもよし、笑ふもよし。

漸く蛙の聲を聞きながらねむれる時が來た。田螺は鳴はぬと云ふ

が、あのころ／＼ころ／＼云ふのを聞くと、如何にも田螺が呑氣に歌ふ様で、我も知らず知らず、ごろ／＼とねころび、ぐう／＼とねむる。」

石川縣能登國鹿島郡鳥屋村字末阪
笹川嘉吉
大正四年五月十五日病死

×

一月卅一日
俺の二枚折の金屏風の主の鈴木松年が死んだ。大を喜ぶ上品な男で、俺に近い。
素木しづが二十四で死んだ。片足切斷した女。俺はまだ彼女の作を讀まない。
「私しは寂しい」と云ふのが終に近い作ださうだ。三十三で死んだ花屋の主が呼んだのではないか。
松年は米僊より餘程上品。儒者の子の松年、町人の米僊、素は爭はれぬ。

×

二月十三日
中澤臨川四十七で死んだ。[illegible]で死んだ[illegible]の[illegible]

し來る。余に見せてくれとの遺言也。
去一月廿日送り來りし能登の笹川良一の兄の遺書と好一對。
先日は弟、兄の遺書を送り、今日は兄、弟の遺書を齎らす。兄弟の「我」死せよと神の、父の宣ふ也。
今日は母、兄、余に對する神の父の宣告を書き、復讐の念燃ゆ。夕方夫婦書齋にあり、死の陰の暗黑くさし被ふを感じ、余惱む。今宵くものをあのまゝ出さば、余は殺されん。昨日から其感する也。惱んだ後、到頭戰鬪的基督より、藝術的基督になることにす。書いたものは小説の料に藏し、「春信」は純粋なる福音とするに決する。今死んでは、新アダム、新イヴになれぬ爲から也。

×

二月×日
製鐵所長官押川則吉縊死。
福永一朗の曰く、先日先生の自殺談を聞き、それから直ぐあの事があつて、ゾツとしました。

×

二月廿日
布哇の大噴火は赤尾權熊の記事だ。余が死去の事を新聞から聞いた云ふ者に、昔なら驚怒を感ずるところ、今はこれを默認する。全く俺に一

逼死んだのだもの。

×

三月一日

午前大江「死の際に」十九版の印税を持參し、午後は福一「新春」の第一校正を持參。生死踵を接す、大眞理。

×

三月十九日

昨日午前十時には吉岡の婆か死んだ。今日夕方弔問に往き、婆さんに告別する。九十ださうだ。末期は悪くない顔をして居る。お春死に、婆死ぬ。喜三公可哀想だ。「お春、断るがいゝ」と啖呵をきつたが、もう二人とも居ない。

×

三月廿六日

昨夜風雨の中に、最初猫の聲をきき、後雞の騒ぐやうな聲を聞いた。風雨の中に出ると面倒で其まゝにして置いた。

朝あきが來て雞が咽喉を食はれて、死んで居るといふ。あとで芳をやつたら一羽ならず二羽まで死んだ。やはり昨夜の騒ぎがそれだつたのだ。一羽は縁の下へ引き込んであつたさうだ。鼬の所爲だ。

先日雞舎のたゝきの大陥落を見て、あれは修繕せねば鼬や蛇が侵入すると謂ひながら、仕事が終へたら終へたらと延ばして、所謂一惰不來」の結果は覿面だ。もう一二日の處で恕ちやられた。

此は主人が雞に不親切、卽ち無慾と云ふ事に歸着する。根氣不足、愛不足、力不足だ。

雞よ。濟まなかつた。犠牲になつてくれて濟まなかつた。

Next time I will do better おまへ達の死を無駄にはせぬ。

昨日は卵が四個出來た、と喜んだに。

×

四月十二日記す

先日新聞の死亡廣告に澤田純一の名がある。誰かと思ふたら澤文の二男のあの「大悲愛學」なのだ。伏見で會ふて居るから、他人ならぬ感がある。弔狀を書かうと思ふ。葬送は南禪寺の天授庵と云ふのも、異た心地がする。純一房、純一に眠れ。

×

四月十五日

倉本久三郎の祖母の葬式に往く。嶋田喜三郎に聞くと、過日葬式があつたのは、秋山喜左衛門の長子錣か死んだのであつた。通知番吉岡からの通知漏れで知らなかつたのだ。

海軍に往つて歸つて肺病になり、而して死んだのだ。俺は喜左の宅地を借いたりして、錣を少し憚つて居たが、彼はもう死んだのだ。服務中も一二度來た事もあつた。肺病で死ぬるなら、見舞してやつたものを。

隣のお安の葬式の時如巳彼、今度もまた。隣が遠くに困る。

一月足らずの間に齡四つもとつたと喜左の述懐を聞いて、氣の毒になる。これも喜左の我を折る機會なのだ。

×

六月廿五日

赤倉から玉島かけて夏遊の留守に、臺所や浴室の修繕をすべく、馴山の留大工を呼ぶ。午後來たのは若いのだ。親方は？　昨年十月死んだ、と云ふ。

腸胃が惡く、一旦禁酒してよくなつたに、また酒をはじめて再發したのださうな。

實に一驚を喫した。

昨年は年始に來た。mは今年も來たと云ふ。今年は十八になる其子が來たのだ。

ずるくても、酒のみでも、吾儘無禮でも、死んでしまへば氣の毒があるばかりだ。

まだ五十になつて居なかつたさうだ。

弟子の高橋富藏語る。

×

十一月七日

島村抱月が一昨早曉死んだ。四十八。

「死にさう、死にさう」と二度云ふて、死んださうだ。須磨子も稽古に芝居に出て、淋しい臨終であつた。

抱月は何だか藤村を余に思はせる。

須磨子に彼は失望したとしか思はれぬ。

愛すれば生かす。抱月は愛したであろ。須磨子は抱月を吸ひ殺したとしか受取れぬ。

細君も氣の毒、子供も可哀想だ。

才人可惜。

×

十一月十日

秋山紋の父富藏が八十八で死んだので、今日會葬、以前は大分困窮したらしいが、紋が稼いで、古家ながら立派な家を建て、其處から葬式を出したのは、爺さん嘸嬉しかつたろ。自然な滿足な死は好いものだ。

服部書店の弟中村政之助が數日前に死んだ。基督教世界にある竹本菊代とは、今治の伊勢さんのあの「きいさん」であらう。

×

十一月二十七日

從弟西川季雄が肥後玉名で去二十三日病死した。大江義塾で共に居た以來、同志社でも遠く、それから多分顏を合はせず、手紙の交換もしなかつた。本家分家、ハデジミの相違で、故意に遠かつたのである。淋い男、淋い生涯であつた。

むつつりと死んで往いたる男かな

フォード工場の實際

――管理上より見たる――

武庫山松太郎

一、自動車市に入りて

北米の春未だ淺き三月上旬私は漸くのことで憧れのデトロイト市に入つた。パークプレースの層樓に登つて滿都の風物を雙眸に聚め、雄心抑へ難き新興都市の伸び行く姿を想望しては多感の遊子一片の感慨胸に迫るを覺えざるを得ない。

げに自動車の町デトロイト市！　フォード、ダッヂ、キヤヂラック、チヤーマー、リンカーン、おのがじゝ技を競ひ新を追うて宛然に群雄競ひ起れるが如くである。

全米否全世界を壓倒する大自動車工場から日々吐き出される幾百千の自動車が鐵道に由りて各地に搬出される外に新車自らニユーメキシコ、費府、デイトン、キヤンサス等到着地の標旗をかざしてシヤシーのまゝ刻々東西南北に走り出す壯觀は世の活動を擧げて此一市に集中したるかの觀がある。

僅々十年の歳月の間に人口倍加して百萬となり一躍米國第四位の大都會となり各戸一臺の自動車を有する割合となつた。自動車市の目覺ましい發展と潑剌たる生氣とはげに米國人の理想を體現したる趣がある。

私はこの青春の町に入つたのだ。そして早速にも彼の名だゝるフォード自動車工場に半年の工場生活を遂行せんとして居ることを思ふと心自らときめくを覺ゆる。然し一月大西洋の狂瀾を超えて初めて北米の土を踏み今又知り人一人もない此の町に入つて而して生來始めての勞働の體驗を爲さんとするのであると思ふと稍々心細い樣な潜在意識が動き出さうとする。が何だ！　人間到處悉く友人だと思ふと又悠揚暢達な心持に自ら微笑む。

面を壓する幾千の高塔樓閣も私には何等の感興を添へるものでない。地を走る蜿蜒百足の如き自動車列も亦敢て駭心の沙汰でもない。私の此町に來たる所以は法螺の材料を集めんが爲めでもない。世人

に誇示せんとする瑰麗な文章の材取りでもない。一つには工業都市の眞面目な中流家庭に入つてピューリタンの氣魄を存せるクリスチヤンライフに觸れんが爲めと、一つにはフォード自動車工場に入つて少くも半年自ら職工として所謂フォード、アイデアを身體を以て讀破せん爲めとであつた。百萬市民中私は只々二人への紹介狀を持つて居た。一人は牧師のブラッドフォールド氏で今一人はフォード自動車工場の教育部長マークキス博士である。一つは中流家庭に入る爲めと一つはフォード工場に入る爲めである。此の二枚の紹介狀を資本にして私は半歳のデトロイト市生活——顧みて心往くばかり淸く樂しく印象深かりし充實した生活を始めんとしてゐるのである。

牧師ブ氏に會はんが爲めに東西迷々の町を辿つていつしか新いたフオーレスト、アヴェニユーのエルムの並樹を行けば初音ゆかしきロビンが人馴れて飛び交ふ樣いたくも心を引く。遲々たる鐘の音の漂ひ來るフォーレスト、チヤーチにブ氏を訪うたのは午後の日斜に尖塔に流れる頃であつた。

ブ氏は壯齡正に三十五六、篤學眞摯なる牧師として多くの信徒を一身に聚めた人である。此の町に居た間私の魂を如何ばかり慰め且つ導いて呉れたことであつたらう。同氏の世話で私は數日後此寺のトレジュラーであり熱心な信者である市技師R氏の家庭に入ることになつた。R氏は夫婦暮らしで子供のない所から私を弟との如く時には子供の如[illegible]

に關して牧師B氏の懇切なる導きによりて且又それからそれと信者に知り合が出來て互に往來するに至つて私が此町に來た目的の一ツは自分の希望に近く達せられた。殊に工業都市でありながら市俄古の如き慌たゞしい雜沓も無く日曜日は全市シーンと静まつて町々の處から或は高く或は低く鐘の音が流れて如何にもその昔の面影を存してゐるかの如き此町は信仰的情操を豐かに惠んで吳れる。老後はデトロイト市で送りたいと願ふ米人が多いと云ふ話も無理からぬ事だと思つた。

二、マークキス博士に會ふ

書册堆裡のB氏に對座してる一人の光容があつた。ダグラス君と云ふ。巨軀六尺五寸眼光炯々として恰も仁王の如く握手の掌は淸正の手に似て居る。此人數年前迄はフォードの教育部にマークキス博士の下に働いて居たが戰爭勃發とともに攻戰の野に立ち一躍少佐に昇進し今はY、M、C、A、産業部に働いて居るそうな。

私が明日ハイランド、パークのフォード工場にマークキス博士を訪ふ積りだと聞いてダグラス君は直く話を續取りして

「明日だなんて言はずに今直く出かけやう。マークキス博士は僕が知つて居るから一緒に行つて紹介してあげる。ブラッドフォールド君、僕のカーは戸口にあつたつけね。」

氣の早い男もあつたものだ。[illegible]

[illegible]

勇敢なるダ少佐がショフアとなつたので車は縦横に無人の境を行く如く疾驅した。車上熟ら〱謂へらくフォード工場に六ヶ月も居ると云ふ願は並大抵のことではないので果して何の程度迄許容して呉れるか疑問であるからマ博士に自分一人で會つて緩つくりと希望を話して十分諒解を得ねばならぬのに、ダグラス君が無雑作にやつて退けて却つてその爲めに斷られたら今迄の苦心も水泡に歸するがと不安の氣もした。然しダグラス君委細頓着なく獨り呑込みで萬事胸中と云つた風に振舞ふので儘よ當つて碎けろと高を括つた。

乘つてるフォードは走ると云ふよりもジャンプしながら間も無くハイランド、パークに着いた。と見る白色の四層樓が三百エーカーの地面に所せまきまでに立ち並び襟腰直ちに幾ブロックかの通りを貫いて町を壓して建つて居る。之れがフォード工場かなあと仰ぎ見つゝ玄關に入ると之亦六尺豐かな白髯温顔の案内係の老人が握手する。傍らのエルに乘つて四階に上るとダグラス君案内もなくいきなり左手の突當りの室の戸をノックした。

「カム、イン」

内から重みのある地聲がした。戸を排して入ると正面の大きな机に五十五六才かと見える頭髪の白い血色の好い何處となく威あつて而も温容掬すべき紳士が居る。ダグラス君は何にか今少し曲もありさうなものと思ふのに、極めて簡單明瞭に來意を告げた。そして此の人がマ博士であると私に紹介して呉れた。マ博士はニコ〱しながらやをら椅子を離れてつか〱數歩進んで私と握手した。立つて見ると小柄な人である。五尺二三寸だががつしりした體格だ。

私は紐育のラッセル、セージ、ファウンデーションの長をしてるグレン博士の紹介状を示した。

「貴君のことは已に紐育から紹介して來たので承知して居ます。だが研究の目的は主に何ですか」

博士は聰明な眼で私を凝視めた。

「私はヘンリ、フォード氏の理想を實行に依つて示されて居る貴工場に就いて人事管理其他の實際を見、我國の工場生活の參考にしたいと思つて參りました。」

私は主たる見學の眼目を述べた。

「夫れでは技術の方でなくフォード、アイデアの研究ですね。」

「然り、フォード、アイデアの研究です。然し單に話を聞いて工場を一巡して足れりとするのではなく六ヶ月間滯在して研究したいのです。」

私は率直に自分の考を話した所が博士は眼を見張つた。そして稍難色を面に表して言つた。

「私はグレン博士に返事した樣に一二週間なら十分と思ふ。大抵の人は一日か二日で十分見學して歸つて行きますよ。過日英國から來た人達も四五日で濟ませましたから貴君も一二週間で濟むと信じます。」

是は形勢も面白くないと思つたから私はこゝで一と詰りの所作を披瀝した。

「私は知識を得る爲めならば數日の見學で十分です。然し私はフォード、アイデアを自ら勞働を通して體得したいのです。それには一二週間では十分である、貴下の御注意も御尤ですが私の考は私にとつてはカテゴリカル、イムペラティーヴでどうしても六ヶ月は滯在しなくては所期の目的に添はないのです。是非とも御承知が願ひたいものです。」

思ひ切つて言つた。哲人カントの句迄も口に出て了つた。

話してゐる中に博士の温顏に微笑が浮んで來た。そして[illegible]として言つた。

「友よ、汝の熱心と純情とは私は十分アップレシエートします。私は一二週間の積りで居たので即時返事は出來兼ねるが何れ後刻各課長とも打合せてアレンジして見るから明後日來て呉れ給へ。」

話は案外滑かに進展した。私は更に自分で作つた六ヶ月間實習のスケデュールを示した所が博士は預つて呉れた。

二三の來客が詰めかけて來てゐるので私達は別れを告げた。幸先の好い交渉であつた。私はマ博士に言ひ知れぬ懷しさと引力とを感じつゝ室を出た。半時間の會見、而して之が私をマ博士に永久に繫ぐ契緣とはなつた。

二日の後私の願ひは全部採用された。そして教育部次長のミュロワク氏に紹介され、それから各課長に紹介された。職工課長のヘンケル氏、安全課長のショー氏、職校長のサール氏、係長ミード氏、ジエネラル、スーパーインテンデントのマルチン氏、その他[illegible]長やら工場方面の主な人々に紹介された。

翌日愈々職工として採用されることゝなつた。數百の職工志願者と同じ様に採用口に立つて一切の手續を濟ませ、とても徹底した健康診斷を受けて、昨日歸りに買ひ調へた青いオーヴァオールズの胸に番號入りのバッチを着けて愈々フォードメンの一人になつた。職工課長ヘンケル君肩を叩いて冷かして曰く「見事な職工振りだよ。ハ、、、」

三、雇入の方針

職を獲ることは自主獨立の生活を營み得る根本條件である。何ものでも人に與へることは恩惠に墮し易い。然しこゝに若し人に與へて差支なく、且つ又與へることが善いものがあるとすれば、それは自主獨立の途たるべき職業である。職業なきものは浮浪の徒である。勞せずして生活し得るものはよし富貴の人たりとも恥づべき生き方である。之れ實にフォード氏が金錢衣食を惠與することを好まずして職を與ふることを欲する所以である。而も之は彼の衷心の願希にして萬難を排しても之を實行して居る所である。これこそ人に對する行爲[illegible]る贈物とも云ふべきものであると思ふ。

かくして、來るものは何人でも拒まずに採用[illegible]

[illegible]

能率増進の上から適者のみを採用する。選に洩れたる人々は他所に拒まれ乙地に棄てられ或ものは遂に市に收容されたり或は日傭人夫となつたりして漸次敗殘者の群に落ちて行く。フオード工場は之に對して極端なる例外の方針を執つて居る。來る者は何人でも之を拒まぬのである。五十八ヶ國の國籍を異にしたる者が一工場に働いて居る。日本人も二十人程居る。宗教上から云へば當時の統計（一九二〇年）ではローマンカソリックが一番多くて一八、九四六人、新教之に次ぎ一七、〇六四人、第三はヒンヅー教で、二、三〇九人、第四はヘブリー教で一、四三三人、其他佛教は四人、無宗教は五三三人等々。

こゝに二千人の不具者が働いて居て皆夫れ〳〵一人前の仕事をして居る。適材適所を十分に行つた結果と思ふ。例へばコムミユテーター部では腰掛け作業が出來るし細い材料の撰分けをしたりするので足の悪い人、盲者、聾者、唖者等が澤山居る。

免囚にフレツシユ、スタートを與へよと云ふので前科者も一切構ひなしで採用される。

後日市俄古のインターナシヨナル、ハーヴエスター會社の人事部長として令名あるアーサー、ヤング氏に此の話をしたらヤング氏笑つて曰く「僕は三度續けて採用されたよ」と云ふ。其の譯を問ふたら「三日續けて名前を變へて採用口に立つたら三日とも無事關門通過さ」と答へた。如何に無差別自由に採用してるかゞ分る。

ミユロツク氏の話だが或日跛足の人が來た相な、山本勘介以上の體かならぬ天分を惠まれて來た。職工課長ヘンケル君も一寸困つたので教育部に電話をかけた。

「ミユロツク君今盲目で且ツ跛足の人が來た。どつちか片方が滿足なら好いが跛足はうんとひどいんだ。教育部の方針に反するかも知れぬが已に廢兵千三百人を收容してるし、ヘンケル一寸使ひ途に困つた。此一人は何とかして呉れないか」

ミユロツク氏も色々考へたが兎に角採用して貰ふことにした。そして適當な義足を給して市のチヤリテイ、ボールドに仕事を教へる樣に頼んだ相な。ところが幾月かの後には立派に手先の仕事が出來る樣に訓練され、今では一人前の腕になつて立派な職工になつた上に毎週土曜日にはダンスにも出かけると云ふ話。おかしい樣な感心な話である。

或朝用事があつてヘンケル君の所に行くと一列に就職希望者が受附の所に並んで居る。その中に十八九才の支那人に似た少年が居た。年齡を聞かれて滿十七才何ヶ月と答へたが十八才以上でないと職工に採用せぬとの事で非常に悄氣て居た。私は同じ黄色人種のことで懐しくなつたから傍に行つて「君は一人か兩親と來たのか」と英語で聞くと先方も英語で「ロスアンゼルスから父に別れて此處まで來た」と縋り度い樣な面持をして云ふ。試みに「君は支那人か」と聞くと「否、日本人だ」と云ふ。それから祖國丸出しの上手な日本語でお互に流暢に語つた。そしてヘンケル君に頼んでこの少年をフオードの徒弟學校に

入れた。數ケ月後に補習學校を了へて工場に出た時は相當訓練もされて腕も出來たと見えて六弗七十仙取つて獨立した。其より收入が上になつた。彼は今日內地に歸つてフォードの代理店を營み立派に暮して居る。

こんな風に誰でも採用しては定めし工場は物騒だらうと思ふけれども盜難等は絕無と云つて宜しく守衛即ちウヲッチは居るけれども決して退場の際に身體檢查等はしない。ロシア人が流轉の旅を續けて來てフォードに採用され、その當時に撮したうらぶれた漂泊者の持つ一種沈鬱悽慘な面持をした姿と鑛山の長屋式の住居の寫眞が澤山ある。

此の採用當初の寫眞と兩三年後の寫眞とが對照してあるが前者と後者とは似ても似つかぬ變化である。住居の改良はさることながらその態をも凌ぐ御面相に春一陽の温みと典雅な文化の光とをさし添へて來て天晴立派た米國紳士となり了せるには誰しも一驚を喫する。心の持方で人の容貌までが所謂著しく變化するものである。又生活の改善で心の持方も變り得るものである。而してその生活の改善も生活を安定させる一定の職業と、愉快なる作業と、且つは生存でなく一歩進めて生活の向上を十分に保障する賃金とに依つて達成されることであるを思ふ時、最低六弗の賃銀を誰にでも支拂つて居るフォード工場は偉いたる事を爲しつゝあるものかなと三歎するを禁じ得ぬものである。

四、作業場

工場の人的管理の第一着手は何と云つても仕事を愉快に爲し得ることである。職工生活をしたもの丶誰もが感ずることは今日も亦煙の中で材料に親きながら組長に怒鳴られるのかなあと云ふ不愉快な思ひである。此場合工場の門は朝は地獄門で歸りは極樂門と呼ばれる。だから人事管理の第一着手には作業場を出來るだけ快適にすることに心かけねばならない。

身體の髄まで通る寒さに作業服の上に着た外套の襟を立てたから三十人位乘れる昇降機で三階の作業場に上る。アルファベットで區切つて數字で更に細別された職場のS4の部に行き小さなタイムリコーダーで出勤をリング、アップして側の外套掛けに外套を引かけて機械の前に立つとやがて本館の時間係の示指がボタンに觸れたと見えて午前六時半を報ずるベルがけたゝましく各職場に鳴り響く。と同時に稍や青味を帶びた線光でない管光の電燈が一時にパット室內を照らす。ベルトが廻轉を初め機械が音を立て、運搬夫が材料を運び出し各職工が直ちに受持の場所に就き組長が忙がしく職場を廻り職長が製造指圖書を持つて各職場の組長に渡して歩く。かくして今日の平和の戰は火蓋を切られるのである。

春とは云へ北の方湖沼地方より雪を孕んで吹き來る湖風が幾日となく續いて外は、窗を裂く様な寒さだけれども、職場にはスチームヒーターがあつて何時も華氏の六十度位に保たれて居る。[illegible]外の寒氣を忘れた[illegible]

も時々する。温度六十度位が作業には暑からず寒からず誠にモデレートな温かさである。之が爲めに怪我が少なく且つ能率を增すと云ふことである。

作業場の設備は仲々至れり盡せりである。電燈太陽の如く、濕暖春の如く、咽が乾けば一寸螺をひねると淨水道を更に工場で今一度フイルターした水が出るし（此れは夏は氷で冷却して供給される）通風を欲すれば窓ガラスのサイドウオールの一部を開けば、新鮮た空氣は徐ろに入つて來る仕掛になつて居る。暗いジメ〳〵した非衞生的な作業場では自ら不平も出るし陰口も利きたくたる。人性の陰氣た方面の活動をそゝることになるのは自然である。災害の防止上又能率增進の上からも、更に協調精神の鼓吹の上からも、工場の採光通風濕度等はよくよく考へなければならぬと思つた。

然しフォード工場だつて群書に見るが如き完全無缺のものではない。正しく觀察する爲めに例外的に不良なる箇所も一二あげて見ることにする。

晝食時になつたので食堂に出かけるのかと思ふと之程の工場に食堂の設備は一つもないのである。五萬五千人では食堂の建設も並大抵ではないかも知れぬが作業場で機械の間で蹲踞つてモク〳〵やるのは感心出來ない。それから手洗場はあるけれども浴場もシャワーもない。外の職場なら未だしも私が後で働いた鑄物場なんか煙と塵埃との中に八時間働いて身體の汗や埃を洗ふ設備が一つもないのである。夏は皆に堪へ切れぬ氣がする。歸りの電車の中であまり汗臭いのや、埃だらけになつて淑女の間に陣地を張るのはあまり堂々たるものではない。

話の序だが鑄物工場の砂型場は二階にあるが砂埃が濛々と立つ中に働いて居ると階下の鑄型に鐵の湯を流し込む所からコークスの瓦斯やら鑄造物の砂煙やら何とも知れぬ煙が騰つて來る。同僚の一人のネグロ君が「ツー、マッチ、スモーク」と云ひながら顔を顰めて前屈みになつて胸を押へて「[illegible]」と云つて胸の邊を擦つてる。下の連中は夏はエライよと同情してる、一週間交替だ相な。誰でも煙の苦痛を訴へるのである。塵埃は電氣爐と二階の鑄型部が殊の外甚しい。全體を通じて此の鑄物場は例外に的設備が惡い。

それから此鑄物場は冬でも常に暑いのである。暑いのではない熱いのだ。通風器はあるが不十分である。昨夏マ博士が來て見てこれはひどいと云ふので新たに十馬力の通風機を備へて呉れたのだが、夫れでも熱い〳〵のである。此の改良についてはフォード工場も大分頭を痛めてゐるらしい。私が十月に再び工場に來た時には漸次改良の緒に就いて居た樣であつた。此の鑄物部には純米國人は極めて少いのには驚いた。殆んどネグロや波蘭土人や露西亞人の如き外國人が多數である。從つてフォード工場の組長は大抵は純米國人たのに此部分は外國人が多い。純米國人はこんな苦しい所には働かないのか知ら？

私は此部に働いて五日目には鼻の穴や眼の間が一面に白くなつて水分を含んで來た。熱氣の爲めに皮膚が爛つて來たのである。白い粉を

縫つて白の靴下を穿いて毎日治療所で治療して貰つたが約一ヶ月苦しんだ。終には歩行が出來なくなつて數日休んだ。

其他フォード工場の勞働そのものは決して樂ではない。能く通り一遍の旅客が土産話に云ふコンヴェヤー、システムの所等一見勞働者に寸暇がなくて苦しい樣だが之等は未だ樂な方で他は並大抵の勞働ではない。私はリベット部に働いた時初日にあまり勞働が激しかつたのと音が高かつた爲めか、機械の轟々たる響が家に歸つても耳の中で未だ聞えて頭の中はギシ／＼音がする樣に感じた。二日目は更に甚しくなつた。三日目は土曜日なので半日だと思つて喜んで行つたら矢張り終日働くのであつた。四日目には遂に歸途の電車の中で過勞の結果か鼻血が流れ出て前に座つて居た婦人がハンケチを出して扶けて呉れた。私も多少は工場生活をして居たけれどフォード工場のリベット部や鑄造部などは勞働が隨分激しいと思つた。後日フォードに働いてる日本人の諸君と相會して此話をしたらどの日本人も皆同じ樣に苦んだ相で、或人の如きは遂に病氣になつて退社して了つた相な。日本人は多く仕上工等のデリケートな仕事に廻つてるのも此爲めだ相な。

其後私が一年程前に彼の有名な大ストライキをやつた沙市でA・F・L勞働組合の領袖ダンカン君に會つた時同君曰く

「フォード氏は實に偉い、八時間制を世に先んじて斷行したり所謂利益分配制度をしたり罰金制度を廢めずに懲罰制を實行してるのは思ひ切つた點もあつ一勞利を擧げて默就する。然し工場があまりに機械化されて機械が人間を使役する樣な結果となりその爲め過勞になるのは困つたことだ」と語つた。

之はフォード工場の一考すべきことだと思ふ。後日一應上に私の改良意見を提出して參考に供した。

五、セーフテイ ムーヴメント

職場の快適に次いで考慮されたることは傳染病等の發生を防止と云ふことである。我國の工場の中には或は花園を作り運動場を設け又は食堂を壯麗にし病院を宏壯にしてわれ人稱して模範工場と云ふ。然るに目に見耳に聞く結構を綺麗にするを知つて、耳目に觸れぬ内部の保健安全の施設には細心の注意を拂ふものが少い。肺結核、肋膜炎等の諸病が猛威を振つたり負傷の數が多かつたりする原因は食堂や病院の輪奐の美では絶滅し得るものではないのである。

私は職工生活を終つてから暫く安全課に机を置いて課長ショウ君の指導を受けた。

私が第一に感じた事は、安全課の存立の明確で活動自由にして徹底してることである。凡そ此安全運動は工場の作業上のもの丶中に在るものだが此[illegible]つて行くのでたか／＼活動が思ふ樣に行き[illegible]これあつ

の工場の安全課は此點に鑑みる所あり[illegible]

[illegible]

人であるから施設が行屆いて居るばかりでなく日々時々になす諸般の行動が適切で迅速であることは羨望に値する。

此課は一九一四年彼の大改革の時に創設されたもので此課の活動の効果は著しく現れて一九一六年の負傷の指數を一〇〇とすれば三年後には僅かに二〇に下つて了つた。夫れ丈け不幸を減じ冗費を節約すると共に生産力を增大した結果となつた。業務上の死亡者も前は年々十名内外はあつたものが五萬五千人中僅かに一人か二人に減じた。安全課の中に百人會（Committee of Hundred）と呼ぶ會合があつて、全工場を百の區畫に分ち各部から一名の委員を選出し此委員を以て此會を組織して居る。此委員は多くはフォアマンであるがその約四分の一は平職工が出て居る。每月一回集合して安全に關する諸般の協議を爲して居る。

執務時間は午前八時から午後四時半迄で晝食時間三十分を設けてある。

こゝに來てからは朝薄暗い頃に出勤しないでも朝日に長い影を連れながら表玄關から入ることになつた。

八時のベルが鳴ると一同室の中央に集合する、そこに課長のショウ君又は代理のガイスレル君が現れて前日の安全事務の結果を報告し之に關連して特殊の注意を與へ且つ一般に種々サゼスチョンを與へて呉れる。それがすむと七名のインスペクター及び五名のスペシアル、インスペクターは八方に散じて工場内部の機械器具の點檢から通路、運搬方法、地下、屋上、の通路建設物の危險等一切安全保健の檢査をして歩く。私も彼等の一人に蹤いて工場を廻つた、實に詳細に調べて歩くのには驚いた。成る程實際家を集めてる丈けあるなあと思つた。所所で安全委員が報告する。危險な所には猶豫會釋もなく危險札を貼り附けて使用を中止させる。危險を一分間でも放任しない樣に努めるのである。

一巡濟ませて室に歸ると早や十一時だ。彼の机の上には「IN」と「OUT」の二種の箱が置いてあつて夜中の出來事は朝來た時此の「IN」の箱に入つて居たが先刻小集會後奇麗に片附けて「OUT」の箱に入れた。それが今は夫れ〳〵傳達されたと見えて一枚もない。その代り「IN」の箱の中に組長から來た報告が早や五六通入つて居る。夫れを片附けたのでこゝで一休みするのかと思ふと又現場にインスペクトに出かけて行くのである。實に活動的にフォード工場の誰もが出來上つて居る。私は再び彼と共に地の下のパイプ道やら屋根の上に上つてやつとの事で晝食となつたので三十分間休み得た。かくの如く彼は絕間現場を巡つて仔細に點檢して災害の惹起を防止してるのである。

次には此課の中の教育係に就いて研究して見た。此係の仕事は大別二つある。一つは印刷物の配布で他の一つは活動寫眞の映寫である。こゝで感心したのは之が實際を基礎にしてることである。

印刷物に二種あつて定期と臨時とがある。定期のものは原則として工場に起つた實際上の出來事を寫眞に撮影して、その災害の原因を文

字で説明し且つ防止方法を指示したもので大小數種ある。臨時のものは例之流行性感冒が猖獗を極むる際等に出す注意である。之等の印刷物は工場内のブレッチン、ボールドに毎土曜日の午後揭示して月曜日の朝誰もが注意する樣にしてある。

活動寫眞は職工が入社した當日午後三時必ず北西隅に建つてゐるオーチトリアムに赴いて安全第一のフイルムを約三四十分間觀覽することになつて居る。此際現場のフオアマンが説明の任に當るのも面白い。凡て組長は色々な方面に立働いて職工の指導誘掖をして居る。外國人に英語を教へる英語學校も教師は多く此の組長である。

此外衛生係や百人會の活動は省略する。

六、人の取扱

暫く現場に没頭して本館の方に御無沙汰してるとマークキス博士が會ひ度いから時々顔を見せよと云つて來た。歸りに立寄つて見るとマ博士は私に色々と感想を聞く。私は卒直に感じたことを長短ともに話した。

其時私は同僚のロイ、チエムバーと云ふ男が「此工場は絶對に自由だ。ヘンリー（フオード氏のこと）に俺達にフエースフルだ」と云つた話を想ひ出して此ことを云ふと博士は「[illegible]」と云ふ。うまいことを云ふなあと思うた。更に話を求いて云ふには「何ものも其自然に從つて取扱ふ方針である。それから職工に對しては相互の信頼が大切だが先方に忠實を求むる前に自ら先づ忠實を先方に示さねばいけぬ。」

我が國の諺に寢て居て人を起すなと云ふことがあるが多くの工場主の中には此種の人がありはしまいか。布團被つて目を開けてる樣な職工もまた一方にはあるものだ。

職工の直接上に立つのは組長であるが此組長の[illegible]いことは實に感服に堪へない。私は之れ以來組長の訓育の大切なることを感付くした。蓋し工場生活を左右する力を有つてるのは組長であり、その組長の善惡は直ちに全工場の職工の勤怠の由因となり、工場生活の快不快も紛議の多少も、能率の大小も之に起因することが多いのである、と思ふ時世の工場經營家は特に組長訓育に深く思を致して欲しいものである。

フオード工場も嘗て組長が悪かつたことがある。その當時は一年の移動率三百七十パーセントに上つた、即ち五萬人の職工を常時維持せんとするにはどうしても一年十八萬五千人の人を雇入れねばならぬのである。米國のアレキサンダー氏の計算に依れば一人の移動の爲に何でも五十弗乃至百弗の失費があると云つた。之は新米が一人前の職工となる迄の損耗、材料其他機械器具の損傷等の諸失費を[illegible]したものである。そこで組長の選定に留意すると共に[illegible]

[illegible]

戰時中米國全土を通じて組長の改善を痛感した。それは戰爭と共に戰線に立てる三百萬人の軍需品を作る丈けでも一通りでなかつたし英國其他の國々からの注文も大したものだつたので生産の增加と一方には爭議の防止とが非常に必要になつた。當時或人の計算に依れば爭議の六十パーセント迄は組長の仕打に起因してると迄極言した。

その樣な組長が今日は此の工場でも實に模範的組長に改造され所謂命令と威壓とで莅んだボスの境涯から蟬脫し、今やリーダーとしてスーパーインテンデンツ、オフイスと製造作業との中間に立つて謂はゞ頭と手との間に在つて既定計畫を行動に移し、一方經費の簡約等經理の頭を働かせ同時に部下職工の訓練指導監督に當る重要な役目を演じて居る。而してその役者たるに相應しい素質を養成されたのである。

私は我國の組長にして知らざるを知らずとせずに無理をする爲めに如何に多くの損失があるかを恐れて居る。又工場主も當路の人々も能率だ、節約だ、關稅だ、と騷ぐと同時に此點の實際を御覽になる必要があると切に思つて居る。

我國では增給は普通年一回とか二回とかにあるのでフォードでも定期にあるのかと思つて居た。コムミュテーターの部のミリングに居た時對手の男に何年働いてるかと聞いた所が丸五年居ると云ふ。賃金は何程かと聞くと六弗だと答へたので、何故もつと昇給しなかつたかと聞いて見ると、それは本人の腕に依ると平然として答へる。增給は組長が個人々々を見て其必要ありとする時に上申して增給するのだ相な。定期に總花式に上げてやることはないのである。入職以來何年しても上らぬものがあるが一體に組長の公平を信賴して不平は一切言はぬのである。中には增給すべくしてせぬと言ふ自信のあるものは遠慮なく組長に掛合ふものもある。その時はよく調べて增給に値するとせば增給するのである。こゝらが感情に捉はれ易い國民とは大分違ふ所である。

七、獨立自尊の生活

"Help them to help themselves."

此の簡單な一句の中にフォード氏は千萬無量の思を潛めて居る。人生れて誰が獨立を厭はんや誰か自尊の念なからんや。而も世に出づる三十年、壯心雄志おぞくも碎けて膝を屈し尾を垂れて隷屬自屈の生活に陷るものが滔々相踵いで居る。

或は金に服し或は上司に阿附し或は自己の良心を裏切つて恬然たるものがある。フォード氏は最も之を惡み悲しんだのである。

何人も大臣宰相たることは難い。然し何人も自己を建設して獨立自尊の紳士たることは出來る。此の紳士こそ國の力となり社會の柱石となり入りては家庭に父として出ては世の働作者として尊い人生を完うするものである。よしや無名の職工として終らんとするも人類の恩人として神の記錄の上に特筆大書される人々である。

"Clean and constructive life." 之れが有名な利益分配の條件の最大な

ものであつた。賭博をせず、飲酒に耽らず妻子を遺棄せず進んで貯蓄を爲し子女に十分の教育をなし市民として社會に應分の奉仕を爲し以て"independent and selfreliant"な生活をなすことが非凡なる人は別としてなべての人として望ましきことである。

フォード工場の目的は自動車の製造と共にかゝる人間の建設である。その爲めに私生活に干渉はせぬ、只達成の爲めにヘルプするのである。

實に好い考でこれこそ人事管理の要諦であり眞髓である。玆に於てフォード工場は生存賃金（existence wage）でなくて生活賃金（living wage）を拂ひ以て生存費と教養費と向上の爲めの貯蓄と相當の慰安費を含んだものを最低の賃金としたのである。

自己の休養と向上の爲め他面に家庭の團欒と子女の教養の爲め餘暇利用を尊重して純入時間制を斷行したのである。

作業場を快適にして工場生活を愉快にし、安全施設を十分にして災厄不幸を除き、私生活にはこれを完成する資料を給して他は自力に依る自己の建設を助成するに止めてオーヴアガイダンスに陷せぬ樣にして居る。

當時家拂底で家賃が頗る高かつた。私は何故フォード氏は家を建つて與へぬかと聞いた所がミユロツク氏の云ふにはそれはフォード氏がランドロードとなつて私生活に主從の如き關係を作るを好まぬからだと答へた。家が欲しければ相談部[illegible]に行つて土地又は家屋の買入方を頼めば出來るだけ有利に交渉して與れるのである。[illegible]百人位諸種の相談に行つて居たが主に土地家屋の年賦式買入の相手續の依頼であつた。只々目に附いたことは家屋だけの賣買は一割位で他は必ず土地の取引で家屋は之に附屬して居るのである。

此の自主獨立の生活をさせて人間の建設を爲すことがフォードの人的管理の大眼目である。之れが爲めに年々二千萬弗からの利益配當も斷行したのである。而して之が事業遂行の中心は即ちマークヰス博士を統帥とする教育部（Educational Dept）の事業である。

此の教育部のことは數行を以て之をサム、アツプすることの困難を思ひ玆に記述することを見合せる。只々一言しておきたい事は十四年の改革當初二百人のインスペクターが各戸を訪問した時家庭の事情を調べて詳細なる個人記録を殘して之をファイルして置く。之れによつて家庭を good, fair, poor の三種に分けておいた。十四年の頃はプアな部門に屬するものが六割もあつたが三年後の十七年の一月調によれば

Good Home Condition	36.111
Fair Home Condition	4.297
Poor Home Condition	0.4?5

となり一九一九年一月にはプアなものが絶無に近くなつたので利益配當に全部預り得ることになつたから利益配當を[illegible]して之れを本給に繰り入れたのであつた。

然し職工として[illegible]家庭の事情[illegible]られるの[illegible]ので[illegible]

不平も聞えて來たのも事實である。

利益配當の本給繰入れと共に二百名のインスペクターを六十名に減じて了つた。そして名稱を改めてアドヴアイザーとした。

此の教育部が取扱ふ人事は家庭生活の改善や諸種の煩悶とか工場の不平とか何でも個人に關する一切のことを相談に應じて居るのである。アンドリュス氏の所には五十弗から百弗迄の金の相談に來るものが毎日十人は下らない。この金は特殊な事情の人に貸してやるのである。返さないからとて慈善的に惠與して了ふのではなく返金の催促をせぬまでである相な。

八、ヘンリー　フォード氏の片影

ヘンリー、フォード氏の事は群書百様に其の人物性行事業を書き出さんとして居る。私は玆には只々私の見、聞き且つ感じたことを一二書き綴ることにする。

入職の翌日四月三日であつた。市俄古市の鐵道のスヰッチ、メンに依つて點火されて忽ち全米に燎原の勢を以て擴大した鐵道大ストライキは、デトロイト市の幾多の大工場を休業又は縮短の已むなきに至らしめた。フォード工場も亦多大の影響を被つた。

即ち石炭、鐵其他の材料の輸送が杜絕してさしもの大工場も大部分作業休止の有樣とはなつた。職工が手を束ね組長が材料集めに奔走してる職場が日を逐うて多くなつた。月半ば頃から遂に職場によつては作業停止を言渡した。此の部の職工は他の作業し得らるゝ職場の職工と二日とか一週間とかの交替で作ることになつた。そしてLay offの間は賃金は一仙も支拂はぬのである。我國では差し詰め休業手當を要求する所だらう。がフォードでは各人皆非常貯蓄があるべきだといふ道理で當然支拂ふ可きでないものとして居る。

作業を續けた部分も亦段々に休止して來た。一城一廓が陷落して行く樣で心細いこと限りがない。全工場丸で火の消えた樣になつた。

その時である、何でも二十三日は土曜日だつたと思ふが此日ヘンリーフォード氏がデイヤ、ボーンの邸から久しぶりで自動車を飛ばして來た。

そして二階の南の端の室――そこは彼の令息エドセル、フォードが毎日執務してる所である――にヘンリー、フォードは姿を現した。そして重役のクリンゲン、スミス氏、工場長のマルチン氏を呼び小フォードと四人で協議した。教育部のラウンヅ君が一緒に來いと云ふので其室の前を通つて見たが硝子越に一寸見ると皆嚴肅な顏をして對策を協議する樣は感興深い光景であつた。

後で聞いたのであるが、その時はフォード氏は詳細に作業の狀況を聞いて、それから左の樣な問答があつた相な

フォード氏問、材料の來ないのは何故であるか、

答、鐵道罷業の爲め運輸杜絕したるに由る、

問、材料は絕對に手に入らざるか、

答、材料は求め得ざるに非ず只々非常なる高價を拂はざるべからず、

問、職工をレーアウトすることは如何にも忍び難き所なり。高價を拂うても速かに材料を得て作業を續くべし。購買課此方針に依つて材料を集むべし。

材料を集めて工場に十分に配給することは購買倉庫運搬にて努力すべし。目下材料の高價なるは材料そのものか運賃か。

答、運賃なり。

玆に於てフオード氏は厲聲一番して曰く

『フオードトラクターを總動員せよ而して即刻運搬を開始すべし。尙ほ本日中に全工場に通達して二十五日の月曜日よりは全部の職工に出動する樣通ずべし。』

げにや鶴の一聲である。二十五日の月曜日からは兎にも角にも材料は工場に搬入され全市の工場が銷沈し幾萬の職工が徒食してる時に獨りフオード工場のみは勇ましくも活動を始めたのであつた。

これが近因となつてフオード氏が翌五月には早速南ケンタツキーに炭山を買ひ求め鐵道を布設して自家の工場は自家の石炭を以て動かすに至つたのである。

更に今一つエピソードを記したい。

私が九月半ば半歳のフオドマン生活を終つてから暫く別れを告げ旁餘の爲に數千哩の山川都邑を歷訪した工場や鑛山等各所を視察して再びデトロイトに歸らんとしてバフアローに着いた日新聞を見るとフオード自動車大値下げの廣告が新聞紙一頁大に出て居る。諸物價暴騰し生活難の聲高き時値下げとは又思ひ切つた逆の行き方だと思つた。

デトロイトに歸つて早速フオード工場を訪ふとミユロツク氏が抱かん許りに私の手を握つて「非常な變化だよ、フオードは第二の改革に入つた」といふ。その話の要點は左の如くである。

値下げ斷行の少し前のことである。或日フオード氏からマークキス博士に電話が掛つて何日の朝何時某所に來れ。共に半日の舟遊をしようと云ふのである。博士は其日の定刻に示された湖畔に行つたら已にフオード氏は來て待つて居た。マ博士は驚いた、只々二人で舟遊なのだ、而もモーターボートはフオード氏自ら操り快艇は音も輕く漣漪を碎いて湖心遠く浮んだ。二人の外は天空湖上何人も知らぬ又何人も居らぬ。此時フオード氏モーターを止めて舟を中流に委し徐ろに博士に對座したのであつた。此の有樣は三國誌の曹操の故事でも讀む樣な氣がする。詞中有誓兩心知と云つた樣な劇的光景である。此時フオード氏は

「マ博士よ。今や諸物價騰貴して工場の經營は幾多の難局に直面して居る。如何にして此經營難を切り拔く可きか名案あらば示されよ」

と云つた。マ博士は之に對して答ふる所があつた。

世間普通の考から云へばカーの値上げをして賃銀を上げるか又は職工を解雇する外はないのである。又世間の大工場等が往々として居眠

を取つた。

フォード氏は沈思之を久しうしたがやがて徐ろに口を開いて曰く

「博士よ、私は賃金を値上げする爲にカーの値上げをすることや又は職工の馘首は行ふ事を欲しない。カーの値段を上げることは更に此上物價騰貴の素因を作ることゝなる。さればとて解雇の如きことは如何にしても私には出來ない。」

フォード氏は斯う云つて更に深思するが如く兩人は暫く靜寂な四圍の風光の中に醉つた。

遂にフォード氏は沈默を破つて言つた。

「私は今日の苦境は獨りフォード工場のみでなく全國的であつて其の主たる原因は物價の高いことである。故に私は寧ろ思ひ切つて物價引下げの急先鋒となりカーの値下げを斷行して了はうかと思ふ。そして製鐵業者の如き不當なる高價を維持せんとする輩に對して宣戰しやうと思ふ。貴下も必ずや私に贊成さることゝ信ずる」。

マ博士はフォード氏の此の奇想天外式な而も透徹したる天稟の直感の正しく且つ堂々として常轍を遠く逸脱してることにいつもながら敬服した。博士も亦こゝ迄徹底したか否かは知らぬが極めて同感であつたらしい。

フォード氏は常にマ博士の人格と聰明とを尊重して居た。博士も亦知遇に感激して居た。

兩雄は靜かに手を握つて値下げの斷行と製鐵業者への宣戰とそれから工場内部の大改革を誓つて輕いランチを濟ませ舟を岸に着けた。僅かに數時間の相談が此大事決行の事を決した。

誰も知らぬ中に大決心は確立されそして一日突如としてフォード自動車値下げ斷行の廣告となつたのである。六百五十弗のカーを五百十弗に値下げして一擧百四十弗をカットダウンした。

全米を擧げてその意想外の果斷に驚いた。

更に英鋒を製鐵業者に向けて値下げ談判を始めた。一方内部の組織を極端に單純化して冗員を生產部に廻した。假之原價計算課には今迄四百名居たのを百名にし項目六百を三十に減じた。斯樣にして事務所に居た二千人のクラーク中から約半數近くの人を剩したのである。私はミュロック氏の話を聞いてマ博士に會つた時マ博士は余剩の人達を少數宛集めて作業場に就いて働く樣に云ひ渡してる所であつた。此の仕事はたかく容易ではないとマ博士は私に語つた。

マ博士は此の大役を濟せてしまつた時極度に疲勞して倒れた。そしてまだ竣工しないフォード病院に入院した。私は晩秋の小春日和に日の本の香床しき大輪の菊花黄白取り交ぜた花束を持つて彼をその病床に見舞つた。昨日迄は滿身元氣横溢して第一線に活動したる彼も今日は白布に掩はれて只一人ベッドの中に輾轉して居られる。私が靜かにドアを開き彼の病室に入ると博士は仰臥したまゝ默禮して居られた。その本は Irish の名著 " man to man " であつた。博士は固くも私の手を握つて幾度か菊花をそのやつれたる頰に當てた。彼はヘンリ

ー、フォード氏の果敢なる値下の話から一轉して數百の事務員を現場の作業に轉勤させる時の心勢をしみ〲と語られた。感激に滿ちた幾刻かは過ぎて胸迫るを覺えながら私は博士と秦胡の別れを告げた。數日の後住み馴れた青春の市に別れて萬里の旅に出る私の前途を博士は眞心籠めて祝福して下さつた。私が再び米國に來ない限りこれは再び會ふことのない永遠の別れとなるかも知れない。見ず知らずの黄色人種の私を半年の間何等の秘密もなく全工場を開放して實習させて與れて其上事務所に入つて事務の大要迄机を並べて敎へて下さつた恩人に對して私は感謝の辭を知らなかつた。

人間逢遭悉く友であり知己であり恩人である。

人種の色の相違を超越して。

北歐の林檎よ東城の白水よ。斯の地に別を告げ斯の人と袂を分ち孤影孑然として大西洋に浮ばんとして居る。私は神かけて博士の健康の回復を祈りつゝ又彼を通して五萬のフォードメンの福利をこひ希ひつつ而して又私の敬愛措く能はざるヘンリー、フォード氏の人道の爲めの健闘を祈りつゝ前庭に出づればエルムの疎葉の彼方落日哲人の思を傳へてハイランド、パークの聳り白雲掩現して居る。私はロビンの鳴かざる晩秋の並木道に出で大地を踏み占めて元氣好く一步を大路に歩き出した。(終り)

漱石の思ひ出（六）

夏目鏡子述
松岡譲筆錄

二十五　『猫』の家

こんな工合に惡かつた頭も、三十七年の春から夏へかけて大分よくなりまして、無鐵砲の癇積を起こして氣狂じみたことをするやうなことも少くなりました。それにつれて自分でも大層勉强が出來るやうな樣子で、本をよんだり物を書いたり、殊に講義のノオトなどもいゝ案配に進むらしいので、勿論合間合間に怒るやうなことはあつても、それも一時のことになつて、段々重くるしい靄が晴れて來るやうな有樣でした。ところで面白いことに思ひますのは、頭の調子がよくなつて來るに連れて、大學の講義のノオトの字が目立つて小くなつて行くことです。尤もこれは小く書いた方が紙の枚數を使はずにすむので便利なせいだつたのかも知れませんが、翌々年の末西片町へ越した頃のノオトの字の小さゝつたら、まるで虫目鏡で見なければ讀めないやうな字を書いたものです。自分でも『道草』か何かの中に、このノオトの字を形容して蠅の頭のやうな字と申して居る位ですが、今尙に殘つてゐますのも當時の『文學論』の講義のノオトを見ますと、最初は中判の洋罫紙に、罫からはみ出しさうな大きな字で横様に書いて居るのが、終ひ頃になると、振り假名活字のやうな小い字になつて居ります。それでも、若い時にトラホームを病んで、それから慢性の結膜炎をやつて時々目藥をさしたりはしてましたが、元來目性がよかつたと見えて、晩年になつて老眼鏡をかける迄、目鏡といふものはかけたことが御座いませんでした。ずつと後のこと、人相を見る人から、眼が三白眼でどうだとか言はれて自慢してゐたことがありましたが、瞳と目尻のところが少しぼかされて濁つてゐたやうでした。

この六七月、夏の始め頃かと覺えて居ります。どこからともなく生まれていくらもたゝない小猫が家の中に入つて來ました。猫嫌ひのわたくしはすぐに外へつまみ出すのですが、いくらつまみ出しても、いつかしらん又家の中に上がつて來て居ります。そこで夜雨戸を閉める時などは、見つけると因業につかまへては外へ出したものです。しか

し襖や雨戸を操るが早いか、にやんといつては入つて來ます。それが又それ程嫌はれてゐるとも知らず、歩いてゐると後から足にじやれついたり、子供たちが寢てゐると、蚊帳の外から手足をひつかけたりします。其度毎に又猫がといつた案配で幾度殘酷につまみ出されたり、放り出されたりしたか知れません。が何としても圖々しいと言はうか、無神經と言はうか、いつの間にやら入り込んで、第一癪に障はないのは御飯の御櫃の上にちやんと上がるのです。腹が立つやら根氣まけがするやらで、私もとう／＼誰かに頼んで遠くへ捨てゝ來て貰はうと思つてゐると、或朝のこと、例のとほり泥足のまゝ上り込んで來て、おはちの上にいゝ工合に蹲まつてゐました。そこへ夏目が出て參りました。

「此猫はどうしたんだい。」

と、何處かで貰らつてでも來たのかと思つたものと見えて尋ねます。どう致しまして、此方は何とか打放らかして了ひたいのだけれど附き纏はれてゐる始末なので、

「何だか知らないけれども家へ入つて來て仕方がないから、誰かに頼んで捨てゝ來て貰はうと思つてるのです。」

と申しますと、

「そんなに入つて來るんなら置いてやつたらいゝぢやないか。」

といふ同情のある言葉です。ともかく主人のお聲がゝりなので、そんならといふわけで捨てるとは見合せました。それから猫は大威張りで憚らずおはちの上にのぼつたり、腹這ひになつて夏目が新聞をよんでゐると、のそ／＼歩るいて行つては丁度新聞の眞中に坐つてすまして居ります。しかし惡戯がなほつたわけではなし、それどころか一層ふざけ散らして、子供をひつかいたりそんなことをして仕方がないので、時々物尺でどやされたりして居りました。

ところが或る時、よく家に來るいつものお婆さんの按摩が參りました。膝に來る猫を抱き上げて仔細にしらべ上げて居りましたが、突然

「奧樣、此猫は全身足の爪迄黑うございますが、これは珍らしい福猫でございますよ。飼つてお置きになるときつとお家が繁昌致します。」

と申します。この小猫の毛並といふのが、全身黑ずんだ灰色の中に虎斑がありまして、一見黑猫に見えるのですが、そんなことも知りませんので、爪の尖や足の裏迄はしらべたこともありませんでした。が言はれて見れば全くそのとほりで、殊に福猫が飛び込んで來たと言はれて見れば何となく嬉しくもあるので、折角來たのを捨てゝはとそこは現金なもので、其日から前のやうに虐待もしなくなり、惡戯が過ぎると御飯もやらないなんかと因業なとをしたのが、今度はあべこべに私が自分から進んで、女中のやつた御飯の上におかゝをかけてやつたりして、大分待遇が違つて參りました。猫の方では益々いゝ氣になつて子供の寢床に入り込んだりして、其度に癇持ちの二女の恒子なんかは夜中でも、

「猫が入つた、猫が入つた。」

と火事でも出たやうにキユー／＼聲を立てます。すると夏目が物尺を

もつて追つかけ歩るいたりして、時ならぬ活劇を演じたこともよくありました。

これが有名な初代の猫の少年時代です。

こゝで千駄木五十七番地の家の模様を一寸お話ししておきませう。私たちはこゝで二度泥棒に入られましたのですから、餘程泥棒の入り易い家と見えます。ですからこゝであんまり詳しく家の圖面なんかを書くと、泥棒の手引をするやうなもので、現にお住みになつてる家主の齋藤博士の御迷惑になるかも知れませんから、これからのお話に必要な程度に止めて、ざつとお話しすることにして置きませう。いつぞや齋藤さんは『猫』をよむには家の模様がわからんといかんとか仰言つてられたさうですから、或はお叱りを受けるやうなことはないかも知れません。

先づ千駄木の道に門があつて、門を入つてじきに玄關。玄關の間が二疊か三疊敷。玄關は東に面して居ります。玄關の間を出ると南をうけた緣側があつて、取突きが長細い六疊位の廣さの部屋。そこは物置き同然に本をつめて置きました。お隣が八疊の座敷。こゝで夏目が朝よく猫を背中にのせたまゝ寢そべつて新聞をよんでゐました。次が六疊で私の居間。こゝに私たちは寢みます。この三つの部屋が南向きで、その背中合せに、私の居間の後ろが六疊で子供部屋。座敷の後ろが茶の間で八疊、その隣が三疊の女中部屋で、それに隣つて台所と湯殿があります。夏目の書齋は玄關脇の六疊で、間は襖になつてゐるのですけれども、そこへ大きな本棚をおいて、わざ〱一たん廊下に出て、そこから三尺の戸を開いて入るやうになつて居ります。その書齋の東側の窓が、夏目があたまの惡い時、毎朝、道を隔てゝ向ひ側にある下宿屋の書生に、オイ、探偵君と呼びかけた記念の窓です。南に小さい圓窓があり、あとは開いて緣側になつてゐます。大きな机を南に向けて据えて居りました。圓窓の前の空地には古井戸が捨てゝあります。

まづ大體これだけの家ですが、書齋のわきに木戸があつて、それから又もう一つ木戸がすぐ外側に曲の手になつてついてゐて、そこから畑に出られます。畑の西の外側が郁文館中學の運動場、南側の、丁度書齋の正面に喧嘩ばかりしてゐる倖屋がありました。畑と庭との間に垣根がありまして、北側の茶の間の方の垣根の外には、二絃琴の御師匠がいつも二絃琴をならして居りました。

畑も大分廣いので、それが家についてゐるのを幸ひ、女中でそんなとの出來るのがあつて、茄子や黄瓜を作つたり、南京豆を植えたりしたものです。よく垣の下を鼬がちよこ〱走つたり、蛇がによろ〱這つたりしました。畑のところへ行つて、上の娘などは郁文館中學の運動會を見たりして居りました。

ざつとこんな調子の住ひでした。九月の新學期のことだつたと覺えて居ますが、前にも一寸申しましたロンドンで御一緒だつたといふ犬塚武夫さんの紹介で大學に入るについての保證人を頼みに、小宮豐隆さ

んが始めて見えました。この新大學生さん、大方一高で剛健の風をおほえてゐられたのでせう、初對面なのに胡坐をかいたとかで、後で始めて來てあぐらをかいた客はないといつて夏目が話して居りました。

鈴木三重吉さんが手紙をよこし始められたのも此頃からであつたと思ひます。この鈴木さんの手紙では大變な笑ひ話があるのです。

今お話したこの犬塚さんが、やはり此頃の夜來ておいでになつて、散々座敷で話していざお歸へりにならうといふ段になつて、玄關に出て御覧になると、帽子と外套とが見當りません。たしかにこゝにおいたのだがといろ／＼家中でさがすのですが、やつぱりありません。外套はともかくとして、どうも帽子なしではといふので、ともかく一時凌ぎに夏目ののをかぶつてお歸へりを願ふ事に致しました。多分こそ泥にやられたのだらうといふ事になり、段々樣子を考へて見ますと、客と主人とが八疊の座敷で話してゐるところをこれ幸と、畑の方の木戸から入つて、眞暗な書齋に入り、それから一旦廊下へ出て、玄關の部屋にまはつて外套と帽子とを失敬したらしいのです。書齋の中は洋書ばかりなので手をつけませんでしたが、たつた一つ机の上にのせてあつたニッケルの懷中時計が見えなくなつて居りました。この時計は夏目が學生の頃七圓五十錢で買つて、それから臨終迄お供をしたといふ大古の代物です。

ところが實際よくしらべて見ると、こゝに不思議なことが發見されたのです、といふのは、丁度其頃來た鈴木三重吉さんの、それにノ／＼長い情の籠もつた手紙が、机の上に置いてあつたのですが、それの一が机の上に殘つて障子の外へ流れ出てゐるといふ騷ぎ。それを傳はつて行くと、すぐ前の木戸をぬけ、やがてその又次の木戸をぬけて、畑の中迄つながつてゐるのだから並大抵の長さぢやありません。さうして畑の中で終るところに大きな大便がたんまり垂れてあつて、その手紙の一番先でちよんと拭いてあるのですから、泥棒の度胸と言ひ用意と言ひ、それの御役に立つ爲めに机の上からずる／＼に連れて行かれた手紙の長さと言ひ、みんな揃つて申分がありませんでした。まさか泥棒に尻を拭かせやうが爲め書かれた手紙ではあるまいし、とんだ手紙の滑稽な受難といふものです。流石に私たちも可笑しくなりましたが、夏目は夏目で「こんな情味のある手紙でお尻なんか拭いちやバチが當る。本當に中味を讀んだら、中々尻なんか拭けるもんぢやないのに。」

と申して居りました。

二十六　創作熱――『猫』のモデル

此年の暮頃から物を書き始めました。『ホトトギス』の正月號に『吾輩は猫である』の第一回、『帝國文學』の正月號に『倫敦塔』、『學燈』に『カーライル博物館』といつた工合に續け樣に書きました。

創作方面のことは私にはよくわかりませんが、[illegible]に本當に[illegible]を[illegible]くといふ氣もなかつたところへ、長い[illegible]て溜らない

のをこらへてゐた形だつたので、書き出せば殆んど一氣呵成に[illegible]に樣よく書いたやうです。これから翌年にかけて『猫』の續きを書き、『幻影の盾』だとか、『一夜』だとか、『薤露行』だとか、其の翌年にも、『猫』の續きの外に、『坊ちやん』や『草枕』などを書きまして、殆んど毎月どこかの雜誌に何か發表しないことはなかつた位でしたが、書いてゐるのを見てゐるといかにも樂さうで、夜なんぞも一番おそくて十二時一時頃で、大概は學校からかへつて來て、夕食前後十時頃迄に苦もなく書いて了ふ有樣でした。何が幾日かゝつたか、今そんなことをはつきりは覺えて居りませんが、『坊ちやん』『草枕』などゝいふものも、大概二晩三晩だつたやうに思ひます。多くは一晩で書いたかと覺えて居りますが、自分ではどんな苦心やら用意やらを前々からしてゐたものか知りませんが、ペンを執つて原稿紙に向へば直ちに小說が出來るといつた工合に張り切つて居りました。だから油が乘つてゐたところの段ぢやありません。それですから書き損じなどゝいふものは、全くといつていゝ程なかつたものです。それが晩年になりますと、書けなくなつたのか、書きづらひものを書いたせいか、或は妙にこり出したのか、ともかく私にはよくその邊のことはわかりませんが、山のやうに書きそこねの原稿紙を出して、後でそれに手習なんかをして居りました。さうして書く量も晩年には一日の新聞一回分ときめて居たやうですが、此頃から見ると隨分違つたものです。殊に徹夜なんかしたり、傍で見る目も痛々しい程苦しんでゐる樣子がとんとありませんので、よく外の文學者の方がそんな苦心談をされるのが、そんな經驗のない私には全く腑に落ちない位のものでした。だからこんな片手間な樂なことをして、それで書く當人は面白く、私たちの生活がいくらか樂になるのだから、こんなうまいことはない位に思つたものです。

此頃はまだ萬年筆を使はない前で、ロンドンから持つて來たのでせう、細身の蝶貝のペン軸を使つてしきりに物を書いて居りましたが、後で萬年筆を使ふやうになつてから、それを子供にやりました。丁度指のあたるところがすれて、いゝ工合に丸味を帶びてへこんでゐたのですが、後で子供たちのお友達が、本箱の戸をこぢあける時に使つて折つて了つたのは惜しいことをしたものです。

三十七年はこんな工合に暮れました。御正月の三日に私が臺所へ出て見ると、猫が子供の食べ殘こしの御雜煮の餅をたべて、しきりに前足でもがきながら踊をおどつて居ります。女中たちとそれを見て、あんまりいやしん坊をするからと笑つて居りますと、ちやんとそれを聞いてゐて、『猫』の中に書いて了ゐました。『猫』の中にはそんな工合に子供二人が、お嫁に行くなら招魂社へ行から、しかし九段は水道橋を渡つて行かなければならないから遠いわよなどゝ話してゐるのも書いてありますし、その時代の私共一家の生活の實際が隨分澤山ありますのです、中には全く空想で、小說的に都合のいゝやうに書いたところも多いやうですが、事件や人物は大概見當がつくのが多いやうで

す。

その頃よく宅にいらした方々は、寺田寅彦さん、野間眞綱さん、高濱虚子さん、橋口貢さん、それから野村傳四さんなどでした。『猫』の中に書かれてゐる生活資料の方は大體私が詳しい積りですが、文章のことは高濱さんなどの方が、ずつと詳しく御存知の筈です、第一『吾輩は猫である』などゝいふ題からしてが、書き出しの一句を取つて、高濱さんがこれがよからうといつておつけになつたのだとか伺つて居ります。

大體『猫』は最初からあんな長篇にする積りは自分にはなかつたのでせう。ホトトギスに發表して見ると、みんなが面白いといつてほめそやすし、自分でもあんなものならいくらでも書けるといふわけで、後が見たいといふ讀者の注文と、虚子さんあたりにすゝめられて、二年もつゞけてあんな風に書いたのでありませう。その頃のさういふ事は虚子さんが一番よく御存知の筈です。

『猫』で最初に頂いた原稿料は、しめて十二三圓位のものだつたと覺えて居ります。

其頃久保より枝さんがよくお見えになりました。まだ結婚されて間のない頃で、お年も二十二三位だつたでありませう。猶ふし御主人の後の猪之吉博士が[illegible]なので、[illegible]の大學博士の御結婚の[illegible]と[illegible]かに[illegible]して[illegible]られました。[illegible]の、[illegible]の[illegible]はよ[illegible]らしい才女ともいふべきハイカラな方でした。いつも宅にいらつしやる時には袴をはいて、よく自轉車にのつておいでになりました。度々いらつしやるうちには、自然忙しがつて居る時もあり、又例のとほり機嫌の惡い時もあつたりで、段々私とも近しくなられて、一緒に買ひ物に出たり、時には子供たちなんかをどつかへ連れて行つて頂いて、隨分御世話になつたものです。

或る時、訪ねておいでになりはなつたが、生憎夏目の機嫌が惡い。こそ〳〵私のところへいらして、自分が度々來るので不機嫌なのでせうかしらと、大變心配顔に仰言るので、私の方では久保さんの見た不機嫌位にはなれつこのことですから、又例のゝが出たのですよとすましてて居ります。久保さんの方ではさうでせうからと、平常をよく御存知ないので半信半疑でいらつしやいます。さうかと思へば機嫌のいゝ時などは、私の部屋に久保さんがいらつしやるのにわざ〳〵書齋から出て來て冗談口を叩いたりすることもあるのです。

「貴女は何故いつも袴ばかりはいてゐらつしやるのです。」

袴が氣になると見えて、こんな質問をして居ります。すると久保さんも心得たもので、

「着物が無いから始終誤魔化して居ります。」

といふお答なので、夏目も感心して、

「あゝ、さうですか。それぢや着物の代りですか。」

といつた調子です。

矢張り此の教師だつたと思つて居りますが、教科書の出版をしてゐる開成館から、英語の本を編纂したから見てなほしてくれないかと申して參りまして、それに筆を入れてやりました。お禮に四十圓かお金を貰ひましたので、それを私に下さいませんかといつて、私が横取りをして了ゐました。といふのは長女の筆子が七つになつたのに、これ迄苦しい一方で晴衣一枚作つてやらなかつたのが氣になつてゐたので、早速その金で紋付を染めてやらうと思つたのです。そこで日頃の願ひがかなつたので、喜び勇んですぐに三越へかけつけて、紋付を注文いたしました。

ところが或る日寺田さんがいらつしやいますと、いきなり、

「おれは此間四十圓開成館から英語の本を見てやつたお禮に貰つたが、貰ふが早いか取られてしまつたよ。」

といふ話に、寺田さんもびつくりして、

「何處でとられました。」

と泥棒かすりにでもあつたのかと尋ねられます。

「いや、家の奴にとられたんだ。」

でナーンの事だと笑ひ話になつたのですが、貰らつた錢はこんな風にして使つた後へ、本が出來て參りました。見るとそれには、たゞなほしてくれと言つて來たからなほしてやつたのに、れい〳〵しく夏目金之助著とか何とか名前が出てゐます。今も昔もかうした商人にぬかりはないもので、怒つて見るけれども、もうすでに出して了つたのだから仕方がありません。やう〳〵のことで謝罪に來て、詫證文を入れて、結局夏目に於いては默認したやうなことになつて了ゐました。たしか English Supplementary Reader とかいふ、中學上級生か卒業生程度の補習讀本で、英語の面白い物語を集めたものとか申します。それを勝手に編纂しておいて、間違ゐをなほしてくれろと持ち込んで、編著にして出したのです。その本は三四冊出た筈です。その詫證文は今でも家にある筈です。

この寺田さん、よく宅へ見へては、超然と申しますか、漂然と申しますか、そんな風な話をしてらつしやいます。例へば

「昨日は妻君を連れて上野へ行きました。」

さういふのは寺田さんです。すると夏目が、

「君はよく細君を連れて行くんだね。」

と出かけます。

「連れて行つては惡いんですか。」

超然と寺田さんが逆襲されると、夏目も仕方なしに、

「別に惡くもないさ。」

といつたわけて、話は自然別の方へそれて、

「俺は昨日文野間と二人で神田の方を歩るいて、飯時になつたから牛肉屋へ入ると、隣りの客が話しあつてるのが、おれの知つてる奴の話

だ。聞いてゐると如何にもウンデレでね。」

と夏目が話します。そこで寺田さんが、

「人間ウンデレに限りますよ。何でも細君のいふことをウン／＼と聞いてやつてデレ／＼してゐれば結構ぢやありませんか。ウンデレでなけりや夫婦喧嘩の絶え間がないわけでせう。」

で、夏目もそれはさうだなといつた工合にいや／＼贊成してゐるといつたものでした。

この三月頃から、文章會といふものが、毎月一回位づゝ宅で開かれました。いらつしやる方は、時に多少の異同はありましたが、大體高濱虛子、坂本四方太、寺田寅彥、皆川正禧、野間眞綱、野村傳四、中川芳太郞などゝいふ方々で、その日は何はなくとも朝から私も臺所に出て、いろ／＼晩飯の御馳走を作りました。文章會といふのは、大體ホトトギスの寫生文中心に、皆さんが文章をもちよつて讀みくらをして、互に批評し合うものでした。『猫』などもしば／＼この席上で讀まれて、しかも讀み手は夏目は下手だとあつて、虛子さんがお讀みになり、それを聞いてゐて自分のものなのに、夏目迄一緒になつて笑ひこけてゐる事などもありました。お持ちにならない方もあつたやうでしたが、皆さん可成り御熱心の樣子でありました。

此頃『猫』の中に寒月が椎茸をたべて前歯をかくことが書いてありましたが、丁度正月に寺田さんが何か召し食つて前歯を折つてゐられた上に、『猫』が出てから寒月は寺田さんだといふことが一般に言はれてゐたらしいので、寺田さんも苦にやまれたのか、この文章會の時に

「先生は人の前歯のかけたのを書いちやいけませんね。」

と抗議を申し込まれたものです。すると夏目は、

「何も君だとわかつてるわけぢやないからいゝぢやないか。」

と申すのですが、寺田さんは寺田さんで、

「だつて氣がとがめて仕方がないから、出來ることなら書かないで貰ひたいものですね。」

とひどく氣にしてらしたことがあります。

此頃よく阪本四方太さんや野間眞綱さんが、よそから貰つたとあつては、やれ蒲鉾だの蟹の足だのといつて持つて來て下さいます。それを見ながら夏目が寺田さんに申します。

「寺田はよく家へ來るには來るが、一向何も持つて來てくれないぢやないか。四方太は蟹を持つて來た、野間は蒲鉾をもつて來た。」

誰は何をくれたと冗談半分申しますと、寺田さんも敗けては居ず、

「先生は餘程貰うことが好きなやうだ。そんなら僕は現ナマでも持つて來ませうか。」

などゝ笑つてられたことがありましたが、『猫』の中で寒月さんが土佐へかへつて、土産に鰹節を三本土産に持つて來て懷から出すところがありますが、或はそんな話から思ひついて、私は忘れて居りますが、鰹節を下すつたことがあつたのかもわかりません。寺田さんの生國はたしか土佐の筈です。

『猫』に出て來る人物のモデルが誰だ彼だと詮議されて、多々羅三平だと言はれてゐる股野義郎さんが、いつだつたかあんな事を書かれちや困る、法學士にもなつて會社に勤めてゐるのに、あゝいふ風に取扱はれたんでは同僚にはひやかされるしとこぼすので、夏目の方では面白がつて、何も君と斷はりもしやしまいし、そんなに困るんなら新聞にれい〳〵しく出して取消してやらうかなどゝ揶揄つて閉口させてゐたことがありました。

あの中に出て來る重要な人物では、迷亭などゝいふ人物は誰をモデルにしたものか私には見當はつきませんが、あののべつにへらず口をたたいて、うまく人と調子を合はせて行くところなどは、前に私が初めて九州へ渡つた時に福岡に居た叔父そつくりです。この叔父とは私の叔父の中、夏目が一番親しくつきあつて、お前の叔父はオッチョコチョイだなど申し申ししたものですが、迷亭の話振りを讀むと、私はいつもこの叔父を思ひ出します。此叔父も可哀さうに、去年蒲田にもつてる工場の職工の爲めに、六郷川迄誘き出されて慘殺されました。慘殺する日、職工は工場で刀を研いでゐたさうですが、怨も何もないのにたゞ血を見たさの餘りやつた兇行らしく、職工もつかまつて一週間目位に獄中で自殺して了ゐました。

二十七　有難い泥棒

漸く少しづゝ原稿料が入つて參るやうになりましたので、今迄苦しい苦しいで隨分儉約に儉約を重ねて來て居りましたので何もありません。そこでそろ〳〵入り用のものを買ひ調へて、客に出す座蒲團をこしらへるやら、洋服をこしらへるやら致しました。實際小綺麗な普段着さへない始末に、原稿料を貰らつたのを幸ひ、縞の銘仙の普段着を自分で買つて來て、羽織と對の綿入れを作らせました。

丁度四月のまだうそ寒い頃のことでありました。私は明け方近くなつて、抱いてゐて添乳をしてゐた赤ちやんが目をさまして乳を呑むので、私も目がさめました。何となく樣子が變なのでぢろ〳〵四邊を見廻はしますと、たしかに寢る時きちんとしておいた子供部屋の簞笥の抽斗があいて、中から子供の着物の赤いのがふしだらにこぼれて居ります。おやと思つて見ると、座敷との間が四五尺開いてゐます。これも寢る時たしかに閉めておいた筈です。益々變です。そこで隣に眠てゐる夏目をゆり起しまして、貴方泥棒が入つたやうよと申しましたので、夏目もびつくりして目をさまします。起き上がつてさて夜着の尻にかけておいた例の一張羅の銘仙を引つかけやうとすると、それがないではありませんか。おやといつて驚いてなほも見れば、シャツもない、ズボン下もない、帶もない。夏目のものは一切合財ない始末です。それから私の普段着もきれいに姿を見せません。簞笥をしらべれば子供の着物があら方ないといふ騷動です。

家中を見て歩くと、玄關があいてゐる、臺所口があいてゐる、どこから入つてどこから逃げたものか知りませんが、何しろ綺麗にやら

れました。廊下の障子に舌でなめてあけたものと見えて、大きな穴があいて居りましたが、まだ逃げて間もなかつたものと見えて、そこがぬれて居りました。

何しろ全家族の普段着を根こそぎやられたのだから困つて了ゐました。少し寒かつたが夏目には袷を出して着せ、私は仕方なしにたつた一枚しかない外出着をきるわけですが、それとて一張羅の縮緬の紋付をきてゐるわけにも行かず、あとは大概家計不如意で、時節時節で質屋の御藏を拜借して出し入れしてゐる始末なので、丁度手頃なのがありません。が派手な長襦袢一枚で居るわけには行かず、どうやら何かを見計らつて着ましたものゝ、おひきずりで居ることもならず、その上に女中から借りた木綿羽織をつつかけました。

夜が明けてから出て見ると、郁文館中學の隣の畑の中に、ズボン下の兩方の足にいやといふ程子供の着物をつめて荷ごしらへをしたのが、丁度蛙をのんだ蛇のやうな恰好をして捨てゝありました。それで子供の分は助かりましたが、私のものなんかはみじめにも滑稽なものであつたでありませう。

交番に屆けますと、盗難にあつた品書きを書いて出せとあつて、安物はかりですけれど品數が多いので大變です。それに一々金高を書けといふのだから厄介です。

一週間ばかり致しますと、警察の方が此間の泥棒がつかまつたから、明日の何時迄に日本堤警察署へ出頭しろといふわけです。いかめしく命令するやうにさう言ふ傍には、若いいやにやさ男が、神妙らしく懷手をして立つてゐます。夏目も私も玄關に出て行つて、多分そのやさ男を刑事だらうと考へたので、丁寧にお時宜を致しました。

それから巡査が屆けの品書きを出して、盗まれた品はかう〳〵だらうといふやうなことをいふと、その若い男が品書きをのぞき込みます。すると巡査が其樣はだまつてゐろと恐ろしい見幕で叱りつけます。變だと思ひましたら、それが當の泥棒君だつたには呆れて了ゐました。唐棧の着物か何かで、色の生白い、どう見ても泥棒らしくない御人格なので、つひお見それしたわけです。よくよく考へて見れば懷手をしてゐるのも道理で、縛られてゐる手が出やう筈はないのですから、私達も泥棒に入られるだけあつて、迂闊千萬な話です。

翌朝早く何時迄出頭といふので、夏目は日本堤の警察署へ行きました。贓品は一旦質屋に入れてあつたのを、うけ出して、それを古着屋に賣つたところから足がついたのださうで、歸へつて來て驚いたとには、何もかも一週間ばかりのうちにきれいになつてゐるとでした。夏目の一張羅の綿入れが、さう手をお通しなさいといはんばかりにちやんと對の袷に縫ひなほされて居ります。私の普段着なんかはこれ又御丁寧に洗ひ張りがしてあつて、すぐに縫へるやうになつてゐるのですから、頗る調法です。殊に有難かつたのは私の[illegible]の古コオトがなほつてゐるとでした。[illegible]と申しますのは、[illegible]かけた仕[illegible]

折りかへして亂暴に縫ひつけて、ともかくおかざりの下がるの丈をふせいでおいたのですが、それを雨の日着て白木屋へ買ひ物に行つたものです。すると入口のところで番頭がコオトをお預り致しませうと申します。私はぬがされてはとんだ恥晒らしなので、いゝえ、よござんすよと斷はります。先方ではそれでもそんならそのまゝどうぞとは言つてくれません。言葉は丁寧ですが、つまりどうしても脱いでくれろといふわけです。ふと氣がついたのは、コオトなどを着てゐると萬引に都合がいゝので、一切入口でお預りするといふことでした。今更仕方がありません。萬引女としてつけられるよりはましですから脱いであづけはしたものゝ、それを丁寧にたゝんでくれたりするので、愈々もつてそのえらい代物に赤面したことがあります。

その曰く附きのコオトが、これ又至極手際よく裾なほしが出來て、すぐ樣どこへでも着て出られるやうになつてゐるのだから有難がらざるを得ません。こんな調法な泥棒なら申分がないので、どうか一年に一ぺん位づゝ入つてくれると有難いなどゝ語り合つたものです。

ともかく着物の類は殆んどみんな出て參りました。

小說を書き始める迄は、長年夏目の癖として、夜寢床の中に入る時に、うんとこさ讀みもしない本を枕元へ持ち込むのが毎夜のことでした。分厚な洋書を一冊切りならまだしも、二冊三冊と持ち込むとは珍らしいことではなく、時にはその上にスタンダードやウエブスターやら大字引迄持つて來るのです。ぢや讀むのかと思へば別段讀む樣子もなく、感心に今夜はいつまでも本を開いてゐるなと思つて薄目をあけて見てますと、いつまでたつても頁をめくる音がしません。何の事、一頁も讀まないうちにもう睡つてゐるのです。讀みもしない本を御苦勞に持ち込まなくてもと申すのですが、手持無沙汰なのかともかく何かしらん持つて來ては枕元につみ重ねておくのです。

其頃私共はまだ石油ランプを使つて居りましたので、忘れてそのまま寢て了ふと困るし、又蚊帳を吊つてる時などは危くて仕方がないのです。ところが小說を書き始めてからといふものは、疲れるのですか、何かひとりで考へてる方が面白いのか、ふつつり讀みもしない本を寢床に持ち込む癖がなくなりました。

一體平常はよくねむる方で、午睡などは元からよくして居りましたが、夜も物を書く人としては早い方でしたでせうし、朝も學校があつたせいもあるでせうが、寢坊な私なんかよりはいつも早く目をさまして居りました。とにかくさういふ日常生活に對しては、これといふ無理もなくて規則立つて居たかと思ひます。

二十八　『猫』の出版

少額ではあるがちよい〳〵原稿料が入ります。それだけでも其頃の私たちには大變有難かつたのですが、丁度夏になつて帽子が欲しいといつてるところへ、たしか『猫』の稿料が十五圓か入りました。早速

帽子屋へ行つて十五圓のパナマ帽を買つて來て大分得意でかぶつて居りますと、其頃支那へ招聘されて北京の學校に居られた菅虎雄さんが夏休みで歸へつて來られて訪ねて下さいました。見ると自分の御自慢のパナマより大分上等なのをかぶつて居られる。それを見て教師の傍ら一枚五十錢の『猫』を書いてゐたんぢや仕方がないなんかと憤慨して居たことがありました。

此年の秋、初めて話があつて、『吾輩は猫である』の上編が出版されました。出版者は大倉書店の番頭をしてゐた服部といふ人が出したいとあつて、大倉の方からも是非賴むといふことで、服部の手で出版されました。たしか翌年になつて、その服部といふ人の店が立ち行かなくなつて、大倉の手に移るやうになつたかと覺えて居ります。外の本の賣れ行きはよくは知りませんが、ともかく當時毎月千部位づゝ極まつて檢印を捺して居りました。今日でも澤山の夏目の著作のうちでも一番よく出るのが『猫』で、世間でも漱石と言へばすぐ猫を思ふといつた工合に廣く讀まれて居るやうです。

●此頃の印税といふのがたしか一割五分だつたやうですが、印税を持つて來ると私が默つて取つて置きます。元々ずぼらといふのではありませんが、金には執着の少かつた人のことですから、此程ではいくら位か入つて來るのだか知りません。それでもたしかに相當『猫』が賣れて金が入つて來てゐるのに、あれは一體どうしてゐるのだらう位に思つたことでせう。或日

「お前あの印税が入つたらうが、どうする積りなんだ。又困ることがあるだらうから、入つた時にちつたあ貯金でもしておくといゝね。」

といふ話です。そこで私も、

「少し質屋のお藏に入つてゐるから、ともかくあれで出すことにしました。」

と、初めてこれ迄の苦しかつた生活のやりくりをしてゐたことを大體話しました。金のない無いといふことは自分でもよく知つて居り、子供は增えるしかゝりはかゝるし、もつとどうにかしたければならないなどゝ口には言つても、果してどれ程になつてゐるのか、根が御大名ですから、買ふ本は買ひ、たべるものだつて私たちは何を食べて居やうと、ともかく頭を使ふ人にはと、それ程まづいものを食べさしてゐるわけではないので、そんなに家計が逼迫してゐたのだとは其時迄氣付かずに居たのです。今の話を聞いて、

「さうかい。」

とひどくびつくりして、二の句がつげなかつたやうでした。が、いゝ案配に、按摩の言つた福猫のせいか、それからといふものは、以前のやうな家計の不如意にはまづ〳〵會はなかつたといつていゝでありませう。

此頃からぼつ〳〵の雜誌や出版者と關係が出來ました。雜誌ではホトトギスはいふ迄もなく、新小説だの中央公論だのを始め、いろ〳〵な雜誌の

方が見えました。大學では服部書店を始め春陽堂だの金尾文淵堂だの其他澤山あつたやうですが、段々訪問者が多くなつて弱つて居たことも段々でした。雜誌にのせた原稿料などの記憶は殆んど確かなものがありませんが『カーライル博物館』が全體で八圓だつたのを覺えて居ります。それからホトトギスが始めは多くて一枚五十錢位だつたのが、後では一圓に上がりました。新小說がやはり一圓位、中央公論が一圓二三十錢見當だつたかと覺えて居ります。

こんな雜誌の編輯者や出版者の方々の外に、此頃になつて前の文章會の外に新らしくちよい〳〵おいでになつた方に、厨川白村さんだとか、安藤さんだとか、瀧田樗陰さんだとか、森田草平さんだとかいふ人達がありました。其頃よく手紙をよこす人に森田草平さん鈴木三重吉さんなどがありまして、又大概長い手紙でした。殊に鈴木さんは、其頃神經衰弱だとかで、一年大學を休んで瀬戸内海の方に居られて、そこから手紙をよこされるのですが、こんな長い手紙が書けるやうなら、學校なんぞ休む必要はないから出て來玉へなどゝ、夏目が言つてやつたことがあつたやうです。

此の鈴木さんについては、いつも〳〵長い手紙でお馴染みになつてゐたのですが、まだお會ひしたことがない。ところが遙々京都から寫眞を贈つて來られたものです。その寫眞が丁度大理石の胸像のやうな工合に撮つたもので、頗るつきのしやれたものです。そこで寫眞でさへこれ位だから本物はどんなに美しい方かと思つて、御友達の中川芳太郎さんに、

『鈴木三重吉さんていゝ男なのですか。』

と伺ひますと、

「えゝ、いゝ男ですよ。」

と、聞くだけ野暮だといつたお返事です。ところがしばらく後のこと、或る日玄關に訪ねて來た人があります。丁度女中が居ないかで私が取次に出ますと、僕鈴木どすと輪廓だけは寫眞で見覺えのある顏が申します。おや〳〵と思つて、色が大理石とは大分違ふのにとあての外れたことがありました。

二十九　生と死

文章會はいつおやめになつたか、其年のうちに立ち消えになつたかと思つて居りますが、その重な原因の一つは、私が身重になつて、折角集まられても、前のやうに御馳走も出來なくなつたので、お斷りしたのがもとのやうでした。そこで外でやらうかなどゝいふ議もあつたやうですが、おやりになつたかどうか私にはわかりません。其後訪問客もめつきりふえたので木曜日を面會日にきめまして、これは死ぬ迄續きました。其頃集まられた方々は、文章會の方々の外に、鈴木、森田、小宮、松根などゝいふ方、それから野上豐一郎さんや、橋口五葉さんなどが見えたやうです。

十二月が臨月ですが、私はいつもお産が重い方なので、十四日の夜の三時頃に、しきりに陣痛が起こつて、いたみ出すのですが、今から始まつて、いつもだと明日の正午頃でなければ生まれまいと高をくゝつて居ますので、まあ〳〵此時刻に人騒がせをするでもなからうと我慢してますのですが、四時頃になつてはどうにも我慢が出來ません。そこで夏目にも起きて貰ひ、女中をお醫者さんのところへ走らせて、いつもかゝりつけの牛込の産婆へ電話をかけさせました。が段々痛みは激しくなる一方で、これではならないといふので、誰でも構はん、附近の産婆を起こして連れて來てくれといふわけで、又女中が走り出します。五時にもなるとどうやら生まれさうな氣勢ですから、さあ困りました。もう貴夫産まれさうですといふわけで、夏目の手につかまつてうん〳〵いつてるうちに、とう〳〵産まれつちまひました。さあ、大變だと狼狽するのですが、私は當の産婦で動きも出來ず、夏目も取り上げ婆さんは始めてのことだから、どうしたらいゝのかさつぱりわからない。ともかく惡い水が顏にかゝるといけないといふを私は聞かされてゐたことがあつたので、ともかく脱脂綿で赤ん坊の顏をおさへておいて下さいといふわけ。よし來たとばかりに一封の脱脂綿で夏目が上からおさへてゐるのですが、それが海鼠のやうに一向つかまへどころがなく、ぷり〳〵動くやうな動かないやうな、頗る要領を得ない騒ぎ方で氣味の惡いたらない。そこへ牛込の産婆が飛び込んで來て、[illegible]一緒に[illegible]ならないといふので、[illegible]れかせるやら、そら産湯をわかせといふわけで、えらい騒ぎで、やつとのことで大役を明け渡したのですが、これには夏目も度膽をぬかれたやうでした。

これが四女の愛子で、女ばかりこれで四人です。此の子が六つ七さになつた頃、つく〴〵顏を眺めては、どう見ても吾子ながら不器量だなどゝ申しまして、

「愛子さんはお父さんの子ぢやない。お父さんが辨天橋の下で拾つて來たのだ。」

などゝ揶揄ひますと、愛子も負けては居ず、

「あらいやだ。わたしが生まれた時に、自分ぢや脱脂綿でわたしをおさへてゐた癖に」

とあべこべに喰つてかゝります。

「こいつつまらないことをいつの間に聞いてゐるんだい。」

などゝ笑つてゐたことがよくありました。

三十九年は前年に敗けない程澤山書いたやうです。前年に書いた短篇が此年の五月頃漾虚集といふ本になつて出ました。自分の住居を[illegible]と言つて、さういふ[illegible]をほらしたりしてゐましたから、そんなところから出たのかも知れません。[illegible]は續いてホトトギスにのり、[illegible]になつてその中篇が[illegible]されました時分[illegible]ホトトギスに[illegible]

[illegible]

に出ました。十月號の中央公論に『二百十日』が出て、その二篇を一册に纏めて十二月『鶉籠』といふ本になつて、春陽堂から出しました。この三十八九年の兩年が、夏目にとつて一番創作熱の旺な年だつたと思ひます。

この年の八月の末に、三女の榮子がお腹を惡くしまして、始めは大したことでもないと思つてゐるうち、どうも樣子と言ひ便の色と言ひ變なので、更に診て貰ふと、赤痢の疑ひがあるといふことになつて、すぐ翌朝早く大學病院の隔離室に移されました。私がついて行つてやりたいのですが、何しろ乳呑み兒のあることだから女中をつけてやつて、時々行つて見ることにして居りました。あとは疊を上げるやら大消毒で大變な騷動でした。

上の二人は幼稚園に行くので手もかゝりませんが、厄介なのは赤ちやんです。そろ／＼はい／＼が出來るので、私が病院へ行つてる留守の間には、女中が女中部屋につれて行つてねかせておきながら仕事をしてゐるのですが、するとくるりと起き上がつて、いつの間にやら台所へはひ出して行つて、猫の御飯を頂くのだからやり切れません。さうかと思へば緣側へはひ出して行つて落つこちさうにのり出してゐるのをやつととめたとやら、中々手がかゝります。

さうしてゐる間に幸と入院してゐる子供も次第によくなりましてこれで安心といつてるところへ、病院へ急な使が里から迎へに參りました。父が危いといふのです。それからすぐに參りまして、一週間ばかりとまり切りで看護も致しましたが、とう／＼九月十六日に五十六才かで亡くなりました。

前にも申しましたとほり晩年非常に不遇でありまして、貧乏な上にも貧乏して居りましたので、さて亡くなつたが葬式を出すお金もないといふ始末。それでもいゝ按配に、其頃安田の保善社に出てゐたりしたので、其方からもいくらかのお金を貰ひ、それから昔親しかつたお友達からや前につとめてゐたところから何かと心配をうけて、どうやらそれでも葬式を出すことが出來ました。私たち姉妹でも少しづゝ分擔するといふわけでした。

ところが前に、親類中におこつたことには一切不義理をするといふ夏目と私との間に固い約束が出來てゐるので、金も出しては呉れましたし、新聞の死亡廣告にも名前を列ねましたが、どうしても本人自身は參りません。私もなんでもかんでも來て呉れろとは申しません。結局顏出しをしませんでしたが、其時遺族にあてて長文の手紙を書きました。それが大變いい手紙だつたと弟なども申して居りますが、大事に保存しておいたのを、其後執達吏にやられたりした騷ぎのうちに紛失したのでせう。今殘つて居ないのは殘念です。

そこで葬式には行かず、しかも死亡廣告には名前が出てゐる。葬式に行かないからといつて、それでは學校へのこの／＼講義に行くのも變だとあつて、其時は學校を休んで、家に蟄居して居りました。こんな

ところはいかにもあの人らしい感じが致します。

この年の春頃であつたと思ひますが、『猫』で夏目の文名が急にあがりましたので、昔戀しくないたものと見えまして、前に子供の頃養子にやられて、其後手の切れた筈の鹽原の老人が、人を介して元どほり鹽原の養子にかへつてくれないかと申して參りました。今頃になつててんでお話にも何にもならない相談なので、夏目も餘り相手にならず、ともかく昔の養父子の關係もあることですから、今手が切れたといつても、御希望とならばおつきあひは致しませう。又家へ出入りして貰らつては困るとか何とかいふわけではないから、おいでになりたかつたらおいでになつても差支はない。しかし自分は今非常に忙しい體だから、いらつしやる度におあいそをしてるわけには行かないかも知れない。それさへおわかりになつて居ればといふ話で、其後ずつとたつてから、仲へ入つたその人が、鹽原の老人を連れて來ていろ〳〵昔話なんぞをしてかへつたことがありました。

切支丹懺悔録（二）

吉野作造

三番のマンダミエンドに就て（一）

今伴天連様御逼塞の盛りでござれば、ドミンゴ（Domingo、主日即ち日曜日）祝日に御彌撒を拝む丁日がござらいで、是非に及ばぬ事なれども、二三度は叶ひ乍ら唯懈怠で拝みまらせなんでござつた。また一度は、伴天連のござる所を知つて、途で何んでもない事に關係つて、着いた時はモウ（彌撒を）仕始めさせられた所で、四分一ほど缺かせまらした。

其上御彌撒を拝む時分に大方不信心で、要らぬ事に念を散らいて拝みまらしたが、故意とさう致しまらせぬ。たゞ平生色々の事に耽つて居る所で、御彌撒の中にも念が彼方散り此方散りすれば、迷惑致しまらする。其中二三度ばかり辨へながら、御彌撒を拝みに參つて始めから末まで其の所に罷り居つたれども、それに念をかけまらせなんだによつて、拝まぬと同じ事でござると思ひまらする。

また忙がしい事があつて、ドミンゴ祝日に、吾れも働き、内の者共三人にも仕事をさせまらした。一度は一時の間、三度は日一日の事でござつた。さりながら、一度の仕事をせずんば大事なる損に遭はうずるに極まつておぢやつたによつて、差し延ぶる事も得いで仕まつゝたさかいに、あまり氣にかゝりまらせぬ。

註。（一）三番のマンダミエントは、「ドミニカ（ドミンゴ）祝日を勤め守るべし。」

四番の御掟に就て（一）

私が（は）女房も子供も親も持ちまらした者でおぢやる。さらでござれば、姑とおよそ仲違うてゐまらする。其の仔細は、其れ（姑）が意地が悪うて、（私が）子供か女房にか或は意見或は折檻を加ゆる

時、(姑に)あれへ堪へられいで泣き叫び狂はれまらするに依つてでござる。また女房、夫婦の契に貶忘(二)せらるゝ時も、定めてぬしが母(姑を指す)の言附であらうと推量して、それでも(姑を)一向叱りまらする。また身が二十の息子をば善惡(是非とも)ぬし(姑)の宿に泊めうとせらるゝに就て、吾が言ひつくる仕事を暇が無うてせぬ時は、さるとては聞えぬ事ぢやと申して、父に從はぬ不躾な事も叱り、また餘り存らゆるあの年寄が早う死ねかし！と再々心底より存じまらした。五六度も其れと諍うて、直に惡口を吐き、陰でも二三度譏り、其のこと散々に沙汰取りなしまらして、遂にそれから二月三月の間に其れと言葉も交はしまらせなんでござつた。また姪者ものと七八度無理に腹を立てゝ、一二度は面を擲ち、ま一度は棒で叩き、二度も蹴倒し、足で押し踏んで、懐姙の者なれば子をおろさせまらした。其上また老體の親衆に對して、無禮に、其れの氣に懸つた返事を戻しまらした。また、活きてござること身に難しう存じて、ついでにも其の財寶を讓るために死なうと望みまらしたが、一度ばかり眞實からでござつたに、殘りは口ばかりでござつた。時々も若輩者と寄り合うて、宿老、貧人、不足なる者を罵詈誹謗し、其れに敬ひ加へらずる慈悲の代りに、たゞ譏り嘲りばかり懸けまらした。

また身が餘所の者と大事ない事に就て二三度諍うて、少しの間に其れと叱り、何か氣の毒な怪我災難に遭はれかし！と望みまらしたが二度でござつた。一度は心根から何なりともこゝろ(三)ざしがあつて、のみ深うござらなんだ。たゞざんざと過りまらした。

また四度、或る伴天連樣の行儀を身が附合の者共譏らるゝを聞いて、それを咎めぬのみならず、結句同心して、吾れも其の御面目に當る事をば相譏りまらした。惡所その寄合の人數は皆それをよう知られたれども、デウスの御名代(伴天連を指す)の惡行も取扱うて雜談の題目と爲いたが、惡いと存じながら致いた事は身が誤ちや。そのほか、隙間も無うて(不仲でも無いにの意)身が夫婦の上に悋氣な心を起いて、相手まで誰れとも邪推して、二人ながら憎い奴と思ひ、ならば毒でなりともうち殺さうと存じまらした事が、二度ござつた。

また女房子供の養ひに就て才覺心懸もしか〳〵ござらいで、其の進退行儀、切利支丹の善い行儀なんどまで構はいでは(ならぬを添へて判ずべし)の事なれども、今まで隨分致しまらせいで、身が科でござる。

註。(一)四番の御掟は「親どもに孝行すべし。」但し此の誡は、單に親ばかりでなく、一切の長上縁者、聖職者、上役人などに對する不倫非禮までも誡む。

(二)ヘンキ(henqi)は羅甸文には renuit とあり、即ち「拒んだ」の意。パゼスの辭書にも「嫌ひ斥く」などの意に解してあり、如何なる語字を充つべきか判然せねど、意味をとつて譯りたるもの

しておく。

（三）ザンザト（Zunzuto）は羅甸 leviter, 即ち lightly, easily の意。

五番のマンダミエントに就て(一)

それがし、邪の道を見識らぬ幼い者に手づからの淫樂を語り、仕樣までも教へ勸めて、その惡を犯させまらした。

また嫌がる者に惡い意見を加へて、モルタル科をせらるゝ基きになりまらしてござる。

そのほかまた、身が知る人、獨りに（で）惡い事を勸めに行く事成り叶はいで、吾れ存じながら件も致し、其れに合力も添へまらした。

これは五度でござつた。

また私しが（は）、女房を持つた息子がある。その女（誰人か此處には不明）身が嫁と再々口論して（私が其女に）遺恨を含み、死ねかし、打死に遭はれがな！　見にくいと存じて、何んとも吾れが眼に懸けられぬやうに致さうずるにはと思ひまらした事は、十度ほどでござつた

其上器量な（强いの意）男と喧嘩して、彼方から身を一[32]刺し殺さうとせられたれども、吾れは兵法の上手でござれば、とかく相手に　夥しい二つ三つの傷をつけまらした。またその傷負者の兄弟と親類、その返報として有に無に吾れを鐵炮でなりとも何んでなりとも打ち殺さうと云はれたと聞き及うだ時は、悒氣な心を以て、あの彼奴が、皆討ち果さう、と口でも吐き、心でも存じまらしてござる間は、三月ほどでござつた。さりながら、彼れは快氣せられて後仲直り致しまらして、今近頃知音でござる。其の藥、醫者なんどの雜作は大いことと承つたれども、相手から其の喧嘩をしかけられた所で、身は心安う、その失費に何もやりまらせいでござる。（四）

また或人わたくしが事惡う沙汰せられたと聞き得たによつて、行き會うても禮をし（せずの誤か）二月の間に一語も申し入れまらせなんでござる上は、此中あの人赦しを請ひに寄られたれども、遺恨がまだ過ぎまらせいで、つひに赦さなんでござる。

其上、させらぬ事に就て人とちくちくとした喧嘩口論咀言、腹を立てて惡口雜言を云ひつけた事等は、繁うござつた。後は仲直りをし、赦しも互ひに乞ひまらする。

答。また吾が夫は意地の惡い者なれば、自らを（私を）打つつ叩いつせらるゝによつて、其の子を儲けぬために、身持になつてから腹を捩つて其子をおろしまらした。

答。其ほか、吾等貧人至極でござれば、子六人を持ちまらした（が）それを育つる樣もござらいで、懐胎になるまいために絡繰も致しまらする。一度も、懐姙になつてから、藥を用ゐて六月の子をおろ

し、一度また產の時分に子を踏み殺いて、腹中から死んで生れたと申しまらしてござる。(五一)——

註。(一)五番のマンダミエントは「人を殺すべからず。」同時に此處には自殺をも誡め、又他人の殺意を唆かす事も誡む。
(二)知音は友人知巳の意。當時慣用。
(三)シツイ(Xitçui)は羅甸文に sumptus、即ち expense. またパゼスの辭書に「ウシナヒツイヤス」と解あり。依つて失費を宛てる。
(四)此の一段、告白者が武士らしく見ゆるに注意すべし。
(五)最後の二段は特に女の告白を舉げたること、また注意すべし。

六番の御掟に就て

譯字者曰。此の條は風俗を害する恐れあるを以て全部削除した。削除部分は原本三十六頁より四十四頁まで、其內奇數頁は羅甸對譯文なる故、即ち五頁分である。

六番の御掟とは「邪婬を犯すべからず」で、夫婦以外の交り、自瀆、慾念などを悉く禁じてある。此の段は、その邪婬戒に觸れた男女の告白を有りのまゝに飜したものである。告白者の眞劍率直な態度は實に驚くべきもので、苟も罪と云ふ罪は隱さず餘らず悉く其の前にさらけ出したと云ふ點、自瀆、殺意、殺害、姦淫、は[illegible]に[illegible]に所謂「デウスの御名代」として歸依心服した伴天連の前でも、恥を忍んでよくこれだけの事が告白出來たと思はれる程で、到底現代の人間には想像も出來かねる。また一面、當時切利支丹教會が如何に邪淫を特に嚴戒したかを窺ひ知る事も出來る。文獻として學的には此細なものだが、當時の風俗習慣、信仰狀態などを、裏面から端的に窺知し得る無二の珍資料である。

七番のマンダミエント(一)に就て

私が(は)盗みは仕らねども、地上に二十匁の金袋を見付けて取つておきまらした。とかく主があるまいと存じて、吾れは貧人で、その金をば身に取つて使はうと存じてゐた所は(が)其後眞の主誰れと能う知りながら、未だ其金を還りまらせぬ。とかく、有らば還らうとの定め(決心の意)は度々でござつた。還るまいとも、一度も二度も存じまらした。さりながら最早渡しまらせうず。また田畑を作るために賃取を雇うたれば(るに)、その二日の賃を留めてまだ濟しまらせいでござつて、其れは貧人でござれば、逼迫乞はれたれども應はいで、一月の間に濟さいで居つても、濟しまらせうず。

うた人數か多うて、賣る人それに取り亂れて其の價を忘れられた所で、身は何も云はずに其儘金を濟さいで立ち去りまらした。それは六匁ばかりでござつた。さりながら、見知らぬ客ぢや所で、其れに得戻さいで、貧人になりともか、御彌撒を行はせてなりともか、施いて、とかく御意次第に致しまらせうず。

また或時、人の內の者が物を賣りに身が所へ來たれば、盜うだ物と存じながら、其の價は淺う云はれたによつて卽ち買ひまらしてござつた。二匁ばかりの物でござつた。わたくし商人〔又は〕商人〔卽ち〕商ひする者〔卽ち〕賣買する者でござる。さうござれば、儲けは（を）重ぬるために絶間なう僞を云ひ、賣物の瑕瑾を申し現はさいで結局それを褒め上げて、樣々に人を欺つた事は、度々でござつた。少しづゝの事であつたれども、積つては二百匁ばかりでござらう。とかく取つた物は多うござりしかも、人數——[46]も見知らぬ所で貧人に施いてよからうと思ひまらする。

また吾れが（は）將棊の甚い上手でおぢやるに、人がそれを參りに來て、とかく吾れは其れを騙すために初心の者ぢやと云ひ、初めの二手にも故意と負けてあつたれば、それで彼人身が金の取りたさに引かれて、つひに負けられて（身が）其の金を屹度取り盡しまらした。都合は五十とまた三十三匁、八十三匁でござつた。さりながら、それがし勝つた事は騙いてござり、其上彼者貧人で眷屬を養ふ樣が無いを知つたによつて、身が知音を賴うで其金をば隱れて戻しまらしてござる。

そのほか、身が借錢は甚い事でござれば、貸いた人も毎日是非とも濟せと請はるれども、一度に皆を濟すことも得ず、叶うた分も濟しまらせなんでござる。さり乍ら、今コンヒサンの覺悟のために、其の借の金を皆調へてござるによつて、今日中に濟しまらせうず。さてまた吾等、渡海せらるゝ衆に、其の商ひの爲と萬事にも金を貸しまらする。然れば損をせぬために、先づ其の衆より其の貸金の質を取り預けておいて、其上利をも取りまらする。例へば百匁を貸す時は、歸朝〔三〕して百に十か二十五か三十か取りまらする。それもまた、金にか、商事にかけてか、とかく身が次第に取ろとの互ひの約束ぢや。五穀を蒔く時分にも、或は金或は其の蒔種を貸すは、とかく右申した如く、刈る時分に二三十ほど利倍に取る（が）流行る筈ぢやに、吾れもこの六年の間さう取りまらした。尤もコンシエンシヤ（Conciencia, 良心）に懸つたれども、流行る所で人並に致しまらした。

わたくし或る大名の代官として其の御知行を裁判致しまらする。さうござれば、其の役に就ての歎きは多し、德儀（利益の意）は拙うござるによつて、吾が眷屬を育つるために、主の許無う過分に取りまらした。幾度かは覺えまらせぬ、大略七八度でござる。

また內の者共の賃が時々餘り拙——[47]いと存じて、其れに（內の者共に）、主の知らぬ隱して（主の）物を少しづゝ取らせまらする。其上また二三度身が緩怠油斷で大事な怪我あつて、主はそれで深い損を召されて

ござる。
また時によつては、叶はぬ百姓どもにも、それぐ〳〵に當る年貢を、餘り責めつけて濟させまらする。(四)

註。(一)七番のマンダミエントは「偸盗すべからず。」もとより盗みばかりでなく、一切の不正利得を禁ずる。
(二)ワキモノ(Vaqi mono)はアキモノの訛か誤ならむ。意味は商物に相違なし。
(三)キチヨー(qichô)は羅甸文には reditum(即ち return)とあり、パゼスの辭書には先づ「祖國へ歸る事」と解あり、更に註して、支那や「呂宋に行つた者が日本に歸る事」と説明あれば、歸朝なる事疑ひなし。當時既に此の文字を通俗に用ゐたるものの如し。
(四)この最後の告白者は「大名の代官」とあり、身分ある吉利支丹なる事、注意に價す。

八番の御掟に就て(一)

先づ私が(は)敵の面目を失はするの心當(目的の意)を以て、身が邪推をば在様にして人に語つて觸らしまらした。其の敵は生得智慧の深い人でおぢやるによつて、隠えた科は多分其事に受けられいで、卽ち其の隠えた科は他人と[illegible]られまらした。
また氣に合はぬ者の惡い事を聞き及ぶ時は、必ず其分ぢやと存じ、口でも申しまらする。
其他秘密に受けた遺物の、外聞に當る深い瑕瑾をば、二度人に知らせまらした。一度は惡い心當で、ま一度は身が知音と緣邊の約束を止むる爲でござつた。
また、させらぬ地盤に踏みかゝつて、大事なる人の事に就て邪推の心が起つて、定めて其分であらうとも存じ、人にも申し入れまらして、其人も吾れと同心せられてござつた。
其他わたくし意地と生れのすき(いい、い)(生れ付きの意)(二)の惡い者なれば、蔭で人の事をも譏り、譏るを聞く時もそれを咎めずに、結句言葉を添へて相譏りまらした。また知音の仲を違はするために片一方の事を惡う云ひなしまらした。
また身が或る知る人と妻絶仕らうと存じて、其の事を議つて、身を隔かれた人から其の耳に寄り入つたれば、其儘私しと仲違うて、今も其分にゐまらする。
またたゞの物語雜談のうちに、役に立たぬ、人の仇にもならぬ虚言を申した事は、餘り繁うて數限りござるまい。
知りマンダミエントに就て、輕い罪は[illegible]聽えまら

せぬ。たゞ他人の夫婦[五]財寶を望みまらすれども、其れを盗まらうと（は）思ひもよらぬことでござる。たゞ吾れもあの樣なものを持つたらうには！　とばかり存じまらした所で、さのみ深い科であるまいと思ひまらする。さり乍ら、天然その望みが起る時、貪慾瞋恚嫉みなんどの科になる程の念が（を）、身は見分けずして取り混へた事もあらう程に、デウスの御前に在る如くに現しまらする。

答。七つのモルタル科[六]の上の誤を申し現しまらするに、先づ一番に對して、わたくし、人より、氣が強く、力の較べも無い者と思はるゝ爲に、その賞まれたさで二度公界[七]に作手柄を語りまらした。一度のは作事ばかり、少しの地盤も無いの嘘であつたに、一度のは例へば四分一ほど眞事でござつたれども、殘る所は、生得成りそもない事なれば樣々の念企みを添へつけて、身方から、聞かるゝ衆（か）隨分眞事に受けらるゝやうに才覺致しまらした。二度ながらの題目は深い科でござつた。

ま一度は、叶うた男と見知らるゝために、念を懸けた女ごとを犯いたと、また一夜に××××××（十字削除）と身が强さを賞め揚げて、四人の前で語りまらした。

また何につけても私は第一、身に較べて見れば皆の衆は何んでも無い、役に立たぬと、心底にも思ひ、口でも折々申しまらする。身に有る善い事も、名聞の心で成程（出來るだけの意）賞め揚げて、人より有樣の上に（實際より以上にの意）なほ思るゝやうに種々の武略（駈引の意）を致しまらした。また勝れた善人と思はるゝ爲に、人の眼[52]にかゝるやうに種々の善行を勤めまらする。

註。

（一）八番の御掟は「人に讒言を掛けるべからず。」

（二）イチモツ(ichi mot)は羅甸文 rem magni momenti(a thing of great moment)で、パゼスにも「スグレタモノ」とあり、よつて逸物を宛つ。

（三）イチトウマレノスキノワルイは羅甸文 ego sim malignantis naturae et inclinationis.(I am of malignant nature and inclination.)

（四）末のマンダミエントは、第九誡「他人の妻を戀すべからず」と第十誡「他人の財を妄に望むべからず」とを云ひしものの如く、但し第九誡は第六誡邪淫誡に包含され得るを以て、こゝでは特に第十誡を主としたやうに見える。併し其の第十誡も第七誡「偸盗すべからず」に入り得るから、「申し現いたよりほかは最早覺えまらせぬ」と斷つてゐる。

（五）「他人の夫婦」を望むとは奇なる云ひ方だが、「男ならば人妻を、女ならば人の夫を」と云ふ二重の意味を含ませたのであらう。

（六）七つのモルタル科は、我慢、貪慾、嫉妬、邪淫、饕餮、瞋恚、不精で、これを以て諸罪諸惡の大源となす。

（七）クガイ(cugai)は羅甸文には publico、パゼスにも同樣の解說あり。苦界と區別して、公界を採る。

五番(一)に就て

わたくしが(は)公界の者なれば、數多の知る人を持ちまらした。さうでござれば、或は其の方に饗應を受け、或は身より宿に其れを呼び寄せ、若しは日本形儀に盃の辭儀は、平常の事なれば、酒を‖御酒を食ぶる仕合せが繁うござつた。其内に一二度吞み過いて、酒に醉ひ潰つて、何も覺えぬほど本性を乾度失ひまらした。ま一度は左のみ深うは食べねども、頭が痛い、酒も戻し、氣までも少し損ぜられまらした。

或時も大事なる客衆二三人身が方へおぢやつて、二日の間其れを抑留致いた所で、少し肴があつて酒盛もし、また其の客をば是非ともと強ひて、とかく四人ながら二日醉致しまらした。

また四旬節(garesma)(二)に一度、四季の精進(三)にも一度、ゼンチョの方に居りまらすれば、其の亭主を相伴して肉食を致しまらした。

其上二三度、叶ひ乍らサンクタ・イグレシヤ(Sancta Iglesia)(四)聖なる教會、聖會)の一食精進(五)と申すを破りまらした。

また飲食打眠の中庸を保ちまらせいで、それにつけて罪々少しづゝ過しまらした。—5

註。(一)「五番」とは十誡の五番ではなく、「さんた・えけれじやの御掟」の五番「一、聖會の定め給ふ時日に大齋を致すべし」を云ふのであらう。
(二)カレスマ(garesma)は復活祭前四十日の齋戒精進の期間。
(三)ゼジュン又はゼゼン(jejum)は fast 即ち齋食の事。四季のゼジュンとは、春夏秋冬各季節の始めの水曜日にデウスに感謝の意味で勸める齋食。
(四)Sancta Iglesia は、羅語から採つてサンタエケレジヤと慣用す。
(五)一食精進は一日一食の齋戒。

嫉妬そねみ(一)に就て

吾等しきの者の、風がようて譲り(吾等と同程度の人間が運がよくて相續を受けの意)かれこれ俄かに福人になられたを見て、さては身が事の上ばかりに風が惡いが曲ないと存じて、氣が詰つて深う悲しみ、他の財をば嫉みまらした。

其他或人の公事に就て、身は其の贔屓して勝つほど合力致さうと約束したれば、隨分それに念を入れ、成程(出來るだけ)(二)働いたれども、其の公事をし糺す間に、過分の賄賂(又は)幣物を取りまらした。

註。(一)七つのモルタル科の一つ。
(二)マイト(muito)は隨分と同義語なること明かなれど、何故なる[illegible]

慈悲の所作(一)に對して

わたくし鐵炮藥を作る者でござれば、阿彌陀のヘレジエス(二)（なる）海賊人に其の藥を賣り、其上、兵糧、鐵炮、其彈、石火矢、海賊の道具をも、皆拵ね出し、其の爲に（海賊人の爲に）買ひまらしてござる。とかく彼等は轉宗切利支丹と海賊の者なれば、定めて左樣に申した事を賣りつゞする（賣り續くる？）が（は）御戒めでござらうと推察いたしながら、四年の間にし續き(三)まらした。

また今の流行る切利支丹の(四)障碍（迫害の意）に就て、身が邊りへ奉行が來て、涯分（隨分の意）切利支丹衆に、伴天連達に宿を貸し其れに會はれまいとの判を据ゑ、また之を猶堅う定むる爲に誓文の約束をさせらるゝ所に、吾れも其の約束をし、隣りの者にも同前の意見を加へまらした。

これは三度でござつたに、一度は、神佛にかけて斯う致すまいと誓文立てと云ひつけられたさかいに、身は、神佛は何に立たず(五)（役に立たぬの意）眞の誓文の題目でない所で、ついでに遂げいでも大事あるまいと存じて、ゼンチヨの奉行を欺る爲ばかりに立てまらした。一度は、さて眞のデウスにかけて以下(六)の誓文も立てたれども、身が存分には、伴天連樣に宿を貸し御身を召し使はるゝこと尤も御意見の内でござれども、御掟の御內でござない所で、命を助かるために其の誓文を立てゝも、せめて深うはコンシエンシヤに懸るまいと思つて仕つてござる。一度もまた村の乙名（村長の意）、乙名の代に（代理として）左うさせられたによつて、不謹愼、浮とした約束ばかり、表向の判を据ゑさせられまらしたれば、（既に）吾れが申した如く三度ともに致し（た事になり）、すれば有つても深い科でござるまいと他人にひしと申しまらした。今まで此分に仕つたが、自今以後は御意次第致しまらせうず。

そのほか吾れは大惡人でござるに依つて、定めて、見知らぬ、身に覺えぬ科多うござらうずれども、覺えた分は申し現いたまででござる。此等身が深い誤でござつたところで、デウスの御名代（よ）、その科の償ひ、御赦し、以後の爲の御教化を謹んで頼み奉る。

師。仰せある如く、尤も科の數も深さも甚い事なれども、心底より其れを一々後悔し、再び犯すまいと思ひ斷つて、皆一つも殘さず現は、ゝしあつたのう？

答。なかく。何がデウスの御代に誤を隱しまらせうぞ？

師。さらば斯樣なる數々の深い科の御赦し（も）、デウスの無量宏大無邊の御慈悲のためにはいと易い事ぢや所で、其分心得あれ。さり乍ら少しづゝの心得が要る。先づ、息子殿の患ひの時分に二度山伏を呼び寄せ、法祈禱をさせ、村守をかけさせたに就て、なほまた一度に、神佛を賴もしう存じてさう致いた事ござる。それは後悔と、また再び致すまいとの覺悟の上に、見知られた衆の前で仕直さいでは。

またゼンチョ寺に行つて誦念した事の上に、あの所へ戻りあらう時は、眞の切利支丹でござる。あのゼンチョより見知らるゝために、其れ（の）寺へ往かれうずらうと（八）——[58]もせず、また神佛の事を褒美せられう時も肯はぬのみならず、却て、切利支丹の眞のデウスの御教ばかり一勝れた宗でござると、そのゼンチョの前で申し解らしあらいでは。

其上、他人切利支丹の事を譏り、デウスに對して（九）惡口雜言を吐く者に遭ひあらうずる時は、其の御方（デウスを指す）の御譽の望みに添え立つて、ゼンチョの魔法をさけぶんで（さげすんでの誤か）、ただデウスの御法の事を賞め揚げられいでは。そのほか構いて、善い鑑を見せらるゝ衆の事をば相譏りあるな。結局それらの明鏡を學び、デウスの御內證に合ひ 奉らるゝやうに精を入れ、御頼りをたのみ 奉つてようござらうぞ。

二番の御掟に就て。其方も立て、人にもさせあつた虚誓文で他人受けられた損仇をば、つひに直さいで叶はぬ。仔細は、それをせいで科の御赦し會てござるまい。

また媾御と仲直りして、疾に前の訛を詫ひ、ま一度左樣なる障が無いやうにしてこそよからうずれ。

また赦しを乞ひに行られた人と仲を直し、其れ（其人）と言葉を交はし、前の[illegible]りが[illegible]るやうにめされよ。

[illegible]

身知らぬ心の徹しぢや所で、今より後御計らひに委せて、たとひ渴えても再びさう致すまいと思ひ定めあれ。

女房に取らうと云うて不犯の女を落しあつた事の科は、其の約束を遂げずして赦されまいと心得あれ。但し樣子變りがあつて、さうならぬに於ては、せめて其の替りに似合の事をば其の女子に行られいでは。同じく種々の約束でたばかつた不犯の女子に、其の約束に從つて勤めをなされよ。

存じながら、盗うだ物を安い値に引かれて買ひ取る事は、ならぬに依つて、其事か其値程の事か、主に返さいで叶はぬ。

非道の利倍を取り求むるは御戒めでござるによつて、元金と、其金で商ひすれば必ず儲けてあらうずる利をも取つて、殘りをばそれぐ主に戻さいで（は）、科の御赦が無いと、サンクト・オグスチニヨ（San to Augustinho）の御言葉でござる。

裁判めさるゝ大名の（に？）隠れて取つた物を返し、また其の內の者に取らせた物も其の主に取り返させいで叶はぬ。とかく人に損いた仇をば有に無に直さいでならぬと心得て、何んとなりとも其分めされよ

また人の上を邪推し其の事をば惡う沙汰取りなすを以て其人面目に遭はれた擬怪我なんどを、詫つた衆の前で云ひ戻さぬ心がある間に、その科の御赦しはよもござるまいと心得あれ。

[illegible]

ぢやつた所で、今より後さうせいで、前の仲違ひをば力の及び才覺して直さるゝやうにさせられよ。

人の贔屓めされたに依て賄賂に(を)受けたこと、また何につけても賄賂幣物と云ふ所は即ち非道に取らるゝ所で、たゞ其の働きに相叶うた分を取つて、殘るをば取らせた者に(與れた者に)返さいではの御意でござる

伴天連に宿を貸すまいと身樣の誓文に就て。先づ神佛は何んでも無い事なれども、ゼンチヨども、奉行殿、御所樣までも、皆の思はるゝ樣は、定めて、例へば、愛宕八幡、阿彌陀なんどにかけて南蠻坊主に宿を貸すまいと誓文した者どもは、もはや切利支丹でない、せめて弱い切利支丹で、おのづから早う前の如くにならうと、見限つて云はるゝ筈でござる所で、あぶない誓文と存じまらする。

二番のはデウスにかけてゞござつたと。さりながら、伴天連の宿を貸し其用を叶ゆる事は、惣別御意見の所作の內ばかりでござれども、仕合せによつては御掟の限りに入りまらする。例はゞ、吾が後生か他人の後生を助かるためか、伴天連を呼び寄せ其れに會はいではの時分に、命を失うても、あらば(居らばの意)伴天連を呼ばいで叶はぬとの御掟ぢや所で、何の用があつても押し並べて伴天連に宿を貸すまいとの誓文の題目は、なりそもない事と存じまらする。

三番の約束に就ても大略同じことゝ思ひまらする。とかく身が分別は(を)現いたまでゞござる。—64

註。

(一)慈悲の所作は十四箇條あり、始めの七つは色身に當り、後の七つはアニマに當る。この一段は、慈悲の所作に反した罪の告白である。

(二)ヘレジエスは herejes 即ち異教徒。但しこゝでは異端者の意なる如し。

(三)サヤタゲは、羅甸文 persecutionem だから迫害の意である。

(四)ガイブンは、パゼスの辭書にズイブンと解し、avec attention et zèle と說明あり。即ち涯分を宛つ。

(五)ニニタタズば、羅甸文 nullius esse valoris 即ち not being valorous. またパゼスにはニニモタヌの語を擧げ、二は荷と解してゐる。

(六)イゲはパゼスに et cætera とあり、以下を宛つべきは疑ひなし。

(七)ジゴンニゴは原文 jingo nigo, 自今以後の轉訛なること必定。

(八)寺へ行かれうずらうのズラウは、原文 zu vo だが、vo は ro の誤植であらう。

(九)對しては、原文 xaixite 即ちシアイシテだが、羅甸文には Contra Deus とあり、タイシテなること疑なし。

(完)

青空

吉植庄亮

仰ぎみるこの冬空のふかみどりあなさやけくも眼にはかぎろふ

み冬空けふもさやけく晴れにけり萱の穂架の光りつつゆく

出津の野の萱の穂架のをりふしは光りつつ来て袖にとまるも

まひなたにあそべる鶏相つれて鳴き立ちければそのいきの見ゆ

米にしていまだものこる日のほてりわが蹠にあたたかくして

歳末二首

年の瀬をこもりわが居りはしためが鍋尻かける音のみぞある

しづかなる大晦日の夕づく日いささかはまだ餘ののこれる

ある折に

起きぬけを企の談にこじれたるわが下心一日なげかふ

正しくしわれは行くべしうつし世のさかしら人はさもあらばあれ

蝗を食らふ小鳥に網張りて殺生戒はけふも守らず

時雨

芭蕉葉のひろ葉はぬれて音もなし時雨の雨に一日こめるも

霜

道芝の青さはいまだおとろへず霜のしづくの玉にむすべる

ハァデイの思想と文藝

日高只一

英國否世界近代の文豪トマス・ハアデイは去る一月十一日八十八歳の高齢で逝つた。

英國は彼の偉大な文勳をたゝへて、彼の遺骸を古今の大偉人を葬るエストミンスタ寺院の詩人席(ポーエッツ・コーナ)に葬つた。ショウを初め文壇の大家、首相を初め天下の名士が會葬した。

英國皇太子殿下は一九二三年即同殿下が日本訪問の翌年ハアデイの居を訪はれた。其當日即七月十二日の「ロンドン・タイムズ」は二段にわたつて、ハアデイの文勳を讃し、而も其冒頭に於て「この靜かな會見で、此皇太子と此詩人とが互に名譽を與へるであらう」と書いた。普通ならば今を時めく一國の皇太子に訪れられたのだから訪問を受けた方のみが非常な名譽を與へられたと云ふべきであるのに、ハアデイが稀代の文豪である爲に、翁に會見した皇太子も亦名譽を與へられる事となつたのである。

此様にハアデイは上下國を擧げて尊敬した否尊敬してゐる。其れは單に英國に於てのみではない、實に世界各國に於てゞある。フエルプス教授が云つてゐるが如く「吾人は哲學の方面でショーペンハエルに感謝するべきと同様に文學的方面ではハアデイに感謝しなくてはならない。」

ハロルド・チャイルドは其著「トマス・ハアデイ」の卷頭で、斯う云つてゐる――

「ハアデイは年代の上からは現代に屬さないが、作の性質上からは現代に屬する」

實に彼は、キップリングよりは二十五歳年長、ショウよりは十六歳、最早故人となつたスチーヴンスンよりは十歳の年上、佛國のゾラとは同年生れであつた。だから年代の上から云へばヴイクトリア朝に屬すべきである。であるにもかゝはらず、彼の現代若しくは更に新しい時代に屬するのは畢竟人生若しくは宇宙を觀察する見地なり、態度なりに依るのである。蓋し前時代に於ては善惡二元の範疇で人生を見、宇宙を見て、之を現はし、之を歌つた。バイロンや、セリイの様な反逆の詩人と云はれた者すら、善となし惡となす對象こそ異なれ、依然として善惡の範疇を脱し得なかつた。所がハアデイは此善惡範疇を捨て、宇宙や人生を深く觀察し、其處に「一意志」の存在と發現とを觀、彼の一元的の態度と見地とを得た。即ち彼は宇宙の實體は善でもなく、惡でもなく、慈善的でもなく、惡意的でもなく、何等の計劃、目的を有しない、盲目的な意志である。これが發現して宇宙となり人間となつてゐるのである、と觀たのである

此點實に近代哲學の偉人ショーペンハエルの哲學と類似する點で、やがて東洋思想殊に佛教思想と共通する點である。

此共通點から又ハアデイの運命觀、厭世觀は同じ共通點をショーペンハエル及東洋思想殊に佛教思想に見出だすのである。殊に彼の運命觀は佛教の宿命説、其東洋思想の影響を受けたエマスン、更にエマスンの影響を受けたマーテルリンクなどの思想とも共通點を有するのである。

併し、ハアデイは佛教の如く人間の罪業を認めず、基督教の如く原罪(オリヂナル・シン)を説かず、否人間を決して罪の子と思はないで、寧ろ人間は同情すべきもの、讃美に價する者と思ふの

である。人の悲劇に苦しむのは其人に罪がある譯ではない。全く運命の作り出だす環境の罪である、と思ふのである。

此處に於てか、彼は人間に善惡、貴賤、上下の區別を認めず、一元的見地に立つて、一視同仁、運命に苦しむ人類に向つて萬石の涙を注ぐのである。これ實に深い人類愛であつて彼の作を通じて流れる熱と涙とは畢竟其影である。否、彼をして哲人よりも詩人たらしめたのも亦此點にあるのである。

此點又ハアデイの異教主義者（ペイガニズム）を唱へられる所以でもある。

ハアデイは前述の如く一元的の見地や態度で、人生に面し、宇宙に面した。更に藝術に面した此點がやがて、善惡美醜、表裏、上下の差別を絶して、凡てを平等に見、有りのまゝに見、有りの儘に描かんとするリアリズムやナチラリズムの特徴をハアデイの文藝に見出だす所以である。此處に既成文化の中に生れた宗教、道徳、習慣、制度、教育等に對する人類の悩みや、苦しみを見出だし、其れを何等假借することなく、顧慮することなく、厳粛な、而も涙の筆に現はすのである。此れ亦彼の文藝が現代的であり、新時代的である所以である。

併し彼の文藝が自然主義的であり、寫實主義的であるのは、只觀察と表現の態度だけであつて、其觀察、表現の對象ではない。

「ゾラは人の中に人獸を見た、彼は其有らゆる變形を現じてゐる野獸を見た、併し彼の見たのは單に野獸だけである、彼は公平に人生を見なかつた。人生をさながらに見なかつた。彼のリアリズムは一個の偏狹な理想主義である。」

これは文藝批評家にして、詩人であるアーサア・サイモンズのゾラに對する批評であるが、やがて、其流を汲んでゐる自然主義若しくは寫實主義文藝の批評である。實際、文藝史上に現はれた自然主義或は寫實主義文藝の多くが其觀察、描寫の對象としたのは物質的肉慾的方面であつた。宇宙、人生の表面、「人の心の表皮」だけであつた。

ハアデイはこれに滿足しなかつた。自然主義若しくは寫實主義の教へる態度を以て、更に其教へる宇宙、人生の物質的、表皮的現象を通して、深く其底に入り、其奥に徹して、宇宙、人生の神秘、幽玄を洞察し、靈の姿を觀た、更にこれを描寫した。

[illegible]

を觀た。例令一如の人生觀、宇宙觀、藝術觀は其處に生れ、新ロマンチシズムの光をも翁の作に認めるのである。

ハアデイの東洋的であるのは宇宙實體觀や運命觀や、厭世觀のみではない。彼の藝術觀に於ても亦其れを見出だすのである。私が翁を英國はドウチスタの近郊、翁終焉の邸、マックス・ゲイトに訪れたのは足かけ六年の昔であつた。其時、贈物として墨繪の扇面と浮世繪の版畫とを翁に呈したが、翁は其れが、殊に扇面の墨繪が非常に氣に入り――

「此繪の調子は非常に落着いてゐてい〻、少しも浮ついてゐない。シムプルの中に含蓄がある。」

と云はれた。實に此墨繪の美はやがて日本特有の能樂が持つ美でもある。靜寂！　幽玄！　簡素！　含蓄！は實に東洋美の特色である。翁は此東洋美を好んだ、否此美が翁の故郷の自然美でもあり、翁の肉や靈を持つ人間美でもあり、更に彼の十篇名作の持つ表現美でもある。

嗚呼、翁は逝いた。けれども翁の思想と藝

[illegible]

地下鐵道見參記

藤　島　久

たとへば土中に埋めた鐵管の中にゐるのが地下鐵道で、大震災の時これがあつたなら、死亡者の何分の一かは完全に助つてゐたさうだ。――さう安心しながら、簡素な舞臺裝置に似たあどけない「うへの」驛入口を降りて行く。船腹のやうに板を張つたトンネルに壺の電燈が並んでゐる。地下二丈四尺の温氣がむつと來る。

十錢白銅を入れると、マグネチックな力がはたらいて、ターンスタイルが一廻轉する。これは、うちから押せばいくらでも廻轉するといふ代物だ。面白がつて押し廻しながら皆が通過する。面倒臭い切符なしですむのは有難い。回數券を持つ人の爲めにはパッシメーターがある。

黄に塗りつぶしたカアだ。間接照明の光りが車内に柔い。珍しまぎれに乘り込んだ大勢の乘客は、車の内外を見廻してゐる。子供は口にくはへた指の間から「地下鐵」を繰り返へしてゐる。一九二八年の三歳の子供は、四十二歳の母親と同じ最初の「地下鐵」の經驗をしてゐるのだ。

毎日汲み出すといふレエルの間の溝に澱んだ水を眺めてゐると、向ふからカアがやつて來た。それが停ると、こちらのカアが警笛を鳴らして、無愛想なセメントの壁の中を走り出した。隧道の天井の灯がこぼれるやうに車窓の上部から掠めて過ぎる。

驛々には藥やキネマや醬油などの廣告が、生々しいセメントの匂ひにすさんだ薄闇の地下道に色彩的な享樂を與へてゐる。商業主義の廣告でさへ、ここだけではたつた一つの藝術品だ。「いなりちよう」「たはらまち」「あさくさ」と突進して行く先き先きで、それらは快い色調を發散する。

我々の頭上の大地では、軍隊が行進してゐるかも知れない。積み過ぎた貨物自動車が撓つて走つてゐるかも知れない。どんな素晴しい出來事がいつ起るかも知れない。けれども、そんなことには白痴の如く無關心な世界がこゝにある。全線一哩三分、ゆつくり走つて五分時の間は、少くとも我々は現實世界から遊離して、ソロモンの壺にでも封じ込まれてゐるやうな妖精じみた感觸を全身に感じながら、はるかに知らぬ世界を旅行してゐるのだ。

換氣裝置を二つ數へたら、もう「あさくさ」だ。自動式ドアは完全に停車しなくちや開いて吳れない。早や着いたのかと思ふ張り合ひ拔けのした氣持で、朱塗の間の階段を昇る。そこでもターンスタイルが玩具のやうに廻轉してゐる。もう一つ階段を昇ると、蒼空がくつきりと額入りに見える。新聞賣りの鈴が聞える。そして、とう〳〵汚れた市内電車が一腹仔の乘客を滿載して走つてゐるのが見えた。吾妻橋と雷門の間だ。

これは盛り場の淺草と、杖を曳く人の群る上野間の遊覽電車だ。貨物運搬の經濟的活動はないが、一日三萬の乘客が吞吐されてゐる。地上の文明に西歐を追つてゐた日本が、これから地下の文明を追はふといふのだ。これをしも最も新しい交通機關だと云へば西洋人は笑ふかも知れないが、仕方がない、日本では一番新しいんだから……。萬世橋までの第二期工事が品川まで通じ、新橋から池上の方まで通じる曉には、我々の生活は地下にまで擴大される。そして幾十萬年の後、地上の生活に疲れた人間が、この地下鐵道の廢墟に蜘蛛のやうに巢食つてゐるところを想像するのも面白い。更に隅田川の底を潜つて江東を渡る頃には、我々はあの大川の美しい濁り水と汚泥のずつとずつと下の方で、ふとした拍子にギイギイといふ櫓の音を錯覺的に聞くやうになるであらう。（二月六日）

大刀會の正體

長野朗

今南滿で勢を振ひ日支官憲を困らして居る大刀會は、或は匪賊と云はれ或は農民暴動と云はれて居るが、實は純支那色を帶びた農民運動である。大刀會は紅槍會等と同じやうに明末に起つた白蓮教の一派で、之の外にも天門會、白纓會、小刀會等種々の分派はあるが、大體に似たものである。紅槍會は赤い紐の附いた槍を有つて居るし、大刀會は大刀を擔いで居る。彼等には皆教祖があつて、會員は數週間或は數ケ月間そこで齋戒沐浴して修行をする。修行といふのは多く呪文を唱へ或は拳法を習ふのである。一定の期間修業すれば刀で切つても切れず、彈丸で擊つても中らなくなる。それには試驗をする。修業終つた者をずらりと並べて置いて、頸に板や竹を載せ片つ端から斷つて行くが、斬り手は該會專屬の幾十年もそれをやつて居る擊劍の達人だから竹や板は切れるが頸は切れないやうにする。又鐵砲の方は火藥を大部分拔き取つてあるから大丈夫である。かうして彼等は彈丸雨飛の間を槍を提げ呪文を唱へて突進する。

紅槍會や大刀會は今まで種々な仕事をして來た。明末には朝廷を助けて清に當つたが、清朝時代には概ね清廷に反抗したので酷く壓迫された。それが清朝末期義和團といふ排外的な一派を生じたが、民國になつて土匪の跳梁が甚だしくなると、やがて土匪に對する自衛團となつた。民國七八年頃土匪の害に惱まされた山東、河南一帶では、各村に自衛團が出來たが、兇暴なる土匪の大集團に對して敵し得べくもないので、彼等は人力以外の或るものを求めた結果、こゝに紅槍會や大刀會に投ずるものが多くなつた。所が最近二三年軍隊の橫暴誅求が甚だしくなると、此度は官憲や軍隊の壓迫誅求に對する反抗運動を始めたのが現在の紅槍會や大刀會である。今の彼等の勢力は河南、山東全省から直隷山西の南部、安徽江蘇の北部一帶に亘り約百萬を算するだらう。それが山東人の多く移住して居る滿洲に傳はつたのである。最近に於ける彼等の特長としては土匪防禦の時代よりも、强力な軍隊に對抗するため其會の組織が大きくなつたことである。事が起れば大鼓を叩く、それが音波のやうに村から村へと傳はり、一日の中に一萬位の會員は集る。彼等は其目的が上からの壓迫誅求の手を拂ひ除けるにあるから、奉天軍でも國民軍でも共產軍でもお構ひなしに官憲と軍隊には敵意を有ち之に反抗する。今日彼等の勢力は大であるが、彼等は各教派毎に分裂して統一集結が出來ない。それに彼等の目的は消極的で、たゞ自分達の上に振りかゝつて來た壓迫の手を除くだけであるから自ら革命等は出來ない。其行動は局部的一時的で、其他の時は勤勉な農民である。今紅槍會大刀會を利用しやうとして居るのは共產黨であるが、これは困難である。彼等は共產黨と異つて農民全階級の官憲軍隊に對する反抗であり目的も異つて居るから一時的の利用の外ならないことになるであらう。

觀戰記

四條畷の戰

賀川豐彦

何しろ、河內の國全部と、攝津の半分位入つてゐる廣汎な地域なんでせう。南北三十八里、東西、廣い處で十里位もある所だものですから、走り廻るつたつて、ちよつとやそつとのことぢやいかないんです。何しろ金剛山の麓から、多田滿仲の墓のある能勢の妙見さんの下まで戰線が廣まつてゐるので、杉山君の地盤は樂な地盤ぢやないのです。其處では今迄、縣會議員の選擧戰に、二度許り破れてゐるのです。去年の秋の九月には、四條畷の戰に、私が參加するのが遲かつたといふので、二百票の差で落選したのです。ですけれども北河內は、私達が農民運動を始めた最初の時からの地盤で、票數も三千足らずあるのです。それに中河內には日本農民組合時代の有權者が尠くも千五百以上ある筈なのです。南河內は、全く地盤の無い處で、其處には強硬派の[illegible]陣取つてゐるのです。[illegible]には、[illegible]君が陣取つてゐるし、北河內には地主黨の大親分佐竹庄七君が、根城を持つてゐるのです。南河內の富田林には、政界の古强者田中萬逸君が居城を守つてゐるのです。北河內の枚方には縣會議員戰に勝つた中村虎次郎君が戰線を張つてゐるし、普選で働いた高松正道君は、隨所に出沒して、可成の戰鬪力を持つて居り、勝田永吉君は、三邊ありを根據として奮戰してゐるといふ有樣なのです。其處へ、無産黨の杉山君が乘り出すものですから、戰爭は必ずしも生易しいものではありません。瀨戶內海に面した處は暖かくはあるけれども、少しく北攝津の山の中に這入ると、雪が一尺以上もあるのです。

金があれば自働車も自由に動かせるでせうが、同志から集めた僅かの金で、自動車を動かすことは勿論出來ません。幸にも電車と鐵道の線が七本あるものですから、それを利用してその他は自轉車に乘つたり、てくつたり、仕方のない所は、ボロ自動車を賴むのです。

先づ杉山君は、一月の廿五日頃に西の宮の家を疊んで、大阪城の西北の隅つこにある京橋北詰の小さい月廿五圓の事務所に引越しました。其處は炊事場が無いものですから、杉山夫人は野天で人參を切つたり、飯を炊いたりして居られるのです。電話を引かうにも金が無いので、半丁位先きの勞働組合純向上會の電話を借りて、その都度電話口まで走るのです。

然し、安藤國松君は、選擧事務長として、これ迄、又と得られない

經驗を持つて居られる爲に、僅かの金を持たして、五人の同志を五郡に走らせたのでした。豐能には大阪の勞働界の恩人、海軍中佐、一名勞働中佐の聞えある金子忠吉君が、櫻井の自宅を選擧事務所に提供してくれ、自らその主任になつてくれられたのです。北河内には機敏な初田君が枚方に事務所を開いてくれ、中河内には農民運動の古強者島君が、僅か二人の同志と潜入して行つてくれ、岩崎幸次郎君の本陣である布施町に、事務所を作つたのです。奈良の農民運動者、伊瀨君が和歌山縣の山中君と二人で、機敏な行動をとつて、告知のあつた翌日に、田中萬逸君の居城の眞中に事務所を開いちやつたんです。これはさすがに敵を驚ろかしたと見えて、家主も警察も吃驚したさうです。三島郡の方はこの方面の農民組合長を永く勤められた吉岡八十一君が主任になつてくれました。星目は之れで決りました。之れからいよ〳〵白兵戰です。私は鈴木文治君も應援しなければならぬし、今井嘉幸君も應援しなければならないし、西尾末廣君、河上丈太郎君、吉田賢一君、もつと後れて立つた米窪滿亮君も應援しなければならないのです。然し、北河内の農民組合はそれを許してくれません。この前の縣議戰で、二回も慘敗してゐるこの戰跡に鑑みて、今度は、絶對的に私が出て來なければ、みんな手を引くといふものですから、私は一郡に三日宛、合計十五日を杉山元治郎君の爲に、まづ取つてしまひました。それから吉田賢一君の爲に五日間、後の五日を他の候補者に分けようといふのです[illegible]難いことゆきません[illegible]要に臨んで

私の代りに西尾末廣君や、河上丈太郎君を專ら應援して貰ふことにしました。

阪本孝三郎君からも應援の依頼が來ました。ところが困つたことには、鈴木文治君と勞農黨の大橋君と、正義團の酒井榮藏君と、四人が鉢合せになつてゐるのでせう。普選徹底の演說會に行く爲に、尾崎行雄氏の伴をして、朝日の高原操君と名古屋行の列車に乘ると、其處に酒井榮藏君が居るぢやありませんか。酒井君は、鈴木文治君に應援するなら僕にも應援してくれ、僕を應援しなければ、鈴木君の應援を止めてくれ」とせがまれたのです。酒井君が男なら私も男です。とう〳〵フエアプレーに任せることにして、私は殘念ながら鈴木文治君を應援しないことにしました。

何しろ田舍道でせう。眞暗がりの中を、曲りくねつた細路を行かねばならず、自動車は通はず、自轉車は間に合はず、徒歩で行かねばならないやうな處が隨分澤山あるものですから、最初の晩などは弱りました。それに大抵少くて一日に三回、多くて六回やらせられるものですから、咽喉は全く駄目になつてしまふし、身體もくた〳〵になるのです。だけれども殆ど[illegible]を外にして、一般政治教育に走り廻つてゐると思つて、出來るだけ實のある話をしてゐます。

[illegible]あたりのサラリーマンなどに[illegible]

[illegible]

してくれないし、解つてゐるのやら、解つてゐないのやら、さつぱり見當が付かないものですから、賴りないやうにも思ひます。けれどもこんなにして置けば、いつかは解つて來ると思つて、努力してゐるのです。

杉山君は、日本製のオートバイを月賦拂ひで買ひ込んで、バタ〳〵云はせてゐますが、途中で故障が起つて、八百人から集まつてゐる聽集を二ケ所まで逃がしてしまひました。さうかと思ふと辯士が足らんものですから、杉山君と私が交替に二ケ所持つと、一方の方が一時間も空いて、私が來るまで待つてゐてくれるのです。餘り廣いので、杉山君が、顏を出せない推薦演說を澤山やつてゐます。これからは村々に、獨立した推薦演說會をやれば非常によいと思つてゐます。これから見れば市部の選擧戰は實に易しいものだと思ひます。私は選擧が濟むまで恐らくは、百回以上演說をすることになるでせうが、こん度こそはと思つて、うんと熱を上げてゐるのです。(二月五日)

三土を向に廻して戰ひ進む大山委員長

細迫兼光

始め、委員長と私とは立候補しない方針を內々持つて居たのだが、議會に送るわれ等の代表は、階級意識の明確な把持者でなければならない事は勿論だが、その上に猛烈なアヂテーターでなければならないと考へ及ぶに至つて、絕好のアヂテーターたる大山氏を逸する事は出來なくなつた。

われ等の代表はほんとに命がけだ、だが委員長は、あの早稻田の軍事研究團の事件以來の命は儲けものだと覺悟してゐる。「實際あの時は私の學校へ行く道筋は——汝の首に白刃の降るを——といつた調子の貼り札で一杯だつたのですからネー」と述懷して居られた。

でも奧さんは大心配だ。こんどこそほんとうに白刃が躍らぬとも限らぬと、眞綿のチヨツキに針をしきりに運んで居られた。

◇

香川はわが黨の絕對的地盤である。だが相手は大物の三土と來て居るので苦戰は免れない。然し御本人は大元氣で「三土より下位で當選したんでは勝つたとは云はれない」と頑張つてゐるんだから、黨員の意氣込みと來たら又スバラしい物で、次の演說會場へみんなでワツシヨ〳〵かつついで突破する始末だ。

◇

地元もゆるがせには出來ないが、選擧區にだけコビリ付いてる事は氏の良心が許さないし、又本部としても全國的に活動する事を必要と認めて居るので此の月も一日京都、二日東京、三日東京朝日の立會演

説、七日大毎新聞の立會演説へと出掛けた。

だが全國の黨員は氣が氣でない「委員長を香川から引き出すな」と大阪や兵庫や九州やからヤイ／＼云つて來る。そして香川に向つては「委員長を落したら腹を切らせる」といつた調子の電報が各地から舞込むので香川の黨員も並大抵の苦勞ぢやない。

◇

香川では我黨の縣會議員が四人出て居て無産民衆の爲めに現實に活動してゐる。例へば水平社の大會に縣會の名を以て祝電を打たうといふ提案をして政友、民政をして大混亂に陷らしめた。彼等は平素口では水平社同人に同情した樣な事をいつては居たが、この動議が出るや周章狼狽爲す處を知らず、直ちに休憩してゴッタ返した擧句、議事規則にないからといふ理由で終に否決し去つて了つた。此の事實は、然し、水平社大衆に既成政黨は口と腹と違ふんだ。勞働農民黨は云つた事は必ず實行するものだといふ信頼を如實に植え付けたものだから、水平社大衆の支持も大したものだ。

◇

彈壓の激しい事は全國的の事だが、とりわけて三土の御膝下だけにその辛辣さもお話しにならぬ。第二區からの上村氏も演説の中止命令に抗議したからといつて未だに拘留して出さないといつた調子だ。大山氏の演説も滿足にやれたのはタッタ三回だけだと奮慨してゐたが、だが大山氏は[illegible]の[illegible]に[illegible]せんとせに宜敷

險に廻つて野次を飛ばすべし、といふ程理がある程だから、彈壓のうむる毎に勇氣は百倍するのである。彼のゼスチャーは益々その規模を擴大して兩の手は水車の如く廻り出すのである。

◇

困つたのは金で、香川に出かけた時は黨中わづかに四十圓であつたが、氏の後援者は氣が氣でなく、三宅雪嶺氏や櫛田民藏氏等を筆頭に續々と寄附金の申出であり最近大いに活氣を呈して來た。だがそれでもと地元の農民や水平社同人も貧しい財布の底をはたいて持ち寄つてゐる。お手のものの米が事務所に山と積れた事は云ふまでもない。

◇

一般の此の大景氣に政友會は狼狽し出した。「大山なんか眼中にない」と口ではうそぶいた三土も内心恐れを懷いてゐる事は云ふまでもなく、政友の候補を一人とう／＼詰め腹切らせ、又手を廻して日勞黨あたりの人を立てやうと裏面の策動に日も是れ足らぬ有樣とあるから或は誰か政友會の御手先を勤める者が現はれるかも知れぬ。然しそうなつたらわが黨の戰意は益々烈しく燃え立つであらう。

◇

伏石事件で入獄してゐる前川正一君は此の十八日に出る事になつてるが、たとへ一日でも二日でもわれ等の委員長の爲めに應援[illegible]られねばおかぬと、永の牢獄生活に身の小さくなつてゐる事を氣にし[illegible]ら、しきりに力こぶを入れてゐるとは[illegible]

選擧情景

木村 毅

申譯のない話だが、非常に我儘な黨員である私は、一月一ぱいどうしても手の離されぬ仕事があるので、黨から呼出しが來ても出頭する譯に行かない。その代り二月の全時間を黨のために割くと申出ておいた。

一月二十日、解散の號外の鈴の音のけたたましさ！　だが私は机に噛りついたまゝ、書齋を動かうともしなかつた。

一月三十日、初めて自分の仕事から解放されて、黨本部へ出て見た。

『選擧中はなるべく三度食事を取り、衛生に注意すること』――これは壁への貼出しだ。なる程、昔から腹が減つては戰が出來ないと言つてゐる。

應援辯士の編成で、私は遊擊隊に加へられてゐる。そこで、私も一票の行使權を有する東京府下第五區（荏原、豐多摩、八丈、小笠原島）の我が日勞黨候補加藤勘十君の應援を皮切りに、栃木の麻生久君、群馬の須永好君の方へ廻り、間に一度長野の勞農黨候補藤森成吉君の所へ寄つて、それから大阪へ下り杉山元治郎氏を應援し、最後に投票間際の二三日を又加藤君の應援に歸つて來たい意嚮を述べて、日程を組んで貰ふ。

それから、『前衛』の佐々木孝丸君から使の人が來て、藤森成吉君後援會の發起人に日勞黨の方から麻生久君と僕とに名前を貸して貰ひたいとの申入れがあつた事を報告する。僕は印刷物を急ぐ都合上、麻生君の選擧地區まで紹介して返事を待つてゐる餘裕がない、そこで事後承諾と云ふ事にして、麻生君の方の全責任は僕に持つて貰いたいとの申出であつたから、僕は承諾して了つたと言つて、列席諸君の諒解を求めた。

僕は東京府第五區に秋和君が立つて『模範的協定』の破れた直後なので、黨の意嚮はどうかと懸念した。が、『それは結構だ。あの人なら一向差支へはない。勞農黨では協定を破つても、こちらはなるべくそれを守りたい方針だし、それに藤森君の選擧區にはこちらの對立候補もないのだから、麻生君も故障は云ふまい。もし言つたとしても僕が共同責任を頒つ』と、三輪壽壯君や平野學君が言つてくれたので安心した。

×　　×　　×　　×　　×

私は二月二日夜、大井町活動寫眞館を皮切りにして、連夜、二回乃至三回宛、壇上に立つ。

それにしても加藤勘十君の、何と云ふ熱烈痛切なる雄辯よ！　それには『吾等が大統領、加藤勘十君よ、もう一遍君の雄辯を聞かして見れえ』との覺束ない字の無名の投書が舞ひこんだ位だ。（選擧事務長河野密君の談）私達は毎夜二回宛位は必ず加藤君の演説を聞くので、今では暗誦だつて出來る位なのだが、それでゐながらつい吾知らず引きこまれて了ふ。二月二日には同じ大井で民政黨候補鈴木富士彌の演説會があり、若槻禮次郎も壇上に立つと言ふのに、吾等無産者側の人氣は、この前首相、前參與官を壓倒して、聽衆の數の多いこと、遙かに彼等の演説會を凌駕した。翌夜は東中野で政友會の公認三上某の演説會とぶつ衝かつたので、通りすがりに會場をのぞいてみたら、何ぞその寥々たる！――、、、、されないやうにせい／＼健鬪し給へ。

五反田の或る會場の如きは聽衆實に千六百を越え、校長さんが『昨夜の鈴木さんのより二百人ばかり多いやうです』と保證してくれた。

二月六日は朝からの大雪が、夕方になつてしよぼ／＼雨と變つて、道がぐしや／＼して歩けたものではない。

第一會場は柏木の府立第五高等女學校だ。

『今日、こんな天氣なのに入りが百人あつたら、乾度加藤君は當選するよ』と幹部が控室で言ふ。

誰れか物好きに數へてみたら聽衆實に百十人餘り！　萬歳、これでは當選疑ひなしだ。

臨檢の警官は、吾々の演説に時々中止を食はせる。殊に石垣一座作の三百萬圓事件に觸れやうものなら『中止！』と來ること請合ひだ。一度はわざと白ばつくれて『注意ですか、中止ですか。』と聞き直したら、『中止だ、中止だ、中止だッ！』と、地團太を踏んでどなりつけられた。

選擧をやつてゐると新聞記事には非常に敏感になる。些細な六號のゴシップ一つにも好意と惡意とは明白に讀み分けられる。

朝日は加藤君に最も多くの好意を示してくれるやうに思へる。日日、報知、都など之に續く、時事新報は度々揶揄するやうな筆意を示す。府下第五區では鈴木、高木が絶對安全で、加藤君は斯波などと肩を並べ有望だと諸紙に見える。もう一息の努力だ。

選擧斷片

河野密

普通選擧！と言ふかけ聲はともかく一見始一新のかけ聲だ。少くとも舊來の政治につきまとわれてゐる暗いかげの拭いのけられて行く『新選』の前途でなければならない。然し選擧運動の實際に當つて [illegible]

に冷い一脈の鬼氣が漂つてゐるのを感ぜずにゐられないことである。

× × ×

普通選擧法の小面倒な規定は民衆のものであるべき選擧を民衆から離れた親しみ憎いものとしてゐる。何か腫物にでも障るやうに、民衆はなるべく選擧から離れて、第三者として遠くから眺めやうとしてゐる形がある。民衆のものであるべき『普通選擧法に依る最初の總選擧』として決して名譽なことではない。これは選擧法の不備もあることながら直接取締の局に當つてゐる政府の取締方にも依ることである。法律の不備は取締の緩嚴に依つてどこうにでも救濟出來ることである。然るに現政府の取締がこの點に於て意識的『失敗』を重ねてゐることは世人の知る通りである。

例へば私の東京第五區の例を言ふと、最初提灯をつかふことや、ポスター三枚以上を一所に貼ることが禁止された。所が（名前は預る）政友會の候補者が提灯をつけると提灯をつかつても好いと言ふお許しが改めて出、政友會の候補者がベタ〳〵とポスターを貼りまくるとそれをやつても好いと云ふお許しが改めて出ると云ふ始末である。無産政黨の候補者が先鞭をつけてはいかぬが、政友會の候補者がやつたことを後からやるなら好いと云ふのである。鈴木内務大臣に言はせるならば『親の心子知らず』と言ふかも知れぬが、あまり賞めたやり方ではない。

× × ×

普通選擧法の規定が普通選擧法の趣旨から外れてゐるのでなしに、官吏の法律の頭で解し、殊更に小難しくしようとする努力が随分無駄な勢力を浪費させてゐるやうに思はれる。これは取締の局に當るものにとつても賢明でないし、取締られる側から言へばやり切れないと言ふことになる。普通選擧の主眼とする所は言論と文書に依る運動にあるのだし、無産政黨の目標とする所もこれ以外ないのだから、杓子定規な言論及び文書に依る運動に對する干渉は甚だ感服出來ないことである。無産政黨の最大の武器である言論戰が屢々中止の厄に遭つて思ふことの言へないなどは斷じて聖代の名譽ではない。

× × ×

然し無産政黨の演説會がどこの演説會と言はず大入滿員であるのは頼もしい。我々の加藤勘十君の政見發表演説會の如きは平均約五百名を下ることはない、先日の大雪の日ですら二百五十名から五百名の聽衆を集めることの出來たのは時代の趨向を目のあたり見るやうな感激を覺えた。民衆は目覺めてゐる！と云ふ感じを我々は日々に強くすることが出來る。浮薄な選擧氣分でなしに、一つ〳〵的をうがつて行くといふ感じは、選擧の勝敗を度外にしても、我々にとつて愉快なことでなければならない。殊に選擧協定支持の名の下に文藝戰線の葉山、金子、里村、小堀、鶴田の諸君が寧日のない鬪爭を續けて呉れるのは感謝だ。

× × ×

我々素人のやる選擧運動だ、萬事手違いだらけである。それでも見來の支持を思ふと心がおどる。單なる選擧熱と思はれない手紙が日々に舞ひ込む。中には選擧運動のうら表を懇切に敎へて呉れるのがある、ポスター貼りの道筋を細かに書いて呉れるのがある。中で目立つたのを二三御披露しやう。

我々の大統領
加藤勘十殿

熱烈なる貴殿の雄辯をもう一度きかして貰いたい、是非賴む。扨て來るべき二月二十日の光榮の日を待つ。　敬白

これは大崎桐ケ谷の一青年といふ人から來た手紙である。筆跡から見て工場の勞働者らしく思はれる。

我々の一票は貴下の當選を待てり願くは我等無産階級の爲め益々努力奮闘最後の榮冠を得ん事を　無産有權者

これは恐らく俸給生活者からの手紙であると思はれる。

リツコウホヨシユクシ　トウセンヲイノル」　ヘビゲイシヤ」テツコ

これは秋田縣の一藝妓から來た加藤勘十君に對する聲援である。要するにあらゆる階層からの支持が、これ等の手紙に依つて一端を窺ふことが出來るであらう。

或は酒と牛乳とを持つて來て呉れた人がある。或は一日の日給だとばかりて一[illegible]

ら、かゝる同情の下に必勝を期してゐるのである。

加藤勘十選擧事務所の雜沓の中にあつて　二月八日

無産政黨の對立候補問題について（特に東京第五區について）

佐野學

荏原豊多摩兩郡を含む東京第五區には多數の勞働者が住んでゐる。同區全有權者の一割にも及ぶであらう。だから此區から一人の無産黨代表者を議會に送り得ることは確實であらう。同區には最初、日勞黨の加藤勘十君が立候補した。同君は在來勞働運動のために勇敢に戰つてきた人で、この區には最初、無産黨間の對立候補がなく、同君の當選は確實でもあり、又大に希望すべきことであつた。しかるに後になつて勞農黨の秋和松五郎君が立候補して、こゝにも對立候補の問題が生ずるに至つた。勞農黨は日勞黨と交渉を[illegible]最初、秋和君の立候補を[illegible]

であつたさうで、勞農黨はそれに引きずられてしまつたのである。秋和君はその經歴から見ても人物から見ても吾國に於ける最も優秀な職場的勞働者の一人であつて、この人の當選も非常に望ましいことである。しかしこの地區から二人の無產黨代表者を送り得るかどうかは疑問である。

この區における對立候補は決して正しくない。根本的に言へば、各無產黨が殆んどすべての地方に對立候補を續出させてゐること自體が正しくない。總選擧直後に各無產黨の選擧協定の會合が行はれたが、それは單に地盤協定の精神からなされたもので、全體的階級的見地に立つて敵の資本家及び地主の黨と戰ふといふ精神の下でなされた選擧協定ではなかつた。今日では地盤協定は殆んど完全に破れてゐる。たとへば大山氏と藏相三土との對抗は頗る階級的な意味があるが、最近に至つてそこにも他の無產黨から候補者が出るといふ噂がある。私は東京第五區の對立候補問題が頗る不利な對立であることを特に強く感ずるが、根本的に見れば、これはこゝばかりに偶然に現れたことでなくて、各無產黨が嚴格な階級的立場を執らずに各地に對立候補を續出させてゐる一般的事實の一つの現れだ。

勞働者や農民は今日の總選擧に當つて頗る緊張し興奮してゐるが、それは勿論ブルジョア議會に絶對的信頼を持つてゐるからでなく、生活の不安に脅かされる勞働者、土地に餓うる農民が議會に自己の代理人を送り、それを通じて資本家及び地主と戰ひたいからである。各無產黨の間の選擧協定が實質的に破れてしまつた今日、大衆的な選擧協定の鬪を行つて、最もすぐれた代表を共同で推し出すより外はない。實際問題としてこれは甚だ困難である。しかし運動をこの方向に向けることが指導者の任務であらう。

對立候補のある地區では各無產黨が特に有力な同盟を結んでブルジョア政黨に當ることは絶對に必要であらう。敵が資本家及び地主であることを忘れない以上、この同盟は絶對必要だ。

更に一大勇斷を以て遣つて貰ひたいことは同一選擧區で無產黨の候補者が二人以上出てゐるところで、どうしても一人しか勝味がないと思はれる場所にあつては、そのうちの一人だけを殘して、それに支持を集中し、他の立候補者が自ら勇退することである。このことは現實問題としては非常に困難であるに相違ないが、かういふ非常の手段をとらなければ對立候補の續出のために自縄自縛の狀態に陷りかけた現形勢を有利に打開することが難かしくなつてきてゐるのである。

大衆的無產政黨の分裂殊に勞農日勞兩黨の對立がいかに不利であるか、諸黨の合同がいかに必要であるかは、今度の總選擧戰が何よりも雄辯に說明した。議會における無產黨代議士の行動の一致といふやうな點から考へても、今日の分裂狀態は一時も早く終結せしめねばならないことであらう。

選擧應援の感想

吉野作造

赤松克麿君が私の郷里の宮城縣第一區で立候補した。二月一日に舌戰を開始する、始めての門出を華々しくやりたいから私にも出ろと云ふので、一月の三十一日東京を發つた。赤松君の方では應援演說の一辯士として私を招いたのだが、私は實は少しく別の意味をも加へてその誘に應じたのであつた。

是より先き議會の解散になつて間もないこと突然仙臺の舊友がやつて來た。所謂無産政黨の同情者を以て任ずる一團の靑年が是非私に起つて呉れと云ふので代表の資格で勸誘に來たのだと云ふ。色々の理由を以てそれは固辭した。すると其次ぎにまたやつて來て、然らば私の代りに赤松君を起たしたいと云ふ。赤松の名が多少靑年の間に知られても居るし、それに私との縁故が投票を集めるに便宜でもある、努力次第では必しも絶望であるまいからと云ふのである。親戚としての私情にひかされるのではないが、赤松君の代議士として恥しからぬ人才なるは私も認める。併し彼れを起たしむるに就て多少でも私の假面的援助を期待されては困る。既に一體選擧の[illegible]ことにして居る、又現に昔からさうやつても居ない。今度は無産黨の標榜する人に限り少しばかりお助けしたいとは思つて居るが、何分忙しいのでそれも思ふに任せぬ始末だ。碌な援助の出來さうにないのみか、何よりも大事な金の方はまた見らるゝ通り赤松君同樣素寒貧と來て居る。之を豫め承知なら一應本人に當つて見給へと答へた。すると實は赤松君をば今朝まで掛つて到頭口說き落したと云ふ。それなら今更引き留める譯にも行くまい、まアやつて見給へとて一應の承認を與へたのであつた。

赤松君に何の成算あつて起立を承諾したかは未だよく聞いて居ない。豈夫必勝の算のある譯もなからうから、一つには勸誘に來た某君の熱誠に動かされたのと又一つには折角築きかけられつゝある無産黨の地盤擁護の犧牲たらんと決心した爲めでもあらうか。それからの數日を彼れは供託金の調達に費した樣だ。その外に千圓足らずの喜捨を集め得たらしい。斯くしていよ／＼二月一日を期し舌戰開始の運びとなつたのである。

赤松君の舌戰開始に私の參加することは、私の口から云ふのもをこがましいが、確に同君の爲め有利なるに相違ない。從て私の參加は同君援助の爲めなるは勿論だが、併し私には當初私に起てと勸めた人達に對つて一應の挨拶をする義務がある。是れまでの段に斷りッ放しで[illegible]身代りに赤松君の立つことを承諾した際はつ[illegible]

それに平常あまりに鄕里には無沙汰勝になつても居る。恰度いゝ機會だと思つて誘はるるまゝ前記の如く一月晦日に上野驛を發つたわけである。

× × × × ×

仙臺に着いた晩早速親戚知人數名の來訪に接した。之等の人達と話して驚いたことは、赤松と云ふ名の一向まだ知られて居らぬことである。偶々名を聞いても彼れは一體何者だと怪む者が多いと云ふ。赤松君の立候補のことは東京の大新聞の地方版にも書いてある——、地方新聞などは分けても多大の同情を寄せて每日の樣に兎や角と書き立てて吳れた。彼れの何者であるか又何の緣故で此處で立候補するに至つたかは、一ト通り新聞に目を通す程の者にはいやでも應でも分つて居るべき筈だ。それが一向分つて居ないらしいのである。そこで私は悲觀した。之ではとても駄目だ、供託金まで沒收されては嘸困るだらうにと、親戚だけに氣の毒にも思つた。從つてまた明日の演說會では一つ大に馬力を掛けずばなるまいなどとも考へたのであつた。

それからモ一つ意外に思つたことは、田舍とはいへ、あれだけの都會であり乍ら、無產黨と聞いて怖れを爲す者の案外に多いと云ふ事實である。私の來る前某君は、私の親戚とか舊友とかの緣故を辿り、事務所を貸して吳れとか立看板を置かして吳れのビラを張らして吳れのと賴んで見たが、嫌ともいはぬが內心大に困つたと云ふ風で、とても氣の毒で無理に賴み切れぬ場合が多かつたと云ふ話だ。警察のそれとなき干涉のあつたのではないかと一應は疑つても見たが、それは全然ないらしい。總じて宮城縣下では、警察の態度は民政黨側に嚴にして無產黨には割合寬大の方針らしいといふ噂であつた。警察側の暗示もなくて斯うまで忌避されると云ふ事實は無產黨候補者に取つて由々しき大事である。私は益々悲觀せざるを得なかつた。

併し私は固より始めから成功を夢想して居たのではない。赤松君は足いまだ一步も宮城縣下に踏み込んだことのない男だ。而も立候補の名乘りはまた頗る突然ではないか。恃む所は一部靑年の熱心なる迎立と私との多少の緣故とのみである。成程私は少しく鄕黨に名を知られて居る。それも良い名か惡い名か分らない。私は元來あまり鄕國と云ふ事に興味を有たず、滅多に國に歸つたこともなく東京に居ても鄕國の會合などには先づ出席せぬのを原則として居る方だ。その私と緣は繫がると云ふことは抑も赤松君に取て何の得になる。彼れの立候補は考へて見れば實は頗る無謀な仕事であつた。私の一親友は、赤松君の出戰が物質的にも精神的にも多大の負擔を私に負はすものと察してか、わざ／＼私の處へ來て切に中止を勸告して吳れた。意味は違ふが、その時私が無理に赤松君の心を引き留めた方が或は親切であつたのかも知れない。併し今となつては退かすわけにも行かぬ。已むなくんば成敗を眼中におかず政治教育のつもりで一つ堂々とやつて見ようと瘦我慢を張つて見た。果ては落選の上はあらためて二三の友人を語らひ、本式の政治教育の目的で落選紀念講演會といふものを各地で開

いて見ようかなどと、空想を描いたりした。
仙臺に着いて當夜の私の氣持を赤裸々にさらけ出して見ると、先づざッと右の様なものであつた。
翌日の朝始めて赤松君を支持する二三初見の青年に遭つた。遭つてまた私の驚いたのは、彼等の意外に眞劍であり且つ鬪志に燃えて骨身を惜まず奔走斡旋してゐることである。彼等は口々に云ふ、何としても我が赤松を出さずば承知しないと。而して彼等はまた皆有權者である。そこで私の心は少しく躍つた、之なら滿更絕望でもないと。よしや當選の榮冠を攫み得ぬまでも、之れ程眞劍なる支持者を多くの青年間に有つと云ふ事それ自身が、既に我黨の一大勝利ではないか。成敗はどうでもいゝ、之等の青年の熱誠に協動して玆處に正しい無產階級運動を釀成させるだけでも、我等に取つて一つの大きな仕事である。斯くて私はわざ／＼こゝまで來たことの空しからざるを喜び、この新に見出した目途に一種の貴い使命を感じつゝ、赤松君の爲にはめでたきこの第一日の政戰に勇ましく踏み出すことが出來たのである。
午後一時からは私の生れ故鄉の古川と云ふ町で政見發表の演說會がある。それに間に合ふ様に仙台を發つた。其間に起つた種々の事は關係がないから一切略する。只一言して置きたいのは、この町は小ブルジヨアの勢力なところで、その一部は政友會に大部分は既に內ヶ崎作三郎君に付いて居ることである。[illegible]
內ヶ崎君からは町民の[illegible]
故鄉だからとて、こゝに赤松君の侵し入るべき餘地は殆んどないのである。只私としては何を差措いても此處で一言の釋明をする必要があつたので、つまり私の爲に第一聲を此町で揚げることになつた樣な譯である。
此町に着いたのは十一時頃であつた。會場の前を通うつたら、午後一時の開會といふのにもう早や續々と入場者がある。大體盛況なるべきに安心し、徐ろに晝食をしたゝめて、さて會場に入つて見る。眞に言葉通り滿場立錐の餘地なき盛況であつた。併し私は考へた、是は皆は赤松君の聽衆でなくして私の聽衆であらうと。自惚れではあるが皆は斯く信ずべき理由もある。演說會は極めて靜肅の裡に終つた。歸りは一般聽衆に交つて入口を出たが、圖らず前を歩行く一團の人の私語が耳に入つた。「偉い方ですなア」、「先生がかい」、「イヤ候補者がよ」、「先生とは私のこと、候補者と云ふのは赤松君を意味するは云ふまでもない。之に依て私は、赤松君の價値の鄉黨人士にも亦少しく認められたるを識つて大に意を强うした。後で聞いたのであるが、聽衆のうちには町內の商賈よりも近在の農民が多かつたと云ふ。近く相當大規模の小作爭議などもあつた爲めか、無產黨候補と云ふことに俄かに特殊の興味を有つた者も少くはないらしいと云ふ。果して然らばこの點また赤松君に取つては多少の有望を期待しうる一理由になる。
[illegible]

仙臺での演說會が馬鹿に盛況であつたら會場が狹い爲めでもあつたが、這入れずに空しく歸つた者が非常に多かつた。辯士も聽衆も一樣に多大の滿足を以て閉會したことは疑ない。都會だけに私との緣故を離れ一個の赤松として彼れに共鳴の意を表するものも可なりあつたと云ふ事だ。

その夜私は直に東京に歸つた。話は之で終るのだが、短い滯在中聞いたり見たりした事のうち、獨り赤松君の場合に限らず、一般無產階級運動に多少の參考になると思ふ點を更に次に二つ三つ書いておく。

× × × × ×

第一に無產派は確に演說に於て他を壓して居る。新聞にも見える通り、各候補者は一般に應援辯士に缺乏して居ると云ふ。田舍などでは遠い處を一日に二箇所も三箇所も掛けるので、候補者の來るまでの繫ぎが大變だ。何とか彼とか御茶を濁すだけでも大仕事である。それに金權候補にはわけても口で用を足す仲間が少く、あつても別に政治上他人に聞かす程の意見を持ち合はしてもゐないので、數ばかり集めても一向に役に立たぬ。某候補者の演說會では四人で一時間が持ち切れず、穴が開いて主催者が出て詫びたと云ふ話を聞いた。應援を賴まれた某老人は人に書いて貰つた原稿を棒讀みして居る中電燈が消えて見苦しい立往生したとか云ふ話も聞いた。成る程之に較べれば、無產派の演說會は辯も立てば內容もあり、就中最も聽衆の魂に訴へる熱がある。他の平凡なる演說會に比して燦然として異彩を放つも無理はない。故に仙臺に限つたことではないが、無產派は到る處で押すな〱の盛況を見てゐると云ふ。

只問題はこれ程盛んな演說の效果が實際の投票の上にどう現れるかの點である。演說會の盛況ばかり當にならぬものはないとは能く言ひ古されたことであるが、普選施行以前は成る程聽衆の多數が有權者でないと云ふ事に說明はついたものの、併し今日は事情が丸で變つて居る。見た所聽衆の中には案外老成人も多い樣だが、孰れにしても大部分が有權者だとすれば、萬一演說の效果が格別投票の上に影響して居ないとしたら、我々はまた大に考へ直さなくてはなるまいと思ふ。

第二に輸入候補と云ふことがさ程邪魔にならぬといふことを發見した。無論土地の人たるに越したことはない。併し土地の人であるのがいゝと云ふのは、名を知られてゐるから好都合だと云ふ丈けで、輸入候補であると云ふことは名を知られるに骨が折れると云ふ以外格別の故障にはならぬ樣である。何を以て斯く云ふかと云ふに、私は汽車の中で百姓らしい數名の人から次の樣な會話を聞いたからである。この人達は矢張り誰かの政權獲得演說會を聽いての歸りらしい。

輸入候補は土地の狀況に通せず爲に地方の利益を圖るに適しないと云ふも、地方の利益とは一體何であるか。皆地主物持ちの利益をはかることではないか。普選になつた今日まで、我々は地主物持ちの利益を考へることを地方の利益だなどと妄信してはいけない。之れからは有志家だの顏役だのに強要されて所謂地方問題に一肌脫ぐと云ふ樣な

政治家に格別警戒することが肝腎だ。之れからは都て地方の事情に疎いと云ふ新人候補の方がいゝかも分らぬ。斯んな人こそ小作爭議でもあつた時には直に飛んで來て我々の味方となつて呉れるのではあるまいか。

以上は會話の大要である。この一事を以て一般を推すことは固より危險だが、ともかく一人でも二人も斯んな考への人が田舍にもあると云ふは賴もしい話ではないか。一葉落ちて天下の秋を知るとやら。殊に斯うした考ほど非常にひろがり易いことを思ふと、私は益々無産派の前途を祝福し、同時にその責任の重大なるを痛感せずには居れないのである。

第三に選擧費用の分擔につき田舍の人達にも相當の理解あるに驚嘆した。選擧は本來候補者から賴み廻つてやるべき事柄ではない、從つて選擧費用なども選擧民の負擔するのが本筋だ。之は私の多年の宿論であるが、併し事實は一片の空論に過ぎず、その幾部分ですらが當節に行はるることあるべしとは始めから考へて居らぬ。慨しいことではあるが、無産派もこの點ではこゝ暫くの間既成政黨と同じ行き方をする外はあるまいと諦めて居た。既成政黨のやり方とは、一切の費用を黨の補助のもとに各候補者が自分で調達し、地方の人達には運動員にも有權者にも全然迷惑を掛けぬを云ふ。地方民の中には之に甘してひそかに私腹を肥そうとするものもあるさうだが、[illegible]
さるる體に[illegible]

き方で赤松君等の到底やり切れぬことは始めから分つて居る。そこで私は當初同君並に二三地方の同志に注意した。金はない、やり出せば誰か出すだらうなどと當にされては困る、中央部の費用は極度に儉約し、各町村の演說會はそれぐの町村の同志の人達に負擔させよと。所が彼等も固よりその積りで居るのだと云ふ。小作爭議で鍛つたのであるが、實際往つて見ると、この用意が割合によく勵行されて居るのに驚いた。一つには無産を標榜することの有り難味かも知れぬが、多少金を出してもこの種類りの候補者を呼んで見ようと云ふ興味は一體どこから出るのであらうか。是も亦頗る吾人の注目を惹く現象でなければならぬ。

× × × ×

以上述ぶる所を要約するに、無産黨候補としての赤松君は、普選以前の有權者からは槪して顧みられない、少くともその上層階級からはてんで問題にされて居ない。この階級の人達の間では、氣の毒だが供託金も助かるまいと云ふのが定論だ。故に先づ舊有權者の投票は殆んど集らぬものと觀ていゝ。所が轉じて新有權者と見らるべき仲間の說をきくと、無論最高點の當選ときめて居る。定員五人の所へ候補者は倍數にも達して居るが、他の候補者などは丸で問題にして居らぬ。之れ丈けを聞くと餘る有望の樣だが、併し斯うした錯覺的意見が新たに[illegible]
は舊有權者を[illegible]
[illegible]

今私の何となく感ずる所を有りの儘に云へば、右述べた様な積極的態度を執る者は新有權者中の多くて一二割の所だらうと思ふ。其外種種の因緣で始めから官權金權の頤使のまゝに行動するにきまつた者も同じく一二割位はあらう。すると他の六七割が矢張り今なほ風馬牛相關せずと嘯く連中と云ふわけになる。果して然らば、この無風帶に惰眠を貪る六七割の人達が實に無産派の成否を決する地位に居るものと謂はなければならぬ。今や之等の人達に向つては既成政黨も無産派も一様に呼び掛けては居る。併し本來の地位からいつても又その持つ政見から云つても、之等階級に對する呼び掛けの效力に至ては、有産者は到底無産者に及ぶものではない。故にこの階級に對する爭奪戰に於て私は無産派の結局壓倒さるることあるべしとは決して思はないが、只其政治的準備に手缺く無産派に果して十分手落なく運動の手を伸ばし得るやは甚だ懸念に堪へない。著しく棄權率を減少するに成功せば、投票の多數は無論無産派に集るだらうが、選擧に方りて俄かに運動したのではこの邊十分に徹底すべきや否や疑はしい。私は寧ろ之を約束なしと觀るのが正當であらうと考へる。從て私は相當に努力した跡を眺め作らも容易に成功の豫想に陶醉することは出來ずに居る。

故に私は赤松君が成功しなかつたとしても別に之を不思議とせぬ。寧ろ私がたつた一日の經驗に依て將來に於ける政治教育運動の好望を思はしめられたことに十分の滿足を覺へる。萬一當選したとしたら、私は今更ながら民間に於ける無産派的良心の醒覺著しきに驚かざるを得ない。[illegible]とは出來ない。この潜勢力がいつ如何にして表面に現れて來るだらうか、今度の選擧の結果が更に大に私共を數へるのであらう（昭和三年二月九日記）

東京府下を舞台として

三輪壽壯

解散の翌々日選擧公布の日逸早く立候補の届出をした東京府第六區松谷與二郎君から選擧事務長の委囑を受けた。宜しいとお引受して事務所から選擧委員まで一通り届出を濟し、早手廻しに學校の借入に先鞭をつけ二十六日南葛飾郡砂町藤倉館に言論戰の火蓋を切つた。昨日（二月八日）まで三十五回約二萬の聽衆を集めた。どの演説會も殆ど滿員の盛況で、就中二月三日南千住の第二瑞光小學校では二千を突破する會衆は熱狂して嵐の如き拍手を送り萬歳を叫び全會場はどよめき渡りました。

演説會の景氣だけでは當落の豫想はつかない。然し少くとも無産政黨は言論より外に訴ふる道はない。ポスターも金が嵩んでさうべたべたと貼れぬし、挨拶狀を無料郵便で出すにも二千圓からの費用がかゝ

つて一度でせいぜいである。無償で朝から晩まで飛びまはつてくれる選擧委員、選擧法の窮窟な解釋から當局の目を光らせる中に傭人とか勞務者とかの名目で然し辨當代にしか當らぬ僅かばかりの報酬で働いてくれる人々、それ等の人々を以て組織さるゝポスター張班やビラ撒班が懸命の努力をしても既成政黨の金を惜まず人手惜まずやるのには敵しない。第一にポスターの數が不足である。そんな風で勢ひ言論戰に主力を集中せざるを得ないことになるのだが、兎も角も演說會は既成政黨のそれとは比較にならぬ反響共鳴をよび起して居る。殆んど惡意の聽衆を見出さない。聽衆は熱心に始から終りまで耳を傾けて居る。演說會の度毎に警官や役場の雇員や又土地の有志に聞いて見ると聽衆の種が無産政黨と既成政黨とは大體違ふといふ人が多い。少くとも私どもの今まで開催した演說會ではひやかし半分の聽衆は見出せたかつた。一度彌次が一人出て聽衆からつまみ出され檢束されたことがあつた位である。

× × ×

雪の降つた六日の晩でさへも高田町第三小學校では二百の聽衆で會場は滿員になつた。應援辯士の一人と候補者の演說は中止を命ぜられた。此不當な中止に斷然抗議し場合によりては官憲の選擧妨害として告發する旨を[illegible]者が述べたとき聽衆は憤激の中に口々にその橫暴を罵つた。勿論我共は即刻嚴重なる抗議を高田警察署に持出でた。言論の干渉は[illegible]一層に[illegible]い[illegible]の[illegible]る辯士も發言を封じられたとき、私も候補者も壇上から不當なる當局の態度を難詰したが、聽衆中の民政黨の一員とやらは控室に來て語つた「昨夜も民政黨の演說會を壓迫したのですが今日は諸君にやりこめられて胸がすいた」と。天下の第一黨たるもの言論の抑壓に對し無産黨程にも抗爭し得ないでは威信地に落ちるじやありませんか。床次竹二郎が二月三日朝日講堂でやつた樣子や廻りくどい微溫的な言論壓迫の抗議では民衆は承知しません。隨つてゆきません。天下はとれません。齒の拔けたライオンや金魚のさしみでは仕方がないが民政黨は民衆に媚びる前に政府と與黨に猛然と挑戰することが天下取の早道だといふことを御存じないと見える。

× × ×

全國婦人同盟の岩內とみえ女史を始め小林たね、大瀧やすなどといふ人が出て女ながら演說會では何といつても婦人辯士の受けがよい。託所と政治の關係とか現在の女子人身賣買に對する抗議から蓄妾稅を新設せよたどと說き來り說き去つて有權の男子をして顏色なからしめ働く人々の胸深く喰ひ入るものがある樣である。全國婦人同盟の政治運動はもとより在來の女權擴張論のやうな或は有り來りの婦人參政權運動の樣な皮相なものではない。それはもとより無産婦人の解放を叫ぶが、無産者の解放と共に婦人を解放せよと叫ぶ[illegible]生活の中から婦人の政治的要求を語る。それが聽衆に感銘を與へ[illegible]るのに[illegible]する[illegible]それでも[illegible]好きない[illegible]一對[illegible]は飽り

いはないことにして居ます。でないと演説會の受けが悪くなるさうですから」女性の立場から男性に對する不平を率直に述べるのでは無かきゝ過ぎて有權者たる男性を尻込みさせるものらしい。

× × ×

演説會場に小學校が解放される様になつたのは無産黨にとつては隨分助かることである。もとより郡部のことであつて町村によつて隨分取扱が違ふ。氣持よく世話をしてくれるところと顋で指圖するところとある。僻見かも知れないが既成政黨の手が廻つてゐるのだなと感じさせられることが屢々ある。尤も役場の吏員なども辯士控室に來てしつかりやつてくれと激勵してくれる向もある。また學校が選擧に解放さるゝ餘波かも知れぬが、南千住の或小學校の教員が小學校の兒童に松谷はいけない男で、、さん(、、、、こ)はえらい人だといふことを吹き込んで居るといふ話だが事實なりとすれば看過出來ない。

× × ×

演説會の度數を多くやりたいのは山々だが、二月一日次の様な失策をやつたから爾後回數を多くすることを見合せた。それは一晩四回、而も南と北にかけ離れた處で演説會を開いた。候補者は順を追ふて二つは濟して來たが第三、第四の會場は意地の悪い中止なんかゞあつて、候補者の來る迄辯士がつゞかなくて會を閉づるの已むなきに至つて、聽衆は口々に不平を漏らして歸るのを聞いた。候補者が來ないでは困るといふ聽衆の候補者に接したい欲求は、そして候補者の政見をよく聞いて是非を判斷し様といふ考へは普選になつて始めて見出し得る特徴であるが、そこに言論戰一本槍で行く者の强味があると思ふにつけ失敗はしたものゝ氣强く感ずる。

聽衆が多く集れば氣勢はあがるが、はつきり聽く人の胸を攫むことがむづかしい。少數であれば氣勢を添へる點では物足らなくはあるが、集つた人の心を捉へることが出來る。大きな會場で氣勢をあげ、小さな會場では聽衆場外にあふるゝ位で而も會衆にはしんみり徹底する様な話をする。これを了まで組合せて行くのが言論戰としての上々であらうと思ふ。

× × ×

兎角七面倒な選擧法にしばられてやれビラがいけないポスターを多く張つたそれは氣勢を張る行爲だとかやかましい干渉を受けたり、或は一錢五厘のハガキ一枚買ふにも選擧事務員自ら支出するか承諾簿に印をつくとか繁雜な事務をとつて居ります私としては、演説會で、呼はりしない程度で既成政黨のこき卸しをやる位がせめてもの慰安でありますが、それすらも際が潰れて終までつゞくかどうかを疑つて居ます。殘すところ十日選擧戰は白熱化しました。雪とけの中を長ゴム靴でビラ撒きポスター張りと寸時も休まず働く無産政黨の選擧運動の人々を決してお祭騒ぎだなどと批評させたくはない。私はそれを偉大な未來の建設への尊い努力であると考へます。無産黨の選擧戰は唯一つ意氣である。それで勝敗が決る。その意氣な唯一の賴みに決勝點まで頑つしぐらに驅けつゞける迄です。(二月九日)

流刑から流刑のトロツキー

荒川實藏

昨年末聯邦共産黨から除名された反幹部派の指導者數十名は今度更らにヨーロッパ・ロシア及びシベリアの片田舍に送られた。その流刑者中には、勿論、トロツキーが含まれてをり、彼は一月十六日までにモスクヴアを去つて支那國境に近き露領トルキスタン地方に赴くこととなり、その道中において卒倒したとの報がある。

その後の確實な報道はハツキリ知られてゐないが、ジノヴイエフ、カメネフ一派は屈服したけれども、反幹部運動の元祖たるトロツキー氏等少數の一派は頑として膝を屈せず依然として反幹部運動を續けてゐた。私は今玆にトロツキー等の反幹部運動の近況や、その將來について述べやうとするのではなく、彼等の議論を究明しやうと欲するものでもない。それはスターリン、ブハーリン其他の現幹部派によつて詳細に曝露され、それらはまた我國にも紹介されてゐるから、讀者はそれによつてロシア共産黨内の論爭の眞相を知ることができやう。

私はトロツキー一派の主張と、彼等の執つてゐる態度には、斷乎として反對し、毫も共鳴點を見出し得ない。けれども資本主義の最後の段階たる帝國主義時代に於いて所謂血みどろの鬪爭場裡で極めて勇敢に鬪ひ、永年ツアーの迫害の下に苦しんできた勞農の巨頭トロツキーが、今支那國境近くの片田舍に流刑されるに至つたとの報には我々の心を強く打ちそぞろに暗い境地さへ現出せしめる。

我々は、勿論、英雄崇拜者であつてはならない。また我々は歷史の流れに於ける、一個人の演ずる役割を盲目的に過大評價すべきではない。だが、私をしてかの偉大なるロシア領土に於いて、更にその本國を脫れて、[illegible]として他國を放浪し、同じくそれの諸國の支配階級の迫害と彈壓とに屈せず、常に自由のために、被壓迫大衆解放戰の先頭に立つて戰つてきた精力絶倫の鬪士トロツキーの面影をこの際スケツチせしめよ。流刑から流刑へと彼の嘗めてきた革命家としての多大の苦難は、他の多くの革命家のそれと同じく、ロシア革命を飾るものであらう。

トロツキーは一八七九年の九月二十六日に南露なるヘールソン縣の一寒村ヤノフカに生れた。彼の家族は、その地に開墾のため移住した農家であつた。九歳に至るまで生家に居住してゐたが、その後オデッサの實業學校に入學したが、七學年に進級する際、ニコラエフ市に轉校した。そしてこの市に於いて始めて革命思想に染まるに至つた。學校を終るや彼は同市の勞働者の仲間に投じ、且南露勞働者同盟にも加入した。

その頃ロシアに於ける勞働者運動は大衆的となり、擴大化されてきたので、ツアー政府の彈壓の手は殆んどあらゆる方面にふりかゝつてきた。そこでトロツキーも一八九八

年一月二十八日に逮捕され、牢獄の苦しみを始めて味つたのであつた。最初は、ニコラエフ監獄に繋がれ、次にヘルソン監獄に移され更に約二ケ年間オデッサ監獄に幽閉された。裁判確定後、モスクヴア、イルクツク、アレクサンドロフらの諸監獄に轉送され、最期に流刑に處せられたのであつた。流刑地は東部シベリアのウステイ・クーツ村であつた。

だが、トロツキーは一九〇二年の初めに流刑地に到着するや否や、彼は直ちに逃走したのであつた。讀者諸君、二十六年前に血氣横溢せる二十三四の若き革命家トロツキーが、寒風肌を劈き、咫尺も辨ぜぬ大吹雪に襲はれつゝ、幾百哩も、幾千哩も擴がる人跡絶無の原野を逃走せる彼の風姿を想起し給へ。しかして心の奥底には絶對專制政治に對する心からの憎惡と前途に對する希望に燃えながら、官憲の追及に心を配つてゐる時の彼の心持を併せて考へて見給へ。

流刑地を逃れた彼は、ロシア國外に落延びた。彼の活動舞臺はこゝに於いて一變した。彼はウインナに於いてヴイクトール・アドラー及びその令息フリードリッヒ・アドラーとも接近し、またロシアの革命運動上に重大な役割を果したイスクラ紙にも筆を執つてゐた。それ以外に、彼はロシアの學生並に勞働者の居住地で講演しながら、ヨーロッパの諸都市を巡り回つたのである。

彼がヨーロッパの諸都市を驅け廻つてゐるうちにロシア本國の情勢は急轉した。一九〇四年に火蓋を切られた日露戰爭は、遂にロシアの第一革命を誘起せしめる原因となつた。一九一七年十一月のプロレタリア革命の序曲たる一九〇五年の第一革命に於いて彼トロツキーは、レーニングラード勞働者代表ソヴエットの執行委員であり、十一月二十六日にソヴエット委員長フルスタレフ・ノサリが官憲によつて逮捕された後に於いて、トロツキーがソヴエット委員長に選擧され、不屈不撓の鬪爭を續けた。その當時政府の反動的彈壓はいよ／＼峻烈となつてきたので、ペトログラード・勞働者ソヴエットは十二月二日にかの有名なる「財政宣言」を發表して、より猛烈に政府に抗爭するに至つた。

しかして、該宣言書發表の翌日、即ち、十二月三日にトロツキーはその全執行委員等と共に逮捕されたのであつた。トロツキーの名著一九〇五年は、この革命の經驗を蒐集せるものであつて、該書中にこの革命に關する豐富な資料を發見し得る。

さて、逮捕されたトロツキーはペトログラード監獄に一ケ年程過したが、裁判の結果、終身流刑に處せられ、一九〇七年一月三日にシベリアのオブドルスクに送られた。この流刑地は最初のシベリア流刑と同じく、寒暖計が零下數十度を上下してゐるシベリアの奥でありしかも眞冬だつたのだ。その途上ではトロツキー及びその一行を監視するために、一少佐の指揮の下に十人の衞兵が同行してゐたため、警戒嚴を極め、途中での通信は禁じられて居たにも拘らず、到る處の停車場で、彼等は勞働者たちから歡迎されたのであつた。彼は當時の日誌に斯う述べて居る、「シベリアに於ける總てのものが以前のまゝに存在してゐる、少くとも數年前と少しも變つて居ない。同時にまた總てのものが變つたやうにも思はれる。シベリアの兵士たちは全く變つて了つた。單に兵士たちだけではない。農夫も同じことだ。彼等は政治問題を論ずる。云

今」と。

シベリヤの列車は遲々としか進まない。殊に酷寒の冬のことだ。それでも列車がシベリアの奥深く進行して行くにつれて、日一日と、寒氣と寂莫とが増しく行く。トロツキーは水も漏さぬ嚴重な警戒裡にあつて、再び逃亡のプランをたてつゝあつたのだ。

そして、トロツキーは護送の途中にベリヨゾフから逃走したのである。彼は追跡の危險を慮り、わざと橇の通ずる街道を避けて、數百哩の荒野を馴鹿の引張る橇で疾走したのであつた。第二の逃走にも成功した。だが、それは並大抵のことではなかつた。彼の心は幾度か緊張したり、絶望の淵をさまよふのであつた。あるときは吹きまくる雪になやまされ、あるときは茂つた長い森の中を滑り走つたりしたのである。だが、樺の木や、樅の木や、巨大な落葉松が立ち並んでゐる靜寂な森林の間を流れてゐる河は、彼の眼を樂しましたであらう。單調な森の中にも、無限の變化が味はれたであらう。首尾よく逃げ延びた彼は、一九〇七年の春の頃、漸やくロシアの國境を越えて森林に走り、ロンドンで開催された大會に出席せんがために、當地へやつてきた。

其後彼はオーストリヤのウインナに居を定め、ドイツ社會民主黨の左翼と絶えず協力し屢々ベルリンへ足を運んだこともある。而して、世界大戰開始前までも、彼は轉々としてヨーロッパ諸國を驅けめぐり、諸所に開かれた無產者の國際大會に出席し、その間に從來よりも更に徹底した國際主義者になつてゐた。

一九一四年八月に歐洲大戰は勃發した。そこで彼は猛烈に帝國主義戰爭反對の宣傳をなしたが、これがためにオーストリア及び獨逸から逃亡せざるを得なくなつた。殊にドイツの裁判所はトロツキーに對して召喚狀を發したが、彼はそれに應じなかつたので、缺席裁判で禁錮を言渡された。

其後トロツキーはロシアの亡命者によつて巴里で發行されてゐた社會主義新聞「我々の言葉」(ナーシ・スロウオ)を支持し、これがために、巴里に居を移すに至つた。そして當時世界の耳目を聳動せしめた、かのチンメルワルト及びキンタールの兩會議に出席して、大いに活躍したのである。

一九一六年九月の末に、フランス政府は彼に國外退去を命じたのである。當時フランス政府内には、ゲード其他の社會黨員が入閣してゐたので、トロツキーは、ゲードに宛てゝ抗議の覺書を送つた。その最後の一句に次のやうに述べてゐる。「……私は貴下によつて追放されるに當つて、我々の勝利の確信を抱いてフランスを去るものである。……」と。

トロツキーはスペインに渡つた。だがマドリッドに着くや否や、不逞煽動家として逮捕され、暫らく監獄に拘禁せられた後、同年末にアメリカに送られたのである。

私は今當時に於けるトロツキーの日誌を摘記しやう。「一九一七年一月一日、船客は皆お互に新年お目出度うの挨拶を交はし、誰も彼もが大洋彼方にある新らしい世界を考へて默想に耽つてゐる……」「一九一七年一月一三日日曜、紐育に到着す。午前三時に目が醒む。直ぐ起きる。暗黑だ。寒い。風あり、雨さへ交つてゐる。……綠色の海水と灰色の空。船は再び動く。岸には盛お立ちこめてゐる。冬の木立と巻の建物。一切のものが巨大に見え

[illegible]

雇はれてゐる』
　三月革命の勃發まで彼は紐育で働いてゐた。若しトロツキーが片山氏と紐育で逢つたとするなら、恐らくこの頃のことであらう。三月革命勃發するや、彼は急いで歸國の途に就いたが、英國の官憲のためにカナダで逮捕されたのである。一ケ月間の抑留は、當時の彼の心をいかに焦立たしたであらう。だがペトログラード勞兵代表ソヴエットの要求があつたので、英國官憲の手から釋放され、ロンドン及びストックホルムを經由して、五月十七日にペトログラードに到着したのである。

　いよ／＼トロツキーの活劇舞臺は開かれた。七月事件の後にケレンスキー政府によつて、逮捕されたが、ペトログラードの勞働者達の示威運動が效を奏して、約二週間後に釋放され、十一月革命には、文字通りに寢食を忘れて活動した。

　世界史上に於いて特筆すべき十一月革命の成就された日の、ペトログラード・ソヴエット大會の開會の辭に、彼はから述べた『軍事革命委員會の名の下に臨時政府は最早存在せぬことを宣言する。各大臣は捕縛された云々』と。ソヴエット政權樹立されて、既に十年、その基礎いよ／＼堅固となり、勞農大衆の壓倒的多數が歡呼の聲で十周年記念祭を祝つてゐるとき、黨より除名され、今また遠く支那國境への流刑を傳へられてゐる。もとより、今度の反幹部派指導者らの流刑は、ツアー政府の下に於けるが如き流刑ではなく、彼等が自己の過失を認めて、正しいボルシェヴイキ的訓練に屈服させんがための流刑であらう。

　だがトロツキーは果して自己の過失を認めるだらうか？　本年一月の中旬に彼が流刑地指してモスコーを出發したとき、彼を見送るトロツキー一派の學生及び勞働者達に向つて彼は伺ほこの一トロツキーが何だ、我々は我々の勝利を信ずるものだと激勵したとの記事さへ、ある英字新聞に掲載されてゐる。

　トロツキーは、勿論、項羽やナポレオンの如き古代の又はブルジョア革命の英雄豪傑でなく、自分自身もさうは思つては居ないだらうが、自己の力を過信する英雄主義的態度がないでもない。それは兎もあれ、流刑から流刑へと變轉極まりない生活を嘗めてきた彼の過去は、一種の悲壯味を帶びてゐる。

無産婦人團體概觀

野坂龍子

「無産者の解放なくしては婦人の解放なく、無産者の勝利なくしては、また婦人の勝利もい。』又、『大衆を獲得するには婦人を獲得しなければならぬ。なぜならば、資本主義の下においては人類の半分は、二重に壓伏されてゐるからである。』と、婦人解放の父レニンは云つてゐる。

我國に於ける婦人の政治的自由獲得のための鬪爭も、亦無産階級解放運動の一部としてのみ意義があり、又可能である。この見方、この立場こそ我等無産階級婦人運動に志すものの、常に忘れてはならない點であり、又、ブルジョア婦人の婦人參政權獲得運動、卽ち女權獲得運動と根本的に相違するところである。

左に、最近婦選獲得同盟、並に、有名なるブルジョア婦人達によつて、作られた『普選達成婦人委員會』なるものの決議を採錄して、彼等のそれと、我等のそれとが如何に相違せるかをはつきりとさせたいと思ふ。

『日本國民は、今や總選擧のくわ中にあるが我等婦人は、この劃時代的第一次普選に加はることが出來ない。この事は實に遺憾の極であるが、國民の一人として婦人が今次の選擧に對して最善をつくし、婦選の實現を速かならしむべきは言をまたない。ここに我等同志相計り、有權者に對しては、棄權買收その他の不正行爲に左右さるゝことなく、眞の國民の代表たるべき人物に、その淸き一票を投ぜしむべく、左の如き實行運動を行ひもつて目的の貫徹を期す。

一、全國婦人團體の協力を求め、各地にて決議の主旨の實行に努むること。

三、棄權防止、その他の注意事項を印刷したるビラを全國の婦人團體に送附すると共に東京市内に於いては街頭において配布す。

三、同主旨のポスター配布。

四、場合によつては婦選達成デーを催し、街頭宣傳をなすこと。』

○最近數年間における我國の無産階級運動は著しき發展をとげ、幾多の困難をりとも普選法の制定となり、勞働者農民の共同戰線後に、やうやくにして、勞働農民黨が結成された。間もな政黨として、勞働總同盟其他幹部のく、この共同戰線黨は、中間派的日本勞脫退により、更に社會民衆黨、日本勞農黨、右翼農民主義的日本農民黨の三無産政黨の創立を見るに至つた。かくして、とにもかくにも、大衆の大なる要望を擔つて無産政黨は成立したが、我國の法律は社會的にも經濟的にも重要なる地位を占めてゐる婦人、殊に勞働婦人農村婦人に對して、選擧權被選擧權は勿論、政治的結社への加入をすら禁じてゐる。ここにおいて、婦人の政治的自由獲得のための戰に、その先頭となつて鬪爭を續けてゐる勞農諸政黨への、勞働者農民婦人大衆の動員機關としての組織は絶對必要なるものとなる。この目的のために、昭和二年七月三日先づ關東婦人同盟所謂勞農黨系(全國的組織の一過程として)の創立を見、同十月二日には全國婦人同盟(日勞黨系)の成立となる、十二月には社會婦人同盟(社民黨系)の創立が計劃された。

これらの三つの婦人同盟は、ほぼその目的務を同じうするものであるにかゝはらず現在無産階級政治戰線の分裂が、勞働者にこの無産

人團體の分立となつたのである。以下、これらの各團體の宣言綱領政策（主張）等によりてその概觀をみよう。

○

關東婦人同盟は、日本勞働組合評議會、關東俸給生活者組合、自治會等の婦人組合員、並に日本農民組合會婦人部員等を中心となし、それに普大衆教育同盟の婦人部員その他の左翼的知識階級婦人達によつて構成されてをり、主として勞働農民黨の指導下に成立したものであつた。その創立宣言は婦人を壓迫し、搾取し、隷屬せしめるところのものは、勞働者農民をも壓迫搾取してゐるおなじ專制支配勢力である、その戰では、無產階級共同の敵に對して、一切の壓迫されてゐる階級の政治的自由獲得のために勇敢に鬪爭する政黨の旗の下に進められるべきであるを云ひ、その當面の要求は參政權の獲得、政黨加入の自由、勞働婦人保護法の制定、寄宿舍制度の撤廢、同一勞働に對する同一賃銀制の獲得等にありと。

この宣言にもとづき、創立以來、勞働婦人保護法の獲得のために、或は婦人勞働者に對する差別的待遇撤廢のために、爭議、不當解雇、工場閉鎖等に對しては勿論あらゆる機會を捉へて鬪爭をつゞけてゐる。又、昨秋の府縣會議員選擧に際しても、無產政黨候補者の應援と同時にこの機會を利用して、その演壇から、或は茶話會懇談會等を開いて、婦人大衆を政治的自由獲得への戰に動員し、參加させるために大いなる努力がなされた。その結果、各地に於ける婦人大衆の政治的自覺を刺戟し、殆ど全國に亘つて（一道三府二十餘縣）各地方婦人同盟準備會が作られ、同年十二月十四日には、婦人同盟全國組織準備委員會が開かれるに至つた。

元來、關東婦人同盟は、絕えざる官憲の暴壓に抗しつゝ、婦人大衆の要求貫徹のために勞農黨の指導の下に勇敢なる鬪爭をつゞけ來つたにもかゝはらず、充分勞働婦人、農村婦人の大衆を動員し、その鬪爭に參加させることが出來なかつた。この苦い經驗に基き、この全國組織準備委員會が決議した宣言は、確かにこの同盟のために、正しい一步の進出であることは疑ひない。卽ち

『……いやしくも、政治的自由を要求する婦人團體との共同戰線を張り、更らに勞働組合、農民組合婦人部との密接なる連絡の下に、婦人の政治的、社會的、經濟的隸屬よりの解放のために徹底的に戰ふ。

『彈壓の砲火よ來れ、われらは堅く信ず。婦人の參加なくして民衆の政治的解放はありえず、また政治的自由の獲得なくして婦人の解放はありえざることを』と述べてゐる。この宣言の主旨は、更に最近、日本勞働組合評議會常任委員會において決定された『勞働婦人に對する活動方針』中婦人同盟と組合との關係の項にあらはされた、左記の如き評議會の新しい戰術と相俟つて、更に力づよい無產婦人運動の發展を來すものを信ずる。卽ち

『婦人勞働者の政治的差別待遇に對する鬪爭は、全然組合の關係すべき問題でなく、一切これは婦人同盟に委かしておけばよいといふ考へが、組合の幹部、活動的な婦人組合員中にもある。更に甚だしきに至つては、經濟的要求に基く鬪爭すら「婦人の問題だから」との理由で、婦人同盟がやればよいといつた調子で、組合が積極的にかゝる鬪爭を激發し、指導しやうとせぬ傾向すらある。（中略）男子に比較して婦人が政治的に差別されてゐることは、婦人勞働者が男子とおなじように、階級鬪爭に、參加することを妨げてゐること明白なる事實である以上、組合は當然かゝる鬪爭に無關心であるわけにはゆかぬ。組合は婦人勞働者大衆を、愈々多く政治的鬪爭に動員し、參加させるためにも、（卽ち婦人同盟の鬪爭をより力づよく展開させるためにも）經

済鬪爭により多くの婦人勞働者を参加せしむるべく努力することが必要であり、又、組合に組織することが多ければ多いほど、政治的鬪爭も亦力強く戰はれるのである。』と。

又、この全國組織準備委員會に於いて、全被壓迫大衆の强き要望である政治戰線の統一卽ち無產政黨合同に關する決議がなされ、その合同實現のために、積極的努力をなすことを誓つた。

又、今次の總選擧（最初の普選—その實は從來の制限選擧と何等變りなき）に對しては、左の如く聲明し、その目的のために休みなき鬪爭を續けてゐる。

『（前略）しかし、私達婦人には、依然として政治への參與の權利は阻まれてゐる。議員として、國會に出ることはおろか、婦人の眞の利益を代表してくれる勞農政黨の候補者を國會へ送り出すための選擧權さへ與へられてゐないのである。婦人の政治的自覺をとどめ、奴隷として、いつまでもその階級利益のために蓄さうとする支配階級の意圖がはつきりと表はれてゐるではないか。

一婦人の政治的社會的、經濟的隷屬よりの解放のために常に婦人大衆の先頭に立つて、戰つて來た我が婦人同盟は、この時婦人の敵である專制支配に對して、[illegible]の政治的自由

獲得の戰を更に強力に戰はなければならない。

『そのため、婦人の地位の向上、解放のために戰つてゐるあらゆる婦人團體と協力して戰ひ、又、婦人大衆の利益を代表して戰ひぬいてくれる勞農政黨を積極的に支持應援して選擧戰を充分に戰はれる樣努力するものである。婦人同盟全國組織準備委員會』

しかして中心的なスローガンとしては、

一、滿十八才以上の婦人に選擧權を與へよ！
一、滿十八才以上の婦人に被選擧權を與へよ！
一、婦人に政黨加入の自由を與へよ！
一、婦人に政治的自由を與へよ！

の四つを揭げてゐる。

○

次に、全國婦人同盟は、日本勞働農民黨指導の下に、日本勞働組合同盟等に所屬する婦人組合員を中心とし、職業婦人、女敎員、看護婦並に無產階級家庭婦人等をもつて構成されてゐる。その宣言（草案）に

『親愛なる全國の同志姉妹よ！

今や我等は深き眠りより覺めなければならぬ。我等が過去數千年の歷史は、如何に慘苦と忍從とに充てるかをみよ！幾多の姉妹は[illegible]

た。幾多の姉妹は工場の塵埃の中に又、鑛山の地底に、自ら生命を削りつゝある。（中略）

『往時の女性は如何に榮えある勳に輝き尊敬をうけてゐたか。しかもをやみなき歷史の展開は、女性の享受せるこれらの一切の權利を奪ひ、かくて女性の苦難ははじめられた』と說き、更に一轉して、

『だが姉妹よ！歷史は再び我等に春を約束した。見よ滔々たる資本主義文明は、我等女性をもせまき家庭よりひき立てゝ、工場に鑛山に、會社に銀行に、重要なる職務を果しつゝあり、今や文明は婦人なくして成立しない。』と婦人の重要なる役割を强調し、しかも、現在の如き屈辱は、吾等の一刻も耐えざるところであつて、吾等は吾等より奪はれたる凡ての自由を奪ひ返さなければならない。』と說き、最後に

『親愛なる全國の同志姉妹よ！自由は決して與へらるべきものではない。それは奪返すべきものである。われ等力弱しといへども、團結の自由がある。しつかりと手を握らうではないか。そして共に進み鬪はう再び輝くわれらの日のために。』と。

この主張（要求）とするところの項目は、大[illegible]

その方法、手段においては、綱領に明記されてゐる如く、『我等の國情に即し、婦人の特殊なる地位に應じて、且つ着實なる手段によつて』目的を遂行せんとする。勿論、日本勞農黨の指導精神によつて、またその動員機關として運動を展開しつゝあるのであるが、過日起された婦人參政權獲得、深夜業、坑内勞働禁止等のための要求請願運動に、參加の誘を受けた婦人團體中、關東婦人同盟では、心からなる協同を申入れたのに對して、參加團體が他になかつたとの、單なるその理由によつて、關東婦人同盟の應援を拒絶されたことは、我等無産婦人のために、遺憾に思ふところである。

又、目下の總選擧に際しても、この機會に婦人大衆の政治的意識をたかめ、政治的自由獲得のため、その不平、不滿を激發し、それを闘爭へ導くことこそ、まづ婦人同盟としてなされなければならないことであるにかゝはらず、ある幹部の演説に[illegible]言葉の中に「よい機會があれば、婦人參政權の問題にも觸れたいと思つてゐる」(東京朝日新聞)といふ意味が述べられてゐるのは(或は、新聞の誤聞かもしれないが)この婦人同盟の指導者のたへが、單に、日本勞働總同盟[illegible]ものではないかと、[illegible]婦人同盟のために惜しむ所以である。

○

社會婦人同盟は、昨年十二月に創立されるべく計劃されたのみで、未だ完成されたものでなく、詳細にその内容性質を知ることが出來ないが、前二者と同じく、無産政黨の一つである社會民衆黨の指導のもとにあり、主として知識階級婦人達によつて、指導されてゐる。

その宣言(草案)は、

吾等女性の生活が、從來の誤れる一切の不合理なる制度のために、その多くのものを奪はれてゐたことの本質をのべ、家庭も亦勞働闘爭の戰闘たることを認め「六十萬民衆の半ばを占むる女性に不備なる政治法律經濟教育道德の缺陷を正し、眞の男女平等の社會を建設[illegible]に、茲に同志を糾合して[illegible]並に資本家とに戰を宣する所以である」と結んでゐる。その極めて闘爭的ならざる目標が資本家と並べて、世の[illegible]なかけられたる點は、一種の女權擴張運動に陷する危險を多分に有するものと[illegible]。その綱領として掲げるものは、略と前二者と同じく、教良に禁酒法の制定を加へ、又、[illegible]

講習會の開催等を擧げた點は、この婦人同盟の性質が、前二者とは傾向を異にして、無産階級婦人の政治闘爭への動員を目的といふよりは、小ブルジョア的社會事業團體に近いものであると云ひ得る。

この社會婦人同盟は、[illegible]にあるだけに、具體的運動の展開はみることができない、が、今次の選擧戰に對しては、社會民衆黨の[illegible]候補者のために婦人[illegible]支持に努めてゐる。

○

以上によつて、[illegible]

無產階級陣營に於ける左翼の二對立

—『マルクス主義＝無產者新聞』と『勞農』—

小峰直一

一 左翼の二對立

無產政黨結成以來の無產階級の陣營は文字通りの四分五裂と混亂であつた。政黨は勞働農民黨、日本勞農黨、社會民衆黨、日本農民黨の所謂る左翼、中間、右翼、右翼農民の四全國政黨及び數多の地方政黨に分立對峙し、勞働組合及び農民組合等の經濟團體も、此の政黨の對立に相應した對立團體に分裂した。そして此等の諸團體は、有ゆる問題に、有ゆる戰線に於いて對立鬪爭を續けてゐた。

而してこの對立鬪爭を、最も組織的に、大規模に、且つ成功的に組織したものは、最左翼なる勞働農民黨であつた。他の諸黨は受動的に防禦的に鬪爭してゐた。その理由は、勞働農民黨及び同系統の諸經濟團體には、日本の社會運動の優秀な指導者を糾集せしめてゐたが故に、その攻擊力が他黨を壓してゐたのみではなく、日本の左翼指導勢力[illegible]勞働農民黨及び同系統諸團體の指導部を形成し、それ等の內部に全國的組織網を持つて、勞働農民黨の全組織活動を指揮してゐたからである。他の諸黨は黨としこのルーズな組織を有するのみで、勞農黨の如き、中心指導組織を有しなかつたが故に、有ゆる對立鬪爭に受動的たらざるを得なかつた。

この勞働農民黨及び同系統の經濟團體なる評議會、日本農民組合の公然と組織した對立鬪爭に、一つの理論と目標と計劃とを與へてアジテートしたものが、この左翼指導勢力の展開した、かの理論鬪爭である。過去一年有半に亘る雜誌『マルクス主義』『無產者新聞』『勞働者』『農民運動』『インタナショナル』『政治批判』を中心とし『勞働農民新聞』『勞働新聞』『土地と自由』等の團體機關紙を動員して組織された理論鬪爭の熾烈にして明確なる鬪爭力と攻擊力の前には、如何なるこの指導勢力圈外の左翼理論家も、[illegible]

等の人々及び團體は、只管、防禦につとめ、時折り力弱く投げ返へすか、或は努めて對立を回避することを餘儀なくされたかの如くであつた。

けれども、金融恐慌後の支配階級の攻勢は無産階級を有ゆる戰線に於いて重壓した。勞働戰線に於いては産業の合理化の名による賃銀の引下げと時間の延長、工場閉鎖と解雇。農民戰線に於いては立入禁止と立毛差押。しかもこれに反抗せんとする勞農大衆の上に暴壓の鐵槌を打ちをろす田中反動內閣。かゝる狀態は漸次に大衆をして、戰線の統一を想はしめた。戰線統一の叫びは、單にかゝる戰を有効に闘ふべく組織勞農大衆によつて叫ばれたのみでなく、過ぐる府縣會選擧戰に於ける對立闘爭による無産諸黨の既成政黨に對する慘敗によつて、普選を覺醒しつゝある未組織一般大衆によつて、更らに無條件的に理論を拔きにして要求された。かくて戰線統一の聲は無産大衆の一つの輿論となつた。かくて昨年末には勞農黨の合同提唱、日勞黨の統一提議、各黨大會に於ける合同決議案の討議、更らに日本勞農黨と日本農民黨との合同公約、四地方政黨と日勞黨との合同公約となつた。

折しも、左翼指導勢力は、第三インタナショナルより、對立闘爭の理論――所謂福本イズム――を批判され、戰線統一をなすべきとの新テーゼを受取つた。一方には以上の如き吾國の情勢により、他方に於いてはこの新テーゼにより、左翼指導勢力は、如何なる犧牲を拂つても、從來の方針を、大轉換せねばならなくなつた。その轉換は殆ど百八十度に近い。即ち對立闘爭より共同闘爭へ、分離運動より合同運動へ。しかしこの指導勢力は過去一年有半の對立闘爭を有力に、成功的に、計劃的に組織し指導して來ただけに、今や瞬時にして急角度を描いて方向轉換を行はんとせんとするとき、多くの弱點を露出し、また『マルクス主義』『無産者新聞』は他より攻撃さるべき多くの理論的性質を有せざるを得ない。

かゝる形勢に面するや日本勞農黨は勞働農民黨幹部に對し、舊來の守勢を攻勢に轉じて『宗派的分裂主義――福本主義の打倒』の旗印をかゝげて進出を開始した。しかしこれは舊來の對立闘爭の一發展である。

しかしこゝに擡頭せる重要なる一勢力は勞働農民黨內部に於ける中心指導勢力に對する反對要素の結合である。即ち勞働農民黨內部には『マルクス主義』『無産者新聞』を中心とする指導勢力に對立して、雜誌『大衆』を中心とする一勢力があり、更らに外部より勞働農民黨を支持しつゝあつた堺氏山川氏の影響下にあつた一勢力があつた。この三つの指導勢力が全體としての勞働農民黨の指導勢力を形成してゐたが、第二、第三のものは全く組織を缺除してゐたので、過去一年有半は、『マルクス主義』――『無産者新聞』の指導勢力と、さゝやかな理論的對立を有しつゝも、努めて實踐的の對立をさけつゝ、むしろ前者に追隨しつゝ、勞働農民黨の活動に協力し、以つて他團體に對立してゐた。しかるに今や『マルクス主義――無産者新聞』の指導勢力が、急

轉換を行はんとして、しかも敢行し得ざる醜態を暴露したとき、『大衆』及び山川、堺氏の指導勢力は、猪俣氏等の有力者を加へて、雜誌『勞農』に結合した。この『勞農』を中心とする勢力は、『マルクス主義――無產者新聞』の指導勢力の如く、勞農黨及び同系統諸團體內部の結社的組織綱を有しないが、ルーズなフラクション組織を以つて勞農黨、評議會、日本農民組合の所謂反福本主義要素を糾合して勞農黨內部に將來の中心指導勢力に對して一大指導勢力を形成しつゝある。そして同時にこの勢力は、今や福本主義に攻擊を集中して進出しつゝある日勞黨の大衆を間接的支援力として有してゐる。

勞働農民黨に於けるこの二大指導勢力の對立――『マルクス主義＝無產者新聞』と『勞農』の對立＝名乘りをあげてる人で云へば、福本和夫、佐野文夫、是枝恭二、淺野晃、佐野學、德田球一、志賀義雄、村山藤四郎、長尾有、渡邊政之輔、鍋山貞親、杉浦啓一、水野成夫、中野尙夫、難波英夫、岡崎一夫等の諸氏と、堺利彥、山川均、猪俣津南雄、荒畑寒村、鈴木茂三郎、大森義太郎、根津友次郎、鄉田要助、本田重美、米村貞文郎、中村新作、北浦千太郎、淸野季吉、福島一郞、中澤鶴藏の諸氏との對立。

この左翼の二對立間の對立的理論鬪爭は、『勞農』が僅かに二號を出したのみであるが旣に火花を散らしてゐる。理論鬪爭の中心は現段階[illegible]の分離と結合と戰術の問題、指導勢力の問題、[illegible]の問題、[illegible]『勞農』の攻擊に對して[illegible]ルクス主義＝無產者新聞』より未だ明確なる對立[illegible]を開いてゐないが、同派も既往の指導原理なる福本主義に對しては、その[illegible]を認めてゐるが、たゞ勞働農民黨の一切の組織を活動せしめてゐる原動力なる組織體の故に、その淸算と轉換に甚だしく苦心してゐるが如くである。

はしがきが餘り長くなつたが、本稿の目的はこの『無產階級陣營に於ける左翼の二對立』の歷史的發展と、その對立理論の要點を紹介するにある。筆者は無產政黨の一ランク・エンド・ファイルではあるが、この對立の圏外にある第三者であり、且つ本誌の編輯者から『絕對に批判をさけた興味深い讀物』といふ依命通告に從つて、凡てを平面的に記述して見る。日本の勞働運動の發展とその指導勢力の變轉と理論鬪爭の展開を鳥瞰的に記述してゆく中に、この左翼の二對立――勞農黨內の指導勢力の二對立が自ら描き出されるであらう。

二　社會主義同盟より勞働農民黨の結黨まで

左翼指導勢力の變遷と發達の歷史を描くためには、筆を大正九年の日本社會主義同盟の結成まで遡らせねばならぬ。

明治三十年代より起つた平民社を中心とする無產者運動は、未だ無產階級が階級的成熟を遂げてゐなかつたので、大衆を背後に有せぬ志士的運動であつた。故に明治四十一年の[illegible]、[illegible]にもかゝはらず[illegible]、[illegible]年の大逆事件以後の[illegible]

れて了つた。今日の勞働運動の直接の起原は大正年代である。大正の時代に入るに從つて日本の資本主義も成熟し、それに相應して無產階級として、成熟して來た。大正元年には總同盟の前身なる友愛會が組織された。大正六、七、八年の歐洲戰爭に入るとともに、日本の資本主義は飛躍的發展を遂げ、同時にプロレタリアートが大量的に形成されて來て、勞資の階級戰は强烈な色彩を帶びつゝ展開されて來た。大正八年に總同盟は三萬の會員を數へ、その他無數の勞働組合が組織された。それ等の指導精神は大衆の自然發生的思想なる溫和な組合主義たることは勿論である。これ等の勞働組合の外に無產階級の陣營には、一方に平民社以來の堺、山川、大杉、荒畑等の諸氏の社會主義勢力があり、他方には、階級戰の接迫と共に人生觀に一大變革を起し、自己の階級を脫して、本來の主人なるべきプロレタリアートの陣營に投じた、資本家的智識階級出の學生の社會主義團體（帝大の新人會、早大の建設者同盟及び曉民會等）があつた。この兩者は大衆の自然發生的思想なる組合主義の最極端なるアナキスト的サンヂカリズムの中にあつた。これ等の三つの勢力は、各數多の團體に分立してゐたが、これを一つの大同團結的勢力に結合したものが大正九年の日本社會主義同盟であつた。社會主義同盟は、極めてルーズな結合であつてその內部に一切の反資本主義的要素と傾向を包擁してゐた。しかし見のがされないのは、この社會主義同盟を契機として社會主義團及び學生思想團體が勞働組合と接合し、知識分子が大衆と結合したことである。今日の凡ての左翼勢力は直接にこの社會主義同盟のプールから、出發したのであつた。

ロシヤのボリセビキ革命の影響をうけて、社會主義同盟の指導分子の間に共產主義的思想が擡頭し、これと在來のアナキスト的サンジカリズムを固執せんとする者との間に對立を生じて來た。指導分子間の對立は漸次に大衆の間の對立となつて來た。即ち堺、山川、荒畑の諸氏を中心とし、一切の學生思想團體の指導（新人會の赤松氏、建設者同盟の和田氏、曉民會の高津氏）と總同盟を一方とし、大杉氏を中心とし機械聯合（今日の總聯合關東聯合會）及び印刷工聯合會を他とする對立がそれである。社會主義同盟はこの『ボル』と『アナ』の對立鬪爭の中に、解散を命ぜられて了つた。

社會主義同盟解散後、ボル派は『社會主義研究』『前衞』を機關とし、アナ派は『勞働運動』を機關として兩者は熾烈なる理論鬪爭を展開して、各々陣營の大衆をアヂテートした。この兩派の大衆衝突は大正十一年、大阪に於ける全國總聯合會議の決裂であつて、此れ以後、全くボル派が日本の全勞働運動の指導權を獲得した。

當時のボル派は全體として、アナ派に對立してはゐたが、その內部には何等の統一的主體を有しなかつた。大森の山川氏を中心に水曜會あり、麹町の堺氏を中心にエル・エム會あり、帝大には新人會、早大系に建設者同盟、曉民會あり、總同盟には赤松、野坂の兩氏を中心とした一團あり、代々木には佐野文夫、青野季吉、市川正一等の新聞記

者を中心とした無産階級社ありと、云つた風であつた。これ等の小指導團體を結合し、全ボル派の主體的指導勢力として形成されたのが、例の秘密結社日本共産黨であつた。この結社は、前記の諸團體の中心的人物を媒介として結集されて行つた。その加盟者は大正十二年六月に檢擧投獄された二十數名の人々のみでなく、總同盟の、、、は勿論その他現在は評議會、組合同盟、日本農民組合、全日本農民組合の指導者なる多數の人々が入つてゐたと云はれてゐる。その結社は個人を中心とした組織過程の故に、かなりその構成要素の中にあつたかに見える。けれども、この結社は大正十一年から十二年の震災に到る二ケ年の中に、雜誌『階級戰』による、、、、、、、過激法案反對運動、對露非干渉運動等の組織による大衆のアジテートの上に大なる功積を有したものである。この結社の指導精神は云ふまでもなく、、、、ではあるが、しかし依然としてサンジカリズムの傾向が強く、今日から見れば眞に笑止なことではあるが、大衆的政治運動及び公然の政黨の結成に對しては、熱意がないばかりでなく、むしろ反對の態度をとつてゐた。内部にあつて政治行動(政治運動と云はず政治行動と云つてゐた)を理論的に主張してゐたのは、米國歸りの猪俣氏位のもので、佐野學氏は『普選有害論』を書いてゐた。『ロシア巡禮記』から歸つた人には、その歸朝の當初は『無産運動』や『政黨組織』を主張してゐたが、幾日ならずして『選擧否認者』『非政治運動者』となつてゐた。これは内部の意見ばかりでなく、その當時の[illegible]にてはあつたが、指導下にあつた多くの組合大衆の意見ではあつた。この時先に山川均氏が有名な『方向轉換論』を發表したのであつた。それは當時の情勢上、當時の指導者と大衆に受入れられる最大限の政治的轉向を意味するものゝ如くである。

『吾々の第一歩は無産階級の最後の目標を見極めることであつた。吾吾はこれを見極めた。吾々は思想的に徹底し純化した。……そこで吾吾の第二歩に於いては、この目標と思想との上に立ちつゝ大衆を動かすことを學ばねばならぬ。そして大衆を動かす唯た唯一の道は吾々の當面の運動が大衆の要求に觸れてゐることである。……これが爲めには、吾々はあれもつまらぬ之もつまらぬといふ消極的、回避的、懷疑的虚無主義的態度を棄てゝ積極的、戰鬪的、實際的とならねばならぬ……

『資本家階級の政治的權力が、經濟上の支配を凝集し綜合したものであるやうに、勞働者と農民の解放の鬪ひは、部分部分として見れば、經濟上の鬪爭であるが、これを綜合したものは政治的の鬪爭である。勞働者が賃銀一錢の増加のために鬪ひ、農民が小作料二割の輕減を要求して鬪ふのは經濟上の鬪爭である。けれども此の經濟的鬪爭の最終の目的――搾取制度の撤廢――は政治的の目的である。無産階級の解放運動は、これを部分々々として見れば、經濟的の鬪爭であつて、これを綜合して見れば政治的の鬪爭に外ならぬ(大正十一年八月)』

然[illegible]

この[illegible]

は十分に含んでゐたが、しかし直接には當時の指導者の思想的[illegible]な獨善的な氣分革命主義と政治行動否定とに對して運動の大衆化を以つて鬪爭を宣したものであつた。この方向轉換論は、總同盟の內部は勿論、當時の左翼諸組合の大衆間の約半歲に亘る激烈た討論を呼び起こしたが、その過程に於いてサンジカリズムの殘存的傾向は甚だしく克服され、大正十二年の春に於いては、合法的大衆政黨組織の準備がこ[illegible]を中心として、企圖されつゝあつた。しかしこの企圖も同年六[illegible]

[illegible]

[illegible]の大部は、[illegible]を示して來た。

[illegible]のない運動ではあつたが、[illegible]

杉浦、北浦、田所等の諸氏が、[illegible]

、一般論の說教にとび廻つてゐた[illegible]

く、雜誌『マルクス主義』をとりまく一[illegible]

つて『見透し』もなければ、戰略、戰術[illegible]

部に據るゝがまゝに[illegible]鬪爭を通じてゐた[illegible]

關大會に於いて左翼組合の代議員の[illegible]

選、杉浦等の諸氏が關東同盟を除名されて、[illegible]

評議會を組織するに至つた。これは勿論、十三年度[illegible]

面について、理論の名の下に階級協調に赴かんとする[illegible]

[illegible]によつて[illegible]を[illegible]度の意識に引上げんとする左派との[illegible]

の[illegible]であるが、[illegible]問題を[illegible]すべきは、ナイーヴの左[illegible]

[illegible]

外に去つたが、それでも凡てがルーズであるので、全體が評議會の活動に協力してゐた。

かゝる中に亡命中の荒畑、佐野の兩氏が歸國し、左翼指導勢力形成の問題が擡頭して來たが、有力なものは形成されなかつた。唯震災後、學校內の運動に沒頭してゐた學生社會科學聯合會が、この頃になつて漸く巷に出で、評議會の活動に參加し、左翼に一勢力を加へて來た。かくて左翼運動は、佐野、野坂、德田、荒畑、北浦の諸氏及び評議會の杉浦、渡邊、鍋山の諸氏を中心とし、その他在來の人々及び學生思想家はその援護部隊とし、また『無產者新聞』を言論機關とし、評議會を大衆組織として組織されてゐた。堺山川の諸氏は援助者であり、有力なる猪俣氏は『日本資本主義の研究』のために、野坂氏の主宰する『產業勞働調査所』に立籠つてゐた。

左翼の陣營がかゝる小規模な組織にあるとき、無產政黨組織運動は形成せられたのである。即ち十四年六月に日本農民組合は政黨組織準備協議會組織の提唱が行はれ、八月協議會が成立した。九月に綱領規約審查委員會が開かれたが、評議會代表渡邊氏及び政治研究會代表と、總同盟代表との間に、原則上の問題について議論が行はれ決裂を醸はしめたが、評議會は代表を中村氏に更へ讓步をなして成立したが、十二月の結黨前日に於いて總同盟は、當時の神奈川縣川崎の爭議に於ける、評議會の對立鬪爭を口實として脫退した。よつて評議會も讓步を[illegible]、これ、黨は農民勞働黨として結黨されたが、三時間にして解散された。

この解散後、左翼陣營に於いてはこの政黨組織過程の批判が盛んに行はれた。その一つの現れは、田所氏の十五年一月の雜誌『無產階級』に於ける『統一主義と分裂主義の鬪爭』なる論文である。同論文の要點は、左翼の右翼に對する對立鬪爭に反對し、『內からの攻擊』なる特殊文字を用ゐて、喰ひ下り、喰ひ込み、戰術的退却を主張してゐた。これに對し北浦氏は『マルクス主義』に於いて『日和見主義』の立札を立てたが、論爭は田所氏の下獄によつてそのまゝとなつた。しかし對立鬪爭を事とし勝ちなナイーヴた左翼指導勢力も、理論的には少くとも對立鬪爭を合理化せず、第一次政黨組織過程に就いても『戰術上の錯誤』として承認し、第二次政黨組織に到るまで、常に『退却的姿勢』をとつてゐた。

第二次政黨組織運動は十五年の一月から始められ、三月に勞働農民黨が結黨された。評議會、大衆教育同盟（政治研究會の後身）青年同盟の三團體は構成から除外され、その加入の可否の決定は第二回中央執行委員會迄持越された。

左翼諸團體が、かくの如く黨の構成から除外されたけれども、日本農民組合の山梨聯合會その他が、總同盟幹部の策動によつて、脫退し、全日本農民組合同盟を組織するに及んで、日本農民組合內部に反幹部派の運動が擡頭し、この傾向は日本農民組合の[illegible]會に迄なつてあた。[illegible]

生産されたインテリゲンチュアの多數を日本農民組合内に展開せしめ、且つ週刊無産者新聞の感化力は、評議會と日本農民組合の多數とを、左翼勢力に持ち來つた

三　勞働農民黨の分裂

以上に述べたやうに、勞働農民黨結黨當初に於ける左翼指導勢力は荒畑、佐野、德田、北浦の諸氏、評議會の指導者、學生運動出身の多數のインテリゲンチュアによつて構成され評議會と日本農民組合をその影響下にをいてゐた。

こゝに福本和夫なる人物が現はれてくる。

福本和夫氏は大正八年の東京帝大出身で松江高等學校の教授であつたが後獨逸に留學した。彼が獨逸にあるとき恰も獨逸共産黨はルカチ、コルシュ等の理論的指導者の方法論全盛時代であつた。この感化を多分に受けられたであらう所の福本氏は、十三年に歸朝し、早速、福田博士、河上博士等のマルクス學說を批判して「吾國マルクス主義者の有産者的立場の止揚」なる長大論を書きあげ、これを某書店に持込んだが、その書店主人の斡旋でその論文が『マルクス主義』に連載し始められた。その獨逸語の直譯的な筆法と、新造語に滿ちた文章とは最初は唯々怪奇の目で眺めらるゝのみであつたが、しかし吾國の在來の社會主義的理論に全々缺除してゐた哲學的要素——唯物辯證法と方法論を高唱してゆく後は天馬行空の槪があつた。これは眞先に學生思想分子を捕へた。從つて左翼指導勢力の内部にも釀成されて來た。

福田、河上、高田の諸博士を切り伏せた福本氏は、題目を組織問題に說き及ぼして來た。十四年十月の『マルクス主義』に於いて、氏は『無産者結合に關するマルクス的原理』として、今日問題になつてゐる『結合の前の分離の法則』の理論を政黨結成問題を扱ひつゝ、展開してゐる。曰く——

『マルクス主義の理論と經驗は答へていふ——一旦自らを强く結晶するためには「結合する前に先づきれいに分離せねばならぬ」。「人は「結合」といふ當面の必要に全注意を奪はれて、「分離」の必要を忘却しがちであるのみならず、二者の連關に關するマルクス的原理を容易に理解しえないから。

『當面の一大結合形成の前に、しからば、いかなる道行を經、いかなる程度に於いて、今マルクス的黨の、マルクス的勞働團體の核心。マルクス主義は結成せられてゐるか。また結成せらるべきか。』

こゝで、氏は社會主義同盟より共産黨事件を經て全國單一政黨に到る道行、總同盟の分裂による評議會の成立を經て全國的總聯合に到る道行、及び『マルクス主義』の旗の下に戰はれつゝある理論鬪爭の三つの點をあげてそれぞれの分裂の必然と對立鬪爭を說いてつゞける。——

『私達は以上考察し來つて、吾が無産者運動を通して一脈の力——マルクス的政黨の、勞働團體の、核心、マルクス主義——が脈うつてゐる

者を中心とした無産階級社ありと、云つた風であつた。これ等の小指導團體を結合し、全ボル派の主體的指導勢力として形成されたのが、例の秘密結社日本共産黨であつた。この結社は、前記の諸團體の中心的人物を媒介として結集されて行つた。その加盟者は大正十二年六月[illegible]が、指導下にあつた多くの組合大衆の意見であつた。このときに山川均氏が有名な「方向轉換論」を宣言したのであつた。それは當時の情勢上、當時の指導者と大衆に受入れられる最大限の政治的動向を意味するもの〻如くである。

吾々の第一歩は無産階級の最後の目標を見極めることであつた。吾

出版されたインテリゲンチュアの多數を日本農民組合内に展開せしめ、且つ週刊無産者新聞の感化力は、評議會と日本農民組合の多數とを、左翼勢力に持ち來つた

三　勞働農民黨の分裂

以上に述べたやうに、勞働農民黨結黨當初に於ける左翼指導勢力は荒畑、佐野、徳田、北浦の諸氏、評議會の指導者、學生運動出身の多數のインテリゲンチュアによつて構成され評議會と日本農民組合をその影響下にをいてゐた。

こゝに福本和夫なる人物が現はれてくる。

福本和夫氏は大正八年の東京帝大出身で松江高等學校の教授であつたが後獨逸に留學した。彼が獨逸にあるとき恰も獨逸共産黨はルカチ、コルシュ等の理論的指導者の方法論全盛時代であつた。この感化を多分に受けられたであらう所の福本氏は、十三年に歸朝し、早速、福田博士、河上博士等のマルクス學説を批判して『吾國マルクス主義者の有産者的立場の止揚』なる長大論を書きあげ、これを某書店に持込んだが、その書店主人の斡旋でその論文が『マルクス主義』に連載し始められた。その獨逸語の直譯的な筆法と、新造語に滿ちた文章とは最初は唯々怪奇の目で眺めらるゝのみであつたが、しかし吾國の在來の社會主義的理論に全々缺除してゐた哲學的要素——唯物辯證法と方法論を高唱してゆく後は天馬行空の概があつた。これは眞先に學生運動分子を[illegible]福田、河上、高田の諸博士を切り伏せた福本氏は、題目を組織問題に説き及ぼして來た。十四年十月の『マルクス主義』に於いて、氏は『無産者結合に關するマルクス的原理』として、今日問題になつてゐる『結合の前の分離の法則』の理論を政黨結成問題を扱ひつゝ、展開してゐる。曰く——

『マルクス主義の理論と經驗は答へていふ——一旦自らを強く結晶するためには「結合する前に先づきれいに分離せねばならぬ」。「人は「結合」といふ當面の必要に全注意を奪はれて、「分離」の必要を忘却しがちであるのみならず、二者の連關に關するマルクス的原理を容易に理解しえないから。

『當面の一大結合形成の前に、しからば、いかなる道行を經、いかなる程度に於いて、今マルクス的黨の、マルクス的勞働團體の核心。マルクス主義は結成せられてゐるか。また結成せらるべきか。』

こゝで、氏は社會主義同盟より共産黨事件を經て全國單一政黨に至る道行、總同盟の分裂による評議會の成立を經て全國的總聯合に到る道行、及び『マルクス主義』の旗の下に戰はれつゝある理論鬪爭の三つの點をあげてそれぞれの分裂の必然と對立鬪爭を説いてつゞける。——

『私達は以上考察し來つて、吾が無産者運動を通して一脈の力——マルクス的政黨の、勞働團體の、核心、マルクス主義——が脈うつてゐる

るを發見した。

『吾々は全國的一大結合の中にあつて、この力をいかに、いかし、深め、浸透せしめ、展開せしめるかの道を知らねばならぬ。

『そしてその道とは、所謂結合に關するマルクス的原理に外ならぬ。

『單なる意見の相違——同一傾向内の——と見えたところのものを組織問題にまで、從つて單に精神的闘爭に止まりしものを政治的戰術的闘爭にまで開展しなければならぬ。

『第一に吾々は先づマルクス的要素を分離し、結晶しなければならぬ。第二に、この原則を戰ひとるための闘爭は當分理論闘爭の範圍内に制限せられざるを得ぬ。

『我が無產階級はその發展の必然により、今や所謂方向轉換期にある。

『方向轉換道程は組織過程中の一過程より他の一過程への過渡である』（十四年十月マルクス主義）

　この福本氏の所謂『結合の前の分離の法則』は、卽ち來るべき政黨組織過程に於いて、マルクス主義要素は、一度分離して對立闘爭によつて自らを強く結晶し、大衆の意識をマルクス主義にまで高め、しかる後に展開移進することを豫測し、その手段はしばらくの間、意識的闘爭——理論闘爭の限界に限るといふのである。この豫測の中に、出現すべき左翼政黨（無產階級政黨）に——マルクス政黨卽ち前衛黨（共產黨）を認稱するの意圖と、組織的對立鬪爭の展開の『必然』を豫想してゐる。從つて山川氏の觀念は[illegible]去の凡ての分裂を『必然』であるとの論議は、當時のナイーヴな左翼指導勢力の人々を把えた。またインテリゲンチュアに對する氏の意見は『何を爲すべきか』を引用して勞働者は工場といふ經濟過程にせばまれてその見解が部分的であるが、インテリゲンチュアはその生活條件の結果、視野が全面的である。このことは痛くインテリゲンチュアを刺戟し、同分子を多數に含む指導勢力に影響した。十五年春、荒畑、佐野、徳田、渡邊の諸氏が下獄と共に、福本氏は先づ『無產者新聞主筆』として迎へられた。福本氏は山口高商の教職を投げうつて東上したが、主筆とはならなかつたやうであるが、今や左翼指導勢力の中心指導者となつた。『無產者新聞——マルクス主義』の各誌は『發展は對立の闘爭である』といふスローガンの下に、明確果敢な理論的對立闘爭を開始した。

　赤松克麿、河野密の兩氏の『組合主義』との闘爭で火蓋が切られたが、これは總同盟の分裂によつて組織的對立闘爭が展開されてゐるといふので、餘り主力を用ゐられなかつたやうである。最も主力を用ゐて全指導勢力があげてぶつかつたのは、山川氏の『方向轉換論』の止揚であつた。山川氏の意見を折衷主義と断じ、これとの理論的對立闘爭によつてのみ、左翼人格が、眞個のマルクス主義的前衛に[illegible]ゐるゝのであるといふのであつた。[illegible]

淺野晃、水野成夫、志賀義雄、中野尙夫の諸氏が筆をそろへて肉迫した。山川氏は全々これ等に答へず、進んで自己の意見のみを主張してゐた。この論客にもあるまじき山川氏の態度は、一世の不可思議とした所であるが、山川氏は、福本氏の主張が最早や個人の主張でなく、一つの左翼指導勢力の指導的意見であるとき、これに對抗するためには、一つの組織を有せねばならず、取つて代るべき階級的義務がある。然るに後者を缺くが故に、厭戰して、徒らに陣營を混亂せしめずといふのであつた相である。この山川氏の態度に對し指導勢力は『理論鬪爭の回避と無關心』を痛擊した。

その方向轉換の論旨は大要次の如くである。

『我が無產階級はその發展の必然により、今やその運動の「方向を轉換」しつゝある。即ち簡單に云ふならば、所謂經濟鬪爭（組合主義的鬪爭——組合主義的政治行動をもふくめて）——から政治鬪爭（社會主義的政治鬪爭）への發展過程——轉換過程にある』（福本氏）

何故に社會主義的政治鬪爭への轉換か？　こゝに左翼指導勢力の現段階論と鬪爭の目標がある——

『この歷史的發展段階に於いて、吾が無產階級は、いかなる社會的地位——狀勢の下にあるか。簡單にいへば次の如くである。（一）日本のブルジョアジーは未だ所謂絕對的、專制的勢力を打破し切つてゐない。（二）しかも我が資本主義は今や世界資本主義と共に現實に沒落の過程にある。「資本主義の最後の段階としての帝國主義」は、今や吾國に於いても亦强烈に沒落の過程を辿りつゝある。（三）我が無產階級はかゝる形勢の下に、而かも始めて政治的鬪爭の舞臺に上り來つたのである。』（福本氏）

よつて山川氏の轉換論を次の如く批判する——

『山川氏は今日共產主義的見地に立つてゐることは固より疑はない。だが氏の認識論的方法論的根本見地は必ずしも唯物辯證法的——マルクス主義的——眞實に無產者的——ではない。否、俗學主義とマルクス主義との混合であり折衷である。從つて實行的、政治的方面に於ける氏の所論も亦必然に混合物であり、折衷物である。かくて氏の提唱せられ指導せらるゝ方向轉換も亦、私の見る所によれば、眞實に我が無產階級の戰ひとらんとする所の方向轉換でなくして、かゝる轉換と組合主義者の希求する所の轉換との混合であり折衷である。……山川氏は政治鬪爭を以つて經濟的鬪爭の延長乃至は綜合と考へてゐる。山川氏は經濟鬪爭、組合主義的政治行動、社會主義的政治行動の間の關係を十分に認識せられない。凡てをズルズルベツタリに考へられてゐる。故に混合であり折衷である』（福本氏）

一方勞働農民黨四月の第二回中央委員會には左翼三團體に門戶を開放したが、第三回中央委員會は門戶閉鎖を行つた。

この間にあつて十五年の一月から發行されてゐた雜誌『大衆』に於いては、鈴木茂三郎、大森義太郎、黑田壽男、中村義明、淺沼稻次郎の諸氏がこの左翼の指導勢力に對して批判的態度をとつて　ゐたが門

戸閉鎖と右翼結成に當面して、左翼の活動を有効にするために、自治會、日本農民組合、機械聯合等の中間派の左翼結成を提唱した。これに對し指導勢力は、雜誌『マルクス主義』十月を以つて『「大衆」批判號』となし『戰線の統一と整理』の前に對立鬪爭によつて略取するのみと宣し、また山川氏も中間派左翼結成は左翼に對立物を造る故に、大左翼結成をなすべしと主張した。この論爭は大して發展はしなかつた。

勞農黨の門戸閉鎖について、左翼指導勢力の指揮下に評議會、日本農民組合は進出を開始した。これに對し、山川氏は『左翼の全線的進出』と云つたが、指導勢力は『組合主義及び折衷主義との理論的對立鬪爭によつて、自らを全無產階級的政治行動意識にまで、マルクス主義にまで高めた左翼は、今や全線的に展開するのだ』とむくいた。

かくて十月二十四日の勞農黨中央委員會に於いて勞働農民黨は分裂して了つた。その結果、さきに日本農民組合を脫退した山梨聯合會を中心にする全日本農民組合同盟は日本農民黨を、更に總同盟は小ブルジョア分子と共に社會民衆黨を組織した。この社會民衆黨に反對する總同盟左翼と、左翼指導勢力に服せざる日本農民組合の右翼分子とは既に脫して組合同盟と全日本農民組合を作り、これに中間諸團體を入れて日本勞農黨を結成した。勞働農民黨は評議會と日本農民組合によつて結成され、左翼指導勢力下にある完全な政治的黨となり、『マルクス主義』と『無產者新聞』は共に勞働農民黨を擁護して、日勞黨と對立。

鬪爭を專任する機關となつた。

四 『勞農』の結成

かくして左翼指導勢力は、勞働農民黨及び同系統の勞農組合の內に沈潜し、これをその對立諸團體との對立鬪爭を行つて、マルクス主義黨を結晶せしめるの企圖の實行に入る。從つて實際の合同には戰術上反對せざるを得ない。十五年の暮に日本勞農黨が結黨したとき、山川氏は『即時合同』を主張したが、指導勢力は折衷主義合同論として反對し、對立鬪爭によつて大衆をとるべしと主張し、『日勞黨の指導精神の變更されざる限り合同に反對す』と大會をして決定せしめた。指導勢力中の北浦氏は、勞農、日勞の無條件合同を主張したことによつて反對され、指導勢力を去つて、『改造』誌上で『福本イズム』を攻擊し始めた。この頃共產黨被告は續々出獄して來た。德田、渡邊、杉浦氏等の左翼指導者は、過去の分裂の合理化の故にこの指導勢力に贊し、田所氏は一本調子の故に『それでは反對黨に入つて對立主義を克服してやらう』とドン・キホーテ式に日勞黨に入つた。荒畑氏は『分裂主義に反對なり』として協働を拒絕した。佐野學氏は宙ブラリンをきめた。一時は九州にかへつて考慮し、また或時は堺氏と共同して福本主義の清算に努力せんとしたが、人のいゝ性か、ズルズルベツタリに福本氏の意見に追隨して今日に至つた。その態度の不明瞭なだけ[illegible]を[illegible]のか、今や第一線に立つて『福本主義の末流』に參加してゐる。

左翼指導勢力は、かくて勞農黨を對立鬪爭によつて前衞黨にまで高めんとし、諸黨に對しては『幹部を排して大衆を奪取する』といふ對立鬪爭的協同戰線を持ちかけ、日本の資本主義の現段階は『强烈なる沒落過程にある』。經濟は國家資本主義トラストの獨占にあり、政治は『金融資本家と絕對專制主義の抱合』にある。故に勞農黨は鬪爭目標を絕對專制主義におき、『凡ての人民に自由を與へよ』をスローガンとして『ブルジョア民主主義の獲得』のために鬪爭せねばと規定した。この理論上の簡單明瞭の故に左翼大衆の心の奧にグングン喰ひ込んで行つた。評議會、日本農民組合の大會に於いても『發展は對立の鬪爭である』として、一切の分裂の必然を高唱し他團體の排擊を決議し、凡てのストライキに於いても、政治的意識の昂揚を目的とし、對立團體の對立鬪爭を主眼として行はれて、殊にこの對立鬪爭の顯著な例は府縣會選擧に於いてであつた。左翼指導勢力は勞働農民黨をマルクス主義黨と規定するが故に、當然に日勞黨を組合主義政黨、社民黨及び日農黨をファシスト的小ブルジョア黨と規定せざるを得ぬ。よつて革新黨とは協力するも、社民、日農は絕對に排擊し、日勞黨には對立候補を立てゝ大衆を奪取するといふ選擧協定を以つて行つた。かくして對立鬪爭の繼續の中に昭和二年の暮に近いた。

一方、所謂折衷主義者側に於いては、昭和二年の五月に堺利彥氏が『勞農、日勞の無條件合同』を提唱したが指導勢力からは『その無力を曝露することによつて、完全に大衆の支持を失つた公式社會主義者堺利彥は、かくて今や吾等の最惡のデマゴクとして現はれた』と罵倒され終つた。七月には『大衆』が自己批判を行つて中間左翼論を撤回して山川氏の大左翼結成を受入れた。八月の改造社の『社會科學』には河野、田所、阪本、北浦、山川、荒畑の所謂折衷派の諸氏が、筆をそろへて、福本氏の意見に攻勢を張つた。殊に山川氏が、この時始めて一年有半の攻擊に對して答辯を試みてゐる——『大正十一年の方向轉換が、經濟鬪爭の「揚棄」と純粹單純な「全無產階級的政治鬪爭意識」を「戰ひとる」運動でなかつたことを見て、そのマルクス主義的性質を疑ふ人々がある。これは時間を超越した生物、したがつてまた無產階級運動をその發展の過程に於いて「把握する」機能を備えぬ人にとつては全く無理からぬ疑問である』（理論鬪爭號）

この時長き日本資本主義の研究ををはり、現段階の分析に一先づ成功した猪俣津南雄氏は、在來ともに『全政黨の統一』を『世界』その他で主張しながらも、努めて指導勢力との對立をさけてゐたが、遂に『太陽』十一月號に於いて指導勢力に對して宣戰した。即ち日本の資本主義の現段階は『强烈な沒落の過程』でなく『安定』にある。資本主義は上向してゐる。政治は『金融資本家と絕對專制主義の抱合』にあらずして、絕對專制主義は金融資本家によつて克服され終り、今はイデオロギーとしてのみ殘存する。從つて政治鬪爭の目標は絕對專制勢力でなくて、帝國主義ブルジョアジーそのものである。凡ての政黨は無條件で合同せ

よ——これが氏の論文の大要である。即ちそれは左翼指導勢力の意見——福本氏の意見と鋭く對立する。この猪俣氏の意見は、『大衆』及び山川氏等にも受けられ、今や『勞農』の指導意見となつてゐる。

かくの如く『合同論』が、理論として有力になるばかりでなく、府縣會選擧後の大衆の要求ともなつたが、左翼指導勢力は、この合同論に對立すべく『マルクス主義』十月號を『無條件合同批判號』として、合同反對論を高唱したけれども、こゝに突如として第三インタナショナルの左翼指導勢力に對する批判が、しかも折衷派の機關『大衆』及び『文藝戰線』に於いて公表された。これまた凡ての點に於いて福本氏の意見と對立するものである。

『日本資本主義の發達は、アメリカのそれと著しく相異した歷史的條件がある。だが日本はアメリカと同樣に第一流の帝國主義的强國である。日本はアメリカと同樣に更らに昇騰しつゝある資本主義强國である』(現段階論に)

『日本に於けるブルジョアー民主的××は日本のブルジョアーに對抗することによつてのみ成功するであらう。支那と同一視することは謬りである。』(絕對專制主義論に)

『その一つは勞働運動に於ける×××の××的役割を過少評價に導き、勞動者、農民の組織體の中に×××を融合する傾向で、左翼勞働組合と勞働農民黨を以つて×××黨に置き換へんとする』(前衞黨と大衆黨の問題に)

『特に×××××は大衆から分離し　しかもその首腦に多くのインテリゲンチュアをもつてゐる危險である。この斜面の主なる罪過は、黨の宗派的教理を說くにある。即ち黨は『マルクス思想同人の實現』であるといふ教理を、「統一か分離か」の理論を說く。(この理論によれば黨の建設のためには多數の無產黨の分裂が必要だ)。これは實踐上では統一戰線の拒否となり、現在の勞働者の組織より遊離することを示してゐる』(結合の前の分離論に)

これを手にした日本勞農黨の機關紙は『宗派的分裂主義の打倒』を全面にかゝげて肉迫し、その中にはこんなジアーナリスト的な記事さへある——『インタナショナルは早くもこの小兒病的指導精神の存在を知つて代表者をモスコーに招致し、これをやつつけ、インタナショルは福本主義に反對なることを日本の大衆に告げるためにこの決議を發表した』しかも日勞黨はこの攻擊の絕頂に於いて『宗派的分裂主義の排除』の單一絕對條件として、全政黨に合同を申込み、遂に勞農黨をして合同拒絕を餘儀なくせしめ、農民黨と合同を約するに到つた。殊にインタナショナルのテーゼに及びそれに關する日勞黨の攻擊に對しては『マルクス主義』『無產者新聞』は完全に沈默を守つてゐた。

雜誌『勞農』は猪俣氏の意見、このテーゼの精神に從ひ次の如きスローガンをかゝげて左翼指導勢力に『宗派分裂主義の淸算』を迫つてゐる——正しき左翼意識の確立へ！正しき左翼戰術の展開へ！政治的統一戰線の形成へ！組合運動の統一へ！宗派的分裂主義との鬪

爭へ！

左翼指導勢力の內部は大混亂を呈したかの如くである。勞働農民黨大會は、自己精算を行はずに押し切り、その後先づ無產者新聞が『前衛黨と大衆黨と錯誤』と『對立鬪爭を排して合同に向ふ』との自己清算を始め、且つ新聞を勞農黨擁護から全階級の機關たらしめると宣言し、一方『マルクス主義』には、比較的福本氏の意見を高唱しなかつた佐野學氏や、論文を發表しなかつた渡邊政之輔氏、鍋山貞親氏等の言說を揭げて、以つて所謂福本主義の清算を始めた。しかし清算するにも『勞農』といふ攻擊力があるので、思ひのまゝにいかぬらしく、反擊をつゞけてゐる。そして勞働者を出した所に、『勞農』と『マルクス主義』の對立を、インテリゲンチュアと勞働者の對立とし、或は『マルクス主義』には大衆がついてゐることを表示せんとするが如く、仲々巧妙なる退却戰法ではある。

しかして左翼指導勢力は內部を整理して、凡てを一新し、殊に宗派分裂主義——對立分離主義の恥名を、この總選擧の實踐を通じて一掃しやうとして、日勞黨主唱の選擧協定にも極めて謙讓的に參加したが、しかし過去一年に亘つて大衆によつて戰ひとられた『對立鬪爭』の意識は容易に拔けず、大衆の反抗により、自ら結んだ協定を自ら破壞せねばならなくなり、一層に『勞農』や日勞黨から攻擊を加へられつゝある。

この機會に於いて、『勞農』は全國的に展開せんとしてゐる。未だ書くべきこと多々あるも頁數が豫定を遙かに超えたので『高等ジアーナリズム』の筆をこゝにをく。（二月四日）



再顯

ラファエル・サバティニ作

牧逸馬譯

1

『さうですな。困りましたな。しかし、皆さんがさう仰言るんでしたら――。』

から迷惑さうにいひながら、主人のジェイムス卿は客の私たちの顏を見渡した。

『御婦人方まで一しよになつてそんなにお聞きになりたいのなら仕方がありません。私もあきらめましたよ。諦めてお話しますがね、前にもつて申上げておかなければならないことは、これは決して愉快な物語ではないといふ一事です。』

そこはジェイムス卿邸の宏大な書齋だつた。卿の言葉がちよつと途切れると、みんなが大型暖爐のまはりにぐるりと椅子をすゝめる音が、その間隙を滿してさわがしく聞えた。戸外はまだ紺灰色の薄明の空から飛沫のやうな雪が渦をなして降りしきつてゐるのが、高い窓ごしに見られた。悲鳴に似た風の音が廣い邸をゆすぶつて過ぎた。が、それら外部の蕭條たる景色は、爐に燃えさかる丸太をかこんだこの暖い室内の小さな集りの上に、一層の愉快さを增すばかりだつた。

ジェイムス卿は、きれいに剃つた赭ら顏と銀色の頭髮に、ちらちらと火の影を躍らせて、何から何う話し出さうかといふやうに、暫くその四角い顋をうづめて考へ込んでゐたが、やがて一同がまはりから急き立てると、おもむろにマアガット小男爵家に傳はる古い因緣ばなしの口を切つたのだつた。

『さうですね。では一つ簡單にお話しませう――一七四五年の降誕祭週のことでした。當時この家には、私の祖母にあたるエヴァンジェリン・マアガット夫人が一人で住んでゐました。それは彼女の良人、つまり私から言へば祖父ですが、その人はずつと前に死んでしまつて、ご本人の息子もその時はちようどこゝにゐなかつたのです。

もう三日でクリスマスだといふ日に、どこからともなくひとりの男が玄關に立つて、祖母のエヴアンジエリン・マアガットに强つて面會を申し込みました。そこで祖母が出て見ますと、その男といふのはジヤコビン黨の亡命客で、じつさいその三箇月間ジヨウヂ王の軍隊に狩りたてられて、ひそかにイングランドに潜入して來てゐたものでした。かれも相當の家の出で、若かつた頃にエヴアンジエリン夫人とは相識のあひだでもあり、しかも一時は婚約までした仲だつたさうです。それがさうなつたいま、急に昔の戀人のエヴアンジエリンのことを思ひ出して、プレストンまでは逃げおほせたのですが、何しろ搜查が嚴重で逮捕の危險が身邊に迫つたものですから、彼はエヴアンジエリンの同情ひとつに運命をまかせて、窮鳥となつて其のふところに飛び込んで來たわけでした。

ジヤコビン黨といふのはご存じのとほりスチユワアト王家沒落を支へやうとした志士の一味で、歷史的に正確に言へば、一七一五年と一七四五年とに蹶起して、事實上王家を助けた一黨であります。ですから、ジヤコビン黨に對する政府の壓迫が當時いかに猛烈であつたかは、有名な史學上の事實ですから、皆さんもとくに御承知のことゝ存じます。

反逆者をかばふとなれば、事情はさておき、危險この上もないことです。しかし、涙つぽい感情が動機となつて刺戟された場合、女ほど外見に似ず果敢になり得る者もありますまい。祖母は乞はれるがまゝにその亡命者を家に入れて、從兄が泊りに來てゐることにして召使達の前をつくろつておきました。けれども、かういふことはすぐ露見するものです。ことにその男の足跡はすつかり洗はれて、追手の者が踵を踏んでゐたのだからたまりません。ちやうど逃げ込んで來た次の日でしたが、エヴアンジエリン夫人と昔の戀人のジヤコビン黨員とが、今や晩餐の食卓につかうとしてゐるところへ、赤服を着た兵士の一隊が乘り込んで來て、その場にジヤコビン黨員を押へてしまひました。彼はその夜のうちにプレストンの監獄に送られて幽閉されたのです。

祖母としては、縋られたから助けたまでのことだつたのでせうが、そのジヤコビン黨員は立場が立場だけに、さうはとらなかつたものと見えます。とにかくその男は、以前の戀人のエヴアンジエリンが裏切つてひそかに訴へ出たとでも思つたのか、それとも何かほかに恨むべき理由があつたのか、これは私どもの解釋次第で、もう永久に眞相の判明するときはありませんが、つまり、クリスマスの前の晩に起つた出來ごとといふのはかうです——彼は捕はれた其の晩に看守たちが酔つぱらつて騒いでゐるすきをうかゞつて、プレストンの監獄を脱出したのでした。さうして、夜つぴて山みちを馳け戻つて、曉の光りとともに、エヴアンジエリンの部屋の窓下に立つたのです。そこは外廊

のすぐ上ですが、彼はこつそり邸内に忍び込んで、じつに殘忍にエヴアンジエリン夫人を殺してしまひました。クリスマスの次の日に、男はランキヤスタアへ引いて往かれて、間もなく絞殺の刑にあひました。話といふのはこれだけです。』

ジエイムス卿が口をつぐむと、聞手の私たちのあひだに一しきりざわめきが渡つた。私はこの話しの結末が、いさゝか期待に反してゐたので、すくなからず抗議を申込むやうなこゝろもちで椅子から乘り出した。

『しかし、後日物語――とでも申しませうか、ジエイムス卿、例の幽靈ばなしですな、その言ひ傳へといふのは一體何うなんですか。』

『デニスンさん、』と卿は私へ向きなほつて、『因縁ばなし――とでも言ひませうか。それはかうなんです。毎年クリスマスの前夜、といふと祖母の殺された晩ですが、ジヤコビン黨の男が、何時からともなく「壁かけの部屋」と呼ばれてゐるエヴアンジエリン夫人の昔の寢室へ窓から忍び込むところが見えるといふのです。そして、室内へ這入つた彼は、昔の慘劇をもう一度そのまゝ繰り返すと言はれてゐます。亡命者の幽靈が祖母の幽靈をむごたらしく殺すところ――それがそつくり再演されるといふ、これはまあ單なる傳説でせうが――。』

私たちが突如恐怖に包まれて黙り込んでゐると、エッヂウオウスがをかしくてたまらないやうにおほつぴらに笑ひ出した。彼だけは、話にすこしも脅かされてゐなかつた。しかし考へてみるとこれは當然さうあるべきで、一八一〇年に大尉としてリスボンへ上陸し、たつた五年のうちにウオウタロウの大戰後大佐になつて英吉利へ歸つて來るくらゐのエッヂウオウスだから、この勇猛な愛蘭人は大がいのことに驚かないに相違ない。

『もちろんジエイムス卿自身はそんな馬鹿げた昔話に何らの信をおいてゐないことゝ思ひますね。』

大佐エッヂウオウスはかう冷然と言ひ放つて一座を睥睨した。

爐の光りがぼんやりした影を投げて、小男爵ジエイムス卿の顏は、彼じしんこの幽靈ばなしをうけ容れてゐるのかどうか、そこに多分の疑ひを見せてゐた。

『さあ、私にはわかりません。』卿は靜かに言ふ『私はあたまから否定もしなければ、またそのまゝ信じもしません。かういふと甚だ曖昧で無意味に聞えますが、じつさい早く言へば私は何ら證據を摑んでゐないんですから――。』

さうして卿は自分の言葉を幾分和らげるやうにつけ足した。

『證據――といふのはつまり私の眼で見この耳で聞いた現實の現象のことですが、それがない以上、私には嘘とも眞實とも斷定出來ませ

ん。』

『ですけれど、ほかにはその幽靈を見た人も聞いた人もあるんです。』

かうこのとき口を出したのはジエイムス卿の甥であり嗣子であるフイリップだつた。

2

エッヂウオウス大佐がふたゝび公然と嘲弄をふくんで笑ふと、それに對してジエイムス卿はちよつと不愉快さうに眉をひそめたやうだつたが、すぐに消えた。卿が大佐の輕蔑的な懷疑を喜ばない心もちは眼に見えてゐた。けれど、どつちかといふと私も大佐の說に傾いてゐた。一たいジエイムス卿は何によらず家の誇りといふものを高く持してゐる人で、マアガツト家に關することには、よかれあしかれ指一本さされまいとするところがあつた。で、この幽靈も卿の家に絶大な關係がある以上、ほかの人の場合における宗教的信仰と同じに、假りに同意出來ないまでも卿のまへだけでは相當の敬意をもつて取扱ふべきものだつたかも知れない。『じつは、』と、卿はふたゝび口をひらいて、『三度ほどこんなことがありましたよ。それがいつもクリスマスの早朝でしたが、召使たちが顏色を變へて私を起していふには、「壁かけの部屋」と呼ばれてゐる例のエヴアンジエリン夫人の寢室に、たゞならぬ物音がしたといふ――。』

『たぶん鼠のクリスマス宴會！』

エッヂウオウスが待つてゐたやうにこんな揶揄を飛ばした。が、誰れも一しよになつて笑ふものもなく、ジエイムス卿の家政を處理してゐるハンプスン夫人といふ卿の姉にあたる人が穩かに大佐を窘めにかゝつた。

『いゝえ、大佐、そんなことは御座いません。「壁かけの部屋」にはあなたのお考へになるやうに鼠なんかゞ出てさわぐはづはないので御座います。エヴアンジエリンが殺されたのは十八世紀でございますけれど、いまでも何一つ動かさずに昔のまんまに、まるで人が住んでゐるやうにしてあるんでございますもの。』

この時戶が開いて、執事が二人の下男に洋燈と蠟燭を持たして這入つて來た。灯の光りに一座の三人の女たちは救はれたやうに溜息をついた。暗くなりかけた部屋にこの話題がもたらした無氣味な空氣を一掃すべく、燈火と人のすがたが機會的にこの上なく歡迎されたのだつた。

窓のカアテンを引いてそとの荒天を完全に遮斷すると、二人の召使ひたちは來た時と同じやうに音もなく引き取つて行つた。

『でも、ちとどうもへんですね。妙だ。僕にはわからない。』私がはなしを引き戻した。『そんならなぜジエイムス卿は御自分でその眞偽を調査なさらうつていふ氣にならなかつたんでせう？』

卿の赤ら顏に笑ひがひろがつて行つた。

『それはですね――かうなんですよ。』と彼は考へ深かさうに『この家の者にとつてはそのジヤコビン黨の幽靈は凶事のさきぶれだと言はれてゐるんです。警告とでも言ひませうか、つまりまあ死期が近いといふ知らせですな。誰でも私の家の者が例の幽靈を見たが最後、そいつはおつつけ死ぬと言はれてゐる。かうなると私も考へざるを得ませんよ。私だつて皆さんも知つての通り、まだまだ生きてゐてうんと好きな狩獵でもしてみたいし、とにかくこれでも今死んぢまつちやあ可哀さうですから――。』

卿はちよつといたづらさうに微笑んで頸を撫でた。その様子が場合に似ず飄輕だつたので、二三の人は押へ切れない笑ひを洩らした。

『それは何とも殘念ですなア。』

私が感じたとほり正直に言ふと、卿は不思議さうに私を見返つて、

『殘念――とはまたなぜです？』

『あなたのお話は普通の怪談とはちがふと思つて、私はさつきから内心興味を感じてゐたんですが、それがありふれた怪談みたいなしと同じぢやありませんか。そんな幽靈なら私も前によくはうばうで聞かされたことがありますよ。一家のうちに幽靈が出て、家族のうちでそれを見たものは、死の近づきつゝあることを知らなければならない――こいつは古い。じつに古いですよ。ジエイムス卿。そこで私は殘念だと言つたんですが、じつさい後日物語がよくない陳腐だ。せつかくながら私はそのジヤコビン黨に何らの信用もてなくなりました。』この私の言葉は豫期した以上に卿を失望させて、私はいさゝかじぶんのあけすけな言ひ方を後悔しなければならなかつた。すると、エッヂウオウス大佐がまた無遠慮に笑ひ出したので、ジエイムス卿は、こんどはすつかり腐り切つてしまつた。婦人たちはそれに同情したものか、一せいに叱りつけるやうな眼つきをして私と大佐を見つめてゐた。

『だつてデニスンさん、ジエイムス卿は何言るのを忘れていらつしやるやうですけれど、』とフイリツプの若い妻が話を挾んで、『卿のお父さんはお亡くなりになる前の日に、そのジヤコビン黨の幽靈をごらんになりましたのよ。』

『それは何でもありません。ブシイヒウルといふ心理學者の説を御覽になると、その間のことは説明できます。簡單にいへば、ジエイムス卿のお父さんは、[illegible]にジヤコビン黨の幽靈を見るの

だと堅く信じてゐたので、そこでその通りに見て、そしてそのとほりに死んだまでのことなんです。』

『まあ言はゞ幻影だね。自己催眠的な。』

エッヂウオウス大佐の陽に燒けた顏が私を振り向いた。

『さうなんです。』

と答へながら、私にすばらしい考へが浮び出た。『とにかく、この事實の眞僞をたしかめる機會はまたと來ますまい。考へて見ると今夜はちやうどクリスマスの前夜で、その慘劇の何週年かにあたるわけです。いかゞでせう、私を今夜ひと晩「壁掛けの部屋」へおいてみて下さいませんか。あなたにさへ許して頂ければ――。』

『いゝえ。とんでもないデニスンさん、そんな、そんな馬鹿な!』

卿の姉の家政婦が急に興奮して叫んだ。

『しかし、何故いけませんかね。ハンプスン夫人はなぜそんなに反對なさるんでせう。』私はかう強情に言ひ張つて首をひねつた。

『私が進んで見とゞけやうつていふ以上、いゝぢやないですか。私は家族の一員ぢやないから、たとへ幽靈を見たつて死ぬわけはなし、第一、僕は幽靈なんかちつともこわくはない。』

するとジエイムス卿が厳かに言ひ出した。

『いや、じつにいゝ機會です。こつちからお願ひしても一つ眞僞をみきわめて頂きたいくらゐなんですが、それがその困ることには、私は家に傳はる古い話しをそんなふうに解剖したくない。この心もちはあなたにもおわかり下さることゝ思ふが、私にとつてこの幽靈はあくまでも物語の幽靈であり、そしてまた實存の幽靈で、そんなやうな研究の目的物にするには家に對する私の良心が許しません。どうぞそればかりは――。』

言ひかけて卿がちよつと言葉につまると、その機會をつかまへてエッヂウオウスが割り込んできた。

『馬鹿な!』と、彼はほとんど呶鳴るやうに、『ジエイムス卿の仰言りたいことはかうなんでせう。あなたはこの浪漫的な泡をぽつかりと毀してしまひたくない。ね?かういふんでせう?』

エッヂウオウスを見たジエイムス卿の視線には瞬間憤りの色が動いた。と、卿はにはかに微笑んで私へ眼をかへした。

『よろしい、デニスンさん。』とゆつくりうなづいて、『が、しかしおひとりではいけません。だれかお仲間がなくちやあ――あ!さうだ、エッヂウオウス君がいゝ。この人は人も惡魔も何ものも恐れない。幽靈といふ言葉を聞いただけで莫迦にして笑ふんですから――。』

『面白い!やりませう。』エッヂウオウスはいきほひこんだ。『ねえデニスン君、ふたりでこの幽靈を狩り出さうぢやないか。遣らう、やら

り。きつと取つちめて見せる！』

3

女たちとフイリツプはみんな一しよになつて反對したけれど、ジエイムス卿はエッヂウオウスが自分の家の幽靈を信じないで、やゝもすれば輕蔑しやうとする態度に憤慨して、大佐が私と一しよに問題の部屋に籠ることをしきりにすゝめた。

私たちはおそくまで晩餐の食卓についてゐた。卿の近所の人が二人ほど食事に加はつて、婦人たちが卓子を去つたのち、男ばかりでかなりさかづきの數を重ねた。何と言つても一ばんの左きゝはエッヂウオウスだつた。よく飲みよく馬に乘り、よく喧嘩をするのがエッヂウオウス大佐なのだ。

今夜これから私たちが一しよに手がけやうとしてゐる一大冒險を思ひ出して、私はしきりに大佐に注意したが、彼はいまどき英吉利にゐてこんないゝ酒が飲めるのも誰のおかげだと思ふ、みんな我輩が產地のデユウロ河畔で英吉利のために大勝を博したためぢやあないか。たとへどんなことがあらうとも我輩がこの酒を飲んではならぬといふ法はない——かう言つて威張りつゞけてゐた。

そのうちにわれわれも食堂を出て、寢に就く前に別室に雜談してゐた婦人達に加はつた。そして、かれこれ十一時半だつたが、ジエイムス卿自身が先に立つて私たちを二階の「壁かけの部屋」へ案內した。なが年閉め切りだつたエバンジエリン夫人の寢室に急に私たちのためにあたゝかい支度が出來てゐた。爐には火がかんかん燃えて、丸い桃心木の卓子と二つの肘掛椅子が、這入つたすぐのところに置いてあつた。卓子の上には四つの蠟燭の立つた燭臺と歌留多が一組のせてあつて、私たちがもし徹夜をすることがあつても退屈しないやうにといふ心づくしが見られた。壁にそつたもう一つ卓子に飾瓶と酒とグラスの盆がおいてあるのがこのさい何よりもありがたかつた。

こんなふうに出來るだけ部屋を愉快に作つてあつたにかゝはらず、私はその天井の低い細ながい部屋へ一歩踏みこむと同時に、ぞつと戰慄が走るのを感じた。燃えさかる火と四つの蠟燭の光とが大きな天蓋のついた胡桃材の寢臺に重々しく幽暗な影を投げて樫のはめ板と古い壁掛とがことさらに陰氣な空氣を漂はせてゐた。八十年ほど前の夜に、殺人者が忍び込んだといふ高い窓は、何か色の褪せたカーテンにかくれてゐて、私は部屋へ這入つた瞬間から何者かゞたしかにそのかげに潜んでゐるやうな氣がしてならなかつた。寢臺の枕もとに立つて、ジエイムス卿は巧みに壁にかくされてゐる扉を開けて見せた。

うして數へられなければそんなところに戸があらうとは私もエッヂウオウスも氣がつかなかつたに相違ない。戸の向ふは小さな控室で、この陰慘な寢室に比較して氣もちのいゝ對照をなしてゐた。

白い地へ赤い薔薇の花がとんでゐる壁紙、長椅子と古風な安樂椅子、それに卓子が一つ――それがすつかり小ぎれいな更紗に蓋はれて、小さな火床の火が磨き上げた灰止めに愉快に反射してゐる。卓子の上の洋燈が全體を照ら出して、新鮮を感じ、ラヴエンダアの花のやうなこまやかな香がこの小さな部屋に溢れてゐた。

『こつちのほうがいゝ部屋ですから、』とジエイムス卿はなかを覗きながら、『姉が、もしあなた方がこつちにいらつしやりたいやうならと思つて、同じに用意しておいたさうです。』

『この部屋も何か殺人に關係があるんですか。』

私が訊いた。

『えゝ、ないこともないんです。』卿は微笑んで、『エヴエンジエリンづきの女中といふのが、その時こゝに眠つてゐましてね。主人の叫び聲で目がさめて、寢室のほうへ這入つて來やうとしたんですが、どうしても戸が開かなかつたさうです。』

『しかし、この戸には鍵がないぢやありませんか。』

エッヂウオウスが誤謬を指摘するやうな口調で言つた。ジエイムス卿はしづかに、

『えゝ。でも當時はあつたのかも知れません。或ひはまた夫人が戸にもたれて死んでゐたので、いくら押しても開かなかつたのでせう。』

このいやな話しを聞かされても私はこつちの寢室よりは増しだと思つた。

が、エッヂウオウスは私とは全然べつに感じてゐるらしく、私と向き合つて寢室の大きな肘掛椅子にどつかと腰を下ろすと、ぴつちりしたづぼんに包まれた足を伸ばして樂々と欠伸した。

『馬鹿馬鹿しいことになつたもんだ。幽靈を見とゞけるなんて、何時までかうして眼をさましてゐられるかわかりやしない。ジエイムス卿の葡萄酒、あいつは猛烈にあたまへ來るよ。』

と自分の眠氣を辯解してゐるうちに、彼はだんだんお國訛りを出して來た。

『例のジヤコビン黨員の幽靈さ。あんまり待たせずに早くでゝ來るといゝなあ。』

そして大聲に笑つた。

その笑ひ聲が天井に空ろに反響して、私はちよつとびくつとした。

エッヂウオウスは退屈しのぎに一つエカルテをやらうと言ひ出して矢庭に歌留多を切り出した。

しかし、私の注意はすこしもカアドの上になかつた。何といふことなしに部屋に一種の氣になる空氣が漂つてゐることは疑ふ餘地のない事實だつた。私は二三度部屋ぢうを見まはしただけで、つとめて恐怖を外部へあらはさないやうにしてゐた。それにもかゝはらず四隅に濃い影がわだかまつてゐて、しきりに動くやうな氣がしたり、さうかと思ふと窓のカアテンの影に何かゞ隱れてゐるやうな恐迫觀念から脫し切れないのだ。眼のまへに垂れ下つてゐるカアテンのひだのぐあひが、私の這入つて來た時とちがふやうに思はれてならなかつた。

『もつと明るくすればいゝのに氣がきかないなあ。』私の聲は神經質に響いた。『べつに臆病ぢやあないけれど、あの因緣ばなしを思ひ出すとあんまりいゝ氣もちはしないね。』

エッヂウオウスはしんから可笑しさうにげらげら笑ひ出した。

『そんなら思ひ出さなけりやあいゝぢやないか。僕は君をもつとしつかりした男と思つてゐたが、これで見ると君もあの婆さん連中の馬鹿話しをまんざら眞にうけてゐないこともないんだね。』

私はだまつて持札を取り上げたが、この部屋とその空氣が私のうへに追々無氣味に働きかけてゐたことは爭はれなかつた。私は上の空でエッヂウオウスの相手をして、いたづらにエカルテにかけては自慢のエッヂウオウスを苦もなく勝たしたに過ぎなかつた。もう勝負多はよさうと私が言ふと、エッヂウオウス大佐は欠伸をして椅子の背に反りかへつた。

4

『おうやおや、こいつはどうも時間の不確かな幽靈だな。』エッヂウオウスは吐き出すやうに、『一たい何時まで待たせるんだらう。出るものなら早く出たらいゝぢやあないか。』

ところが！　不思議にもこの言葉に對する反響はすぐにあつた。大佐がかう言ひ終るか終らないに、カアテンの向うに、はつきり三つ窓を叩く音がしたのだ。

いゝはつと息を呑んで私たちは顏を見合つた。微かな警戒がエッヂウオウスの表情を歪めて、私はわたしでからだぢうの皮膚が冷く總毛立つた。

『何だい、いまのは？』

とさゝやきながら、私はじぶんの聲を恐しいものに聞いた。

大佐は突つ立つた。いかにも軍人らしい脊の高い體格――彼はもう平常にかへつてゐる。

『誰か馬丁たちつが惡戯をしてゐるに相違ない――ようし！』

窓際へ歩み寄つた大佐は、さつきこゝへ來たときそつと載せておいた拳銃を取り上げるが早いか、大股に窓のほうへ進まうとした。その時！　前にもまして大きな物音が一つ、はつきりと窓を鳴らした。

さすがの大佐もどきりとした樣子――ちよつと相談的な視線を私へ向けて立ち止つた。そとには激しい風の音が荒れ狂つて、それが渦をまいて吹き込むためであらう、煙突が唸つてゐる。エッヂウオウスは思ひ切つて部屋を突つ切ると、さつと窓のカアテンを開いた。心臟が咽喉へ飛び上つてくるやうな氣がして私は彼について行つた。

大佐の手で窓扉が引かれたかと思ふと、外部の鎧戸があらはれて、素早くその掛金を外しにかゝつた。と、三度、調子の高い音が、今度は焦るやうにつゞけさまにそとから響きわたつた。

急に不安を感じた私は、大佐の腕をつかまへて止めやうとしたが、彼は私を振り切つて蹴るやうに鎧戸を突きあけた。戸はそのまゝ兩側の壁にぶつかつて、そこの押へに引つ掛る。が、何もなかつた。戸外はまつ暗なまゝ――その深い闇をとほしてもうろうと落ちる雪の影が躍つてゐるばかり、誰かゞ忍んで來ていたづらをしたなどといふ想像はこの際問題にならない。これは大佐も認めたとほり、そんな形跡はすこしもないのだ。立樹はすべて家の周圍から五十呎も離れてゐるので、木の枝が窓にあたつてあんな音を立てたのだとも考へられない。

鎧戸が開いたとき、氷のやうな冷い突風に蠟燭の火は縦に靡き、燭臺の蓋ひが激しく搖れた。そして私はそのあけつ放した窓に、ノックに答へて何か眼に見えない一つの存在があるといふ恐ろしい實感を否定し得なかつた。

いそいで窓を閉めて私を振り返つたエッヂウオウスの顏は幾分蒼ざめてゐた。

『妙だね。うん、實に妙だ。』

と、答へを待つたが、私がだまつてゐるので彼はつゞけて、

『君、何う思ふ？』

『どう思うつて、さあ、わからないね。』

びくびくものであちこち見ながら、私はゆつくり椅子へかへつた。

『あの音――むかしのジヤコビン黨員が來たのかも知れない、としか僕には說明出來ないね。』

急に何か冷いものが顏にかゝつて、私はわれを失つて恐怖の叫びを上げた。死人の指が頸から頤まで一しよに摑んだやうな氣がしたのだ。

『何だ、どうしたんだ君。』

エッヂウオウスが呶鳴つた。

『何だか――頰を撫でたよ。』

すると、エッチウオウスはぢつと私を見つめてゐたが、たちまち笑ひを揺り上げた。

『雪——君の頭に雪がのつかつて、見給へ、溶けてるぢやないか。馬鹿だな君は。』

から常識的に說明し去つたが、私はまだ何となく安心出來なかつた。そんな物質的な言ひぐさでは解決のつかない何物かゞある。私が椅子へかへつて不安のうちに腰を下ろした刹那、掛金がしつかりかゝつてゐなかつたものとみえて、ぱつと窓が開いたかと思ふと、あつといふ間に蠟燭が消えた。

正直に白狀するが、私はわれながら馬鹿げた大聲を上げた。エッチウオウスは舌打ちをして、爐の光りに描き出された部屋を横切つて窓を閉めた。そして私が肩息で椅子に蹲踞まつてゐるあひだに、彼は暖爐の火をうつして、一つ一つ蠟燭の火をつけたが、その手はかすかに顫へて、顔もこゝろもち蒼かつた。

『何だ、何だ、デニスン君。しつかりし給へ。君みたいな臆病者に幽靈狩りが出來るもんか。』

その幽靈狩といふのに私は微笑まされた。

『まあ、さう言ふもんぢやあない。』

『だつてそのとほりぢやあないか。要するに何が起つたね？　え？何も起りやあしない。たゞ僕が窓をよく閉めなかつたもんだから、で開いて蠟燭が消えただけぢやあないか。』と、彼はまた形而下的な說明を下して得々としてゐる。しかし私は依然として彼の態度に不服だつた。成程さうには違ひないが、私はそれよりも何かしら超自然的な力が自然な常識的な中間物を動かして、眼に見えない出現をしてゐるやうに思はれてならなかつた。同時に私は、さつきまでゐなかつたものが、この部屋に存在してゐるやうな氣がして、その考へが根強く植ゑついてゆくのを何うすることも出來なかつた。なぜならあの窓を叩いた音については、なんとも合理的な說明がつかないところへ、あゝして窓を開けてからは、もう二度と外戸から窓を鳴らす者がなくなつた一事だ。何者かゞ私たちに戸を開けさして、ちやんと這入つて來てゐるやうな感じがひしひしと迫つてしやうがない。

私がかう言ふと、大佐はほとんど怒り出さんばかりに、頭から叱りつけた。

『說明が常識的であらうと、そんなことはどうでもいゝ。要するにただ事實はこれだけさ。』

『寒い。ばかに寒い。』

拳銃をもとの爐棚へかへすと、大佐はしやがんで火を突ついた。

『あつちの部屋へ行かうぢやないか。あひだの戸を開けておけばい

い。向うのほうが愉快だよきつと。』
大佐の黒い眼が、からかふやうに私を見た。
『行きたけりや君だけ行くがいゝさ。俺はひと晩こゝで明すことになつてゐるんだから、斷じてこゝにゐる。たとへ全ジヤコビン黨の幽靈がクリスマスのお祝ひに出て來たつて、僕はちつとも驚きはしないんだ。』
さう言はれてみると、何だか私は一層こわくなるのだつた。いひ知れない凶の氣分が彼の口を藉りてこんなことを言はせてゐるやうに思はれる。私はもう堪らなかつた。いつそ、もしこの時、さつきのやうに窓のところで音でもしたら、私はまだその何ものかゞ外部にゐることゝ思つて、いくぶん安心出來たかも知れない。しかし、かう二度とあの音がしなくなつては、私は今まであんなにしきりに窓を叩いてゐたものが、すつかりこの部屋に這入り込んでゐるといふ空想に理論的根據をみとめざるを得ない。
私は足を踏みしめて立ち上つた。
『僕はあつちの部屋へ行くよ、とにかく。』そして大佐の言葉を待たずに、壁に切られた戸へ進んで、私は救はれたやうに明るい別室へ飛び込んだ。うしろでエッチウオウスの笑ひ聲が嘲弄してゐた。

5

爐の前の大椅子に腰を下ろすと、暫くはほつとした氣もちだつた。すると間もなく、開け放した寢室の戸から誰かゞ覗いてゐるやうで首すぢが寒くなつて來た。
『エッチウオウス！』私は大聲に、『こつちのほうがよつぽどいゝ。カアドを持つて來給へ。』
返事のかはりにエッチウオウスは欠伸をした。
『もう眠い。カアドなんかいやだ。それに俺はこゝのほうがいゝんだ。寒いからそこを閉めて貰はう。』
私のやうな神經の所有主に超自然的な現象を探險する資格なんかないかも知れないが、とにかく間の戸をとざすのは私こそ望んでゐたので、立つて行つて勢ひよく戸を閉めた。これで向ふの寢室から見つめられてゐる氣もちから脫することが出來たわけで、私は多少平靜を取戻して椅子にかへつたが、するとすぐに自分とじぶんの意氣地なさが恥かしくなつて來た。間もなくエッチウオウスがさかひの戸口から顏を出して、飾瓶とワイン・グラスを兩手に聲をかけた。
『びくびくせずにブランデイでも飲み給へ。君はどうかしてゐる。何か眼をあけて夢を見てゐるんだらう？』

『夢つていふけど、君、さつきの窓の音は、ありや夢だつたかね？』

『惡魔はときどき窓を鳴らすものさ。』

エッヂウオウス大佐は笑ひながら、私にブランデイのグラスをつきつけた。

『もう一杯？』と飾瓶をさし上げて、『こいつに限る。どうだね、もう一つ？』

私は酒はいらないが、一しよにゐてくれと頼むやうにいふと、彼は思ひ切りよく拒絶して、

『じつはね、デニスン、僕は自分でもこわいんだ。こわくて堪らない。いや、ほんとだよ。こんな氣もちは生れてはじめてだ。だから意地にかゝつても向うの寢室へ歸らざるを得ない。いゝかい、こわくて逃げ出したとあつちや、僕じしん自分の臆病なのが癪にさはるからね。僕はこわいからこそあの部屋にゐるんだ――何だ、精神と肉體の離れたジヤコビン黨員なんか――。』

言ひながら大佐は廻れ右をして「驚掛の部屋」へ這入ると、うしろ手に力づよく戸をしめてしまつた。

それから暖爐へ近づく跫音がして、椅子が軋んだのは腰をかけたらしかつた。彼は恐ろしいが故に還り、私は恐ろしいがゆゑに逃げ出したのだから私は卑怯者に違ひない。しかし、隣の部屋はれても、[illegible]して[illegible]と、[illegible]となりの寢室へは這入つて行くまい――私はさう思つて、ひとりぽつんと大椅子のなかに膝を抱いてゐた。

そのうちに爐の暖かみとブランデイが作用して、私はいゝ氣もちに眠くなつてきた。それでも暫くは我慢してゐたが、たうとう椅子のうしろへ頭をもたせかけて、やがてどれだけ眠つたことだらう。はつとして眼が覺めたときは、私は理由の知れない驚きにあらゆる神經をとがらせて、心臟は事件的な波を打つてゐた。耳をすます。何か大きの瞬間に音のするのを知つてゐて、それをひそかに待つてゐるといつたやうに――。

二三時間は眠つたらしい。爐の火は白く消えて、部屋は冷えきつてゐる。

急に無意識に期待してゐたものが來た。「驚掛けの部屋」の壁を通して、エッヂウオウスが恐怖に窒息する聲を絞つて私を呼んでゐるのが聞えた。

『デニスン！　デニスン！』

何か大きな力に抱き上げられて冷水へ擲り込まれたやうに感じて、私は瞬間身動きが出來なかつた。恐怖が私をその場へ縫ひつけたのだ。

ぐ向ふ側、八十何年か前のこの夜、エヴアンジエリン・マアガット夫人が斃れたのと同じ場所ではないか。

皆の鳴るやうな音。つゞいて何か引きずる響き。うめき聲。さうして最後に、最も戰慄すべきかすかな笑ひ聲——それは殺笑とも言ふべき血みどろの忍び笑ひ——。

ほんの一瞬ではあつたが、私は狂せんばかりに眼を見開いて、閉ざされた戸を凝視したまゝ棒立ちに立つてゐた。いまにも何ものかゞ戸を開けて現はれるであらうと！——ところが、戸はそのまゝ默しつゞけて、壓搾的な靜寂があたりを占めるばかり、私は思ひ切つて戸へ近づくと、ハンドルに手をかけて押してみた。が、開かない。何か重いものが向ふ側にもたれかゝつてゐて扉をふさいでゐるのだ。

その時だつた。ジエイムス卿の恐ろしい言葉が私の胸へよみがへつたのは！

「ちようどエヴアンジエリン夫人づきの女中が、この部屋に寢てゐましてね、夫人の叫び聲で眼が覺めて、すぐに寢室へ驅けつけやうとしましたけれど、戸が開かなかつたのです——夫人の死骸が向ふ側にもたれかゝつて戸を塞いでゐました。」

恐怖に頭髮が逆立つといふことがあるとすれば、その時の私がそれだつた。手が戰慄に痺れてハンドルを離れた。私は心中にこんな餘計な思ひつきを實行したエッヂウオウスと私を呪ひながら、よろよろと二三歩、あとへすさつた。

この夜、むかしの慘劇が終始そのまゝに再演されるといふ、私は新しい怖れに危く聲を上げやうとした。何か戸の下から出て來てゐるのだ——黑く光つた、そして小刀の刃のやうに細いもの。ぎよつとして見守つてゐると、それは擴がりながら進んで來る。やがて、その黑いものが戸の下の床をいつぱい埋めるやうになつて、私は始めてそれが何であるか氣がついた。液體なのだ。しかも黑ではない、赤！さうだ、深い赤——血！人血ではないか。

すぐに私の頭を掠めたことは、八十何年前のこの夜ふけ、かうしてエヴアンジエリン夫人の鮮血が、この扉の下から別室に流れ込んで、私と同じやうに戸が開かずに立つてゐた女中を、最初は不審がらせ、つぎにどんなに驚かしたであらうといふ運命的な一致だつた。

あのジエイムス卿の物語は、そつくり事實だつたのだ。

昔の殺人が、幽靈の加害者と幽靈の被害者によつて、今や驚くべく細かい點にまで再現されてゐるのだ。繰りかへされてゐるのだ。とすれば、エッヂウオウスは何うなつたらう？『エッヂウオウス！』私はもう氣ちがひだつた。『エッヂウオウス！』

返事はおろか、何の物音もない。眞劍に危險を感じ出した私は、急

に勇氣をふるつて力まかせにドアを開け放した。

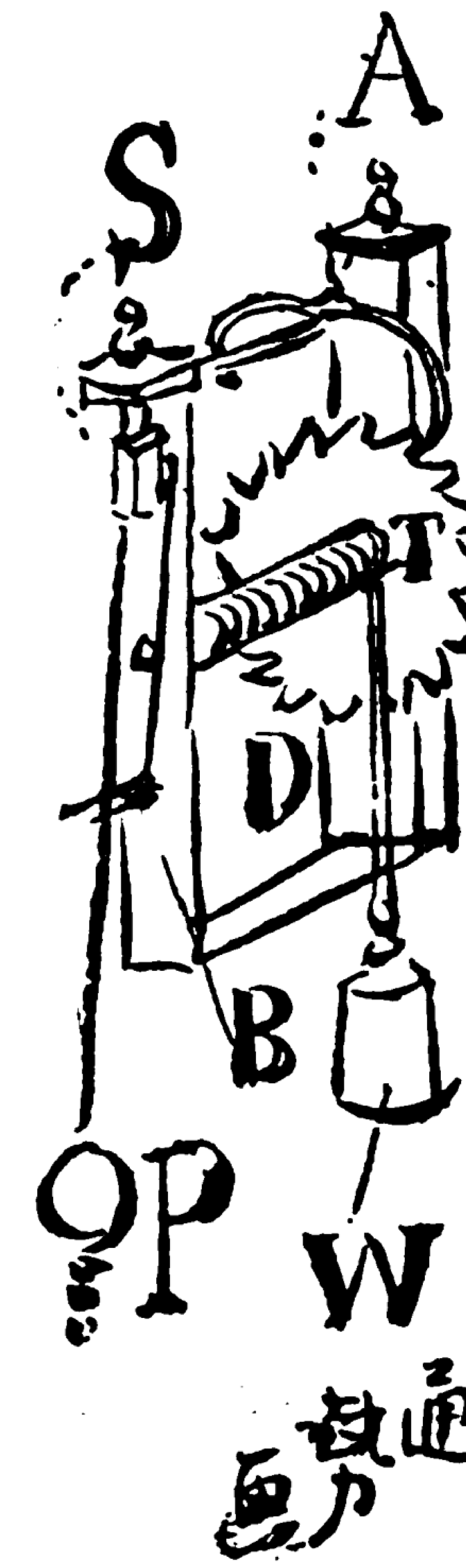
戸口から洋燈をかざして見ると、はじめ私の眼に映つたのは、狼藉をきはめた部屋の樣子だつた。まつくらななかに卓子がひつくり返つて、床にはカアドと蠟燭が散亂し、壁の戸に近く、足を扉にかけてエツチウオウスが倒れてゐる。右の手が長く伸びて、頭は横にねぢれて肩にかゝつてゐた。

かれが死んでゐるらしいことは、私にもひと目でわかつたが、そのうへ、まはりに流れてゐる赤い液體が、池のやうによどんで靜止してゐるところから見ると、どこにしろ傷口からは、もうすつかり血が出きつてしまつたやうに觀察された。それらをちらと見て、私は廊下へ飛び出すと同時に、頭のてつぺんから大聲を張り上げて、召使たちの部屋のほうへ駈けて行つた。

五分間後、私は執事ともうひとりの下僕をつれて、「壁掛けの部屋」へ引つ返してゐた。二人は慴く尻込みしたが、執事が死骸に近づいて行つて、私の揭げる洋燈の光りで覗き込んだ。かれはしばらく默つてエツチウオウスのそばに蹲踞んでゐたが、やがてその肩が細かく顫へ出して、矢庭に私を振り仰いだ顏は奇體に引つ吊つてゐた。私ははじめそれを恐怖の表情と讀んだのだつたが、よく見ると執事は一生懸命に笑ひを怺へてゐるのだつた。事實、彼は明かに聲を立てゝ笑ひ出した。私は不思議な氣がしたが、つぎにぼんやりと何かゞわかりかけて來て、その時、執事が拾ひ上げたものに落ち着いて眼をそゝいだ。それは壞れたバアガンデイの瓶だつた──これで床の血と思つたのが、血の色をした葡萄酒に過ぎなかつたこともうなづける。

あとの説明はすべて蛇足であらう。恐怖をまぎらすために一人でさかんに飲んでゐたエツチウオウスは、その上バアガンデイの葡萄酒壜に手をかけたとき、醉つてゐるあまり卓子につまづいて一しよに倒れたのだつた。その音で私が眼をさまして、同時に彼が呼ぶのを聞いたものらしい。そしてエツチウオウスは暗いなかで隣室のさかひの戸まで辿つて來て、そこですつかり酒に意識を失つたに相違ない。再び轉ぶとたんに葡萄酒の壜を割つたのだが、そのためにどこも怪我をしなかつたのは不思議だつた。

これがその夜、マアガット館の「壁掛けの部屋」に起つた事件の全部だつた。これは事件とは言へないほど馬鹿馬鹿しい話しかも知れない。しかし、いまでもときどき思ひ出すことに、私は何だかこの常識的な形而下的な説明に飽き足らないのだ。なんとも言へないあの夜の無氣味さを覺えてゐるので、私はやはり超自然的な力が、あゝした自然な物質的な形をとつて、ごく平凡らしく現はれたのではないかと思つてゐる。偶然と見なすには、あまりにも如實なそして一點毎に一再現」だつたからだ。



百萬磅紙幣

マーク・トウエーン作
佐々木邦譯

二十七の時、私はサンフランシスコの或鑛業仲買人の手代で、株式取引の一切にかけては一廉の巧者であつた。私は眞正の一人ぼつち、自分の才覺と信用の外には何一つ賴みにするものもなかつたが、しかしこの持つて生れた資本の有難さで、私の足は先づ〳〵成功の路筋に向いてゐたから、私は前途を樂んで滿足してゐた。

午後の立合が濟めば、土曜日は自由の身體だつたから、私は小いボートに帆を張つて灣内を走り廻るのが習慣であつた。ところが、或日のこと、少し調子に乘り過ぎて、私は沖合へ流されてしまつた。丁度日は暮れかゝり、もう希望の綱が切れやうとする時、私はロンドン行の小い帆前船に拾ひ上げられた。先方まではいやはや長い荒い海上生活で、私は船賃を拂ふ代りに、普通の水夫として働かして貰つた。で、ロンドンの土を踏んだ時には、私は乞食のやうな風體で、懷中には僅一弗あつたばかり、この金で兎に角一晝夜の飢渴と雨露を凌いだが、さて次の一晝夜は全く路頭に迷つたのである。

翌朝の十時頃、私は飢えて疲れて覺束なくもポートランド・プレースを歩いてゐると、乳母車に乘つて通りかゝつた子が一口噛んだばかりの甘さうな大きな梨を溝の中に投込んだ。私は無論立止つて、その泥だらけの寶玉に穴の明く程見入つた。私の口はその爲めに涎を催し、私の胃の腑はその爲めに鳴動した。私の全身はその梨が欲しかつた。が、私がそれを拾はうとしてその方へ關係をつける度毎に、通行人が私の意のあるところを看破る。無論その際は身體を眞直にして平然と構へ、梨のことなんか念頭にないやうに裝つた。こんなことを幾度も起つて、私は梨を手に入れることが出來なかつた。竟に私が恥辱も外聞も一掃して、決然それを鷲掴みに爲兼ねないまで自棄になつた時、後方の窓が明いて、そこから一紳士がから言葉をかけた。

『もし何うぞ此方へ。』

私は恐く立派な取次に案内されて、贅澤づくめの一室へ通つた。そこには年嵩の紳士が二人坐つてゐた。彼等は下僕を戻して、私を席に着かした。見れば丁度朝食が濟んだところで、その狼藉たる殘肴は殆んど私を壓倒し去つた。さうした食物を目の前に控へて、正氣でゐられるか否か疑問だつたけれど、お毒見を仰せつからないから、私は餓い腹へ出來るだけ力を入れてゐるより外なかつた。

さて、これに先だつてこの家には一事件があつたのである。尤もそれに就いては私はずつと後迄何も知らずにゐたが、話の順序として、今こゝで諸君のお耳に入れやう。といふのは數日前この老兄弟の間に一場の議論があつた。年寄の剛情で、お互に眞赤になつて爭つたが果しがつかず、では賭をして黑白を定めやうといふことになつた——これが英國流の物の定め方なのだ。

諸君は御記憶であらう、英蘭銀行は嘗つて一外國との公の取引に關聯して特別の用途に充てる爲め百萬磅の銀行紙幣を二枚發行した。何ういふ理由であつたかその中の一枚だけは使用濟の刻印を捺つたが、もう一枚の方は未だに銀行の金庫に納めてあつた。ところでこの兄弟は無駄話をしてゐる中、閑人だけに、極めて突飛なことが氣にかかり始めた。——それは品性にも分別にも申分のない一外國人が一人の友達もないこのロンドンに漂流したと假定して、[illegible]の百萬磅の紙幣の外に一文の持合せもなく、且つその所有權を證明する道がなかつたら、その男の運命はどうなるだらうといふことで、兄貴は彼は餓死ぬだらうと言ひ、舍弟は否、死なぬと言つた。兄貴はそれこそ寶の持腐りで、彼は即座に捕縛される虞があるから、銀行は固よりその他何處へも呈示することが出來ないと言つた。そこで議論に花が咲いて、遂に舍弟はその男が兎に角その百萬磅で一箇月間の露命を繫き、且つ牢へは入らないといふ主張で、二萬磅の賭けをしやうと申し出ると、兄貴も承知で、舍弟は忽ち銀行へ出懸けて、件の紙幣を買つて來た。何處までも英國人である。骨の髓まで負け嫌ひだ。それから彼の口授によつて、書記の一人が一通の書面を認めた。かくして兄貴と舍弟はそれを受く可き適任者が通りさうなものだと、終日窓の傍に坐つてゐたのである。

正直さうな顔は幾個も通つたが、皆分別を缺いてゐた。又分別ありさうなのは正直さうでなかつた。兩方兼備のものも、少くなかつたが、信に堪へ得る程貧乏でなかつた。又申分なく貧乏なのも多かつたけれども、外國人でなかつた。それで私がやつて來る迄は何時も何處かに缺點があつた。私なら全く誂へ向きだといふことに一決して、彼等は躊躇なく私を選んだのである。私は何の爲に呼込まれたのかを知りたくて、[illegible]に控へてゐた。[illegible]

に質問を始め、間もなく私の一部始終を承知して、竟に私なら間に合ふだらうと言つた。私はお役に立てば實に結構だが、一體何事かと尋ねた。すると、一人が私に封筒を渡して、說明はその中にあると言ふから、私は早速封を切らうとすると、いや、いけない、宿へ持つて行つて、氣をつけて讀みなされ、慌てなさるな、と押し止めた。私は困つた。さうしてもう少しこの問題について論じたかつたが、彼等は聽じない。私は見たところ茶番狂言か何ぞの道具にされるのを好い面の皮と心外に思ひながらも、この際富める人强き人の無禮を憤るやうな境遇にゐないので、成らぬ堪忍の胸を撫るより外なかつた。

私はかの梨を拾つて列强環視の裡にも喫し去つたのであらうに、惜しいかな、既に影も形も見えない。何の事はない、私はこの碌でもない仕事の爲めに大切の梨を失つた勘定である。と思ふとこの人々に對する忌々しさは益々込み上げて來た。私はその家が見えなくなるや否や、封筒を開いて中に紙幣の入つてゐるのに氣がついた！　そこでこの人々に對する私の意見が變つて來た。現金だつて？　さうかも知れぬ。私は一分の猶豫もなく、手紙と紙幣をポケットに押込み、最寄の安飮食店へ飛込んだ。さうして食つたの食はないのつて！　竟にもう入らぬといふ段になつて、私は例の紙幣を取出し、折目を伸ばして、一目見ると危く卒倒するところであつた。五百萬弗！　私は眩暈を催した。

私は正氣に返る前に一分間といふものはその場に坐つたまゝ紙幣に向つて目をショボ／＼させてゐたに相違ない。それから私が先づ氣がついたのはその店の亭主で、彼は眼を紙幣の上に落したまゝ石化してゐた。彼は全身全靈を以て禮拜してゐたが、手足が全く利かぬやうに見えた。然う氣がつくと私は得たり賢しとその際爲さねばならなかつた極めて理性的の行動に出た。即ち紙幣を差出して、無造作にかう言つたのである。

「御亭主、これでお剩錢を。」

すると亭主は始めて本性に返つた。さうして兩替の叶はぬ旨を百方言譯したが、私が何う勸めても紙幣に手を觸れない。而も矢張り怖いものは見たいもので、何時まで目の正月をしてゐても渴を醫すことが出來ぬやうに見えた。さりとて、これを手に取つて見るのは名もなき土塊の人間にあつては、矢張り勿體ないやうな心持がするかして逡巡した。

「厄介で氣の毒だけれど、是非どうかして貰ひたい。くづせまいか？　俺は小いのは少しもない。」

しかし亭主は些つとも構はぬと言つた。僅かのことだからこの次一緒に戴いて苦しくないといふので、私は當分再びこの邊へ來るやうな

ことがないかも知れぬと言ふと、彼はそれは大事ない、何時までも待つ、のみならず何でも御入用の品は時を擇ばず御用立てる、さうして勘定は何時まで引張つても構はぬ、俺だつて二つある目は節穴ぢやない、貴下のやうな金持を信用するに躊躇しない積りだ。一體貴下は些と粹狂が過ぎる、そんな風體をして世の中を擔ぐからお人が惡いと言つた。既にこの時には他の客が入つて來たので亭主は例の物を匿すやうにと私に目くばせをした。さうして私を拜むやうにして戸口まで送つて來た。警察が私を狩出して手傳ひをしてくれない中に、自ら過失を改めたいと思つて、私はその足で例の家へ向つた。私は全く度膽を拔かれて、實際少なからずびくびくものであつた。尤も惡事を働いた覺えは毛頭ない。しかも一磅の積りで百萬磅といふ大金を風來者にやつたと氣がついたら、彼等はお互の近視眼を責めて然る可きだのに、それはせず、狂亂的に私を呪つてゐるだらう、とそれぐらゐのことは推察のつくほど私は十分世故に通じてゐた。私は家に近づくと胸騷ぎが鎭まり始めた。といふのは四邊が全く寂然としてゐたので、さては一件が未だ破れないわいと思つたのである。私は玄關の鈴を鳴らした。先刻の取次が出て來た。私は先刻の紳士に面會を求めた。

『最早お立ちになりました。』

とそれら數等社會階級の者の[illegible]かな口調で言つた。

『お立ちに？　何處へ？』

『旅に。』

『何處へですか？』

『大陸、でせう。』

『大陸？』

『然樣。』

『何處から？何の航路で？』

『存じません。』

『何時お歸りでせう？』

『一箇月して、と仰有いましたが。』

『一箇月！　どうも驚く。何うかして言傳をする法はありませんか？　大切の用事なのですが。』

『どうも。何處にお在になるか一向手がかりがありません。』

『では何人かお家族の方にお目にかゝりたいのですが。』

『いや、そのお家族の方もお不在で、洋行なすつてから最早五六箇月になります――埃及だの印度だのへ、へい。』

『實は飛んでもない行違ひが出來してゐますから、晩方までにはお歸りになるだらうと存じます。何か私がお玄關に上つたことを申上げて下さい。即はこのことを[illegible]

ら、必ず御心配なさらぬやうにお傳へ下さいませ。』

『若しお歸りになつたら然う申上げませうが、お歸りはありますまいよ。何でも一時間ばかりすると貴下が何か問合せにいらつしやるだらうつて仰有つてゐましたが、正直の話、何も行違ひなんか無いのですから、主人達は矢張り豫定通りにお歸りになつて、貴下をお待ち受け致すのでございませう。』

そこで私は諦めて引返すより外なかつた。私は狐につまゝれたやうで、殆んど途方に暮れてしまつた。彼等は豫定通りに歸ると言ふ。一體何ういふ意味だらう？ あゝ、手紙を見れば分ると言つた。或は分るかも知れぬ。私は手紙の方は全く忘れてゐたのである。それで、取出して讀むとかうであつた。

拜啓、お見受け申すところ、貴下は悧巧で正直の人に御座候。小生等は貴下を貧乏人且つ外國人と認め申候。金子若干封入致候。これは無利息にて向ふ一箇月間御用立申上候間、期限參り候節、拙宅まで御一報被下度候。小生は貴下の身の上につきて賭を致居り、若し小生の勝利と相成らば小生微力の及ぶ範圍に於て何なりと貴下御熟練御堪能の可然地位御周旋申上度心組に有之候。早々頓首。

署名も番地も日附もない。

吉か凶か、兎に角ここに私が足を突込むべき係蹄がある。讀者諸君はこれに先だつての出來事を既に御承知だけれど、當時私は何の手掛りもなかつたので、百事悉く暗中模索の體であつた。何ういふわけか、又私を害しやうといふのか、それとも親切心のあつてすることか、毛頭見越しがつかず、私は公園へ入り込んで、さて、何うしてくれやうか、全體この乃公を何うしやうといふのだらう、と思案投首をベンチの上の胴の上に据ゑた。

一時間の後、私の自問自答はかういふ判決に結晶してゐた。

この人々は或は私に善意を持つてゐるのかも知れぬ。或は惡意を持つてゐるのかも知れぬ。何方と判斷して可いか何うしても分らぬ——全く分らぬとして置いて、彼等は目下或種の冗談事だか計畫だか實驗だかをやつてゐる。その何事たるかはとんと見當がつかぬ——それも棄てゝ置く。尙ほ彼等は私の身體で博奕をしてゐるといふが、全體何ういふ勝負事だらうか、これも全く知るに由なしで、打捨つて置くより外ない。これで分らない部分だけは片付いた。殘餘は目に見えた話である。若し私が英蘭銀行へ出かけてこの紙幣を持主の仕方につけ込んでくれと賴むなら、彼等は宜しいと引受けるだらう。何となれば

私は知らないが、銀行員は持主を知つてゐる。けれども同時に彼等は何うして私がこの紙幣を手に入れたかを尋ねるだらう。さうして若し眞實を答へれば、私は精神病院へ送られ、嘘を吐けば早速監獄ものである。又若し私がこの紙幣を何處かの銀行へ預入れるか、或は質に置くかしても、矢張り同じ結果が隨つて起る。よつて、この人々の謂るまで私は厭でも應でもこの巨大い荷物を擔がねばならぬ。これは私に取つては一攫みの灰と同樣無用のものである。しかも私はこれを大切にし、保管せねばならぬ。私は手放さうとしても手放すことが出來ぬ。といふのは正直な市民は無論追剝でもこれを受取ること乃至これに關係を持つことを辭退するに定つてゐる。この故にこの兄弟は安心たものである。若し私がこの紙幣を失しても燃しても彼等は矢張り安全である。何となれば彼等は支拂ひを止めることが出來る。さうして銀行は彼等に損をかけない。しかし私は給金を貰はず利分も取らずに、差當り一箇月の苦勞を引受けてしまつた——何の賭けかそれに勝つ手傳ひが出來て約束の地位に有つけぬ限りは全然只奉公である。私はその地位が欲しい。あれぐらゐの彼等になると、その勢力範圍に貰ひ甲斐のある地位を澤山持つてゐるものだ。

私はその地位について種々と考へ始めた。私の野心は動き出した。さういふ地位なら職務に[illegible]なからう。一[illegible]勝すると[illegible]るのだな。始まれば後は最早大丈夫金の脇差、等と私は間もなく三國一の機嫌で、既にこの時には再び往來を歩いてゐた。ちらりと仕立屋の店が目につくと、私は忽ちこの襤褸を振り落してもう一遍人並の風體をしたいといふ熱烈な慾望に囚へられた。けれどそんなことが出來やうか？　出來ない。私は百萬磅の外この人の世に鐚一文も持つてゐない。しかし誘惑の迫害はなかなか烈しくて、私はこの男らしい奮鬪中、店の前を六度行きつ戻りつした後、竟に負けてしまつた。いや、負けざるを得なかつた。私は何か注文外れの出來合はなからうかと尋ねた。私が言葉を掛けた奴は隣の奴を顋で指して、私には何等の返辭もしない。私は指された奴の方へ行つた。すると此奴も亦他の奴を顋で指して、一言もいはない。私は又指された奴の方へ行つた。奴は口は[illegible]く、

「お待ちなさいよ。」

私は彼の出かけた仕事の片付くまで神妙に待つた。それから彼は私を裏手の一室へ伴つて、山のやうに積んだ不合格の服を掻き廻した揚句、飛切の安物を私の爲めに選定してくれた。私は早速着て見た。能く合はぬ。のみならず一向見榮えがしない。しかし遠に新しいから私は買ひたくて堪らなかつた。で、私は[illegible]を[illegible]さずに、只[illegible]、少々[illegible]つて、かう言つた。

「どうでせう、勘定を當分待つて戴けると大變好都合なのですが。私は小いのは少しも持合せがない。」

すると野郎は世にも嘲弄的な面がまちを建立してから吐かした。

「持合せがありませんか？　成程、無論小いのはお持合せがございますまいて。旦那のやうなお方は得て大いのばかりお持合せでございますからな。」

私はムッとした。

「番頭さん、さう何時も服裝ばかりで人の身上の判斷はして貰ふまいよ。いくら貧乏したつて、俺はこの服一着ぐらゐの拂ひには事を缺かさない積りだ。俺は唯大い紙幣を兩替させて面倒かけちや氣の毒と思つて言つたことだ。」

すると奴さんは少々態度を改めて、未だ乙う様子をしてゐたが、かう辯解した。

「何もそんな積りで申したのぢやありませんが、お咎めがございますから一言申上げます。私共では御覽の通りかうして歴乎と營業をして居りますのに旦那のお持合せがくづせなからうなんては、些つと立入り過ぎたお話ぢあなからうかと存じます。御心配は御無用。私共では立派に兩替が叶ひます。」

即ち私は番頭に紙幣を突付けて、

「いや、それは好都合だ。惡いことを言つたね。」

「どうした？　どうしたんだ？　どうかしたのか？」

と忽ち店の主人が、番頭を目がけて駈付けた。私はいと物靜かに、

「何うもありませんよ。私はお剩錢を待つてゐるのです。」

「これ〳〵、早くこの人にお剩錢を上げろ。トッド、早くお剩錢を。」

紙幣を手にしたまゝ凝結して銅像のやうに立つてゐたトッドは、纔かにから答へた。

「お剩錢を上げろ！　口でさう仰有るのは譯がありませんや。まあ、この紙幣を御自分で御覽なさいませ。」

店主は一目見ると、低いながらも力の籠つてゐる口笛を吹いた。それから山なす出來合服の中へ逆潜りをして、憤つてゐるやうに絕えず口小言を言ひながら、一つ一つ撥ね退け始めた。

「大金持を捉へてこんな二束三文を押付けるなつて、トッドは馬鹿だ。生來の馬鹿だから仕方がない。何時でもこんな拙策ばかりして、店から金持を追拂つてしまふ。金持ちと宿無しの辨別がない。何時でもさうだ。あゝ此品此品、此處にゐたか。さあ、旦那様、何うぞそれはお脫ぎになつて、火にでもくべて下さい。それから御願ひでございますから、この襯衣をお召しになつて、これをお試し下さいませ。これこそ誂へ向きの品で、色合にも地質にも申分なく、地味で高尚で、

はい、ある外國の親王様の——御承知でございませう、それ、ハリファックスのホスポダー殿下の御注文で仕立てましたが、お母君様がお殁りになりさうだとかで、これはその儘にして喪服をお拵へにならなければならないやうなことになりました。ところが、そのお母君様というのがその後御本復になつてしまひましたので……。尤も手前共では決してそれを兎や角存じては居りませぬ。どうせこの世の中といふ奴はさう〳〵手前共の思はく通りに參るものでは……御覽なさいませ、ズボンは上等でございます。宛然切つて嵌めたやうで。さあ、チヨツキでございます。あゝ、これもきつちりです。今度は上衣をお召し下さい。まあ、御覽なさいませ、どうでせう、完全——無缺とはかういふことでございませうか？　手前もこの商賣を始めてから最早長いことになりますが、こんな成功は今日が初會でございます。』

私は滿足の意を表した。

『旦那樣、上等でございます。全く上等でございますよ。當座のお間に合せには十分でございます。けれども旦那樣、御寸法を伺つてお仕立申上げたらどんなものが出來ませうか、どうぞお待ち下さいませ。これ、トツド、手帳とペンだよ。書きつけておくれ。おズボンのお長さが三十二だよ。』

輕といふ譯で、[illegible]に寸法を計つてしまた、フロック、燕尾服、モーニング、シアーツ、何から何まで誂へてゐた。私は漸く口をきく機會を捉へて、

『けれども何ですよ。私はそんな注文は出來ないのですよ。この紙幣をくづして戴くか、無期限に待つて戴かなくちや。』

『無期限に！　無期限ぢや未だ意味が弱うございます。永遠にと申しませう。これ、トツド、早くお買上の品々を揃へて、時を移さずお屋敷までお屆け申上げろ。外のお客様には待つて戴け。お屋敷の番地を書留めて……』

『いや、俺は宿替を思立つてゐるので、今度又通り掛つた時新しい番地をお知らせすることとしやう。』

『宜しうございますとも、まあ、お待ち下さい。お見送り申上げませう。いや、どう仕りまして、左樣ならば、お靜かに。へい〳〵。』

さて、これから何んなことが起るかは諸君も想像がつくであらう。自然私は何でも欲しい物を買つて、これでお剩錢をといふやうなことにならざるを得なかつた。それで私はそれから一週間の中に欲しいと思ふ必要贅澤の品を有り餘る程調へ、本城をハノバー町の上等ホテルに構へた。夕食はそこで認めるが、朝食には相變らずハリスの安飲食店へ行く——此處は例の[illegible]の藝術へをした家なので、[illegible]は[illegible]はハリス[illegible]、ハーノ[illegible]ある。チヨフキ[illegible]ツケットに[illegible]

入れてる外國の一氣紛れ者があの店の守本尊だといふ事實は彼方此方へ擴がつた。これで十分である。その日ぐらしのやつとこさから、見る〱彼の店は大評判になつて、毎日お客が押合ふといふ繁昌。ハリスは無論恩を忘れず、私に貸金を强ひる。私も拒み兼ねるといふ譯で、事實は一文なしでありながら、毛頭金に不自由なく、貴族か金持のやうな生活をしてゐた。どうせ間もなく身の破滅が來ると思つたが、今は乘りかけた船だ、兎に角對岸まで漕ぎつけないと流されてしまふ。事態は全くの茶番狂言であつたが、それには考へて見ると、悾りしてはゐられないやうな、何となく恐ろしいやうな、更に言へば悲劇のやうな半面があつた。日が暮れて暗くなると、その悲劇的半面が何時も目の前に現れて來る。お前は危いぞと戒める、大變だぞと驚かす。それで、輾轉反側、安眠も難かつたのである。しかし日の光と共にこの悲劇的要素は消失せてしまふ。すると又陽氣なもので、私は空中を歩いてゐるやうだ。酒に醉つたやうに、目の廻る程世の中が面白い。

それも當然のことだ。期せずしてこの世界の大都の一名物となつてしまつて、私の面くらひ加減てつたら尋常一樣ぢやない。手に取つて見る新聞といふ新聞――英蘇愛三國語の――には必ず『札チョツキの紳士』に關する記事並びにその最近の言行が載つてゐる。それも最初は個人欄の本行を汚すに過ぎなかつたが、次には爵士の上、次には從男爵の上、次には男爵の上と、虚名の擴がると共にそれからそれと順順に追越して、竟に私は梯子の頂上に達し、其處で王宮の公爵と總管長を除いては、總ての貴族や僧官の上席を占めることとなつた。しかしながらこれ迄のところは眞正の名聲ぢやない。單に虚名、否、寧ろ醜名を博したに過ぎない。ところへ最後に仕上げの一刷毛が來て、私の虚名を最早動かし難い名聲に化してくれた。即ち雜誌『パンチ』が私のポンチ繪を描いたのである！最早私は價値の定つた人間だ。私の地位は確かなものだ。世間は尙ほ私に譃ふかも知れぬ。しかし譃ふにしても禮は缺かさずに、愼んで譃ふ。私に向つて微笑むことは出來るが、嘲笑ふことは出來ない。そんな時期は最早疾うに過ぎてしまつたのである。『パンチ』は私がボロ着物の羽ばたきをしながら、ロンドン塔を何程で賣るかと談判してゐる所を描いた。考へても見たまへ。今迄在るか無いかも分らなかつた一靑年が、一朝にしてその口から洩れる言葉は到るところで繰り返される。一寸外へ出ても、『や、彼處へ行く、彼だ〱』と世間を騷がせる。朝飯を喰べるにも見物人に取卷かれる。劇場の席に坐れば、四方八方から雙眼鏡で狙はれる。實際私は終日光榮の中を泳ぎ廻つてゐたのである。

御承知の通り私は尙ほ例のボロ着物を仕舞つて置いた。さうして時時それを着て出かけた。これは小買物をして一騷動を搔かされて、次

に百萬磅で無識者を射殺するといふ昔の面白味が忘れ兼ねたからである。然るに今はこの道樂を續けることも叶はなくなつた。納入新聞は競つて私の裝束を紹介してゐるから、ボロを着て出歩くと直ぐに分る、人立がする、それがぞろ〳〵跟いて來る。さうして買物をしやうとすると、私が百萬磅をつきつけぬ中に先方から、店全體を明渡しませうと下から出る。

名を成してから十日目頃と記憶する。私は米國公使を訪問して故國の旗に義務を果す爲め公使館へ出頭した。公使は私の現況相當の熱情を以て私を迎へてくれた。何故もつと早く來て吳れなかつた。横着な男だ。いや、どうしても堪忍相成らぬ。但し拙者の堪忍を乞ふには唯一の方法があるから御傳授申上やう。それは今晩の夜會に幸ひ病氣で出席出來ぬ者が一人あるから貴下に於てその空席を塞いでくれることであると言つた。私は承知の旨を答へ、引續いて談話を始めた。ところが悪いことは出來ないもので、公使は私の父とは竹馬の友、長じてはエール大學での同窓、その後父の死ぬ時まで刎頸の交を續けたといふことが分つた。さういふ譯で公使は閑の時にはなるべく拙者の宅へ來てくれるやうにと言つた。無論私は承知した。

事實私は承知どころか大喜びであつた。破滅が來る時彼は何とかして私を破滅から救つてくれるだらう。何うして救つてくれるか分らないか、或は何とか方法を案じてくれるかも知れぬ。しかし私はロンドンに於ける私の恐ろしい行動の初期に於てならば打明けるに躊躇しなかつた事實を、今となつては打明ける勇氣がなかつた。然り、この期に及んでは到底打明ける勇氣はない。私は餘りこだはつてしまつた。私はかうして新しい友達に身上談をするには餘り深みに入り込んでゐる。尤も私の見たところでは丈が立たないといふ程の深みぢやない、何となれば御承知の通り私は借金をしてゐるが、私は念を入れて收入以内で——即ち給料の額を越さずに事を辨じてゐた。勿論その給料といふのが何程になるのだか分らないが、推量して見るだけの土臺は十分あつた。即ち若し私が賭て勝てばあの老紳士の勢力範圍で地位の選擇が出來る筈、それも熟練堪能といふ條件だつたが、この點に於て私は毛頭懸念がなかつた。尚ほ賭といふことに就いても、私は一向心配しなかつた。私は平常開運が強い。さて、私の豫想は一年六百磅から千磅であつた。假に初年を六百磅として、それからは實力で年々昇級上りに竟に千といふ額に達する。現在では私は唯初年の給料だけ借金してゐる。世人は皆私に金を用立てやうといつて爭つたが、私は種々口實を構へて殆んど悉く斥けるのに大骨を折つた。それで負債は三百磅、これが純借金で、餘三百磅 この方は所持金と賭金だから未だ[illegible]やうなものだ。一年目の給料へ[illegible]

事に過せる。この點は大に氣をつけてやる積りだ。一箇月が終つて私の傭主が旅から歸つて來れば私は最早大丈夫だ。私は直ぐに二年分の給料を債權者の間に割當てゝ、早速正業に從事する。

夜會は出席者十四人、樂しい會合であつた。ショアデッチ公爵、同令夫人、同令孃、ニウゲイト伯爵、同令夫人、チープサイド子爵、ブラサーカイト卿、同令夫人、尚ほ爵位のないのが男女數名、それに公使夫妻と娘、娘の逗留客ポーシャ・ランガム。これは當年二十二才の英國婦人で私は二分間にして彼女に思ひを寄せ、彼女も私を憎からず思ひ込んだ――これは眼鏡を掛けずとも明白に認め得る事實であつた。外に尚ほ一人客があつた。これはアメリカ人で――いや話が一足飛びをした。一同應接室に凝と席を占めて、晩餐を甘く喰べる爲めに食慾を研ぎつゝ、後れ馳せの人に冷かな眼を注いでゐると、下僕がかう取次いだ。

「ロイド・ヘスチンチス氏でございます。」

常套の辭儀が終つた刹那、ヘスチングスは私の顏を見て、から懇ろに手を伸ばした儘一直線にやつて來た。それから握手をする所を急に思止つて、困つた顏付で、

「失禮でございますが、私は貴下に見覺えがあるやうに思はれますが。」

「やあ、君か、見覺えがあるもないものだ。」

「いや、君があの――あの？」

「札チョッキの怪物か？ さうだ、さうだよ。綽名を使つても構はない。最早慣れつこになつて平氣なものだ。」

「さうか。さうだつたか、どうも驚く。君の名前があの綽名と一緒に出てゐるのを二三度見かけたことがあつたけれど、まさか君があのヘンリー・アダムスだらうとは夢にも思はなかつた。桑港でブレーク・ホプキンスの番頭をしてゐて、それ、小遣取だといつて、毎晩晩くまで例の鑛山の擴張の書類や統計を手傳に來てくれたのは、かうつと、六箇月前になるね。その君にこのロンドンで偶然出會さうとは全く思ひも掛けない。それも一寸の間にさうした途轍もない大金持になつてさ、大評判でさ、まるでアラビアン・ナイトだ。おい君、僕はてんから信用出來ん。狐に摘まれたやうだ待ち給へ、僕は眩暈がして來た。」

「うまく言ふが、ロイド君、君だつて僕に劣らない[illegible]らしい[illegible]。僕こそ合點が行かない。」

「いや、僕こそ何が何だか分らない。[illegible]」

とだけ。僕と一緒に組合の[illegible]

「いゝや、極樂[illegible]だつたよ。」

「さう／＼、極樂[illegible]。[illegible]

[illegible]

んでから、僕が一緒にロンドンへ來たまへといつて君を勸誘した。君の暇を貰ふ方も萬端の費用も僕が請合つて、尚ほ擴張鑛山が思慮通りに賣れた曉には、その上のお禮をするといふ條件だつたが、君は僕の言ふことを聽かなかつた。成功の見込がないと言つた。それから折角のところで店の方の手を明ける譯に行かない、それに歸つてから又新規蒔直しで忙しい思ひをするのが厭だと言つた。さうして置いて、君はちやんと此處に來てゐる。をかしいぢやないか？　どうして此方へ來るやうになつたのだい？　何が當つてそんなお伽噺のやうな成功をしたのだい？』

『全く偶然だ。話は長くなる、小說だね、謂はゞ、悉皆話して聞かせたいが、今はいけない』

『何時？』

『月末まで待ち給へ。』

『ちや未だ二週間からある。そんなに氣を長く待てるものか。一週間にしたまへ。』

『駄目だ。駄目な譯はその中に分る。ところで君の方は一體何うだい？　酬賞は？』

すると今まで元氣好かつたロイドは急に悄け返へつて、溜息を吐きながら、

『君は眞正に豫言者だよ。僕は來なければよかつたと後悔してゐる。僕は實はこのことは話したくないのだ。』

『まあ話したまへ。此處が濟んでから今夜は僕のところへ來て泊り給へ。さうして一部始終を聞かうぢやないか。』

『行つてもいゝのかい？　擔ぐんぢやなからうね。』

と彼の眼には淚が浮んだ。

『いゝとも、僕は始めから終まで聞きたい。』

『有難い！　この期に及んで僕なり僕の事業なりに同情してくれる者があらうとは、今が今まで思ひがけなかつた。僕はこの膝を八重に折つてお禮をいひたいくらゐだ。』

とロイドは私の手を堅く握つて雀躍した。それから食堂の開くのを待つ間、彼は全然變つた快活な男になつた。

食堂は開かなかつた。否、開いたけれど、厄介な英國流儀の下に版で捺したやうに起る常套陳腐のことに惱まされた。即ち何人が先に立つて入るかを定めることが出來ない。隨つて食堂は開かないのも同樣である。押し並べて英國人は晩餐に招かれる前に家で晩餐を認める人これは先方へ行つてからどんなことかも知れぬと心得てゐるからである。しかしこんなことを警戒してくれる人もないので、外國人は安閑としてこの陷穽に陷る。すると今度の場合に何人も迷惑を蒙つたかつ

た。といふのはヘスチンゲスを除いては皆々その道の黒人であるから、既にちやんと食事を濟ましてから出頭してゐる。しかしてこのヘスチンゲスと雖も、招待を受ける際に英國流で食事の支度はしてないからといふことを公使から懇々言含められてゐたのであつた。それはさうと順次は兎に角融通をつけて、各々一貴婦人を伴ひ、食堂に進みは進んだが、こゝに又再び爭ひが起つた。ショアデッチ公爵は、アメリカ公使は單に一國民を代表するばかりで國王を代表してゐないから俺の方が當然上席だといつて、食卓の一番上席を占めにかゝつた。しかし今度は私が不服で、私も私の權利を主張して、いつかな讓らない。御承知の通り新聞の個人欄では私は公爵連中と肩を並べてゐる。私はその旨を述べて、この度は上席を要求した。無論それでは問題が落着せず、公爵もナカ〳〵負けぬ男で、竟に名門とか先祖とかいふ文字を楯に取つて蒐つて來た。彼が國祖ウイリアム征服王の名を喋々してアメリカを若いといへば、拙者はアダムでござる、名の示す通り拙者はアダムから連綿と血を引いたもの、然るにウイリアムは何うぢや？ アダムの分家ではござらぬか？ 近くノルマン時代に源を發してゐるから、謂はゞ成上りの三等平民に外ならぬと遣り返す。そこで我々は又々客間へ行列を引返し、そこで鰯の皿と苺の立食をした。此處では席次の宗教は前と異つて簡單を極め、一番身分の上の者が二人、銀貨を指先で彈いて、それが落ちた時に表が上か裏が上かと當てた人から先に食ふ。それから次の二人が彈く、食ふ、又次の二人が彈くといふ順である。食後食卓が持ち搬ばれ、その上で一勝負六ペンス賭けのトランプが始まつた。英國人は如何なる勝負事も決して唯ではやらない。何か得るところか失ふところか——何方でも敢て構はぬが——それがなくては彼等は勝負事を絶體的にしない。

我々は樂しかつた。少くとも私達二人——ランガム孃と私は慥かに樂しかつた。私は自分の手にある札の勘定が出來ない程彼女に見惚れてゐた。彼女とても同樣の狀態で、二人は負け續けに負けた。私は彼女に對しては迷信的に忠實で正直で、少しの腹藏もなかつた。私はこの世に例の評判の百萬磅の外は一文の所持金もなく、その百萬磅も實は自分のものではないことを打明け、それから噺を一段低くして、出發以來の一部始終を語つて聞かせると、彼女は笑ふや笑はぬでなかつた。一體何がさうをかしいのか私には分らなかつたが、兎に角戀人は笑ひ轉げた。私は相手に呼吸つぎをさせる爲めに時々談話を休めざるを得なかつた。それにしても何故彼女はかう笑ふのだらう。私には少しも笑ひ事ぢやない。事實私はこんな情けない話は他に例がないと思つてゐる。短言すれば、心痛と煩悶と恐怖の實歷に外ならない。しかるにそれが今述べたやうな意外の結果を傾げざるを得なかつた。それ

で彼女は面白くもないことをかく面白がることの出來る女だと思つた時、何も惚氣を言ふ譯ではないが、私はいや増して彼女が慕はしくなつた。といふのは昨今の形勢によつて察するに、私も早晩妻を娶る身、同じ娶るならば何うかかうした快活な女が欲しい。無論私は私の月給に追付くまでここ二年の間待つて貰はねばならぬと彼女に話した。しかし彼女はそんなことは毛頭意に介せず、唯々心して出來る丈け金遣ひを内輪にし、三年目の月給に借金を持込まぬやうにしてくれと頼んだ。それから彼女は少しく不安の色を現はし、或は私達は感違ひをして、第一年の月給を餘り高く見積つてゐるのではなからうかと言つた。これは眞に能く氣のついた注意で、私も幾分か確信を動かされたが、同時に私の商人氣質を鼓舞するの端となつて、私は無遠慮にかう訊いて見た。

「ポーシヤさん、私が例の老人達にお目にかかる日に貴孃の御同行は叶ひませんか知ら？」

彼女は稍ためらつたが、かう答へた。

「さうですねえ……若し私のお供が貴郎の好都合だと仰有るなら。ですけれど、一體私がお供をして差支ないものでせうか？」

「さあ、どうでせうか、少し工合が悪いかとも思ひますが、御一緒と御一緒でないとは就職の方の都合に大影響して來ます。」

「では善かれ悪しかれ、兎に角お供を申し上げることと致しませう。」

と心から言放つて、

「まあ嬉しい！　少しでも貴郎のお役に立つかと思ふと！」

「少しどころぢやございません。貴孃のやうなお美しい方の後楯がありますと、私はこの老人方が降參するまで月給の方の談合を手厳しくすることが出來ます。さうして貴孃が澄まし返つて目の前に控へて居て御覧なさい。先方でも二の矢を繼ぐのにナカナカ骨が折れますからな。」

忽ち彼女の頬に若い温い血が上つて、彼女の眼は樂しさうに輝いた。

「うまいことばかり仰有つて！　私をお擽てなさる積りで種々のことを仰有るのは私ちやんと知つてゐます。けれども私お供してよ。好いお薬になりますわ。他の人は私の様にさう甘々と擔がれませんわ。」

私の彼等に對する要求が解けたか？　彼等に對する信用が又戻つて來たか？　それは私が心窃かにその場で私の初年の月給を二千磅に上げてしまつたといふ事實で判斷して貰ひたい。しかし私は彼女には從う話さず、後日驚かしてやる積りで心の中に納めて置いた。

家に歸る途すから、私は天にも昇る思ひだつた。ヘスチングスは頻りと喋つたが、私は一言も聞かない。二人して私事務所の玄關に着つた

時、彼が私の生活を大袈裟だの贅澤だのといつて頻りに嘆賞してゐたので、私は不圖我に返つた。

『まあ暫く此處に立たして飽きるまで見させてくれ給へ。まるで王侯の生活ぢやないか。宮殿その儘だ。石炭が好い色に燃えてゐる。夜食の支度が見事に出來てゐる。何でも欲しいものづくめだ。ヘンリー君、これは實に君の成功を察しさせるばかりじやない。君の富を察しさせるばかりぢやない。僕は君の生活を見て切實に僕の貧乏さを感じる。僕は失敗したんだ。蹴られたんだ。零落したんだ！』

これは舍して貰ひたかつた。そんなことを言はれると私は慄然として來る。戀の醉も忽ち醒めてしまつて、私は噴火口を下に一分板の上に立つてゐるやうな危い心持になつて來た。たつた今まで夢とは知らずに夢を見てゐた――少くとも一分前までは自分の現狀を全く忘れて好い心持でゐたのに、やれ〳〵又ござつたか！　借金は首つたけ、しかも貯蓄は天にも地にも一文なし。尙ほその上のことには行末長い美しい娘の幸福を一身に引受けて、しかも空賴みの月給の外何も前途にない。私こそ取返しもつかぬ零落だ！　取返しのつかぬ……

『ヘンリー君、君の毎日の收入の……』

『何？　僕の收入！　まあ此處に坐つて一杯やり給へ。さあ一杯。いや、君は腹が空つてゐるんだつけな、ぢや腹拵へから先に、さあ坐つたく〳〵！』

『いや、何も喉へは通らぬ。それどころぢやない。この二三日僕は何も喰べない。唯酒だけは倒れるまで飲む。さあ、一杯受けやう。』

『何時でもだ。お相伴する。さあ、ロイド君、いゝか？　僕がかうして酒番をする間に君は一部始終を話し給へ。』

『話せつて？　又か？』

『又かつて？　そりや何ういふ意味か？』

『何ういふ意味かつて、もう一遍僕の話を聞きたいつて言ふことか？』

『もう一遍聞きたいかつて？　一遍にも二遍にも君は未だ一向話しちやゐないぢやないか？』

『馬鹿あ言つちや困る。今此處へ來る途々一部始終を話して聞かせたぢやないか。どうも物覺えの惡いのに驚いてしまふ。唯今話したばかりだ！』

『君がか？』

『僕がさ。』

『さうだつたか？　何うも失敬した！　僕は一言も聞かなかつた。』

『ヘンリー君、これは聞捨てにならんね。非道い男だ、一體君は今夜公使館で何をして來たか、さあキリ〳〵此處で白狀したまへ！』

そこで私はさてこそと思ひ當つて、男らしく萬事彼に告白した。

『僕は美しい娘を生擒にして來た。』

すると彼は矢庭に私に摺り寄り、私達は手の痛くなる程握手をした。思ひ合はして見ると彼の談話は途すがら三哩も續いてゐる。それを一言も聞かなかつた私を敢て咎めもせず、何處までも好く出來た男で、彼は診察を受ける患者のやうに几帳面に其處に坐つて、失敗談を今一度繰り返した。それは掻い摘んでいふとかういふことに歸する。彼は一大好機と思つたものを提げて英國に渡つた。彼はゴールド・アンド・カーリー擴張鑛山をその選定人の爲めに賣りたいが、併し百萬弗に騰るまでは手放さぬといふ兩立を持つてゐた。彼は一生懸命に運動した、知つてゐる手蔓は悉く引張つて見た。有りとあらゆる正當の手段を用ひ盡した。財産を殆んど全部この取引に注込んでしまつた。しかも一人の資本家にも出會さず、彼の兩立の期間は满れ月末に切れるといふ破目になつてゐた。一言すれば彼は破産したのである。語り終つて彼は涙を流しながら、

『ヘンリー君、助けてくれ、君なら助けることが出來る。今の場合僕を助ける力のあるのはこの廣い世界に君ばかりだ。助けてくれるか？ない、君、助けてくれられないか？』

『何うして助けるのか、まあ言つて見給へ。』

『兩立を百萬弗で買つて、歸りの旅費を借してくれ給へ、お願ひだ！』

私は一種の烈しい苦悶を覺えた。私は危くから叫び出す所だつた。

『ロイド君、助けるの助けないのと言つて、僕自らが貧窮人だ。一文なしで動きのとれぬほど借金を背負つてゐる。』

しかし白熱のやうな觀念が私の腦裡に閃めいて、私は堅く齒を噛み締め、竟に私が資本家のやうに冷靜になるまで持ち耐へた。それから私は商務的の泰然たる態度でから言つた。

『ロイド君助けて上げる。』

『有難い！　もう助つたと同樣だ。何とも御禮の言ひやうがない！若し將來……』

『まあ僕に言はせ給へ、ロイド君、助けるには助けるが、君の言ふ條件で助けるのぢやない。一生懸命働いて、さんざ苦勞をした揚句に、そんな眞似をしたんぢや君の損になる。それに僕が鑛山を買つても仕方がない。そんなものを買はずとも、このロンドンといふ商業の中心には資本の運轉法は幾何もある。無論僕はその鑛山のことはよく承知してゐる。その價値の測り難いことも先刻心得てゐる。若し必要があるなら何人の前へ出てもさう誓ふことが出來る。ところで、ロイド君、いゝか、君は僕の名をいくらでも利用し[illegible]

間の中に三百萬弗で賣るのだ。いや、僕が必ず賣らせる、さうして利益は半々に分けることとしよう。』

「見よ、ロイド、ヘスチングスは狂喜の餘りに天手古を舞ひ出し、若し私が取捉へて縛らなかつたら、彼は室の中の品物を悉く壊しこしまうところであつた。

それから彼はから言ひながら大滿足の體で少時その場に躍つて[illegible]た。

『君の名は利用[illegible]

[illegible]

てやる爲めに取置とした。私達は唯月給の[illegible]話をした。月給と[illegible]の外は何事も話さなかつた。或時は戀愛、或時は月給、或時は嫉妬と月給を一緒に論じた。公使夫人及令嬢は私達の小事件に好意を表し、なるべく私達の邪魔をせぬやう、又公使が私達の關係を嗅ぎつけぬやうに、陰になり陽になつて庇つてくれた——その[illegible]は今も深く感謝するところである。

[illegible]この月が終つた時に、私の名はロンドン地方銀行の帳簿の貸方[illegible]といふ數字と共に記入され、ヘスチングスの名も同樣同額に[illegible]私は上等の平常着に出立ち、ポートランドプレースの[illegible]その邊の形勢によつて、最早私の鳥の籠[illegible]、直に公使の家に驅けつけて婦人を拉し、私達[illegible]彼女[illegible]

ます。』

　それで私は途すがら彼女の勇氣を鼓舞せねばならなかつた。彼女は又彼女で頻りにかういふ哀願を繰返してゐた。

『眞正にお氣をつけ下さいよ。餘り大袈裟な御要求をなさると、却つて給料は一ペニーも出さない等といふことになりますからね？　すれば私達は何うなるでせうね？　何も生活の道がないのですから。』

　私達は前と同一の下僕に取次がれ、例の二老紳士は果して在宅であつた。彼等が私が女性を伴つて來たつたのに言ふまでもなく一驚を喫したが、私はかう言つた。

「何も御心配はございません。これは私の未來の妻でございます。」

　さうして私は彼女を彼等に紹介し、且つ彼等の名を呼んだ。しかし彼等は私に紳士録を調べるぐらゐの智慧はあると解してか、一向に驚いた様子も見せなかつた。次いで彼等は私達に席を與へ、私に向つて丁寧に、又彼女に對してはその當惑の有様をくつろがせる爲め、專ら斡旋に務めた。それから私が言つた。

「お二方、私は御報告に罷り出ました。」

「よくお出下すつた。實は待つて居たところです。」

と私に親展の方の老人が言つた。

「御蔭で私は、例のアベルとの賭を直ぐに決めることが出來る。若しもあなたが私の妻になるやうに賭けた勝負にして下すつたなら、私はあなたに私の力の及ぶ範圍で何たりと都合の好い地位を周旋して差上げる。何うですか、例の紙幣は持つて居ますか？」

『この通り無事で此處にございます。』

と私は百萬磅を彼に手渡しした。

『さあ、俺が勝つた！』

と彼は絶叫して、アベルの背中を叩き、

「これ、アベル、どうぢや、どうぢや？」

「一言もない。大將この通り無事息災でゐる。俺は二萬磅棒に振つてしまつた。がまさかかうなるとは思ひがけなかつた。」

「私は未だその上の御報告がございます。」

と私が割入つて、

「長い／＼御報告がございますから、又その中に出直しまして、一箇月の經驗を一部始終ゆる／＼とお聞きに入れませう。まるで小説です。どうも種々のことに出合ひました。唯今のところはこれを御一覧下さいませ。」

「何ですか？　これは二十萬磅の預金證書。あなたのですか？」

「はい、私ので。御預けのお金を二十日間都合よく運轉した結果でございます。尤も運轉と申しましても、[illegible]、これ[illegible]

新紙をと例の紙幣を見せつけるだけのことで。』
『何うも難く。俺は眉毛へ唾をつけにやならぬて。』
『いや、何でもないことで。私が證明をして差上げませう。すべて證據つきでなければ、私の言葉は一切お取上げになりますな。』
しかし今度はポーシャが吃驚一番する順番で、彼女はさなきだに大きな眼を広く瞠つて、かう言つた。
『まあ、ヘンリーさん、それは眞正にあなたのお金？ それならあなたは私を騙してゐなすつたのね？』
『實はまあそんな塩梅合のものだが、まあいゝさ、堪忍するさ、私も少少考へがあつてしたことだ。』
彼女は口を尖らせて、又言つた。
『さう獨り合點ばかりなさるものぢやなくつてよ。今の今まで私を騙して置くなんて、眞正にお人の惡い！』
『まあいゝさ、まあいゝさ。勘忍して置くさ、眞の冗談づくでしたことだ、さあ、談話の續きをさせなさい。』
『しかしお待ちなさいよ。地位の方は何うしますか？ 約束の地位は？』
私は地位を探して上げにや義理が立たぬ。』
と私の贔屓が言つた。
『いや、有難うございますが、そのお志だけお受け致して、地位の方は實は欲しうもございません。』
『ですが、私のお世話の屆く中で一番上等のをお選り取りが叶ひますが。』
『御好意は千萬有難うございますが、それも欲しうはございませんから、最早その御心配は御無用に願ひませう。』
『ヘンリーさん、あなたには眞正に困るわねえ。少しはこのお方の御親切も酌み取つてお上げなさらなけりや。何なら私が代りにその地位の選擇をして上げて宜しうございますが？』
『宜しいとも——後で持餘すやうなことはないとさへお言ひなら。まあ、やつて御覽なさい。』
彼女は私の庇護者の方へ歩み寄つて、その膝に乘り上り、その頸に腕を摑め、眞正面からその唇に接吻した。すると兩紳士は大聲を立てゝ笑つたが、私は餘りのことに度膽を拔かれ、石化したやうに立すくんでゐた。ポーシャの言ふやう、
『お父さん、あの方はお父さんの御周旋には欲しい程の地位がないと仰有いました。私、何だか馬鹿にされたやうな氣がして……』
『おや〱、それではこれがあなたのお父さまで？』
『さうですよ。私のお父さんです。天にも地にも掛替へのない大切のお父さんです。今こそお分りでせうね？ この間私が公使館であんな

に笑つた譯か。でも私共の關係を少しも御存じなしに、お父さんと叔父さんのお惡戲の爲めに酷い目に遇つていらつしやるお話をなさるものですから。』

無論私は最早空とぼけの假面を脱いで、事實有りの儘を告白し、直ちに談話の要點に立入つた。

『では甚だ勝手でございますが、私は先刻からお斷り申上げたことを取消し度うございます。あなたに於きましては私が心の底から望む地位が一つございます。』

『何ですか言つて御覽なさい。』

『御養子の地位でございます。』

『宜いとも〳〵。したがあなたは今までさうした地位には經驗がなからうから――無論あられては堪らないが――隨つて契約條件を滿足させるやうな履歴書證明を持つて來ることも叶ふまい。して見ると困つたものだ。それで……』

『まあ何うか使つて見て、お試めし下さい。唯三四十年で宜うございますから何うか使つて見て下さい。さうして若し……』

『はつは……宜し〳〵、安心するが宜い。お易い御用ぢや。嫁を連れて行つて貰うない。』

私達は[illegible]の庭園を[illegible]した。私達の[illegible]は[illegible]ナカナカ盡し切れぬ。それから二三日してロンドンの市民が私の紙幣を背負ひ込んでの一箇月の冒險及びその結果を聞知つた時、到るところその評判で持切つた。

ポーシヤの父は例の百萬磅紙幣を蘭英銀行へ持つて行つて現金に兩替した。すると銀行はその紙幣に棒を引いて、紀念の爲めに彼への贈物とした。彼は又結婚式の時、それを私共新夫婦に與へ、それから今日に到るまで、この紙幣は額縁に收められて、私達の床の間の飾りになつてゐる。この紙幣こそ私にポーシヤを授けたものである。若しこの紙幣なかりせば、私はロンドンに滯留することも出來ず、公使館へも出頭せず、隨つて彼女に會はないでしまつたに相違ない。それで私は何時も口癖のやうにかう言ふ。

『御覽の通りこれは百萬磅の紙幣である。しかしこの紙幣は、その一生に唯一度しか買物をしない。それもその額面の約十分の一の品物を買つたに過ぎない。』

(をはり)



生ける留針

ジョセフ・ルノオ作
保篠龍緒譯

「一」

『まあ！　厭だわ！　此の留針はまるで生きてゐるやうよ』

吐き出すやうに斯ういつた、テロープ教授の愛娘、今はシュリヂイ伯爵夫人アリスは、人人の手から手へ持ち廻つて觀賞されてゐた青銅製鰐の浮彫をした珍奇な留針を窓枠の上へ投げ出した。

ファラヲの時代、さる派手者の髪飾の爲めに彫られた此の留針の柄飾は蛇神セヴェリを現はしたもので、微細な、丹念な彫刀の妙は物凄い鰐魚を彫らせ、それが幾世紀を經て暗緑色の艶を浮べてゐる。

まこと、此の留針が投げ出されて窓枠に衝突かつた時に、並みゐる客達は、吾等の紀元前十一世紀時代の石棺の間から取り出された杯や、首飾などの間で、蛇神がキラリと物凄い眼を光らしたやうに思つた。が然し、青銅の鰐は唯窓枠の上に横はつて、それらしい様子もない。

『ねえ、父樣、これだけはお父樣の蒐集した中で一番いやらしいものよ』

と愛孃伯爵夫人は恐ろしい遺物におびへて夫シュヂイ大尉の肩にその恐ろしさからの保護を求めてゐた。フランス高等學校考古學教授テロープ氏に招かれて、邸宅といふよりは博物館見たやうな同氏宅に集つた人々は別段それ程の恐怖も感じてゐなかつた。青白い電燈の下に浮き出してゐる大廣間には蒙昧な時代の文化の跡をまざ〳〵と物語る幾多珍奇な、怪奇な姿や品物が、あの幾十年の墓場の中から星霜幾世紀をさらされた石棺の中から、人を喰ふ土人の棲む森の奥から運び出されて、莽然たる古色と幾千幾世紀の恨みや悲しみを包んでそゝり立つてゐた。

巨大な姿をしたスフインクスの上からは、獅子頭の女神が怒りの顔物凄く輝かしてゐる。壁は黒く、電燈の光は薄青い神秘の色を流し

て、いひ知れぬ時代の臭ひが、當時の香料そのまゝに空中にたゞよつてゐた。

斯うした裝飾の中にあつては、如何に神經の強い人でも、傳説の在りし昔の雰圍氣の中につゝまれて仕舞ふ。

招かれた男女は大抵大學關係の人々で、文藝、想像の世界に生きる人はまれであつた。然し彼等の瞳は期せずして、生ある如き此の留針を離れる事が出來なかつた。

有名な小説家ヲスカー・ヘッケイが窓枠に近づいて靜かに留針を拾ひ上げた。一座は水を打つたやうに靜まりかへつた。集つた教授達も、教授夫人達も、彼ヘッケイの文才と惡評とをのみ知つてゐた。とかく惡評のある男は斯した學者達からは一種の目を以て見られ勝ちである。

彼の小説はその鋭い筆勢と、明確な描寫で、所謂交際社會のゴシップを遺憾なく剔抉して、多くの人々から惡まれしも、恨まれもし、決鬪も申込まれ、訴訟さへされた。人々は彼のいまはしい陰口をきく。

彼は尊敬されるといふよりも敬遠され、恐れられてゐた。

彼は指輪がキラ〳〵光つて爪の延びた手で上品に留針を取り上げ、染めたかとも見へる黒いばさ〳〵した髮の毛の下に光る片眼鏡をかしげて、色つやの惡いひからびたやうな顏へ近づけて眺めた。

『ねえ、テロープさん、此の留針は實に嫌な奴で、貴下の蒐集品の中にふさわしくないですなあ。無智蒙昧の野蠻人なんてものは動物を崇拜したり太陽を拜んだり、馬鹿々々しい話で、理屈をいへば歴史的にも、人間心理の上にも大々説明は出來るが、その遺物を後生大切と崇拜しているなざあ、研究といふ事を除くと、いさゝか彼等野蠻人と同じ心理かも知れませんね、……まあ、僕が貴下だつたら、こんな代物は溝へでも叩き込んぢまいますな。アハハ……』

人々の眼はテロープ教授にそゝがれた。頑丈な體格の彼もいさゝかムッとしたらしく、常よりもやゝ興奮の色を作したが、然し、短い胡麻鹽髯の彼の顏は、蠻地の風雨にさらされてやゝ日にやけた「探險家」の顏は和やかに微笑した。

『おい、氣をつけ給へ。ヘッケー!……私が君だつたら、そんなにまでエヂプトの神樣をこきおろさないね!……歸は時代から時代へ、神聖な動物として通つて來た。斯うした長い間の禮拜讃美、その結果、其處にいひ知れぬ神秘の力、恐ろしい力が生れて來てゐないとは、誰れが斷言出來やうか?……私が此の奇蹟の留針を發見したのは、あのエジプト學者の殆どすべてが恐ろしがる蛇飾聖地として有名なマクデべでした……忘れもしない、あの時は我々一行は土人を加へて、殆ど全裸に近い姿、頭には白布を卷き、手には赤々と燃へる松火を點し、壁に映る黒い影に丁度、當時の土人らの蠻人の樣でした。[illegible]

しも蘇しない地下の洞穴の中、私は、三千年の昔に還つたやうな氣がしました……其處に巨大な蛇神の眼のみが爛々と輝いて私を見詰めてゐました、私が生命を捧げてゐる古代エジプト大文明の供物のやうに……だから私は私の死後、この青銅の神體は彼の地へ送り返して、古代エジプトの神にふさわしいその發祥の地に奉安し度いと思つてゐる位です。』

話を聞いてゐる内にヲスカー・ヘツケーの口元は嘲笑の爲めにゆがんで來た。

『僕は、どうしても此の留針に、留針のかざりに對して好感は持てないね。……僕は鰐は大嫌ひだ……尤もそれには悲しい思ひ出もあるんだが……今から二十年前、僕が印度へ無二の親友と二人で見物に出かけた時……或晩、恐ろしい沼の邊の細い小徑を通つて森の中のテントへ戻らうとした事がある、……右を見ても、左を見ても山と谷、……闇の中に、何處からとなく鼻をついてにほつて來る腐つた植物の甘酸ぱい匂ひ、然もそれに混つて鰐のゐるとも思へる生臭い匂ひ、沼の匂ひ……その中を先頭に立つてさくり〳〵進んで行つた親友が……突然、バタリツと辷つたやうな音を立てた、と瞬間、アツといふ悲鳴、重くるしい水の音……ハツと思ふと私は頭から泥を浴びせられて立ちすくんでしまつた……それつきりです……私は森の中に唯つた一人取り殘されました……爾來、僕は鰐を呪ふ、鰐に對して僕は恐ろしい恨と呪ひを持つやうになつたのです』

『さうですか、それも御尤もです』とテロープ教授がいつた『君の親友を呑んだアリゲーターと、此の留針の蛇神クロコダイルとは、又其處に選ぶ所がある。……科學の力と又今日の科學を以てしては解釋の出來ない或る神秘の力とのある事は既に科學者の間でも信じられてゐる、……古代エジプトに傳はる神秘の力、私はそれを信仰する……有り得べからざる事、それが有り得る宇宙間の靈的力の前には人間は弱いものである、其處から信仰が生れ、崇拜が起り、超自然の靈科學の奇蹟が生れる事があります。……例へば最近に起つた英國博物館の事件……あれなどは誠に科學の力を以てして猶は不可解に屬するものではありませんか……エヂプトの高僧アーメン・ラーのミイラを包む聖體から迸り出た恐ろしい呪の力、それが此の聖體に關係したすべての人々の上に魔の手をひろげた……聖體を發見した探險家、地上に運び出した印度人達、箱につめた職人、船へ引き上げた船夫、博物館の一階へ運び上げた事務員、等、等、それが皆呪の犧牲となりました……聖體が來てから、死んだもの、火難に遭つたもの、盗難に襲はれたもの、病氣に罹つたもの相繼いで倒れた……爾來看守も恐れを爲して此のミイラには近づかなくなつたし、……新聞でも不吉な事件が浮き

立てる……といつたやうな事で、博物館長も持てあまして、之れを米國の富豪に高價で讓渡しました……處が、船に積んだ人夫は足を折つた！……そうして呪の聖體を運んだ船はどれだと思召す？……あの有名たるタイタニツク號、その船でした。タイタニツクが大洋上の一大悲劇、それで呪のミイラの終結をつけてしまつたのです？……それ等の事件を、唯だたんに遇合として片付けるには餘りに遇合すぎます！其處に何かしら非科學的のあるものがひそんでゐはしないか？今一例を科學的なものから擧げれば、メキシコにある特殊の植物です、その植物に觸れたものは、完全に方角の意識を失つてしまひます……或は河をさけやうとして却つて河中に陷つたり、或は谷を渡らうとして、却つて谷の中へ飛び込んだり、……醒めてゐ乍ら然も魔醉狀態に陷つてしまふといふ……その同種の植物がエジプトにありはしないか？若し此の種の植物が博物館のミイラの中に入つてゐたのではあるまいか……古代エジプトに殘る不思議の數々、其處には信ずべからざる程の奇蹟が絕へず生れて來、絕えず行はれてゐます……』

怪奇な教授の話しに一座はシンとして沈默に陷りつゝ、默つて室内に滿ちてゐる黑い石の神體や、ミイラや土像などを見詰めてゐた。

そして人々の視線が靜かに毒舌文士ヲスカー・ヘツケイに向けられた時、彼はスツクと立ち上つて叫んだ。

『成る程。面白いです。では僕はその不可解な力の試驗台にならう！……僕は古代エジプトに對して極度の白眼を送る！……そうして此の不快な留針に對して僕は極度の嫌惡を表明します！　僕はこの留針を惡む！…惡罵する！　そして若し此の留針にして靈あらば、僕に復讐するがいゝ、恐らくこれは不可思議な、意想外な、怪奇な事實でせう……滿場の淑女、紳士諸君、諸君は證人になつて下さい！　僕は幾時代を經て蒼く錆びた此の鰐の浮彫を冒瀆してやる、糞でも食へ！　と……でテローブさん、その結果はどうなりませう？…果して僕は懲罰を受けるでせうか？……熱病になりますか？……頓死しますか？……發狂しますか？……何ともない！……結局僕はこの通り平氣で丈夫で、ピン／＼してゐます！　アツハヽヽヽヽ』

笑つて彼は留針を摑み上げると、いきなり、それを窓を目がけて發止と投げつけた。針はキラリと光つて窓に當つた……。

「二」

愉快な打ちとけた宴會につゞいて餘興の幕が開いた。主人の好みにちなんで、古代エジプト、ダンス。きらびやかな、そして又怪奇な神話をとり入れたダンスに人々は限りない興をやつた。東洋風を加味してゐるエジプト舞樂も、スヒンクスや女神やミイラの家をうつかり配

でしまつてゐた。

その中でも今夜のプログラムの呼物はヲデオン座の人氣花形悲劇女優として知られたジャニー・スーヴァラン嬢の獨唱であつたが、當のスーヴァランは、嘗て例の藥瓶を振つてひどい目に會はされたヲスカー・ヘッケイのゐる前では絶對に出場しないといひ出した。

黒いスフィンクスの像の影で、アリス・ド・シュリジイは極力スーヴァラン嬢を慰めて、出演をすゝめたが、ヲデオンのスターは唯だ悲しげにその頭を振つてゐた。

『ほんとうに申譯がないので御座いますが、こればつかりは、どうしても厭なので御座いますの……えゝ、あいつが今夜來ると知つてゐましたならば、テローブ先生に御約束はしなかつたのですのに……私ね、死んでも、あいつの前へ出るのは出來難いんですわ……あいつは私の職業をこはし、私の生命までもきづゝけたのですわ……私に會つた事もないくせに、何一つ私があいつにした事もないくせに、……私の事を、無實無根の私の惡口を雜誌に書き立てたんですのよ……あの記事さへなかつたならば、私はコメディ・フランセイズ座へ出演られてゐるんですのに……私口惜しくて／＼……』

彼女のいふのは尤であつた。ヘッケイが嘗て面白半分のゴシップに、スーヴァラン嬢の私的生活を槍玉に擧げて、猛烈に手きびしく書き立てた事がある。然もそれが根も葉もない捏造であつたのだから、當の本人としては恨み骨髓に徹するのも無理からぬ事であつた。

『あいつの前では、聲が喉から出て來ないんです……そればかしではなく、あいつの顏を見ると、カッとして飛びかゝつて……殺してやつたら、いゝ氣持になると思ひますわ……』

彼女は如何しても出演するのをきき入れなかつた。

然し餘興は靜かに進行して行つた。餘興場内はヒンヅー人とエジプチアンとの混血兒であるラムーが一切の世話をして廻つてゐた。そして故郷の唄に浮かれながら、ラムーは靜かに余興場を出て會場の方へ出て行つた。

それから間もない事であつた。暫く前から會場を離れてゐたヲスカー・ヘッケイが會場休憩室に入つて來て、其處にゐた。テローブ氏に向ひ、

『テローブさん、僕は昨年來肝臟炎の結果、ついモヒ中毒になつてしまひましてね……實は晩のモルヒネ注射の時間になつたんです……實につらいです……で申兼ねますがどこか靜かな室を貸して頂けませんか、數分間靜養したいんですが……』

『えゝよう御座いますとも……』

テローブ氏は靜かに立ち上ると、客の間を通つて少し離れた一室へ

案内した。其處は現在のシュリヂイ夫人がその娘時代アリス・テロープといつた頃の勉強室になつてゐた室である。

ヲスカイ・ヘッケイは中に入り、ニッコリふり返つて微笑した。そして自分で扉を閉めた。

ヘッケイが令嬢の書齋へ案内された時は、丁度音樂が靜かな調子を奏してゐた處であつたので、他の客達が皆知つてゐた。

エジプトの歌劇が終ると若い詩人が何にかみ乍らもエジプトの神秘を禮讃する自作の詩を朗讀した。朗讀につゞいてヲペラ座のローズ・ブルム嬢が唄ふ事になつた。ローズはジャンヌ・スーヴラン嬢とは反對にヲスカー・ヘッケイの面前で是非とも二節だけは唄はなければならない章句があるといひ出した。樂譜をぐるぐると卷いて膝の上に乘せたまゝヘッケイの來るのをぢッと待つてゐた。

斯うなると客も文士ヘッケイが入つた室の扉口を見詰めながら彼の出て來るのを靜かに待つた。

『中々出て來ないではありませんか？』とプロール氏がシュリシー夫人にいつた。『彼の男は、時々こんな風にすつぽ抜かして默つて仕舞ふ癖があります……』

『いや、決して歸る筈はありません！……あの室には此のホールの方に向いた扉口より他に扉口がないのです。若しスーヴランさんの評判を氣にかけて逃げ出さうとしても、我々の見てゐる扉口から出なければ、他に出口がないのでして、窓には鐵格子がはめてありますし、暖爐もない事ですからなあ！』

人々は尚待つてゐた。

『氣分でも急に惡くなつたのではないでせうか、少し心配になり出しました』とテロープ氏が聲高にいつた。

間もなく扉口の近くにゐたヴァンチエ夫人と他に二三の夫人が、何かしら勉強室の中で唸き聲のやうなのが二度ばかり聞へたやうだといひ出した。

待ち兼ねたテロープ教授が靜かに扉を叩いた。返事がない。二度目に強く叩いた。

何の返事もない。

『ヘッケイ君！……』と彼は叫んで『ヘッケイ君！……』

不相變、返事がない。……どうも怪しい。

人々は扉を開けやうとした。が中から閂をかけてあつた。

ヘッケイの近しい友人の話によると彼は自宅でも乃至は友人の家でも、時々靜かな、離れた室でモルヒネの注射をする事がある。その時には必と今日のやうに室の中から鍵をかける習慣にはなつてゐるけれども、大抵七八分後には元氣な顏をして扉口を出て來た。

に顔を見合せた。

人々は立ち上つた。椅子がガタ〳〵と鳴つた。婦人達は怖へたやう

人々は扉口へ一とかたまりになつた。中でもシユリチイ大尉が、ステッキでコツ〳〵と扉を叩いた。

三度、四度、コツ〳〵と叩く音の後で、人々は耳を澄まして中からの返事に聽耳を立てた。ステッキで扉を打つ音が消へると四邊は森閑として、深い沈默があるばかり、東洋風の陰惨な像に薄暗い電燈の光が點々として投げられてゐた。「扉をこわして見たらどうですか」とアンリ・ガリノ氏がいつた。「ヘッケイ君は中で急病になつて、返事をする事も扉をあける事も出來なくなつたのではないでせうか?」

チロープ教授が斧を持つて來た。

力をこめて發止と扉を打つた、恐ろしい音、板のこわれる……

鏡板がまづ破れた……閂がはずれた、扉がさつとあけられた。

小さな室内は眞闇だつた、ドツと人々が室内へ入つた。

パッと電燈が明くなつた、アツ!

スカー、ヘッケイは胸をうつ伏せにバッタリ床の上に倒れ、[illegible]に組んで、指環が[illegible]してゐた……

のみならず、見よ、彼の頭部[illegible]

を[illegible]ナイヤァトの[illegible]

ハッとしたシユリチイ[illegible]

[illegible]

た儘に窓枠の上に横はつてゐたエヂプトの留針が如何して今ヘツケイの頭に突刺つてゐるのであらうか？……

「三」

すべてが謎である。急を聞いて馳けつけた警察、検事局、直ちに詳細な調査と捜査に從事したが、何等得る所がなかつた。

翌日も、又その翌日も、敏腕な刑事の努力も、有名な文士ヘツケイが怪死は依然として五里霧中の謎として、そこに光明の片影すらも認める事は出來なかつた。

ヘツケイの死は決して自殺ではない。留針を斯程まで正確に自らの手を以て頸動脈に突刺す事は不可能である。然も一面には招待された人々は皆一樣に、ヲスカー・ヘツケイが室へ入つた後に於て、留針が猶依然として窓枠の上に横はつてゐた事を認めてゐる。從つて彼が留針を持つて室へ入らなかつた事は爭はれない事實である。然も、彼が死の原因は、此の窓枠に棄てられてあつた留針の刺傷に依るものである。

然らば彼が入室後、何時まで、留針は窓枠の上に置かれてあつたか？ 留針が窓枠上にあつた最後の時間を正確に知る事は非常に困難であつた。二、三分間だと中學校のバルナール教師がいふ。いや五六分だつたとアンリ・ガリノ氏が證言した。

ソルボン大學教師のルーデツト氏は人々がヘツケイの身の上が不安になつた頃、不圖窓を見た時にはまた留針が横はつてゐたといつた。

ヴアンチエ夫人、化學者ブロー夫人、小學校長ドンヴイル夫人其他二三の夫人がヘツケーの唸り聲を聞いたといふ時間から綜合すれば、ヘツケイは入室後十三四分で、何か恐ろしいものを見て恐怖の聲を擧げ、テロープ教授が斧で扉を破壞する五分前に最後の唸り聲を發したに相違ない。

ヘツケイの致命傷は確實に刺殺であつて、注射に使用したモルヒネの容量を調べて見ると、モルヒネの量は〇、〇二、決して致死の原因にはなり得ない。

壁、天井、床、何等怪しむべき箇所も見出されず、物を投げる隙間さへも無い事が明瞭になつた

窓の鐵格子は非常に細かくて廿日鼠ですら通る事は出來ない。そして又窓はアリスが結婚後は嚴重に閉め一仕舞つてあり、然もカザン街にのぞんで二階にある。

無論室内に隱れてゐるやうな場所もなく、平素から、アリスの結婚後は扉を閉めて使用しなかつた部屋だ。

謎である。秘密である。不可解の謎である。

かたゞ一人、教授の召使である印度人ラムーだけはエヂプトの蛇神の御罰が當つて、神様から復讐されたのだと信じてゐた。

斯うした全く迷宮裡の捜査の間に一日二日と經つて行つた。……

「四」

……蛇神の留針、生ける留針が生み出した最初の怪事件は斯うして永久の謎となつたが、その後にヘッケイの自宅にも留針が恐ろしい復讐をして行つたり、怪奇な事件がつぎ／＼に起つたりした。然し警察も名探偵も殆ど手の下しやうがなく怖れた生ける留針の秘密はたつた一人、犯罪心理學研究學會の會員クリストフ・ローゼ教授だけが知つてゐた。そしてローゼ教授の親友で、此の事件の關係者であるアンリ・ガリノが「死後燒棄すべし」と書いた封書の中に最初の謎文士ヘッケイの死を明かにしたローゼの行動を書いておいてあつた秘密の手記の一部分を公開しておく……

クリストフ・ローゼが犯罪心理研究の立場から此の事件の研究に關係することになつてからの彼はテロープ教授を訪ねてヲスカー、ヘッケイが死の部屋を見せて貰つたり、警察にラリーヴ探偵を訪ねてヘッケイの遺留品を調べたりしてから數日後、私は――アンリー・ガリノ氏――は突然ローゼから手紙を受取つた。

『本日午後三時半、是非小生宅まで御出かけ下さい。生ける留針の件につき證人として御立會を御願ひに致し度い事が御座います。』

私は好奇心に心を躍らせながらローゼの家へ出かけた。

『私は調査を終了出來たよ』と教授がいつた。『で、テロープ教授にも來て頂いてその結果を御話しておき度いと思ふんで。』

話すまもなくテロープ教授がやつて來た。

『テロープさん。突然御招きして甚だ失禮ですが、實は重大なことで是非御意を得たいと存じましてね……』

『重大な事？』

『え丶……まあ、御聞き下さい……私は漸くヲスカーヘッケイの死をめぐる秘密を知る事が出來ましたので……』

『エッ、……すると、あなたは誰れが……』

『誰れがヘッケイを殺したかを知つてゐます。私は誰れの手で彼の頸へ生ける留針を突き込んだかゞ解りました……え丶、人間の手です……

……エジプトの神の復讐、蛇神の呪、千年の秘密につゝまれた生ける留針、それは皆巧みに擴げられた人工の幕でした！……迷信と神秘、人人はたゞそれに迷はされて、考へるといふ事を忘れてゐました。したがつて犯人の誰れであるべきかを考へなかつたのです……』

『で、その犯人といふのは？……誰れで？……』

とテロープ氏がせき込んだ。
『あなたです、テロープ教授です！』
ローゼの聲は澄み渡つて力勢く室内に響いた。
ハツと思ふ瞬間、ローゼの手はサツと延びて何かしら怪しげな武器を出さうとする老教授の右腕を掴むと等しく壁際へグイ〳〵押しつけ乍ら、片手をポケツトへ入れて武器をさがしてゐるらしかつたが、その儘靜かに、掴んだ手を離して相手の顔をぢつと見詰めた。
力盡きては老教授の眼からは玉のやうな涙が止め途もなく流れた。
『まあ、落ついて、椅子におかけなさい』とローゼはおだやかにいつた。
『テロープさん。考へて見ると實に巧みな殺人でした！　然し、如何に巧妙な犯罪でも、其處に必ず一寸した手落ちのあるものである……とは犯罪心理の通則になつてゐます。……私が犯罪を發見した經路を今御話し致しませう。……』
クリストフローゼは靜かに語り出した。
『私が、ヘツケイの死んだ室を見せて頂いた時、私の頭には、「此の殺人は人間の手でなされた」といふだけの考へしか浮びませんでした……それでいゝのです……それから私が警視廳へ行つてヘツケイの遺留品を調べるまでは、私の眼、私にも何等の光明も、當てもなかつたのです。然しヘツケイの遺留品―殊に、彼が生前最後に使用したモルヒネの小瓶、彼のポケツトに入つてゐたといふのを見せて貰つた時に、私は一切が解つた……

　モルヒネの小瓶……それを手にとつてぢつと見ると、壜のレツテル其他には少も異狀がないが、然し、壜の厚さ、そしてその青味がつた度合、それが極く少しではあるが、薄くて、青味が足りない……その壜の相違などは、ラボラトリーで手なれてゐればこそ解るが、到底素人や生仲の專門家では仲々氣の付くものではありません。

　段々ヘツケイの使用したモルヒネの壜が他のモルヒネの壜と多少なりとも相違してゐる以上、彼の使用した藥品も亦多少共相違してゐなければなりません。……この解釋の元に推理して行く……それは無論極めて薄弱な解釋だが、一方から見れば極めて有力な解釋であらねばなりません。……そこで、私は犯行のシナリオを次のやうに立てゝ見ました。

　一、誰れかゞ客の會場に集つてゐる隙をうかゞつてヲスカー・ヘツケイの外套をさぐつて、モルヒネの壜を取り出し、それと外見全く同一に見へる他の强烈な魔醉藥を入れた壜をすりかへる。

　二、それから間もなく、ヲスカー・ヘツケイは平素の通り、豫想通りに注射をする時間になる。

三、ヘツケイは小さな室に入つて注射をする。そして暫くは安靜にしてゐやうとするが、既に魔醉の最中に於て相違があるから、その儘意識を失つて倒れてしまふ。

そこへやがて人々が扉を叩くが、それは返事のないのが當然です。

四、そこで最後に殺人の段取りです。人々が、內部から返事がないので立ち騷ぎ、ステッキで扉を叩いてゐる間に、隙を見て、窓枠の上にあつた留針をそつと取つてしまひ、扉を打ち破つて、眞先きに室內へ飛び込む。室內は眞闇だ。人々が眞闇なのに驚いて手さぐりで進んでゐる間に、彼は素早くヘツケイのゐるべき處へ進んで行つて、その頸へ留針を突きさし、その儘そつと床の上へ辷らして倒してしまつた。……そうしておいてサツと身をすさるとその儘スヰッチを入れて、室內を明るくしました。と見る、ヘッケイは床の上に倒れて絶命してゐる。その間十五分とはかゝつてゐない……完全にアリバイが出來て、完全に目的は達せられました……

手取り早くいへば、大體こんなやうな譯ですが、もつと計劃的である證據には室內の椅子には、たつた一つ、スウイッチの近くにある椅子の外は書籍や器物が置いてあつて腰がかけられない狀態でありました。從つて彼は指定された場所に倒れるより外に途がなく、又殺人を計劃した犯人はヘツケイの倒れてゐる場所へ闇中眞一文字に進む事が出來たのです……

え、唸り聲ですか？ 唸り聲は偶然でした。あれは、あの室の隣りにデュカス氏がゐました。氣分を惡くして休んでゐた際に思はず唸つたのが、薄い壁を通してヘツケイの室から洩れたやうに夫人達に聞へたまでです。!

何しろ、古代エジプトの神秘、傳說が却つて人々の感情を錯亂させて、此の秘密を生み出したのでした……」

犯罪心理學者ローゼは靜かに談り終つて蒼白なテロープ教授の肩を叩きながら……

「どうです？ 大體そんな筋書ではなかつたですか？ ……」

テロープ老教授はグツタリとして椅子にくづれた……

——J・J・ルノオ「ラ・ヴイヴイア ント・エバングル」——
抄譯——

藝術の社會的地位について

(遊歐雜記の序)

阿部次郎

33

久しい中絶の後に私は又この稿を續ける。上來の考察によつて、私はほゞ德川時代に於ける平民藝術の文化史的思想史的背景を明かにした。私は特に「平民藝術の」一といふ。當代に行はれたあらゆる藝術—能樂、和歌、雅文、漢詩、漢文、狩野派光琳派四條圓山派文人畫派等の諸方面に渡つて考察の戰線を擴げることは、私の力のよくするところでないのみではなく、此等の藝術は、或ひは樣によりて胡蘆を描けるものとして、或ひは單純た教養の[illegible]から生れた作者の根本體驗の衝動を缺くものとして、或ひは作者の體驗に強ひて習得せる形式を襲はしめたに過ぎぬものとして、或ひは、形式の場合に於いても、社[illegible]深くぬきさしならず流れ行く當代歷史の本流から遊離したために、社[illegible]く時代精神の上に根を下し[illegible]に適應するに[illegible]つた「世外人」の藝術として、當代の平民藝術とは別樣の取扱ひを受けることを至當とするからである。そのうち、和歌の一部分、光琳派、文人畫派等は、大體インテリゲンチアの創造として特別な尊敬と考察の對象とするに價ひする。但しこの場合我々は最初の發問を離れずに、問題を平民藝術のみに限らなければならぬ。あのやうな文化史的思想史的背景の上に浮び出たものとして、德川時代の藝術はどんな形態と內容とを持ち、どんな文化史的役目を演じなければならなかつたか。

皮相に考へればこの新しい發問はたゞ後來の考察の反覆を誘ひ出すに過ぎぬやうに見えるでもあらう。藝術は社會の反映である。既に當代の文化史的思想史的背景を明かにした以上、このやうな社會に於いて[illegible]

背景を考へるに當つて、既に演劇や浮世草子や心中物や笑話等を材料として使用して來たではないか。その上更に藝術そのものの形態と內容と役目とを問題とすることによつて、私は果して如何なる新局面を開き得るであらうか。

併し藝術は、嚴密に云へば、社會の反映のみではない。藝術は政治經濟その他の社會現象に追隨してあとからこれを反映して行く鏡ではなくて、それは積極的創造的に社會に働きかけてその進展の一力素となることを得べき、獨立せる――もつと詳しく云へば他と聯關しながら而も獨立せる――一つの文化である。若し鏡を譬喩にとることを繼續するならば、それは平面反射鏡ではなくて、凸面レンズである。人生のもろ〳〵の散らばれる光は、このレンズを通過することによつて像を結び、集中されることによつて燃燒に達するのである。像を結びつゝ燃燒することは、社會にとつて一つの新しい現象である。さうしてこの新しい現象は、將來の進展を規定する一力素として、自ら燃え續いて行くのみならず又他の文化の上に燃え廣がつて行くのである。藝術そのものゝ問題は、特にこの凸面レンズの構造の問題である。此處に藝術史の比較的獨立の權利が基礎づけられる。同時に藝術の人生や社會に對する役目の問題も亦此處に根據を得て來なければならぬ。像を結びつゝ燃燒するもの を再び廣い漠然たる人生の散らばれる光に還元することによつて、藝術の理解を完くし得ると考へるのは新しい迷信である。徳川時代の平民藝術は當時の社會と人生とを如何に結晶させたか、この結晶された光が如何に當時の社會に燃え廣がつて行つたか――それは從來の問題の單純な繰返しではない、それは少くとも從來の考察を此處に集中して來るといふ意味に於いて新しい問題である。

私は從來手繰つて來た思索の絲を繼承して戀愛の問題を考へ續ける。徳川時代の平民藝術は――就中平民文學は戀愛をどう取扱つたか、それは戀愛文化の向上に如何に貢獻し、戀愛文化の發展に如何に影響したか。この問題を考へるために、私は再び西鶴の好色物をとりあげなければならぬ。他の關係に於いては知らず、問題を特に戀愛に限るとき、彼の浮世草子は、本當に眞劍な考察に價ひする殆んど最初の平民文學であるからである。

普通西鶴は構成的空想の力を缺く寫實家、鋭利な觀察の力によつて當時の世相をあるがまゝに描寫した浮世文學者と考へられてゐるやうであるが、寫實が藝術的寫實として通用するためには、瑣末な職人的な眼と手とによる蒐集以外に、その中から本質的なものを選擇し、散漫な材料を壓縮し集中させて、一つの全き生活、一つの全き世界を構成して來る頭を必要とすることは、文藝の上に於ける常識として今更

繰返すまでもないであらう。西鶴を寫實家と名ける言葉は、強ひて異を樹てるにも及ばぬことであるが、それは決して、西鶴といふ特殊のレンズが彼の作品の世界を力強く支配してゐることを否定する意味であつてはならない。私はこの間の消息を明かにするために、彼の處女小說「好色一代男」について、そのモデルらしい二三の遊女の評判記と彼が作品の中に描寫した彼女達の姿とを比較して見ようと思ふ（猶一代男のことについては、昭和二年五月發行「思想」日本文化研究のうち、拙稿「好色一代男おぼえがき」參照）彼が「二代男」の首節に述べてゐる制作の態度は、大體に於いて「一代男」にも亦當嵌ると信ずるからである。——「扨こそ古狸の、くにといふ遣手の開山、………引留め、過にし事を、語らすに、聞くに、ようもく、諸國の諸分覺えて、永き日の西の岡に入るまで、聞書して、世傳が二代男、近年の色人殘らず、それに加筆せし、されども變名にして、あらはに記し難し、此道にたよる人は合點なるべし、其里其女郞に、氣を着けて見給ふべし、時代前後もあるべし、紅葉見て櫻なほ棄て難し、折節の移り替る水の月の、影も形も無き事にはあらず、見及び聞傳へしは、松の葉の塵たれば、祇園籬の跡までも、心の奇麗なる事ばかり顯し、よし無き事は掃棄つるものに、京の粹驟聞、末社おうせの頭までも、これは見る人の爲に、ならばたなるべし」——折節の移り替る水の月の、影も形もなきことにはあらず、故に私達は田毎の月の田毎の影較べて、それ〲の水の特性を考へ定めることが出來るのである。これは皮相に考へれば極めて瑣末な、笑ふべき穿鑿である。併しその影響するところから云へば、決して無用の仕事でないことは、後に來るべき歸結によつて判明するであらう。

「一代男」の中で作中の人物とモデルとの相關を最も明瞭に示すものは、云ふまでもなく吉野、夕霧、吾妻である。そのうち吉野のことは既に世間周知のことであり、西鶴の描ける吉野（卷の五、第一）も亦殆んど傳說そのまゝで特に彼の特質を見出せるほどのものを認め難いから此處には云はない。夕霧と吾妻とも亦大阪古今の名妓として衆口一致の讚美を受けてゐるもので、掃き棄てられたよしなし事を探り出す手段を缺いてゐるが故に、「祇園籬の跡までも、心の奇麗なる事ばかり顯はす」といふ彼の理想化の痕跡を發見することは却て困難であるが、併し此處には既に、彼の尋常一樣の評判記若くは見聞記々者と相異する點が顯き出してゐるのである。

「みをつくし」（寶曆七年板）は大阪新町の古事由來その他を記いたものであるが、この書に記すところに從へば、夕霧は島原の扇屋四郎兵衞の抱遊女で、寛文十二年その主人の移轉に從つて大阪に下り、其處で[illegible]

を受けながら病死した女である。彼女が當時如何に盛名があつたかは、彼女の死（正月六日）の翌月、坂田藤十郎がすぐに「夕霧名殘の正月」といふ狂言を出して大當りをとつたのでも明かである。而も彼女と傳奇的逸話を共にする藤屋伊左衞門といふ男の存在が記錄によつて何の證明をも得難く、彼女の死はこれにまつはる悲劇的說話によらずに直接に死そのものによつてこれほどの印象を殘したものとすれば、彼女が當代の名妓であつたことは愈々明瞭であると云はなければならぬ。併し彼女が凡そどんな女であつたかは、「みをつくし」によつては何の觀念をも得ることが出來ない。それはたゞ「夕霧は聞しに勝りて美艷なる事誠に芙蓉の露を含むがごとしと其比もてはやしける、其上萬藝に達し行儀發明言語にのべがたしと或書記に見へ侍る」といひ、彼女の死を傳へては、「延寶五年の秋の頃より病氣にて醫者手をつくすといへども甲斐なく、貴僧高僧を請じ大法秘法を盡せども露しるしなく、諸所の佛神に祈をこめけれども、天命の限りにや翌延寶六年正月六日といへるに病床に死す、時の人おしむ事松を離るゝ蔦かづらのごとし」と云つてゐるのみである。これに較べれば前に引用した（第二十五節）西鶴の描寫はどんなに細かに具體的に彼女を活躍させてゐることであらう。此處で夕霧のために費されてゐる字數は「みをつくし」と殆んど大差がないのに、彼にあつては空しい形容詞の奧に影よりもうすく平べつたく見えたに過ぎぬものが、此處では鮮かな姿を持つて私達の前に浮び出る。而も彼女は主として第三者の口を通じて間接に語り出されるのみで、たゞ最後の七八行が彼女を直接に讀者の前に動かして見せるに過ぎないのである。併し西鶴は先づ、生玉の御池の蓮葉刈る日、「秋の寢覺に蜀黍餅、酒など持たせて」、「松の木陰は時雨の雨が、濡れかゝるかゝると流行唄同じ口拍子に」、東南の島屋に居流れて浮世語をしてゐる五人の通人を持ち來つて說話の起點を定める、さうして彼等の口を通して、夕霧の地顏、素足、肉づき、眼光、肌の色から、彼女の伎藝利根應對まで事細かに、而も簡淨に彼女を描き出したあとで、その浮かれた人達の頭の中が夕霧の姿で一杯になつて、「始めの程は高聲せしが、何時となく靜になつて何か淚を滴さぬはなし」といふところまで導いて行くのである。その話から世之介の熱中が導き出され、章の最後に一つの短い劇的動作が附加されることによつて、夕霧の姿は完成する。さうしてこれを近松の「夕霧阿波鳴渡」に比較すれば、この二人の人の藝術化の樣式の相違が更に明かになるであらう。西鶴は五人の通人の話しぶりによつて、夕霧の死に對する作者の哀悼を暗示するに止つてゐるが、近松は彼女の死に對する感激を中心として其處に一篇の劇を構成する、縱令その劇の結末はめでたしめでたしに終つてゐるにせよ、その感激の中心は彼女の死——

彼女の病にある。而も彼はこの病ひに一つの悲劇的傳奇を空想によつて附加することによつて、「みをつくし」記者の所謂「時の人おしむ事橙をはなるゝ蔦かづらのごとし」といふ感情を具體化するのである。かくて今日に於いても私達が猶（文學としても音樂としても）愛誦して措かぬ夕霧のくどき――「たまさかに逢ふて此方樣に甘ようと思ふ所を逆樣な、こりや憎らしいどうぞいの、妾が心變つたら、踏んでばかり置かんすか、撲いてばかり置んすか」云々といふ、女心を曲盡せる名文句も亦この空想の結晶の中から生れて來るのである。このやうに西鶴と近松との間には、夕霧といふ月影を受取るのに、それぐに極めて特異なるレンズがある。併し兎に角夕霧はこの二人の藝術を通じて、始めて「神代この方類なき御傾城の鏡」といふ資格を得て來たのである。さうして此處に絲を結ぶことによつて始めて後世の戀を知る者の心に燃え廣がつて行つたのである。その數限りなき反響のうち、「みをつくし」の記事の如きはたゞ極めて小さき一部分を形成するに止る。此處に創造的藝術と漠然として微弱なる人生記錄との間の、爭ふべからざる相違がある。

（註）。馬琴の「著作堂一夕話」卷下に「箕山が大鑑に、夕霧は尤艷容濃なれども、目は瞎目なりしとしるせり」とあるが、私の瞎目することを得た寫本には夕霧に關することは見當らない。但し大鑑の序文が延寶六年冬の撰となつてゐる以上、同書の何處かに同年正月に死去した夕霧の記事があつたことは極めて自然である。若し夕霧が果して瞎目であつたとすれば、これは西鶴が「掃き捨てた」部類に屬するものであらう。西鶴の文章（從へば彼女の眼は「眼光ぬからず」である。女作美の翫賞者が時として些少の斜視に特殊の牽引力を感ずるやうに、西鶴も亦夕霧の瞎目を眼光ぬからずと却つて美しく見たのかも知れない。西鶴が元祿六年に五十二で死んだといふ普通の說に從へば、夕霧の死んだ延寶六年は、彼の三十七歲に相當する。西鶴が眼のあたり夕霧を見たことがあることは全然疑を容れないと云つてよからう。

藤屋（富士屋）の吾妻の事蹟も私達は結局「みをつくし」の記事に從ふより外に道がないであらう。彼女はたゞ寛文中富士屋こと佐渡島勘右衞門の抱であつたとのみ記されて、その落籍の年も死去の年も明かにされてゐないが、一代男の中に「延寶五年あやめ八日の曙に空しくなりぬ」と明記してあるところを見れば、これは「影も形もなき事にはあらず」を最も言葉通りにとつて、この小說によつて史實を補ふことが出來るかも知れない。彼女の最も喧傳する逸話は金三百兩を以て請出されたことである。吾妻は「越中夕霧にもならぶほどの全盛にてありし、器量すぐれ天性位高く、其上絲竹一通はいふに及ばず諸藝に通じ、「和國の評判記」といふ書に記さる、其中に最も勝れし太夫に

坂上與次右衛門といへる有德人あり」て、彼は當時異例に屬する大金を擲つて遂に彼女を落籍させたのである。これは再び近松も亦取扱へる題材であるが、近松は當時の傳說のまゝに彼女の眞正の戀人を直ちに彼女を落籍せしめた大盡とした。然るに西鶴は延寶五年を去ること僅か五年後の天和二年に、根據の有無は知らず、彼女の眞實の心を世之介にあるものとしたのである。「何時か此首尾待兼の山本近く一里に迎へ」られて「活計歡樂の暮し、之を嬉く思はず」もだし難き恩義にからまれて「只名の立たぬ死極め、かく思附くこそ夢の春、花の萎るゝ如く、湯水も絶つて」彼女は一種の自殺を敢てした。西鶴がこの構想を事實から得たか空想によつて案出したかは、今日の私達には最早闡明すべきよすがを絶する。吾妻の作と稱せらるゝ「身は浪花心は都名は吾妻のぼりつめたる日本の里」といふ拙い歌が假令眞實であるにしても、それは「心はみやこ」の意味によつて兩樣の解釋を下すことが許されるであらう。故にこの不明な問題を不明のまゝに拋棄して、これをもつて西鶴の空想的構成力を例證せむとする誘惑を斷念するにしても、其處に「志深く、物和かに、行儀ほんとし」たる遊女の性格が深く賞味せられ、この愼み深き遊女の思ひがけぬ戀と、雪の夜の忍び逢ひの危くも滑稽な情景が劇的效果を以て描寫せられてゐることは、如何にしても抹殺し去るわけに行かない。西鶴の人間知の確かさと、機智を帶びて明るいしめやかさとは、この挿話を結晶せしむるレンズとして、鮮かに讀者の心に印象される。それは固より男同士の意地と義理と、町人の道と武士の道と、男と男との情理を盡せる悲劇と、一人の男を共有する妻妾の嫉妬と互讓と——かういふ樣々の挿話と心のいきさつを一つに纒めて來る近松の「壽門松」とは、甚だ趣式を異にする作品であるが、兎に角、事實の有無と、作者にこの材料を提供した說話者の有無とを問題外にして、それが西鶴の頭を通じて像を結んだ藝術品であることだけは動かすことが出來ない。この短篇(卷之七、第六)は一の性格と境涯とを表現する小說である。それは一つの戀愛小說として、當代並びに次代の戀愛文化の發展に參加する。

34

吉野や夕霧や吾妻のやうな傳說化せる名妓を離れるに從つて、作品とモデルとの關係は曖昧の度を加へる。併し西鶴の理想化は此等の領域に踏込むに從つて却つて鮮明の度を加へて來るのである。

中に就いて最もモデルを發見し易いものは卷之六、第一に描かれてゐる大阪屋の奴三笠である。當時の他の文獻に徵するとき、彼女はどんな性質の女であつたか。私はそのために二つの書物を引用する。一

つは箕山の色道大鏡、一つは明暦元年の評判記「桃源集」。箕山が彼女の特徴をなす奴風について說くところは次の如くである――

「近代は傾城の中に奴風といふあり、……女郎の奴だていさゝかいぶかしき事なれども、つくづく愚案をめぐらするに、時うつり品かはりて、人の心直ならず、多くは野人のもてあそびものとなりて、きやしやなる事はこのまず、はづみたる事計りをすく世にしあれば、かゝる風情もなくてやはあるべき、しかりといへども、太夫職の用ゆべき風儀にあらず、天職より以下の業なるべし、うちくもりたる處なくて心勇む物なれば、是をあしとにはあらず、此風によくはまりたる傾城は、よのつねの女郎よりをとこのすく事莫大也、もしこの風儀をたてむとおもふ女郎あらばしめすべし、いかに人のおもしろがればとて、傾城の格をはづすは狂人に似たり、かはるところとかはらぬ處と有べし、つよきはつよきにたてて、卑劣なるふるまひをせず、氣推は氣推にたてて、またなくむさからぬ體を心に持べし、この心得なからむ傾城は、奴をまなぶといふにはあらで、本性あらはさむは口惜かりぬべし、つよみがちなるうちも、心にうけえたる人にあひ、ひしくくとなりてもろくたはるゝ所ありなば、男のまよふ事たなごころをさすがごとくなるべし。近世まのあたり見およびたる奴には、江戸の勝山、京には三笠藤八、大阪にては八千代御階大隅守也」。（寛文式下）

これに對して「桃源集」の評はかういふのである――

「様子よし、左門が流れなり。ひたひせばく色わろし、付たり歯なみわろし。お茶は初對面にても望み次第、下服にても立る由。びたつきて笑止千萬なり

三硯亦將行　一交百媚生

金持鈍太者　笠内見二傾城一

誰も見れ三笠とはなせ××のその下露は雨にきされり」

これは前掲の三笠と同一の三笠であるか。一見すればそれは全然別人でなければならぬやうにも思はれる。併し明暦と寛文とは中に萬治の三年を挾んで、初年と初年との間僅かに六七年に過ぎぬ、寛文式に「近世まのあたり見たる奴」のうちに擧げられた三笠を、明暦元年の評判記に記された同名の太夫と同視することは極めて自然である。若しこの推定が許されるならば、桃源集の著者が半可通らしく卑しい方面のみを强調して、恐らく多少の惡意を含んで見た同じ人を、大鏡の作者はもつと廣く公平に觀察したものとして、兩說の調和をはかることも出來るであらう。彼女は奴風が似合ふほどはづんだ、「うち曇りたる處なくて心勇む」一面を持つてゐると共に、又「强味勝たるうちにも、心にうけえたる人にあひ、ひしくくとなりてもろくたはるゝ所」を

も持つてゐたのであらう。この後の一面か、淺く彼女を見る者に、多淫なべたつき女といふ印象を與へることは可能である。さうして彼女の强味勝な方面が彼の反感を煽るとき、この印象は愈々際立つたものになるであらう。これに、彼女に近づき兼ねたものの卑しい惡意を加味すれば、桃源集の著者のやうな批評が、西鶴の描いた奴三笠の背後で呟かれたことは必ずしも不思議ではないのである。故に兩者を綜合して一人の女性の性格を想像すれば、桃源集に較べて大鏡の著者の方が、遙かに人間を見る眼の成熟を示してゐると云はなければならぬ。さうして西鶴も亦この點に於いて箕山と見を等しくする。西鶴に從へば彼女は「情あつて大氣に生れつき、風俗太夫職に備つて、衣裳好く着こなし、道中大底に踏り、少しすゑに見えて、幅のなき男は畏れて逢ふ事稀なり、取入りては好き事多き人にして、座配賑かに、床しめやかに、名殘思を殘させ、別るゝよりは早重ねて會ふまでの日を、何れの敵にも待兼させ、召遣の者、禿までも、嵐吹く夜は態とならぬ首尾にしかけて、差捨の盃、御志は是で持つた、太鼓女郎にも大方なる譯は見ゆるし、宿の男などとの事は、末の名の立つを密に示し、鑓手が欲ばかりの算用も聞かず、賤しき物は手に持たず、禿か睡るをも叱らず、夜更過ぐるまで用の事ありて彼理と、萬よしなに申しなしては喜ばせ、太夫様の事ならばと常々思はせて置き、黠しき仔細ありける」。桃源集の著者によつてあゝいふ卑しい評語を下されるその同じ人を、かういふ具合に描き出す西鶴の見方は注目に價ひする。一見突唐な比較であるが、人間をあるがまゝに見るといふよりも寧ろあるべきが如くに見て、あるべきが如くに見るが故に却つて人間の本質を洞察する點に於いて、彼の見方はキルヘルム・マイスターと類似點を持つてゐるといふことが出來るであらう。而も一面に彼は、長所を見てこれを愛しながらもこれに惑溺せずに、對象を俯瞰する高處に自ら立つてゐる。「黠しき仔細ありける」といふやうな評語は、彼が人間を見る眼の老熟を示すものと云ふべきである。

併し彼が此處で描かうとするものは、このやうな性格の概論ではない。彼はこの大氣な、賑かな、黠しき太夫を、その明るさとは反對な悲痛の中に投ずる。彼女は折しも微して流浪の中にある世之介と「始の程は面白く、中程は可笑く、後は氣詰重なり」といふやうな戀の深みに陷ることになるのである。「又いつもの時分とて、太夫忍出で、今宵は中立賣の竹屋の七様の一座に、紀州の人きちじよに始めて出會ひ、面白からず此様のことをあらため、是非に見切れとは愁し、是が見限らるゝものかと、左の袖口より手をさし入れ、脇腹いたくは抓らず、泪まじりの空五月雨の頃忘れては、盛かと見し蜜柑一つ、我口添へし跡ながら、手から手に渡して、方様は覺えてか、過にし秋安

が黑髮を拔かせ、猿などして遊びし夜は、誰忍ぶともなく騷ぎて、按摩取の休齋が二階より落ちてと、早口に語る中に、太夫樣はと聲々に尋ねけるこそ、身にこたへて悲しく、明夜は人面見ゆるも苦しからずと泣別れし」夜も重つた。折檻されても、酷く當られても、果ては庭に下ろして、「味噌漉を持たせ、豆腐より出でし細かなるものを買ひに遣は」されても、猶世之介のことを思ひきらず、遂に其年の雪見月の初雪の日、赤裸にして廣庭の柳に縛り附けて責めさいなまるゝやうな恥かしい目に逢つてさへもまだ志を枉げずに、「白綸子の二布引裂き、右の小指を喰切り、心のまゝに書附けて……今日を限りに舌咬切る」絶對絶命の場合になつて、始めて世之介のものになることを彼女は許されるのである。——この一章は全卷のうちでも最も著しい戀愛のグローリフイケーションの一つに屬する。さうして境遇に對抗する戀の力の、このやうなグローリフイケーションは、固より後世の文藝に有力な刺戟を提供せずにはゐない。私達が例へば浦里の雪責に於いて發見するやうな殘酷の美化と享樂とは、西鶴のこの邊に淵源を發すると見ることが出來るであらう。假令その以前にこのやうな說話の幾つかを發見することが出來るにしても、それは說話であつて文學ではない。文學の旗はそれが具體的に突込んで表現されることによつて始めて發生するのである。

私達は、一般の場合とは異る遊里的戀愛のグローリフイケーションを、前に引用した(第二十五節)野秋の話に於いて發見する。野秋とは如何なる女であるか。西鶴は此處で「まさり草」に證據を求めてゐるが、今その書をあけて見ても、私は彼女の名を發見することが出來ない。其處に頭字に野といふ名を持つてゐる者は、上官の部のあたらし屋の野關と、中官の部の清春の野風のみである。そのうち野風は何處から見ても西鶴の野秋に相當し得べき女ではない——「扨もくいや成女なり。色白く尋常成やうたれども、かほかたち幼稚にして力なく、まつうねふりめにて、いつもねおきの顏のやう也。笑ひても人のかなしむ程に見ゆ。愛めきたる事、葬禮の跡のしにやを見る樣也。氣だてぐしやりとしてさえきらず、いかにもうつとうしく、とりなりびしやくとして初心めき、いつも山だしの新造のやう也。第一大利休也。此人太夫の時も有しを思へば、客をそろしく侍る」。この批評はあまりに辛辣に過ぎて、この類の書には最も紛れ込み易い私怨の存在を思はせぬでもないやうな書き振である。但しあの成熟しきつた、一種の淋みを持つ西鶴の野秋は、如何なる敵によつてもこのやうな批評を下されるやうな女ではない。然らば殘る一人の野關について、まさり草の判者色道大鏡の著者藤本箕山は如何なる評語を書き記してゐるか——

「かたちおほかたよし、風體のしきりておほぐれやかに、自ら太夫めきたり、姿繪よし。くるは第一の利發もの、され共餘りかしこ過ぎて、分別いりまがり、さきぐりにて、人の公事一わうにて心にうけず、しぶときかたぎ也。又すましたるとみゆる所多し、なべての人打ち解け難く、心をかれて、人のよりつきすくなし。位づめにしてあぢを遣らんとする內に、男はや退屈してのくかたぎ也。しかし功者たるによりて面白き所も有、×××えも云はぬ感情有、一儀御好物、お茶初むかし。

　勘公、島原の左門に對して、みるべき者これ也」

これも亦西鶴の野秋ではないやうに見える。併し「×××えも云はぬ感情有」といふ言葉が先づ私達の眼を捉へる。「くるは第一の利發もの」と言葉も亦私達の注意を喚起する。かういふ風にして兩者を比較しながらまさり草の文章を眺めてゐるに從つて、私達は西鶴と色道大祖との意見の相違は、結局胡桃の殼を割り得てその實を味つた者と、「退屈してのいた」男との相違に歸着することを發見するであらう。心から兩夫を愛するやうな「名譽のしなし」をなし得た彼女、而も淚ながらにその眞實を告白し得た彼女は、恐らく容易に內心をのぞくことを許さぬ殼を持つてゐたであらう。「分別いりまがり」、「しぶとく」、「すましたる事と見ゆる所多く」、「心置かれて人の寄り付少し」と見えたであらう。故に一見矛盾するやうな兩者の評語が、却つて野秋が野關であることを證明してゐるやうに私には思はれる。若しも果してさうであるとすれば、世之介と共に、開き難き彼女の內心の扉を押し開いて、愛を以てその奧にある不思議な美しさを捉へおほせたのは、確かに西鶴の「名譽の仕なし」と云はなければならぬ。女性の複數戀愛の心理、その眞實とその悲痛——かういふやうな體驗は、普通の女性にあつても、彼女達の境遇が自由の度を增すにつれて漸々可能になつて來るであらう。併しこの現代的複數戀愛は本來自由から生れたものなるが故に又遊戯的に輕く發散し得る。これに反して遊里といふやうな不自然な組織の中にあつては、複數的接觸が——從つて又複數戀愛の假裝が、その存在の根本條件である。此處に身を沈めた女達にとつての不可抗の束縛である。さうしてこの淵に沈んでも猶死にきれぬ人間の魂は、一つの戀に縋つて苦界の外に自由を求めるが、複數の戀を眞實にすることを學んで此里の中に自在鄕を創造するかするのでなければ、到底生き行くべき空もなかつたであらう。これは魂の深みを持續けてゐる遊女にとつては生死をかけた大問題である。それは不可抗の運命の下に置かれてゐるが故にモダーン・ガールのそれとは異る眞摯悲痛なる悟道である。かくて不自然な遊里に、不自然なるが故に特別の發達を豫約されてゐる複數戀愛の心境——かういふ特別な靈魂の

世界を、巫山戲ず浮かさずに、溫かな愛と明るい尊敬とを以て表現することを得たのは、藝術家として讃歎に價ひする西鶴の功績である。

私は前にこれを「得難き一つのヒューマン・ドキュメントである」と云つたが、併しそれは單に人生記錄として得難いのみではない。今私は又安心して、これに「得難い藝術品である」と附加することを許されるであらう。これも亦西鶴が當代並びに次代の藝術家に與へた一つの先蹤である。併し私の知る限り、この點に於いて西鶴の傳統を繼承し得た者が、藝術的實行に於いて絕無なるのみならずテーマの捕捉にさへ極めて稀少なのは何故であるか。此處に西鶴が、徳川時代の文藝を通じて、來者を絕して孤立してゐるのは何故であるか。其後の滔々たる大小の文藝を通じて、複數戀愛は男性の輕易な特權とせられ、女性は一樣に「兩夫に見えざること」を金科玉條として、この鐵則に背反せる者が、事情に應じて寬容の程度に多少はあつても、結局憎まれる若くは蔑まれることに決定してしまつたのは何故であるか。

この問題は藝術家の人生の見方に關する問題なるが故に、當然に彼等並びに彼等の屬する社會の人生に對する考へ方の問題と――換言すれば倫理思想の問題と聯關する。賣笑を公認した當時の社會は何故に遊女の側に於ける複數戀愛の權利を（複數接觸ではなくて複數戀愛の權利を）承認するに吝かであつたか、凡そ男性の複數戀愛を當然の權利とする思想は何故に女性のそれをも是認する思想にまで一歩を進めなかつたか、社會は一方に於いて複數結婚を實行しながら何故にその道を最後まで行き盡さなかつたか、行き盡すことによつて新しい道を發見するまでに到り得なかつたか――この問題に對する解答は自明といへば自明である。女性の立場から提出されることを要するからいふ問題は、徳川時代のやうな專制的な男子中心主義の時代にあつては、凡そ發言することを許されなかつたであらうし、假令發言の自由は許されると假定しても、女性自身がその內心に於いてこの問題を重要視する氣にはなれなかつたであらう。凡そ男性に反抗する武器としてでなしに自分自身の必要から、女性が（普通の境遇にゐる女性が）複數戀愛の權利を眞劍に要求する內的衝動を感ずるかどうかは孰れの世にも疑問である。故に徳川時代の倫理思想が全體として何故に女性の複數戀愛を是認するやうに流れて行かなかつたといふ疑問は、問題にならないと云へば確かに問題にならないのである。

併し藝術に聯關する倫理問題として見れば事情が違つて來る。この場合の問題は、藝術家がその倫理感と矛盾することなしに、愛と慾とを以て包攝し得る範圍にあるからである。女性自身には發言の自由なく、發言を求める思想がない場合に於いても、これを必要とする一群の女性があり、これに相當する特殊の生活事實がある限り、其處には

常にいかに藝術家にとつて――彼の愛にとつて、問題がなければならぬ。其處に問題を見るのは藝術家の義務である。西鶴は女性の側に於ける複數戀愛の生活事實に問題を發見した。然るに彼に續く者は何故にこれを見ることが出來なかつたか。これには人知の理解を絶する個性出生の問題――天才出現の問題も確かにからんで來る。併し一般的に答へ得る範圍のうちで、大摑みにこれに答へることを許されるならば、西鶴の提出した問題をとりあげて更にこれを徹底させるためには、徳川時代の意識に、必要な深さが缺けてゐたのである。特に當時の文藝が最初から娛樂としての役目に馴ひされて、一向きに人間愛の深みに突込む方向から益々離れて行つたからである。

併しそれだけに、私は愈々藝術品として西鶴の野秋の取扱ひ方を珍重する。彼は男性に認めた複數戀愛の權利を女性にまで擴張する。彼は利害の打算を越えて二人の男に心を打込んだ彼女を、藝術家の愛とフモールとを以て自分の胸に溫める。さうして彼女の行爲を淺く解してこれを「勤のため」と誹る人達を嘲笑する――「是は淺瀬を渡る人、此里の戀の淵を知らず、水心覺えて、せめては一度引舟に取附き給へかし。」かくて「此里の戀の淵」が西鶴のやうなレンズを發見して、これを通して像を結んだことは、日本文藝史の一つの幸福である。固より生活事實が過ぎ行くに從つて、これを投影せる像も――藝術品も亦再び繰返されることは出來ない。併しこの意味に於いて過去のものとなることが、藝術にとつて何の病ひぞ。寧ろ再び繰返し得ぬところに藝術の特殊の尊さはあるのである。

(註)。 猶私が差當り作中の人物と實際の遊女との同一をほゞ推想することが出來るものは、卷之六、第五の初音である。彼女は「桃源集」に「何と上手に仕立られたるか、禿の折とは見たがへ付るまでよくなられたり、そのわけがまだわろし」と評せられてゐる西洞院の初音、「大鏡」の扶桑列女傳に、「承應三年甲午春三月而補天職…周子性利根英木而面在愛敬一毎レ會レ客不レ擇二美醜一下レ情無二深淺一小歌名人而天下之人寄レ焉、且粹二三線一也、故鳴二於都鄙一因レ玆萬治元年戊戌冬十月補二太夫職一自レ是益レ威、光燿二於世一德山高二於地一寛文三年癸卯十二月四日年廿四而退二曲郭一矣」と傳へられてゐる宮嶋家の初音と恐らくは同一人であらう。この女についても、その手管の描寫に西鶴といふレンズの特色を見ることが出來る。併し今は繁を恐れてこれを細說することを控へよう。嘗て「好色一代男おぼえがき」に「彼女を桃源集に當時の大夫として評せられてゐる初音(扶桑列女傳の杉山家初音)と同視しようとしたのは私の過であつた。

押韻小曲集（試作卅五章）

與謝野晶子

小序　詩を作り終りて常に感ずることは、我國の詩に押韻の體なきために、句の獨立性の確實に對する不安なり。散文の横書にあらずやと云ふ非難は、放縱なる自由詩の何れにも伴ふが如し。この缺點を救ひて押韻の新體を試みる風の起らんこと、我が年久しき願ひなり。みづから興に觸れて折々に試みたる拙きものより、次に其一部を抄せんとす。押韻の法は唐以前の古詩、または歐洲の詩を參照し、主として內心の自律的發展に本づきながら、多少の推敲を加へたり。コンソナンツを避けざるは佛蘭西近代の詩に同じ。同語を繰返して韻に押すは漢土の古詩に例多し。

×

砂を掘つたら血が噴いて、
入れた泥鰌が龍になる。

ここで暫く絕句して、
序文に擬つて夜が明けて、
覺めた夢から針が降る。

×

時に先だち歌ふ人、
しひたげられて光る人、
豚に黃金をくれる人、
にがい笑を隱す人、
いつも一人で歸る人。

×

赤い櫻をそそのかし、
風の癖なるしのび足、

ひとりで聞けば戀慕らし。
雨はもとより春の絲、
窓の柳も春の絲。

×

見る夢ならば大きかれ、
美くしけれど遠い夢、
險しけれども近い夢。
我れは前をば撰びたれ、
わかい仲間は後の夢。

×

すべてが消える、武藏野の
砂を吹きまく風の中、
人も荷馬車も風の中。
すべてが消える、金の輪の
太陽までが風の中。

×

花を抱きつつをののきぬ、
花はこころに被さりぬ。
論じたまふな、善き、惡しき、
何か此世に分つべき。
花と我とはかがやきぬ。

×

凡骨さんの大事がる
薄い細身の鐵の鑿。
髪に觸れても刃の缺ける
もろい鑿ゆゑ大事がる。
わたしも同じもろい鑿。

×

林檎が腐る、香を放つ、
冷たい香ゆゑ堪へられぬ。
林檎が腐る、人は死ぬ、
最後の文が人を打つ、
わたしは君を悲まぬ。

×

いつもわたしのむらごころ、
眞紅の薔薇を摘むこころ、
雪を素足で踏むこころ、
青い沖をば行くこころ、
切れた絃をばつぐこころ。

×

韻がひびかぬ、死んでゐる、
それで頻りに書いてみる。
皆さんの愚痴、おのが無智、
誰れが覗いた垣の中、
戸は立てられぬ人の口。

×

泥の郊外雨が降る、
濡れた竈に木がいぶる、
踏切番が旗を振る、
ぼうぼうとした草の中
屑屋も買はぬ人の故。

×

指のさはりのやはらかな
青い煙の匂やかな、
好きな細卷、名はDIANA。
命の闇に火をつけて
光る刹那の夢の華。

×

青い空から鳥がくる、
野邊のけしきは既に春、
細い枝にも花がある。
遠い高嶺と我がこころ
すこしの雪がまだ殘る。

×

槌を上げる手、鐵打つ手、
扇を持つ手、筆とる手、
炭をつかむ手、兒を抱く手、
かげに隱れて唯だひとつ

見えぬは天をゆびさす手。

×

高い木末に葉が落ちて
あらはに見える、小鳥の巣。
鳥は飛び去り、冬が來て、
風が吹きまく砂つぶて。
ひろい野中の小鳥の巣。

×

人は黑々ぬり消せど
すかして見える底の金。
時の言葉は隔つれど
冴ゆるは賦の金の韻。
ままよ、暫く隅に居ん。

×

いつか大きくなるままに
子らは寢に來ず、母の側。
母はまだまだ云ひたきに、
金のお日樣、睡の驢馬、
おとぎ噺が云ひたきに。

×

ふくろふがなく、竹になく、
山の法師がつれてなく。
わたしは泣かない氣でゐれど、
からりと晴れた今朝の窓
あまりに青い空に泣く。

×

おち葉した木が空を打ち、
枝も小枝も腕を張る。
ほんにどの木も冬に勝ち、
しかと大地に立つてゐる。
女ごころはいぢけがち。
玉葱の香を嗅がせても
青い蛙はむかんかく。
割けた心を目にしても

[illegible]
[illegible]に[illegible]ある。
[illegible]行くほどその道が
今日のわたしに遠ざかる。

×

[illegible]い小鳥のかかる[illegible]、
わかい小鳥の[illegible]る[illegible]、

[illegible]のやはらかな

×

[illegible]
わたしの知つたことでなし
細い手で振る[illegible]。

×

影を追ふとて[illegible]。

母に逢ひたや、ほおやらほ。
わたしも逢ひたや、猶ひと目、
載せて歸らぬ遠い夢、
どこにゐるやら、眞赤な帆。

×

鳥屋が百舌を飼はぬこと、
そのひと聲に百鳥が
おそれて啞に變ること、
それに加へて、あの人が
なぜか折々だまること。

×

遊しに植ゑた戲れに
あかい芽をふく杖がある。
指を觸れたか觸れぬ間に
石から虻が舞ひあがる。
寢てゐた豹の目が光る。

×

われにつれて
花を摘み摘み行き去りぬ。
唯だやさしきは明日の時、
われに著せんと、光る衣
千とせをかけて手に編みぬ。

×

がらすを通し雪が積む、
こころの棧に雪が積む、
透いて見えるは枯れすゝき、
うすい紅椒、やぶつばき、
青いかなしい雪が積む。

×

はやりを追へば切りがない、
合言葉をばけいべつせい。
よくも揃うた赤インキ、
ろしあまがひの左書き。
先づは二三日あたらしい。

廿世紀は横を向く、
太陽までがすまし行く。

×

話は春の雪の沙汰、
しろい孔雀のそだてかた、
巴里の夢をもたらした
狄野綾子の宿の唄、
我子がつくる薔薇の花。

×

誰れも彼方へ行きたがる、
明るい道へ目を見張る、
おそらく其處に春がある。
なぜか行くほどその道が
今日のわたしに遠ざかる。

×

青い小鳥のひかる羽、
わかい小鳥の躍る脚、
遠い海をば渡りかねて、
泣いてゐるとは誰れが知ろ、
まだ薄雪の消えぬ峰。

×

つうちで象をつうくつた、
大きた象が目に立つた、
象の祭がさあかえた、
象が俄かに吼えだした、
吼えたら象がこおわれた。

×

まぜ合はすのは目ぶんりやう、
その振るときのたのしさう、
かつくてえるのことでない、
わたしの知つたことでない、
稚い手で振る無産黨。

×

鳥を追ふとて安壽姫、

母に逢ひたや、ほおやらほ。
わたしも逢ひたや、猶ひと目、
載せて歸らぬ遠い夢、
どこにゐるやら、眞赤な帆。

×

鳥屋が百舌を飼はぬこと、
そのひと職に百鳥が
おそれて啞に變ること、
それに加へて、あの人が
なぜか折々だまること。

×

遊しに植ゑた戯れに
あかい芽をふく杖がある。
指を觸れたか觸れぬ間に
花から虹が舞ひあがる。
寢てゐた豹の目が光る。

×

われにつれなき今日の瞳、
花を摘み摘み行き去りぬ。
唯だやさしきは明日の時、
われに著せんと、光る衣。
千とせをかけて手に編みぬ。

×

がらすを通し雪が積む、
こころの椽に雪が積む、
透いて見ゆるは枯れすゝき、
うすい紅梅、やぶつばき、
青いかなしい雪が積む。

×

はやりを追へば切りがない、
合歡葉をばけいべつせい。
よくも揃うた赤インキ、
ろしあまがひの右書き。
先づは二三日あたらしい。

×

飛べ、けはしきを、風の空、
吹け、はげしきを、火の喇叭、
摘め、かをれるを、赤い薔薇、
漕げ、逆卷くを、千波萬波、
君が愛、音樂、詩の力。

×

うぐひす、そなたも雪の中、
うぐひす、そなたも悲しいか。
春の寒さに音が細る、
こころ餘れど身が凍る。
うぐひす、そなたも雪の中。

×

あまりに明るい、奧までも
開けはなちたるがらんだう、
つばめの出入によけれども
ないしよに逢ふになんとせう、
闇夜も風が身に沁まう。

×

摘め、摘め、誰れも春の薔薇、
今日の盛りの紅い薔薇、
今日に倦いたら明日の薔薇、
とがるつぼみの青い薔薇、
摘め、摘め、誰れも春の薔薇。

維新回天史の一面（其の三）

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰 德富猪一郎

（第十）皇室の御生活

今孝明天皇が、安政元年四月六日、内裏の御炎上より、安政二年十一月二十三日、新に營み給へる内裏に、御還幸あらせらる迄の――即ち桂宮を假皇居となし給へる間の――事に就き、少しく語る必要がある。それを語るに就いては、先づ前提として陛下の御手許が如何に御窮迫にて在らせられ給うたかと云ふことを知る必要がある。

元來皇室御料は、三萬石にして内膳司一年の費用を、銀七百四十五貫目と定めたのは、七八十年も以前の事だ。爾來年と共に物價は騰貴し、しかも御收入は固定して、幕府は更にこれを增加することを爲さず。然れば只だ陛下の御手許を引き縮むるの外はなかつた

× × ×

其の一例を云へば、陛下は酒の御嗜みがあつたが、その酒は眞に惡酒にて、一日所司代酒井忠義の臣三浦七兵衛が頂戴したる

に如何にも不味きものにて、到底口にする能はず。此によつて彼は、其の現品を添へ、其の旨を御用度掛りの内藤豊後守正縄に左の如く申し送つた。

乍レ恐以ニ書取ー奉ニ申上ー候。益御機嫌克被レ遊ニ御座ー恐悦至極奉レ存候。然者過日一寸奉ニ申上置ー候御膳酒爲ニ御風味ー極内々に申下し候に付、乍レ恐爲レ持奉ニ指上ー候。私共にも被レ下兼候位之御風味に而實に恐入候御事に奉レ存候。乍レ併御定直段の割には、調進方格外骨折相納候儀にも可レ有ニ御座ー哉と奉レ存候。其餘都而御膳邊右に准じ候御模様哉に相伺申候。尚乍レ恐御賢慮被レ爲レ在候樣奉レ存候。此段奉ニ申上ー候事。

五月七日（安政六年）　三浦七兵衛

猶これに對する内藤豊後守正縄の返事は左の通りである。

口上

昨日者御膳酒御差越忝早速拜味致候處以之外成味、七分水三分酒と申位之事に候。總而之義右に准じ候旨承知致候。此節取調中に候。其内否可ニ申入ー候。且器返却に付有合麁酒差入申候。草々不備。

五月八日　豊後守

七兵衛殿　御返事

× × ×

尚又た近衛家の采邑地が、酒の名所伊丹であつたから、その酒を取寄せ、これを陛下に差上げられたるに、陛下は世の中に斯くも美味き酒ある歟と御驚き給うたといふ話もある。

又た或日、所司代酒井忠義に御膳を賜つたが、その肴が腐敗してとても箸を下すことが出來なかつたといふことで、それを見て岩倉具視卿が、酒井に向つて、如何に幕府が皇室に對して、その道を盡さなかつたかといふことを論じ、酒井も爲に顏に汗して退いたといふことである。

又御手許の品とても、大概ね御不足勝にて、御製を御書き遊される短冊にさへも事足らせ給はず。又いつか御好にて、或る古硯を購はんとし給うたが、所司代がこれを止め參せて遂に購ひ給ふ事が出來なかつたといふ話もある。

又た或時には公卿の一人が、鯉鱠を奉りたるに、内侍は其の一切を焼きてこれをすゝめ參らせたるに、御箸を下げさせ給ふ

時に、猶一切殘つてゐた。陛下はその殘りたる一切を、晩酌の肴となすべければ捨て去る事勿れと仰せられたといふことだ。

又御臺所よりすゝめ參らする御膳の外、內侍は時々魚類や、野菜類を混ぜて、所謂よせ鍋の如きものをすゝめ奉りたるに、その一半を晝の御膳に供へ、他を晩餐に供へしめ給うたといふ事にて、御酒には只だいつも御膳部の副食物にて、別に下物といふべきものは、一品たりとも召し給ふことが出來なかつた。

× × ×

又宮中には昔から雉酒といふものがあつて、雉の肉に酒を注ぎて參らするものであるが。當時は雉の肉を得給ふこと能はず、新年を祝し給ふ雉酒も燒豆腐に酒を注いで、それを代用あらせられたといふ。

陛下が尙皇太子にて在したる時に關白鷹司政通は、或日御倉の中に御案內申上げ、種々美しき器具を取出し、『これは昔德川三代將軍家光上洛の砌に用ひたる品に候』と申上げたれば、陛下は政通に向ひ給ひ、『朕が一生の中に、將軍の上洛を見るを得べきや』と仰せられたとて、政通も覺えず淚を流し、御返事をも申上げ得なかつたといふことである。

（第十一）假皇居の御生活

以上の事實に徵すれば、安政二年十一月新しき內裏に御移りあつて以來にも、御不自由には、その以前と殆ど變りはなかつたやうである。斯る次第であれば、その假皇居に在したる事の、如何に御不自由にてあらせられたかといふことは、察するに難くない。

× × ×

假皇居桂宮は、近衞邸と相接近し、呼べば應へんとする距離にある。而して陛下は近衞忠凞及三條實萬、當時の所謂座主の宮即朝彥親王等と、常に國事に就いても、又は遊樂に就いても相與に偕にし給うた。當時の御模樣は幸に天皇から近衞忠凞に賜うたる宸翰が、保存されてゐるからそれにて知り得らるゝ

されば今此處にその若干を、恭しく奉掲する事とする。

但しこの宸翰を拜讀するに就いて、我等は到底昭和時代の眼を以てしては、諒解する事が出來ない。我等は須らく身を嘉永安政の頃に置かねばならぬ。如何に當時の皇室が、畏れ乍ら御不自由の位置に立ち給うてゐたかは、論より證據、此の宸翰が

遂一證據立てゝゐる。

孝明天皇紀を按ずるに、『安政元年閏七月二日、これより前、右大臣藤原（近衞）忠熙の寢殿をもつて紫宸殿代となす。此日徽行して暑熱を避け給ふ』とある。これは表向の事であるが、陛下は近衞家とは殆ど我等が想像の出來ない程度まで、親しくなし給うてゐた。以下歷々御宸翰に就て之を見よ。

×　　×　　×

右大臣殿江　　統仁
内々

甚不順の氣候御用心被レ遊候樣存候事、御存之通之悪筆の處急候間別して大亂筆御わかり兼と存候事文句にも不行屆の處可レ有レ之御直願存候事

梅雨中にてしみ〳〵敷候然今日は宜濕に御座候、彌右府公御安康令レ賀候。且先日以來每々品々被二送下一大慶無レ限候宜御禮申入候。其上申候も何共無氣申兼候得共右別紙品々書付入二御覽一候。右者只今御せがみ申候には無レ之、右品兼而望之品に候間又々何ぞ好候樣との事に候得者、右書付之内之品御貰申候事なれば重疊都合能無二此上一存候間兼而申入置候事

呉々も每度々々數々御貰申候上又々加樣之事申候も實に々々大欲心深に申兼候へ共、兼而申入置候カツテン〳〵　只今御貰申樣御せがみ申のにては無レ之、白金御貰物好候樣の時加樣の品に候と宜間一寸申入候

呉々も每度々々御無心申候段幾重にも恥入候得共實は楊弓之具なども大分持居候處、無二壹茂一燒失候間（安政元年四月六日炎上の際ならん）一寸右書付御目に掛申候。必々只今御貰樣御せがみ申にては無レ之候間、其段あしからず宜御取なし願入候事

且右御返事の處委細く御一封にて被レ下兩頭名前御返事の處はたゞ私一封承候と斗にて宜候。每々關白へ私所筆文進候も如レ此候間其段一寸申入置候事よろしく

五月廿四日

右大臣殿へ　　統仁
内々

×　　×　　×

これは四月十五日[illegible]に御移りになつて以來、[illegible]

ケ月餘の事である。其の文句を捧讀すれば、袂に涙が出る程である。如何にも御心配御遠慮の御模樣が拜察せらるゝ。

尚ほその目錄は左の通りである。

楊弓箱
紫檀木地
蒔繪　柳櫻鞠　見返同歌
梅木地
蒔繪　梅鶯　見返青梅
黑檀木地
蒔繪　松竹梅折枝　見返水鷄
黑塗
蒔繪　嵐山渡月橋之景　見返同
紅花櫚木地
蒔繪　花紅葉折枝
裏黑塗見返小鳥
弓箭クロヽ添レ之
小刀作何成共（島津家へ波平及び與集へ小刀御誂近衞家より傳献したること島津家史に記す）
右若々貰樣之時は猶形細申入候事
風爐釜
以下薄茶具
廿一代集　雁菱か薄茶か小本
小鼓
小簞笥　木地何成共
卷物
總書物類
右

・　×　×　×

更に上文に引續き同じく六月八日附にて左の宸翰がある。

進上　極内々　　藏（御花押）

追々暑之時分御堅固に御用心有レ之候樣存候事

誠に々々大々亂筆偏に御免希入候事

追々向二暑氣一候而に成宜滋に候事、彌尊公御安泰令レ賀候。然者過日御面會申候節御噂有レ之候品々書試入二賢覽一候一包之書物、甚澤山に而何共御氣毒に存候得共、先書試候間入二賢覽一候が決して達而御無心申候に而者無レ之賢慮次第與存候

事、且於二是又甚不都合之繪圖（御繪圖別冊に記す）乍二憚筆一候、是入二叡覽一候甚之書形故御分兼與存候間若々御分兼候得者幾度に而も御尋被レ下候樣存候事。亦今一包は楊弓箭納圖是又同上乍入二叡覽一候が是は實々決不二急申一實に此節御貰候共致候場所も無レ之候事故造營後歸殿之上（新營御所遷御）若く被レ送候事なれは再度之御厚意に存候事。且右同包之書物猶更達而御無心中に而無之候間是者以何樣に而も宜候事餘り々々每度數々御貰申候上加樣之事申候茂實々申兼候儀に候得共先日茂餘り厚御言葉にあまい候而加樣之大俗心之事重々申偏御免希入候事此分宜御聞賴存候事。且先達而書付進候時若く小鼓而な事書入候半ずや甚心配存右書留不レ置候間不二覺申一候得若々書入候半ずや若々書入候事なれば是又鳥渡申入置候小鼓事者不レ及二御貰一候間鳥渡此段申入置候事

且右本被レ下候共決して本揃子など不二入申一進文匣に而も被二入下一候得ば共に而とつと宜候事呉々茂此段申入置候事

安政元年丙辰

水無月八日　　此花

右大臣殿江　　藏

參

×　×　×

而して右の宸翰には左の副紙がある。

廿一代集　薄葉小本

類題和歌集

右先達而御貰申候而此節日々用深喜存候又々乍今一細御無心申候

古今和歌集遠鏡　薄葉小本

和歌名所壹覽

拾玉集

明日香井集

鈴屋集

和歌詞之抄

正木のかつら

和歌八重垣　薄葉小本

異類分類抄

百家類聚

類題和歌鰒玉集

獨學和歌集
和歌大部抄同七部抄
古語深秘抄　大家集類題
和訓栞
貞觀政要諺解
假名貞觀政要
經典餘師
丹鶴叢書
和論語
四聲字訓大成
正字玉篇大全　薄葉小本
右字引類
謠典拾葉抄
謠訓蒙圖彙
唐訓蒙圖彙
箏曲大意抄　右はどうでもよろしく候
合類書籍目錄大全
職原抄

以上

×　×　×

此にて陛下が當時如何なるものを御讀み遊ばされた乎といふことがわかる。

猶六月十日附にては、陛下が近衞家に向つて、茶な御無心遊ばされて居らるゝ。それは左の通りである。

右大臣殿　此花（御自稱）

机下へ

兎角不揃之氣候御大節に御用心之程深く存候事

大亂筆御免候事

御安泰令二慶賀一候梅雨中降續鬱氣候、扨過日者偶昔進候處早速御領掌之程慶心候。然此節御吟之藤州より擂子繪形書試進入候。委細者別紙に候間宜御取計頼入存候。若々御分兼なれば幾度に而茂御尋問頼置候事且誠に申兼候得共御手製茶挽先達而御無心申御貴申候處末一度も不レ入候而燒失（炎上の際）候得度に而重々申兼候得共又々御無心申候間、何卒寒中頼々存候事然決而不二急申一候間宜頼存候事

安政元年甲寅

六月十日

右大臣殿　此花

机下江

× × ×

而していよ〳〵暑を近衛邸に避け給ふまでには、種々のゆきさつがあつた事は、左に掲ぐる宸翰にてわかる。

陽明殿　此花

御机下江

猶委細者文に而茂難ニ申盡一候間誠御面倒乍其内御勝手次第御入來候はゞ御面會申委細者御相談申度存候事。然關白(鷹司政通)茂又一兩日之内に參ル様子故其節如何か乍何卒暑氣之時分御苦勞千萬候得共御勝手次第御面會賴置候事

猶暑氣之時分御用心と深存候事

土用中之印大暑之候先々地動止(六月十五日五畿内地震)天象茂穏候猶段々靜謐之様希入候爾貴公御安康令ニ慶賀一候然者御面倒乍一封入ニ貴覽一候今日執柄(鷹司政通)久々に而參上御面話之一件尤自分之處賢亭江(近衛邸)臨幸の御儀往來出來之事者謂無レ之所司代(内藤紀伊守)茂暑之時分御繁用彼是工有レ之由に候。何とて鷲尾家(隆聚)河鰭家(公述)撤に成右之所江立出之事を何か無被ニ申入一候。然是者無度難レ申候間宜御取扱賴存候。貴公に茂何茂御逢申處にて面會致共上庭向且そこら爲レ見居間迄茂連行候處節よく庭江職人入込中にて殊之外蒸暑に候間於ニ關白一茂深暑がり之様子に候得共右賢亭參一件之事者未噂無レ之候間又私より申掛候而茂如何や先不申候例之私之不行屆と御存候乍れ共今日何茂向より噂無之所にて私より申掛候而者是迄謀計露顯候を深配慮致過未レ申候間此段宜御取成偏賴存候事

只今關白面會濟候早々此一件御目掛申候不ニ相替一大亂筆御免賴存候

右府公江　此花

御密使

× × ×

而して當時如何に庵主の宮が陛下に近しく在した乎といふことは、儲君の觀察によつてわかる。

尤内府(鷹司輔煕)招候積、且一條(齊敬)亞相之處へ十五日御譚申入候

只今關白(鷹司政通)面會濟速執筆不二相分一亂書御免賴上候

暑氣御用心存入候事

何も荒々

嚴敷暑氣候

益御安康令レ賀候、誠爾昨日者御入來に而當座樂等有レ之滿足不レ過レ之候。然御歸及二遲刻一御空腹且著大之比萬々御氣毒に恐懼候、何之御障り無レ之御安體之御事承聞致度如レ斯候

然者昨夜御約束致置候十四日御入來之事、甚申兼候得共少々差支有之候間何共自由之義申兼候得共尊公無二御差支一者十五日之方御入來願度、候座主宮も兼日約束致置候間何も十五日入來と心得候猶又當座樂等如レ例候、哉昨日位之刻限御來臨賴置候、事且又申入今日關白又入來候、而萬々譚之便十七日之比申試候得者志極之機嫌且諸司代も(內藤紀伊守 內藤豐後守)申居候。連日に而も被レ爲レ成候樣申居候、然關白も存候、者寒氣之比は連日何とか候へ共暑氣之頃者難著召日に候間宜半被二申居一候是は譚に候間仲々望無言葉に連日參與申樣な事に而は無レ之候得共、其位之事故尊亭(近衛邸)へ參候事も安心にて存候事仍早々より御駈ケせ御氣毒乍十七日辰刻早々推參致候間宜賴入候。就而は兼々の存意申述べ候。必々御儲物無レ之樣先日茂推參節茂めいくに送物何共御禮申盡難候每度參候に加樣之事何共恐入候。偏に此後は御儲物無レ之樣兼賴置候事且又當座茂不二相替一催候此茂猶十五日御面會之節委細申置候事

用事耳何茂荒々

安政元年六月十二日　此花

右大臣殿え

(第十二)近衛邸臨御

而して陛下が始めて近衛邸に御赴かせられたのは、六月中であつたに相違ない。左の宸翰によつてこれを知る事が出來る。

右府公　統仁

御机下

先達而は御亭始而拜見致拔々御奇麗御弘目愚も有深々辛入候

何卒又々参殿（近衛邸）事と偏存候。然色々と御騒申其段何共御免希入候仍御返事迄荒々誠に々々大亂筆偏御免頼入候事

統仁謹送

貴翰得與拜見候兎角難晴天象地動難止心配致居候事。併尊公に茂益御安康令祝賀候。然者從先日以座主宮（青蓮院宮）毎々御相談申深御面働と存候事然深安心無限慶心存候只今又々御細御心切之御文被下得と熟覽候處志極御尤と存候何茂委細承候間御安心可被成候。早速今日召議奏申渡候心得之處折惡く加勢武傳も退出後故不都合候間今日は不申渡候明日は法樂に而朝早く候間朝之内都合次第可申渡心得に候然萬一時移り關白（鷹司政通）出仕候事なれば又々後日に可見合哉且一向何々無予心配之趣申述關白へ私心得斗に而可申試哉然先日之様子に而は今度之地震格別無頓着様子故申加氣候而程能参候へば宜乍又々惡成候而も甚心配候間若明日之事なれは、明後日に而も招議奏又三條（實萬）可熟談哉と兩様可有以何や私案候は議奏へ申候而兩役勸考程克取斗關白へ申入候而都合能参候はゞ志極宜候へ共若々私申候之様子に申候事にては關白へは直々不申議奏へ申陰之手廻之様萬一關白被思候而は始終處誠に々々都合惡く重疊心配に存候間右兩様之處以何可然、然如御文候はゞ三條も委細承知に候事なれは其は決してもらす様之事無之と存候間左様なればとんと無心配候。然明日關白参上之處無覺束候間若参なれば如始以何候や此偏も毎度々々御面働乍御懇切之御文にあまへ候て又々わからぬ事認御目掛申候宜御取扱頼存候呉々も御懇切之段深々喜存候事

泉殿之事も安心候様被仰聞是又深く喜存候事

仍此段一應御相談申入候事

即答

便申候此後も何か無遠慮申入候間右府公よりも無遠慮被仰聞候様始終之處何か又々御譚相手と深く喜存候間決して無遠慮何事も打明し御互に師弟之處無隔被仰下候様兼申願置候事

安政元年甲寅

六月

卽答

右府公　　統
御机下

師弟云々の御言葉は、近衞忠凞が、陛下御幼時書道御指南申上たからである

× × ×

宸翰にもある如く『先達而は御亭始而拜見致拶々御奇麗御弘目慰も有深々喜入候何卒又々參度事と偏存候』との御言にて、これ等の事からして、遂に表向に閏七月には紫宸殿代に近衞家の寢殿をなさせ給ふ事となつたのであらう。

尙左の御宸翰によつて、陛下と親王と近衞、三條との間に、種種の御相談事があつた事がわかる

右府公　　天淵(御自稱)
御机下江

朝夕者何與無凉氣に候得共日中者兎角難レ絕二暑氣一御用心被レ成候樣存候事猶又近々御入候はゞ數々御譚申入候半と御待申居候

統仁謹呈

兎角殘暑候得共先々今朝より快晴清暑候　益御安康令レ賀候　昨日御入來に而數々御譚申幸青門（靑蓮院宮）茂來合に而志極都合に候

先刻三條大納言（實萬）一人招候　而昨日之趣委細譚致候得共私心に者今少重分に茂無レ之存候得者御面倒乍內々鳥渡申入置候間其御心得願置候。近日に茂三條大納言尊亭江參定め而譚茂有レ之候與者存候得共萬一日數經其事茂無レ之節は鳥渡御招に而尊公思食に而一應御尋有レ之候得者志極都合可レ宜哉與存候間鳥渡御書乍申入候間宜御察希入候事

追而申入候今日之譚之趣申入度候得共こて々々と難二書取一候間不レ認候間委細三條江御尋希入候事

安政元年
七月十七日　　天淵

右府公
御机下江

右の宸翰の事は、近衞忠房公日記に、『安政元年七月十六日忠凞公御參內』とあり、又『廿日に三條殿來らる』とあれば、恰も御宸翰の意味と符合してゐる。

これは如何なる事の御相談事であつた乎、これを揣摩する事は出來ぬが。公私種々の事に就いての事であつた事は、固より疑を入れない。

（第十三）刀劍に關する震翰

陛下は明治天皇と同じく、刀劍には少からざる御趣味があらせられた樣である。然るに其の刀劍を御求めになるに就いて、御手許が甚だ御不自由であり、此處に於て、近衞家に向けて、種種御内情を御打開けあらせられた。これ等は極めて、當時の至尊の御生活の御模樣が明かであるから、今こゝに揭ぐる事とする。

右大臣殿　統仁
御机下江　申試
内々　謹呈

追而申入候 實々無二心置一之所過分に存之儘申入甚恐入候 仍尊公よりも無二御遠慮一之段偏希入候 事實に々々本圀寺（東の字脫字下にもあり）へ内々御申合有レ之承知に而献上に成候はゞ誠に々々深畏入候然し々々過分之事共申其段偏に々々御免申入置候 何分とても尊公御思召次第與伏而存候 事何も荒々

統仁呈

何卒近々者尊亭（近衞邸）へ參 候 事與 樂 存 候 事
雖レ揃 時候御堅固に御用心可レ被レ成存候事

欝々敷天象に 候 然し白露後の印追々冷氣候 益 尊公御安康大慶に存 候 昨夕者御入來御面會申數々御譚申 喜 存候 然し色々打明しむさといたし 候 事共申中には失禮茂 候 可御免可レ被レ下候。然者烏渡書翰進 誠 に々々々々申兼候得共烏渡々く内々御相談申 試 候 實々 願置者於二尊公一茂少しに而も否哉に被二思召一候はゞ實々無二御遠慮一承度 候 事別之義に而も無レ之候 が此比少々加樣之短刀好寄集候心積に候間誠御氣毒に存乍先達而尊公へ御無心申候處御吟味被レ爲レ在候御事に而昨日は内々被二見下一誠に々々有難く々々樂御待御申候事に候 依レ之同樣女房之内一人江申 含 置 候 處昨日右に握見 候 太分 宜候 而何卒手に入度存候得共少々とて付候事有レ之候 而少々手に入兼申候依レ之譯に々々申兼候得共先比二刀御目利申

候間何卒東本願寺へ内々御噺にても有レ之候事に而東本願寺より貰候事は成間敷や誠に々々重々不正之事無レ憚申何共尊公に對し候而も赤面至極に候得共烏渡申試候。右之事尊公より何卒程克御噺有レ之候而本願寺も承知致献上與申樣な事に候はゞ誠に々々何共々々深々畏存候。左候者存書試御目に掛け候へ共於二尊公一茂其は以何と思召候御事なれば實に少しも無二御遠慮一否哉之御返事承度候事なれは誠に々々無二此上一大慶に存候何分此段偏御返答承度存候事。仍而先内々御相談申試候事宜敷々々御沙汰希入候事

追而申入候右刀先方甚急之由候處暫返答待可レ申置レ候事故甚々申兼候へ共今暮迄御返答御取斗希入候事

六ケ敷事なれば實に無二御遠慮一伺度候事

安政元年甲寅

後七月廿一日

統仁

右府公江

極々内々

× × ×

更に此問題は同日引續き、左の如く進んでゐる。

右府殿江

統仁

再文極内々

呈

酉刻〆

誠に々々厚御沙汰深々畏入候仍荒々御返事申入候何分とも大御乳（御内場の金錢管理の職）之方へは無二御沙汰一私へ御渡之段希入候誠に々々急大々亂筆實に御分兼御免之段希入候事

統仁謹呈

早速の御返書令二拜見一。

今日者誠に過分之出言申進候處御心安承知之段誠に々々御恩難レ申盡一深々畏存候然尊公より被レ下與之御事誠に々々不二存寄一驚入候。實に日外より過分に數々御貰候上又々私所望に而木類并撥子何か數多御貰申實々禮難二申盡一實々御氣毒與心中誠に々々恐懼致居候事に候あなたよりは無遠慮に何々被二仰聞一候段何共々々畏入候なれ共一本ならず二振迄實たといあなたより被レ下與被レ仰候共私之身にて數々御貰申候事餘り々々御氣毒恐入候間何共御勘考偏願存候。然其上被レ下與之達而御趣意なれば何共恐

入レ作レ畏御請申候事に候。右に付代金之處大御乳へ封中にて被レ遂與之御沙汰志極而當に而は候得共そこには少々繁多之分柄御座候而右之一件不レ存候間誠に々々々々加樣之事もむかしく候得共御面働乍又此返事に今日之處は八兩丈被レ下餘は御序に私へ内々直文にて其文筥へでも入被レ下候與私より先々へ渡候へば志極都合不レ斜此上之御惠と存候間誠に申兼候へ共八兩之處は此御返事か又は明日に而も私へ内々御直文にて御文筥へ御文與一所に被レ入餘之處も近日同樣之樣希入候。只今大御乳へ御封中被レ遂候にも一細不レ寄候事故前後不レ分與存候間何卒々々私へ極内々にて被レ下候樣願入候。又飾作之處は本願寺よりけん上之御沙汰重々有難御配慮申盡難宜御禮申入候仍如レ始右一振御返申候間猶御勘考御申合之上作立拜領與存候只今御文にて委細承知致候間右短刀一振文匣共返上候事

何も宜敷御沙汰願入候事

安政元年後七月二十一日

印刻

實に々々大亂筆

御兇之事

右大臣殿へ

再文極内々

×　×　×

統仁

謹呈

而して更に又左の如き宸翰がある。

右府公

御机下

統仁

内々

呈

實に毎度御面働之義恐入候何分にも今日は快晴に成程克時候と存候何も時候御用心存候事

統仁謹呈

今日者快晴に成少々暑に候。益御安康之御儀介ニ恐悦ニ候。誠に昨日者むさと致候事共御無心申候處忽に御領承之上早速代品被ニ送下ニ誠に々々何共難ニ申盡ニ深喜候然處猶々御面働之義申恐懼候得共爲渡亦々申入候。昨日之短刀ニ振之內安吉之方者宜早速今朝先方江送り候事に候處國次之方は彼是申事も承知候間何共御面倒ながら御勘定被成下ニ無ニ相違ニ宜刀に候へば御着候ニ而又々[illegible]に候事ながら至急ニ先方[illegible]

候間一應御勘定希入候、仍先十五之方先序御返申候間宜候而御貫申候事なれは、其節又々申出度候、何明日には代申出度申候間止に成候へば短刀を返亦御貫申事なれば代品遣候間火急之申條恐入候得共今日中御返答承度候間du度鳥渡御尋申候宜御沙汰希入候事若々御分難之儀に候へば御面働乍近々御入來御話申入候最早文通に而御分なれば共に而とつと宜候間此處も一應御尋申入置候事。格別悪敷之に而無之者矢張御貫申候共段宜御取斗願入候事

俗心乍一振なれば猶更に候間大體のたれば如元候事

安政元來甲寅
後文月廿二日　　　　　　　　　　　　　純仁
右大臣殿
御机下へ　内々　　　　　　　　　　　　忠[illegible]

× × ×

而して翌八月に至りて又左の如き書簡がある。

葉月八日封

今日遙々小御所代より千葉（近衛家諸大夫）[illegible]申候
自事に候然重分には不斷候事只今の刀の[illegible]
と申にも無之何分にも[illegible]
度存候事何卒々
遙々快晴に而[illegible]
御安[illegible]
濟候[illegible]
之時斗[illegible]
斷等より[illegible]
[illegible]

右大臣殿　　　　　　　　　　　　　　　　川化
御机下へ

御面倒之御儀恐入候得共鳥渡申入候。今朝加樣之品外より爲レ見來候。國吉者書付之通餘程宜由に候へ共餘程大金に候乎以何可レ有レ之や本門主より貰候事は成間敷や私存候は作之處は共儘に而貰又々私勝手宜節爲レ致候積故右刀丈貰候事者成間敷哉。跡三本も宜候へ共書付之通りに候國吉格別六ケ敷樣之事なれば跡二本にても作同じくなれば國吉方志極與存候然先達而御約束尊公より御貰申候は以何成銘にて候や若や國吉にては無レ之や不レ覺申候。同銘なれば今一本之內に致候しかと不レ覺申內々御尋申入候。國光かとも存候違銘なれば志極宜候。毎々加樣之事申入深々恐懼候へ共御心安き餘り過分の申條御免被レ下候。何分にも鳥渡申試候間以何樣成共尊公御沙汰次第無二御遠慮一承度候先々尊公迄內々御相談申試候然又々御勘定之邊も承度候。甚先方急十日には返與之程申居候間甚火急之儀申兼候へ共明日若々御入來之御義なれば共節否哉承度存候頗々色々申入度此外[illegible]宜御沙汰奉希入候

[illegible]明日御入來之節一昨日御好物に依レ之候深[illegible]御待申候

[illegible]其節色々御談義[illegible]申入候事

安政元年
葉月八日　此花
右府殿江
密々

×　×　×

而して引續き尚左の書翰がある。

右大臣殿江　統仁
內々
誠に不揃之時候御堅固に御用心と存候事
統仁
謹上

私江之御返事は御打明し之義希入候事又々あちら
返答の邊宜御教希入事

連日晴乍亦々餘程殘暑甚候益
[illegible]

し心細御座候而國吉は止に致元重十六兩之方に致度候へ
共其は最早先方以遣如書付之候間矢張國吉之方に致候
半哉内々今一應御尋申入候事若御不分明なれば幾度也共御尋希
入候事。且便に申候共申兼候事乍先達而御入來の
節御噂に者どうか給刈田三組御出躰之由承畏入候甚
申兼候義に候へ共今明日之内御貫申候事成間敷や打明
し候はゞ實は今晩より神事入に候明晩よりは潔齋に候間餘
り他之事は不出來候間先刈田など致候間甚打明し候
義何共申兼候へ共就右之儀三組御揃無之而茂とつと無子
細候間今明日之間御貫申候はゞ重疊之御恩恵深畏入候然
御差支之儀被爲有候へば無御遠慮御沙汰希入候事。私よ
りも打明し候事共申過甚恐入候間御伏藏無之御打明之
御返書拜見希入候事誠に一昨日者御領山之生松茸拜領深畏入
候早速申付拜食候處忘極宜味深畏入候宜御禮申入候事總白追々
余快之由深安心喜存候事何も荒々
猶又近々御勝手次第
御來臨希入候事
安政元年

八月十三日
右大臣殿 統仁
御机下江

是にて拜見すれば、生松茸なども、容易に御膳に上ることが
出來なかつたものと思はる。

× × ×

以下安政二年の御宸翰だ。

右大臣殿 統仁
御机下江 謹上

兎角々々不揃之時候御堅固に御用心と存候事又々御入來希
入候日々御待申居候事。猶又昨日も御話申入候事御勘
考賴入候事、然し甚流遊の存望扨々大笑敷候事尤々是
限御笑艸之種と存候事
何も荒々亂書御免
連日春雨に而欝氣候益
尊公御安康之儀令賀候誠に昨日者久々に而御入來御面會申
色々御話申深喜入候其節者日外御約束之短刀飾出來之
由に而被下深畏入候厚御禮申入候事、且又其節申置

候懐紙差進候得々覽得ば何共昨日御治定之方も見苦敷候間今二枚認昨日之一所(原註)差進候間御師御目利御定希入候事且又同御約束之時斗毎度に而甚申出兼候ば任仰候事

是又送進候間御修復賴入候事

且又昨日爲御見被成候劍令返却候

內々御尋申入候が右之劍之價いか程に候哉內々承度候事

以上

安政二年正月廿五日　統仁

右大臣殿　御机下江　謹進

×　×　×

今宸翰にある通り『右之劍の價いか程に候哉、內々承度候事』の御一句を拜讀すれば、如何に陛下が刀劍に御執着遊されたかが、畏れ乍ら想像せらるゝ。而して又た如何に御手許が御不如意であつたかと想像せらるゝ。

孝明天皇が桂宮の假皇居より、時々近衛家へ御出掛けになりたる事は、前にも掲げたが、尙今茲に久我建通卿の日記を按ずるに、七月二十九日の項に左の記事がある。

『廿九日三條大納言（實萬）召于御前內々承之處當時異船渡來之儀に付陽明家御之節連々御當座甚御心配之儀也御尤之次第也、且又鞠弁樂等も可有之歟之樣子扨々困入候儀と承り甚恐入候事也、午後予召于御前右同上之事御咄種々心中言上候。又々異船（イギリス）來候旨御聞に付如何哉御尋予承居之分申上』

尙又東坊城聰長卿の日記によれば、八月二日の項に左の如くある。

『八月二日同役召御前、近衛家女房往來之事追々凉氣にも相成候事故先々御見合可被遊旨也予申云少にても御氣づまりに思召候節は何時にても可被爲成之旨答て示談其旨も被申上。』

さて斯の如く當時の近衛家は、天皇にとつては、全く御遊樂といはんよりも平生樣々の事に思ひ煩はせ給ふ事を、聞いて貰はるゝ一種の御相談所であつたのである。

×　×　×

今近衛忠熙公記、十月二十九日の項をみるに

『未刻（午後二時頃）より座主宮（朝彦親王）内府（鷹司輔熙）等被レ参座無レ程御當座被召ニ小御所一各參る……暮過に予、座主宮、内府、忠房（忠熙の子）等被レ召ニ御前一種々御談話、酒肴等種々頂戴、天盃天酌度々頂戴、女房も御前にて賜也、御入輿御賑々敷御事也、亥半刻（午後十一時頃）許に及一統暫時退く、無レ程還幸』

これは只其の日の記事に止まるが、いつの御臨幸毎にもその通りで、若くはより以上であつたらしく思はるゝ。

尚ほ陛下には、外船が來た爲に安政元年正月の御歌會さへも、御止めあらせられた程にて、外國の事には、頗る御心配あらせられた。即ち安政元年九月二十三日、ロシヤの船が大阪近海に來るとの報があつて、陛下には常膳を減じ給ひ、七社七寺に仰せ給ひて、國安を祈らせ給うた。

×　×　×

かゝる次第にて、當時陛下の御心を慰め參らするものは、恐らくは、只近衛家に御出掛け遊ばし、内輪の慰を遊ばさるゝ丈であつたらう。

（第十五）以鐘代砲の勅諚

尚ほ安政元年十二月二十三日には、勅して諸國寺院の梵鐘を以て砲銃を造らせ給うた。これは幕府よりも同樣御願ひ申し出でたることであつた。

その證據には、東坊城聰長記に斯の如くある。

『廿二日巳刻過同役同伴向ニ所司代一如レ例淡路守（脇坂）申云先達被ニ仰進一候以ニ梵鐘一鑄ニ造兵器一之事、於ニ關東一も兼々思召候御事に候、何も可レ爲ニ御内慮之通一被ニ仰出一候由、則一紙差出如レ左

近來夷國船度々渡來深被レ惱ニ宸襟一候依レ之海岸爲ニ防禦一御書付之通被ニ仰出一度御内慮之趣關東へ宜申上旨先達被ニ仰聞一尤右之通被ニ仰出一候上は、消息宣下可レ被レ行旨是又被ニ仰聞一候趣則關東へ相達右之趣及ニ言上一候處御時節柄格別厚叡慮之趣深御感悅被レ遊候於ニ關東一も兼々御内存も被レ爲レ在候儀御同意の御事候間御内慮之趣早速被ニ仰出一候樣被ニ思召一候且消息宣下可レ被レ行旨御尤之

儀是又可レ爲二思食之通一候右之趣御兩卿へ御達可レ申旨年寄共より申越候事

十二月

此度御內慮被二仰進一候海岸爲二防禦一諸國寺院之鐘大砲に鑄換等之儀追て宣下相濟候はゞ其段早々關東へ申越右宣下有之候段於二關東一被二仰出一且勅命之趣諸國寺院へ申渡等之儀は都て於二關東一取扱候心得に候寺門跡方へは於二關東一被二仰出一候儀私より其筋へ相達候振合にも候哉又は關東其筋より相達可レ然哉尤御所向よりも御沙汰耳有レ之哉右等之趣御兩卿へも御示談之上委細申越候樣且又宣命等關東へ被二差越一候儀に可レ有レ之哉左樣候はゞ被二差越一方之儀も取調可二申越一候旨年寄共より申越候間及二御示談一候事

右猶可レ及二言上一同役被二申述一。

廿三日以二諸國寺院梵鐘一鑄造大砲小銃一之事被二宣下一(消息)

二十二日[illegible]

上卿松大納言[illegible]行[illegible]日兩人可二相參一

二十八日[illegible]

かくて太政官符を以て、諸國寺院の梵鐘を以て、大砲小銃を鑄造すべしとの勅語の中には、

『勅す、夫れ外寇之事情は、固より深く宸襟を惱ませ給ふ所也、況や緇素に於ても何ぞ差異あらん。頃年墨夷再相模海岸に來入る。今秋魯夷、畿內近海に渡來す。國家の急務は只海防に在り。因て諸國寺院之梵鐘を以て、大砲小銃を鑄造せんと欲す、海國樞要之地に置きて備二不虞一速に諸國寺院をして、各時務を存じ、本寺之外、古來名器及報時之鐘を除き、其他は悉く大砲に鑄換へ、皇國擁護之器となす可し。』云々との事であつた。

これ等を見れば、朝廷より幕府を、御刺戟遊ばさるゝのみならず。當時の幕府は亦た朝廷を恐れながら、寧ろ利用し奉つて、國防の準備に資せんと欲したのであらう。

（第十六）朝廷と大名

[illegible]當時の朝廷と大名との關係について語るべき[illegible]る。

その一は[illegible]であり、[illegible]である。[illegible]には、

[illegible]家との關係の[illegible]、[illegible]ここに[illegible]

所にも種々御附屆をしてゐたのである。されば安政元年四月皇居炎上の際には、竊に近衛家を通して金五千兩を献じてゐる。斯て安政二年正月十八日、陛下には左の如き御製を之に賜はつた。

詠寄國祝

武士もこゝろあはして秋つすの
國も動かすともに治めん

× × ×

尚ほ齊彬がその友人尾張國主徳川慶恕に與へたる安政元年四月十二日附書翰の一節に左の如くある。

『先比伏見通行近衛殿へ參殿も仕候事に而、彼地に而承知仕候へ者、五ケ年御節倹被二仰出一候に付而者、於二御所一も、嚴敷御倹約に而、年々兩三度之亂舞迄も御止めに相成、其外別而御不自由之樣にも相伺候、右者全く關東御存之儀にも不レ被レ爲レ在全く御附之面々御奉公振に嚴重に仕候哉と專ら傳承仕候』

これにて見るも、當時朝廷の御不自由にてあらせられたことがわかる。

されば陛下が島津氏の忠勤を擢んでた事に對し、かゝる御製を賜つた事も、決して不思議ではあるまい。

尚ほ安政二年二月十四日、近衛邸に渡御あらせられ、觀櫻あらせられたる時に、近衛家に賜りたる御製がある。これは少し長文ではあるが、當時の御模樣が最もよくわかるもの故、今ここに掲ぐる事とする。

安政二年きさらぎなかの四日、かねて約しおきたる近衞の亭に行むかひ名にしおふ糸ざくらを見て、

昔より名にはきけとも今日みれは
むへめかれせね糸さくらかな

見れとあらぬ風をすかたの糸櫻
花の色香は長々し日も

おのつからこゝろも花に匂ふまて
いとに櫻そ咲つゝく比

青柳の千す地のいとに香をこめて
さくかとおもふ花のいく木

伊とさくらいと長き日影くり返し
　風のまに〳〵なびく花房

午の時ころよりとき〴〵雨ふりければ

是もまたあらぬなかめとなりてけり
　さくらはいとにかゝる春さめ

いと櫻いとは理かけてふる雨に
　はなの色香もそふこゝろせり

また〳〵雨は晴て日嘉氣もはなの上に照そへは

村さめの晴ゆくあとに春の日や
　はなの光をみかきそめつゝ

春さめの晴ゆく朝の伊とさくら
　可謠そふ花や露のしら玉

黄鳥小蝶など花にたはむるゝも又興ありて

花の香をめするこゝろかいと櫻
　いとのとかにもあそふか蝶は

糸さくら枝につたひする鶯の
　をのか羽色は若葉とも見ゆ

吟つゝく花の色香をしたひてや
　いとにみたるゝ春のうくひす

夕景にも成ぬれば酒のたぐひとりかはし、今日はめづらしく男方を召寄花の宴催さす、ときに右のおほい臣より數々備物ありければ喜のあまりかく所有けり

花のともあふてふさへも嬉しさを
　こゝろつくしの人のなさけは

高坏に菓子肴物など盛あり、その取合松鱗の作ものの有けるを見て

氣ふこゝに千世を重ねてたつ松に
　ちきりてめくれ春のさかつき

松ふちのたてるかたを種として
　こと葉の花も咲きさかふらん

夕景にもなりて料理なともとく晴田酒もうつろひし氣色又たくひなけれは

花の上に夕日のかけのうつろひて
　さらに色ます庭の面かな
日のかけはおさまる比の半なの上を
　さらに照していつる月哉
色にみえぬたそかれ時の花の上に
　ほのめきわたる氣ふの月影
追々ににぎ〳〵志く盃もへだてなくめくりて
やはらくる人の心も花ゆゑと
　猶よをかけてめくるさかつき
とく暮れ月も光そひさやかにはなをてらす景色又たぐひなくおぼえ
つゝ
けたれけむ春のよなからかすまぬは
　月もさくらの花の色かに
誠に雪月花ひとつの氣色のおもしろさに
雪とのみ梢に花のさく色も
　みかきそへたる月のかけかな

其より庭へ下た地木の本に打つどひて
この木に打つとひつゝなかめても
　こゝろの花の色は句はす
月のかけ花の光もいやまして
　はるとは見えぬ庭の面かな
おもしろやさすさかつきに影見えて
　月もかすまぬはなの下かけ
何ことも思ひ忘れて月のかけ
　はなの色香を庭にめてつゝ
暮かともみゆる斗に咲みちて
　にはに色そふ花の上の月
又もとの所へかへりつゝ盃のめぐる、飾り、人々手折し花を冠
にかざす、我にも花のおほひ臣のかざして
さかつきのめくれるまゝに庭さくら
　手折りし花を我もかさしつ

たもとにも匂ひとゝめん手折つゝ
　花をかさしてうたふ宮人

何かとながき酒宴になりぬるほどに

かへるへき家路わすれていつ迄も
　はなにめくらす春のさかつき

程なく警固も揃ぬれば名殘をしくもかへらんとて

いつまても何わするへきこの殿の
　花さくら木の今日のなかめは

名殘あれはあらぬ心を木の木に
　花にとゝめてかへる夜の空

安政二乙卯年仲春四日
於二陽明家一感花宴面白
　慶悦之餘詠レ之
　　百二十二代孫　統仁

×　×　×

尙この御宴については、餘程歡娛に叶うたものとみえて、左の如き宸翰を賜うてゐる。

『右丞相殿江　　此花
　御机下江

呉々も可笑品共上行之次第もしどろにて文字墨續相違候得共實々御禮之爲、御笑艸に御目掛申候、御覽之後は偏〻々々御火中賴存候事兎角不揃の氣候專御用心と存候事何も荒々
直又近々御入來と御待申候事
先々晴候得共兎角不揃之氣候風立又々餘寒に候
益
右府公にも御安康之御儀令二慶賀一候誠に先日は兼御約束之御亭(近衛邸)之絲櫻拜見其上數々御備物御取成厚御儀深々恭存候。餘之慶之餘不レ覺長座及二深更一御氣毒に存候併格別めづらしく賑々敷酒宴深々恭至今日中申出喜悅御禮宜申入候事且右之品者誠に々々可笑物に而仲々可レ入レ賢二覽一物に而も無レ之候得共餘り々々先日之尊亭之櫻感心且恭之餘其日參候より歸宅迄之卽詠且又存出之愚歌先認試御笑艸之種迄に備二貴覽一申候、御覽之後は御火中に成被下候樣申

置候事
實に々々過日之酒宴不斜に熟和面白事に御座候先は御禮之爲可笑物乍御目掛申候。何も荒々

安政二年乙卯

二月十九日

右丞相殿江　此花

× × ×

尚ほ近衛家の背後には、恒に島津氏の在ることを記憶せねばならぬ。

これから尚ほ水戸のことをいふが、水戸は光圀以來、朝廷とは特別の關係があり、安政元年十一月、水戸齊昭は炎上後、御心中を慰め奉るべく、華欄の材を以て、琵琶一面を手製し、關白政通によつて、これを献じた。それが安政二年正月十一日京都に達し、十五日これを天覽に供へた。

扨その琵琶の銘には、斯の如きことが書いてある。

『今玆に甲寅の夏、皇居災に罹り蹕を外に駐む、ゆくもなく鄂虜海に航し、攝之浪華浦に泊す。淹留自餘、畿内騷然たり。臣齊昭仰いで行宮狹隘にして宸衷を慰むるものなきを想ひ、伏して醜虜猖獗、未だ能く皇威を伸べ能はさるを慨く。屢陳二鄙見於征夷府一而才疎論、未レ審二田舍如何一也齊昭頃、華欄材三尺許を獲、手づから琵琶一面を製す。竊に謂方二皇宮之災一、雅樂の寶器烏有に屬するなきをえんや。乃ち關白政通に因つて之を献ず。行宮豈敢て寶器之闕を補ふを望まん乎、萬機之暇或は侍臣に命じ還城之樂歌を彈じ、太平萬歲を頌へ洋々乎として耳に盈つ。則内以つて宸憂を紓べ、外以て妖邪を鎭む。此器與有レ榮焉、臣竊に天下の爲之を祝す。

嘉永七年冬十一月之吉

權中納言源朝臣齊昭謹識』

× × ×

或者は此の琵琶の銘の文句を以て、水戸齊昭が京都に手入れをしたる事の證據物件となせども、京都に手入をしたるものは島津でもなく、水戸でもなく、いはゞ幕府自らである。この文句が意味あるにせよ、ないにせよ、問題にすべきものではない。

たゞ大名の中で、薩摩と水戸とは、率先して朝廷と親近を計つた丈の事實を、今こゝにあげて措く。而して此れが他日容易ならぬ問題を惹起した。



社會喜劇

鬼ケ島から來た男

（二世ドンキホーテ）

中村吉藏

第一場

場所　宿屋の二階

人物　棒太郎
　　　元村六郎
　　　高利貸の老爺
　　　年老つた女
　　　その娘
　　　宿屋の番頭
　　　主人
　　　女中

時　　現代

バラツク建築の宿屋の二階、前廊下は勾欄付、奥に床の間、一方は障子、中は壁紙で仕切つた、同じ形の部屋が二つ列んでゐる、下手奥のトタン屋根の上には物干臺、アンテナ・ポールが青空に向つて突立つてゐる。

○

二十歳前後の、いてう返し、色白の丸ポチヤの女中に案内されて、裕好の附いてない、たるんだ胡襟に、だぶ／＼したズボンをはいた山高帽の椿太郎が、色の剝げかゝつた黒皮の古風なカバン、蔓草で編んだ大きな手提を兩手にぶら下げて下手の部屋へ入つて來る、長い髮毛はちゞれ上り、顏は日やけ、潮やけがして、赤銅色に光つてゐる、後から元村六郎が萎えかゝつた黄染の袷を、毛深い胸元あらはに着て、頭の上に荷包みを載せ、柳行李を横抱きにして入つて來る。赤ちやけた髮もしや／＼と生え延び、色は太郎よりもつと深黑い、肉太の頑丈な手足は漆を塗つたやうに見える、腰には大きな煙草入をぶら下げてゐる。

女中は持運ばれた荷物を片附けにかゝる、カバンや行李は重くて持上らない、

女中。（赤くなつて）とても、私なんぞの力では動きもしませんわ。

六郎。（ニヤ／＼笑つて太い聲で）姉にや無理だべあ、島のおいら[illegible]頭へさゝげて五町でも、三町でも輕々持つて行くだが…。

（女中、言葉を聞分かねて、眼をぱちつかせる）

太郎。（やはりニヤ／＼笑つて、女中を眺め）この島人の言葉は、姉さんには通じまいな、……六郎、もつと氣を附けて、ゆつくり分るやうに口を利くんだ、あんな大聲を出さんでも善い、女がびつくりすらア、こゝは東京だよ……東京のまン中へ來たんだよ。

六郎。（不平さうに）己ら、潮風の荒い島で育つたゞから大きい聲は持前だ、何云うても、汝のやうな學者でねえだもの、舌ツこがいふ事を聞かねえだよ。

太郎。（苦笑）ハヽヽ、學者、學者云ふない、こゝは小こい島たア違はアな……だが内地のあんこはやつぱりきれいだよ。お化粧が上手だし、着物の着方もずんと氣が利いてら、椿の花をさして、長い黑髮を地べたへ引づらせた島のあんこの生地が美しいのとは又違はア、……姉さん、そこは私等が片附けるから、まア こつちへ向いて見な。

女中。エ…何か御用ですか？

太郎。（相不變ニタ／＼笑うて）善い物を見せて上げやう？（荷物の中から大きな駝鳥の卵を引き出して）……さア、これが駝鳥の卵だよ、

驚いて[illegible]

女中。エッ……氣味が惡いわ。
太郎。ア、……島の土産を上げやう、椿油があつた…（琥珀色に光る罎を持出し）……さア、手を出して見な。
女中。ほんとうに？……有難う。
（さし出す手首を、太郎は衝動的にぐいと握つて、打ふりながらニツと白い歯を見せる、女中はアッと叫んで、振り切つて、驅け下りる）
六郎。汝の女好きも惡い病だ、チとたしなまつしやれ…こゝは東京だよ…東京のまン中へ來たんだよ。
太郎。（苦笑）何しろ内地のあんこ澁皮が剝けてるから、こつちの手がひとりでに出やがるんだよ……船の道中が長かつたし、黒土と女とにさわれなかつたでな……。
六郎。（烟管で煙草を燻らせながら）汝の家は代々の名主だつたし、汝は又情深うて六ツかしい理窟の分る學者だいふので島中でも評判だが、他屋へ通うてあんこ狩りする方も名人だつて皆が云つてら、内地へ來ちやあの方はチと氣を付けたが善かべあ。
太郎。あの道は別だよ、汝だつて、あんこ狩りにかけちや己には負けめへが、…蛤貝か榮螺殼笑ふでもあるめへハ、、、。
番頭（顏を出す）毎度おヒイキに預りまして……只今は女中が行届きませんで、何か失禮な事でも……。
太郎。イヤ〳〵女中さんに粗匆はない、實はな、…己ら、五六年目に東京へ出て來たんで、見るもの、聞くものが珍らしいんだ、内地の若い女子衆の、肌目の細かな、白い手と來ちや、目の玉が吸込まれさうになつてな、一寸ちよつかいを出して見たんだ。ハ、、、、、
六郎。島内ぢや…男も女も皆一腹の兄弟のやうにしてるで、別け隔てねえもんだからなハ、、、。
番頭（苦笑）ハ、、、左樣でございましたか？エ、旦那方は、何方から入らつしやつたのでございますか？（宿泊屆の用紙を出す）
太郎。（笑顏で）鬼ヶ島から來たんですよ。
番頭。へ、、、御じよう談を……。
六郎。南の黒潮の中を蒸汽船で搖られ搖られしてやつて來ましただ、己ら東京へは始めてだが、地べたの上で、黒潮よりやもつと恐しい、渦がくるくる卷いて目の廻るやうな處だべあ、海坊主が臬へ拋り上げられたら、こうだらな。
番頭。へ、、、、何卒これを願ひます。
太郎。住所姓名を書くんだね、よし、よし……。
六郎。番頭さん、己らと違うて、この人は東京へ二度も三度も來てるだ、島中の學者でな、なか〳〵えらい事を知つてゝおや。

太郎。(用紙へ筆を走らせながら)、そんな吹聽はせんでも善いぞ。
六郎、吹聽ぢやない、いゝゝ、ほんとうの事だ、…なア、番頭さん、この人は何時も米の飯ばかり食へる身分ぢやが、情け深うて、我慾が嫌ひで、島の者に芋ばかり食はせちやすまんつて、その米を皆に分けてやらしやる、それが正義人道つて云ふんださうだ、天道様は直なもんでこん度は、東京のまん中に、先祖が寶を埋めておかれた事が知れたんで、それを掘出しに己らも連れられて來ただ、宿の衆にも御力を借らざアなるまいで、何分よろしう賴みますべあ。
番頭。ヘエー……(屆を取上げて見て) 青ヶ島つていふところでございますか?
太郎。昔は鬼ヶ島と云つたもんだ、八丈ヶ島のつい傍の方だよ。
番頭。ヘエー……左樣でございますか?
太郎。實はな、古い話をするやうだが己らの先祖は徳川幕府の十代、家治將軍の時に、勤王論の魁けをやつたといふので、捕まつて島流しにされたあの竹内式部の一味のものださうだ、己らはその何代目かの血すじに當るんだ。
番頭。オヤまア……左樣でございますか?
太郎。ところが、その先祖の書き遺した秘密の書類が、ついこの頃、拙宅の天井裏の欄間の隅から見附かつたんだ、何んでも先祖の隱居ら裏邊りに、家屋敷があつたものと見えてな、その屋敷の土の底に、大甕か石櫃かに納れて、金銀を埋めて置かれたのだ。
番頭。ヘエー……まアそんなお書附が?
太郎。一萬兩か……十萬兩か、そこのところは分らんが、何んでも軍用金のたしにでもするつもりだつたろうから、大分の嵩らしい。
六郎。今時の金に直しや、大したもんだべあ。
番頭。(慾に卷かれたやうな表情)……そりや大したものでございますとも、慶長小判一萬兩なら、時價百萬圓もしませうか?
太郎。己ら、自分で金が欲いんぢやない、慾ッ氣はないが、そんな死金があるなら、土の底に埋めておいては罰が當る、早速掘出して正義人道の爲めに活きた使ひ方をしたいんだよ、近頃は小い島でもさうぢやから、廣い內地では猶更さうぢやろが、世間に……社會に忌な病氣がダン〳〵蔓つて來て、惡い事をする仲間も殖えりや、氣の毒な、憐れな境涯に落ちるものも日に増し多いやうだ、これはタダの藥ぢや治らんが金の力でなら治る病氣ぢやろ、口癖に云ふやうぢやが、正義人道も金の力で實行が出來る。
番頭。左樣でございますとも……金と女が仇でさアね。へゝゝ。
六郎。汝もなか〳〵駭者だべア。
番頭。へゝゝ、御じよう談を……。

太郎。（熱心に）ところで、先祖がその金を埋めた場所も、地圖まで附けてあるから見當は附くんだ、明日からでも掘出したいと思ふんだが、その手續や何や彼や、いろ／＼面倒を見てもらひたいんだ。

番頭。へイ／＼、それは主人ともよく相談いたしまして、如何やうにも取計らひませう。

太郎。（カバンから黃八丈の布に卷いたものを取出し）斯うしてこゝに、その秘密書類が、ちやんと纒めてあるんだ……煤けた地圖まで附いてな。

番頭。（空返事）へエ／＼……いづれ主人にも申しまして……一寸と御免蒙ります。（起ちかゝる）

六郎。ア、あのあんこにこの椿油やつてもらふべあ、島の者は噓云はねへでな。

太郎。オヽ、それ／＼……忘れてた。

（番頭は椿油の罎を押附けられ、呆れ顏で匆々に引下る）

六郎。內地の人は皆金持と見えるだな、汝の話に少ともオッ魂げねえでねえか？

太郎。イヤ、內地の人は、腹ン中をそのまゝ口へは出さないもんだ、でも、イヤに眼をパチクラさせて、そは／＼して引き下つたぢやないか？

六郎。さうかなア……さうかも知れんな……ドラ、己も東京を一つ見べえか……ア、あそこに高い臺がある……（物干臺へ出て、あちこち見廻はしてゐる）

（太郎もそこらを片附けて、そこへ出る）

六郎。あつちにも、こつちにも空へ向けて竹が突つ立つてあるだ、釣竿でもあんめえが？

太郎。これがラヂオのアンテナつていふんだよ、宿の上り口の部屋へ行つて見ろ、器械が口を利いてるから。

六郎。器械が口を利くて……化物ぢやあるめえへし……馬鹿にしなさんな。

太郎。內地の文明開化つてのは、鬼ケ島から來た者には、まあ化物だよ、鬼ケ島から來た者が、內地の者の眼には化物に見えべあ。ハ、、、。

六郎。あの、高い……高い、鐵の梯子を組み上げたやうなのは、ありや何んだら？

太郎。ありやボウちい家を建てゝるんだ。

六郎。フーン、鰯ツ子見たいに人間はかりウヨ／＼して、土地狹いで途方もねえボウちい家を建てやがるんだな、ぢやいつそ雲の上へでも引越したら善かべあ。

太郎。そーらあそこの小高い石壁の上を大どかげがつゝ走つてるやうなのが見えやうがな……あれは己らたちが今、乘つて來た電車だ。

六郎。さうかい…そこの地上は大きいこがね蟲がぶん〳〵唸つて、あつちからも、こつちから飛んで來てるやうだ、あぶねえ事つたな。

太郎。ウム、自動車が恐ろしく殖えたもんだよ、人を轢殺ろす程の、忙しい用事があるのかなア？

六郎。街を歩く人間は、今に皆殺しになるべゑ。

太郎。それでも人種は盡きんもんだ。

六郎。ア……恐ろしい羽音だ…？

太郎。飛行機だよ…人間が器械で宙を飛ぶんだ。

六郎。器械が口を利いたり、器械で人間が宙を飛んだり……己ら恐ろしくならア、頭がガン〳〵鳴る…目まひがしさうだよ、（飛んで室へ入る）

太郎。慣れたら何んでもないぞ……ア、何さばきでもしやう。（室へ入る）

○

隣室へ、五十才ばかりの年老つた女と二十才位の若い娘とを追つ立てるやうにして、帽子を冠つたまゝ、折カバンを抱へ込んだ、人相の惡い六十才位の老爺が、（顔色は[illegible]）入つて來る。

老爺。見付かつたのは天罰だ、……人の借錢をふみ倒して、夜逃げするやうな横着者に觀音樣はお利益は下さらんぞ……まア坐れ……坐んなさいッ。

年老つた女。イヤ、夜逃げなんて人聞の惡い事を仰つちや困ります、こちらの身緣の者へ、金策に出かけて來たのでございますから。

老爺。默んなさい……一つ事をつべこべと辯解はいらん、女の口でゴマかさうたつて、ゴマかされる己ぢやアない。

年老つた女。決してゴマかすのぢやございません、ほんとうの事を云つてるのです。

老爺。ぢやアこれから出る處へ出て、白黑を附けてもらはふか？　金を借りておいて、行衞をくらますなんて、質の惡いかたりだ、

年老つた女。（口惜しさうに）さういふ惡氣はみぢんも持つてないんです、ていふに……。

老爺。期限が來て、金の工面が附かなけや始めの約束通りにするのが當前だ、何も取つて喰はうたア云やアしない。

年老つた女。だつてこの娘がイヤといふのをさう無體な事も出來ない・おいやアありませんか？

老爺。いゝ加減な事を云[illegible]

來た仕舞屋に、無斷で三百圓つて大金を融通してやつたんぢやアないか？　借りる時には口先で足の裏まで舐めるやうなうまい事を云つておいて、いざとなりや踵を蹴飛ばしにかゝるたんて、田舍老爺だつて、さう馬鹿にされてばかりはゐませんぜ。

年老つた女。さう取つて下すつちや困ります。この娘にもいろ／＼云つて聞かせたのですが、それぢやいつそ他所へ身賣りでもして、その金でかたを附けてくれつて云ひ出しますので、可哀さうでもあるし、私も迷つて了ひまして……。

娘。私の我儘から、母にも心配かけてすみませんし、お借りしたものは返さねばなりませんから、こちらへ來て、口入所をさがし歩いてたのでございます。

老爺。（調子を和らげて）口入所なんぞへ行つたら何んな惡漢の手にかゝるか知れやアしないんだ。何も、緣を附けて私の面倒を見てくれさへすりやア借金は借金として、少々の支度金位は出してやる、平氣で約束を違へるやうな人間は、一生うだつが上らないよ。

年老つた女。約束と申しましても、云はゞ貴方の方で勝手に定めてかかつたやうなもんですし、それに私共も、このまゝぢや居られません、行末何か口過の出來る見込のある商賣にでも取ッ付きたいので少々の資本も欲しいし……。

老爺。（憎々しい調子）虫のいゝ事を云ひなさんな、そういふ了見だから、親子ぐるになつて大金をかたり取るやうな圖々しい事を平氣でやるんだ。

年老つた女。（激した調子で）こつちに弱味があるからて、あんまりな云分です、大金大金つて云つたところが、手數料とか何んとかサッ引かれて、私の手には半分も入つてないんです。

老爺。こつちは商賣にやつてるんだ、道樂に金貸はやらん、返金が出來なけや抵當は取つて行つても文句はあるまい……（娘の肩を摑んで）さア、これから一しよに田舍へ行くからさう思へッ。

娘。お金の工面をしてる處ですから何卒待つて下さい。

老爺。イヤたら、二人とも、出る處へ出ろ。

年老つた女。（悪辣な調子）エ、エ、エ、何も後暗いところはないんだから、斯うなりや何處へでも行きますよ。

娘。（はら／＼して）お母さん、やけを起しちやいけませんわ、私仕方がないから、一しよに田舍へ行きますわ（泣じやくる）

年老つた女。親一人、子一人ぢやアないか？　私に義理を立てんでも善い……いつそ二人で死んぢまはふよ。

娘。エ、、生きて、恥な思をするより、死んだがましだわ（泣入る）

老爺。ヘン、そんな脅かしに乘るもんか、たつて死たけりや、己が存

分にした上で、勝手に死なせてやらア。

太郎。（隣室に聞耳を立てゝゐたが、堪らぬやうに、前廊下から入つて來る）。……何んだ？　見りや老年の癖に、僅かの金を餌で、若い娘を釣上げやうなんて、酷い奴だ、己が相手になつてやるツ。

老爺。（驚いた表情）…汝何んだ？　斷りなしに他人の室へ入りやがつて……一たい何處の國の人間だ？

太郎。己ら、鬼ケ島から來た男子だ、……内地の奴は、大きな顏して弱い女いぢめて、善いのか知らんが、己のとこの鬼ケ島ぢや、女は皆大切にする、絹は織つてくれるだし、畑ア打つてくれるだし、子供は產んでくれるだし、こんな寶物はねえだ、金で買へるもんぢやないぞ。

六郎。（傍から）さうぢやとも、さうぢやとも、生乾の蛸見たいな皺ツ面アしやがつて、この若い、きれいな娘ツ子を弄さみ物にせうなんて、太い老爺だ、耻を知れやいツ。

老爺。何んだ？　何處かの見世物小屋からぬけ出して來た印度人かと思やア、日本人らしい口を利いてゐるから不思議だ、汝等の知つた事ぢやない、スツ込んでゐなさいツ。

太郎。この二人の女を歸してやるまではスツ込みなんかするもんか？　汝のやうな強慾な老爺は、己らの島ぢや皆で寄つて、集つて實際にして海ン底へ投げ込んで了ふんだ。

六郎。そこらの泥溝ン中へ打込んでやるべあ？

老爺。亂暴な眞似をすると承知せんぞ……コリヤキ印かな……。

年老つた女。誰方か存じませんが有難うございます、僅かの金を借りて、とんだ災難にかゝつたのでございます。お恥かしい事で……。

老爺。金を返しや何も文句を云やアしないんだ。

太郎。よし、ぢやアその金は己れが返してやる……二百や三百なら今、直ぐにでも、出してやるが、汝は高利貸つていふんだろう、利子が欲しいけりや十日待て、十倍にして返してやる。

六郎。ウム、十日もすりや、金が地の底から湧いて出らア。

老爺。（恐怖の表情）……コリヤ、頭のゼンマイが狂うてゐるらしい……怖かないぞ……（ベルを鳴らす）

（年老つた女も、娘もモヂ〳〵尻込する）

宿の主人。イヤ。これは何うなさつたので？

老爺。部屋をかへてくれいツ……汝さんたちもこゝにゐちやどんな目に逢ふかも知れんぞ恐ろしい惡巧をやる手合だろう……、さア、とにかくあちらへ行つて、ゆつくり話をしやう。

六郎。まだ女をいぢめるたら、己らの鐵砲見せてやるべえと

太郎（女等に向つて）汝さんたちも、こゝにゐてはさらに危い、己らが保護し

て上げる。
(女等も恐怖の表情で、室を出かける、主人は老爺を案內して行く)
六郎。己らたちが助けてやらうていふのに、あの女等は何うして、又、あの強慾老爺について行つたんだらう？
太郎。こつちは隣で聞いてゐて、堪らないから助けに飛び込んだのだ、內地の者は疑り深いんだらう、己れ等のやうに眞正直でないんだ。
主人。(歸つて來て)イヤ、何うも御手數をかけまして……あちらの室では、至極、穩かにお話をなさつてるやうでございます。
太郎。さうか……でもあの老爺に娘を連れて行かせるのは可哀さうだ、何處までも助けてやりたい。
主人。イヤこちらでは、見ず知らずの者が、あまり差し出て親切に仕向けると、恐がられますから損でございますよ……番頭から旦那方のお話を聞きましたが、あれは本氣でございますか？
太郎。ア、……金を掘出すつて事か？　本氣も何もない、書類が見附かつたから、ワザ〳〵やつて來たんだ、萬事よろしく賴みますよ。
主人。へエー……ぢやア眞面目なお話ですな？
太郎。內地の人はやつぱり疑り深いな。
六郎。何うも根性が曲つてるな。

(主人、啞然として二人の顏を見くらべてゐる)

暗轉

第二場

場所　道路の一角

人物　椿太郎
元村六郎
附添小山
請負師
袴をはいた女
世話人
長髮の男
醉つた男
乞食等
巡査、刑事
通行人大勢

上手には丹塗の小い門、修繕した土塀の一角が立つてゐる、それに隣して、假圍ひの板塀が下手までつゞき、そこに出入口が開

けである、前の道路には、土や石が處々に積み上げられ、サイド・ウォーク丈が、奇麗に片附いてゐる、プラタナスが青々とした葉をひろげかけてゐる。ラオ屋が小笛の汽笛を鳴らして通る。

〇

請負師らしい法被着の五十男と、椿太郎と、宿から附添の小山といふ小才子風の背廣服の男と、三人連れが板圍の出入口をくゞつて出て來る。

太郎。ぢや何分よろしく頼みましたぜ、この邊は、昔は海の底だつたろふから、土が柔かだ、五日か、一週間も掘りつゞけたら、キッとぶッかるに違ひない、御禮はいくらでもしますよ、百年餘りも、黑土の下に埋まつてゐたんぢやア、金銀も石瓦と同じ事だ、日の目が拜まれて、人間の手で使つてもらやア、生のないものでも嬉しいに違ひないんだでな。

請負師。御請負したからには、確かに埋めてあるものならキッと掘當てゝ見せますよ……何しろ年代がチと古過ぎるから、そこが懸念で、何んとも云へませんが……。

小山。(氣輕な調子で)イヤ、大丈夫でせう、あゝした立派な古證文も出て居ますし、昔の人間は當世の人間よりはズッと正直で、律義でしたらうから、マサカ[illegible]、屋敷の下に埋つてやろうなんて惡ふざけた了見は微塵も持合せてゐなかつた筈です、キッと今に土の下の大甕から、慶長小判か何かゞ沸き上つて、こぼれ出して來るに違ひありませんよ。

太郎。(頷いて)そりやさうだ、己らの先祖が、嘘の書附を殘すやうな人間だつたら、島流しになりつこはないよ。

請負師。何にしろ、一たんお請負ひしたからには、掘れる丈は掘つて見ます、地主さんへのかけ合ひはあれで善いとして、人夫の手間賃丈は、いくらか先渡しして戴かなけや仕事にかゝれませんから、それは御承知願ひます。

太郎。手附五百圓つていふんだつたね、今こゝで渡しませうか?

請負師。イヤ、契約書と引かへに、明日でも結構でございます。

小山。これが今、道路になつてるとか、公園だとか、建物の下に當る土地だつたら、手續も面倒だし、急に手も附きかねたんだが、震災後、そのまゝ空地になつてたのは何より好都合ですよ。

請負師。全くだ。

(鐘が鳴る。丹塗の門に、參詣人の出入が頻繁になる)

太郎。これも先祖のお助けだらう……えらう賑かだが、何があるのかね?

請負師。こゝの不動[illegible]で、明るい中からお詣りがあるんで

すよ。

太郎。はア、島のお祭程、人が出る……さう云やア迷ひ子にでもなつたのぢやないかな、つひそこの横町で、洋服の古着屋を見附けたから、チヨツと行つて見るつて、一人で駈け出しやがつたが……。

小山。やつぱり、あちらと違つて、東京では、猫も杓子も洋服でなけや幅が利きませんでな。

太郎。(自身を顧みて)何うも島の素人、職人に仕立させたんで、ズボンがぶく〳〵して、大龜が濱をうろついてるやうな恰好だらうと思ふが、可笑しくはないかな?

請負師。(ニヤ〳〵笑つて)イヤ、近頃は、洋服にもいろんなスタイルがあるやうです、斷髮のお孃さん方は短い裾からソーセージの招牌のやうな兩足をつき出して、牝豚が餌箱を嗅ぐやうな恰好で、銀座を跳ね歩くのが流行ですし、姿、形になんか構ふもんですか?……

………。

小山。(向を指さし)ア……あの方ぢやありませんか?

六郎。(色の褪せに古洋服を着、ハンチングを冠つて、手に布呂敷包を抱へて、歩いて來る)ヤ、……何うも手間が取れましたよ……恰好の善いのが見附からんもんでな。

太郎。ひやアー……これは善いスタイルだ。

小山。(笑を嚙しめて)スツカリ紳士ですな……だが、ネクタイがなけやいけませんな。

六郎。ア、ネクタイ……手拭でも善かべあ。

請負師。そこらのデパートへ行つたら、賣つてゐますよ。

太郎。イヤ、近頃はいろんな恰好のがあるさうだから、それでも善かべあ。

小山。親方もお忙しからうから、これで失禮しませう。

太郎。何うもいろ〳〵御世話をかけました、何卒よろしく……。

請負師。ハイ、やれる丈やつて見ます……ぢやアこれで御免蒙ります(板圍の中へ入る)

六郎。何時頃までに金を掘出すつて、請負ふたかな?

太郎。ウム、まあ五日か、一週間つていふんだ。

六郎。ぢやそれまではあちら、こちら遊べるんだな。

太郎。折々、こゝへ來て、見ねえといけまい。

小山。イヤ、あの人に任せて置いたら大丈夫です、あなた方は、その間に方々御見物なすつてりや善いんですよ。

六郎。そこのお寺さんが賑かだ、行つて見べあ。

太郎。何處へ行つても人間がウヨ〳〵してる、……まるで鯵の子が泳いでるやうだなア。

六郎。違ひねえ……己らア、人間に食たいしさうだ……

○

門の中から、世話人らしい男が口を尖らして彫りながら、黑の筒袖に紫の袴をはいて、赤い紐帶に白く文字を浮出させたのを斜にかけ、肩先にバツヂを下げ銀ぶち眼鏡の若い女を力づくで追出して來る、彌次馬がワイ〳〵云つて、取卷く）

袴をはいた女。（興奮した調子）手荒な眞似をしなくつても、口で云やア分る……境內で宣傳するのが邪魔なら、門の外でやります、……國家の爲めです、社會の爲めです、人類の爲めです、このまゝでは、今に日本も食糧問題で行詰るのは分り切つてゐます、皆が共倒れになるんです……餓死するんです。……

世話人。氣狂ひ女め、人間に子供を產むなつて云聞かせるより、水に流れるな、火に燃えるなつて、敎へる方がよつ程氣が利いてらア、こゝは子育地藏樣だぞ、馬鹿な口說は他所へ行つてやれッ。

袴をはいた女。こゝは門外です、汝さんたちに彼此云ふ權利はない。

世話人。（憎惡の表情）今に警官に引ツくゝられるぞ、氣狂ひ女めッ（睨つて入る）

袴をはいた女。（群衆に向ひ）皆さん、私は國會本部から派遣されまして、[illegible]會に宣傳する爲めに、敢て街頭に立つたのでございます、……昔は東洋でも西洋でも、人間が地上に溢れるといふ事はこの上もない目出度い、喜ばしい事として、皆これを祝福しないものはありませんでした、…しかし今や時勢は變りました、第十九世紀の後半になつて、人智の開發、敎育の普及の結果、これまで限り無く廣いと思ふて安心してゐた世界が、…地球が俄かに狹く感ぜられて來ました上に、蒸汽船や汽車や、電車や、自動車、更に飛行機などの發明に依つて、交通機關が一足飛びに大發達を遂げましてから、萬國は皆隣合せ同樣になつて了ひました、これまでは暗黑大陸として、打ちやられゐた所謂野蠻國までも、探檢せられ盡し、占領せられ盡し、又分割せられ盡しまして、最早地球上には開拓すべき寸尺の土地もない有樣であります……然るに一方を顧みれば何れの國に於きましても國內の人口は、今までに見ない程急激に增加しつゝあります、ところが、それを養ふべき食糧の增加は、遲々たるものでありまして、人口增加率が幾何級數で進んで行つてゐるのに、かんじんの食糧の增加率は算術級數でしか行つてゐません、……地球上の面積には限りがあるのに、人口の增加には限りがないといふ、この極めて明白な事實は、我々の眼で大勢を覗き見るやうに明々白々でありますから、食糧問題といつか一度は行詰まつて、世界の各人類が、そ

の食物の缺乏の爲めに、苦み悶く日の近づいてゐる事は斷言しても間違ひはありません……。

(群衆に交つてゐた山伏姿の男が、女の耳元近く、急に法螺貝を吹立てる)

袴をはいた女。(ヒステリカルな調子で)何んです? 人の宣傳を妨害するんですか?

長髪の男。(太い聲で)非國民……サンガーの弟子、止せッ〳〵。

醉つた男。(子供を產むなつていふのはけしからんぞ、……大和民族を根絶しにする氣か? 相手の見附からん老孃だらう。

太郎。(女の傍に立つて)、大の男子が束になつて、この一人の女をいぢめるていふ法があるか? 己らの島でも、元は軒別十五六人づゝ子供を持つてたもんだがこの頃は人間の頭數許り殖やしても、食糧が足らんから、子供を減らす算段をしてる、この女のいふ事はほんとうだ。

六郎。さうぢや〳〵。この東京だつて人間ばかりウヨ〳〵してるでねえか? あんこ、先をやるべあ。

太郎。姉さん先をやつた、邪魔する奴は己らが張り飛ばしてくれる(睨め廻す)

醉つた男。何んだ? へんな用心棒が附いてやがるんだな。

長髪の男。君等は產兒制限が、自然の意志に背いてゐる事を知らないのか? 蟲でも禽獸でも、みな自分の子を生んで繁殖させる爲めにあらゆる努力をしてるぢやアないか? 自分の生命さへ捨てゝ悔ゐないんだ、それ丈の覺悟があれば我々人類が食糧問題なんか解決出來んで堪るもんか、フランスを見ろ、產兒制限は亡國だぞ。

太郎。(耳を傾けて)ウム、己らだつて、島中で子供を、、いたり、、したりするのが善いと思つちやゐない、生める丈、生ませるに越した事はない、

六郎。それはさうぢやとも……。

醉つた男。ぢやア、この女のおしやべりは止めさせろ

長髪の男。しかし、意見を鬪はせるのは惡い事ではない、まだ言分があるのか?

袴をはいた女。ありますとも……言論は自由です。男子の壓制なんかに服從なんかしますもんか?

太郎。さうだ、男子の壓制はいけない……やり給へ〳〵……皆默つて聞けッ。

袴をはいた女。……つきましては、產兒制限、――子供を產む事にも、或る制限を附けなければならない時代になつて來てゐるんです、勿論、優秀な子供、――優れた素質の子供を產む事は奬勵せなけ

ればなりませんが、白痴、低能、不具な子供は絶對に作らないやうに、又粗製濫造は嚴にこれを謹む事を努めるのが人類の義務責任であります、又教育を授ける資力のないものが、産み放題に子供を産みッ放しにして、それ等の憐れな子供は無教育のまゝ、所謂、賃金奴隷に賣られねばならぬといふやうな事はこの社會を……この人類をいよ〳〵悲劇のドン底に陷れるものであります。

（山伏の姿の男、又立現れて法螺貝を吹立てる）

太郎。この野郎ッ（飛びかゝる、一方は周章てゝ逃げ出す）

（彌次馬がワイ〳〵騒立てゝ袴をはいた女は取倒されかゝる、長髪の男が助けに行くと六郎は格鬪を始める）

巡査（驅け附け、群集を制し）許可も受けないで、大道演說をやつてはいけない……一寸來いッ……。

袴をはいた女。（モヂ〳〵して）境內でやつて居ましたが、追ッ立てられましたので……。

巡査。一寸とお出でなさいッ。

太郎。この姉さんの云ふ事は理窟が通つてゐます、産兒制限は、私、贊成ではありませんが、島では、許しませんに、それをはつ〳〵行つてゐます、日本は狹いやうでも、やはり一つの島ですから今から[illegible]

巡査（微笑）この女はヘンな藥を賣り附ける賣藥屋の廻し者だよ、何處か姿をかくしたあの長髪の男は情夫關係らしい、ぐるなんだ……さア行けッ（と引立てる）

小山。宣傳演說をすませたら、後で貴方方も高い藥を買はされたんですよ、油斷はなりませんハヽヽ。

太郎。（後を見送つて）でもなか〳〵度胸の善い女だ……演說の調子が氣に入つた。

小山。さア、まア、ちよいと、この地藏尊の境內へ入つて見ませう。

（乞食の群、そこらに列んでねだつてゐる）

女乞食。旦那さん、亭主の土方が、普請場の高い足場からおッ落ちて、死んぢまひまして、たつた一人殘された憐れな孕み女でございます、何卒惠んでやつて下さい、助かります。

男乞食の一。工場で働いてる中に、器械に兩手をもぎ取られた、不仕合せな勞働者上りでございます、何卒お情をかけてやつて下さい。

男乞食の二。トラックに轢かれまして、兩膝から下を切り取られた不仰な不具者に惠んでやつて下さい、功德になります。

太郎（財布から銅貨を取出して、それ〳〵投げ與へる）……ヤ、[illegible]の[illegible]、內地にも、溢れた人が多いのだなア。

[illegible]

太郎。自分が惡うて乞食になるのぢやアない、世間が惡いんだよ、己らの島内にや乞食なんか一人もゐない。

六郎。島ぢや食物がありや皆で分けて食ふだ、內地ぢや悪狡い奴が樂をして、バカ正直がこんな目に逢ふだべあ。

小山。……さう聞けば、さうですな。

小山。(苦笑)、それもさうですた。

(三人は境内へ入る、電燈が點る、參詣の人や通行人が往來する、乞食の群はしきりに哀願の聲をくり返す)

(そこへ巡査や、脊廣服の刑事がゾロ／＼と現れる)

巡査。又集つて來やがつた。性懲りもない奴等だ。

刑事の一。あちらから追つ拂ふとこちらへたかつて來る、まるで蠅見たいだ。

刑事の二。一應、署へ引ッ張つて行つて、油を取つて置からよ。

(つか／＼と進み寄る、乞食等は狼狽する)

巡査。又しても孕み女になつたり、不具者になつたり不埒た奴等だ。

女乞食。ハイ、もうこんな眞似はいたしませんから、何卒御許し下さいませ。

男乞食等。何卒、お情けを……。

刑事の一。幾度云つて聞かせても、その場限りの空耳だ、怪しからん奴等、人を欺して金を貰ふのはかたりだぞ、こん度こそ署へ引張つて行く。

巡査、刑事等。さあ／＼立て、立てッ。

(男女の乞食を引立てる。泣いたり、喚いたりする)

太郎。(門の內から出て來て、傍へ寄つて行く)はア、ちよつと申上ます、この憐れな乞食等を引立てるつて、あんまり酷しい御沙汰ではありますまいか?

六郎。可わいさうな不具者や孕み女で、自分の力で喰へねえから、人樣の袖にすがるだべあ、內地のお役人衆は、人情が無さ過ぎらア。

太郎。貴方方も正義は御存じでせうが?……人道つてものは鬼ヶ島でも、內地でも一つ事ぢやございませんかな、弱い者をいぢめんで、何卒許してやつて下さい、お願ひ申ます。

巡査。(微笑)ア、樣等か? 何處の奥山から出て來た仙人か知らんが、何うもよつ程、お人善しらしいな、この乞食は皆かたりだよ、働けるくせに、怠けやがつて、乞食を職業にしてる仲間だ。

太郎。乞食を職業にするつて、そんな物好きの人間がありますまい。

六郎。誰がすき好んで、乞食をしますべあ。

次郎。人間、仕合が惡けりや、誰でも首くゝつて、ナッ死んだら善いてふわけにも行きませんでな。乞食になつてども生きてゐたい

仲間もありませう、生きてりや又運が向いて來うんとも限りません。
何卒見のがしてやつて下さい。

刑事の二。ハヽヽ、なかく同情家が飛び出したもんだね、ぢやア君等に、この孕み女や不具者の正體を見せて上げやう。

巡査。ウム、それが善からう、本職等もすき好んで、こんなイヤ事をやるんぢやアない、まア見給へ。

（一人の男乞食の、汚れくさつたもじり外套を引剝めくる、その懷から二本の滿足な手が現れる、今一人の乞食の切られた膝は裳足で、後の襤褸切れの中に包んだ兩脚が引出される、孕み女は、旅をむき出しにされる。彌次馬はドツと笑ふ）

小山。イヤ、ハヤ、これはとんだ孕み女や不具者だ、欺まされる方が盲目にされてたんだハヽヽ。

（乞食等は引立てられて行く）

六郎。（ボンヤリ後を眺め）内地ぢや乞食までかたりだ、コリヤ油斷がならねえ、東京つて恐ろしいところだ。

小山。活き馬の目を拔くつて奴でさアね。

太郎。はア、こりや驚いた、こつちの方が不具者だつたな……だが、誰も好き好んで、あんなかたりまでやつて乞食する者もなからう、やつぱり世間が惡いんだ。

小山。世間も惡いが、あいつ等も惡いんです
六郎。ウム、乞食根性に產み附けられたのかも知れねえ。
太郎。でも己ら、何んだか、あいつ等が憎めないなア。
六郎。今に、金を掘出したら、皆くれてやるか？
小山。それも善いですなハヽヽ。

（暗轉）

第三場

場所　カフエー

人物　椿太郎
元村六郎
附添　小山
學生、中年の男等大勢
女給等

カフエーの內部、左右兩側に黒く塗られたボックス、中央に同じ塗色の衝立が立つてゐる、箱栽の植木、椿、櫻の造花、合奏管絃樂のバンド、裝飾電燈、花やかな蒸すやうな氣流が目まぐるしく渦卷いてゐる左右のボックスには中年男の背廣、モーニング

が學生服の中に混つて、ゴタ〳〵と込み合つてゐる、華美な服裝に、白エプロン姿の女給等がその間を彩つて縫ひ歩く、一方でW大學の校歌を歌ひ出せば、それに張合ふやうに、他の一方ではK大學の應援歌を合唱して、互に對應してゐる酒氣を吐く息に空氣が醉ひ、募り行く興奮が、それを燃やし立てる。

脊廣服の中年男（一方のボックスからつと起上つて、ひよろひよろと前へ出て、相手方のボックスの方を睨み、肩肱張つて、醉いどれ口調で）。まア明日の試合を見て見ろ、空威張や空元氣ぢや、何んにもならんぞへ、、、、だ……。

學生服の青年男（相手のボックスからよろけ出て）。去年の秋の試合を忘れたか？ どつちが空威張だい？ へ、、、、だ。

脊廣服の中年男。怪我に勝つたんだから乞食が白銅でも拾つたやうに宇宙天になりやがるんだ、見つともないぞ止せ、俺が附いてる、明日まで待つて見ろッ。

學生服の青年。負惜みを云ふのこそ見つともないぞ、止せ、明日になつて泣面かくなよ（「生意氣云ふか」「どつちが生意氣だ」摑み合ひにが始まろうとする、兩方のボックスがざわめき立つ）（椿太郎と六郎とが、小山に案内されてひよろ〳〵と入つて來る、そして衝立の前に立つ、美しい女給Ａがやつて來る、喧嘩はこの奇なる闖入者のために物別れとなる、校歌の對抗戰が始まる。

太郎。（キョト〳〵して）……御盛んな事つたな。

六郎。島の大漁祝ひよりや賑かだべあ、のぼせ上らア……。

小山。まアおかけなさい……これが當世流行のカフエーです……。

太郎。（そこの卓の前に腰をかけて）東京にや閑な人がなか〳〵多いと見えるな。

六郎。遊ぶのが商賣だべあ。

小山。（辯解的に）イヤ、これで晝間は皆忙しく働いたり、勉強したりして頭や體をこき使つてるので、夜はこんな處が繁昌するんです、まア都會地獄の息抜かしとでもいふところですな……何を飲みますか？ 燒酎はありませんから、ぢやあウヰスキーにしませう。

六郎。（キョト〳〵見廻はして）息抜かしだと云ふても、何んだか己らには息が詰まる處だべあ……なア、汝、島ぢや丘へ上つて、芝草の上へごろッと寢轉ぶだと、青々としたオッ開いた海も、透き通つた空も一時に見えて、ほんとうに腹の底に溜まつたガスがスーと拔けて、極樂往生した氣持になるだが、東京の人間にはあんな眞似が出來ねえんだべあ。

太郎。だが見ろ、美しいあんこがたんとゐるぜ、磯端の藻の中を鯛や魴鮄が、鰭を返して泳ぎ廻つてろやうでねえか？

六郎。ウム、それで大勢が、魚釣るやうに寄つて來るだべあ。

小山。ハヽヽヽ、釣堀ですかな？　まアそんなもんでせう、ものいふ金魚を釣りに來るんですね、（女給Aウヰスキーを運ぶ）忙しさうだね？

女給A。はい、今夜は大騒ぎですわ、明日のスポーツの應援つていふので、あゝしてこゝへ繰り込んで、皆さん、まるで火のやうになつてらつしやるんです。

太郎。はア、野球かな？　己らも久しく見んが、あれも面白い遊びだな……嬢さんまア、こゝへかけたら何うだ？

女給A。ハイ……イ、エ……まだあちらにも、受持があるんですから……。

六郎。いゝいゝ、やきゆうて……ア、やつぱりあの牛を鬪はせるんか？

太郎。球の投げ合ひだよ……だが島で野牛を鬪はせるのと、大した違ひはないんだ。

六郎。球の投げ合ひなんかと、野牛を鬪はせるのが一つ口に云へるもんだか？　獸が血みどろになつて、何方か一方倒れるまで突いて突いて、突きまくらせるんだ。あんな男子らしい、威勢のいゝものは内地ぢや見られめへが……。

女給A。貴方方は島から入らしつたんですか？

六郎。ウム、鬼ヶ島から來た男だ

女給A。御じよう談を？

太郎。ほんとうだよ、昔の女護ヶ島、今の八丈島の近所からのお上りさんだ。

モーニングの中年男。（近づいて）おぎん何しよる？　早く來ないか？

（女給Aの手を引張る）

女給A。まア待つててうだい、こちらは今、入らしつたばかりですもの。

太郎。（睨んで）こちらの女を横取りするつて法があるか？

モーニングの中年男。横取りだつて？　へーンだ（向ふへ行く）

小山。大分酔拂つてやがるな……人の席へまで女を釣りに來るなんて亂暴だ。

女給A。酔つたふりして、づうづうしい眞似をするお客さんがあるから困るわ。

太郎。（大分酔つて來た調子）フーム、そいつは怪しからん……一たい汝はいくらで、こゝへ買はれて來たんだ？

女給A。身を賣つたのぢやないわ。

小山。（ニヤニヤ笑つて）だつてお客衆達ちや無理にでも賣らされる事があるんだらう？

女給A（つんとして）知らないわよ。

太郎（熱心に）イヤ、己らが今に、東京の眞ン中から莫大な金を掘出すから、汝や、汝たち仲間の者を皆助けてやるぞ……つまり救うてやるんだ、他人に自由にされたり、忌な、氣に向かん事をさせられたりするのも、畢竟、金ゆへだらう、金がないから高利貸の老爺の妾にされる、金がないから、かたりの乞食にもなる、金がないからカフエーで男子に釣られる、己らが今、みんなに要る丈の金を分けてやる、キッと分けてやるぞ。

女給A（鼻で笑つて）當にして待つてますわ。

六郎（酔つた口調）この人は、己らが島の學者様だよ……正義人道の先生様だよ……嘘は云はねへ……今、金を掘つてるだから、キッと皆に分けてくれる……嘘は云はねへ。分けてくれる。

女給A。オヤ然うですか？……ぢやア私もその女護ヶ島へ連れて行つてもらひませうか？

太郎（手を握りしめて）連れて行つてやる……己らのかみさんにしてやる、こんな美しい、漆のやうな眼をした、かわいい女は、島のあんこの中には居らんぞ。

六郎。己らも一人、相手にしてつれて歸りたべあ。

小山（苦笑）貴方方も、とう／＼釣りての仲間に引ずり込まれましたなハヽヽヽ、オイ、カクテールでも持つて來てくれ。

モーニングの中年男（近づいて）おぎん、何うしたんだ？　何うして來ないんだ？……用があるんだ……。

女給A。分つてますわ。

モーニングの中年男（酒臭い息を吹いて）冷淡な奴だなア……汝は私の胸が分らないんか？……私の胸に燃えてるものが……燃えてる心臓に觸つて見ろ（女の手を取ろうとすると、相手は引込める）

女給A（チラと眼を光らせて）貴方の胸つて、火の氣のない、眞黒な石炭の塊りよ、……イヤ、燃え滓だわ……コークス殼だわホヽヽ

モーニングの中年男（よろけながら）何を云つてるんだ？　貴様は誤解してる、誤解してる……貴様は己れをそんなドン・フアンだと思つてやがるのか？　見損ふなッ。

（再び合唱が競ひ起る、あちらでも、こちらでも、酔つたまぎれに女給等の手を引つ張つて、ワルツ、フオツクストロツト、だらしない亂舞が始まる、男女の狂ほしい笑聲、椅子が倒れる、グラスが碎ける音）

モーニングの中年男は、この潮時に女給Aの手を無理やりにつかんで、ダンスに紛らせながら向ふの方へ連れて行く。）

太郎（その方をヂッと見すえて）女を引つ張つて行きやがつた。……

驚いた野郎だ。

六郎。（男女の亂舞を尻目にかけ）ありや何の眞似だべあ？

小山。ダンスです…毛唐の踊りの眞似ですよ、

六郎。ヘン、あれが踊かい？　己らの島ぢや、もつとうまい踊があらア…もつとうまい謠があらア。

太郎。ウム、イヤに香水臭いんぢやアない、ヘンなバタ臭ひんぢやアない、土臭い踊だ、潮臭い謠だ。

○

沖で見た時や鬼島と見たが、寄されて來て見りやなさけ島。
八丈名物御存じないか、椿の實油に八丈縞。
添へばわが夫、はなれりや他人、深い思はせぬがよい。
わしとお前は砂糖の新芽、すゑぢや二人でしめたもの。

（鬼の子を緋でつるしたやうな恰好の手ぶり足取りで、原始的な島踊が始まる）

（ダンスは止んで、、中年男も、學生服も、女給も顔をならべて見入る。踊つたのは、つり込まれて、後について眞似て踊る、喝采が起る）

太郎（椅子に腰[illegible]）つかれた、[illegible]、ピー[illegible]。

六郎。己らも一汗かいた……島へ歸つたやうな氣がしたど。

小山。イヤ、なか〳〵結構ですな……我々の先祖の踊りですね……。

脊廣服の中年男。僕は選手上りです、……イヤ、面白く拜見しました、……ホンモノの鬼の子が踊つてるやうでした……さア、獻杯、

（學生等、大勢。獻杯……獻杯。と、グラスをさしつける）

太郎。鬼の子が島の人間に教へてくれたんだらうな、……夫婦の道もセキレイつて鳥が教へてくれたつて話だハ、、、、、

（女給たち寄つて集つて。さアお酌しませう……よかつたわ……。面白かつたわ。……と喧噪する）

脊廣服の中年男。さア、あちらへ行かう〳〵（力づくで女給等の手を引張る）

太郎。（引張り戻し）何んだ？　女たちを店の品物扱ひにするか。奴隷扱ひにするか、無法者！（一撃を加へる）

脊廣服の中年男。打つたな、己は撰手で鳴らした男子だぞ、この野蠻人めッ、（格闘が始まる）

六郎　島の人間、他人の女を眼前でさらへて行きやしねへぞ。（女給等を連れ行かうとする學生たちを殴打る）

[illegible]

[illegible]

の如く突き廻り、あばれ廻る、大喧嘩の中に――（暗轉）

第四場

場所　或る夜の巷、

人物　椿太郎

元村六郎

附添　小山

女　大勢

勞働者、學生、老人その他通行人等

兩側は透視畫的に、新らしい造りの二階屋が立並ぶ、電柱が一本立つてゐる、軒別に、外はガラス戸が嵌まり、中にはスリ硝子に、切穴のやうなのぞき口がついてゐる、軒別に、スリ硝子の玉ごやの電燈、紅、紫に色づけられたのも交る、また宵の口、無遠慮な勞働服の男の群れに交つて、中折や學生帽が、息をひそめたり、鳴ませたり、のそ〳〵と歩き廻る、兩側ののぞき口からは媚めかしい女の聲がしきりに呼びかける、素見にのぞく客もある。

女の一。ちよいと〳〵、青服の威勢の善い人、まアお寄んなさいよ、私、昨夜、汝さんの夢を見たわ。ほんとうよボキラーが破裂して、ふき上る猛烈な蒸氣力に押上げられちやつてよ。二人が手を取つたまゝ火星の世界へ飛んで行つたつて夢よ、すばらしいでせう、話して上げるわ、お寄んなさいよ……お寄りつてば……。

女の二。ちよいと〳〵學生さん、寄つておいでなさいよ、青春は夢よ、今の中に歡樂の杯を乾さなけりや後悔するわ、お寄んなさい……お寄んなさいよ。

女の三。ちよいと〳〵中折帽のロイド眼鏡のお方、お寄んなさいよ、私、あなた知つてるわよ……すまして素通りなんか罪だわよ……お寄んなさいよ。

女の四。ちよいと〳〵、年の老つた、寂びしさうなお方、お寄んなさいよ、十年くらゐ若返らせて上げるわ、お寄んなさいよ。

女の五。ちよいと〳〵、様子の善いお方、…好男子、氣取らないでお寄んなさいよ、素見は罪ですわ、お寄んなさいよ。

（兩側からの媚めかしい女の聲の交響樂は高まり、低まり目に見えぬ糸を織り出す梭のやうに投げ交はされる、ギリシヤの昔譚の巖頭から誘惑の歌を歌ふニンプの聲に心を蕩かされながら舟人の櫂の手がたるんで行くやうに、通行の男の群の足取りは、立留まつたり、よろめいたり、亂調子になる）。

太郎。(小山に案内されて、巷の一角に現れる)フム……成る程、これは昨夜のカフエーとは又ちがつてるな。店ざらしだ。

六郎。はア…道の兩側から、女の眼玉だけが光つてるだなア……魔ものゝ世界だべア……。

小山。これが例の、闇に咲く花つていふ奴ですよ。

太郎。フーム……いづれ毒氣を吹いてるんだろうな……自分で好き好んでこんな商賣をやつてるんでもあるまい…やつぱり金だ…ありや客を呼んでるんぢやアない、金を呼んでる聲だ。

六郎。島にやこんなとこはねえだ、やつぱり人間がウヨ／＼し過ぎるだ、女がありあまるからだべあ。

小山。結局は、生活難でこんなドン底に落ち込むのですが、一たん落ち込んだら容易に浮ばれませんな。

太郎。(ため息を吐いて)…皆一つ先祖から出て來たんだから、見ず知らずの兄妹同志だ、それを店へならべて品物扱ひにする、奴隷扱ひにするのは正義でない、人道でない……このまゝぢや己ら堪まらないんだ、あの女どもの聲は、己らに助けてくれ、救うてくれと、呼んでるやうに聞える、金を掘出したら早速助けてやりたい、救うてやりたい、こんなイヤな感はこの大地の上から消して了ひたいな。

六郎。ありやあつて濟む、なけやなうて濟む、男性つてものゝ體が堅く出來てるんだべあ、……まア何んでも實地を善く見ねえと話にならん……(素見して)きれいなあんこがゐるぞ……。

女の一。ちよいと／＼、だんぶくろのやうな洋服を着た、ハワイ歸りの鍾馗さんのやうな旦那、お寄んなさいよ、日本の料理もたまに食べて御覽なさい、お寄んなさいよ。

女の二。ちよいと、龜の子を毛布にくるんだやうな、愛嬌のある旦那、まアお上んなさいよ。

女の三。ちよいと、洋服の着こなしのうまい、才子らしい眼鏡の旦那、お寄んなさいよ。

(一しきり呼び聲を競ふ)

(太郎もつり込まれて素見しに寄る)

小山。何うですか? せり市でお氣に入つた代物は見つかりませんか?

六郎。玄關だけぢや分らねえだ、座敷も見んぢや、島へ歸つて土産話にもなるめえが……寄ろか?

太郎。己ら、何んだか、牝豚ア檻へ入れて、糶り賣りしてるやうで、かわいさうでもありや、みじめにも思ふよ、島の他屋の女たア違ふはア。

小山。何うします……いゝ加減にして切り上げますか?

太郎。イヤ、このまゝ歸るのも氣がすまん……何處かへあのかわいさうな女たちを集めて見たい……そしてそれ〴〵身上話でも聞いてから、助けてやりたいんだ、救うてやりたいんだ。
小山。(頷いて) さうですか？ ぢやア檢番か、事務所らしいものがあるやうですから、行つて掛合つて見ませう。相當、花代か、玉代かつけてやらなけやなりますまいが、いゝですか？
太郎。そこは善いやうに計らつて下さい。
六郎。……あそこの格子に髮をお下げにした可愛らしい娘ッ子がゐただ。
太郎。何、お下げの……そいつア酷い……あんまりだ……あんまりだ。
小山。(輕く笑つて) イヤ、傍へ寄つて見ると、いゝ加減なお婆さんです、あのお下げが手です、欺されちやいけません、ハヽヽヽ
(暗轉)

第五場

場所　前場の巷の或る家の二階

人物　椿　太郎
元村六郎
附添、小山
女將甲乙
女　等
遊び人大勢

事務所らしい家の二階。正面、上手半分程、襖のぼろ隱しに、寄席藝人の名入の短冊ちらしに、花や紅葉を染め拔いた引幕の古びたのが、たるんだまゝ引つかけてある、正面の下手半分は障子格子、上り口は下手、ガランとした大部屋を電燈の照らしてゐる中に、女將らしい大年増が二人、居並び、それにつゞいて逆毛のオールバックや、耳かくし活動女優擬ひの安つぽいメーキアップ、拙なひき眉毛、濃い頬紅など大てい同じスタイルの、けばけばしい色のモスや銘仙、中には安物のお召らしいのを着込んだのもある、十七八才から三十からみまでの、大てい肉附は善いが、何處か商賣やつれのした、荒んだ女が十二三人行儀惡く居列んでゐる、振舞のビール罎の大半は轉げてゐる、上手の形ばかりの床の間近く、椿太郎が立ち、傍には六郎と小山とが扣へてゐる。
太郎。(演說口調で、立てつゞけに) 花代……玉代に相當するものを拂つて、皆さんを……諸君をこうして一室にお集り願ふといふ事は何

んだか醉興のやうに思はれる方もございませう。物好きな眞似をやるへんちきな男だと考へられる方もございませう。

女の一。（醉つた口調で）醉興だよ……へんちきだよ。

女將甲。シッ……シッ、靜かにおし……このお客樣は三十分といふ約束で、玉も倍もつけて下さろうつてんだ、チッとして皆お話を伺つてりや善いんださうだから……。

女將乙。（やゝ低調に）でも身上話を聞くんだつてえ事だつたが、自分で演說するんぢや約束が違ふぢやアないか？……例の救世軍か何かの廻し者ぢやないか知ら。

女將甲。節とは違ふわね、皆、自前同樣だもの、そんな心配はありやしない。こつちや皆の口のひまつぶしさ。

六郞。シッ、シッ……靜かにしてくれべあ。

太郞。で、私は、皆さんに、……諸君に大なる同情を持つものであります、諸君が彼の暴君の如き、又野獸の如き男性の爲めに虐げられて、世間の……社會の隅つこに追ひ込められたといふより、その網の目から篩ひ落されて、じめ〳〵したどぶ泥の中の腐つた尻切れわらじに生へるカビの花のやうな……。

女の二。（醉つた息を吹いて）カビの花だつて、生意氣いふない……臨に咲いても花は花だよ。

女の三。（冷笑）へ、、、自分こそ暴君らしい面をしてるぢやないか？野獸らしいでかい體附だよ。

女將。（低調に）コリヤよつ程唐變木だよ。

小山。靜かに……靜かに……。

六郞。シッ……シッ……シッ……。

太郞。決して皆さんを……諸君を侮辱するのではありません、要するに諸君も吾輩も、同じ日本の先祖の×の血脈を引いてるものであります、兄妹同士であります、その兄妹同士の諸君が、かゝる悲慘なる境遇に陷られたのは、一つは今、云つたやうな兄妹同士の關係を忘れてゐる男性のために虐げられたのではありますが、一つの原因は日本の內地に人間がウヨ〳〵多過ぎて、食糧が少い、イヤ、日本丈に限らん、今日の時代には何れの國に於きましても國內の人口は是までに見ない程激增しつゝありますが、一方の食糧の增加は遲々たるものでありまして、人口增加率は幾何級數で進んで行つてるるのに、一方の食糧增加率は算術級數でしか行つて居ないのであります、人間の毎年、生れる數と、食糧の數量とが、つり合ひが取れないのであります。

六郞。（拍手）流石に臨の學者だ。

小山。（靜いて）なか〳〵流暢にしてゐらつしやる。

女將甲。(煙草を吹かせながら) 何が何んだか私たち無學のものには分りませんわ。

太郎。(聲を張上げ) 諸君、そこで產兒制限といふ事は目下の急迫せる社會問題の一つであります。それで子供はあまり產みッ放しにしてはいけない、優れたる子供だけ作つて、低能、白痴、不具の子供は作らないやうな謹みが人間になければならないのです。

六郎。はア、何處やらで聞いたやうだぞ。

女の三。(パット吹かし〱) 私たちは子供なんか生みやしないわ、よつ程何うかしてる先生だよ。

女の四。(ヒステリカルな調子) 私たちは產兒制限の、、をするのよ。

女の五。(嘲るやうに) この先生、よつ程戶迷ひしてるわ。

女の一。(しみ〲した調子) だがね、私たちも親が產みッ放しにした方よ。

女の二。それはさうだわ。

六郎。(太い聲で) 靜かにして……靜かにして……。

太郎。(むくれ出す) 君の聲が一番太いよ…… 姉さんたちも彌次ツては困る、私は演說に慣れて居らんから、混ぜ返されると、自分で自分が何を云ふたか分らなくなるんだ……。

女將皆。皆、大人しく聞くんですよ、もチッとの辛棒だ……。

太郎。チヨッと頭がモヤ〱して來たので、前の話との連絡は附かないか知れません(小山氣を利かしてグラスに水を持つて行つてやる)……さて私は、私たちは前申上たやうに、鬼ヶ島—所謂、昔の鬼ヶ島から來た男でありますが、內地の方はもつと美しい、淸らかな、理想的な文明開化の社會かと思ひましたのに、意外にも、アベコベです、尤も鬼ヶ島にないラヂオはあります、自働車はあります、電車も、汽車も、飛行機もあります、工場には大きな煙突が突立つてゐて、八丈富士の烟よりも、もつとおびたゝしい黑烟を吐き出してゐます、天にとゞく建築物—ビルヂングもあります、その他いろんな器械は目を驚かし、膽をでんぐり返らせる程たくさんあります、しかし又一方には、憐れな乞食や、カフエーの女給や、また斯うした闇の中に稼ぐ諸君やその他、虐げられてゐる男や女が數知れない程あると思ひます、ところで私の……私たちの鬼ヶ島は、貧弱な、狹い島ではありますが、芋にしろ、米麥にしろ、漁つた魚にしろ、島中の者が皆で分け合つて食べてゐますから、乞食は一人もありません、又月の病のある女たちは母家を離れて、他屋—即ち離れ家へ行く習らはしがあります、その間は、男女の關係(六郎が咳拂する)……自由な關係が行はれますが、カフエーや、又こゝで見受るやうな金で賣る、買ふといふやうな事は決してないのであります。

女の三。おきまりよ、田舍者はみんなお涙頂戴をするわよ——。
女の四。聞いて極樂見て地獄つて、相場はちやんときまつてるわ。
六郎。(太い聲で)しッ……靜かに……ほんとうの事を云つてるんだ……
……。
太郎。エ、エ、エ……それで私は……微力ながら、かゝる虐げられつゝある内地の人々を助けて上げたい、救うて上げたい、正義人道の爲めに盡したいと決心しました、しかし今日の時代に於きましては、正義人道ばかりではダメである、金力がなくては、正義人道は口先丈の事になつて、實行が出來ません、然るに何んたる幸ひぞ、私は先祖の遺産に恵まれてゐる者でありました、尊敬すべき先祖が、埋めて置いてくれたものを、今、掘出しつゝある最中です、この數日の中に、私の手に、五十萬圓、或は百萬圓、若しかすると、それよりもつと多額の金が入つて來るのであります。
女将甲。(小山をチヨツと引張る)……キ印ですか?
小山。(眞顔で)そんな事はない、正氣ですよ。
女将乙。ちやア正氣の狂人かね、
太郎。……で、私は、この金を虐げられた諸君のために喜んで費したいと思ふのであります、これで先づ諸君の怨恨を償つて上げます、それから兇惡な、[illegible]な、野蠻な生蕃を殺らせて上げたいが、私たちの島も、この頃は食糧問題で、この上、人間の頭數を殖す事は六ツかしくなつて來ました、そこで、これは、外國の土地でも買つて、虐げられた諸君の爲めに、樂土を開いて上げるより外に方法はあるまいかと考へてゐるのであります。
女の一。(ビールを煽りながら)虐げられたくつて、さう人を見くびつて貰ひますまいよ、私は斯う見えても辯護士の奥さんでしたよ、主人が自分で放埒をするくせに、私の身持が善いの、惡いのつて、やかましく云ふのがつい癪に障つて、飛出しちやつて、とうくこゝへ納まつたのだわ、難有い事には、こゝぢや身持が善いの、惡いのつて、やかましくいふ者もゐないし、自由で、のん氣で、樂にお金が儲かる商賣だわ、島から來た先生なんかに、何が分るもんか?
いらんおせつかいよ。
女の三。(これもビール鑵をぐい呑みしながら)私はタイピストだつたのよ、それを色魔の社長が手込にしやがつて、處女の貞操をふみにじつちやつたから、もう自棄になつたの、こうなりや男性への復仇をやらなきや嘘だと思つて、自ら好き好んでこゝへ來たのよ、男つて自惚れが強いから、ちよつと甘い事を云つてやると、直ぐ本氣になつて、無暗でのぼせ上つて喜んだもの、お醜男さんだわ。十人が十人、まア旅ア鬼から無事に歸すると思ふわ、少しは腕が上達えた

が、まだ、まだこんな事で足りやしない、一生かゝつて、もつと、もつと復仇してやらなけや、私の十露盤は桁が合わない事よ。

女の四。女工や何かして、綿屑にまみれちやつて一日中働きづめにしたつて、一圓以上取るのは骨だわ、こゝでは擇りながら、そんな下等勞働者は一人もゐない事よ。

女將甲。斯う見えても、皆、月に千圓近くは稼いでゐませうよ、手取り半分にしても、商買としちや結構なもんですわ、中には金を溜めて借屋の何軒も建てゝるんですから、馬鹿にはなりませんよ、當節は大の男が、汗みづくになつて、朝から晩まで働いたつて、貯蓄なんぞメッタに出來つこはない。上汁は皆、何處かで吸ひ取られるのが落ちですからね、こゝぢや親類縁者から廢業させにかゝつても、逃げ廻つて、何うしても家へ歸らないつていふのが多いんですよ。

女の四。だからそんな夢の國なんかへ一人だつて行かうてものはありませんわ、鬼ヶ島のお伽話なんぞ、今時は子供だつて聞きたがりはしませんよホヽヽヽ。

(一同の笑ひが爆發する)

(太郎は立往生する)

六郎(女の一の傍へ寄る)フーン、聞いて見りやよそ目で見た程、みじめでもねえだな?

女の五。立派さうに、奧樣顏をしてたつて、亭主の云ふなりになつてるんでせう、相手が一人と數が多いと丈の違ひよ。

女の二。夫婦なんて、たいくつなものぢやアないの、…それを我慢してるのは不性なからよ、世間がうるさいからよ。

六郎(頷く)ウム、さう云ゃア、己らが島ぢや、好いた間は夫婦暮らし、イヤになつたら他人になるとちやんと昔からの仕來りだ、可愛がらんせ永くは添はぬ、緣はきれもの、はなれものつてなッ…

女の三。オヤ、然、そんな處なら私、行つて見たいわ。

六郎。ウム。ぢや己らと一しよに行くべゑ。

太郎(つか〳〵と寄つて、六郎を打つ)己らが折角、皆に云聞かせてるのに汝が女をからかつちや何んにもならんぢやねえか?

六郎。醜い眞似するな……この女が、島へ一しよに行かうて云つてるんだ。

太郎。汝がノロマ面してるからだ、男性への復仇つて云つてた女ぢやアねえか?

女の三。だから男つて、ちよいと甘い口を利けやのぼせ上るつていふのよ、ホヽヽ

(又ドッと笑ひが爆發する)

小山。(女將等と耳語き合つて後)何うですまアこゝの女たちはこんな

もんです……そろ／＼引上げますか？

女將甲。もうそろ／＼本職が忙しくなりますから、こゝらで皆歸らせて貰ひます。

女將乙。もう、約束の時間が來たんだよ（小山、太郎に勘定書を見せ、金を受取つて、女將に渡す、その間にチョッと手品があるらしい）

太郎。時間が來たら今夜は仕方がない……だが己らは何うしても、この虐げられた女たちを救うてやる……今に大金が手に入るんだ、己らは慾氣はない、皆に分けてやる、喜んで諸君のために使つて了ふ。皆、私の處へ尋ねて來てくれ、さア、宿と事務所はこゝだ（名刺を配る）、こん度又、ゆつくり云つて聞かせる。諸君は金のために自分の肉體を、自分の魂を虐げてゐるんだ、いけない。いけない……（女の一に向ひ）……姉さん、汝は一番怜悧さうだ、こん度、二人でゆつくり話したいな。

女の一。エ、エエ、百萬圓御手に入つたらキッと知らせて下さい、何處へでも飛んで行きますわ。

女の二。だが金がなくなつたら、あばよだつて？

女將甲。さア、皆、[illegible]つて、お泣ら／＼……。

女將乙。……と[illegible]たよ、[illegible]たつたもんだ、成る程鬼ケ島の人間らしいわハヽヽヽ

太郎。（女の一を追ひすがる）君は怜悧さうだ、きつとゆつくり話さうね。

女の一。エ、エエ、何時でも入らつしやい、お相手になつて上げてよ。

（小山も六郎も、それ／＼に女に追ひすがる）

女將甲。何うも難有う……さア／＼皆お出で／＼……とんだ事で店を明けちやつた、何より商賣が大事だよ。

女將乙。さうとも／＼、あばよ。 あばよ

遊び人數人、（棍棒など持つて、ドヤ／＼上り口に現れる）。かみさん、やつつけやうか？

女將甲。お周章てゞないよ。たゞの唐變木さ。

女將乙。（腕をたゝいて）何んなもんだい？

（遊び人等と太郎等と睨み合つて凝立する）

第六場

場所　ビルヂングの一部

人物　[illegible]六郎

元村六郎
附添　小山
世界企業會社重役
若いタイピスト
給仕
若い男

ピルヂングの中にある世界企業株式會社の事務室の一部、衝立を隔てゝ下手は應接室、上手は重役室、そこらの壁には南米ブラジルの彩色した大地圖が揭げてあり、珈琲栽培や、牧畜の光景など三色摺、五色摺にしたポスターがベタベタ、貼られてある。

○

重役室の方では、二十才前後の、モダンガール風俗のタイピストが、忙がしさうに器械を鳴らして居り、應接室では、五十才位の、禿頭の、でつぷり太つた、モーニング姿に、鼻目鏡の重役と背廣にロイド眼鏡の若い男とが、卓を隔てゝ向き合つてゐる、聲の調子が次第に高まつて來る。

重役。此方は眞面目にやつてるんだ、さう君等に尻ッぽを掴まれるやうな弱點があつて堪るもんか……現に知名な貴族とか、財界の名士とかゞ、ちやんと重役に加はつてゐるぢやアないか？ 近頃は一夜造りのイカモノ會社がひよこ／＼飛び出すから、斯の方々は、如何に口說かれてもメッタに新會社には關係しない事になつてるが、ここ丈けは無論、別格さ、苟も斯うして株式會社の看板を揭げて世間樣を相手に仕事をやつてる以上、無責任な事が出來るもんか……。

若い男。（ヘンな笑）エヘヽヽヽ（印刷物を指先で捻くりながら）だが、この伯爵なんざ、三百圓か五百圓も出しや何んなイカモノ會社へでも名前を借すつて、通り相場になつてまさア？ こゝに列んでゐる所謂財界のお歴々が大てい札附きだつて位の事は、我々の仲間ぢや知れ過ぎてます、廣い世間には、慾に目の無いくせに、足元の陷し穴には氣の附かない、馬鹿リコウな連中が存外多いものだから、斯うした白痴威かしのお道具立てゞ、ブラジルの土地が無代同樣で買へるやうな鳴物入の宣傳をやりや、ウカ／＼釣り上げられて、自分の財布で首を絞られて了ふんですよ、何んでもバカに景氣が善いつていふぢやアありませんか？

重役。（鼻であしらふやうに）まア可成りな景氣だ、……こつちは創立匆々だし、他の古い移民會社が、商賣敵でいろんな中傷をやるので困る、姑息な事を何年やつてたつて仕方がないぢやアないか？ そこで當會社は、事業上に一新紀元を作る覺悟で、進んでサン、パウ

ロの州政府と正式の契約書を取交はして、極めて安い價で、肥沃な廣大な土地を日本人の所有に出來るやうに、やつと手續をつけたんだ、それまでの苦心はなか〳〵お話にならんさ。

若い男。(ニヤ〳〵笑つて)ぢやアその苦心談でも書き立てゝ上げませうか? 僕等の方の新聞もまだ發行した許りで、紙數は他の大新聞並みには行きませんが、社會の一部にはなか〳〵信用があるのです、それを味方にすると、敵にするとでは、山が當るか、外づれるかの別れ道で、結果に於て大へんな相違だといふ事は御存じでせうが?

重役。(苦笑)此方らの事業には裏表はないんだよ、君、我々は唯、誠心誠意で、國家社會の爲め、同胞の發展の爲めに計つてゐるんだから、傍から何んなケチを附けられやうがびくともしないんさ。

若い男。(險しい表情で)はア、ナカ〳〵出方が大きいですな、しかし私の社の方へは何十通も投書が來てるのです……こゝにも一通持つてゐますが……つい、この隣縣の、さる中流の百姓だと書いてゐますが、百エーケル、三千圓の土地購入の約束で、手附を拂つたが、後で他から注意されて、ブラジル領事館へ問合せると、政府からそんな約束をする筈はないと云はれたので、手金取戻しに、何度、こゝへ掛合ひに來ても、あいいましたねここか云つて、ゴまかしてゐる、大山師に違ひないから、一日も早く、世間のために筆誅を加へてくれといふのです。

重役。(豪放な笑)ハヽヽヽ、その男子なら大てい見當は附いてゐるが、ありや君、頭がヘンになつてるんだよ、アト金の工面が附かないからつて、手附を取戻さうていふのは蟲が善過ぎらア、千口、二千口とある中には、たまにはそんなのも、出て來やうさ、ハヽヽ。

若い男。貴方の方の言分は言分として、その本人の言分も一應、紙上へ出さうかと思つてるんですが……?

重役。(口調をかへて)だがね、折角事業を始めて、まだ、幾月にもならんのだから、一部でも世間の誤解を招くのは困るんだ、君の社でもこの事業を賛成して、本社の社運が愈々盛大に赴くやうに、まア厚意を持つてくれ給へ(横の卓へ向直つて、小切手へ一筆書入れて……)これはほんのおちかづきのしるしだ、肴代だ、何分よろしく。

若い男。さうですか? 難有う……(取上げて見て)……もう一桁上げてもらへませんか? 社員の頭數も多いんですから。

重役(手持に)イヤ、それは君の足代にさし出したんだから、君の善いやうに取計らつて了つた譯へ……。

若い男。さうですか？………ぢや又その中に改めてゆつくりお伺ひする事にしませう。（立上つて、扉口へ）

重役。……ア、うるさい奴だ……度々御伺ひされて堪るもんか（云ひ云ひ重役室へ歸る）

○

若いタイピスト。いろんな處からゆすりに來るのね、刑事さんでも頼んで張番してもらつちや何う？

重役。（苦笑）ウム、ゆすりを追ッ拂ふには善いだらうが、かんじんのお客さんまで寄附かなくなつちや困るよ、ハヽヽヽヽヽ。

若いタイピスト。それもさうだわ、この會社の方が、刑事に疑ぐられるかも知れないわね？

重役。（卓上の書類をひねくりながら）生意氣云ふなッ。すぐこれだから困る。

若いタイピスト。いゝえ、私、心配なのはこの頃、事務さんが、毎晩、藝者屋町へ入りびたりだつて皆の噂が高いからです、五日大盡で通つてるて？　私、その譯は知らないが、この會社の信用に疵が附きはしないかとそれ許り氣にしてゐますのよ……私だつて、たまに日曜日くらゐには又鎌倉邊りへでも、自動車をライドしたいのよ。

重役。（笑顔）ア、さういふ意味か？　よし、よし、この次の日曜日には、さう出來るかも知れないよ（デッと見て）、藝者遊びは、商賣の手段だ、善い御得意を逃がさない爲めさ、やつぱり若返つた氣持になるのは、君等を相手にした時に限るんだよ……しかし五日大盡なんて、綽名が通つて來やがつたんかなア、ハヽヽヽ

（若いタイピストは默つてゐる、眼に涙が滲る）

重役。（寄つて行き）何うしたんだね？　へんな子だよ……。

若いタイピスト。貴方のは、何も彼も手段だわ、……商賣だの、若返るのだつてばかり云つて……私、さうぢやアないのよ……。

重役。……すや、すね出したのかね……困るなア。

若いタイピスト。（傾けんに）私、本氣だのよ……この頃ぢやア私、心から貴方のモノになつたつもりよ……それに貴方は……（涙ぐんだ聲）

重役。ア、分つた……分つた……こつちだつてさうだよ（両手で抱いて接吻する）

（扉をノックして、給仕、名刺を持つて來る）

重役。（急に威厳を作る）……ウム……何ういふ用事だ？

給仕。ブラジルの土地購入の事についてお聞きしたいといふのださうです。

重役。よし……應接へ通してくれ……（卓に倚つて、書類をいぢくり始める）

（椿太郎、元村六郎、小山に連れられて、給仕の案內で應接の方へ通る、物珍らしさうに、彩色の地圖や、ポスターなど見廻してゐる）

重役。（印刷物を手にし出て來る）私がこの會社の專務です、……よく入らつしやつた、ブラジルの土地購入の御用件ですか？

小山。ハイ……ポスターがお目に附いて、寄つて見たいと云はれるので、御一しよに上りました、八丈島の方から出て來られたのですが、お金には御不自由のない御方です、

重役。はア、さうですか？　それは〳〵……（ヂロ〳〵見る）

太郎。私らの島でもさうだが、內地へ來て見ると、何處でも彼處でも、人間がウヨ〳〵し過ぎてゐるので、彈き出された奴は乞食だの、女給だの、賣笑婦だのに成下つて、みじめな生活をする、產兒制限が賣笑屋の宣傳にまで使はれるのも一應尤もだが、しかしその爲めに民族絕滅とか、國家衰亡の結果を招いては一大事だ。

重役。御尤もです……八丈島の方から入らつしやつたといふに、なかなかの御見識で、敬服しますよ、御世辭でなく……。

六郎。この男は偉い識見で、こりゃ、島でも學者だよ……それに代々名主をつとめた家柄だからだ……。

太郎。私も島を出て來た時は、唯ボンヤリ考へてゐたゞけだが、內地へ來て見て生きた學問をしましたよ、日本もこのまゝぢやいけない、このまゝぢやそれこそ今に產兒制限だ、……そんな眞似をせんで、遠慮なくドン〳〵生めよ、殖えよ、人間の頭數を增させて行くが善い、それについちや何處か、外國の土地でも買入れて、內地であリあまる人間のはけ口を拵さへて置かんといけないんだ。幸、私には先祖が莫大な金を遺してくれたので、それを投げ出して、この意義ある事業に盡したいと思ふてた矢先、ブラジルの土地を前渡すといふ廣告が目についたので、やつて來たのです。

六郎。內地へ來て見りや、皆、我利〳〵亡者許りで、儲けたい〳〵で、血眼になつてやがる、乞食までが錢を腹へ入れたり、滿足な膝に、木の足をつぎ足して、一錢二錢をかいかたり取るだべあ、大きな看板出して、立派な洋服着て、大きな面アして納まり返つてる奴でも乞食の兄弟分でやつぱり腹から錢を出したり、木のつぎ足を見せるて事だ、そんな中へ來て、この六郎旦那は、自分の手に入れた大金をぶち蒔いて、世間の人の役に立てたいといふ心がけの人だから、己ら、島のためにこの大騒ぎア為うするんだ……何うだ、さうしたものぢやねえか。

小山。(調子を合せて)全く感心なお心がけです。

重役。(誇張的に)全く感服します、……ところで、大體はその印刷物を御覽下されば分りますが、今回、ブラジルの州政府と契約して、極めて安い値段でお讓渡出來る土地はこのサンパウロの南の方の、こゝらの高原地でありまして、有名な珈琲の栽培に適當してるのは勿論ですが、その外に綿花も出來ます、米も作れます、牧畜にも適してゐます、附近には金銀も、タングステンも、それから寶石が出る見込の場所もあります、何しろ、投資なさるには至極有望ですから、賣切れぬ中に一刻も早くお申込なさる事をお勸めします。

太郎。一たい値段は何れ位ですか？

重役。その中にもくわしく書いてありますが一ヱーケル、三十圓から、五十圓です、一ヱーケルは御存の通り、日本の二町五反歩に當りますから、三ヱーケル乃至、五ヱーケルもあれば先づ一家族の御仕事には十分です、最初は處女林を開墾して珈琲の種子をまく、これが四年目から花が咲いて實が取れます、何しろ一目千里といふ廣々とした赤土の上に、銀のやうな眞白な珈琲の花が一時に咲き出した眺望は、實に何んとも云へぬ、美しい壯大なものださうですよ。

六郎。フーム……さうですよつて、汝さん、ブラジルから來た日本人かと思ふたが、まだ一度も行つた事はないづら。

重役。(一寸とヘドモドして)イヤ……エヽ……いづれこれからブラジルへ出かけますよ。

太郎。一ヱーケル、百ミル……ミルつて、いくらだ？

重役。エヽ、相場の變動はありますが、まア三ミルが日本金一圓當り位のものでせうね。

太郎。フム、一ヱーケル、三十圓……無代見たやうなもんだなア。

六郎。成程、無代より安いくらゐなもんだべあ。

小山。要らん金があつたら、此方らも一口乘りたいですな、洋服細民には何うも手が出ないんだが、昔から地所を買つて置いて損をしたものはありません、十年の中にはキツト十倍位の價が出ますよ、地所は寢かせたまゝで、一人で稼いでくれるんだから得ですな。

重役。(含み笑)さうですなア、ソツとして寢かせて置いても、ひとりでに金を生んでくれるんですから、資本を入れるには、これに越したものは先づありませんな、まア試みに一萬圓投げ出して御覽なさい、五六百町歩、のものがあなたの御名儀になりますから、思ひ切つて御契約なすつちや何うです、悪い事はお勸めいたしません。

太郎。買ふくらゐなら、一萬圓なんて、そんな端た金は出さないんだ。こつちはチと望みが大きいんだから。

重役。(面喰つて)ヘヱー……こちらでも勿論多い程結構ですが、一時

に大資本をお投になさいと云つてお勧めするのも、お客様によつちや、ヘンに思はれても困りますし、可成多人數のお方に分割して、社會の公利公益を計りたいのが本社の主旨でもありますから、手堅い處を申上げたんですが、何に、五萬でも十萬でも、別に制限をお附けするわけではありません……。

太郎。五萬や、十萬の端タ金で、土地を購つたつて、内地の人口問題や食糧問題の形が附きやしまい、此方の望はチト大きいんだつて云つてるんだよ。

六郎。この人は今、金を掘らせてるんだよ、五十萬兩がものが出るか、百萬兩がものが出るか、この二三日の中に決るんだべあ、その金も身に附けやうていふぢやねえ、皆、世間の人のために投出すいふんだから内地のケチ〳〵した人間たア了見が違ふだ、馬鹿にしちやアいかんぞ、洋服の恰好は惡うても、腹の中は、内地の者よりりつぱだよ、ずつとりつぱだよ。

重役。(眼をパチツカセて)イヤ、……エ…結構です、結構ですとも……いくらでも御投資なされたい丈け、御話をつけませうが、一たい、何れ位の土地が御入用ですか?

太郎。まア、少くも、[illegible]、五六十萬町歩……それで[illegible]、買入れが出來るかな?

重役。ヘエ……五六十萬町歩なら、チヨツと三萬町歩ぐらゐは買へませうか? チヨツト……(小山を引張つて、次室へ行く)

○

重役。(低聲で)あの人のいふ事は馬鹿に大きいが、チと話がヘンぢやありませんか?……キ印ぢやアないんですか?

小山。さア、私にも分りませんな。

重役。(紙幣を、相手のポケットに押込み)……手間代りです……何うでせう? ほんとうに金を持つてる人か、何うか教へて下さい、話の仕方がありますから……?

小山。遠慮なく頂戴します……今、彼は金を掘つてるんです、それを堀當てたら大ヘンなもんです……。

重役。金鑛をですか?……はア、さうですか?

(若いタイピストも耳を傾けてゐる、重役は獨り頷いて、小山と一しよに、再び應接室へ出る)

重役。イヤ、失禮しました、ちよつと小山さんに伺ひたい事があつたんですが、貴方方の事は十分信用いたして居ります、では御希望通り、如何様にも御投資いたしませう、それには手附金が要るんですが、幾らにしませうね?

太郎。いくらでも……

重役。契約成立と同時に一割五分乃至、二割ですな、三萬町歩、約六十萬圓としまして、その二割なら十二萬圓見當です、尤も金高が大きいから勉強して、割引はしませうか？

太郎。ア、善うがす、明日か、明後日までには拂ひ込みます。

六郎。ア、それ位、わけはねえだべあ。

重役。ぢやア一應、契約書は作らせて置きます、暫らく御待ち下さい

（重役室へ行つて、タイプライターを打たせる）

六郎。ゑれえ事だ、三萬町歩の土地買入れて珈琲畑作らせる、そこのビラ縮が本モノになるんだな、汝が行くなら、己もついて行くべあ。

太郎。ウム、島中の者も來たい奴は皆連れて行くし、內地の乞食も、女給も、賣笑婦も、それから他に虐げられて氣の毒な、みじめな暮ししてる者は、誰でも連れて行つてやる、だが三萬町歩ぢや、たつた一萬人位の人間しか食つて行けまいな、せめて十萬町歩位に買擴ろげるか？

六郎。十萬町歩でも、百萬町歩でも、そりや廣い程善いだろうが、まア一時に大げさな事しても、始末に困らア、ゆつくりやるがよかべあ。

太郎。（頷いて）ウム、それはさうだ、物事には手順があるでな、己らア法螺ア吹いて、空威張したくはないんだ。

小山。うまく金に堀り當てりや善いですがなア、今朝の工合ぢやア、まだ見當が附かない様子でしたよ。

太郎。何アに、そんな心配はムダな心配だ……己らの先祖は、嘘の證文なんか書殘すやうな罰當りぢやない、そんな悪狡い人間なら、島流しなんかに逢ふもんか……。

六郎。そりやさうぢやとも……嘘やかたりの出來る人間なら、內地にヂツとして居着いてられるだ、あんまり正直過ぎて、胸に隱し事が出來ねえだで、流人なんかにされたもんだべあ。……時に、あの隣りで、蟬か何かの鳴くやうな音がしてるのは何んだらう？（重役室をのぞく、タイプライターに目を附け、それからヂロ〳〵と、若いタイピストを見てゐる）

重役。御待遠さま……一通り、契約書の原本は出來ました……

六郎。珍らしい器械だな…打つたら字が出るんだな（女と器械と等分に見くらべて笑つてゐる）

重役。あの、ちよいと伺ひますが。あそこの方は、頭は確かでせうね？

六郎。エ？

重役。キ印ぢやアないですな？

六郎。(太い聲で)キ印つて何んだべあ？

重役。(咳をして、サッサと應接室の方へ行く)何うも御待たせしました、……御覽下さい。

六郎。(取上げて見る)…三萬町歩…五十九萬六千五百圓也……

重役。エヱ…特に割引してあるのです、手附金の方は無論明日で善いですが、印紙代とか、手數料とか、こゝで二三百圓、一時お預りして置けると、好都合ですが……

太郎。それ位はこゝに持つちやゐるが、まだ契約書も取交はさんで、現金を預けるつて可笑しいぢやないか？

重役。イヤ、折々お流れになるのがありますから大きな契約を申込まれる方には、さうした方法をお願ひもするわけですが、貴方方にはその必要もありますまい…勿論萬事明日で結構です…エヱ…ともう夕刻でもありますし、お近づきのしるしに一寸と御飯でもさし上げたいんですが、何うでせう？甚だ失禮ですがお交際下さいませんか？私の行きつけのつい鼻先ですが……？

太郎。お近づきですか？

重役。イヤ、今後も又いろ／＼御助力に預りたいのですし、ゆつくりお話も伺ひたいのですし、是非お交際下さい[illegible]

太郎。さうですか？ [illegible]う。

重役。貴方も御一しよに……

小山。さうですか？ 難有う。

重役。おや出かけませう(コートを引ッかける)

太郎。オイ、六郎君……六郎君、何うした？

六郎。(やつと氣附いたやうに駈け來ろ)何んだ？ 用か？

太郎。お交際に御馳走するていふんだよ。

(六郎は早速、出かける支度をする)

○

重役。(重役室の卓へ蹄り)私はこれから又出かける……いゝ加減に仕舞つて歸つてくれ。

若いタイピスト。又何時もの處へでせう？

重役。いゝ御得意さんだからおちかづきになつてをくんだよ。

若いタイピスト。(嬌態をして)私、一人でカフェへ寄るわ、お小遣を？

重役。困るなア……(紙幣をやる)

太郎。(應接室から)まだ、手間がかゝるかね？

重役。(走つて來て)イヤ、失禮しました、今日は[illegible]人とも居なくて、まだ誰も一人帰りませんので、私一人で[illegible]、さア、參りませう。

[illegible]

暗轉。

第七場

場所　或る待合

人物　椿太郎
　　　元村六郎
　　　附添　小山
　　　重役
　　　女將
　　　藝妓、等、
　　　刑事その他、

或待合の座敷、三方は黄色がゝつた襖、上手の一角に、床の間が附いて居り、天井から飾り提燈が花やかに照り輝いてゐる、隣りでは賑やいだ絃歌の聲が湧上つて、絶えつ、續きつ、聞えて來る。

男衆が、黄色な布に、赤い日形の線を入れたのを持運んで來て、坐敷の縁の上にくり擴げる、女中の手で、上手と下手とに厚ぼつたい、坐蒲團が運ばれる。

女將（座に向つて）さア〳〵、いつものやうに、すつかりお支度が出來ましたよ。

（聲に應じて、重役が醉に赤らんだ顔を出す）

重役。…さア…さア、これから余興の始まり、始まり……美人聯珠隊も繰り出して來いッ……。

（太郎、六郎、小山が、いづれも醉拂つた態度で後へつゞいて、ふら〳〵と入つて來る）

重役。（下手へ坐つて）、さア、何卒、そちらへ……先づ〳〵御着席…、四本柱はそちらと、こちらへ坐つて戴きませう、イヤ何うも、とんだ醉興ですハ、、、、、、。

太郎（醉つぶれた口調）、五目ならべなら己らにだつて出來ん事はないが、采配と違つて生きた美人を指先で自由に動かせるものか知ら……。

重役。イヤ、それが號一つで、こつちの思ふまゝに動かせる處が面白いんです、いろんなお座成りの遊びもし盡して見ちやつまりませんから、新案特許の美人聯珠ですが、美人を碁石代りに使ふところが、たまらなく愉快ですよ。

太郎（息を吹いて）フーム、人樣にやれる事なら私にやれん事もありますまい…しかし…しかし …つく〴〵考へて見りや、人間をオモチヤにして…遊び道具にしてそれで善いものかなア……。

小山。(手を振つて)、イヤ、そんな六ッかしい事は、今夜は云はないつて、約束だつたぢやアありませんか？

重役。働く時は働く、遊ぶ時は遊ぶ、働く間を眞面目に働きさへすりや、遊ぶには、ハメを外づしたつて構ひません、又それでなけや遊びとは云へませんよ、分つてるぢやアありませんか？　分らなけや大悟徹底するまで遊びなさい、ハ、、、、。

六郎。(これも大分醉つた口調)、イヤ、口ぢや六ッかしい事を云うても、あれで遊ぶ方はナカ〳〵好きな先生だよ……美人を碁石にして遊ぶといふのは、私、まだ聞いた事も、見た事もねえだ、早く始めるがよかべあ。

小山。後學のために見て置く事ですな、ハ、、、、、。

太郎。勝つた方が、その美人を浚へて行くといふのだつたら、はづみが附くがなア。

重役。はア、それも面白いでせうが、どちらにしても、賭勝負としませうよ、……オイ、驪珠隊はまだか？　何した？

女將。ハイ、唯今……五目大盡がお待ちかねだよ。

(白裝束の藝者の一列と、黑裝束の藝者の一列と、くり出して來て、挪揄して、そこに飛んで、挨拶する)

重役。(婦たちとしきりに戲談を交換しながら)……お客さまか前…

……主人役は黑だ、きまつてらア、さア、兩方へ別れて坐るんだ……
……。

(黑の中に重役の馴染女が交つてゐるので、白の組は、手を拍つたり。五目大盡〳〵。と、ワアー〳〵笑つてさわぐ)

重役。何をさわぐ……石が口を利くて事はない、默つて……默つて……
……。

小山。成る程、コリヤ碁石の代りですな……美人碁石だ……こりや善い……。

六郎。(坐り直して)はア、鷺と烏の行列だべあ。

太郎。(ニコ〳〵笑つて)何卒よろしく頼みますぜ。

重役。さア始めませう、……私から……まづ盤のまン中に、黑を一つ打ちませう。

(眼で知らせる、黑の女の一、布のまん中に歩み出て、坐る、又笑つたり、手を拍つたり五目大盡〳〵と連呼する、重役が、シッ……シッ……と叱る)

太郎。フーン……ぢやその直ぐ右隣へならべて白だ……御苦勞さま…
……。

(白の女、進み出て、右の隣へ坐る)

六郎。はア、成る程、こりや[illegible]……ある

重役。黒のこちら……下隣りへ同じく黒と打つ……。
太郎。ウム……初めの黒の下……白の斜向ひに白と打つ、御苦勞さま……。
重役。ではこちらへ延びて、黒の下に黒。
太郎。フーム……ぢやこちらは、白が斜向に延びる……御苦勞さま……。
重役。ぢや黒はもう一つ、下へのびる、……そこ……そこ……。
（傍で、さわぎ立てる）
太郎。黒を留める……御苦勞さまだ……。
重役。フーム……ぢや上から三つ目の黒の隣りへ、黒と打つ。
（傍でワアー〳〵と聲を立てる）
太郎。白の端の、斜向に白と打つ……。
重役。ヤアー、ウツカリぬかつた……しまつた……しまつた。
太郎。さア、白……白……五目にならんで……御苦勞さま……。
（ワーッと手をたたいて勝鬨が上る）
重役。負けました……醉拂つちやつて、五目大盡、つい見落したんだよ、猿も木から落ちるさ（太郎の傍へ寄り）賭勝負に一番負けました……殘念ですが、時の運です（ポケットから紙幣を取り出し）一番內閥として置きませう。現ナマで、納めます、賭は纏頭に借上り、善いですな、決めましたよ、この次は私がキッと勝つて見せますから……。
太郎。イヤ、己ら勝つても金なんかいらん……金なら捨て場に困つてるだ。
重役。ぢやア、こゝらの碁石どもに分けておやんなさるが善いでせう、出したものは引ッ込めませんよ。
（白も、黒も。まアひどい事を！　ひどいわ！　と叫ぶ）
小山。何んならこちらでもらつて置きます。
六郎。內地の人は皆、慾の皮が突ッ張つてるだ、島の者もチッと人間が悪くならねえぢや、ダメだぞ、折角、貰つたものだ、汝が要らんなら、己が預つてやるべあ。
重役。さア〳〵二番目を始めませうぜ。
（ワアー〳〵と白も、黒も羨ましさうな叫び聲を上げる。
（再び席に就く）
六郎。汝、又勝つたぞ。
太郎。ウム、己、ら何うも運の善い男だから負けやせんぞ。
小山（行司の態度）しつかり、双方とも見合つて……。
重役。さア行きますぞ。黒、白、左右へ別れて〳〵……負手が先手だ……右から二番目の黒（又ひやかすやうなどよめきが起る）まん中

へ出て、坐つておくれ……打つたぞ……。

太郎。白のあんこさん、あの黒の左、斜向ひに列んでおくれ、頼みます……。

重役。こん度はお次の黒……始めの黒と中一つ飛んで下へ出る……そこ……そこ……。

太郎。フーン、白のあんこさん、あの二番目の黒の左の隣へ頼みますぜ……。

六郎。白、負けるな、しつかりせいッ。

小山。見合つて……見合つて……。

重役。こん度の黒は、今の白の上へ坐る……。

女將。今度負けちやいけませんわ……しつかり……しつかり……。

黒組。(叫ぶ)頼むわ。

白組。(叫ぶ)こん度も勝つて頂戴よ……。

太郎。白のあんこさん……一番目の白の右へ延びる……頼みますぜ。

小山。双方とも見合つて、しつかり〳〵……。

六郎。白、勝て……白、勝て……黒負けろ。

重役。今打つた白のすぐ右へ、黒打ち……勝負あつた……。

(白組も、黒組も、昂奮する)

女將。白、勝ち……勝負あつた。

六郎。まだ三つ列んだだけだ……白、負けんぞ、やつた、やつた。

小山。殘つた、殘つた……見合つて、見合つて……。

太郎。止めて見るだ……三つ斜向に列んだ黒の左へ、白のあんこさん、出て止めてくれ……。

重役。第一番に打つた黒の右り、一つ飛んですわる……これで勝負が見えたでせう。

六郎。まだ五つ列らばねえだべあ。

女將。二三が出來ますわね……列んで見せて上げたら善いわ……。

太郎。……負けた……負けた……。

(白組、は喚聲を上げ、黒組は勝鬨を作る)

重役。さア勝運が向いた……二百匁頂戴しますか？……

太郎。もう一番行から……端タ金の勘定なんか、面倒だ、後でする、さア來いッ。

重役。エ、エ、何度でもやるにはやりますが？

黒組。くたびれるわね……。

白組。起つたり、坐つたり、いゝ役だわ。

重役。那様なものを云ふ一座があるか、默つてろ……默つてろ〳〵

女將。後でウンと奢つてもらアいゝだらう、[illegible]

([illegible])

（女將が飛んで行きかけると、刑事が二三人、そこへ踏込んで來る）

刑事の一。海外企業の重役とか、何んとか名乘る男がゐるだらう？

女將。（興奮して）何の御用です……誰方です？

刑事の二。己れたちは署の者だ、……邪魔アするな（つか〳〵と坐敷へ入つて）君だな？　海外企業の重役とかいふのは？　署へ同行せう。

重役。ヱ……何の御用ですか？

刑事の二。覺えがある筈だ——さア一しよに行から……。

重役。まア、待つて下さい……（身支度するふりして、隙を覗つて、急に逃げ出さうとする、刑事がバラ〳〵と飛びかゝつて格鬪する）

太郎。何うしたんだ？

重役。（擲られながら）暴力團だ、助けてくれ——

太郎。暴力團だ？　怪しからん……（六郎も、小山も、助力して更に格鬪が始まる、女たちは悲鳴を上げて、逃げ出す）

刑事の一。何を血迷うてる、刑事だぞ、君等はこの大山師のペテンにかゝりかけてたんだ……、尻が割れかゝつたので高飛びする怖れがあるから　訴によつて拘引に來た、邪魔アするな。

（三人急に手を控へて、小さくなつてゐる）

重役。（悶々しく）己を拘引するなら、この男等も拘引しろ、一しよにバクチをやつたんだ。

刑事。何に？

小山。……イヤ、全く云ひがゝりでございます、唯遊んでゐましたので……。

太郎。ひどい野郎だ（と毆りかゝる）

六郎。內地つて恐ろしいところだ（と毆りつけ紙幣を取り出して）預つた物ア歸してやるぞ。

刑事の一。（目を附ける）何んだ、オモチヤの紙幣ぢやないか？

刑事の二。君等の住所、姓名を聞かせてくれ、

太郎。鬼ケ島から來た男でございます。

（小山がいろ〳〵辯解する）

刑事の二。さうか？　ペテンにかゝつちやいかん……氣を附けろ……さア行け（引立てる、皆を睨んで引かれて行く、女將は後について行く）

（藝者等も二人、三人と座敷へ戻つて來る）

〇まア、驚いちまつたわ。……

〇大へんだわ。

〇馬鹿ア見たのね。

○ごみくた大谷だわ。

(黒組の女一人は、隅で泣いてゐる、冷やかす者もゐる同情する者もゐる)

女將。(歸つて來て)……ひどい目に逢つちやつた。……とんだ五日大戯だ、今夜の會計は貴方方から戴いてくれていふ事です。

六郎。(むくれて)そんな法があるか?

小山。イヤ、こりやひどい……醉も何も埋めちやつた。

太郎。何アに金の事なら、女將さん、心配するな、私が引受けた、二三日中に宿まで取りに來てくれ……イヤ、この藝者衆も氣の毒なもんだ、可わいさうだ、碁石にしたのは己らぢやアない、己らがペテンにかゝつたのだから許してくれ、金を掘出したら皆を助けてやる、救うてやる、決して見殺すにはせんぞ……。

六郎。何うも恐ろしい處だ、宿へ歸らう〳〵。

黒組の女の一。(隅で泣いてゐたのが、ヒステリカルに興奮し切つて)この人たちのせいだよ、ひどいわひどいわ……人を碁石にしちやつて……オモチヤにしちやつて、このまゝぢやすまされんわ。……

(女たちは急に喚き立つ)

さうよ〳〵、何んとかおいさつして下さい、でなけりやこのまゝ歸しやしない〳〵。

口惜しいッ〳〵、このまゝぢや腹が癒えんわ。

さうよ。歸しやしない〳〵このまゝぢや腹が癒えんわ。

(白い組の女は太郎に、黒い組の女は六郎や、小山に、競ひかゝつて、首にぶら下つたり、足を引つ張つたり、腕の下をそこぐつたり、狂人の群のやうにさん〴〵にふざけちらす、三人の男は輪の如く轉ろげ廻りながら。ア、負けた…。負けた。息がつまる、…息がつまる殺されさうだ。……苦しさうに笑ひながら叫ぶ――暗轉)

第八場

場所 空地裏

人物 椿太郎　元村六郎　附添小山　請負師　會計　土工大勢　見物人大勢

[illegible]

重機の吊り柱などが見えてゐる、内部には、掘り上げた土や石があちこちに小山になつて重り合ひ、セメント樽や、板切れ、木切れなどが、亂雜に置ッ放しになつてある。

○

請負師が一つのセメントの空樽に腰をかけてゐる、十數人の土方が、それを取圍いて、氣色ばんでゐる。

土方の一。知つた事ぢやねえたア云はせねえよ、昨日の勘定は割増になつこねえ、頭ア刎ねたんだ、約束通り、勘定の始末をつけろ。

土方の二。（シヤベルを握つたまゝ）話が片附いてからでなけや今日は皆、仕事にかゝらねえよ、人を馬鹿にしてやがら。

土方の三。こんな處を掘くり返したつて、小判どころか、鐚錢一文も出る氣遣はねえや、それを善い加減に、ゴマかして、あの馬鹿から金を絞り上げやうて了見が氣に喰はねえ、おまけにこちどらの賃銀の頭まで刎ねやうて、さううまくは行かねえや。

請負師。（土方を見返つて）默つて聞いてりや、圖に乘つて出放題な事を云ひやがる、已は相手をゴマかしも欺しもした覺はみぢんもねえぞ、掘つて見てくれていふから、仕事を請負つて掘らせてる丈だ、小判が出やうが、みゝずが出やうが、已の知つた事ぢやアねえ、又賃金も當前に勘定して取つてるから割増しなんか出せる筈はねい、云ひがゝりを附けると承知しねえぞ。已に話しがありや小頭から聞から。

會計員。賃金の割増つて約束なんか、初めからした覺えはないのです、仕事が仕事だから、萬一、金にでも掘當てたら、酒錢は別に貰つて上げる位の事は云つたでせう、小頭がそれは承知の筈だ。

土方の一。小頭があやふやな事許り云つて、信用出來ねえから皆が、直接に談を附けに來たんだ、文句を云はねえで勘定の不足分を出してもらはふ。

土方の三。（鶴嘴を杖いて）唯の土ほぜりたア違はアな、小判が出るか、出ねえかていふ、一か八かの賭け仕事だ、氣を附けてやつてくれて云渡しだから、その時、こつちが念を押して、増錢を出す口約束が出來てたんだ、十人も二十人もの耳で聞いてらア。

土方等。さうだ〳〵……ゴマかすない……ひでい奴だ（口々に叫ぶ）

會計員。旦那が、そんな口約束までした覺えはないつて云つてられるんだ、土を掘るのは何處を掘つたつて、同じ勞力ぢやアないか？

土方の一。自分でよけいな賃金をせしめて置いて、已等、働くものには、少としか寄越さんのだから量見ならねえていふんだ。

土方等。會計の靑びようたんめ、すッ込んでろ、……貴樣なんかに分るもんか……●

請負師（獨り頷きながら）イヤ、双方の勘違ひがあつたかも知れねえ……少しでも色をつけてくれといふ頼みなら、私も判つた、自腹を切つてゞも増錢を出さう、ところでこの仕事も、もう大抵にして、今日位で打切らざアなるまいよ、昨日で一週間經つたが、まだ目當は附かないんだし、一丈何尺の深さまで掘込んだから水は湧上るし、近所の家主からも、根太が下るつて苦情を持込んださうで、こん度は地主がやかましく云ひ出したんだ。

土方の一。打切るなら打切るで善いが、勘定の方は仕事にかゝる前に、きれいに、片附けてもらはふぢやないか？

土方の二。今日日、己れたちの仕事は他にいくらでもあらアな、こんな的のない、土を掘るのやら、雲を攫むのやら、わけの分らん、ふざけた眞似をやつてるよりや、鐵筋コンクリートの、大きな工事の土臺でも堅めてやる方が、同じ傭人足でも、まだ働き甲斐があるてもんだ。

土方の三。その方がずつと張合があるよ、馬鹿の手傳ひちや、こつちまでが、馬鹿にならアハヽヽヽヽ。

土方の四。さア私達分を[illegible]へきれいに拂つてくれ。

請負師。[illegible]が[illegible]いたり掘つてある、[illegible]に云付けてあるから、とにかく仕事にかゝつてくれ、今日一日[illegible]だ。

土方の一。イヤだ、先きに拂へッ。

その二。さうだ、さうだ、直ぐ拂へッ。

請負師。人を馬鹿にするなッ……。

土方の一。どつちが馬鹿にするんだ。

その二。眼をむいて見せたつて始まらねえぞ、己れ達の手の獲物が見えねえか？

（シャベルや、鶴嘴がふり上げられる）

太郎。（ひよこ〳〵と入つて來る）ヤ、皆さん、毎日、何うも御苦労さまで……。

六郎。ヤ、皆さま……まだ出ませんだか？

太郎。（それを見て）ア、こりや何うしたんだ？ 仕事にもかゝらんで……コリヤ何うしたんだ？

請負師。ヤ、旦那、皆がチといふくり出したんでさア……酒代が多いとか…少いとか云つてな……。

太郎。ア、酒代か…イヤ、酒代なんかいくらでも出すよ、今に掘出した小判を一枚づゝでも、二枚づゝでも分けて上げる、早く仕事にかゝつてもらはふぢやアないか？

六郎。皆、怠けんで、やつてくんなよ、己らも手傳つて上げらア、今日こそ、掘出されさうだ、あ。

土方の一。（吹出すやうに笑つて）小判なんかヽアテになるもんですか？　酒手が出るなら先きへ貰ひてい。
土方の二。まだ見附からん小判よりや、銀貨や白銅の方が手ッ取早く通用するで、よつ程難有いや。
土方等。さうだ〱……。
六郎　フーン、慾が少いだべあ。
太郎。ウーム、然し御前はやつぱり正直たもんだ、慾の皮なんか突ッ張らせない、……小判は小判で上げるが、とにかく酒代を出すよ。
土方の一。難有い〱……十圓紙幣五枚だ……皆來い、皆來いッ。
（皆が寄つて來て挨拶する）
土方の一。このまゝぢや分けられねえから後で小さくくづしてやるよ
土方等。善いとも〱。
太郎。さア、直ぐ景氣よく仕事にかゝつてくれ。
請負師。皆が酒代を戴いて難有うございます……地主から毎日、やかましく云つて來ますので、仕事の方は、今日は今日限り、打切りにしますから、何卒さう御承知願ひます。
太郎。（頷いて）フーン、ぢやア今日中に、いよ〱金を掘出す段階が附いたんだな……ア、もう出る頃だ、キッと出るだらう。
六郎。いよ〱出るだかッ……。

請負師。イヤ、それは請負へませんが、もう一丈五六尺も掘下げました、何しろこゝらは、土一升に金一升の目貫の場所ですから、さう何時までも、的なしにいぢくつちやゐられませんでな。
太郎。フーム、土一升に金一升……出るよ、もう少し掘つたら出るとも、出るとも……先祖は竹内式部の一味で、あんまり眞直な人間だつたから、島流しにされたんだよ、嘘なんか云はれるもんか？　嘘の證文なんか書かれるもんか……。
六郎。早く、この目で見て見たいな、この、手で觸りたいな……。
請負師。人夫どもは、仕事を始めました。
小山。（現れる）何うですか？　出さうですか？
太郎。ウム、…ウム……今に出るとも……何か石の櫃か、大瓶かに、鶴嘴の先がガンと打つかりやしめたもんだがな……。
六郎小判がパッと散らばる時や、何んな音がするかなア……
太郎。今に、乞食も、女給も、醜業婦も、あの華街の雛妓たちも、聞附けてこゝへ押寄せて來るかも知れん、皆の見る前で、櫃か、瓶かの蓋がピチンと破れて、大判小判が、ピカ、ピカ光つて宙に跳ねッ返りや面白いが……。
六郎。ア、鶴嘴の先からぱつと火花が飛んだ、……何んだらう、打つつかつたのは

小山。何んだ？　ガンと音がしたが？
（地下から。煉瓦の片に打つつかつたんだへゝゝゝ）
太郎。煉瓦……赤土にまみれた箱かも知れんぞ……よく氣を附けて見てくれ。
六郎。錆び附いた金ぢやねえだか？
（土方の聲。錆び附いた煉瓦ぢやハゝゝゝ）
（カンと音がする）
請負師。何んだ今の音は？
太郎。（のぞき込んで）今のは、たしか、金の音だ。
六郎。ウム、ガンと鳴つた、……ガンと鳴つた。
小山。たしかに私も聞きました。
（土方の聲……。たしかに金だ……）
太郎。金か……金か……先祖様はやつぱり嘘は云はねえ……ブラジルの土地三萬町歩買へるぞ、乞食も、女給も、賣笑婦も、失業の勞働者も、誰でも彼でも虐げられた者は皆、そこへ連れて行つてやる、そこで皆が自由に、幸福に暮らせるのだ、そこに正義人道の國が榮えるのだ、正義人道には金力が要るぞ……出たか〱。
太郎。（歡喜の表情）ア、出たらしい……出たらしい。
（發掘狂のパンドで、極點の狀を追つて行く）

請負師。何んだい？……今のは何んだい……。
（土方一の聲。金は金だが古金だ……。）
（土方二の聲。大やかんが、埋り込んでたんだ。……地下でドーツと笑ふ聲。）
太郎。大やかん！　そんな筈はねえだ、汝たちは眼が悪いんだ、土の底にばかり入つてるので、眼が昏らんだのだらう。己らが見てやる。
（掘つた穴の中へ飛び込む）
六郎。（のぞいて）何うだ？　金か？　金が出たか？　小判か？　大判か？
土方等。（泥まみれになつて、出て來る）もう水がジク〱湧上つてダメだ……とても見當はつかん、偶に出りや古やかんだハゝゝゝ。
太郎。（泥まみれになり、大きな、古やかんの片われを抱いてはひ上つて來る）古やかんが出た、こん度は瓶か、甕かゞ出るんだ、もつと掘れッ……もつと掘れッ、掘り下げろ……。
土方の一。もう水が湧くばかりで、とても見込はありませんよ。
その二。そんな金銀を入れた瓶や甕を埋めて置くつて、お伽話でさア、ハゝゝゝ。
その三。もうそんな馬鹿な夢なんか見ん事つた
太郎。一所懸命になつてもつと掘れッ、もつと掘れッ、掘り下げい、キウ

ト出る……先祖の爲めだ……皆のためだ、世間のためだ、社會の爲めだ、人類の爲めだ……ブラジルの土地が買へる、食糧問題も心配いらん、生めよ殖えよだ、人助けだ、正義人道だ、掘り下げろ、もつと深く、もつと深く……もつと……もつと……。

請負師。もう大抵にして止めたが善いでせう……あきらめませう。

太郎。あきらめろ……馬鹿ア云つちやいかん、見ろ、見ろ、女たちが皆やつて來た、皆やつて來た……今に、金が出るぞ、先祖が嘘は云はん、掘れ、掘れッ、ぐつと掘下げろ、地球の心まで掘り下げろ、地球のドン底まで掘り拔けろ……ア、皆笑つてやがる、何を笑ふんだ……その鶴嘴を貸せ、シャベルをよこせ、己らが掘るッ。

六郎。己らも掘る、(二人が穴へ飛込む)

(通行人、男、女、老少、大勢ガヤ〳〵と寄り集まつて、穴をのぞく)

甲。馬鹿野郎ーッやい。

乙。氣違ひやーいッ。

丙。とん馬だよ。

丁。鬼ヶ島から來た男だ。

(哄笑が爆發する)

太郎。(穴の底から叫ぶ)……さア見ろ、見ろ、皆、金だ、皆銀だ、そこら中、金だらけだ、銀だらけだ…水と思つてるのは、黄金の溶け汁だ。(土をドン〳〵拋り出す)

六郎(やはり穴の底から)土一升に金一升……この土も皆、金だ、金だ、金の屑だ(土まみれになつて、太郎等は現れる)

太郎。明盲め！ そこら中の土や石だと思つてるのは、皆、金だぞ、金だぞ、小判の片だ、大判の片だ、黄金の粉末だ、よく見ろ、よく見ろ、眼をすえて見て見ろッ。

(雲をもれて、太陽の光、そこらの土石を照らして燦然と輝く)……そーら、皆金の上を踏んでら……銀の上を踏んでら、黄金世界だ……銀のやうに眞白い珊瑚の花が一面に咲いてらア、皆助かつた、皆助かつた、皆救はれた、皆救はれた(雀躍する)

六郎。(も泥まみれになつてはひ上つて來る)ウム、この土や瓦と見えてたのは、皆、金が化つたんだ、土一升に金一升、皆、要る丈、取るだ、要る丈取るだ……。

小山。成る程、海の水からでも黄金が取れるつていふから、こゝらの土は、大判、小判が溶け込んでるかも知れんな……。

(土方たちも、催眠術にかゝつたやうに、そこらの土や石を掘り返し始める、する中に互に競爭して、手拭に包んだり、やがて法被に包み込んだりする、見物の男女までが吾も〳〵と木片でそこら

をほじくり出す、請負師までも、會計も、小間も血眼になつて、土や石をかき廻はし始める。）

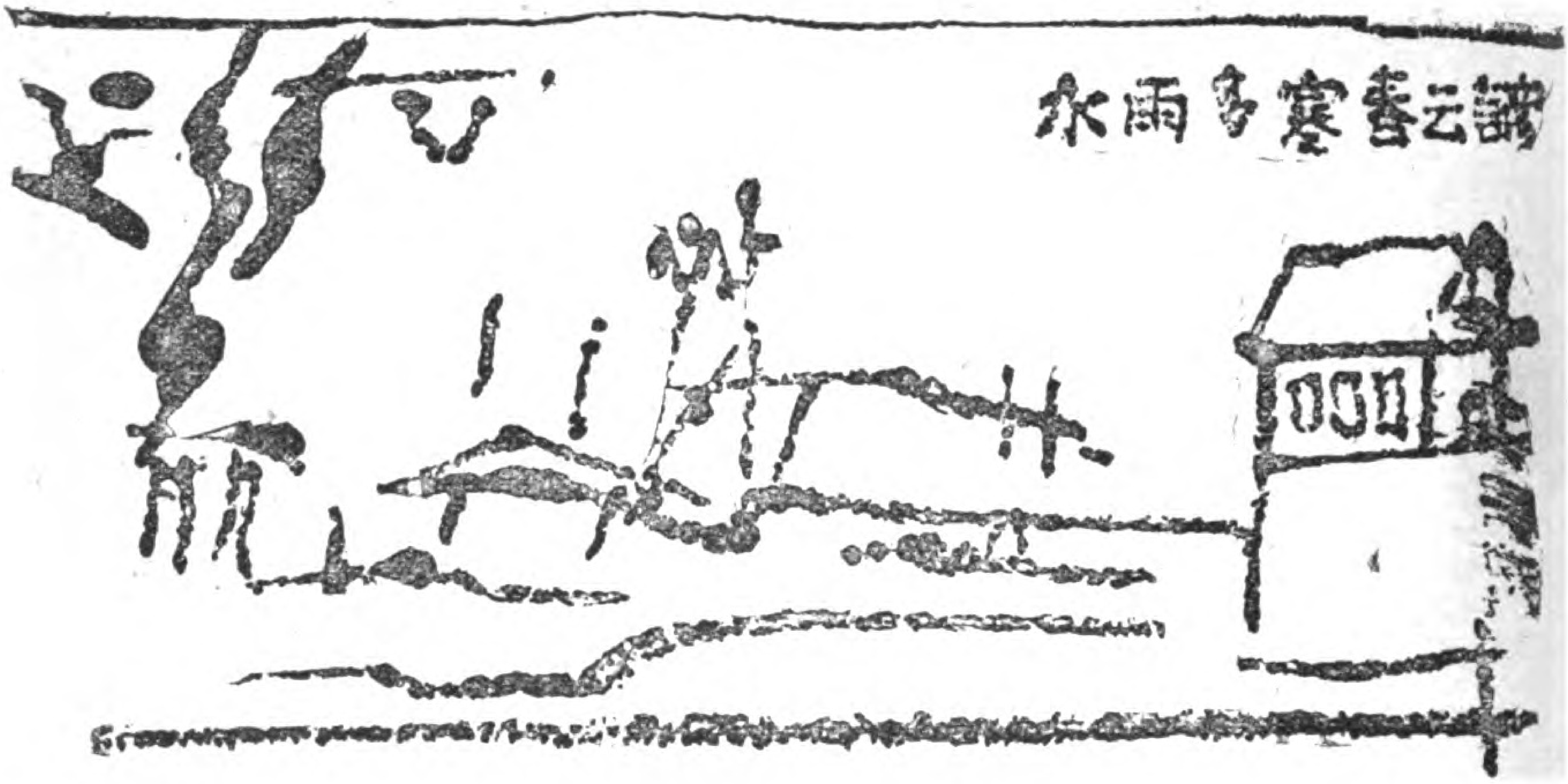
太郎。（凱歌を上げるやうに）そーら見ろ、とう〱見つけたぞ……見つけたぞ、堀出したぞ、堀出したぞ……ブラジルの土地三萬町歩……乞食、女給、賣笑婦、非行藝妓、虐げられてゐる者は皆來い、連れて行く……黄金の世界……正義人道の世界……銀のやうな眞白な珈琲の花が咲く、さア來い……皆來い、さア來い……。

六郎。……さア來い……皆來い。

（熱狂的に躍り廻る）

（空には飛行機の音、板圍ひの外には救世軍のバンド、一同はしきりに、土をほぜくり、石を拾うてゐる、太陽の光線は舞臺に強く輝く）

——幕——



戯曲

一萬圓

正宗白鳥

人物

今村陽一（四十歳、豊かな實業家）
瀬川才三（同年輩、俸給生活者）
塚田鋭吉（三十歳未滿、學生上り）
渡邊さよ子（三十餘歳、今村の元の妻）
戸見田はつ子（二十五歳）
今村謙次（三十餘歳、陽一の弟）
老婢、書生、老婢の娘

年末のある日

（一）ノ一

今村陽一の書齋兼寢室。

テーブル、椅子など、簡易な洋風の設備がされて、瓦斯ストーブが燃えてゐる。

彼れは四十歳で、今は獨身である。丸の內に根據を有つてゐるある會社で重要な位地を占めてゐて、可成りの資財を蓄へてゐる。それに、年末に多額な利益の配當をも得てゐる。彼れの體格はガツシリしてゐて、活氣が顏に現はれてゐる。

テーブルには、インキ壺やレターペーパーなど、當り前の用具が置かれてゐるが、異つてゐるのは、幾束かの百圓札が可成り高高に置かれてあることである。そして、彼れは今、その札束を見据ゑてゐる。

ふと、扉の音を聞いて、彼れは側にあつた新聞紙でその札束を蔽うて、席を立つて扉を開ける。

老婢が顏を出す。

老婢　瀬川さんがいらつしやいました。

今村（當てが外れたやうに）何だ、瀬川か。……お前に注意して置かうと思つてゐながらうつかりしてゐた。居ると云つたのなら仕方がない、此方へお通ししろ。……それから、女のお客樣が來るかも知れないが、さうしたら、瀬川さんが歸つ[illegible]、その女のお客樣に階下で待つてゐて貰ふやうにして[illegible]

老婢　ハイ（出て行かうとする）

今村　あ、それから。外のお客樣が來たら、旦那樣は今お出掛けになつて、いつお歸りになるか分らないと云つて、玄關から放擲ふんだぜ。

老婢　ハイ（奥へ引込む）

今村は、札束を新聞紙でよく蔽うて、テーブルの一隅へ押やる。それから、自分の椅子をも來客用の椅子をも、瓦斯ストーブの傍へ引寄せて、椅子に腰をおろして、煙草に火を點けて、戶口の方を見やつてゐる。

間もなく、瀬川英三（今村と同じくらゐな年輩で、顏付は彼れよりも紳士らしく見える）が、着流しで、ノロノロと入つて來る。

「ヤア」と、どちらも愛嬌笑ひを浮べて、快く挨拶する。

瀬川（椅子に腰をおろして）今日は家にゐないだらうと思つてゐたのに。……

今村　だつてまだ早いぢやないか。おれは今起きて朝飯を食べたばかりだよ。昨日うちは日曜も祭日もなかつたのだから、今日は久振りの休日で、思切り朝寢をしようと思つてゐたのだが、[illegible]

[illegible]

瀬川　なに、僕が不思議に思つてるのはね、君が昨夕この寢室に寢たことなんだ。

今村　ホウ。詰らないことを不思議に思ふんだね。僕は近來この寢臺以外の寢床で眠つたことはないよ。いくら夜がおそくなつても、ちやんと此處へ歸つて來て、安眠を樂むのだ。

瀬川（疑つてゐるやうに）それは本當なのかい。本野や新見の話によると、君はこの頃秘密で天國を見つけてるらしいと云ふことだが。

今村　秘密の天國といふのは何だい。

瀬川　何處かに我々に隱れて潜り込む穴を見つけてるらしいと云つてる。君の態度が少し變だと云つてた。

今村　だが、天國と穴とは明暗の差が非常に違ふぢやないか（眞面目な態度で）おれはね。この頃、君達の伺ひ知らない天國が、雲の絶え間にちら〱見えるやうな氣持になつてゐるんだがね。それは、君達の想像してるところとは、全然無關係なんだらうよ。

瀬川　いやに勿體ぶつてるぢやないか。……本當に君は孤獨に安んじて暮してるのかい。

今村　男も獨身でゐると、傍の者がいろ〱に邪推を廻して呉れるんだね。しかし、何とか云つて貰える間が花だと喜んでゐてい ゝ譯だらうな。

瀬川　邪推といふ言葉は少し荒過ぎるよ。僕は噂を聞いて喜んでたのだから。……相手が何者であらうとも、君を惹付ける者がこの世に出て來たことは結構な譯ぢやないか。

今村　それで、お寒いのに。年末で忙しくもあらうのに。早くから探索にやつて來たといふのかい。御苦勞樣だね。

瀬川　いや、僕の爲めには、君が家にゐて呉れた方がよかつたのさ。

今村　どうして？（相手の全身を注意して）今日は暇なのかい。おれは今日は、ゆつくり君のお相手をしちやゐられないのだ。

瀬川　ハヽヽ。さつきは暇らしい口を利いてたくせに。……しかし、僕も今日は、いつものやうに長つたらしく、お邪魔はしないよ。これで、なか〱用事が溜つてるんだからね。御存じの通り、僕はヤクザな荷物を脊負つてるんだから、年の瀬を越すのは容易ぢやないのさ。

今村　ハヽヽ。お株がはじまつたね。年末になると、一度は君に聞かされなきやならない臺詞なんだね。………君は不斷は猫をのばして氣樂に飛廻つてゐながら、一年に一度の愚痴はどうしてもこぼさなきや收まらないのかい。……君は顏は神經質の相をしてゐながら、腹の中は無神經なんだね。

瀬川　假りにさうだとすると、僕は君に正反對なんだね。しかし、無

神経な僕でも、この年末にはぼんやりしちやゐられないんだ。……なに大したことぢやないんだけれどね。

今村 おや、おれに御用金を押せつけようと云ふんだね。(微笑を洩らして)君にいやな思ひをさせたかないが、今度だけは御免を蒙りたいよ。

瀬川 僕の方では今度だけと云ひたいんだが……(急に哀願の弱々しい様子を現はして)實はかういふ譯なんだよ。

今村 (慌たゞしく遮つて)その事情は聞かないことにしよう。

瀬川 一時僕の信用を救つて呉れさへすればいゝのだ。決して君に迷惑を掛けやしないよ。

瀬川は、テーブルの一隅へ何氣なく目を向ける。今村はそれを氣にして横目でそちらを見る。

今村 その話は今日は許して呉れ。(頑なゝ態度を見せて)一錢一厘も他人に御用立する譯に行かないんだ。……どうかおれの決心を破らせないようにして呉れ。

瀬川 そりや強いてとは云へないがね。僕の要求は僅かなものなんだよ。

今村 その金額も聞かないことにしよう。

瀬川 君は今日はひどく不機嫌らしいやうだが、どうかしたのかい。

今村 おれが機嫌が悪い？さう見えるのかい。……おれは昨夕ぐつすり眠つて、今朝はこの上にないいゝ氣持で目を醒ましたのだよ。今朝おれの顔が御機嫌が悪かつたり窶れたりしてるやうぢや、おれの世も末になつた譯だが、さうぢやあるまい。君の目がどうかしてる所爲だらうよ(顔を相手の方へ突出して、笑ひを洩らしながら)まあよく見て呉れ。おれの顔には、君がさつき云つた大阪の後光でも差してやしないか。

瀬川 (わざと生眞面目に相手の顔を覗込んで)顔は不機嫌の君の顔に違ひないがね。……どうも僕の親友の今村陽一に會つてるやうな氣がしないよ。……あの今村陽一なら僕の年末の窮迫を聞いて呉れない筈がないから。

今村 それでいゝんだ。今日のおれは、昨日のおれぢやないんだからね。

瀬川 それはどういふ譯だ？まさかTA會社を辭職して、斷然に自分の腕で何かやり出さうといふのぢやあるまいな。さういふ噂はまだ聞かなかつたやうだが。……昨日の君が今日の君でないとは變だね。

瀬川はさう云ひながら、テーブルの一隅が氣になるらしく、自然にそちらへ目が惹かれる。今村も相手の目に誘はれたやうに、思

らず／＼そちらへ目を注ぐ。と、そこへ、老婢が扉を叩く。

今村　何だ？

老婢、扉を開けて顔を出す。

老婢　新見さんからお電話で御座います。

今村（舌打ちして）おれが家にゐると云つたのかい。何の御用だか、お前が代りに聞いてお見れ。

老婢　御用をお伺ひいたしましたら、旦那様に電話口まで出て頂きたいと仰有いました。

今村　煩いな（不機嫌な顔をして云つたが）ちよつと失敬（と、瀬川に向つて云つて、慌たゞしく、老婢を突飛ばすやうにして出て行く）

老婢、扉の側でまご／＼してゐる。

瀬川（振返つて）此方の旦那様も、大層氣が短くなつたやうだね。やはり、奥さんがゐなきやいけないね。

老婢　左様で御座いますとも。先の奥さんは大層お優しかつたさうですが、此方へはお戻りにならないんで御座いませうね。

瀬川　あゝ。前の奥さんは、この頃は異つた旦那様を有つてるやうだから、此方へ戻つて來る氣遣ひはないよ。

老婢　左様で御座いますか。

老婢は、まだ何か話したさうにしたが、瀬川が顔を轉じて取合はないので、出て行く。

瀬川は、手を伸して、テーブルの上の煙草を取つて火を點けながら、テーブルの一隅に目を留める。そして、疑ひを起して、顔をそちらへ持つて行つて、新聞紙の隙間を覗き、それからそつと中を見て驚く。……扉の方を氣にしながら、震える手で札束を取上げて、一枚だけそつと引出す。……そして、元の通りに新聞紙で蔽はんとしたが、また別の札束を取上げて、そのうちから一枚だけそつと引出す。……も一枚引出さうとしたが、それは思止つて、新聞紙で元の通りに蔽うて、元の座に腰を掛けて、二枚の百圓紙幣は袂の中に入れる。……そして、首垂れて煙草を吸ひながら、時々上目使ひをして、札束の方を見入つてゐる。

そこへ、今村は慌たゞしく入つて來て、またテーブルの方へ目を留めてから、椅子に腰をおろす。

瀬川　君は今日は、何處へも出ないんだね。

今村　ムン。今日は大事な調べ物をしなきやいけないんだ。暇なら君を饗應したいんだが、まあ明けてからにしよう。折角來て呉れたのに氣の毒だつたね（相手と話すのに氣乘りがしないらしく）書生が朝から出掛けてるので、老婢一人で忙しがつてゐて、お茶も差上げないで。……。

瀬川　なあに。僕もいろ〳〵用事を抑へてるんだから、これでお暇しよう。（椅子から離れて）君も過去つたことはいゝ加減で忘れて、新たに妻君を貰つたらどうだ？　僕なんかこそ、かういふ獨身生活を見ると羨ましくなるが、君は温い家庭を有つた方がいゝだらうね。

今村　ハヽヽヽ。そりや變な理窟だね。おれと君と、そんなに人間が違ふのかい。

瀬川　僕は貧乏だから。

ふと、歸りを急ぐやうに扉の外へ出て行く。

今村は、客を見送つて出たが、間もなく、戸見田はつ子（二十五歳。容貌風姿は派手であるが、服裝は簡素である）を従へて入つて來る。

はつ子は、珍らしいところへ來たやうな感じを現はして、あたりを見廻す。

彼女は、數年前離別した今村の妻の從妹であるが、素質は甚だしく相反してゐた。兩親や親戚の勸告を斥け、二三の青年の求婚をも斥けて、今まで獨身主義を保つてゐて、學問で自活しようとしてゐた。英語を學び佛語を學び、宗教にあこがれ文學を嗜んでゐた。今村は、妻と別れた前から、彼女に心を惹いてゐたので、この一二年來は、ことに彼女を念頭に置いてゐた。女といふ女のうちで、誰れにも勝つて彼女を自己の空想に描いてゐた。

今村　さあ、此處へお掛けなさい（と、今まで瀬川の腰掛けてゐた椅子を、もつと自分の方へ引寄せて）階下は寒かつたでせうね。

はつ子　えゝ。此處は温かですこと。（立つたまゝ部屋の中を見廻して）ここなら落着いて御勉強が出來ますわね。

今村　勉強？　學問をするのにいゝ部屋だと云ふんですか。はじめてここの部屋を見てさう云ふのは、あなたらしい言葉だね。しかし、わたしは、横文字でも漢語でも、文字を刷つた本なんかを讀む人間ぢやないんだ。……わたしの新しい寢室をお目に掛けようとも云へないもんだから、書齋へお招きしようと云つたのだが、御覧の通り、書物らしい書物は一冊もないんだよ。………まあ、その椅子へお掛けなさい。

はつ子　えゝ。（椅子に腰をおろして）ストーブのせいばかりぢやなくつて、何だか温かさうなお部屋ね。以前のお家は何だか陰氣で寒さうに思はれたぢやありませんか。

今村　それは、あなたの氣のせいだよ。……以前の家のことなんか思出すのもいやだが、……でも、あなたは今日、よく約束を違へないでやつて來ましたね。

はつ子　あなたこそ、よくお家にゐらしつたわね。……先日ホテルでわたしにお約束なすつたことは、戯談ぢやないかと、後で疑つてゐましたのよ。あんなことを本氣にして訪ねて來る馬鹿があるかと云はれさうに思つてました。

今村　あれを戯談にするやうぢや、あなたはまだ、わたしの本性をよく知らないんだね。

はつ子　無論、あなたの本性なんか、わたしに分りつこはありませんわ。わたしは、御存じの通りの世間知らずなんですもの。年齢だつて、明けて二十六にしきやならないぢやありませんか。あなたのやうな、歳を取つた男子の心なんか、とても分りませんわ。

今村　二十六が女の年齢として幼稚な方なのか知らん。(相手に見惚れるやうに)もう爛熟期に入りかける頃ぢやないかな。

はつ子　女が二十六にもなつて若い氣でゐるのを變に思つてゐらつしやるの？　……でも、他人はどうでも、わたしはこれから、面白い世が見られさうに思はれてなりませんの。

今村　それはいゝことです。

はつ子　その案内者の一人があなたゞつてことを、わたしは面白いと思つてますのよ。

今村　面白いといふよりも皮肉な感じがすりやしないかな。

はつ子　先日うちから、いろ／＼な者を見せて頂きましたわね。十幾年も前に、佛蘭西生れの天主教のお爺さんに、片言の日本語で聞せて貰つた西洋の話よりも、もつとわたしには珍らしく思はれましたのよ。

今村　さうかねえ。わたしには何でもないことだつたが、はつ子さんには、そんなに珍らしかつたのかな。ホテルのダンスなんかゞよつぽど面白かつたのだな。

はつ子　何とかいふ鳥屋で御馳走になつたことも夢のやうに思はれますわ。

今村　ホウ。そんなものかな。

はつ子　これからはもつと生々した日を送りたいと、わたし塚田さんにも話してゐますのよ。

今村　あなたがよく褒立てる塚田さんとかに一度引合せて貰はふかね。そのうち晩餐を一しよに食べてもいゝ。

はつ子　でも、あの人はあなたにお引合せしない方がいゝかも知れませんの。

今村　どうして？　哲學研究者と、わたしのやうな俗物とは話が合はないと云ふのかね。

はつ子　えゝ。あの人にあなたの感化を受けさせたかありませんわ。

今村　ハヽヽ。ぢや、あなたゞけは、わたしの悪い感化を受けてもいいつて云ふんだね。……まあ、そんな話は後廻しにして、先日の約束が戯談でなかつた證據を御覧に入れようか（ふと氣づいたやうに、扉の方を見て、獨言のやうに）こんなところを老婢にでも見られちやたまらない。

さう云つて立つて、扉の鍵をおろして來る。はつ子は、稍々不安を感じたらしい顔して扉の方を見る。それに目を留めた今村は、微笑を洩して、

今村　この部屋へ婦人のお客を迎へたのは、あなたがはじめてなんだ。

はつ子　今は奥さんはゐないし、この部屋はあなたのために、清淨潔白な書齋でもあるし、寢室でもあるといふ譯なのね。（氣取つて云ふ）

今村　しかし、部屋の主人の心が、淸淨だか何だか分らないからね。（元の座に就いて）これがあなたにお約束した代物です（と云つて新聞紙を掩ひ退けて、机の一隅から、はつ子の側に近いところへ、すべての札束を移して、無造作に）これで、丁度一萬圓ある譯だ。よく數へて御覧。

はつ子（異様なものを見せつけられたやうに[illegible]めて）わたし、一度だ[illegible]百圓紙幣といふものを見たことがありませんのよ。

今村（得意らしく）それは、まあわたしの一年間の全収入見たいなものだ。……あなたは勝手に自分の懐中へでも袂へでも入れて持つて行つていゝよ。しかし、女がそんなことをして金を持つて行く譯には行くまいな。後で風呂敷でも貸して上げよう。

はつ子　一萬圓と云ふと、この百圓紙幣がこゝに百枚も重なつてある譯ね。

今村　極つてるさ。念のために改めて御覧な。

はつ子　でも、これがあなたの全財産てことありませんわね。

今村　そんなことはどちらでもいゝから今からあなたの物にしたさい。決して玩具の紙幣ぢやないから、銀行へ持つて行つて預けたら、預金帳に一萬圓と書込んで呉れるよ。

はつ子　わたしこれを頂いて、あなたにどうお禮をしたらよろしいの？

今村　それよりも、あなたはその金をどうしようと云ふの？　何に使はうと思つてゐるの？　毎日一萬圓々々々と、あなたは熱心に一萬圓を望んでゐるから、その使ひ途を訊ねたら、それだけの金をちやんと自分の手に持つた時でなきや、使ひ途を話したつて詰らないとおつしやつたぢやないか。

[illegible]

だけ此處へ用意をして下すつたの？

今村　さう思つてゐてもよろしい。

はつ子　わたし、一萬圓で試驗をされますのね。……わたし、今思出してよ。二三年前にある婦人雜誌に、何人かの女に、一人當て百圓づゝやつて、勝手に買物をさせた記事が出てゐましたわね。

今村　それは面白い思ひつきだね。はつ子さんなら何を買ふ？

はつ子　さうね。わたし、百圓ばかりなら、買物しないで、救世軍の社會鍋へでも入れつちまひますわ。

二人はこん話を事もなげた調子で取りかはしながらも互ひに胸に一物を有つて、相手の心を探り合つてゐる。

はつ子（目を上げて相手を見据ゑて）あなたたなら何をお買ひになつて？

今村　さうさ。わたしなら何を買ふだらうか。お正月が近くなつたが、わたしは何も買ひたいものはなささうだよ。

はつ子　嘘を仰有いよ。

彼女の言葉は鋭い。今村はギヨツとする。意外な感に打たれたのだ。

今村　嘘を仰有い？（と、相手の言葉を眞似て訊返す）

はつ子（冷笑を洩らして）あなたは、この一萬圓でわたしを買收しようと思つてゐらつしやるでせう。わたしの靈魂までもあなたの奴隸にしようと企んでるんぢやなくつて？

今村　ハヽヽ。何を云ふかと思つたら、平凡なことを云つてるんだね。

はつ子　あなたには、平凡なことでもそれが本心なんでせう。……あたし、あなたの本心が怖かないけど。

今村　靈魂なんていふ古くさい言葉の濫用は、あなたのお師匠さんの宣敎師の感化として、いつもおとなしく承つてゐたが、あなたが欲しいと云つた一萬圓を、耳を揃へて提供したからと云つて、直ぐにわたしがあなたを買收する下心を有つてると思ふのは、あんまり世俗的だね。はつ子さんにも似合はない世俗的な考へだね。（悠然として云ふ）

はつ子　ぢや、わたしが先日一萬圓欲しいと云つたから、今日一萬圓わたしに下すつたのね。たゞそれだけのことなんですね。

今村（相手の言葉は聞流して、獨言のやうに言葉を續けて）わたしが獨身の淋しさに耐へられないで、女が欲しくなつたのなら、一萬圓出しや、自分の好みにかなつた女を、幾らでも買收されるんだよ。

はつ子（相手に向つて云ふよりも、自分で自分に云つてるやうに）わたし、あなたが大金を無雜作にお出しになつた氣持が分らない。

……この部屋までも夢に見た家のやうに見えてならない。

今村　この金があなたにはそんな不思議に見えるのかな。銀行の出納掛は毎日不思議なものばかりいじくつてる譯だ。

はつ子　隨分不思議ですのよ。（札束と今村とを見比べて）あなたの奧さんだつたさよ子姉さんが、あなたは不斷儉約がお好きで、金錢のことについちや、隨分嚴格だと云つてゐたんですもの。

今村　あいつ、わたしをケチン坊だと、親類中へ吹聽してゐたんだな。

はつ子　ケチン坊だなんて、そんな汚い口は利きやしなかつたんですけど、……でも、一萬圓といふ大金を、あなたがさよ子姉さんの前へ投出して、勝手に使へと仰有るやうだつたら、あの人もこちらのお家を出て行きやしなかつたでせう。

今村　ぢや、あいつは好きなやうに金が使へないのが不平で、わたしの家を飛出したと、あなたは思つてるんだね。それをわれ／＼の夫婦別れの理由だと、あなた達は思つてるんだね。（ふと感情を昂奮させていま／＼しさうに云ふ）

はつ子　そればかりぢやないでせうけれど。

今村　賤な根性だと云ふんだね……（いやな考へを振拂つて）まあ、今日はあいつと離縁した話はしないことにしよう。

はつ子　でも、あの人のことを心に思つてゐらつしやればこそ、あなたはわたしに親切にして下さるんぢやないでせうか。

今村（心を動して）これは妙なことを聞くものだ。……ぢや、他所へ再婚してる女に、わたしが未練を殘してると云ふんだね。隨分見くびられてる譯だね。

はつ子　離別した奧さんを心に思つてゐらつしやると云つたつて、よくお思ひになつてるといふ意味にお取りにならなくつてもよろしいのよ。……お金のために、六十にも近いお爺さんの所へ行つたあの人を、あなたとつて、よくお思ひになつちやゐないでせうから。

今村　はつ子さんもなか／＼穿つたことを云ふ。世間知らずぢやないね。……しかし、まあそんなことはどちらでもいゝさ。

はつ子（獨言のやうに）あの人が憎さに、あなたはわたしに一萬圓といふお金を下すつたのか知ら。

今村　さういろ／＼に考へて見なくつてもいゝだらうに。

はつ子　あの人が憎さにこれを下すつたのなら、わたし快く頂戴しますわ。

今村（驚いて）どうしてです？

はつ子　わたしは、このお金でさよ子姉さんに復讐しますわ。あの人は、あなたのためにもわたしのためにも共同の敵なんですもの。

今村　共同の敵とは愛嬌だね。悪に御礼わたしはあいつに復讐しようなんて思つてやしないよ。

はつ子　ぢや、頂けませんわね。理由のないお金なんだから。

今村　あなたが欲しいと云ふ。わたしが上げようと云ふ。事は簡單で、それ以上、理由もへちまも入らないぢやないか。

はつ子　でも……

彼女は、物欲しさうな目で札束を見るやうになる。

その時、扉のノックが聞える。

今村は、はつ子に小聲（見物には聞えないほどの聲）で注意して、新聞紙で札束を蔽うてから、扉へ近づく。不機嫌な顔して扉を開けて、そこから顔を出した老婢に向つて、

今村　何だ？　またお客を取次いだのか（と叱りつける）

老婢　郷里から弟さんがいらつしやいました。旦那様にお伺ひするまで玄關にお待たせしときました。

今村　弟が來た？　階下の座敷へ通して置け。

老婢、返事もしないで引込む。

はつ子　弟さんがいらしつたのなら、わたしはお暇しなきやなりませんわね。

今村　なに。かまやしないよ。弟は二三時間他所へやつとくことにしよう。あなたは此處にぢつとしてゐらつしやい。

今村、扉の外へ出て行く。

はつ子、獨りになつたことを意識してから、札束の一つを手に取つて、夢見るやうに見惚れる。それから、一萬圓全部を[illegible]その顔を並べて、夢見るやうに眺め入る。[illegible]ぶ。やがて、反省したやうに、札束を下へ戻して、立上つて、扉の外へ出る。

間もなく今村が入つて來る。はつ子のゐないのを知つて、呼鈴を押す。

老婢、入つて來る。

今村　此處にゐたお客様はどうしたか。

老婢　女の方で御座いますか。あの方は只今お歸りになつたやうで御座いました。

今村　歸つた？（不機嫌な顔して）おや、それでいゝ。……お前はあちらへ行つといで。

老婢、迂散らしい目で、主人の顔を、それとなく見ながら出て行く。

今村、椅子に腰をおろして考へに沈む。

（一）ノ二

それから一時間くらゐ後の事。

今村家の女中部屋。

老婢、自分の持物を入れた行李の側で着物を着替へようとしてゐる。

そこへ、書生大島新吉（二十餘歳）が入つて來る。

老婢　ア、大島さん。丁度いゝところへ歸つてお呉れだつた。

書生　老婢さんは、お召替えになつて、これから何處かへお出掛けになるのかね。

老婢　娘のところから、大急ぎでちよつと來て呉れつて電話が掛つて來たのです。年末だから何か相談があるんだらうよ。

書生　娘さんは電話なんか掛けないで、自分で此方へ遊びに來たらいいだらうにね。

老婢　年末で忙しくつて手が離せないんでせうよ。

書生　表へ出ると、世間は忙しさうだが、この家は今年はお正月の仕度も簡單で張合ひがないね。

老婢　さういへばね、大島さん。あなたが歸つて來なすつたあと、間もなく、美しい若い女のお客様がいらつしやつたんだよ。

老婢は興ありげにさういひながら、古い着物を脱いで新しいのに着替へようとしてゐるうち、うつかりして、帶の間から百人札を一枚落す。書生は目敏くそれを目をつけて驚いた方、老婢は氣づかないらしく、熱心に話をつゞける。

老婢　堅氣なお嬢様らしかつたけれど、何だか譯がありさうなの。あなたに見せたかつたよ。……旦那様のお居間で鍵をおろしてしまつて、長い間二人で、ストーブの前に差向ひで話込んでゐたのぢやないかね。あなた何者だと思ひなすつて？

書生　さあ。僕は見ないから分らないね。（話には身が入らないで、百人札の方をそつと見下す）

老婢　外のお客様は玄關から追返して、二人はいつまでも、笑つたり泣いたりしていゝ氣になつてるんだからいやになつちまふよ。

書生　おや、そんな女が來るから、僕を邪魔にして、どうでもいゝやうな使に出したんだね。

老婢　さうですとも。わたしがお茶を持つて行つてさへ、旦那様は怖い目をして、早く彼方へ行けつて追出さうとするんだもの。

老婢にまた百人札に氣づかないで、話に力を入れるので、書生はもどかしがつて、

書生　老婢さん、足下に大變なものが落ちてるぢやないか。

老婢　エツ（と云つて、足下を見ると、顔色を變へて、慌てゝ拾つて袂へ入れて、急いで着物を着替える）

書生　僕がまだお目に掛つたことのないやうな物ぢやないか（冷かすやうに云ふ）

老婢（着物を着替えてゐるうちに、心を鎭めて、空呆けた顔して）これはね。わたしが、小石川のお屋敷に御奉公してゐた時分に、お給金の殘りを何年も溜めて、やつとこれだけになつたのさ。娘の相談といふのも、年末のことで、大概分つてゐるから、大事な／＼虎の子を持つて行かうと思つてるんですよ。

書生　さうですか。……しかし、不景氣な年末に羨ましいことだな。

書生がさう云つて、部屋を出て行かうとすると、老婢は引留める。

老婢　まあお待ちなさいよ。直ぐに旦那様のお部屋へいらつしやるの？

書生　あゝ。使の返事を云はなきやならんから。

老婢　今、旦那様のお部屋へ行きなさらない方がいゝんだよ。

書生　だつて、その奇麗なお客様はもうゐないんだらう。

老婢　お客様はもう行つちやんだけれど、旦那様は、あとで次第でお眠つてゐらつしやるんだから。

書生　なに、戸口で一言御返事をしといたらいゝんだよ。

書生がさう云つて行きかけると、老婢は、ふと手を掴へて力を入れて引留める。

書生（不思議さうに）僕をどうするんだね。

老婢　あなたは、わたしが持つてるたつた一枚のお金を、疑つてゐなさるんだね。旦那様に云付けようと思つてなさるんだらう。

書生　僕はそんなことを思つてやしないよ。

老婢　あなたはわたしが泥棒したやうに思つてるに違ひない。

書生　驚いたな。僕はそんなことは思つてもゐないのに。……その新しい、今銀行から出して來たばかりのやうな百圓紙幣は老婢さんが小石川のお屋敷に奉公してゐた時のお給金なんだらう（揶揄ふやうに云つて、出て行きかける）

老婢、慌てゝ留めようとして、書生の羽織を掴む。羽織の袖が破れる。

書生（怒つて）オイ止さないか。僕の大切な一張羅を破つてどうするんだ。僕は何處へも出られなくなるぢやないか。……ひどい婆あだ。

老婢（涙を浮べて、しを／＼して）どうも濟みません。（跪ついて詫びて）わたくしが惡かつたんです……どうぞ旦那様には内分になす

つてお喫んなさいまし（百圓札を袂から出して）これはあなたにお返しいたしますから。

書生 僕に返すつたつて、それは僕の物ぢやないよ。僕は百圓札なんか持つてゐたことはないんだよ。

老婢 あなたが旦那様に秘密で、元の所へお戻しなすつてお喫んなさいまし。

書生 元の所つて、どこにあつたのだ？。

老婢 旦那のテーブルの上に、かういふお札がどつさり重なつてゐるんです。わたしは旦那様が便所にお下りになつた間に、そのうちの一枚だけそつと抜いて取つたので御座います。娘にお正月着が買つてやれると思ひまして。

書生 ホウ、妙だな。そんなに百圓札を積んでどうするんだらう？。

老婢 さつきの女のお客様におやりになる様子で御座いました。

書生 （憤慨したらしく）そんな大金を女にやるんだ？ いま〳〵しいな。……僕には年末の小使錢を、この百圓札の十分の一も呉れもしないで、（老婢の手から紙幣を取つて見詰める）

そこへ、呼鈴が鳴る。

書生 二衛で呼んでるよ。老婢さん行つてお出でよ。僕が云はれても知らん顔してればいゝよ。僕は決して大將に告口はしないよ。

老婢 どうも有難う御座います。

老婢は、書生に對して、言語も動作も次第に卑屈になる。

書生 （得意然として）僕は此處で待つてるから、安心して行つてお出でよ。大將があなたを疑つたら、僕が辯護をして上げよう。

老婢 何分よろしくお頼み申します。

呼鈴また鳴る。老婢おど〳〵しながら出て行く。

書生、百圓札を見詰めてから袂へ入れる。

だしぬけに襖が開く。書生ビックリする。

老婢の娘、おきぬ（二十歳未滿の可愛らしい女）入つて來る。

娘 アラ（書生を見て極りを悪がる）

書生 （微笑して）お母さんはゐるよ。

娘 （叮嚀にお辭儀をして）さつきお勝手の方で二三度聲を掛けましたのですけれど。

書生 さうですか。……お母さんはこれからあなたの所へ行くと云つて、荷物を整へたところなんだよ。

娘 母はあたしに御用があると申しまして？

書生 おきぬちやんの所から何時か歸つたと云つてたよ。

娘 アラ。あたし、何時なお掛けもしませんね。

書生 （躊躇して）嘘、……だつて……

娘　どうした間違ひなんでせうか。

書生　まあいゝよ。……お母さんはね、あなたにお正月の着物を買つて上げると云つてたよ。

娘　さう？（書生の顔を見て）あなたがいゝ加減なこと云つてゐらつしやるのね。

書生　嘘だか本當だか、今にお母さんが二階から下りて來たら分るよ。おきぬちやんには春着が出來ても、僕もこの通りだ（ブラ〱に綻びた羽織の袖を見せる）

娘　アラ、どうなすつたの？

書生　老人に縋りつかれて破られたのぢや有難くないね。こんなになつてちや戸外へ出られやしない。きぬちやん縫つて呉れないかね。

娘　えゝ。縫つて上げますわ。針箱は何處にあるか知ら。

娘が押入を開けて、針箱を捜してゐるところへ、老婢入つて來る。あたり前の顔付をしてゐる。

老婢　おきぬ、いつ來たの？

書生　さつきから勝手口に來てゐて立聞きをしてたんだつて。

老婢（眉を顰めて）來る時には電話を掛けろと云つといたのに。

書生　ハヽヽ。まあいゝさ。……大將は何かいやなこと云つたのかね。

老婢　いゝえ、何も云つたことは御座いません。

書生　それはよかつた。

書生　お午御飯は二階のお部屋で召上るさうです。

書生　その用事だつたのか。おや、よかつたね。……僕は今羽織の綻びを、きぬちやんに縫つて貰ふことにしたのだ。

老婢、間が悪さうにする。書生、羽織を脱いで、おきぬに渡す。

書生　ぢや、お頼みします。

娘　このお羽織いゝ柄ね。どうしてこんなに綻びたんでせう。アラ、ここのとこは破れてますわ。

書生　どうにか誤魔化しとけばいゝんだよ。（老婢に向つて）あなたは、きぬちやんにお正月着を買つて上げると云つてゐたね。これから、一しよに三越へでも何處へでも行つて、一つ奮發していゝものを買つてお上げな。大將が許して呉れたら、僕もお伴をしてもいゝね。

老婢（溜息を吐くやうにして）お金なんかありもしないのに。

書生　小石川のお屋敷のお給金の貯蓄を出したらいゝぢやないか（鷹揚な調子で云つて、袂から百圓札を二枚二人の前へ抛出す）

娘（吃驚して）アラ。大きなお札（と云つて、取出して見る）

つてお呉んなさいまし（百圓札を袂から出して）これはあなたにお返しいたしますから。

書生　僕に返すつたつて、それは僕の物ぢやないよ。僕は百圓札なんか持つてゐたことはないんだよ。

老婢　あなたが旦那様に秘密で、元の所へお戻しなすつてお呉んなさいまし。

書生　元の所つて、どこにあつたのだ？。

老婢　旦那のテーブルの上に、かういふお札がどつさり重なつてゐるんです。わたしは旦那様が便所にお下りになつた間に、そのうちの一枚だけそつと抜いて取つたので御座います。娘にお正月着が買つてやれると思ひまして。

書生　ホウ、妙だな。そんなに百圓札を積んでどうするんだらう？。

老婢　さつきの女のお客様におやりになる様子で御座いました。

書生（憤慨したらしく）そんな大金を女にやるんだ？　いま／＼しいな。……僕には年末の小使錢を、この百圓札の十分の一も呉れもしないで、（老婢の手から紙幣を取つて見詰める）

そこへ、呼鈴が鳴る。

書生　二階で呼んでるよ。老婢さん行つてお出で。何か云はれても知らん顔しゐればいゝよ。僕は決して大將に告口はしないよ。

老婢　どうも有難う御座います。

老婢は、書生に對して、言語も動作も次第に卑屈になる。

書生（得意然として）僕は此處で待つてるから、安心して行つてお出でよ。大將があなたを疑つたら、僕が辯護をして上げよう。

老婢　何分よろしくお賴み申します。

呼鈴また鳴る。老婢おど／＼しながら出て行く。

書生、百圓札を見詰めてから袂へ入れる。

だしぬけに襖が開く。書生ビックリする。

老婢の娘、おきぬ（二十歳未滿の可愛らしい女）入つて來る。

娘　アラ（書生を見て極りを惡がる）

書生（微笑して）お母さんはゐるよ。

娘（可憐にお辭儀をして）さつきお勝手の方で二三度聲を掛けましたのですけれど。

書生　さうですか。……お母さんはこれからあなたの所へ行くと云つて、着物を着替えたところなんだよ。

娘　母はあたしに急用があると申しまして？

書生　おきぬちやんの所から電話が掛つたと云つてたよ。

娘　アラ。あたし、電話なぞ掛けやしませんわ。

書生（驚いて）[illegible]

娘　どうした間違ひなんでせうか。

書生　まあいゝよ。……お母さんはね、あなたにお正月の着物を買つて上げると云つてたよ。

娘　さう？（書生の顔を見て）あなたがいゝ加減なこと云つてゐらつしやるのね。

書生　嘘だか本当だか、今にお母さんが二階から下りて来たら分るよ。おきぬちやんには綺麗な着物が出来ても、僕もこの通りだ（ブラ〳〵に綻びた袷の袖を見せる）

娘　アラ、どうなすつたの？

書生　老人に縋りつかれて破られたのさ。有難くないね。こんなになつてちや戸外へ出られやしない。きぬちやん縫つて呉れないかね。

——（間）——

娘　えゝ。縫つて上げますわ。針箱は何処にあるか知ら。

娘が押入を開けて、針箱を捜してゐるところへ、老婢入つて来る。あたり前の顔付をしてゐる。

老婢　おきぬ、いつ来たの？

書生　さつきから勝手口に来てゐてお辞儀をしてたんだつて。

老婢（眉を顰めて）来る時には案内を乞ふと云つといたのに。

書生　ハゝゝ。まあいゝさ。……大勢に何かいやなこと云つたのかね。

老婢　いゝえ、何も云つたことはありませんよ。

書生　それはよかつた。

書生　お母様は二階の[illegible]

書生　その時分だつたのかな。おや、よかつたね。……僕は今袷の綻びを、きぬちやんに縫つて貰ふことにしたのだ。

老婢、間が悪さうにする。書生、袷を脱いで、おきぬに渡す。

書生　おや、お休みしますか。

娘　このお袷いゝ解れた。どうしたことかたに縫つたもでせう。アテ、ここのところは破れてますわ。

書生　どうにか誤魔化しとけばいゝんだよ。（老婢に向つて）お前は、きぬちやんにお正月の着物を買つて上げると云つてゐたね。これから、一しよに三越へでも何処へでも行つて、一つ何でもいゝから着物を買つてお上げなさい。大分苦労し[illegible]たら、僕もお礼を上げるといゝね。

老婢（両目を[illegible]やうにして）私なんかありがたい[illegible]

書生　[illegible]

娘　[illegible]

書生　構ふことはない。使つちまふさ（と云つて、老婢に目くばせする）

（幕）

（二）ノ一

その日の午後。

下宿屋の一室。塚田鋭吉の部屋。

塚田は、私立學校の教師を勤めて生活して、哲學などの研究に耽つてゐる三十未滿の、温厚な、現代離れのした男子である。

この部屋には、今村の部屋とは違つて、數多の洋書が置かれてゐる。

彼れと戸見田はつ子とが、机の側の火鉢に向合つて坐つて、しめやかな話に耽つてゐるところ。

はつ子　あなたはどうお思ひになつて？

塚田　僕にはそんな心理狀態は分りませんね。

はつ子　わたしも、今村さんの云つたことは、無論戲談だと思つて、そのつもりで遊びに行つたのですけれど、先方では、商賣の取引でもするやうに、ちやんと、一萬圓を百圓紙幣で揃へて待つてるんですもの。わたし吃驚してよ。……それが[illegible]のよ。

塚田　それで、先方ぢやあなたに獻上しようと云ふのをあなたは辭退して、一萬圓を棄てゝ來たんですね。

はつ子　はつきり斷つて來た譯ぢやなかつたのですけど。……

塚田　でも、つまりは大金を見せて貰つただけで、それをあなたの懷中へ突込んで、そこに持つてる譯ぢやないんでせう。

はつ子　でも、まだ一萬圓を手に入れる可能性がありさうですのよ。わたし、話の途中で座を外して此方へお伺ひしたのだから。……わたし、此方へまゐる間に、電車の中でも歩いてる間にでも、そのことばかり考へてゐました。無條件でやらうといふ者を斷はるには及ばないと、思はれてたりませんの。

塚田　今日あなたの入つて來た時の樣子が、どうも變だつた。何かに魅せられてゐたやうでしたよ。一萬圓の力なんですね。……そんなに欲しいのなら、遠慮しないで貰つて來ちやどうです？

はつ子　あなたの批判力で判斷して、それがいゝと仰有れば、わたし、これから、大急ぎで行つて貰つて來ますわ。

塚田　僕は貰つていゝとも惡いとも云やしませんよ。

はつ子　だつて、わたしはあなたの優れた判斷力によつて判斷して貰かうと思つてますの。

塚田　[illegible]ない

な。

はつ子　だつて、わたしがそのお金を欲しがるのは、自分のためばかりぢやないんですもの。……あなたよつて、いつまでもこんな日當りの悪い陰氣な下宿屋なんかにゐらつしやらないで、小ざつぱりした氣持のいゝ家をお持ちになつたら、御勉强がよく出來ていゝに違ひないと思はれますわ。今村さんの新築の家の書齋は、そりや居心地がよささうですのよ。あなたもあんな書齋をお建てになるといゝんですわね。わたしがお伴しますから、あなたも一度あの書齋を見にゐらつしやいね。

塚田　いや、僕はこの部屋で結構です。他人の書齋を羨むのは詰らないことぢやありませんか。

はつ子　でも、書物を一冊讀みもしない人が、あんないゝ書齋を有つてゐて、あなたのやうな方が、こんな物置小屋見たいな書齋にゐらつしやるのは、不當なやうに思はれますわ。

塚田　一萬圓の書齋か。夢見たいな話だ。……それに、貰つた金をみんな僕の書齋の建築費にしてしまつたら、あなたは御自分のために使ふ金がなくなるぢやありませんか。

はつ子　さうね。ぢや、あなたの書齋の建築費は五千圓に負けて頂いて、殘りの五千圓で自分の身の廻りを飾ることにしませうよ。

塚田　それは、あなたからはじめて承る言葉ですね（厳然たる態度で）心靈の修養ばかり考へてゐたあなたが、自分の肉體を飾ることを考へだしたのは不思議に思はれますね。

はつ子　でも、神様から授つた身體は、美しく飾るのが、人間としての正しい道ぢやないんでせうか。わたし、この頃になつてさう思はれますのよ。

塚田（一層相手の身體に注意を向けて）それはさうかも知れませんね。あなたが當時の流行の衣服を着たところを見せて呉れるんですか。さよ子さんのやうな服装をしたところを。

はつ子（ふと氣色ばんで）さよ子姉さんは、この頃もよくあなたを訪ねて來るんでせう。

塚田　滅多に來ませんよ。來たつて、あの人と僕とだけぢや話のしようがないんです。

はつ子　どうだか分らないわ。

塚田　あんな世間的な樂みしか知らない人と、僕と話が合ふ譯はないぢやありませんか。

はつ子　わたし、先日まではさう思つてましたけれど、この頃はそんなことは信じられなくなりました。あなたも、奇麗な衣服に魅せられる方なのよ。

塚田　僕でもさうか知ら（考へる真似をする）

はつ子　考へなくつたつてさうなんです。……わたし、さよ子姉さんたんぎに馬鹿にされたかありませんわ。あの人、三十をよつぽど過ぎて、身體はお婆さんになりかゝつてるくせに、身装がいゝためばかりで、肌をのばして威張つてるんですもの。

塚田　あんた物質的な女と蔑視する氣があるんですか。今日のあなたはどうも不思議でならない。

はつ子（氣色ばんで）あなたはさよ子姉さんの外形に魅せられてらつしやるでせうけれど、わたしの肉體は決してあの人に劣つてやしないんです。たゞ美しい服装で飾つてるのと飾つてゐないとの相違があるだけなのよ。

塚田　僕はあの人に魅されてやしませんよ。あなたの邪推だ。

はつ子　邪推なら邪推でも好御座んすわ。……わたし、虚榮心のつよい女ぢやないんですけど、若い今のうちに着たいものを着て、自分のしたいことをしたいと思つてますの。それが補慢に類してもいけないことゝは思はれませんわ。

塚田（笑つて）理窟は理窟として、第一その一萬圓が無條件で手に入るんですか。それが根本の問題ぢやありませんよ。

はつ子（獨言のやうに一寸考へて）あの時躊躇なしに貰つて來ればよかつた。

塚田（獨言のやうに）目が醒めてよく見たら、百圓札が枯れつ葉だつたかも知れない。

はつ子　わたしは自惚れて云ふのぢやないんですけれど、一萬圓くらゐなお金は、誰れかゝら授つてもいゝと思はれますのよ。あなたよつてさうよ。……なぜさうお思ひにならない？

塚田　ハヽヽ。人間はそのくらゐな自信がなきや駄目ですね。……だけど、あなたには、それだけの價値があるんでせうけれど、僕はそんな人間ぢやなさゝうですよ。あなたに時々訪問して頂けるのを、分に過ぎた幸福だと思つてるんです。

はつ子　謙遜も度を過ぎると卑屈に見えてよ。

塚田（調子に乗つて）ぢや、明日の朝、洋行費の一萬圓くらゐ、誰れかが出して呉れると當てにして待つてゐませうか。今日は書籍の勘定が五千圓。明日は洋行費が一萬圓。さうなると、僕も運が向いて來た譯だ。ハヽヽヽ。

二人は、互ひに秘密を握いてゐるやうな風で顔を見合はす。

はつ子（ふと思出つたやうに）こんなこと云つてる暇に、わたし電話でも掛けときますわ（起上る）

塚田　何處へ電話を掛けるんです？

はつ子　今村さんへ（アタフタと出て行く）

塚田　一萬圓を引込められないやうにか。ハ、、、。

塚田が机の上の洋書を讀みかけてゐると、間もなく、襖の外から、「御免なさい。入つてもよくつて」といふ聲がして、渡邊さよ子が、裾模樣の派手過ぎるやうな衣服を着け、指環でも頭のものでも華美な光を放つた、女優見たいな樣子をして入つて來る。手に風呂敷包を持つてゐる。

彼女は、ある不行跡のために、今村の家を出た後、ある老いたる實業家の後妻として再婚して、以前とちがつた奢侈遊惰な生活をしてゐる。塚田とは、はつ子と同樣に、少年時代からの知合ひである。

さよ子　はつ子さんが來てるんでせう。

會釋して火鉢の側に坐る。塚田は快い顏をしないで、少し後しさりする。

さよ子　今、電話口に立つてる人の後姿がはつ子さんのやうでしたよ。來てるのね。

塚田　えゝ、來てゐます

さよ子　よく來るんでせう

塚田　さうでもありません。

さよ子　あの人はわたしを輕蔑して、わたしの家へはちつとも寄付かないんですよ。女は學問があると、あんなにお高く留りたがるんですかね。

塚田　さうでもないでせう。

さよ子　わたしは以前からはつ子さんが好きだつたし、今だつて惡意をもつてやしないのに、どうしたんでせう。わたしが時々此方へお伺ひするのが、あの人の氣に障るのか知ら。

塚田（極りの惡さうに）そんなことはないでせう。

さよ子　あなたとあの人とはよくお話が合ふんでせうね。學者同士だから。

塚田　そんなことはありません。

そこへ、はつ子が歸つて來る。襖を開けてさよ子の顏を見ると、思はず足を留める。さよ子、ニツコリして會釋する。はつ子、打解けぬ顏して、二人から少し離れて座に就く。

さよ子　もつと此方へお寄んなさいなね。

はつ子　えゝ

さよ子　暫くだつたわね。

はつ子　えゝ

さよ子　わたし、お正月の買物に三越と松屋とへ行つて來たのよ、あ

なたがお暇だつたのなら、お誘ひすりやよかつた。わたし、買物にでも、連れのあつた方が面白いのよ。

はつ子　わたし、今朝は大變忙しかつたのです。

さよ子　學校はもうお休みなんでせう。（風呂敷包を開けて反物を出して）わたし、この柄が塚田さんによく似合ふと思つたもんだから、氣紛れに買つて來たのよ。あなたどう思つて？

　はつ子、ふと緊張した態度で反物を手に取つて見る。

はつ子　こんなニヤケた柄が塚田さんに似合ふかしら。

さよ子　着物のことなんかあなたには分らないのね。大島なんかよりは、かういつたお召の方が、塚田さんにはよく似合ふのよ。寸法が分つてれば呉服屋に頼んで直ぐに仕立てさせるのだつたけれど。

塚田（當惑したやうに）僕はかういふいゝ衣服を着る柄ぢやないんですから、誰れか外の人にお上げになつちやどうです。

さよ子　でも、折角わたしが見立てて買つて來たのぢやありませんか。恥をかゝせるもんぢやありませんよ。

塚田　困りますねえ。

さよ子　何が困るんです？（反物を擴げて、塚田の肩に掛けて）はつ子さん、見て頂戴。よく似合ふぢやないの？

さよ子　わたし[illegible]

さよ子　いや味なんか云はないでさ。わたしが買つて來たこの反物を、あなたが年内に仕立てゝ、塚田さんのお正月着にしたらいゝぢやないの。

塚田　まあ、今度は辭退しませう。

　彼れは、はつ子の思惑をも憚つて、いかにも當惑したやうな態度を示す。

さよ子　へんな方ね。……わたしが、今日偶然見付けて買つて來た反物が、來年あなたの運の開けるお祝ひにはならないでせうか。……塚田さんとはつ子さんとお二人の間には、少しはいゝことがありさうに思はれるのに。

　塚田とはつ子は、極りの惡さうな表情をする。

さよ子　他人の好意のある贈り物は辭退するもんぢやありませんよ。百萬圓の財産でも、高が一反ばかりの反物でも、人の贈物だと思つて、快くお受けなさいな。

　はつ子は、さよ子の言葉にも、思はず感動する。しかし、二人は何とも返事をしない。

さよ子（朗らかな笑ひを浮べて）わたしを厚かましい者あつかひしなくつてもいゝぢやないの。わたしは碌でもない人間なんでせうけれど、塚田

[illegible]

わたしを毛蟲のやうに見下げたいやうにして下さいね。好いてる人に蔑まれちや、わたしだつて淋しくなるわよ。

塚田（生眞面目に）あなたを蔑視むなんてことはありませんよ。

さよ子　それでは、わたしの贈り物は快くお受けなさいね。何なら、はつ子さんが仕立てゝお上げになるといゝわ（はつ子の方を見て）さう云へばね、わたし今日松屋で珍らしい人に會つて感じたことがあるのよ。

はつ子　珍らしい人？（氣のない受答へをする）

さよ子　瀨川さんのことなの。あなたも知つてるでせう。あの人、奥さんを連れて買物に行つてゐたのよ。

はつ子　瀨川さんて方は、今村の兄さんのお友達なんでせう。あなたはその方と話をなすつたの？

さよ子　いゝえ。わたしの方ぢやかまやしないけれど、先方では遠慮したのか、顏を外らしてゐたの。先方でさうなら、此方から頭を下げて行つて、御機嫌を伺ふには及ばないから、わたしも知らん顏してゐたのだけれどね。年末に御夫婦連れで何を買ひに來たのかと氣になつたから、時々そつと見てると、わたし驚いたのさ。あの貧乏自慢の瀨川さんが、新しい百圓札を出して買物の支拂ひをしてるぢやないの。今銀行から引出して來たばかりのやうな、手の切れさうな百圓札を振りまはしてるから、わたし驚いたのさ。

はつ子　さう？（瀨川の話には何の感じも起さないらしく、冷淡に受答へをする）

さよ子　だつて、以前は年末になると、僅かなお金の無心に來てゐた人なんですもの。……この頃はいゝ仕事に有りついてるのか知ら。

はつ子　でも、この頃のあなたが、百圓ばかりのお金に驚くつてことありませんわね。

さよ子　百圓ばかりなんて、はつ子さんも氣が大きくなつたわね。

はつ子（ふと興に乘つたやうに）えゝ、わたし、百圓紙幣を一枚や二枚見たつて驚かなくなつてよ。

さよ子（意外に感じたらしく）えらいことね。……それから、わたしは三越でも、思ひがけない人に會つたのよ。何だか、今日は不思議な日のやうに思はれてならないの。

はつ子　さう？（それを聞きたがらうとはしない）

さよ子　元、今村の玄關にゐた大島といふ書生のことなのさ。今もまだゐるのかも知れないけれど。……その男が、五十くらゐな女と、可愛らしい二十くらゐな娘とを連れて買物に行つてゐたのよ。わたし、見つからないやうに氣をつけてそつと見てゐると、今度も驚かされたのさ。だつて、瀨川さんの時と同じやうに、新しい百圓

札を出して支拂ひをしてゐるんですもの。……今年の暮は世間一般にそんなに景氣がいゝのか知ら。わたし、不思議に思はれてならないの。

はつ子　でも、百圓ばかりのお金に驚くことはないでせう。

さよ子　今日、はつ子さんは變ね（不思議さうに相手を見詰める）

はつ子　わたし、お金なんか、欲しいと思つたら、何處からか授かるやうに思はれてよ。瀬川さんだつて何處からか授かつたに違ひないわね。

さよ子　今までのはつ子さんとは思へないやうなこと云ふぢやないの。……瀬川さんも、瀬川さんの奥さんも、書生の大島も、身裝は、昔とちつとも變つてやしなかつたのよ。

はつ子　身裝はお金さへ出せば、今直ぐにでも變へられますわよ。塚田さんだつて、この反物を仕立てゝ着たら、直ぐに、何處かのお金持の若旦那見たいになるのぢやありませんか。

さつきから不快な顔してゐた塚田は、この時、「ちよつと失禮します」と云つて座を立つて、襖の外へ出る。

さよ子　何處へいらつしやるの？（と聲を掛けてから、はつ子に向つて）塚田さんに、わたしが出拔けに訪ねて來たことを怒つてるんだわ。[illegible]か知ら。あなた[illegible]お話してゐたところへ、お邪魔をして。

はつ子　そんなことがあるものですか。

さよ子　あなたは、今日はお金々々と、お金のことばかり云つてるやうね。お金なんか汚れたものには目も呉れないのが、あなたの價値ぢやなかつたの？

はつ子　どちらにしたつて、あなたの前にはわたしは價値のある女ぢやありませんわ。

さよ子　あんないやみを云つて。……わたしね、あなたに會つたら訊かう〳〵と思つてゐたことがあるのよ。あなたはこの頃、今村によく會つてるんだつてね。

はつ子　えゝ。今村の兄さんには時々會つてますわ。わたしを誘つて帝國ホテルの洋食を御馳走して下すつたり、芝居や活動を見せて下すつたりするのです。

さよ子　いやねえ。あなた何だつて今村に随いてそんな所へ行くんです？（さも侮蔑したやうに云ふ）

はつ子　（反抗的に）それがなぜいけないの？　わたしが洋食を饗れたり芝居を見せて貰つたりするのがなぜいけないの？　今村の兄さんは、この頃はお金がごつさり入るやうになつたのか、惜みをしない。[illegible]いゝのよ。わた[illegible]お金を[illegible]と云ふて、[illegible]も出

して呉れさうなのよ。

さよ子（いきり立つて）何をお云ひだ？　あの人が一體のお金たつて何で無意味に出すものかね。はつちやんの考へ無しにも呆れつちまふよ。

はつ子（得意らしく）神様が今村さんを使つて、わたしにお金を授けて下さるんぢやないかと思はれてよ。

さよ子　フン（と嘲笑つて）お人がいゝにも程があるよ。去年は内海の御曹司に凝つて妾にならうと云つてた人が、今村の誘惑に乗つたりして。

はつ子　あなたこそ、氣がどうかしてるんぢやないの？　御自分の方から愛想を盡かした前の御亭主のことを何たのかたのと云つたりして。

さよ子　生意氣お云ひでないよ。當り前の結婚さへしないのを自慢にしてた人が、今村なんかにお金で買はれる氣になつたのかい。……呆れたものだ。

はつ子　それは誰れのこと？……反物一反で塚田さんの歓心を買はうとする人の心が、わたしには可笑くつてならない（ヒステリツクに笑ふ）

さよ子、怒るよりも呆れて相手を見据ゑる。

そこへ、下宿屋の女中が顔を出す。

女中　あの、塚田さんは、御散歩にお出掛けになりました。夕方でなければお歸りにならないさうで御座います。

さよ子　塚田さんは散歩にいらしつたんですつて？

女中　はあ。お客様にさう申上げるやうにと仰有いました。

女中は不思議さうに部屋の様子を見て引込む。

さよ子（獨言のやうに）塚田さんは變人ねえ。わたし達に訪問されて悦しいとも思はないのか知ら。こんな穢しい下宿屋へ遊びに來て上げたのに有難いとも思はないのか知ら。

はつ子　あなたが此方へ來る時には、特別におめかしして、塚田さんを誘惑かさうたつて駄目よ。塚田さんは着物やお化粧に誘惑かされるやうな俗物とは人がちがふんだから。

はつ子の物狂はしい權幕に、さよ子は恐怖を感じて後退りする。やがて、努めて穏やかな態度を保つて、

さよ子　御主人のゐない部屋にゐたつて仕様がないから歸りませうよ。あなたは一人で此處に待つてるんでせう。

はつ子　わたし、これから大切な用事があるんだから愚図々々してゐられないの。

さよ子（なだめるやうに）おや、一しよに歸りませうね。わたし、

働車を待たせてあるのよ。

はつ子　でも、わたしは外へ廻らなきやならないの。

さよ子　何處へでも、あなたの行きたい所へ、わたしの自働車で送届けてあげますよ。

　さよ子、反物は机の上に置いて立上る。しかし、はつ子は容易に立上らうとしない。

さよ子、相手を促して、手を執つて立上らせようとする。はつ子、その手を振放つて、夢見るやうな目付で、

はつ子　わたし、これから今村さんの書齋へ行かなきやならないんだから、あなたに自働車で送つて頂く譯には行かないわね。

さよ子　今村の家へこれから行くんだつて？……送届けて上げるわよ。何のために今村の家へ行くのか知らないけれども、送届けて上げますとも。……どんな家を新築してるのか、わたし、外から見るだけ見てもいゝんだから。

はつ子　あなたが愛想を盡した今村の兄さんは、一しよ懸命、わたしの歡心を買はうとしてゐるのよ。

さよ子（ふと忌々しくなつて）それで、あなたがいゝ氣になつて逆上せ上つたのね。

はつ子　[illegible]わたしに一萬圓といふお金を呉れるんですつて。百圓札で百枚、書齋のテーブルの上に積上げて、わたしの來るのを待つてゐるのよ。

さよ子　あなた、目を開けて夢を見てるの？

はつ子　嘘と思ふなら、これからわたしと一しよに行つて、書齋の窓の外から覗いて御覽なさい。

さよ子　あの人、こんな世間知らずを手懐けてわたしに復讐しようと思つてるんだな。

はつ子　わたし、早く出掛けなければ。

つと立つて行きかける。その様子が變なので、さよ子抱き留める。

さよ子　まあお待ちなさい。

（幕）

（三）ノ二

（一）と同じ今村の部屋。

テーブルの一隅には、前の如く札束が新聞紙に蔽はれたまゝ置かれてゐる。

[illegible]一と、弟敏次（三十餘歳、田舍者らしい服装をしてゐる）と共に、先刻のテーブルを前に椅子に腰を掛けてゐる。

謙次　どうしてもいけないのか。

今村　氣の毒だが駄目だよ。おれの會社の内情は、お前には本當のことを打明けてもいゝが、見かけほどよくないのだ。……それで、お前の要求通りに資金を用立てる餘裕は、僕にはないのだから、今度は勘辨して呉れ。

謙次（不平らしく）僕の方ぢや、こんな大事な場合に、三千や五千の金が融通して貰えん筈はないと思つてた。

今村　おれは、お前なんか田舎の人間が思つてるほど、經濟が豐かぢやないんだよ。

謙次　さうかなあ、何に使ふんだね。獨身生活でそんなに費用が嵩むのは不思議だね。

今村　獨身だから無駄な費用が入るやうな譯さ。

謙治は六ケしい顔してうつむいてゐる。

今村は煙草を吹かしながら何か空想してゐる。

そこへ、書生が扉をノックして顔を出す。

書生（名刺を出して）この方が是非お目に掛りたいと云つてゐます。

今村（名刺を受取つて）塚田鋭吉（と讀んで、ちよつと考へて）あゝさうか。こゝへ通して呉れ。

書生退く。

謙次　僕はゐてもいゝのか。

今村　さうだね。座を外して貰つた方が都合がいゝね。この他にも客がまだ來るかも知れないから、晩餐時分まで、何處かへ見物に行つて來るやうにして呉れ。

謙次　寒いのに、幾度も當てのない見物なんかさせられちや溜らない。階下で午睡でもしてゐようか。

さう云つて、椅子を離れて出て行かうとしてゐるところへ、塚田が興奮した顔して入つて來る。今村、異つた事を豫想する。謙治も扉の側に立つたまゝ、出て行くのを躊躇する。

塚田　わたくしが塚田と申します。

今村　お名前は承はつて居りますが、どういふ御用です？

塚田　大變な事が出來まして。

今村　大變なこと？　はつ子さんがどうかしたのですか（顔色を變へる）

塚田　さうです。あの人は、さつきわたくしの部屋で精神に異狀を起しました。そして、あなたの書齋のテーブルの上の一萬圓のことばかり口に出してゐました

今村　それは不思議だ（テーブルの上の新聞包みを氣にしながら）はつ子さんは發狂したんですね。

塚田　發狂したのかどうだか、まだ分りませんが、その一萬圓のことで、いろ／＼な妄想を起して苦しんでゐるんです

今村　そりや不思議ですね（次第に冷靜な態度を持して）どんな妄想を起してゐます？　あなたは、まあそこへお掛けなさい。

塚田（突立つたまゝ）直接にわたくしが見てゐたのぢやありません。……あなたの前の奥さんとはつ子さんと二人だけで、わたくしの部屋にゐたのですが、自分の身體は一萬圓の身體だと云つて自慢したさうです。

今村　それは本當ですか。

塚田　あなたの前の奥さんから聞きました。……それから、あなたに、天女のやうな歩きぶりだと褒められたと云つて、天女のやうな身振りをして部屋の中を歩き廻つたさうです。

今村（笑ひを堪えて）それが精神に異狀のある證據なんですか。

塚田　自分の肉體は、さよ子さんよりも美しくつて若いと云つて、帶を解いて見せたさうです。

今村　あなたはそれを御覽にならなかつたんですね。

塚田　わたくしは、二人の話を聞くに忍びないから、座を外してゐました

今村　それで、はつ子さんは今何處に居りますか？

塚田　あなたの前の奥さんが、はつ子さんを自動車に乗せてはつ子さんの家へ送届けたさうです。……わたくしは、只今あなたの前の奥さんから譯を聞いて、はつ子さんの發狂は、あなたの責任だと斷定しました（責めるやうに云ふ）

今村　これは驚いた。どうしてわたしの責任になります？

塚田　あなたは、少くも一萬圓を餌に、はつ子さんの心を汚したのぢやありませんか。

さう云つて、塚田は、テーブルの一隅の新聞包みを鋭い目で見つけるや否や、「これだな」と叫んで、手早く奪ひ取つて、ストーブへ投込む

今村　馬鹿ッ。君はさよ子の賣女に唆かされたのだな。

今村は塚田に掴みかゝる。譲次、呆氣に取られてゐる（幕）



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その一

先生、[illegible]

程だと存じてをりますの。それであのう、いつぞやも大へん御心配をかけましたあの人の事ね、あれからお話し申さなければならないんでございますが、あれはあの後に申し上げました通り、先生があんなに仰つしやつて下さいましたので、自分でもしみじみ考へまして、あれきりふつつり絶交してしまひましたの。その當座は未練とでも申しますのか、何かにつけて想ひ出されますもんですから、家にゐましてもまるでヒステリーのやうになつてをりましたけれど、そのうちにだんだんあの人がよくない男だつたと云ふことがはつきり分つて參りまして、……先生はあの時、私がお目にかけましたあの人のラヴレターを御覧になつて、どうもこの手紙は高等教育を受けた男の書いたものとは思はれない、若しも大學を出た男ならラヴレターにしてももつと書きやうがありさうなものだ。此れで見ると此の男の戀愛には精神的なところが全くない、肉感的な、それもまるで娼婦にでも送るやうな野卑な文句が中學生程度のセンチメンタリズムを入れて並べてあるばかりだと、さう仰つしやいましたのね。それに先生は、僕が此の男だつたら、こんなイヤらしい桃色の封筒へわざと紫インキを使つて女みたいな字を書いたり、女名前の假名をしたりはしないだらう。それもいいが、さうして置いて平氣で戀人の家庭へ出入りして、戀人の夫とも夜遅く迄何かをしてゐると云ふのは、あまりづうづうしい、良心の

ある男にはさうまで陰險な事は出來ない。女に駈け落ちを迫るほど眞劍に戀ひしてゐるなら、僕なら正直に戀人の夫に情を打ち明けて、此方へその人を讓つて貰ふ。それも駄目とならばその時は駈け落ちと云ふ手段も考へられるが、相手は假りにも夫や子供のある女だ、向ふが進んで駈け落ちしようと云ふなら格別、此方から迫ると云ふ法はない。なんとしても此の男は立派な人物とは受け取りにくいつて仰つしやつたでございませう？ ああ云ふお言葉を思ひ合はせまして、やつぱり先生はおえらい方だ、手紙を御覧になつたばかりでちやんと人間を見ておしまひになる、だのに自分はあんなに深く附き合つてゐたがら、やつと今頃氣がついたなんて、ほんたうに何と云ふボンヤリなのかしらと、つくづく自分の馬鹿なのに呆れてしまひましたの。しかし更に催眠がさめたのはまあよかつたと思ひまして、自分でも成るべく過ぎ去つた事は忘れるやうに努めまして、あの人からは怒つた手紙が二三度參りましたけれど、勿論返事なぞ出しはいたしませんでした。主人も私が以前は始終そはそはして音樂會だの何だのと云つては出歩いてばかりをりましたために、先生の御宅へ寄せて頂くやうになりましてから、すつかり樣子が變りまして、繪を畫いたり、ピアノのお稽古をしたり、子供の面倒を見たりして、一日家に落ち着いてをりますものですから、[illegible]なつた[illegible]しまし

て、陰ながら先生の御好意をよろこんでをりました。尤もわたくし、あの人の事に就いては何も主人には申しませんでしたの。夫に過去のあやまちを隠しておくのはよろしくないから、――殊に肉體上の關係がなかつたのなら告白し易い譯だから、すべてを打ち明けておしまひなさい」つて先生は仰つしやつて下さいましたけれど、……けれどどうも、……それはまあ、主人にしましても或ひはうすうす氣がついてをりましたかも知れませんのですが、私の口からは何だか云ひにくくもございましたし、濟んでしまつたことだのに今更いやな思ひをさせたくもございませんしするものですから、此の後間違ひがないやうに自分さへ注意すればいいのだと存じまして、何事も胸に收めてをつたのでございます。ですから主人は私が先生からどんなお話を伺つて參つたのやら、それは存じませんでしたけれど、いろいろ爲めになることを教へて頂いたに違ひないと思つて、さう云ふ心がけになつたのはいい傾向だと申してをりましたの。

そんな譯で、それから暫くは大人しく家に引き籠つてをりましたものですから、此の様子ならまあ安心だと思ひましたものか、そろそろ己も遊んではゐられないからつて、そんなに主人は申しまして、大阪の今橋ビルデイングに事務所を借りまして辯護士を開業いたしましたのが、あれが昨年の二月頃でございましたかしら。――はあ、さうなのでございます。大學の方は獨法をやりましたので、辯護士にならいつでもなれましたのでございます。始めは何でもプロフエッサアになりたいやうに申してをりまして、ちやうど私のあの事件がありました時分には、引きつづいて大學院の研究室の方へ通つてをりましたんですが、辯護士をやる氣になりましたのは別に此れと云ふ理由もないのでございますけれど、さういつ迄も私の實家の方の世話にばかりなつてをりましては義理も惡いし、私に對しても頭が上らないと思つたのでございませう。いつたい主人は大學時代に秀才だと云ふ評判で、たいへんにいい成績で卒業しましたものですから、さう云ふ人間ならばと云ふので、婿に參つたとは申すものの、婿を取るのも同様にして結婚したのでございます。それでもう私の親たちは主人を信用してをりまして、いくらか財産も分けてくれまして、まあまあ、あせるには及ばないから、學者になりたければ學者になるで、ゆつくり勉強するがいい。洋行もしたければ夫婦で二三年彼方へ行つて來るがいいなどと申してくれましたんですけれど、――最初は主人も大さう喜んでそんなつもりもあつたらしいのでございますけれど、――私があまり我が儘なので、實家の方を笠に着て威張るんだと云ふ風に取つて、それが癪に觸つたのかも知れません。しかし性質が學者肌に出來てをりまして、いつ迄たつても書生流のぶつきらぼうが抜けませんで、まあ

いそは下手でございますし、それはそれは人づきあひがお悪い方なのでございますから、辯護士なんかになりましたところで一向仕事なぞありはいたしませんの。それでも毎日事務所へだけはきちんきちんと出てをりましたが、さうなりますと、私の方は一日家にぼんやりいたしてをりまして、しよざいがないものでございますから、自然また、いろいろと、一旦忘れてゐたことが胸に浮かんで參るのでございます。以前は暇がございますと歌を作つたりいたしましたが、歌は却つて想ひ出の種になりますので、もう此の頃はいたしませんのでございませう？ それでわたくし、かうやつてゐてはろくな事は考へないから、これは何とかしなければいけない。何か氣が紛れるやうな事はと存じまして、――先生は御存知でいらつしやいませうか、――あのう、天王寺の方に女子技藝學校と云ふのがございますのよ。私立の詰まらない學校なのでございますが、繪と、音樂と、裁縫と、刺繍と、それからまた外にも何か、まあそんな風に科が分れてをりまして、入學の資格なぞむづかしいことも何もなく、大人でも子供でも自由に這入れるのでございます。わたくし實は前にも日本畫を稽古いたしてをりましたし、下手ではございますけれど、その方になら幾らか趣味を持つてをりますものですから、それへ毎日、晝は主人と一緒に出かけるやうにしまして、晝も晩もまあ、通ふことにいたしましたので、宅も毎日とは申しましても、そんな學校でございますから、休みたい時は勝手に休んだりいたしましたけれど、……

主人は繪だの文學だのにはさつぱり趣味がない方なのでございますが、私が學校へ行きますことは賛成いたしてくれまして、それは結構だ、いい思ひつきだから精出して行くがいいと云つて、自分から勧めたくらゐなのでございました。毎朝出かけますのにも、私が行きますのは九時のこともあり、十時のこともあり、自分の都合でいろいろになることがございましたけれど、主人の方も事務所が暇なのでございますから、何時にならうと大概待つてゐてくれまして、阪神電車で梅田まで一緒に參り、それから二人で圓タクに乘つて堺筋の電車通りの今橋の角で主人をおろしまして、私はずつとその車で天王寺へ參ります。主人はさう云ふ風にして一緒に出かけますことを樂しみにしてをつたらしうございます。「またもう一度學生時代に復つたやうな氣がするねえ」などと申しますから、「夫婦づれで自働車で通ふ學生があつたらをかしいわねえ」つて申しますと、あはあは笑つたり何かして、車の中でも上機嫌でございました。午後に歸ります時分にも成るべく誘つてくれるやうにと申しますので、電話で打ち合はせして置いて、事務所へ寄つたり、難波や阪急で待ち合はせたりして、一緒に松竹座なぞへ寄つたりいたしましたが、さう云つたやうな際には主人との間は大

變工合よく行つてをりましたんですが、あれは四月の半は頃でございましたか、わたくしほんの詰まらない事で學校の校長さんと喧嘩をしてしまひましたの。それはあのう、妙なことなのでございますが、學校でモデルを使つて、それにいろいろの服裝をさせたり、ポーズを取らせたりいたしまして、——日本畫の方は裸體のデッサンはやりませんのでございますけれど、——それを寫生いたします時間がございますの。ところがちやうどその時分に使つてをりましたのが、Y子さんと云ふ十九になる娘で、大阪でも有名な美人のモデルなんださうで、それに楊柳觀音の姿をさせまして、——まあ、いくらかそんな風をすれば裸體に近くなりますので、多少裸體の研究も出來ると云ふ譯だつたのでございます。私それを外の生徒たちと一緒に寫生してをりますと、或る日校長先生が教室へ這入つていらしつて、「柿内さん、あなたの繪はちつともモデルに似てをらんやうですね、あなたは誰か、外にモデルがあるんではないですか」つて仰つしやつて、何だか斯う、意味ありげにお笑ひになるんですの。それが校長先生ばかりでなく、外の生徒たちも先生がお笑ひになると、あとからクスクス忍び笑ひをするのでございます。わたくし思はずはつとしまして顏が赧くなりましたけれど、どう云ふ譯で赧くなつたのかその時はまだ自分で自分に分りませなんだ。今になつて考へますと確かにあの時赧くなつたやうな氣がするのでございますが、或ひはさうでなかつたかも知れません。しかし「外にモデルがある」と云はれますと、さう云はれる迄は自分では意識してをりませんでしたのに、何かしらはつと胸にこたへるものがございましたの。でも、それでは誰をモデルにしたかと云ふことは、はつきりいたしてをつたのではございません。たゞ何かしら頭の中にY子さん以外の或る人の印象が刻みついてゐて、Y子さんを眼の前に見ながら、知らず識らずその印象の方をモデルに使つてをつた、——使ふつもりもなく、自然と誰かその人の姿を寫してをつた、と云ふだけなのでございます。

もう先生にはお分りになつていらつしやいませうが、その、わたくしが無意識のうちにモデルにしてゐた方と云ふのが、——どうせ新聞にも出ましたのですから申し上げてしまひますが、——徳光光子さんなのでございます。（作者註、柿内未亡人はその異常なる經驗の後にも割りに窶れた痕がなく、服裝も態度も一年前と同樣に派手できらびやかに、未亡人と云ふよりは寧ろ令孃の如くに見える典型的な關西式の若奧樣である。彼女は決して美女ではないが、「徳光光子」の名を云ふ時、その顏は不思議に照り輝やいた。）けれど、私は、まだその頃には光子さんとお友達になつてゐた譯ではございません。光子さんは洋畫の方を習つていらしつて、教室も違つてをりましたから、口をきく機會も

なかつた筈でございます。ですから光子さんの方では私の顔を御存知なかつたか、御存知であつても別に氣に留めてはいらつしやらなかつたでせう。私の方にしましてもそれほど光子さんに注意してゐたとは思へないのでございますが、でも何となく好もしさうな方だと云ふ風に考へてをつたに違ひないのでございます。それもしかし、口をきいたことがないくらゐでございますから、性質とか氣だてとか、そんなことは分りませんのでしたけれど、――まあ、何となく、ただ全體の感じなのでございますね。さう云へば私が案外早くから光子さんに氣をつけてをりました證據には、もうその時分に誰から聞いたと云ふでもなしに、光子さんの名前やお宅を、――船場の方にお店のある羅紗問屋のお嬢様で、住まひは阪急の蘆屋川にあるのだと云ふやうなこと迄ちやんと知つてをりましたの。それでわたくし、校長さんにそんなことを云はれましたので、あとでいろいろ考へてみたのでございますが、成る程その繪は光子さんに似てゐますけれど、故意に似せたと云ふではなし、また故意に似せたにしましたところが、ぜんたいモデルにY子さんを使ふと云ふのは、Y子さんの顔を寫すのが目的ではないのでございませう？　ただY子さんに觀音さまのやうな姿をさせて、その顔つきや、白衣の襞の工合を研究して、なほその上に顔[illegible]中では美人かも知れませんけれども、光子さんの方がもつと美人で、その繪の感じに合つてゐるとしましたら、光子さんをモデルにしても差支へないではございませんか。――私はさう思つたのでございます。

（つゞく）

編輯だより

◇政府黨勝つか民政勝つか、本誌が市中に出るころにはもう勝負はついてをる。民政の策戰は足が早かつたが、政府黨はいろいろの飛道具があるのが有利であつた。しかし今日の大衆はその飛道具に怖るるものは少くなつた。

◇本誌の「觀戰記」や「普選議會に向つての第一の要求」の集中には既成政黨の方々へも原稿を依賴したが、原稿の到着が〆切におくれたりして間に合けなかつた。掲載することの出來なかつたのは右の事情によるものであるから惡からず諒としてもらいたい。

◇何、近く臨時議會も開かるることであらうが、大衆は自分が選出した議員の行動を嚴重に監督すべきだ。しかし地方問題や個人問題を公人に依賴することだけは絶對にやるべきでない。何や彼やといつても制限議會當時の選擧よりは一段の進歩を示したことだけは認める。

◇「世界大衆文學全集」は申込殺到し「現代日本文學全集」に劣らざる形勢を呈するに至つた。そして内容見本が出來ないうちに數萬の申込があつたことは讀者がいかに本社を信じて下さるかを思うて涙なきを得ませんでした。

◇「マルクス全集」總内容は四月號にて發表いたします。

◇「上田敏全集」は本社より出版することとなりました。これも四月號で發表します。

◇「現代日本文學全集」の四月配本は久米正雄・近松秋江集といたします。久米集には長篇「破船」「和宗」「三浦製糸場主」「地藏教由來」「阿武隈心中」その他が這入り近松集には「別れた妻」「舞鶴心中」「疑惑」「疑惑續篇」「黒髪」「子の愛の爲に」その他が這入ります。五月配本は「正岡子規集」を刊行しその名作全部が這入ります。

◇最近の讀書界で尤も多く讀まれつつあるのは有川治助著「ヘンリ・フオード」及び「新選名作集」中の「谷崎潤一郎集」「菊池寛集」であるそうだ。「新選名作集」は「現代日本文學全集」の姉妹出版であるから相對立して讀む人が多いのだらう。「永井荷風集」「武者小路實篤集」も近く發賣さるる筈。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵税不要
壹ケ年	六圓	郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和三年二月十八日印刷納本
昭和三年三月一日發行

(價五十錢)
(郵稅二錢)

編輯兼發行人 東京市芝區愛宕下町四丁目六 山本三生
印刷人 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六 改造社
振替東京八四〇二
電話芝(43)一一三一 一一三二 一一三三 一一三四

世界大衆文學全集解說

本全集は世界中で一ばん多く讀まれ、そして世界中で一番面白い小説ばかりです。怪奇、戀愛、家庭、滑稽、傳奇、探偵、科學、軍事小說の最も不朽の名作のみで、世界人氣の焦點となつたものばかりであるから、一度讀み出したが最後終りまでやめられぬもののみだ。此以上に面白い全集は他に絕對にない。殊に飜譯者は日本一流の人々のみを嚴選したから文章の平易でうまいことは他に比較がない。又裝幀が美はしくて廉價なことも他の追隨を許さない。內容見本を取寄せて其解說を一讀して下さい。數ある幾十の全集中これほど世界的に知識づけ、日本人の未來を明るくするものが他にあらうか。內容も形式もいろ〳〵比較考慮して最後の一斷を本全集に申込み下さい。

1 鐵假面（ボアゴベ）

大佛次郎

鐵假面は今日に到るも依然として世界史上の大きな謎である。榮華一世を蓋うたルイ十四世は、何を懼つてか、一人の囚人に鐵の假面を着せ、脱いだならば殺すと命じて、初めはサンマルゲリテ、後にはバスチユの牢獄に二十餘年間を幽閉した。華やかなりし王の死と共に、その囚人の何人なりしやは、永久の秘密、解けぬ謎となつたまゝ今日に及んだ。時代は王朝の爛熟期で叛亂のきざし漸く現れかゝつた頃、華の都巴里を中心に此の不可解の興味が潜在してゐるのだから、ユーゴー、デユマも共に同名の名作を發したが、ボアゴベの作が一番面白い。古く黒岩涙香氏が「鐵假面」の名で、抄譯紹介したことがある。元來探偵小説はボウが創始し、ガボリオが名聲を與へ、ボアゴベが一般に流布したと言はれ、その稀有の大手腕は傳奇小説界の帝王の觀がある。譯者大佛次郎氏に「照る日曇る日」「鞍馬天狗」其他の作者として我大衆文學界の花形であり殊に大佛氏は佛蘭西通の外交官出身で、ボアゴベの譯者として、壯快極まんものを期待される。

2 家なき兒（マロオ）

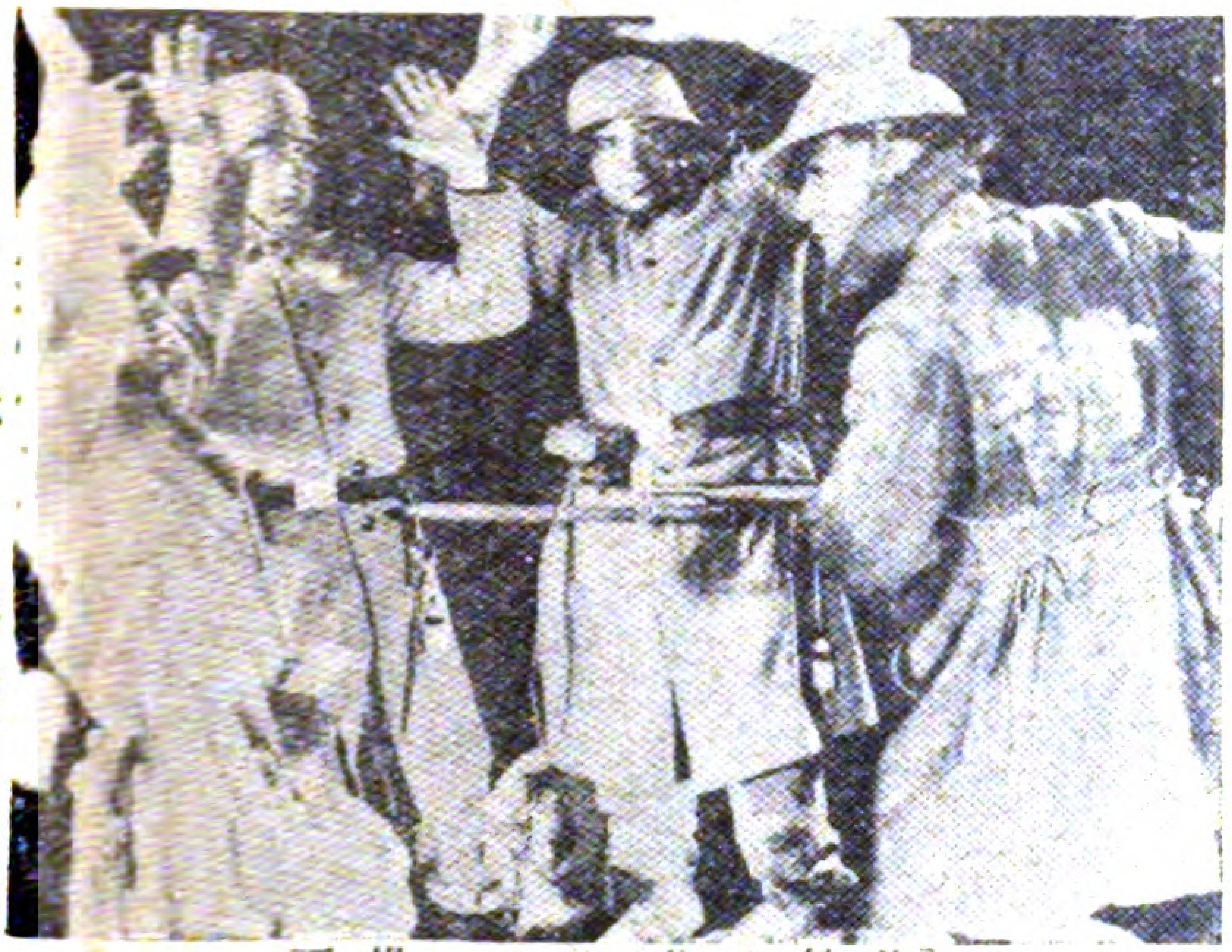
菊池幽芳

兩親を知らぬ孤兒の少年が、悲しき運命の操り手から、名聲ある遊藝團長とも稱すべき人生行路の持ち主である老旅藝人の手に渡され、猿や犬と一座して都から都に藝を賣らうち、運命の轉變に思ひもかけぬ幸福を少年にもたらすまでの哀れな物語で、唯一篇の悲劇小說や御伽噺ではなく、讀者に強く正しき教訓に魂を抉き掻られるであらう。フランスの作家マロオの世界的有名の家庭小說で、既に三十ケ國以上の國語に飜譯され、その名聲に世界を席捲してゐるのである。我國でも五來素川氏が「まだ見ぬ親」と題してその抄譯を發表されて以來、屢々少年物語風に翻譯されてはゐるが、家庭小說としての全譯は幽芳氏の本譯あるばかりである。氏はフランスに遊んだ直後、彼地で求められた最も信用すべき原本から直接に譯出されたもので、アメリカ版からの重譯などとは趣きを異にし、實に世界に誇るべき名譯である。譯者菊池幽芳氏に就いては、今更説くまでもない。明治大正を通じての最も傑出すべき家庭小說の泰斗で「乳姉妹」「己が罪」「その他幾多の作品を公にされ一世の讀者の紅涙を絞らしめた。

3 前線十萬（ヤン・ヘイ）

櫻井忠溫

怪物ツエッペリンが毎夜毎夜倫敦の空を脅かす、出沒自在の獨逸潛航艇は北海に襲擊する、罪もない少女が銃殺される、ジョンブルの血が湧いた、キッチナー元帥の精銳十萬人はチペラリーの唄を高唱し海を渡つて獨佛戰線へ――扨て其の最初の十萬人は何うなつたであらう。作者は彼等の運命にテーマをとつて本篇を描きあげた。原著者ヤン・ヘイは謎の人物である、火の如き熱情と刄の如き批判を以て大進軍のロマンスを描き、毒瓦斯とタンクの戰線にかくれた祕密を發いてゐる。これほど面白い激情的な大戰文字が又と他にあらうか。譯者櫻井忠溫大佐は「肉彈」「銃後」の著者として我が戰爭文學の第一人者、情熱艶麗の文章を以て世に知られた大家である。今や陸軍省新聞班長の劇職にあるにも拘らず特に本全集の爲に本卷を擔當された。原著者譯者相俟つて光彩陸離たるものがある。敢て讀者の期待を乞ふ所以である。



「前線十萬」中の一場面

4 アルセエヌ・ルパン（ルブラン）

保篠龍緒

義賊アルセエヌ・ルパンには三つの名前がある。一度ルパンと言へば賊となり、セルニン公爵と言へばロシア貴族となり、ルノルマンと言へば巴里警視廳の刑事課長となり、さしもの巴里も神出鬼沒な彼の脚下に翻弄される。彼はあれ程な兇賊でありながら殺人が嫌ひだ。彼は長い間の準備の後破天荒な計畫で泥棒を決行する。世界第一の柔道の達人で腕ひしぎを得意とし、強きを挫き弱きを助け、富める者を脅かし、貧しき者を賑はす仁俠の義賊である。奇智縱橫、敏捷快活なモダンボーイでもある。アルセエヌ・ルパンこそは戰後佛蘭西青年の理想の人物である。原作者ルブランは處女作「八一三」を出して以來新興の探偵小說壇に彗星の如く光つてゐる佛蘭西現代の人氣作家である。飜譯者保篠龍緒氏は歐洲探偵小說の研究家でルブラン殊にルブラン物の飜譯は專賣とする所、譯文は流麗明快宛らルパンを見るやうだ。

5 椿姫（小チュマ）
マノン・レスコオ（プレヴオ）

久米正雄

白椿の花に埋もれて死んだ薄命な女優の一生である。外國の小説には珍らしく義理と人情の柵を描いた「椿姫」は我國でも紅葉山人の種本となつたり、芝居に仕組まれたり或は映畫になつて問題を惹き起したりして馴染の深い物語である。原作はチュマが親しく接した實在の女性をモデルにしたもので、ゾラの「ナナ」とは異り女主人公の可憐純眞な一生が讀む者に哀憐の涙を誘ふ。作者プレヴオは數多い著作の中、「マノン・レスコオ」を殘さなかつたならば忘れられたかも知れない。美しい娘マノンに對する若い貴族デ・グリユウの狂亂の戀が、遂に巴里の墮落の生活となり女の不貞實な生活となり、女の歡心を買ふ爲の男の罪惡の生活となり、男はアメリカに迄流れて行くが最後に病死した女を荒涼たる山中に葬るといふ悲戀を描く譯者久米正雄氏は當代戀愛小説の大家、其麗譯が待たれる。



ノーマ・タルマッヂの椿姫

6 三銃士（大チュマ）

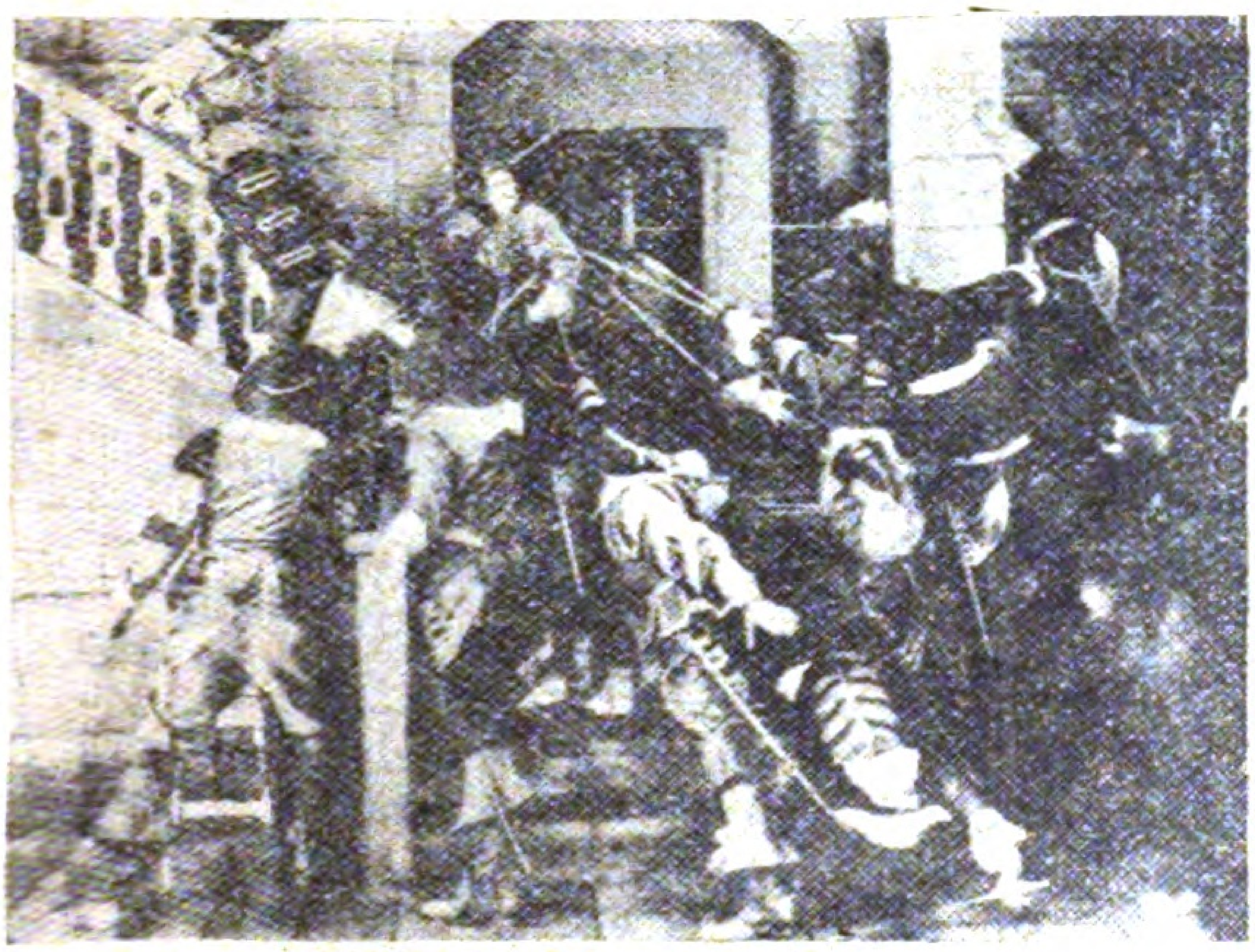
三上於菟吉

武士道華かなりしルイ王朝の頃、朝廷の銃士を志して都に出た若きダルタアニヤンが、當時全歐洲に雷名を轟かしたルイ十三世の三羽烏アトオ、ポルトー、アラミスに伍し武勇と戀を爭つて幾度か命がけの冒險をしたのち王廷銃士の頭、佛蘭西陸軍總帥に推される迄の極めて劇的に組立てられた物語が、此の大チュマの「三銃士」である。本篇はカアル・マルクスさへも愛讀した、チュマの三部作の中でも最も痛快な變化に富んだもので、ダグラスが映畫にしたのも無理はない。非常に有名なものでありながら、完全な邦譯のなかつたのは、遺憾であつた。今度新に三上於菟吉氏の完譯を得たのは、本全集の誇りである。三上氏はもともと外國文學の紹介に努められてゐたが、一轉して大衆文學に筆を染め、目下東京日日大阪毎日兩新聞連載中の「激流」その他、大作を次ぎ〳〵に發表して、斯界の寵兒であることは人の知るところである。

7 放蕩息子（ケイン）

菊池寬

霧深きアイスランド總督の二人息子、謹嚴な兄は豪商の姉娘と婚約を結んでゐたが偶々倫敦留學から歸つたモダンボーイの弟は言葉巧に兄の許嫁を口說き落して結婚してしまつたが、それから兄の悲痛な失戀生活と、弟の放縱な肉慾生活が平行する。弟は音樂の趣味があつたので、其を利用して妻の妹とも關係を結んでしまつた。妻は兄に反いた罪と弟の不倫を悲しみ小さな娘を殘して死んでしまつた。妻の死は弟息子の生活を暗くした。幾年かの後音樂家として成功した彼が遂に雪崩に打たれて慘死するまでの放蕩息子の一生を描いた、悲しい家庭小說で近代的な主人公の生活を愉快なテンポが「近頃のものでこれほど面白い小說はない」と吾が文壇の大家菊池寬氏を感嘆せしめ遂に本社の乞を容れて飜譯の筆を執るに至つたものである。因にアイスランドを舞臺にとつた小說は世界にも餘り類が無く隨つて地理的の興味から[illegible]



ダグラスの三銃士

8 金剛石（フレッチャー）カートライト事件（同）

森下雨村

ロンドンのとある店頭の箱の中から現はれた唯一個のダイアモンドではあつたが、それがもとの所有主に歸るまでには、八人もの男女が變死を遂げるといふ物凄い探偵小說――これが「金剛石」である。「カートライト事件」はカートライト公園の一隅に起つた殺人事件を材料とし變化を極めた探偵小說で、共に原作者の特色を濃厚に發揮した名作だ。原作者フレッチャーは英國現代の探偵小說家中最も本格的な作家で開卷第一頁より思はず知らず讀者を引きずつて行く怪筆を持つてゐる。もと詩人で鄕土藝術研究家であつたが、偶々世界の大新聞倫敦タイムスに認められて大衆文學に筆を染めた人だけに、冒し難い氣品を具へてゐる。譯者森下雨村氏は我が探偵小說界の父と稱せられ、開拓者である。殊にフレッチャーは氏の最も愛好する作者で、其の「謎の函」と題する長篇は嘗て氏の名譯によつて世に紹介されたことがある。

9 オリヴァー・ツイスト（ヂッケンス）

馬場孤蝶

地獄の墓場のやうなロンドンの貧民窟へ田舎の育兒院から逃れた可憐な孤兒ツイストは惡漢の仲間に誘拐されて限りなく暗い生活を敎へられる、貧民窟に咲いた一輪の花、惡漢の妻ナンシーの母性が陰ながらツイストを守つてゐる。そこへ親切な老紳士が現れて此の少年を光明の世界に導く。最後に少年の素性が知れて目出度く大團圓を結ぶ憐れな、また社會性に富んだ好個の家庭物語で、篇中二十の異つた性格の所有者が入り亂れて渦を卷くのに筋が些も混雜しないところに原作者ヂッケンスの流石に名匠たる所以が知られるのである。曾て世界の寵兒ヂャッキー・クーガンが主演し映畫となつて日本にも輸入され人々の涙を絞つたことは今尙ほ諸君の記憶に殘つてゐる筈だ。譯者馬場孤蝶氏は我が英文學者中の耆宿である。と共に、大衆文藝の紹介者として今の新進作家達から仰がれてゐる大家である。



クーガンのオリヴァー・ツイスト

10 トウエーン名作集（マーク・トウエン）

佐々木邦

華やかなロマンスも宜から情に訴へる物語も結構である現實暴露の探偵小說もとより可。しかし茲に紹介する一卷は他と全く趣を異にした諧謔本位の文學である。我が文壇に於てこれまで獨り諧謔小說が繼兒扱ひされて來たのは、本邦在來のユーモア文學が氣品に乏しく内容貧しく、動ともすれば卑猥に流れ易い爲め自然に等閑視されたのではあるまいか。苦惱を日常の生活とする近代人の間には、讀んで微笑を禁じ得ないユーモア文學も亦魂の安息所として確かに必要ではあるまいか。マークトウエーンは世界の諧謔小說の王樣である。彼の諧謔は世の虛僞に對する熱烈な憤激であり笑の蔭には苦い涙が潛んでゐる。彼は普通の滑稽文學者でなく一段高い道德觀を以て世間を覺醒しようとした偉大なるユーモリストである。譯者佐々木邦氏は二十餘年の長きに亙りトウエーン研究に沒頭された大家として知らる。

11 婚約（マンゾーニ）

木村毅

凡ゆる西洋の名作が矢繼早く移植されてゐる中に、不思議にもただ一つだけ網の目を洩れて、燐光のやうな光りを放つてゐたのは此の作である。生活そのものが直ちに傳奇であつた十七世紀の伊太利ミラノを背景に、レンゾ、ルチアの二人の野の若者の花の如く美しく露の如く汚れなき婚約の物語である。二人の婚約は、「法律の防護」を以て自ら任ずる男爵山賊ドン・ロドリゴの陷穽に依つて阻まれ支障を來すけれども結局は幸福な結婚の美酒を乾すといふ筋。殊に山賊一味の活躍は、映畫の如き効果をもつてゐる。原作者マンゾーニは「デカメロン」のボッカチオ、「ロビンソンクルーソオ」のデフオ、「アイバンホウ」のスコット——この三者の面白味を合はせ持つ文豪で、譯者木村毅氏は創作、批評、飜譯行くとして可ならざるなき現文壇の才人で、東京朝日新聞連載の「島原美少年錄」の著者として知られてゐる。



家なき兒の一場面

12 巴里の祕密（シュー）

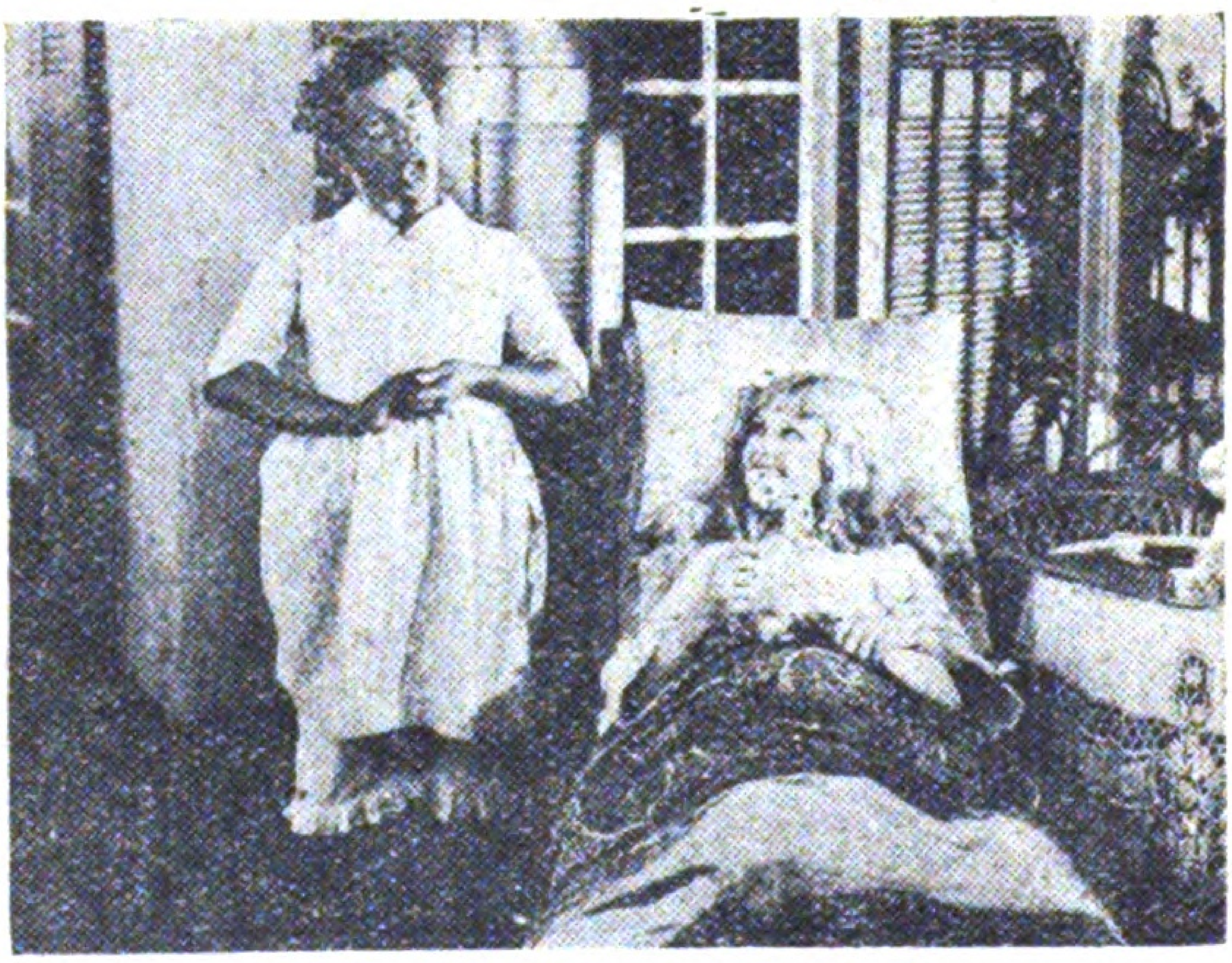
武林無想庵

過去一世紀に亙つて歐羅巴で最も多く讀まれた物語はウーゼーヌ・シューの「巴里の祕密」である。本全集を編纂するに當り、純文壇大衆文藝を代表する各大家が衆口一致推薦されたのは本書であつた。シューは九十年前の巴里の祕密を發いたが、譯者無想庵氏は今日の巴里の祕密の底まで知れる人。而も目下巴里暮しの氏は、餘りに文章が難しいため未だ邦譯されなかつた本書の大衆的飜譯者として此上なき適任者と云はねばならぬ。「巴里の祕密」は文明と云ふものが人間を墮落さすことを説明せんために、千八百四十年代の巴里に漲つた惡德と貧乏をいろいろの事件をかりて描いたもので、傳奇的なところも探偵的なところもあり、廣く讀まれたのも無理はない。

13　アンクルトムスケビン（ストー）

牧逸馬

かよわき女性の筆端から奴隷解放運動を生み、南北戰爭が勃發した世界的名著である。ストー夫人は正義人道の情熱に燃えながら、神の如き奴隷トムの悲慘なる生涯を描いた。可哀さうなトムは世界幾千萬人の涙を絞つた。「此書こそは、グラント將軍十萬の精兵が南軍の城砦を陥れしよりも其の功績まされり」と、德富蘆花氏は賞揚してゐる。（本社の現代日本文學全集五五三頁「一枝の筆」參照）米國は勿論、英國及殖民地に於て百五十萬部を賣り盡した本書は、遂に自由の國アメリカを統一し吾が懷しき「オールドケンタツキーホーム」のメロデーを生み最近パラマウント社が世界に誇る大映畫「アンクルトムスケビン」となつた。原著はアメリカ俗語を以て書かれ完全な邦譯は至難とされたが、多年アメリカに在つて下層社會の言葉を研究された牧逸馬氏に懇願して快諾を得た。牧氏は谷讓次、林不忘等のペンネームをもつ文壇の流行兒である。



アンクルトムスケビンの一場面

14　黒星（マッカレエ）

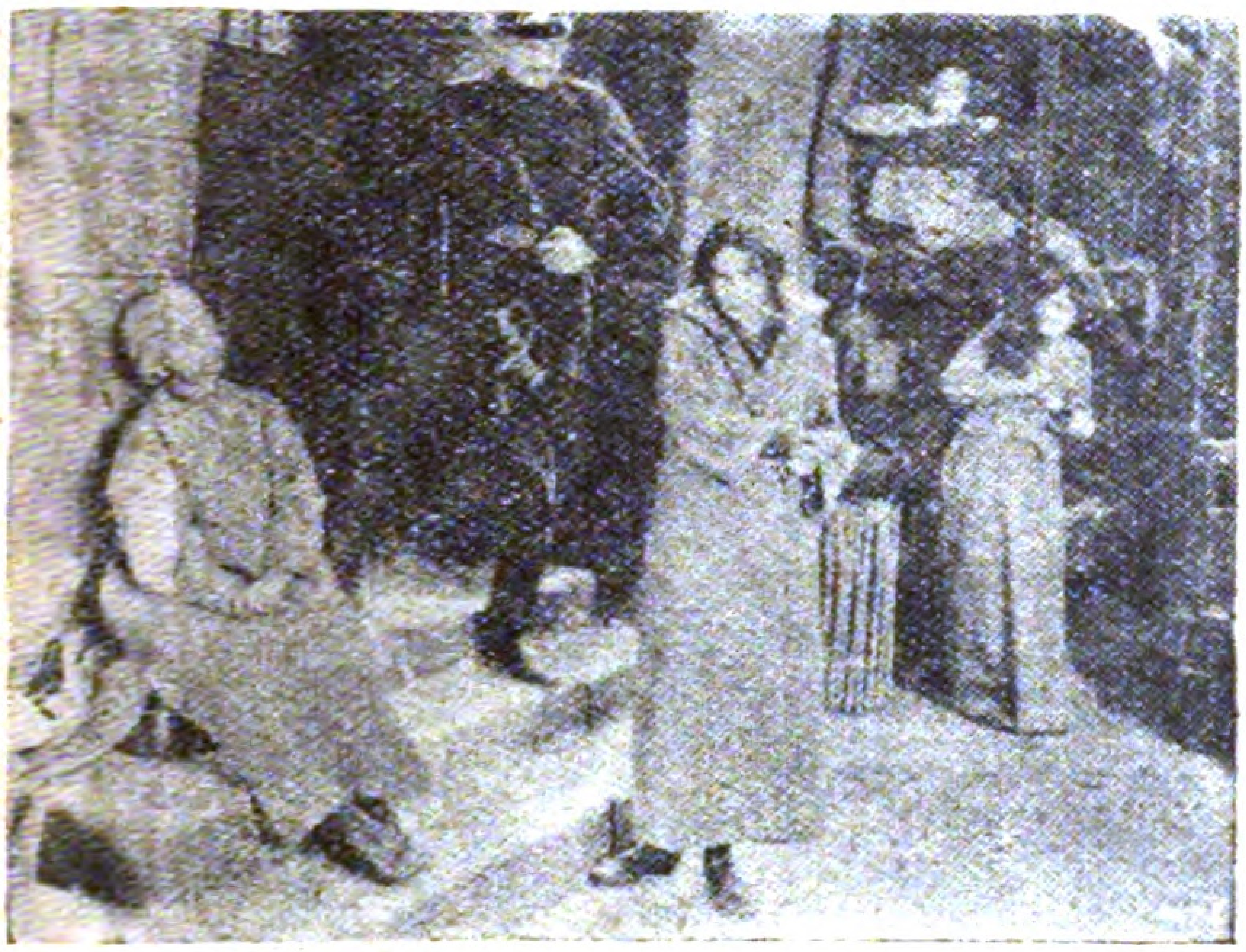
和氣律次郎

三上於菟吉氏がサンデー毎日に連載して好評を博した「仇討日月雙子」あれの種本はマッカレエの代表作、「雙生兒の復讐」だ。雙兒の兄弟が伯父の讐を報ぜんため六人の政治家と實業家を對手に闘ふ凄い話だ。善良な惡漢サムを主人公とした、名作「地下鐵サム」は日本にも紹介された。實に作家マッカレエは、今やアメリカのあらゆる階級の人氣を一身に蒐め、輕快で俊敏な、如何にもヤンキーらしい、素晴らしい探偵作家である。和氣律次郎氏はマッカレエにかけては右に出るものなき專門大家で、原作者の文脈から風格を其の儘移す名譯者。既に數十篇のマッカレエ物を紹介されてゐるが、今回は特に今まで手掛けたことのない「黒星」を本全集の爲めに飜譯される。「地下鐵サム」よりも「雙生兒の復讐」よりも若き日本の讀書階級の血を湧かすことであらう。そして作家マッカレエは、我等の流行兒となることも遠くはなからう。

15 トンネル（ケラアマン）

秦豐吉

大西洋の海底に一大隧道工事を起して、歐洲と米大陸の連絡を計畫した青年技師を主人公とし、その工事中に續出する幾多の椿事と、面倒な戀愛關係とを巧みに織り込んだ、近代的な科學冒險小說である。最近獨逸でこれほど飛ぶやうに賣れて問題を捲き起した小說はない。ケラアマンはベルリン日日新聞特派員として米國に滯在中この怪奇な物語の筋を得たもので、興味清新なる傑作である。原作者は一九二一年頃日本にも來て「日本の散歩」「さつさよさつさ」の二篇を發表し、藝者遊びの話など書いた。彼は今アラビヤに自動車旅行中。伯林の女優ドリリユエの情夫で、その近作「シエレンベルヒ兄弟」はコンラドフワイト主演の映畫になつてゐる。譯者秦豐吉氏は獨逸文學の第一人者、名譯「ウエルテルの悲哀」以下數十篇の譯あり。最近まで獨逸に留學し、純文藝以外に此の種大衆文藝に造詣深く、特に本全集の爲めに此の名作を選定して下まつた。



ドロレスデルリオのカチユーシヤ

16 カチユーシヤ（トルストイ）

近松秋江

雪のシベリアをとぼとぼ歩むカチユーシヤ、戀と自責の惱みを抱いて默然と從ふ若き侯爵ネフュリュードフ。二人は何の爲めに何處から何處へ行くのか。大トルストイが不朽の名篇「復活」は悲しき運命の物語である。神聖なる兩性の問題小說である、されば世界を風靡し、我國でも小唄のメロデーとなり或は松井須磨子の芝居となり國民には「不如歸」「金色夜叉」以上に親まれてゐながら、讀物として讀書界を風靡し得ないのは從來の譯文が難澁であまりに西洋風すぎたためであつた。近松秋江氏はトルストイ物にかけては名譯家と明治大正の文壇に謳はれた老巧者。その氏が「名譯して本物そのままの味を必ず出させる」と斷言し、艶麗哀愁を以て鳴らした氏一流の文章で此の大事業に着手されたので、薄命可憐のカチユーシヤが甦て生けるが如く諸君の涙を拭ひ大トルストイの人道主義が諸君の心を照す日も遠くはあるまい。

17 九十三年（ユーゴー）

早阪二郎

九十三年とは一七九三年「自由・平等・博愛」の三色旗の下に、佛蘭西大革命の戰塵があがつてゐた。革命軍司令官ゴオヴアンは伯父ラントナック侯爵の率ゐる反革命軍討伐に向つた。反革命軍は戰利あらずして主將ラントナックは捕へられた。ゴオヴアンの胸には恩愛の情と愛國の念とが入亂れたが、彼は遂に伯父を殺さずに救つた。ゴオヴアンの行動を監視してゐたのは彼の少年時代の家庭教師シムウルダンであつた。シムウルダンはゴオヴアンを軍法會議に廻し自ら判決を下して死刑に處した。と同時に彼は元の師弟の情にかへつて、自ら心臓を打つて死んだ。配するにマラー、ダントン、ロベスピエール等革命の大立物を以てし雄大なる構想は「レ・ミゼラブル」を凌ぎ、德富蘇峰先生の如き推賞措かぬ大作である。譯者早阪二郎氏は目下萬朝報紙上に「胸をかくす女」を連載してゐる新進作家だが實は曾ては東京諸新聞社に活動してゐた文明批評家である。



九十三年の一場面

18 寶島（スチブンソン） チェキールとハイド

野尻清彦

祕密の地圖を手に入れた少年が、寶の島にあこがれて探偵船に乘り込み、幾度か危險を經たのち孤島の海賊雙脚のシルヴアに打ち勝ち財寶を發見する可憐と戰慄の探偵的冒險小說が「寶島」で「チェキール博士とハイド氏」は鬼氣人に迫る名篇だ。慈悲の權化チェキール博士が、身を試驗臺にして己が發見した粉藥を服用すると性格風貌が一變して獸性の儘に行動する、遂に藥が解けなくて狂ひ死する物凄い二重人格を描いた世界に二つとない異色ある作品で名優バリモワの主演で映畫となつた。譯者野尻清彦氏は寶島に出て來る海賊語に就ては多年苦心の研究を重ね完璧を期して譯出して居られることを聞き特に本全集に乞ひ得たもので從つて文章も原著の味を失はぬ平易な且高き名文である。因に夏目漱石氏は少年時代からスチブンソンを愛讀し遂に大影響を受けたと自ら告白してゐる。

19 スペードのキング（ヅーゼ）

小酒井不木

群雄割據の世界探偵小說界に最近になつて突然顯出した不思議な作家、瑞典のヅーゼは、特異な科學的な探偵術を盡してすつかり世界的驚異の的となつてしまつた。本篇は彼の代表作「スペードのキング」「コブラの祕密」「クラブの四」の三篇を收めたものであるが、ヅーゼが何故他の英米作家のやうに日本に紹介されてないかと云へば獨逸語ばかりで英佛譯がなかつたためであつた。恰も探偵小說家の總元締小酒井博士が發見せられて今ではヅーゼの譯は手に入つたものである。

うまく食へば食物は營養となる。
面白く讀めば書物は身となる。

20 ステラ・ダラス（ブローチ） ラ・ボエム（ムルジエ）

森岩雄

ステラ・ダラスは、小さな工場町に育つた無智で正直な女だ、ふとした緣から、紐育の社交界を逃れた青年と結婚し、可愛い娘まで生れながら夫は無智なステラの貞操を誤解して都に去り、娘は父を慕うて都に追うた、わが憐れなステラは娘の幸福を願ふため獨り寂しく涙の生活に入るといふ愚かな妻、無智な母を描いた最上の家庭小說で妻たり母たる者はぜひとも一讀すべきである。作者は憐れ愚かな母ステラを心からの同情で浮彫させてゐる。華の都巴里の藝術家街カルチエ、ラタン、または美しきブウロンの森に若き生命の喜びに浸る哀切極りなきロマンスがアンリームルジエのラ・ボエムである。貧しきを分ち、喜びを共にし、身を滅す友情の物語、若き人々が心の琴線に觸れる理想的な家庭の讀物、譯者森岩雄氏は名映畫「街の手品師」の作者として曾て佛蘭西に遊んだ映畫界の權威者であり、又情味豐かなオ筆の持ち主として知られてゐる。



ベル・ベネットのステラダラス

21 シャロック・ホームズ（コナン・ドイル）

延原謙

探偵小説と言へばドイル、ドイルと言へばシャロック・ホームズ！此の書出でて英國の探偵法は全然一變したと云ふ。小説の實際上に及ぼす驚くべき影響だ。ホームズには「冒險」「回想」「歸還」「最後の挨拶」及び最後に出た「捕物帳」の五册があるが、本篇は一卷よくホームズ全集の觀を成してゐる。殊に最近の、愈々熟した愉快な探偵物語は、本書によつて初めて江湖に紹介されるであらう。長篇の形式は取つてはゐるが、名探偵ホームズの取扱つた事件の一つ一つを一篇として描いたもの故、どの一篇を讀んでも精彩ある短篇的興味がある。英國に於ける以上の大センセエションを惹き起すであらう。譯者延原謙氏は探偵小説專門の飜譯家で、早稻田大學電氣科の出身でありながら今では電氣技師を廢業して道樂だつた探偵小説の飜譯を本業としてゐる風變りな人で、博文館の探偵叢書の中にも氏の飜譯が數卷を占めてゐる。



バリモアのホームズ探偵

22 ゼンダ城の虜（ホープ）

寺田鼎

戴冠式の夜、ルリタニア國王ルドルフは行方不明になつてしまつた。これは王位を狙ふ王弟ミハエル一味の陰謀に陷つたためだつた。恰も其の夜、王と同名の英國紳士ルドルフは何にも知らずに此の首府に到着し、計らずも事件の渦中に捲き込まれて了つた。彼は花の如き王姫フラビアと戀に陷つたため陰謀の眞相を知り、男性的俠氣からあらゆる危險を冒して活躍し、遂に惡人を滅ぼす、一篇陰謀と戀愛の連鎖にも拘らず、まことに健康な男性的讀物で、歐米各國では廣く家庭に歡迎されてゐる。原作者アンソニイ・ホープの數ある作品の中でも此の作は一際ロマンチックで繪畫のやうに美しい。屢々劇に仕組まれ、映畫となつて日本に輸入されたことは知られる通りである。飜譯者寺田鼎氏は曾てアドバタイザアの記者として活躍された少壯英學者、今は世界の映畫王國ユーナイテットアーチスト社の社員として活動してゐる。

23 紅蘩蔓（オルツィ）

松本泰

昨日も今日も貴族はギロチンへ送られた。身を以て國外に逃れようとしても、東も西も關門といふ關門はすべて、武裝した革命黨員に依て固められ、蟻一匹匐ひ出る事が出來なかつた。此の佛蘭西大革命のどさくさの中に現れて、覆面の義人「紅蘩蔓」は、貴族の味方であつたらうか！或は革命黨の味方であつたらうか？彼は奇智と勇氣の權化、英國人の理想とする紳士であつた。原作者オルツィ男爵夫人は英國隨一の最も人氣ある大衆女流作家である。英國人に何か面白い小說はないかと訊ねたら十人が十人迄夫人の「紅蘩蔓」を讀めといふに違ない。最初の一頁より最後の頁迄息詰るやうな話が溢れ、深刻な冒險味が底を流れてゐる、女ならではと思はせる纖細な味も見逃せない。譯者松本泰氏は現探偵小說界の元老もと三田派の中堅作家で、中途より探偵小說に筆を染て以來、斯界の權威を以て目されてゐる。



ラ・ボエムの一場面

24 平妖傳（羅貫中）

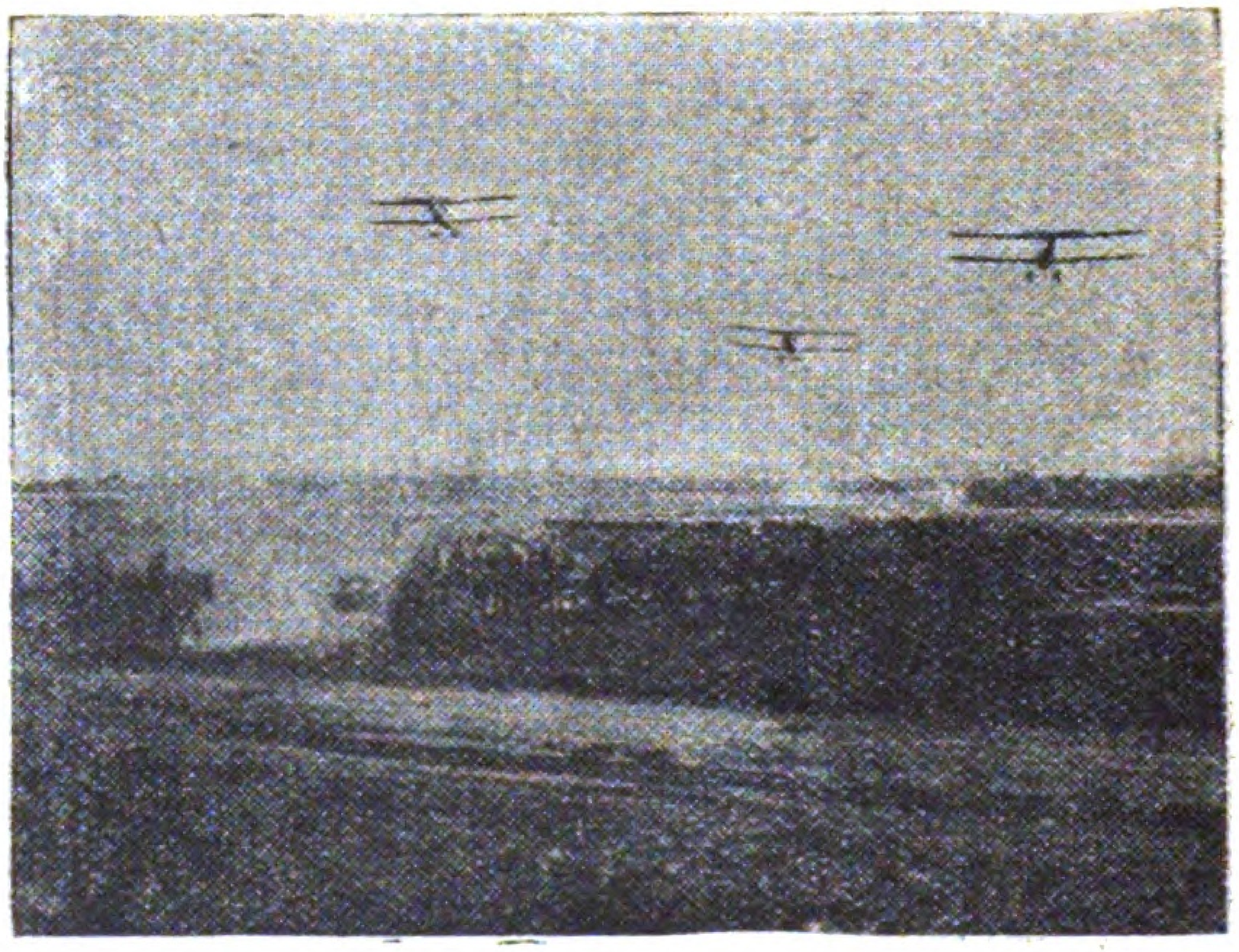
佐藤春夫

支那の面白い小說と云へば直ぐに三國誌、水滸傳、西遊記の三つを聯想するが、此の平妖傳は前記三物語を担ねて一丸とした雄勁奇怪な物語で支那の古文學中では先づ第一位に推さるべき大雄篇でありながら、吾國では前記三篇ほど有名でないのは、德川時代に林羅山が邦譯しかけて果さず、その後瀧澤馬琴が飜譯を計畫しながら逝去したので、今日まで日本人の前に現はれないためである。支那文學の權威幸田露伴博士が特に本全集のため數ある古文書中から選擇されて、支那文學の邦譯にかけては全文壇右に出るものなしと云はれてゐる文壇の重鎭佐藤春夫氏が詩情豐な名文を振つて之を完譯されると云ふ、文壇空前の壯擧ではあるまいか。數多き西洋の物語の中に伍して僅かに一篇の東洋物ではあるが構想記述ともに西歐物に比して何等遜色なく、吾等東洋人のために大に氣を吐いてくれるところの愉快である。

25 空中戰爭（ウエルズ）旅行（ヴエルヌ）

木村信兒

H・G・ウエルズは最も進歩した科學小說家で、ジユル・ヴエルヌは半世紀前の空想的科學小說家である、ウエルズの科學小說は背景に社會問題を持つてゐるが、ヴエルヌは好んで見知らぬ世界の消息を描いた。時代と傾向こそ異れ此の二篇の科學小說は共に豐富な通俗味を以てゐて一度び卷を繙けば吾を忘れて讀了する。而も讀後の豐富な科學的智識を獲得することが出來ると云ふのが科學小說の特長である、ウエルズはロマンチックな空想を描くのではない、どこまでも現在の社會問題と自然科學を基礎として事實を寫すと云つた風だ。譯者木村信兒氏は科學小說專門の少壯學者でこれまでウエルズの飜譯數卷を世に問うてゐる。



空中戰爭

26 ルコック探偵 河畔の悲劇（ガボリオー）

田中早苗

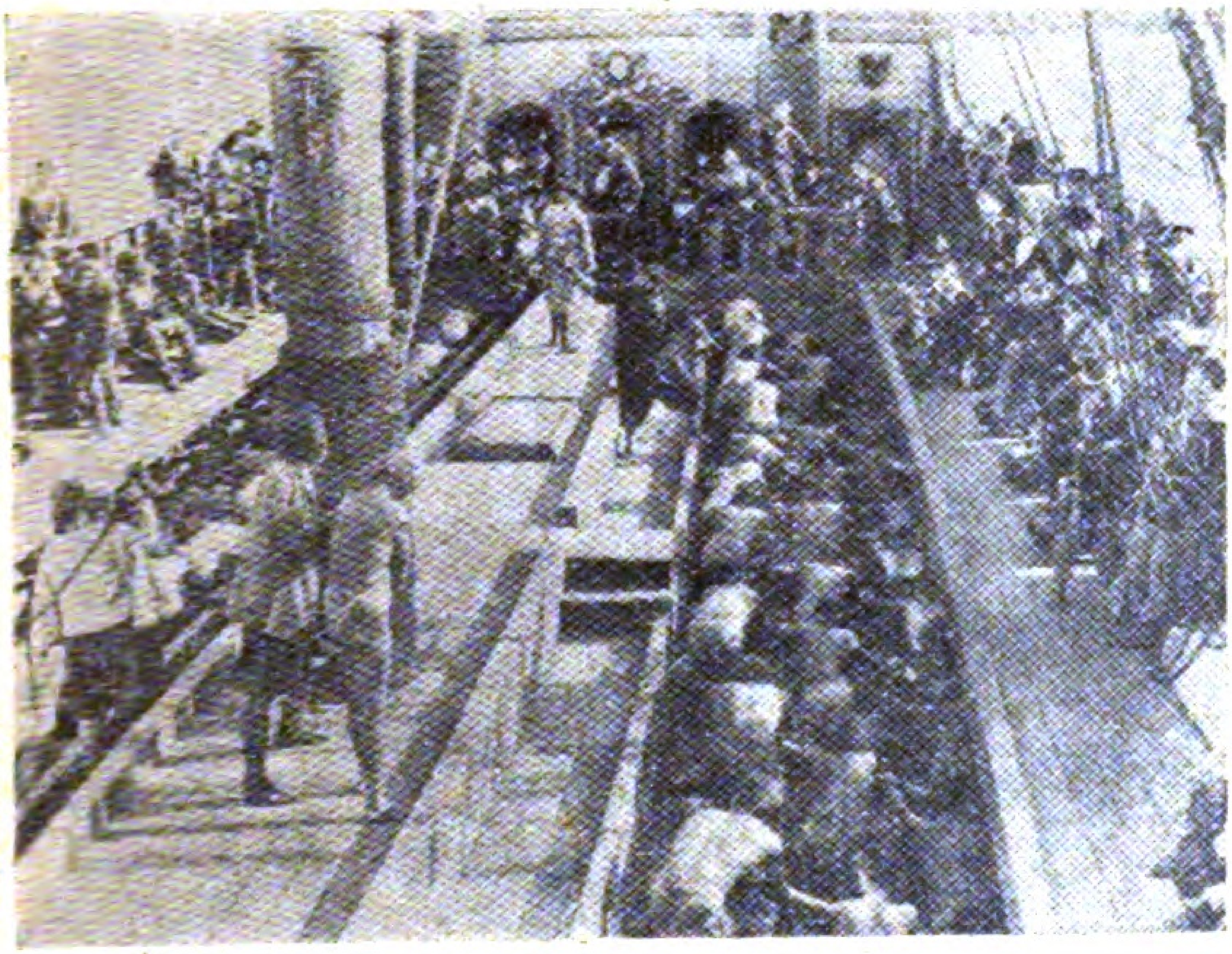
何か深い事情があるであらう、旅藝人と自稱する奇怪な囚人と變幻出沒極まりなきその一味の徒黨を向ふに廻して飜弄の限りをつくされ惡戰苦鬪する少壯氣銳の名探偵ルコックの物語、セーヌ河畔の貴族の庭園から發見された死美人に端を發する、戀と嫉妬の爭鬪事件、何れも探偵ルコックが颶風の如き活躍とともに暗澹たる人情の波瀾曲折を描いて淚を誘はうといふ、名作家ガボリオーの作品中で最も變化に富んだ二名篇。ガボリオーの作は恰も黑天鵞絨の如き手觸りがあつて、その瑰麗な魅惑は讀者の一生涯忘れる能はぬものである、譯者は吾が文壇第一のガボリオー通で多年大衆文藝飜譯界の重鎭をもつて許さるゝ田中早苗氏である。

本全集の內容は一二の例外を除きて總て新譯か改譯で未だ活字になつたことのないものばかりだ。此の點は他の全集ものとちがふ特色である。

27 スカラムッシュ シーホーク（サバティーニ）

小田律

舞臺は大革命時代のフランスであつた。淫蕩な貴族を父とし而もその父を知らぬ宿命の私生兒が革命黨に加はつて數度のロマンスと冒險を經たのち道化役者となつてジプシーの群に投じ放浪生活を續けてゐた、革命勃發の日、彼は豫て怨み重なる老貴族に出會つて決鬪を約し將に刺し殺さんとする刹那相手が實父であることを知るといふロマンチックな筋で、それに熱烈な戀も絡つた規模の宏大と構想の妙を極め古今軼文學中の雄篇が「スカラムッシュ」で、戀に破れたイギリスの一貴族が、心に復讐を誓ひ海賊王となつて地中海上を跳梁し遂に意中の貴婦人を吾がものにするといふ筋が「シーホーク」でロマンチックな冒險談、豪快極まる海洋小說で、原著者サバティーニは現代のデューマと稱せられ亞米利加文壇に覇を稱へる大家、譯者小田律氏は我が大衆譯壇の大先輩、老巧を以て鳴らした名譯者である。



シーホークの海賊船

28 ソロモン王坑山 彼女（ハガード）

平林初之輔

「ソロモン王坑山」は南部アフリカに千古の祕密となつて所在さへ不明であつたダイヤモンド坑を探險家アラン、コーターマンが謎の地圖をたよりに探つてゆくうち次から次へ驚天動地の事件が展開して讀み出したが最後終りまで卷を蔽ふことができないといふ萬人向の探偵冒險小說で、「彼女」は中部アフリカの神祕境に二千年來永遠の戀人をまつてゐる美女と自分の死期を正確に豫言して、財產と遺書を鐵箱に密封し死んでゆく青年とを織りませた、東西古今第一等のロマンチックな物語である。原著者のハガードは近代英國の生んだ最も偉大な大衆文藝作家でまた有名な冒險家で、譯者平林初之輔氏は曾つて早稻田大學の教授で社會思想家として知られてゐるが大衆文藝に趣味を持ちその方面にも聞こえた名翻譯家である。因にロマン、ローランはハガードの作品を民衆藝術の壓卷であると激賞してゐる。

29 海の義賊（ペルネード）
ロビンフード（イートマン）

高橋邦太郎

海賊シュルクーフは紀元千八百年頃西部佛蘭西のサンマローを根據にして地中海へ迄進入し盛んに活躍した實在の人物で、彼は海賊とはいへ熱情的な愛國者で義俠に富み宛で國定忠次を純粹にした樣な人物であつた爲土地の人からは神樣の樣に崇められ一昨年サンマローで彼の三百年祭が盛大に擧行された、此の一篇は佛蘭西一流の大衆作家ボルネードが彼の一代を題材にした仁俠豪快な海賊小說である「ロビンフード」はダグラスの映畫でも有名だが中世の英吉利の或貴族が十字軍遠征中、奸臣の讒言に會ひ位置も勳功も奪ひ取れ遂に山賊になつたが而し國王に對する忠誠を忘れず、彼は部下の山賊を率ゐ神出鬼沒の活動をして遂に王の側近から奸惡の徒を一掃すると云ふ男性的な雄篇である。譯者高橋邦太郎氏は新進の佛蘭西文學者で、ラマルチイヌの「青春の夢」、ヴィルドラックの「郵船テナシチテイ」等の著書あり、今は築地小劇場の事業に携はつてゐる。



ナヴアロオのスカラムツシユ

30 ポオ・ホフマンその他（ポー・ホフマン）

江戸川亂歩

ホフマンは獨逸に生れた探偵小說の元祖で、とても物凄い數篇の話を書いて居る。日本では明治三十年頃森鷗外博士が「珠を抱いて罪あり」と題しその一篇を飜譯紹介されてゐるが今日の探偵小說が科學的である反對にホフマンの作はロマンチックな筋をもつてゐて一種の物語風になつてゐるのが萬人の興味を惹く、ホフマンは音樂家としても知られてゐる。だから音樂の趣味のある人に一番面白いのはホフマンの物語である。ポーは文學を愛する人、物語の好きな人には一番よく知られた怪奇小說の大家で黃金蟲、モルグ街の殺人、赤い死の假面など有名な話は幾度も日本に紹介されてゐる。日本の探偵小說の權威である本卷の飜譯者江戸川亂歩氏は實は平井太郎と云ふ本名を持て居られるがエドガー・アラン・ポーを愛好するの餘り、エドガリランポと云ふ雅號を作つたほどで、亂歩がポーを飜譯する、と云つて文壇では大問題になつてゐる。

31 三等水兵マルチン（タフレイル）

福永恭助

北洋の大海戦、續々相摩するドレッドノートの砲塔の蔭から、三等水兵ピン公のマルチンは何を見て居たか、豪快極まる構想の中に軽いユーモアーと深い涙を盛つた長篇海戦小説、作者タッフレイル（船尾欄干）とはもとより匿名、何人であるか知れないが、英國海軍の秘事を發いた思ひ切つた描寫が戰後の歐洲に大問題を捲き起したものである。譯者は最近軍事小説を専門に大衆文壇に進出して忽ち一流の大家と仰がれるに至つた海軍少佐福永恭助氏、何にしても軍事小説にはその筋の専門家でなくては譯せない個所が多い、陸の櫻井大佐、海の福永少佐と海陸の文人相對したところにも本全集の値打がわかる。

此の全集三十六巻を通讀すれば、三百年も長命して世界中を股にかけ一番面白い話を漁つて歩くといふ奇怪な空想が實現される愉快々々

32 幻島ロマンス（ゲイル）

野口米次郎

幻島はどこにあるか、南極か北極か西か東かそれはたゞ此の物語に出て來る人々だけが知つてゐる秘密だ。ある埠頭に姿を現はした怪しの潜水艇に乘り込んだ妙齢の美人が、地圖にも幻島（實はヤタエ島といふ名があるのだが）へ出掛けるのを、待ち構へてゐた快走艇が追跡すると云へば讀者は恐らく快走艇に一人の青年が乘り組んでゐてその美少女と戀に陷るのだと思ふであらうが、正にその通り御推量の通りである、だが何故に美少女が幻島へ乘り出すのかそれは想像がつかないであらう。つまり其處が此の小説の大切な關鍵である、ヤタエ島では我々の世界で不思議だと云はれてゐることが尋常で、夢が現實だ、さう云ふと架空的な探偵譚か夢物語のやうに思はれるが實は極めて實際的であるところに此の作の面白味がある。おまけに快走艇で追跡してゆくのは少女が船出の當日、不思議な犯人に狙撃せられたのを知つたある大新聞の社會部の青年記者で、今や戀と職務の兩道かけて大活躍をしようと云ふのだから此の不思議な物語に更に探偵的變化を加味し、殊に見る愉快な物語としてゐる。原著者のゾナ・ゲールは譯者野口米次郎氏とは三十年來の親友で、現代米國の女流作家中の第一人者である。因みに本篇は譯者の工夫で舞臺を日本にとることになつてゐる。詩人野口氏の怪奇な想像力も働いて一層愉快な物語となることであらう。

33 ロモラ（エリオット）

賀川豊彦

藝術と宗教と眩華錯綜せるルネッサンスを背景に伊太利の古都フローレンスに起つた戀と陰謀と信仰の物語である。深窓に育つた貴族の娘ロモラを愛人の手から奪ひ取つた野心家のテイトは背德の限りを盡した末遂にフローレンスの支配權を握り民衆に厚き聖僧サボナロラに死刑を宣告した。ロモラは夫の惡業に居たたまらず家を捨てて巡禮の旅にのぼるまでを前半とし、テイトの最後、ロモラの幸福な後半生それに絡る花賣娘の哀れな一生を描き出した熱情的な雄篇で「僕はロモラをやらう、身も心も打ち込んでロモラを譯さう」と情熱兒賀川豊彦氏が卓を叩いで叫んだ程の名篇だ。譯者賀川氏が此の宗教的戀愛小說の擔當者として如何に適任であるかは云ふまでもあるまい。一九二五年メトロゴールドウイン社はギッシュ姉妹を主役として本篇を映畫化し日本では一流館の特別映畫として大喝采を博したものだ。



リリアンギッシュのロモラ

34 世界滑稽名作集

東健而

笑のない世界は墓場だ、高尙な笑ひの文學は良き夫を作り、良き妻を作り、よき子を作る。笑ひは家庭を春の如くに幸福にし、健全な朗らかな國民を作る。「笑ふ門には福來る」と云ひながら眞に笑ふことを知らぬは日本の國民だ。本卷は高尙な健全なる笑ひの文學のみ十數篇を蒐めたもので、何れもジャズとチャールストンの現代に傑出した歐米の大家の代表作のみである。譯者は「蚊とんぼスミス」の名譯者とし、森田みね子のペンネイムで知られたるユーモア文學の權威、東健而氏。

泣いて笑つて恐れて歡んで、そして心の糧となる、これが此の全集の效能だ。

35
世界怪談集

岡本綺堂

デ・フォーの「ヴキール夫人の亡靈」コムパートの「語らぬ女」ベンソンの「旅に出た男」キプリングの「幻の人力車」芥川龍之介が愛讀し、作品に著しくその影響を受けたアンゾローズビアースなどの最近作家に到るまで、最も傑れた藝術家の代表作中から鬼氣眞に迫る物凄い物語ばかりを撰んで綺堂先生が邦譯されるのが此の一卷である。劇壇の耆宿岡本綺堂先生はまた讀物作家としては捕物と怪談の大家である。殊に先生は青年時代英國人についてみつしり英文學を研究しその後歐洲を漫遊して本場で大陸文學を研究された、その外國文學の素養と先生の眞に迫る文章は兩々相俟つて此の一卷が世界に誇るべき怪談集となつたのである。

36
世界怪奇探偵事實物語

歐米諸大家

事實は小說よりも奇なりと云ふ言葉がある。此の島國の日本でさへも、時々とてつもなく面白い事件が起つて、新聞の三面を幾日も賑はすことがある。いはんや世界的の大事件例へばロシアの「ラスプチーン陰謀事件」「佛蘭西の殺人鬼青髯事件」を世界的な文學者が記述して居るのだから、面白くない筈はないのである。斯うした大事件は日を經るまゝに忘れられ、誤られ、歷史に殘るときにはほんの筋書になつてしまふ。外國では斯うい記錄を數卷に纏めた叢書があつて、此の一卷はその中から知名な事件のみを擇んで各々專門家に飜譯して貰ふのである。

本全集四十餘篇の分類

傳奇小說
鐵假面
三銃士
巴里の秘密
ゼンダ城の虜
不妖傳
スカラムッシュ
海の蔭獸

探偵小說
アルセーヌ・ルパン
月長石
カートライト事件
黑星
毒女
スペードのキング
コブラの秘密
クラブの四
シャロックホームズ
紅蜘蛛
ルコフタ探偵
再開の秘密

冒險小說
ソロモン王の坑山
寶島
シー・ホーク
ロビン・フード

怪奇小說
チエキールとヘイド
ポオ ホフマンその他
幻島ロマンス
[illegible]

科學小說
トンネル
空中戰爭
海底旅行

戀愛小說
椿姬
マノン・レスコオ
カチューシャ
ラ・ボエーム

家庭小說
家なき兒
放蕩息子
オリヴア・ツウイスト
[illegible]
アンクル・トムス・ケビン
ステラ・マリス

宗教小說
ロモラ

滑稽小說
トウエーン名作集
世界滑稽名作集

軍事小說
前線十萬
三等水兵マルチン

都合により內容編纂者を一二變更することがあるかもしれません、

文字の大公園

佐藤春夫

藝術の世界は廣い。文字の中にもいろ〳〵の文學があり得る。譬へば或ひは學校のやうな、或ひは教會堂のやうな、或ひは裁判所のやうな、或は田甫道のやうな、或ひは宮殿のやうな、或ひは深山幽谷のやうな文學もそれ〴〵にあり得る。それらの悉くを綜合して一つにした世界そのもの丶やうな文學は有り得ないかも知れないがそれらのいくつかを兼ね具へた文學はあり得る。改造社が「世界大衆文學全集」と呼ぶところの文學叢書は、謂はゞ公園のやうな文學的著作の集粹であるらしい。何人も容易にその中に入ることが出來て、その中で神身の健康を樂しみ、次の時日のために休息し、しばし塵勞を忘れしめようといふのが、この叢書の目的であるらしい。即ち文學を以て一大公園を築かうといふのにあるらしい。僕が贊成する所以である。

戰爭文學も入つた

櫻井忠溫

改造社が「現代文學全集」によつて日本文學を大衆に開放したが、未だ廣く世界文學を紹介するに至らなかつた。

併し今回「世界大衆文學全集」を刊行するに至つたので、始めて同社の全集物發行の意義が、立派に完成されたのである。「現代日本文學全集」あつて「世界大衆文學全集」なきは、畢竟片輪者である。この點に於て、同社が一途に文化の前衞を以て任じ、營利を外にして前進せんとする勇氣と誠意に對し景仰の念を禁じ得ない。殊にその內容を一瞥して、頗る新味のある計畫だと敬服した。例へば「現代日本文學全集」に戰記物を取り入れたやうに「世界大衆文學全集」にも歐洲大戰が生んだ新しい戰記小說に――夢のやうなある一部の戰爭物とは違つて、事實若くはそれに近い戰記物を組み入れたことは、古い殼を脫いだ現代戰術の戰記物が始めて、日本に紹介されるわけで、同社の事業に頗る新味があることを證據立てゝゐる。

私は「世界大衆文學全集」の完成を以て、文壇を國際的に大衆の前に擴張するものと信じ、その成功を祈つて止まぬものである。

特に探偵物に就て

森下雨村

この全集に選ばれた四十篇に近い作品は、その孰れをみても一粒選りの世界的名作であることに異存はない。而もその內容が、俗に墮せず高級に失せず、徹底興味中心の名篇揃ひであることは、題目を一瞥しただけでもわかる。甚だ大膽な申分ながら、單にこれだけ

の理由からしても、この全集出でて日本の讀書界は、世界的大衆讀物の如何なるものであるかを知り得ると斷言して憚らない。實にかく言ふ私自身が、その喜びを滿喫し得る一人である。といふのは、原本の得難きため、或は語學の足らぬため、その名を聞いて未だ讀むことの出來なかつた名篇大作が、いくらも含まれてゐるからである。この意味に於て、私は非常なる喜悦と、十分な感謝と讚辭を本全集に呈する次第である。次に、この全集に含まるる探偵小説について、推薦者として一言して置きたい。近代人特有の獵奇趣味から生れ出た探偵小説は、ボオの怪奇小説からガボリオの純探偵小説に一轉し、更に幾多の分野に開展した。私はこの特異な近代的大衆文學の發達の跡を辿り得ると同時に、現在の探偵小説が取りつつある傾向を知り得るやうに心掛けて、數十百の作家中から最も代表的なものを嚴選したのである。ボオとガボリオを前期とすれば、ドイル、ルブラン、オルチイ夫人は中期、爾餘は現代の花形作家である。その作品は皆各作家の出世作として知られ、本國に於て數十版乃至數百版を重ね、世界の大衆文學史上に遺るべき名著である。十二分の自信を以て推薦する所以である。

流行作品

菊池寛

日本に於て最もよく讀まれたるものは、「不如歸」であり、「死線を越えて」であるごとく、西洋において萬人に讀まれたるものは、「ゼンダ城の虜」であり、「椿姫」であり、「放蕩息子」である。これらの作品は、その時代に於て、それぐ一大流行（boom）を作つて、五十萬百萬を賣つた作品である。文藝の大衆化が叫ばれる現代に於て、これらの民衆的傑作が、最も大規模に譯移植せらるゝことは、欣はしきことでなければならない。

西洋文學の魅惑

岡倉由三郎

一圓本の跳梁以來、「世界文學全集」とか「世界戯曲全集」とか、世界を一纏めにした文學の集册が續々我國に紹介しかけられて來たために、我々日本人も、西洋人が如何に生活し、如何に苦惱し、又如何に歎喜するか……略判りかけて來だと見てよい。然し今日までのものは譯文が難解であつたり、原作に所謂面白味が乏しかつたりして、完全に日本人のものとなつてゐない憾きがある。改造社の今度の企てに依れば、泰西無數の名作の中より、日本人に最もファミリアな、而も面白い筋、奇抜な變化に富む物語りのみを集めて、而もあり[illegible]錢で之を賣らうといふのだから、一寸びつくりせざるを得ない。これを[illegible]

なもので、その價は無限と云つてもいゝから、空氣や日光のやうに無料……に近い廉價で提供される事に國民全體の喜びでなければならぬ。日本の文壇の話などでは、よく行きつまつてゐるといふ噂さを聞くが、よし行きつまりは洋の東西を問はず同樣であつても、日本のものから西洋のものに眼を轉ずる時、……美術館などで日本畫ばかり見馴れて來た眼に、一度西洋畫が映ると、初めて視野が開けて生きかへつたやうな心持になるのと同樣に、我々の心が何かしら新しい希望と興奮とを感ずると思ふ。

世界の心を知る

賀川豐彦

大衆の思ふところは、小數の病理學者や心理學者の數へるところとは自ら違つてゐる。高級な文學者の文學は、云はゞ病理學者の病理學であり、心理學者の心理學である。大衆の考へるところは、そんな專門的なものでない。然し、そこに、血あり、火あり、煙がある。そこに生命がある。人情がある。義理がある。いや、そこに人間がある。それはあらゆる環境に揉まれ踏み躙られつつも猶根強く延びて行く大衆の意氣を最も痛快に描いて呉れる。今度改造社で選ばれた世界大衆文學は、最も有名なものばかりで、たゞに我等の魂を高く引き上げるのみならず、各國の國民性を知るにこれほど善き教科書はない。ヂッケンスの作物は、それによつて、英國の國民性を作り上げたとまで言はれてゐる。その他皆一度は讀まなくてはならぬものばかりである。私はこんな種類のものがこんな形で、こんなに安く手に入れられるとは思はなかつた。うれしいことだ。

大衆文學の道德

野上彌生子

古來から多くの人々に悦んで讀まれた作物は多くの心を引きつける一般的興味、即ち筋の面白さとか、冒險とか、諧謔とか、諷とか、戀とかの外に、或る健全なモテルに支配されてゐるのが常である。正義と美が認識され、惡と醜が滅びる、これである。このことは、洋の東西を問はず、すべての通俗的讀みものから、我々の認識に至るまで共通の最も大事な魅力であると共に、特に古今のすぐれた古典並びに各時代の名作雄篇と稱せられるものの基調を形成するものも、このヒューマニズムに外ならない。(中略)大衆文藝と云ふ文字が、現代の日本に於てなされてゐるやうな不幸な解釋から救ひ出し、本來の正しい意義に基き、うんと立派な、氣持のよい讀みものを供給されんことを希望する。またさうすることは依つて、我が讀書界に瀰漫してゐる俗惡醜陋な趣味を一掃し、よき好尚と選擇の下に讀む傾向を誘導することは、出版者の愉快な使命であらう。

肺結核、胃腸病の劃時代的新藥

「パンゲスチン」に就いて

肺病は早く手當をすれば必ず癒る。いや、第二期第三期に進んだ者でも決して絶望するには及びません。容易く之を撃退して、旺盛なる社會生活を營む工夫が肝要であります。

肺病の療法には、第一に自然療法があります。次ぎに藥物療法、之には未だ確然たる効果をもつたものが見當りません。最後に榮養療法があります。充分に榮養を攝り、うまく食ひ、體力を盛にして病氣に打ち勝つこと、これが肺病根治の關鍵です。

「パンゲスチン」は、實に此の目的に合致し、劃時代的新藥として、斯界に燦然として輝いてゐます。人體に最高榮養價値を有する蛋白質消化劑として完全無缺なる「パパイシン」を主劑とし、之に脂肪澱粉等を消化する藥物、現在の醫學上治肺の最良特効藥たる數種の藥物を配合し、學理と實驗とを綜合した理想的のものであります。

主劑「パパイシン」は、熱帶の珍果「パパイヤ」の未熟果實の乳汁より採取した消化酵素で、絶大なる蛋白消化力を有し、牛肉の如き三十分にして形を止めざるまでに消化し終るのであります。之を主劑とせる「パンゲスチン」の消化力大なることは申すまでもありません。

[illegible]「パンゲスチン」には一[illegible]ものであ、更に結核、肋膜炎、腹膜炎等の消耗性發熱に因する消化不良、特に神經性消化不良、貧血、腸胃加答兒、乳兒消化不良等に用ひて卓効があります。大阪醫科大學教授長崎博士及岡川博士は主劑「パパイシン」の効驗の正確迅速なるを推奨せられ、其他の諸大家も、實驗に、臨床に試驗の結果、顯著なる効驗を證明推奨されました。其の他、本藥を使用してその効驗に驚嘆され、謝狀を賜はつた方が無數であります。安心して各位にお勸め致す次第であります。

定價　壹ケ月分　拾貳圓也
　　　半ケ月分　七圓也

製藥所　マニラ　パパイン、デベロップメントコンパニー

輸入調製元　東京　パパイシン社

一手販賣元　東京市芝區愛宕下町　改造社

振替東京八四二